水沫集目次

(意)　從原作之意譯者
(句)　從原作之意義及字句譯者
(韻)　從原作之意義及韻法譯者
(調)　從原作之意義字句及平仄韻法譯者

水沫集

鷗外漁史著

うたかたの記

上

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バワリヤの像は、先王ルウドヰヒ第一世が此凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウドヰヒ町を左に折れたる處に、トリエント産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバワリヤの首府に名高き見ものなる美術學校なり。校長ピロツチイが名は、をちこちに鳴りひゞきて、獨逸の國々はいふもさらなり、新希臘、伊太利、璉馬などよりも、こゝに來りつどへる彫工、畫工數を知らず。日課を畢へて後は、學校の向ひなる、「カッフエエ、ミネルワ」といふ店に入りて、咖啡のみ、酒くみかはしなどして、おもひ〱の戯す。こよひも瓦斯燈の光、半ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさゞめく聲聞ゆるをり、かどにきかゝりたる二人あり。先に立ちたるは、かち色の髮のそゝけたるを厭はず、幅廣き襟飾斜に結びたるさま、誰が目にも、ところの美術諸生と見ゆるなるべし。立ち住りて、後なる色黒き小男に向ひ、「こゝなり」といひて、戸口を入りぬ。

先づ二人が面を撲つはたばこの烟にて、遽に入りたる目には、中なる人をも見わきがたし。日は暮れたれど暑き頃なるに、窓悉くあけ放ちはせで、かゝる烟の中に居るも、習となりたるなるべし。

「エキステルならずや、いつの間にか歸りし。」「なほ死なでありつるよ。」など口々に呼ぶを聞けば、彼諸生はこの群にて、馴染あるものならむ。その間、あたりある客は珍らしげに、後につきて來れる男を見つめたり。見つめらるゝ人は、座客のなめなるを厭ひてか、暫し眉根に皺寄せたりしが、とばかり思ひかへししにや、僅に笑を帶びて、一座を見度しぬ。

この人は今着きし滊車にて、ドレスデンより來にければ、茶店のさまの、かしとこゝと殊なるに目を注ぎぬ。大理石の圓卓幾つかあるに、白布掛けたるは、夕餉畢りたる迹をまだかたづけざるならむ。裸なる卓に倚れる客の前に据ゑたる土やきの盃あり。盃は圓筒形にて、燗德利四つ五つも併せたる大きさなるに、弓なりのとつ手つけて、金蓋を蝶番に作りて覆ひたり。客なき卓に珈琲碗置いたるを見れば、みな倒に伏せて、絲敷の上に砂糖、幾塊か盛れる小皿載せたるもをかし。

客はみなりも言葉もさま〴〵なれど、髮もけづらず、服も整へぬは一樣なり。されどあながち卑しくも見えぬは、流石理想世界に遊ぶやからなればならむ。中にも際立ちて賑しきは中央なる大卓を占めたる一群なり。余所には男客のみなるに、獨こゝには少女あり。今エキステルに伴はれて來し人と目を合はせて、互に驚きたる如し。

來し人はこの群に珍らしき客なればにや。また少女の姿は、初めて逢ひし人を動かすに餘あらむ。その前庇廣く飾なき帽を被ふりて、年は十七八ばかりと見ゆる顔ばせ、エヌスの古彫像を欺けり。そのふるまひには自ら氣高き處ありて、かいなでの人と覺えず。エキステルが隣の卓なる一人の肩を拍ちて、何事をか語居たるを呼びて。「こなたには面白き話一つする人なし。此樣子にては骨牌に遁れ球突に走るなど、忌はしき事を見むも知られず。おん連れの方と共に、こなたへ來たまはずや。」

と笑みつゝ勸むる、その聲の滑きに、いま來し客は耳傾けつ。

「マリイの君の居玉ふ處へ、誰か行かざらむ。人々も聞け、けふ此『ミネルワ』の仲間に入れむとて伴ひたるは、巨勢君とて、遠きやまとの畫工なり。」とエキステルに紹介せられて、隨來ぬる男の近寄りて會釋するに、起ちて名乘りなどするは、外國人のみ。さらぬは坐したる儘にて答ふれど、侮りたるにもあらず、此仲間の癖なるべし。

エキステル、「わがドレスデンなる親族訪ねにゆきしは人々も知りたり。巨勢君にはかしこなる畫堂にて逢ひ、それより交を結びて、こたび巨勢君、こゝなる美術學校に、しばし足を駐めむとて、旅立ち玉ふをり、われも倶にかへり路に上りぬ。」人々は巨勢に向ひて、はる〴〵來ぬる人と相識れるよろこびを陳べ、さて、「大學にはおん國人も、をり〳〵見ゆれど、美術學校に來たまふは、君がはじめなり。けふ着きたまひしとなれば、『ピナコテエク』、また美術會の畫堂なども、まだ見玉はじ。されど余所にて見たまひし處にて、南獨逸の畫を何とか見たまふ。こたび來たまひし君が目的は奈何。」など口々に問ふ。マリイはおしとゞめて、「しばし〳〵。かく口を揃へて問はるゝ、巨勢君とやらむの迷惑、人々おもはずや。聞かむとならば、靜まりてこそ。」といふを、「さても女主人の嚴しさよ、」と人々笑ふ。巨勢は調子こそ異様なれ、拙からぬ獨逸語にて語りいでぬ。

「わがミュンヘンに來しは、このたびを始とせず。六年前にこゝを過ぎて、索遜にゆきぬ。そのをりは「ピナコテエク」に懸けたる畫を見しのみにて、學校の人々などに、交を結ぶことを得ざりき。そは故郷を出でし時よりの目あてなるドレスデンの畫堂へ往かむと、心のみ急がれしゆゑなり。されど再びこゝに來て、君等がまとゐに入ることとなりし、その因緣をは、早く當時に結びぬ。」

「大人氣なしといひけたで聞き玉へ。謝肉の祭、[illegible]は、雪いま晴れて、街の中道なる並木の枝は、一[illegible]に映じたり。いろ〳〵の風したる衣を着て、白くまた黒き[illegible]ゝかしこなる窓には毛氈垂れて、物見としたり。カル、の辻なる『カッフェ、オリャン』に入りて見れば、おもひ〳〵の假裝色を爭ひ、中に雜りし常の衣もはえある心地す。みなこれ『コロッセウム』、『井クトリヤ』などいふ舞踏場のあくを待ちたるなるべし。」

かく語る處へ、胸あてにつけたる白前垂掛けし下女、麥酒の泡だてるを、ゆり越すばかり盛りたる例の大杯を、四つ五つづゝ、とつ手を寄せてもろ手に握りもち、「新しき樽よりとおもひて、遲うなりぬ。許したまへ」とことわりて、前なる杯飲みほしたりし人々にわたすを、少女「こゝへ、こゝへ」と呼びちかづけて、まだ杯持たぬ巨勢が前にも置かす。巨勢は一口飲みて語りつぎぬ。

「われも片隅なる一榻に腰掛けて、賑はしきさま打見るほどに、門の戸あけて入りしは、きたなげなる十五ばかりの伊太利栗うりにて、燒栗盛りたる紙筒を、堆く積みし箱かいこみ、『マロオニイ、セニョレ。』(栗めせ、君)と呼ぶ聲も勇ましき。後につきて入りしは、十二三と見ゆる女の子なりき。舊びたる鷹匠頭巾、ふか〴〵と被り、凍えて赤うなりし兩手さしのべて、淺き目籠の縁を持ちたり。目籠には、常盤木の葉、敷きかさねて、その上に時ならぬ菫花の束を、愛らしく結びたるを載せたり。『ファイルヘン、ゲフエルリヒ』(すみれめせ)と、うなだれたる首を擡げもあへでいひし聲の清さ、今に忘れず。この童と女の子と、道連れとは見えねば、童の入るを待ちて、これをしほに、女の子は來しならむとおもはれぬ。」

「この二人のさまの殊なるは、早くわが目を射き。人を人ともおもはぬ、殆憎げなる栗うり、やさしくいとほしげなるすみれうり、いづれも群居る人の間を分けて、座敷の眞中、帳場の前あたりまで來し頃、そこに休み居たる大學々生らしき男の連れたる、英吉利種の大狗、いまゝで腹這ひて居たりしが、身を起して、脊をくばめ、四足を伸ばし、栗箱に鼻さし入れつ。それと見て、童の拂ひのけむとするに、驚きたる狗、あとに跟きて來し女の子に突當れば、『あなや、』とおびえて、手に持ちし目籠とり落したり。莖に錫紙卷きたる、美しきすみれの花束、きら／＼と光りて、よもに散りぼふを、好き物得つと彼狗、踏みにじりては、啣へて引きちぎりなどす。ゆかは煖爐の温まりにて解けたる、靴の雪にぬれたれば、あたりの人々、かれ笑ひ、これ罵るひまに、落花狼藉、などりなく泥土に委ねたり。栗うりの童は、逸足出して逃去り、學生らしき男は、欠しあがら狗を叱し、女の子は呆れて打守りたり。この菫花うりの忍びて泣かぬは、うきになれて涙の泉涸れたりしか、さらずは驚き惑ひて、一日の生計、これがために止まむとまでは想到らざりしか。しばしありて、女の子は碎けのこりたる花束二つ三つ、力なげに拾はむとするとき、帳場の女の知らせに、こゝの主人出でぬ。赤がほにて、腹突きいだしたる男の、白き前垂したるなり。太き拳を腰にあてゝ、花賣りの子を暫し睨み。『わが店にては、嘍囉師めいたるあきなひ、せさせぬが定なり。疾くゆきね』とわめきぬ。女の子は唯言葉なく出てゆくを、滿堂の百眼、一點の涙なく見送りぬ」。

「われは咖啡代の白銅貨を、帳場の石板の上に擲げ、外套取つて馳出て見しに、花賣の子は、ひとりしく／＼と泣きてゆくを、呼べども顧みず。追付きて、『いかに、善き子、菫花のしろ取らせむ、』といふを聞きて、始めて仰見つ。そのおもての美しさ、濃き藍いろの目には、そこひ知らぬ憂あり

て、一たび顧みるときは人の腸を斷たむとす。嚢中の『マルク』七つ八つありしを、から籠の木の葉の上に置きて與へ、驚きて何ともいはぬひまに、立去りしが、その面、その目、いつまでも目に付きて消えず。『ドレスデン』にゆきて、畫堂の額うつすべき許を得て、エヌス、レダ、マドンナ、ヘレナ、いづれの圖に向ひても、不思議や、すみれ賣のかほばせ霧の如く、われと畫額との間に立ちて碍礙をなしつ。かくては所詮、我業の進まむと覺束なしと、旅店の二階に籠りて、長椅子の覆革に穴あけむとせし頃もありしが、一朝大勇猛心を猫ひおこして、わがあらむ限の力をこめて、此花賣の娘の姿を無窮に傳へむとおもひたちぬ。さりけれどわが見し花うりの目、春潮を眺むる喜の色あるにあらず、暮雲を送る夢見心あるにあらず、伊太利古跡の間に立たせて、あたりに一群の白鳩飛ばせむと、ふさはしからず。我空想はかの少女をラインの岸の巖根に居らせて、手に一張の琴を把らせ、嗚咽の聲を出させむとおもひ定めにき。下なる流にはわれ一葉の舟を泛べて、かなたへむきてもろ手高く擧け、面にかぎりなき愛を見せたり。舟のめぐりには數知られぬ、『ニックセン』、『ニュムフェン』などの形波間より出でゝ揶揄す。けふ此ミュンヘンの府に來て、しばし美術學校の『アテリエ』借らむとするも、行李の中、唯此一畵藁、これをおん身等師友の間に議りて、成しはてむと願ふのみ。」

巨勢はわれ知らず話しいりて、かくいひ畢りし時は、モンゴリヤ形の狹き目も光るばかりなりき。「いしくも語りけるかな」と呼ぶもの二八三人。エキステルは冷淡に笑ひて聞居たりしが、「汝たちもその圖見にゆけ、一週が程には巨勢君の『アテリエ』とゝのふべきに」といひき。マリイは物語の半より色をたがへて、目は巨勢が唇にのみ注ぎたりしが、手に持ちし杯さへ一たびは覆ひたるやうなり

き。巨勢は初此まとゐに入りし時、已に少女の我すみれうりに似たるに驚きしが、話に聞きほれて、こなたを見つめたるまなざし、あやまたず是れなりと思はれぬ。こも例の空想のしわざなりや否や。物語畢りしとき、少女は暫し巨勢を見やりて、「君はその後、再び花うりを見たまはざりしか、」と問ひぬ。巨勢は直ちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが。「否。花賣を見し其夕の滊車にてドレスデンに立ちぬ。されどなめなる言葉を咎め玉はずばきこえ侍らむ。我すみれうりの子にもわが『ロオレライ』の畫にも、をり〳〵たがはず見えたまふはおん身なり。」

この群は聲高く笑ひぬ。少女、「さては畫額ならぬ我姿と、君との間にも、その花うりの子立てりと覺えたり。我を誰とかおもひ玉ふ。」起ちあがりて、眞面目なりとも戯なりとも、知られぬ樣なる聲にて。「われはその菫花うりなり。君が情の報はかくこそ。」少女は卓越しに伸びあがりて、俯きゐたる巨勢が頭を、ひら手にて抑へ、その額に接吻しつ。

この騒ぎに少女が前なりし酒は覆へりて、裳にかゝり、卓の上にこぼれたるは、蛇の如く這ひて、人々の前へ流れよらむとす。巨勢は熱き手掌を、兩耳の上におぼえ、驚く間もなく、またこれより熱き唇、額に觸れたり。「我友に目を廻させたまふな。」とエキステル呼びぬ。人々は半ば椅子より立ちて「いみじき戯かな、」と一人がいへば、「われらは继子なるぞくやしき、」と外の一人いひて笑ふを、余所なる卓よりも、皆興ありげにうち守りぬ。

少女が側に坐したりし一人は、「われをもすさめ玉はむや、」といひて、右手さしのべて少女が腰をかき抱きつ。少女は「さても禮儀知らずの继子どもかな、汝等にふさはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稻妻出づと思ふばかり、しばし一座を睨みつ。巨勢は

唯呆れに呆れて見居たりしが、この時の少女が姿は、すみれうりにも似ず、「ロオレライ」にも似ず、さながら凱旋門上のバワリヤなりと思はれぬ。

少女は誰が飲みほしけむ珈琲碗に添へたりし「コップ」を取りて、中なる水を口に銜むと見えしが、唯一噀。「獼子よ、獼子よ、汝等誰か美術のまゝ子ならざる。フロレンス派學ぶはミケランジエロ、ドルシイが幽靈、和蘭派學ぶはリユウベンス、フアン、ヂイクが幽靈、我國のアルブレヒト、ドユウレル學びたりとも、アルブレヒト、ドユウレルが幽靈ならぬは稀ならむ。會堂に掛けし『スッチイ』二つ三つ、直段好く賣れたる曉には、われらは七星われらは十傑、われらは十二『アポステル』と擅に見たてしてのわればめ。かゝるえり屑にミネルワの唇いかで觸れむや。わが冷たき接吻にて、滿足せよ。」とぞ叫びける。

噴きかけし霧の下なる此演説、巨勢は何事とも辨へねど、時の繪畫をいやしめたる、諷刺ならむとのみは推測りて、その面を打仰ぐに、女神バワリヤに似たりとおもひし威嚴少しもくづれず、言畢りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れしを取りて、大股におゆみて出でゆかむとす。

皆すさまじげなる氣色して、「狂人」と一人いへば、「近きに報せでは止まじ」と外の一人いふを、戸口にて振りかへりて。「遺恨に思ふべき事かは、月影にすかして見よ、額に血の迹はとゞめじ。吹きかけしは水なれば。」

中

あやしき少女の去りてより、程なく人々あらけぬ。歸り路にエキステルに問へば、「美術學校にて雛形となる少女の一人にて、『フロイライン』ハンスルといふものなり。見たまひし如く奇怪なる振舞す

るゆゑ、狂女なりともいひ、また外の雛形娘とちがひて、人に肌見せねば、片輪ならむといふもあり。その履歴知るものなけれど、敎ありて氣象よの常ならず、汚れたる行なければ、美術諸生の仲間には、喜びて友とするもの多し。善き雛形なるとは見たまふ如し。」と答へぬ。巨勢、「我畫かくにもえうあるべきものなり。『アテリエ』とゝのはむ日には、來よと傳へたまへ。」エキステル、「心得たり。されど十三の花賣娘にはあらず、裸體の研究、危しとはおもはずや。」巨勢、「裸體の雛形せぬ人と君もいひしが。」エキステル「現にいはれたり。されど男と接吻したるも、けふ始めて見き。」エキステルがこの言葉に、巨勢は赤うなりしが、街燈暗き「シルレル、モヌメント」のあたりなりしかば、友は見ざりけり。巨勢が「ホテル」の前にて、二人は袂を分ちぬ。

一週ほど後の事なりき、エキステルが周旋にて、美術學校の「アテリエ」一間を巨勢に借されぬ。南に廊下ありて、北面の壁は硝子の大窓に半を占められ、隣の間とのへだてには唯帆木綿の幌あるのみ。頃はみな月半ばなれば、旅立ちし諸生多く、隣に人もあらず、業妨ぐべき憂なきを喜びぬ。巨勢は畫額の架の前に立ちて、今入りし少女に「ロオレライ」の畫を指さししめして、「君に聞かれしはこれなり。面白げに笑ひたまふときは、似たりとも思はねど、をり〳〵君がおも影の、この姿と見まがふばかりなるときあり。殊にたがはぬは目なり。」

少女は高く笑ひて。「物忘したまふな。おん身が『ロオレライ』の本の雛形、すみれ賣の子は我なりとは、先の夜も告げしものを。」かくいひしが俄に色を正して。「おん身は我を信じたまはず、げにそれも無理ならず。世の人は皆我を狂女なりといへば、さおもひたまふならむ。」この聲戲とは聞えず。巨勢は半信半疑したりしが、忍びかねて少女にいふ、「餘りに久しくさいなめ玉ふな。今も我が額に

燃ゆるは君が眉なり。はかなき戯とおもへば、ゑひて忘れむとせしこと、幾度か知らねど、迷は遂に晴れず。あはれ君がまことの身の上、苦しからずは聞かせ玉へ。」

窻の下なる小机に、いま行李より出したる舊き繪入新聞、遣ひさしたる油ゑの具の錫筒、粗末なる烟管にまだ卷烟草の端の殘れるなど載せたるその片端に、巨勢はつら杖つきたり。少女は前なる籐の椅子に腰かけて、語りいでぬ。

「まづ何事よりか申さむ。此學校にて雛形の鑑札受くるときも、ハンスルといふ名にて通したれど、そは我眞の名にあらず。父はスタインバハとて、今の國王に愛でられて、ひと時榮えし畫工なりき。わが十二の時、王宮の冬園に夜會ありて、二親みな招かれぬ。宴闌なる頃、國王見えざりければ、人々驚きて、移植ゑし熱帶艸木いやが上に茂れる、硝子屋根の下、そこかこゝかと搜しもとめつ。園の片隅にはタンダルヂニスが刻める、ファウストと少女との名高き石像あり。わが父のそのあたりに來し時、胸割くるばかりの聲して、『助けて、〱』と叫ぶものあり。聲をしるべに、黄金の穹窿おほひたる、『キオスク』(四阿屋)の戸口に立寄れば、周りに植ゑし棕櫚の葉に、瓦斯燈の光支へられたるが、濃き五色にて畫きし、窻硝子を洩れてさしこみ、薄暗くあやしげなる影をなしたる裡に、一人の女の逃げむとすまふを、ひかへたるは王なり。その女のおもて見し時の、父が心はいかなりけむ。かれは我母なりき。父はあまりの事に、しばしたゆたひしが、『許したまへ、陛下』と叫びて、王を推倒しつ。そのひまに母は走りのきしが、不意を打たれて倒れし王は、起き上りて父に組付きぬ。肥えふとりて多力なる國王に、父はいかでか敵し得べき、組敷かれて、側ありし如露にてしたゝか打たれぬ。この事知りて諫めし、内閣の秘書官チイグレルは、ノイシユワンスタインな

る塔に押籠めらるべき筈なりしが、救ふ人ありて助かりにき。われは其夜家にありて、二親の歸るを待ちしに、下女來て父母歸り玉ひぬといふ。喜びて出迎ふれば、父は舁かれて歸り、母は我を抱きて泣きぬ。」

少女は暫らく默しつ。けさより曇りたる空は、雨になりて、をり〳〵窓を打つ雫、はら〳〵と音す。

巨勢いふ。「王の狂人となりて、スタルンベルヒの湖に近き、ベルヒといふ城に遷され玉ひしとは、きのふ新聞にて讀みしが、さては其頃よりかゝる事ありしか。」

少女は語を繼ぎて。「王の繁華の地を嫌ひて、田舎にのみ住み、晝寐ねて夜起きたまふは、久しき程の事なり。獨逸、佛蘭西の戰ありし時、加特力派の國會に打勝ちて、普魯西方につきし、王が中年のいさをは、次第に暴政の噂に掩はれて、公けにこそ言ふものなけれ、陸軍大臣メルリンゲル、大藏大臣リイデルなど、故なくして死罪に行はれむとしたるを、其筋にて秘めたるは、誰知らぬものなし。王の晝寐し玉ふときは、近衆みな郤けられしが、囈語にマリイといふと、あまたゝびいひたまふを聞きしもありといふ。我母の名もマリイといひき。望なき戀は、王の病を長ぜしにあらずや。母はかほばせ我に似たる處ありて、その美しさは宮の內にて類なかりきと聞きつ。」

「父は間もなく病みて死にき。交廣く、もの惜みせず、世事には極めて疎かりければ、家に遺財つゆばかりもなし。それよりダハハウエル街の北のはてに、裏屋の二階明きたりしを、借りて住みしが、そこに遷りてより、母も病みぬ。かゝる時にうつろふものは、人の心の花なり。數知らぬ苦しき事は、わが穉き心に、早く世の人を憎ましめき。明る年の一月、謝肉祭の頃なりき、家財衣類なども賣盡して、日々の烟も立てかぬるやうになりしかば、貧しき子供の群に入りてわれも菫花賣る

とを覺えつ。母のみまかる前、三日四日の程を安く送りしは、おん身の賜なりき。」

「母のなきがら片付けなどするとき、世話せしは、一階高くすまひたる仕立屋なり。あはれなる孤ひとり置くべきにあらずとて、迎取られしを喜びしと、今おもひ出しても口惜しき程なり。仕立屋には、娘二人ありて、いたく物ごのみして、みづから衒ふさまなるを見しが、迎取られてより伺へば、夜に入りて屡々客あり。酒など飲みて、はては笑ひ罵り、また歌ひなどす。客は外國の人多く、おん國の學生なども見えしやうなりき。或る日主人われにも新しき衣着よといひしが、そのをり我を見て笑ひし顏、何となく怖ろしく、小供心にもうれしとはおもはざりき。午すぎし頃、四十ばかりなる知らぬ人來て、スタルンベルヒの湖水へ往かむといふを、主人も倶に勸めき。父の世に在りしとき、伴はれてゆきし嬉しさ、猶忘れざりしかば、しぶり〱諾ひしを、「かくてこそ善き子なれ」とみな譽めつ。連れなる男は、途にてもやさしくのみ扱ひて、かしこにては『バワリヤ』といふ座敷船に乘り、食堂にゆきて物喰はせつ。酒もすゝめたれど、そは慣れぬものなれば、辭みて飲まざりき。ゼエスハウプトに船はてしとき、その人はまた小舟を借りこれに乘りて遊ばむといふ。暮れゆくそらに心細くなりしわれは、早やかへらむといへど、聽かずして漕出で、岸邊に添ひてゆくほどに、人げ遠き葦間に來しが、男は舟をそこに停めつ。わが年はまだ十三にて、初は何事ともわきまへざりしが、後には男の面色もかはりておそろしく、われにもあらで、水に躍入りぬ。暫しありて我にかへりしときは、湖水の畔なる漁師の家にて、貧しげなる夫婦のものに、介抱せられて居たりき。歸るべき家なしと言張りて、一日二日と過ず中に、漁師夫婦の質朴なるに馴染みて、不幸なる我身の上を打明けしに、あはれがりて娘として養ひぬ。ハンスルといふは、この漁師の名なり。」

「かくて漁師の娘とはなりたれど、弱き身には舟の櫂取ることもかなはず、レオニのあたりに、富める英吉利人の住めるに雇はれて、小間使になりぬ。加特力教信ずる養父母は、英吉利人に使はるゝを嫌ひたれど、わが物讀むことなど覺えしは、かの家なりし雇女教師の惠なり。女教師は四十餘の處女なりしが、家の娘のたかぶりたるよりは、我を愛すること深く、三年が程に多くもあらぬ教師の藏書、悉く讀みき。ひがよみはさこそ多かりけめ。又ふみの種類もまち〳〵なりき。クニッゲが交際法あれば、フムボルトが長生術あり。ギヨオテ、シルレルの詩抄半ばじゆしてキヨオニヒが通俗の文學史を繙き、あるはルウブル、ドレスデンの畫堂の寫眞繪、繰りひろげて、タエンが美術論の譯書をあさりぬ。」

「去年英吉利人一族を率ゐて國に歸りし後は、然るべき家に奉公せばやとおもひしが、身元善からねば、ところの貴族などには使はれず。この學校の或る教師に、端なくも見出されて、雛形勤めしが縁になりて、遂に鑑札受くることゝなりしが、われを名高きスタインパハが娘なりとは知る人なし。今は美術家の間に立ちまじりて、唯面白くのみ日を暮せり。されどグスタアフ、フライタハは流石そら言いひしにあらず。美術家ほど世に行儀惡きものなければ、獨立ちて交るには、しばしも油斷すべからず。寄らず、障はらぬやうにせばやとおもひて、計らず見玉ふ如き不思議の癖者になりぬ。をり〳〵は我身、みづからも狂人にはあらずやと疑ふばかりなり。これにはレオニにて讀みしふみも、少し祟をなすかとおもへど、若し然らば世に博士と呼はるゝ人は、抑々いかなる狂人ならむ。われを狂人と罵る美術家等、おのれらが狂人ならぬを憂へこそすべきなれ。英雄豪傑、名匠大家となるには、多少の狂氣なくてかなはぬことは、ゼネカが論をも、シエ、クスピヤが言をも待たず。

見玉へ、我學問の博きを。狂人にして見まほしき人の、狂人ならぬを見るその悲しさ。狂人にならでもよき國王は、狂人になりぬと聞く、それも悲し。悲しきとのみ多ければ、晝は蟬と共に泣き、夜は蛙と共に泣けど、あはれといふ人もなし。おん身のみは情なくあざみ笑ひ玉はじとおもへば、心のゆくまゝに語るを咎め玉ふな。嗚呼、かういふも狂氣か。」

下

定なき空に雨歇みて、學校の庭の木立のゆるげるのみ曇りし窓の硝子にすかして見ゆ。少女が話聞く間、巨勢が胸には、さま〳〵の感情戰ひたり。或ときはむかし別れし妹に逢ひたる兄の心となり、或ときは廢園に僵れ伏たるエヌスの石像に、獨悩める彫工の心となり、或るときは又艶女に心動され、われは墮ちじと戒むる沙門の心ともなりしが、聞きをはりし時は、胸騷ぎ肉顫ひて、われにもあらで、少女が前に跪かむとしつ。少女はつと立ちて「この部屋の暑さよ。早や學校の門もさゝるゝ頃なるべきに、雨も晴れたり。おん身とならば、おそろしきともなし。共にスタルンベルヒへ往き玉はずや。」と側なる帽取りて戴きつ。そのさま巨勢が共に行くべきを、つゆ疑はずと覺し。巨勢は唯母に引かるゝ穉子の如く從ひゆきぬ。

門前にて馬車雇ひて走らするに、程なく停車場に來ぬ。けふは日曜なれど、天氣惡しければにや、近郷より歸へる人も多からで、こゝはいと靜なり。新聞の號外賣る婦人あり。買ひて見れば、國王ベルヒの城に遷りて、容躰穩なれば、侍醫グッデンも護衞を弛めさせきとなり。滊車中には湖水の畔にあつさ避くる人の、物買ひに府に出でし歸るさなるが多し。王の噂いと喧し。「まだホオヘンシユワンガウの城に居たまひし時には似ず、王の心鎭まりたるやうなり。ベルヒに遷さるゝ途中、ゼエ

スハウプトにて水求めて飲みたまひしが、近きわたりなりし漁師等を見て、やさしく頷きなどしたまひぬ。」と訛りたる言葉にて語るは、かひもの籠手にさげたる老女なりき。

車走ること一時間、スタルンベルヒに着きしは夕の五時なり。かちより往きてやう〳〵一日路の處なれど、はやアルペン山の近さを、唯何となく覺えて、このくもらはしき空の氣色にも、胸開きて息せらる。車のあちこちと廻來し、丘陵の忽開けたる處に、ひろ〳〵と見ゆるは湖水なり。停車場は西南の隅に在りて、東岸なる林木、漁村はゆふ霧に包まれてほのかに認めらるれど、山に近き南の方は一望きはみなし。

案内知りたる少女に引かれて、巨勢は右手なる石段を上ぼりて見るに、こゝは「バワリヤ」の庭といふ「ホテル」の前にて、屋根なき所に石卓、椅子など並べたるが、けふは雨後なればしめ〳〵と人げ少し。給仕する僕の黒き上衣に、白の前掛したるが、何事をかつぶやきながら、卓に倒しかけたる椅子を、引起して拭ひゐたり。ふと見れば片側の軒にそひて、蘿の蔓からませたる架ありて、その下なる圓卓を圍みたるひと群の客あり。こは此「ホテル」に宿りたる人々なるべし。男女打ちまじりたる中に、先の夜「ミネルワ」にて見し人ありしかば、巨勢は往きてものいはむとせしに、少女おしとゞめて。「かしこなるは、君の近づきたまふべき群にあらず。われは年若き人と二人にて來たれど、愧づべきはかなたに在りて、こなたにあらず。彼はわれを知りたれば、見玉へ、久しく座にえ忍びあへで隱るべし。」とばかりありて、彼美術諸生は果して起ちて「ホテル」に入りぬ。少女は僕を呼びちかづけて、座敷船はまだ出づべきやと問ふに、僕は飛行く雲を指さして、この覺束なきそらあひなれば、最早出でざるべしといふ。さらば車にてレオニに行かばやとて言付けぬ。

馬車來ぬれば、二人は乘りぬ。停車塲の傍より、東の岸邊を奔らす。この時アルペンおろしさと吹來て、湖水のかなたに霧立ちこめ、今出でし邊をふりかへり見るに、次第々々に鼠色になりて、家の棟、木のいたゞきのみ一きは黑く見えたり。御者ふりかへりて。「雨なり。母衣掩ふべきか。」と問ふ。「否」と應へし少女は巨勢に向ひて。「こゝちよの此遊や。むかし我命喪はむとせしも此湖の中なり。我命拾ひしもまた此湖の中なり。さればいかでとおもふおん身に、眞心打明けてきこえむもこゝにてこそと思へば、かくは誘ひまつりぬ。「カッフエ、オリヤン」にて耻かしき目にあひけるとき、救ひたまはりし君また見むとおもふ心を命にて、幾歲をか經にけむ。先の夜「ミネルワ」にておん身が物語聞きしときのうれしさ、日頃木のはしなどのやうにおもひし美術諸生の仲間なりければ、人あなづりして不敵の振舞せしを、はしたなしとや見玉ひけむ。されど人生いくばくもあらず。うれしとおもふ一彈指の間に、口張りあけて笑はずは、後にくやしくおもふ日あらむ。」かくいひつゝ被りし帽を脫棄てゝ、こなたへふり向きたる顏は、大理石脉に熱血跳る如くにて、風に吹かるゝ金髮は、首打振りて長く嘶ゆる駿馬の鬣に似たりけり。「けふなり。けふなり。きのふありて何かせむ。あすも、あさても空しき名のみ、あだなる聲のみ。」

この時、二點三點、粒太き雨は車上の二人が衣を打ちしが、瞬くひまに繁くなりて、湖上よりの橫しぶき、あらゝかにおとづれ來て、紅を潮したる少女が片頰に打ちつくるを、さし覗く巨勢が心は、唯そらにのみやなりゆくらむ。少女は伸びあがりて。「御者、酒手は取らすべし。疾く驅れ。一策加へよ、今一策。」と叫びて、右手に巨勢が頸を抱き、己れは項をそらせて仰視たり。巨勢は絮の如き少女が肩に、我頭持たせ、たゞ夢のこゝちして其の姿を見たりしが、彼凱旋門上の女神ベワリヤまた

胸に浮びぬ。

國王の棲めりといふベルヒ城の下に來し頃は、雨彌〻劇しくなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の竪縞おり出して、濃き處には雨白く、淡き處には風黑し。御者は車を停めて。「しばしが程なり。餘りに濡れて客人も風や引き玉はむ、又舊びたれども此車、いたく濡らさば、主人の嘆に逢はむ。」といひて、手早く母衣打掩ひ、又一鞭あてゝ急ぎぬ。

雨猶をやみなくふりて、神おどろ〳〵しく鳴りはじめぬ。路は林の間に入りて、この國の夏の日はまだ高かるべき頃なるに、木下道ほの暗うなりぬ。夏の日に蒸されたりし草木の、雨に濕ひたるかをり車の中に吹入るを、渇したる人の水飮むやうに、二人は吸ひたり。鳴神のおとの絶間には、おそろしき天氣に怯れたりとも見えぬ「ナハチガル」鳥の、玲瓏たる聲振りたてゝしばなけるは、淋しき路を獨ゆく人の、ことさらに歌うたふ類にや。この時マリイは諸手を巨勢が項に組合せて、身のおもりを持たせかけたりしが、木蔭を洩る稻妻に照らされたる顔、見合せて笑を含みつ。あはれ二人は我を忘れ、わが乘れる車を忘れ、車の外なる世界をも忘れたりけむ。

林を出でゝ、阪路を下るほどに、風村雲を拂ひさりて、雨も亦歇みぬ。湖の上なる霧は、重ねたる布を一重、二重と剝ぐ如く、束の間に晴れて、西岸なる人家も、また手にとるやうに見ゆ。唯こゝかしこなる木下蔭を過ぐるごとに、梢に殘る風に拂はれて落る露を見るのみ。

レオニにて車を下りぬ。左に高く聳ちたるは、所謂ロットマンが岡にて、「湖上第一勝」と題したる石碑の建てる處なり。右に伶人レオニが開きしといふ、水に臨める酒店あり。巨勢が腕にもろ手からみて、縋るやうにして歩みし少女は、この店の前に來て岡の方をふりかへりて、「わが雇はれし英

吉利人の住みしは、此半腹の家なりき。老いたるハンスル夫婦が漁師小屋も、最早百歩が程なり。われはおん身をかしこへ、伴はむとおもひて來しが、胸騷ぎて堪へがたければ、此店にて憩はゞや。」

巨勢は現にもとて、店に入りて夕餉誂ふるに、「七時ならでは整はず、まだ三十分待ち給はではかなはじ、」といふ。こゝは夏の間のみ客ある處にて、給仕する人も其年々に雇ふなれば、マリイを識れるもあらざりき。

少女はつと立ちて、棧橋に繫ぎし舟を指ざし、「舟漕ぐことを知り玉ふか。」巨勢、「ドレスデンにありし時、公園のカロラ池にて舟漕ぎしことあり、善くすといふにあらねど、君獨りわたさむほどの事、いかで做得ざらむ。」少女、「庭なる椅子は濡れたり。さればとて屋根の下は、あまりに暑し。しばし我を載せて漕ぎ玉へ。」

巨勢は脱ぎたる夏外套を少女に被せて小舟に乘らせ、われは櫂取りて漕出でぬ。雨は歇みたれど、天猶曇りたるに、暮色は早く岸のあなたに來ぬ。さきの風に搖られたるなごりにや、樵敲くばかりの波は猶ありけり。岸に沿ひてベルヒの方へ漕ぎもどす程に、レオニの村落果つるあたりに來ぬ。岸邊の木立絕えたる處に、貝砂路の次第に低くなりて、波打際に長椅子据ゑたる見ゆ。蘆の一叢舟に觸れて、さわ〳〵と聲するをりから、岸邊に人の足音して、木の間を出づる姿あり。身の長六尺に近く、黑き外套を着て、手にしぼめたる蝙蝠傘を持ちたり。左手に少し引きさがりて隨ひたるは、鬚も髮も皆雪の如くなる翁なりき。前なる人は俯きて步みきたれば、縁廣き帽に顏隱れて見えざりしが、今木の間を出でゝ湖水の方に向ひ、しばし立ちとゞまりて、片手に帽をぬぎ持ちて、打ち仰ぎたるを見れば、長き黑髮を、後ざまにかきて廣き額を露はし、面の色灰のごとく蒼きに、窪みた

る目の光は入を射たり。舟にては巨勢が外套を背に着て、蹲まり居たるマリイ、これも岸なる人を見居たりしが、この時俄に驚きたる如く、「彼は王なり」と叫びて立ちあがりぬ。背なりし外套は落ちたり。帽はさきに脱ぎたるまゝ、酒店に置きて出でたれば、亂れたるこがね色の髪は、白き夏衣の肩にたをたをとかゝりたり。岸に立ちたるは、實に侍醫グッデンを引つれて、散歩に出でたる國王なりき。あやしき幻の形を見る如く、王は恍惚として少女が姿を見てありしが、忽一聲「マリイ」と叫び、持ちたる傘投棄てゝ、岸の淺瀬をわたり來ぬ。少女は「あ」と叫びしが、その儘氣を喪ひて、巨勢が扶くる手のまだ及ばぬ間に、倒れしが、傾く舟の一搖りゆらるゝと共に、うつ伏になりて水に墜ちぬ。湖水はこの處にて、次第々々に深くなりて、勾配ゆるやかなりければ、舟の停まりしあたりも、水は五尺に足らざるべし。されど岸邊の砂は、やうやう粘土まじりの泥となりたるに、王の足は深く陷いりて、あがき自由ならず。その隙に隨ひたりし翁は、これも傘投棄てゝ追ひすがり、老いても力や衰へざりけむ、水を蹴て二足三足、王の領首むずと握りて引戻さむとす。こなたは引かれじとするほどに、外套は上衣と共に翁が手に殘りぬ。翁はこれをかいやり棄てゝ、猶も王を引寄せむとするを、王はふりかへりて組付き、彼此たがひに聲だに立てず、暫し揉合ひたり。

是れ唯一瞬間の事なりき。巨勢は少女が墜つる時、僅に裳を握みしが、少女が蘆間隱れの杭に強く胸を打たれて、沈まむとするを、やうやうに引揚げ、汀の二人が爭ふを跡に見て、もと來し方へ漕ぎかへしぬ。巨勢は唯奈にして少女が命助けむとおもふのみにて、外に及ぶに遑あらざりしなり。

レオニイの酒店の前に來しが、こゝへは寄らず、是より百歩が程なりと聞きし、漁師夫婦が苫屋をさして漕ぎゆくに、日もはや暮れて、岸には「アイヘン」「エルレン」などの枝繁りあひ廣ごりて、

水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花の咲きたるが、ゆふ闇にほの見えたり。舟には解けたる髮の泥水にまみれしに、藻屑かゝりて偃れふしたる少女の姿、たれかあはれと見ざらむ。をりしも漕來る舟に驚きてか、蘆間を離れて、岸のかたへ高く飛びゆく螢あり。あはれ、こは少女が魂のぬけ出でたるにはあらずや。

しばしありて、今まで木影に隱れたる苫屋の燈見えたり。近寄りて、「ハンスルが家はこゝなりや、」とおとなへば、傾きし簷端の小窻開きて、白髮の老女、舟をさしのぞきつ。「ことしも水の神の贄求めたるよ。主人はベルヒの城へきのふより驅りとられて、まだ歸らず。手當して見むとおもひ玉はば、こなたへ。」と落付きたる聲にていひて、窻の戶さゝむとしたりしに、巨勢は聲ふりたてゝ「水に墜ちたるはマリイあり、そなたのマリイなり、」といふ。老女は聞きも畢らず、窻の戶を明け放ちたるまゝにて、棧橋の畔に馳出で、泣く〳〵巨勢を扶けて、少女を抱きいれぬ。

入りて見れば、半ば板敷にしたるひと間のみ。今火を點したりと見ゆる小「ランプ」竈の上に微なり。四方の壁にゑがきたる粗末なる耶蘇一代記の彩色畫は、煤に包まれておぼろげなり。藁火焚きなどして介抱したれど、少女は蘇らず。巨勢は老女と屍の傍に夜をとほして、消えて迹なきうたかたのうたてき世を喞ちあかしぬ。

時は耶蘇曆千八百八十六年八月十三日の夕の七時、バワリヤ王ルウドヰヒ第二世は、湖水に溺れて殂せられしに、年老いたる侍醫グッデンこれを救はむとて、共に命を殞し、顏に王の爪痕を留めて死したりといふ、おそろしき知らせに、翌十四日ミュンヘン府の騷動はおほかたならず。街の角々には黑縁取りたる張紙に、此訃音を書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞號外には、

王の屍見出だしたるをりの模様に、さま／＼の臆說附けて賣るを、人々爭ひて買ふ。歡呼に應ずる兵士の正服つけて、黑き毛植ゑしパワリヤ甃戴きたる、警察吏の馬に騎り、または徒立にて馳せちがひたるなど、雜沓いはんかたなし。久しく民に面を見せたまはざりし國王なれど、流石にいたましがりて、愛を含みたる顔も街に見ゆ。美術學校にも此騷ぎにまぎれて、新に入し巨勢がゆくへ知れぬを、心に掛くるものもなかりしが、エキステル一人は友の上を氣づかひ居たり。

六月十五日の朝、王の柩のベルヒ城より、眞夜中に府に遷されしを迎へて歸りし、美術學校の生徒が「カッフェ、ミネルワ」に引上げし時、エキステルはもしやと思ひて、巨勢が「アテリエ」に入りて見しに、彼はこの三日が程に相貌變りて、著しく瘦せたる如く、「ロオレライ」の圖の下に跪きてぞ居たりける。

國王の横死の噂に掩はれて、レオニ近き漁師ハンスルが娘一人、おなじ時に溺れぬといふこと、問ふ人もなくて止みぬ。

戰僧

誦經聲歇みしとき、新に獲たる俘虜を戰僧の前に牽き据ゑたり。是處はアルシユレギイの山中にて、神工鬼設とも謂ふべき巖室なり。高き峯より落ち掛りたる大塊の石を、無花果の樹の老幹ありて支へ留め、蜿蜒たる根の縱横に纒ひ付きしをば、假の禮拜机とし、カルロス王軍の銀總にて緣取つたる聯隊旗を其上に掩ひたり。盥水を盛れる器をみれば彼の西班牙にて「アルカラザ」と稱へたる陶瓶の半ば壞れたるにぞありける。徒弟ミケルが立ち上りて、右に置きたる聖經を、左へ置き直さんと

せしとき、から〳〵と鳴りしは懐にしたる彈丸の響と知らる。机の周圍には革の襷にて銃を背に負ひたる許多の士卒、前に白き戎帽を置きてその上に右の片膝付き、祈誓に餘念なく見ゆ。ナワルラの更生祭日の、晴れ渡りたる碧空の炎々たる太陽は、岩室の中に直射し來りて、此運動なく、聲響なき一群を照し、唯ゞ梢に宿れる鵯の聲の時に僧の唱ふる神歌の聲に和することあるのみ。首を仰いで山の絶頂を見れば、石柱の若くに靜立せる哨兵の形、蒼き空の下に際立ちて見ゆ。

此隊伍の中央にありて神に事ふる戰僧の形は世の常ならず。其「ブロンセ」の金と見まがふ迄黑き顏には、何處となく隨喜渇仰の色見えて、此懺悔の面上には、彼重垣に圍まれたる寺院の人の容貌に捺す印とては影だに見えず。深黑にしていと鋭き兩瞳子は、宗敎に熱中せる度を示すに似たり。高く廣き額の兩側に遶ひ糾りたる脈絡は、恰も桶の箍に似て、僧の發悟せし宗敎の理義を餘所には洩らさじと護持するに似たり。僧が聽衆に向ひて兩手を差し伸べて、「神は爾等と俱にあれ」と唱ふる毎に、若古びて皺多き僧衣の下よりは、軍服ほの見え、佩びたるカタロンニヤ刀の柄と短銃の把と其間より露れたり。

當時世の中に聒り傳へたる、戰僧の異敎の人に接する苛虐の跡を、彼是と思ひ合せて、率き据ゑられし俘虜は安き心もなかりしが、祭を終はりし僧の面は、今日の祭の心に協ひてや、又た昨日の勝を思ひ出でゝや、何時になく優しく見えたり。

徒弟は驢馬に着くる襷に捺へたる箱に祭の品々を收むる中に、戰僧は共和軍の俘虜十三人を、身邊近く喚び寄せたり。昨日の軍に打ち負けて、果なくも怨敵の手に落ち、草料場の藁の上に一夜を明し、色蒼く身疲れ、飢渇骨に徹する一群の戰僧の前に出でたるさまは、屠所の羊にも譬へつべから

む。見よや、斷れたる襪と袜とは軍服を掩うたり。破りたる鍪の尖より穿きたる革靴の底まで土埃に裹まれたり。敗北の時に形を損ひたる革具は昨夜の宿にて猶も歪み亂れたり。渠等は獨り其形のみならず、又其心よりも、敗軍殘餘の士卒となりしものなるべし。」

カルロスの軍兵は皆ナワルラ、バスク等の山人なれば、肥太りて軀幹高きが、新しき鎧物具したることあれば、其姿の俘虜の姿と反對したるを、彼此と見比べたる戰僧は、覺えず笑を含みて俘虜に向ひ。「哀なる爾等が狀や。共和國にては、士卒に食ますものもなきや。降り積る雪に食を失ひ、村人が焚く篝火に誘はれて彷徨ひ出るビリオスの狼も、斯くまでに痩せたるは少し。見よ我勇士と猛卒とを。神を敬し王に勤むるものは、受くる酬も人に優れり。爾等もその鍪を投げ棄て、我白き帽子を裁きて、『國王萬歲』と唱へよ。我神聖なる軍に加へて得させんに。」

僧の聲はまだ畢らぬに、鍪を脱で地上に擲ち、皆「國王萬歲」「戰僧萬歲」と唱ふる聲、街に響きて聞えぬ。果あきは人の心なり、五尺の肉身に制馭せられて、誓を忘れ義に背くは何事ぞ。この時傍の岩罅にて烹たる肉の香氣は、馥郁として、この饑に堪へざる俘虜の鼻を襲うたり。凡そカルロスの爲めに、萬歲を喚びしもの、前後に少なからねど、斯くまで心を籠めて呼びしは、此時のみなるべし。

「高く吼る狼は、鋭き牙を持てるものぞ。渠等にもの食はせよ。」と戰僧は笑みつゝいへば、俘虜は新に得たる戰侶と共に、勇み喜びて往きぬ。

時に僧が前に立ち止まりたる一人の虜ありけり。頰の邊に、まだ髯とは稱へがたき綿の若き毛を見るのみなる少年なれども、思ひ詰めたる氣色面に顯はれていと勇し。着たる軍服は餘りに寛ければ、

背腕などに太き皺をなし、袖口は纖き手首に垂れ掛りて、五月蠅氣なるも哀れなり。渠が眼は爛々として戰俘の面に注げり。此眼は西班牙の火にて光を添へたる、亞刺比亞の眼なり。

「爾は猶ほ何をか求めんとする。」

「余は求むる所なし。爾が余が運命を定むるを待つのみ。」

「爾が運命は即ち爾が仲間の運命なり。助命の沙汰には爾も洩るゝことなし。」

「戰俘。爾は余が『國王萬歲』と呼ばざりしを知るや。」戰俘は彼鋭き黒瞳子を此少年の面に注げり。

「爾が姓名は。」

「トニオ、井ダル。」

「生國は何處ぞ。」

「ブイセルダ。」

「年は。」

「十七。」

「共和國は戰卒に事を闕きて、まだ丁年にならぬものを今度の軍に用ゐしや。」

「共和國は余に求めず。余は共和國に願うたり。」

「我手の中には爾に迫つて『國王萬歲』と呼ばしむる術あるを知るや。」

「その術は、余が屑とせざる所なり。」

「さらば爾は死を願ふものか。」

「寧ろ死なん。」

「善し。思ひ知らせて得させん。それ物共。」
聲の中に一「ペロトン」の卒は銃を構へて少年に向ひたり。此時少年は睫端も顫動せぬ程に靜立せり。
「生前に望はなきや。」
「望はあらじ。されど余は加特力敎徒なり。懺悔を終つて死なん。」
猶ほ僧衣を脫がざりし戰僧は、其礎石に腰打ち掛けて、いざ聞かんといふとき、少年は其前に蹲踞し、靜なる聲にて、「我父よ我に惠を與へよ、我は罪人なり、」と定式の懺悔を始めつ。このあり樣に銃を構へたる「ペロトン」は肅然として、少し引き下りて控へたり。
斯時機室に通ぜる竇道のかたより、小銃の音劇しく聞え、哨兵は「銃を採れよ」と叫んだり。
戰僧は衣を脫ぐ隙だになければ、立ち上りて傍なる銃を取り、防戰の指揮に餘事を忘れしが、不圖猶ほ蹲きたる少年を見て。「何故に爾は猶ほ斯くてあるか。」
「余は罪障の免除を待てり。」
「餘りの忙はしさに、殆と爾を忘れたり、」と戰僧は再び少年に立ち向ひ、閑に手を其頭に加へて、又傍を見廻すに、發の「ペロトン」は防戰に徃きたればあらず。戰僧は一足下るよと見えしが、銃聲一響、此少年の義士は烟の下に僵れたり」

み く づ

あな堪へがたき霧かなと呟きて、門の戸出づる男あり。外套の襟を竪て、えり卷をかたくまきつけ、頭うなだれて諸手をかくしの中に挿入れ、口笛吹きて役所の道をたどりゆく。

げにおそろしき霧なり。されとちまたにては猶ほ堪ふべし。大都の霧の命は雲と同じはかなさを歎くが常なり。屋根にて裂かれ、家の面にて分けられ、家の開らくを見れば、たゞちに入りて梯を滑にし、欄を濕さむとす。かなたこなたへ馳せちがふ車も、朝未きに途に上る工人も、皆な霧を破り、往きかひたる霧は、破られて湧きしごとぎの袖に入り、工場に通ふ少女が雨衣のひだにかくれむとす。霧の處得がほなるは、河の面、橋の上、岸邊の道などあり。そこにては凝りて動かぬ雲となりたれば、ノオトル、ダム寺のうしろよりさし出づる日の光も、ほの〴〵と見ゆるのみにて、露の置ける硝子窓ごしに燈火見る心地す。

さきの男は霧を侵して岸邊を歩めり。役所に往く路は、こゝに限りたるにはあらねど、かれは何となく水に引かるゝ如く、岸をゆき〳〵て、河に沿ひたる欄干におのが衣の觸るゝを喜べるさまなり。晝になれば、定れる業なき民の臂をもたせて河水を見おろすべき此欄干の邊に、今はまださる人も見えず。稀に籠を此上に載せてしばし憩ふ洗濯屋の女房、この上にうつ伏になりて、氣ぬけしたらむやうに水を見つめたる貧げなる男に逢ふのみ。役所に徃く男は、かゝる貧げなる人に逢ふごとに、必ずふりかへりて其の面を打ながめ、さて水を打見やりて、立ちたる人と流るゝ水と、互に緣あるものゝ如く思ひなす如し。河の方を眺むれば、波より立つ霧むら〳〵と集りては、又わかれて四方に散り、此セエヌ河の底に黒金ふく小屋ありて、烟を吹きいだし、巴里の都をつゝまむとするかと疑はる。

この男はしめりたる風に吹かれ、着たる衣には乾きたる絲一すぢもとゞめざらむとするをも心にかけず、口笛吹き、笑みつゝぞゆく。セエヌ河の霧は久しく交る友なるを、なにか厭はむ。又役所に

到らば、いつも温き裏付の上靴あり、焚きつけたる爐あり、朝な〳〵物燒きて食ふべき熱き板あるべし。これを思へば、寒さは物かは。實にこの役人が生涯の樂はこれのみなり。世にはひとやの裏なる罪人にも樂なきにあらずといふ、その樂にも似たらむは、かれが役所にての境界なりけり。林檎買ふことをも忘れじと獨りごちて、又た口笛吹き、少し足をはやめつ。かく樂しげに業に就く人は、貴きわたりにも、富める家にもなかるべし。岸に沿ひてゆく〳〵橋のたもとに出でぬ。渡ればノオトル、ダムの寺の傍なり。こゝぞ霧の尤も濃き處なる。霧はこゝへ三方より流れよりて、塔をも半ばつゝみ、橋柱のわたりにも集りて、何をか隱さむとする如し。男は立ちとゞまりたり、こゝは役所のある處なれば。

物皆おぼろげに見ゆ。人道の敷石の上につどへる一群は、何やらん待つ如し。そが側に籠に林檎盛りてひさぐ老女あり。林檎は露を帶びて美しく、赤き片頰さへ愛らしく見えたり。男は是を買ひて雨のかくしに入れ、老女が足の間に火鉢はさみて齒の打合ふばかり慄ひたるを笑ひ、近き扉の霧にかくれて著くも見えわかぬを推して内に入れば、小さき中庭あり。こゝに一輛の車あり。今來ぬと覺しく、馬をもなほそが儘にしたり。獲やありつると問ふに、水のしたゝるばかりに濡れたる馭者、美しき獲にこそと答ふ。

男はいそぎて役所に入りぬ。

煖く心地善き一間なり。爐はよく燃えて、薪のはち〳〵と鳴る音と共に焰たちのぼれり。上靴も例の處にあり。片隅なる椅子はあるじ待ちがほなり。窓の外には霧尙ほ深く立籠めたれば、窓かけあるやうにて、日光かすかに入れり。綠いろなる革にて表裝したる簿冊は、列をたゞして棚の上にあ

り。富める代言人の部屋にも、かくまでに心を用ゐて次第を整へたるはあらじ。

男は心落居たるやうに太き息つきたり。今はおのが貧の家居に還りたるなればさもあるべし。業に就くに先ちて棚を搜り、物書く時袖の上に掩ふ巾を取出でゝ、徐に腕に被せ、さて赤き沙を盛りたる皿を出し、咖啡のをりに片付け置きし砂糖の塊幾何かありしをも拾ひとりて、さて林檎の皮を剝ぎはじめしが、此の時男はいとうれしげにあたりを見廻しぬ。理なり、斯く心地よき役所は多く得がたかるべければ。唯だ一つ常ならずと覺ゆるは、四方に水の音の聞ゆるにぞありける。此音は絶音もなく室に迫り來て、慣れぬ耳には舟にある如き思をなさしむ。橋杭に觸れては砕け、泡立ちて散り、船筏に逢ひては怒るセエヌ河の水の音は、悉くこゝにも聞えて、洗濯屋に入りたらむやうなり。稀にこゝに來る人は、これにえ堪へず耳を塞がむとしては又我れともなしに聞くに、或るときは一桶の水を室のゆかの上にこぼしゝ如く、又或るときは目の前なる大理石の机の上を水の流るゝ如し。訝かしや、此音は河の水のみにはあらじ。家の内にて何をか洗ふとおぼし。されどかく絶えず洗ふは何の衣ならむ。又おとさむとするは何の垢ならむ。

流るゝやうなる水の音暫し止みたる隙に、心をつけて聞けば、此室の後なる一間にては、簷の雫の如く落つる水聞え、又外の一間にては雨の如くはら／＼と落つる水の音聞ゆ。此家の屋根壁に凝りあつまりたる霧の爐のあたゝまりに解けて落つるにや。

男はそれに心とめぬさまなり。熱き板の上に載せたりし林檎は、今やう／＼燒けて、ちう／＼と音す。かれが耳にはこの快よき音のみ入りて、水のあはれなる音は入らず。

書記の君見たまはずやといふ聲、つぎの間より聞ゆ。男は少し腹だゝしげに立ちあがりて、又たふ

りかへり、林檎を一目見て、次の間の戸を開きつ。

次の間に入れば、寒さ膚を侵して、泥の臭、藻屑の臭滿ち〴〵たり。張り渡したる索には、くさ〴〵の衣を掛けたり。水はこれより絶えず滴り落つ。

見畢りて水に濡れたる品々を持ち、我室に歸りて机の上におしひろげ、凍えし指を温めむとて又爐に向ひぬ。

皆物に狂ひしものにや、かく寒けき空に、いひ合はせたらむやうに、かゝることとすとはと獨りごち、手の温まりしを待ちて、林檎を取りあげ、熱き板の上にて解けかゝりし砂糖をつけて食ひぬ。飽くまで食ひて簿冊を開き、心地よげに繰返したり。げに美しくも書いたるかな。眞直に引きし罫の上に、表題と見ゆる字をば青き墨汁にて寫し出したり。一ひらごとの間に赤き押紙を狹みたり。此記事はいと繁し。此業は盛なりと見ゆ。歳のをはりに總計をなさば、大なる數となりぬべし。役人はうれしげに簿冊をくりかへす程に、外の一間の戸あきぬ。許多の人の足にて堅きゆかを踏む音す。人々の語りあふ聲のいと低きは寺の内に似たり。

猶ほいと若しと見ゆるに、あな哀れ。

倚りこぞりて物見るさまなり。猶さゝやぐとは聞けど、言葉定かならず。いかに若ければとて、書記の與かり知ることかは。かれは心しづかに先に持來し品々を撿見するに、砂にまみれたる眞鍮の指ぬき、僅に一文錢一つ入れたる財布、錆びたる剪刀、濡れとほりたるかよひ帳、裂けたる手紙などなり。

帳面は紙と紙とのひたと附きて、開かば裂けぬべき様なり。手紙は濡れて墨汁の散りたれば讀めぬ

ど處々に殘りたる文字を拾へば、我子といふあり、錢盡くといふあり、食なしといふあり。書記は肩をゆり動かしぬ。

珍らしからずさもこそと云ふ如き振りなり。

さて筆を手に取り、簿冊の紙の上に落ちたる塵を吹き拂ひ、筆を墨壺に沈めて、程好く墨を含ませ、その新しき一紙面の頭に、彼かよひ帳に記したる文字を美しく寫し出しぬ。

フエリシイ、ヲモオ。洗濯女。當年十七歲。

黃綬章

> 屋根裏の一間に住ひ候寡婦の許に、同宿をおん望なされ候婦人は、下名へ御尋下され度、又同處に小兒の臥床一つ賣物に相成候者有之これも下名にて御相談可仕候。
>
> フラウ、ストリイベル。

この廣告文はある小新聞に出でぬ。五號活字にて狹く植ゑたれば、拂込みし廣告料は僅なるべし。されどこれを讀みし人の數はなか〳〵少からず。このせち辛き世の中にも、新聞一枚殘らず讀む人は隨分ありて、解らぬなりに相場表まで目を通し最少し根强き人は届先の知れぬ郵便の報告を調べ、甚しきは百尺竿頭に一歩を進めて、日々の紙面の大詰に出でたる何町何番地の何社、編輯人何の誰、印刷人何の誰といふところまで見るといへば廣告文はいふまでもなきことなり。そも〳〵屋根裏の間といふは、二階、三階、四階、事に依りては五階と登りつめたる、その上の栖家にて、烟突まがひの小窻、徽に日光を漏らし、壁も天井も大抵板を打付けたるま

まなり。廣告に出でし一間は、これよりは少し上等にて、壁も天井も一度は石灰塗りしことあれど、いつか烟に燻べられて、薄黒くなり、お定まりの外壁は、棟に向ひてはす掛に隘まり、萎びたる床のところ〴〵に出來たる窪みは、時代のついたる塵を溜めたり。畢竟この窪みの塵は、力ある腕にて振まはす箒にても、掃ひがたかるべきに、矧てや此一間に住みて、をり〳〵箒握る手は、瘦せ皺みて小雀を割く力だになし。この手の持主は、ことし六十になりたる老婆にて、廣告に寡婦と見え、またフラウ、ストリイベルとありしも此人なりけり。

秋も早や暮れなむとして、次第に肌寒くなれど、この屋根裏の間に据ゑつけたる小き鐵の間ぬくめよりは、烟立つこと珍らしく、間ぬくめ殿も何となく不平らしき顔して、われに薪も炭も喰はせじとならば、それにて善し、お前達の體は寒からうと暑からうと、わが知ることかと、口あらば言ひたげなり。

一間に置いたる道具は、昔ゆかしき形殘りて、今こそ疵だらけになりたれ、机は慥に磨き板なり。そのまはりに胡桃の樹づくりの椅子三つあり。また兩腕附革張の大腰掛もあれど、坐のところに淺黄色の模樣ある木綿を縫附けたるは、仔細ありげなり。部屋の片隅には、廣告に出でし小兒の臥床あり。これも磨き板にて作りしものなれど、蒲團も何もなければ、聞くも悲しき昔語をしたさうなり。

フラウ、ストリイベルは近頃病がちにて、床の中にのみ居れば、寒しとも思はぬなるべし。厚く疊ねたる「ブランケット」の外に兩手は出したれど、うは衣の筒袖長ければ、風も通らず。大なる寢帽子の下より見ゆる顔は、額に老の波をたゝへ、頰さへ陷いりたれど、目元、口元にどこか上品なる

故蹟殘りて、あはれ、昔は美しき「ポンチット」の下より覗きしともあらむと推せられぬ。今迄讀みし本を「ケット」の上に置き、手をその上に組みあはせたる、片々の指の間には黄いろの紐を撮みて枕に倚せかけたる頭重げに、目は天井の方を見たり。

この黄いろの紐は、聖經の間に挾みありて、老婆が誦讀、こゝまで來るたびに、眼はいつも「ケット」の上に落ち、手はいつも組合はせられ、頭は重げに枕に倚りて、その天井の方を見る目よりはいつも大粒の涙ほろ〳〵と翻れ、掛けたる目鏡の下を洩れて、頰の窪みに流るゝなり。さて此涙越しに見れば、過去りし昔も今のやうにおもはれて、この狹き屋根裏の一間忽大なる座敷とあり、唯一つの明りとりも透し織の巾かけたる大窻二つとなり、薄黑き壁には、緣くれなゐ、さま〳〵の紋あらはれ、その眞中には二面の油繪を懸けたり。一つはおのれが若かりし程の姿にて、善く似たりと人に譽められしも昔になりぬ。いま一つは亡くなられし夫の肖像、建築調査掛を務められしをり書かせしものにて、黑の禮服の胸に、純金の勳章を黃いろの紐につないで懸けたり。現に忘られぬは、この黄いろの紐の事なり。

いまも見るやうなは、あの晩に狡猾さうな顏して、いつもの役所の小使がわが家に來しときなり。あの脂ぎつたる赤ら顏と白髮頭にて、斷えず嗅煙草する癖、思へばをかしや。先づ部屋に這入つて、例の烟草一撮み鼻に擦りこみ、片手を「ポッケット」に撞込んで少し臀を振はせ、善い便、惡い便、お役所から持つてまゐりしと幾度か知らねど、今夕のやうなのはまだなかりきと申しければ、氣に掛ること薬つき、腰なと掛けて、その譯話して聞せよといひしに、いや〳〵御用濟ぬ中腰が掛けられうかと、「ポッケト」より引出しゝは官印の据わつたる大なる狀袋、その厚さ、たゞの紙ばかりと

はおもはれず、吉凶いかにと冷汗背中を浸せば、いや、ペンデル殿、お前腰を掛けられずば、われ腰を掛くべし。さていよ〳〵腰を掛けて、一封を前垂につまんで受取り、開けても善かるべきやと、一應問うて封を截れば、中から出しは美しい赤鞣革の小筐、それだに暫らくめでたがりて小い金の錠前あくる機、蓋はね上つて、や、や、是は純金の勳章、ペンデル殿、わしや目が廻らねば善いが。

されど目は廻らざりき。氣を落付けし上、葡萄酒一杯ペンデルに飮ませて、この勳章どうして旦那樣に見せうかと相談せしに、あれが勸はわが思ふ壺なりければ、夕食にその準備したるところへ旦那樣歸られ、その時八つになりし一人息子の日曜衣着たるをも、別に心にかけず、機嫌よく食卓に就いて、いつもお好ありし酸菜を附合せたる豚を見られ、笑ひながら傍の膝掛手に取れば、下には黄いろの紐附いたる例の品。腰かけし椅子に針でもありしやうに飛上られし旦那樣のお顏、いまも目の前に見ゆるやうにて、こりや戲か眞かといひ玉ひし聲も忘られず。いまゝで肚の裡で笑つて居りし我、涙ぐんで坐を起ち、髮の間の留針拔出して勳章の紐、旦那樣の上衣の襟に縫付くる時、かねて教へおきしフリッツおとなしく、卓の下に匿して持ちし大きなる花束、おとつ樣おめでたうと渡しぬ。

いつもの豚の肉、あの晩ほど殘忍い扱に逢ひしことなし。旦那樣のお目は、左の胸に向いたるまゝゆゑ、「フオオク」に突刺したる肉、鼻のあたりへ持つてゆかれ、附合せの酸菜はそこら中に飜れぬ。フリッツ寢させて、後勳章に添うたる沓付、御一所に讀んで見しに、何となく喉に支へしは、所有人死亡の節はこの勳章奉還すべき事といふ一行なりき。機嫌好きいまの旦那樣のお顏、二度と見られぬやうになるとき、この立派なる勳章にさへ別れねばなるまじきかと思へば、末のとながら悲し

やと淚ぐめば、旦那樣慰めて、なに、それまでにはフリッツ大きになりて、おなじ勳章貰ふかも知れず。程經て後、おなじ机に向ひて、淚のうちに勳章を小筐にしまひ、役所の小使に渡しゝことありしがその時の小使は早や昔のペンデルではなく、馴染のない男なりき。旦那樣亡くなられし前、ペンデルは地の底七尺のところに眠りて久しうなりぬ。フリッツがおなじ勳章貰はうといはれしも、あだになりて、工部の試驗は首尾好く濟ませたるに、放蕩次第につのりぬ。あの晚にはフリッツ、眉根に皺寄せて、眞暗の窻の外を見詰め、をり〳〵爪を嚙んでわれを慰めむともせず。いまのやうに內を外にする身持を見れば、行末おそろしうて、片時も安心出來ず。年寄たるわが助になつて貰はうなどゝいふ心は、久しい前から微塵なくなりたれど、自分の上をは、せめて思うて呉れずや。お上から下さるゝ恩給あれば、一生食ふだけのことは出來れど、お前の事氣に掛りてやす〳〵と死なれざるべし。

わが意見少しは利いてか、道樂も暫らく止みて亡くなられし旦那樣の友達に周旋を賴み鐵道局へ勤めさせしをり、多くもなき恩給を身元金に拂ひしに、悴が尻おちつかぬために、免職の曉、身元金を抑へられ、この家根裏へ、餘命送りに來ぬ。高の知れたる屋根裏の生活、殘の恩給にて立たぬ筈はなしと、健氣におもひしも暫しの間、いまは足らぬことのみ多く、當惑色に出でしを、家主の女房みかねて、同宿の女子ひとりお探しなされてはいかゞ、若し覺召あらば、廣告のお取次もいたすべく、さいはひ明いたる寐臺ひとつあれば、損料もお安く御用立つべしと勸めぬ。おもへばこれは屋賃の滯らぬやうにとのみにはあらず、年寄つての病癖、もしものことがあつてはと、親切の心入なるべし。命は露惜くなけれど、この屋根裏で、他人の手から末期の水飲うとはおもはざりき。あゝ、

一人前の男になるまで育てあげたる倅は、いよ〳〵この世の奈落へ墮つるか、萬に一つもなりいでて故郷に錦を飾らうか、一六勝負して見むと、いひ棄てゝ都へいでしが、いまは何處に居るやら、若しあの道樂だにせざりしならば、いまごろは美しい新婦、可愛い子供を見るべきに。えゝ、われながら脆いものは涙なり。

かう思ひつゞけて、現でゝろになりしフラウ、ストリイベルが耳にも、遠慮らしく入口の戶を敲く聲聞ゆれば、すこし起きなほつて、何方さまかといふとき、徐に半分開けたる戶の間より、若き女子顏を出し、世を憚る人のならひか、交際の愛敬わらひ淋しく、同宿のお願出來るはこなた樣かと問ひぬ。

あい、こつちなれば、氣兼せずお這入りなさるがよしといへど、女子はもぢ〳〵しながら、さやうならば御免蒙りまするが、私はあの私はと兎角背面を見返つて躊躇ふ樣子、主人の老婆はもどかしがりて、あのお前さんがと伸上がりて問ひかへしつ。女子はおもひ切つて、申しにくい事ながらあの私は子供をつれてまゐりしといふに、なに、子供をつれて來たとはと、寐帽子かぶりたる頭傾けて、それは隨分むづかしかるべし、話して上のことではあれど、氣の毒ながらいまゝでも斷いうて歸したる人もあり、つひ誰でもといふ譯にもいかぬものなり。この話のうちに女子は四つばかりの男の子の手を引いて入りしが、その子の身震するは、人の家怯がりてにはあらず、着たる衣あまり薄ければなるべし。

さう仰しやらうとは存じましたれど、わたくし出處怪しきものならねば、籍など御覽にいれてもよし、宿料も一月づゝは前金におあげ申すべければと、分疏らしき女子のこと葉には、老婆そら耳走

らせて、手を引れて立縮になりたる子供つく〴〵と見るに、顔の色靑く、耳鼻など赤くなりて、さも饑凍えたるあはれさ。答なければ、女子は間の悪げに、おやかましかりしならむと、口の內にて侘び、失望には慣れし身の怨めしくもおもはず、さあ、坊やもお辭義せよと敎へて、戶のぼつちに手を掛けつ。

色白の好いをんなと思ひしが、氣が付きて見れば衣類も舊いばかり卑しくはなし。笑ふときも締つたる儘の口元に、言はれぬ愛を隱して、優しい言葉一つ掛けなば、泣きだしさうに見え、子供らしい目にて、人の顏を鳥渡見て、無禮でもしたるやうに、直に下を向いたる樣子、一々遠に胸に響いて、若し相談とゝのはゞ廣告で御存じの小見の寢臺も借して上げらるべし。これは譯もない言葉なれど、情は聲音にあらはれければ、今戶のぼつちに手を掛けし女子、引いて居たりし子どもの手を離し、兩手を顏に當てゝわつと一聲泣きぬ。老婆は床の上に起きなほりて、指の股に挿みたりし紐を丁寧に聖經の間にしまひ、相談は兎も角も、お前をこの儘では歸されず、まだ若いにその子をつれて、屋根裏住ひ探さるゝ仔細も聞たし、まあ、頭巾など脫いでおちつきなされずや。久しぶりにて間燧めでも焚付くべし。まだ降りやまぬ霙にさぞその子も濡れしならむ。

涙溢れ、胸塞いでこと葉なき客の女子は、唯頷きて子供を抱きあげ、凍たる額に唇當てゝ立てり。おゝ、子供の濡れて居るは知れたることなれば、その衣物を脫がせて、この床の中へいれ、暫らく暖めて遣りたしと、老婆が親切に女子うれしく、さうして下さらば何よりの事、間燧めは私が焚付け申すべし。げにそれが善からむ、薪はそこの箱の中にあり、いや〳〵今朝家主のおかみ樣くべて置いて下さつたれば、寸燐にて焚付くれば善し、寸燐はこゝにと渡し、それは先づ後にしてその子を

早く、さあ、坊や、この暖い床へといはれ子供は主人と母との顔かはる〴〵見つ。その物問ひたげなる目の可愛らしさ。

母は獨頷きて、坊や、御遠慮するには及ばず、あれは祖母さまなればといひかけ、主人の老婆に目にて佗言するもあはれなり。さて床の上につれゆきて、衣物を脱がすれば、老婆おもしろげに見て、それ、そんなに濡れて居るものを、汗衫まで、襪もと、早や孫一人儲けたるこゝろ、子供は流石遠慮してはいりかぬるを、母抱きあげて蒲團の中へおしやりつ。

老婆は優しく「ブロンド」なる縮髮撫でゝやるほどに、煖爐の中にて薪の割るゝ聲ぱち〴〵と聞えて、烟突の口を拔けてゆく空氣、それ見よ、矢張おれの世話になるとき來るにあらずや、しかし不沙汰したるお前たちをも、煖めてやるべしと囁語ぐやうなり。げに間ぬくめの言葉は噓ならず、この家根裏の一間あたゝかになるにつれて、心の氷かたみに融け、一時に來たる春風春水、蒲團の內の子供の顏、桃いろになりてめでたく覺えず抱きしめて、坊が名はと問へば、早や臆面なくアルフレットと答へぬ。

同居の相談滯なく濟みしは、いふまでもあけれど、この女子素性正き證據見せたるのみにて、身の零落れし次第をいはず、御恩忘るゝものではなければ、そればかりは、訊ねずに措いて玉はれといひぬ。次の日老婆の問はず語に、原の栖家のこと、亡なられし夫は建築調査掛勤めたりしこと、一人子の放蕩して徃方知れぬことなど聞き、女子さてはと慦き、おなじ名は善くあるものなればと心にも留めざりしが、これも神のおん引合せなるべしと、獨胸に收めて、これよりは主人大事と、まことの娘も及ばぬ孝行を竭し、もやひ世帶の末を樂しみて働きければ、老婆も一度厭ひはてし浮世おも

しろく、久しぶりの笑顏見するやうになりぬ。

兎角するほどに春近うなりて、永くなりかゝつたる晷けふも傾き、倅のこと忘れたさに手に取る聖經も早や讀めねど、「ランプ」點すにはまだ早きころ、同宿の女子は用達しにいでゝの留守、アルフレットは仰向に膝を枕にして、小窻の外の靑空をおがめ、錻のやうなるお月さま向うの屋根より出るをめでぬ。これも子供のためには、爲うこととなしの慰、老婆はさき程より、覺えて居りし限りのむかし話をしつくし、難義救はれし後のお姫様のなり行、谷間に落ちたる後の毒蛇の始末まで、問はるゝまゝに言うて聞せし上のことぞかし。この時ぞと戶を開くる人ありしが、老婆はいつものこと、同宿のルイゼが歸りしあらむと、入口のかたを見しに、おつか様お達者でおいでなされしやと、入來たりしは、我折れ、音信不通の倅。

今までも久しく逢はずに居りて、珍らしく顏見しことは、度々ありしが、いつも善い事聞いたるためしなければ、この度も何事あつて歸りしかと、先づ胸騷せられて、さういふはフリッツか、どんな目に逢ひしやと問へば、めでたい知らせでは御坐りませねど、こん度は御心配なさるやうなること申しにはまゐらぬといふ。何年逢はずに居りても、變はらぬは親子の情なり。夕御膳まだ濟まずば、さぞお中透きたるならむと起ちかゝれば、アルフレットは知らぬ人の顏不思議さうに見て、そと椅子の背後に廻はり、音もせずに控へぬ。坐を起たうとする母親を、手眞似にて留め、ゆふ御膳は最う濟せて來たれば、御心配下さるまじ、疾くにもわが身の上手紙にてお知せ申したかりしが、何か一廉の事いたしたる上にてと、つひけふまで御不沙汰致しゝが、都へ出て鐵道會社の役人になつてからは、一を截りかへて眞人間になり職務大事と勵みましたるしるしは、頭取にもらひし精勤

謳歌といふもの、御覽なされば、知れ申すべし、こん度會社を離れて、ひとり立つて事業をするやうになりたく幸好い機會あれば、その用事の旅の序、お顏を見に寄りしあれば、疑がはずに優しいお言葉掛て下され、それが厭になりて、おもひ付いたる用事立派に遣つてしまはゞ、と老母の前へ椅子を寄せて、そのときはおつか樣、今までの不孝の罪、償うてお目に掛け、私に由縁ある外の人にも、義理の立つやうにいたすべし、その人の事もお話申したけれど、それはいまでなくても善し、おつか樣どうぞ私を見棄てずに行末を樂むお心に成つて下され。

フラウ、ストリイベルは膝に兩手を組合はせて、始終の話を聞いて居りしが、ふと窗の外のお月さま見れば、いつになく輪廓碎けて、ぎら／＼と光りぬ。この時椅子の背後なりし子供は、知らぬお客樣の永話に草臥れて、吐息ほつとせしに、若者おどろきて、あれは誰の子ぞと問へば、老母ほゝ笑み。同宿のやさしい女子ありて、まことの娘も及ばぬ介抱して呉るゝことなるが、あれはその連子あり。これ、坊や、氣兼なるお客さまではなければ、こゝへおいでといふ。子供はおづ／＼出ておば樣の椅子に並んで立ちしが、はや一間の內眞闇になつたれば、唯目ばかりひかつて見えぬ。御同宿ありては、さぞ御究屈なるべしと息子小聲にていふを母は抑へて、いや／＼、究屈どころではなし、この子の母にはいかい世話になればと、小兒の頭ひき寄せて撫りぬ。息子はつく／＼見てこの子も丁度四つぐらゐなるべし、あれも今ごろはといひ掛けて、坊は善い子なれば、おぢ樣の膝の上に來ずや。

人怯せぬ子なれば、おとなしく來て抱かるゝを、若者やさしく受取りて、そと頭を撫つてやり、やはらかなる善いかみなり、色はと問へば、老母かはりて「ブロンド」なりといふ。「ブロンド」ならば

愈可愛しと抱緊め、何思うてか言葉もなし。老母は伜の身の上、まだとつくと腹におちねば、お前がこん度の用事とやらは、何んなものか言うて聞せずや。

フリッツ急に氣付きて、げにその事を、まだお話せざりしが、こゝから遠からぬ繁華の地に、大芝居建てらるゝについて、製圖の競爭といふとあり、この競爭をいたす人は、おもひ〳〵に力一ぱいの圖を引いて出し、腕前勝れたるもの用ゐらるゝことあるが、勿論時によつては依怙もありて、勝れたる人も望どほりにゆかぬとないでもなし、私の圖は八分がた出來上りをれど、現場を見ねば、あちこち備と定められぬ尺あるを、この度取りにまゐる途中、鳥渡お顔を見に寄りし譯なり。縱令競爭には勝たれいでも、其筋の人に腕前は見せておくべし。はじめは萬事出來てからお知らせいたさうとおもひしが、つひ素通がしにくさにといふ。老母は頷いて、腕前だにしかとして居れば、立身は急ぐに及ばぬことゝ慰むれば、それは私もさう思へど、こゝへ立寄りしには、まだ外にも譯ありて、この譯ばかりは、いかにおつか樣にでも申しにくしと、膝の上にておとなしく、いま向うの烟突に隱れかゝつたるお月さま眺むる子供の頭、しづかに撫りぬ。

その譯聞きたしと老母の問に、フリッツまだ答へぬほどに、梯を登る輕い足音聞えて、火の光入口の戸の隙間をもれたるを、子供はやくも知りて、頭振向けつゝおつか樣と呼びぬ。

戸は間もなく開きて、入來たりし女子は、霙に濡れてこの家根裏探しゝときの姿何處へやら、をり〳〵は堅く締つたる唇よりも微笑の影ぐらゐは見ゆるなるべし。けふも機嫌好く歸りしルイゼ、さぞアルフレット待兼ねたるべしと、一間に入りしが、我子抱いたるはおもひ掛けぬ薄情男、むかし親子を振棄てゝゆきしその人。これはと計二三歩退きしとき、早や馴染みたる子を質に、償ひなが

ら右手さし伸ばす夫の悔悟に我慢の角折れ、おなつかしやと傍へ寄れば、フリッツうれしくおつかしく、いひ掛けたるは、この可愛いもの丶身の上。この夜アルフレット寝させて後、三人の物語り書取らば、二三日分の新聞紙面、殘らず借るやうになるべし。それにても、まだ思うたる半分もいはれぬうちに、小「ランプ」の油減りて、フリッツが懷時計、彼土地へのしまひの急行滊車出發の刻限になれば、老母も妻もこの度の企、首尾好く成就せよかしと祈りて、暫時手を握りてまた手を分つ若者の門出祝ひしが、三週間ばかり後、かの地より手紙來りて、大芝居の圖採用せられし上、天晴の腕前と審査官の鑒定を受け、直に建築主事の役になり、別封の品賜はりきとあり。フラウ、ストリイベル手を顫はせて、品物の封を截れば、ゆうべの夢は正夢か、紅絲革の小筐、中味は馴染の黃綬章一つ。

ふた夜

初の夜（千八百四十四年）

ミラノの客舍「ライヒマン」にて、美しき小園に臨める食堂の戸を開きしその下に、年少き士官の一群まと居したり、數ふれば六人なり。げに小會食には恰好なる數にて、今飮食をばしはてつと見ゆ。豈にもの積上げたる机は、畫圖に似て錯落たる趣をなしたり。かしこに壞れし果實の尖柱あれば、こゝに栓を拔きし「シャンパン」酒の瓶氷桶の中に立てるあり。飽ける眼の視線は、香高き珈琲を前にし、烟軟きハワンナの卷を口にして、心地よげにこの机の上をさまよへり。時は是れ五月の午後にて、燠かき日は小園を越えて逸く去り、己に代らするに快よき涼を以てした

り。この涼は戸を穿ち廊を通りて、屋根高く取り巻きたる中庭より流れ入りたり。今や別れ行かんとする日の金色は、園を圍める垣、又は壁など、暗き蔭ある處に、隣家の稜立ちたる棟を畫き、嬉し氣に幹高き「ラウレル」の木、石榴の木などの頂を甞めて、この安樂窩を離れんを厭ふに似たり。されど見るがまゝに、彼の明き影は一寸、一寸と昇りゆきて、これに從ひて鳴きつゝ飛上る昆蟲と共に、この涼しく暗き蔭を通る。

卓に就たりし間の活潑なる會話は、今珈琲、烟草の時となりて止ぬ。六人の士官はいづれも身を寛にして椅子にもたれ、思ふ所ありげに別れ行く日を見送れり。これ實に短き間の心地よき甍やすみなりき。骨折し後の樂き休憩なりき。恰好し寺塔よりは大なる鐘鳴渡りて、近き寺々の小き鐘は悉く此低調に和したり。

六人の士官は四つの異なる聯隊に屬せり。中にて匈牙利「フザアル」聯隊の二人肌にひたと附きし青色の「アチラ」を着たるは今日の主人なり。餘は皆な客にて、一人は白に靑を交へたる龍騎兵の服を着け、一人は暗綠に紅を交へたる輕騎兵の服を着け、一人は歩兵にて眞白なる服を着けたり。されど此會食の正客ともいふべきは、別に一人の「フザアル」士官ありて、彼は今夕こゝを立出て、フロオレンス、ロオムを過ぎ、ナポリの美しき灣頭に行かんとする伯爵公子なり。伯は聯隊中にて最美にして最も人に喜ばるゝ人なり。馬に乘ることも工にて、友に交ることも切なり。殊にいつも面白げに見え、輿に乘じては無數の諧謔を出すゆゑ、聯隊中にて極めて愛せられたり。

「フザアル」の一人はいふ。余にして運惡からんには、汝が地位ほど嫉ましきはなからむ。二月の休暇を前に見て、戸前には行李を載たる車あり、懐中には直打ある爲換あり。今やこの愉快なる會食

を畢て、彼車に乘遷り、腹をこなしつゝ、景色をながめつゝ、この春の夜に馬を驅んとす。是をしも羨まずば、又何事をか羨まむ。

伯は聞きてその手中の「シャンパン」の杯を高く差し上げしに、最後の夕陽の光は杯の縁を金色に染めつ。勿論の事なり。されど此行は已に久しき頃より知られたることにて、汝等とても心掛けだにあらば共に來べかりしならずや。

さなり〳〵。されど愛といふものゝ光なくて生きんはかひなからん。と一人は大息しつゝ云ふ。

第三の「フザアル」は云ふ。その愛の光ぞ汝が爲換を燒盡したる。あなあはれ。

かくいはれたる友は答ふ。何、余等が爲換とこそいふべきなれ。いかにといふに汝よ、汝もまた我に劣らずからきめにあひたるを。とは云へ又彼エリエッタ程愛らしく、小さく、浮きたるをとめはあらじ。その擧止はいかにも嫋なり。その藝道はいかにも勝れたり。嗚呼、彼が劇場にて第一位に居らぬは、唯その温和にて人に遜れるゆゑのみ。其少女が余を愛せしことの深さよ。余等が共に旅だゝむと告げし時、彼の舞臺に上ぼりしさまを猶ほ記したりや。脂粉を粧はず、色は蒼ざめて、悲愁といふもの擬人法にて出さばかくやと思ふばかりなりき。さればこそ久しく嫌はれたりし老大佐の君さへ余に云ひつれ。君は猶このさまを見て旅だたんといふかと。

龍騎兵の士官は笑みつゝ。汝は扨旅立むとは言ざりき。と云ひて靑き煙草の烟を眞直に上の方へ吹上げたり。汝は絶えずかの女神の卓前に贄を參らせて。

面白き旅をもえなさぬやうになりぬる。と伯は語を繼ぎぬ。これにて會話は暫しとぎれて、咖啡盞に匙の觸るゝ音、長靴の拍車のチリ〳〵と鳴る音などのみ聞ゆ。一群は枯れし咽を潤ほし、疲れ

し足をや置き更ふるらむ。

また時の餘りに安ければ、誰かこゝに住みわびざらむ。と歩兵士官は緒を開きつ。いつまでも同じ平時の生活、衞戍の天地、生兵の敎練にも倦たり。哨兵の交代にもあきたり。こゝに居りて精神の自滅を防がんとすれば、その勢何事をかなさざらむ。余は舞姫を愛せず。また愛せんとても金なきを奈何せむ。余が思を運ぶ美人は學問なり。

汝は參謀本部へこそ。と龍騎兵は云ひて、己れが、片足を前なる椅子の上に載せたり。結構なるかな。其時は余に等しく馬にや乘らむ。かく云ひて大息し、其時は戰ありて興ある境地に立ちても、自主の力をや表はすらむ。豈又挨にまみれて縱列の間を行かむや。

さなり、馬に乘らむ、馬に乘らむ。と輕騎兵の士官は今まで烟草のみ喫みたりしが遽にいふ。願はくは今ひと度あはん。遽しき戰に。血と汗と挨りとの隙より、我兵の前に立ちて、敵の騎兵の眞中に躍入り「レオポルヂ」章を、若し仕合せよからんには「テレシヤ」十字章をも博せん。願はくは今ひと度あはむ。

その望のかなはんは發束なし。と舞姫崇拜の士官は答ふ。その戰だにあらましかば、我地位も改らむを、我係累も斷つべからむを。馬の脊に跨りて、吹角一聲、余も獨立の身となるべし。

その時ユリエッタのなげきは。と伯は打笑ひぬ。彼はその時より脂粉を粧ふことを止めて、劇場との條約それがために斷えやせむ。

兎も角もあれ、戰の起らむは我願なり。と大息しつゝ一人は應へぬ。

そはあだなる願あるべし。と歩兵士官はいふ。政治の天は淸し。雲とては一堆もなし。汝がゆくて

のナポリの空のやうに。

それは随分面白からむ。と輕騎兵士官は答ふ。それあらば猶ほ望なきにあらず。いかにといふにナポリの地平線には、いつも勢ひよく恐ろしき一村の雲あり。エスウフ山の吐く雲あり。かしこよりはいつ事の起らむも知られず。

いかにもかく云へば我譬喩にも至らぬ處あり。と歩兵の士官は笑みつゝいふ。

他の「フザアル」士官いふ。余がためにエスウフに意を致せ。レシナの涙(酒)を持て行くとな忘れそ。「エレミイト」のは餘りにあしければ。

嗚呼、戰、戰と龍騎兵士官は叫きぬ。劇しき戰もがな。われに一國あらば、戰に代へましを。

その戰は忽然と起らむも計られずと伯はいふ。一朝大事起りて余を旅路より呼戻さんには、いかに嬉しからまし。兎角いふ間に時遷りぬ。ゆくての路は遠し。ボロニヤに着く時刻の餘りに遲からば心算に違む。何れの途より往かむか。と歩兵士官は問ふ。

いふ迄もなし。ロヂとピヤセンザとを經てこそ。と伯は答へつゝ靜に立ち、机の傍に置きし軍帽と劍とを取ぬ。

龍騎兵士官もおのれが劍を佩きていふ。さらば別れん時となりぬと。これを見て人々皆な立つ。椅子のいざる音、劍の鞘の床に觸るゝ音聞えて、六人は食堂を離れ、客舍の庭に降りて、伯の乘るべき車の留まりたる傍に來ぬ。伯が僕の「フザアル」は伯の外套を臂に掛けたり。馬丁は韁をなほし、主の乘るを待てり。

伯は車に上りぬ。離別は言葉を重ねゝど心よりと見ゆ。さらば、アルフオンス。恙なくこそ。また相

見むまで。多謝。事あらば早く報ぜよ。忽になせそ。余がために語をユリエッタに致せ、ロメオ。又汝は試驗に及第せよかし。わが見かへらん折には汝が帽の上には綠の羽の挾まれたらむをこそ祈れ。「アワンチイ」。「チヤウ」。さらば。

馬丁は伊太利流に左の足をあぶみにかけて待ちたりしが、今まや膝もて馬のひはらに一あてあて、一鞭加へつゝ、身を躍らせて脊に上るよと見えしが、馬は狂奔して客舍の門を出で去りぬ。人に誇らん馬丁の心見えて馬に「ガロシプ」せさせ、ポルタ、ロマアナの大道を左へ折れ呆れ顏に見送る路人を快げに跡に殘したるさまは、門出に車の軸を挫きて、旅のさはりにならんをも厭はぬとおぼし。されど僥倖にも事なくなし果てつ。五人は門に立ちて手まねきして送りしが、須臾して別れぬ。一人は寺の辻へ。一人はコルソの方へ。彼は家路へ、此は「スカラ」へ。

伯は既にポルタ、ロマアナを背にして、心地好げに車の隅に依りたり。向ひに坐を占めし僕は外套を主の膝のあたりに置き、ほくちを烟管の皿に點じつ。此匈牙利烟草の味はいかにぞや。此滑涼なる空氣の快よさはいかにぞや。中なる客はロオマを思ひナポリを思ひ、自ら天地間第一の多福人なりと思ふらん。

車は美しく廣き田舍路に出でぬ。昨日の雨に路程善く濕りたれば、馬の蹄も車の輪もちりを起さず。ロヂにて馬丁の代りしとき、先なるもの丶得し酒手の多かりければ、後あるものも望ありとや思ひけん、心地好き迄馬を驅りぬ。鼠尾の煙草をくゆらせて鞭を鳴らす馬丁は、僕と語らんとすれど、僕は匈牙利人にて、伊太利語とては食を求め又た酒手を與へんに馬を驅れといふことの外を知ねば、馬丁はこの命に從ふのみなりき。馬車には道すがら逢ねど、驢馬に牽せたるミラノ歸りの空車を追

越しゝことと幾度ぞや。空車の主等は今日の獨利の計算をするにや、頑然として空籃の上に坐したるが、駈け通る馬車を見んと、頭を擡ぐるだに物憂げなり。驢馬は勇ましき友の來たるを見て道を讓りさて事問ひたげに首を振ち向くるを、馬車の馭丁はうるさしと鞭を擧げて打たむとす。驚きて飛び退く驢馬。鈴聲戞然。搖らるゝ車に驚く主は睡たげに罵るを振りかへり見て馬丁は笑ひぬ。

「アワンチイ」、「アワンチイ」と僕の叫ぶに連れて車は前へ〳〵と進み行く。左右の並木は飛ぶ如く、前に見ゆる離れ家は忽ち側に來り、又忽ち後に殘れり。米田の邊に來れば、秘密らしき戰ぎ聞ゆ。しなやかなる幹につける鋭き葉は夕風に吹かれて相摩軋し、えもいはれぬ囁きすなり。その間には幾千の昆蟲稻の若葉にとまり、又は濕りたる土の上を飛びかひて鳴けり。

車のロヂを過ぐる頃、涼しく霽けき夕は空より地上に降りぬ。夕景色は家をも野をも掩ひぬ。嚴じく見張し日の目の眠りたるを待ち得て、ゆふべといふ戀人は、聲もなく土地の胸によりて、甘く豐なる親嘮するを、愛の火の燃え立つ土地は善く忍びて受く。この二八の戀中は今日ぞ美しく香ばしき初契を結べる。數々の田舍の寺より、また寺の塔より、「アヱ、マリヤ」の鐘の聲す。草葉に置ける夜の露は、幾千の寶石かと見まがふばかりに輝ぎて、大空に滿ちたる星の顫ひながら透き通りたる光を反射す。この時野の花と新に芟りし草とは香を放ちて、滿天地の氣象は一種の暢美ある感情を起したり。嗚呼、この感情を知ること尤深きものは誰ぞ。道の傍の木立よりうれしく優しき聲に祝賀の歌を歌ふ無數の鶯をおきて誰かある。

この歌を聞かむと願ふものは、暖き春の夜にロムバルダイの豐かなる野邊に來よ。野は細流に縱橫に截られ、街は水に夾まれ、この上を掩ひて戰ぐ木の枝はかのめでたき歌者の最も愛づる住居なり。

伯は車の隅に身を倚せかけたり。その物に感じ易くすなほなる心は、これを見、これを聞きて、この美妙を受用せり、今宵の如き鶯のもろごゑをば、かれも聞きしことなかりき。況やまた乗れる車は眞直に平なる田舎路を滞りなく走り行くをや。ロチの馬丁は兩頭の白馬を車の前に繋ぎつゝいふ。次の驛はカサル、プステルレンゴと云ひて、馬の數少ければ、客人を待たせやせん。おのれはその埋合せにも一骨折らむと。これを聞きし伯は、荒涼たる村驛に夜深けて馬を待たんは面白からず思へども、かくいふも馬丁の常語なればと自ら慰さめて、唯だ汝は汝の職分を盡せよとのみいひぬ。この職分をば現にも善く盡しぬ。さかてを吝まぬ伯なれば、遲れ車には逢ひしことなかりしが、又かくまで早きにも逢はざりき。馬丁は鞍に上るよと見る間に、一聲哮る「フルラア」と共に鞭を揚て、馬に「ガロップ」を踏ませつ。かれが白馬の脊にあるさまは、昔物語の惡靈にも似たるかな。着たる黒き外套は風に飜ひて、長き髮の毛は後ざまになびきたり。車の速力餘りに大なれば、輪はますぐなる道に委它たる蛇線を作りぬ。乍ち右へと乍ち左へと、曲がる車に驚きて、伯が僕は側なる欄を握りぬ。家も木も橋の欄干も道の印の石も、あわてふためきて走り去る如くなり。一時間ならぬに定めの路をば過ぎつ。見ゆるはカサル、プステルレンゴ驛の初めの家の一燈あり。

驛舍は村のかなた、岡のふもとにて、桑の梢と葡萄のかづらとに掩はれ、人家の後面にひたとそひて立てり。驛の役所は廐と共にすこし離れたり。ロチの御者は力を極て車の來るを知らせむと、この靜けき境地にて鞭を鳴らし、頻に「ハルロオ」を呼びたりしかど、車のつきて廐の前に留まりてより時へぬるに、中には寂として聲なく、人のありとも思はれぬ程なり。御者は鞭を揮ひ、僕は劔鞘を把りて廐の戸を劇しく叩くこと幾分時なりけん、漸くにして屋根裏の窓より火を照すが見えぬ。

暫らくして窓あきて、髮いたく亂れし男の首、戸の隙間より出づ。かれは馬車の至りしを確と見とめたりと覺しく、ゆる〳〵と梯を下りて廐の戸を開きつ。伯が早く新しき馬を得まほしといふを聞きて、間のわる氣に手を擦りつ。

神も照覽あれ、奴は止むことを得ずして君を暫らく待たせまつらむ。前の車をば三時前に出しやりぬ。馬の歸りこんまでに猶三十分はあるべし。

外に馬はなきや。と伯は不興氣に問ふ。御丁はさかしげに笑ひて、手もて我言の當れるを見玉へといふやうなる仕方す。

規則に依れば豫備の馬も四頭以上なくてはかなはず。そはいづこにあるか。

豫備馬はあれど、一時前に英人の乘りたる車を引きて出でぬ。

こは堪へがたきまで不自由なることかな。さかては取らせむに。いかに、眞に馬はなきか。

思ひもより侍らず。惡意ありてしかいふとな思ひ玉ひそ。この驛舍小さきに車の來ることとさへ稀なれば、驛ちの主人も。

驛ちの主人はいづこに居るか。われ逢はむに。

ロヂに徃きぬ。家にはおのれのみ。とためらひ乍ら答ふ。

今は車の歸を待つより外にすべなし。驛舍村の中央にしもあらば、一盞の咖啡を飲みて、新聞をも讀みつべきに、この眞黑に夜立てる人げなき家をいかにせむ。實に無聊の極なり。ロヂの御者はおのが馬を廐に引入れて、さて僕と廐の番人と共に長椅の上に坐したり。

この夏夜も待つ人の無聊を慰むるに足らず。驛舍と人家との圍りに立てる林よりは、路すがらより

もうるはしき聲にて鶯啼けるもあへなし。暗き天よりやさしく人の心を押鎮めんと照る星もあへなし。天地の穏かに靜けきに短き夏の命をたのむが如く、さまざまの蟲鳴けるもあへなし。伯が心は倦みて、あはれ、人もがな、常ならば顔みせぬ程のはかなき人もがなと思へり。かれは旣に幾たびとなくめぐりつ。今は家に近きあたりの岡に登りて、ポオ河の流は見えずや、見えなばそれにても少しは心を慰めむものをと思へり。

見おろせば星月夜に照されたる廣き野あり。おちこちを截りたる小溝と小さき湖とは、葡萄と桑とを栽ゑだる畑の黒きなかより光りて見ゆ。暫しは水の流を聞くかと思ひ、又遠き處より歸り來し車の角聲を聞くかと思ひしが、夜風の溝の蘆の葉を吹きてあやしき囁ぎするを錯り聞きしなりけり。腹立たしく思ひつゝ降りむとする時、ふと見ればこの人家の裏側に出でたり。小さき窻よりさす孤燈の光に、家のいしづゑに纒はるえびかづらの葉は照らされて畵圖を見る心地す。

共に語るべき人やあると、あきたる窻に歩み寄て内を覗きみしが、驚きてしばし歩を留めき。見入りたる一間の内には、脊高きこしかけありて、若き娘坐したり。貌はよくも見えねど美しと見ゆ。膝の上に幼兒を寢せて、さま〳〵の言葉もて賺し慰め、又小歌など歌ひきかせて睡らせんとするなるべし。伯は近づきてよく見ばやと思ひしが、手足に觸るゝ木の枝のさや〳〵と鳴らば、内なる人を驚かしやせんとあやぶみて、先づその頃行はるゝ伊太利の「アリイ」の一節を努めてやさしく靜けき聲して歌ひはじめぬ。

少女は忽ちおのれが歌を止めて、手もて傍らなる「ランプ」の光を支へ、黒きとのもを覗ひたり、この木を分け草を踏みて近よる男を見んとて。少女が足のあたりには大なる犬伏したりとおぼしく、

此時うなる聲、一聲二聲聞え、又たこれに繼ぎて短く中ばにて止めたるやうに吠ゆる聲す。少女は犬をおし鎭むる如く、おのれは恐れげもなく窻より顏を出して誰ぞと問ふ。

番外の郵便車にて今こゝに來て、代りの馬を待つ外國人なり。と伯は答へつゝ猶ほ進みよりて、久しくこゝにきたんことを物うきことに思ひしが、暫し君と語ることを許し玉はゞ、まことにこよなき幸なるべし。

伯は勇悍にて精細なる軍人の本性をこゝにても忘れず、かくいひつゝ一足づゝ進み、最後の一語をいひし時には「ランプ」にて照らされたる窻の下に忽ち顯はれ出でぬ。少女の恐ろしと思ふ心を打破らんには、これにまさる策はなかりしなり。この若人の美しくすなほに見ゆる顏に、金色の八の字の髭、躰よく生えしを見て、伊太利をとめはまだ軍服を見ぬまに、君は澳太利の士官にやと問ひぬ。

この靜けき驛舍は、今いかに面白き處となりし。又初め怒を帶びて見つめしこの一軒の草の屋は今奈何ぞや。宜なり、近く見らるゝ室の中のさまは譬むやうなく面白かりき。かく思ふは思ひ掛けず見ればにや。少女の美しく見ゆるは、眞黑なる夜を緣として見る盡なればにや。かく美しき少女を見るは今よひが始なりと士官は心のうちに思ひぬ。

高き椅子に倚りたるをとめが衣はもの足らぬやうにて、嫋なる身をつゝみしは赤き上衣なりき。少女が足は毛の縺れたる大なる黑狗の脊に埋もれたり。狗はをとめが顏を見上げて、かしこの旅人を襲ひて跳上りてその咽を嚙むべきかと問ふごとし。をとめもその氣色を見て取りぬと見えて、はやく片足にて擡げたる狗の頭を押し下げたるに、狗は目を眠り尾を掉ぬ。

このさまを悉く見んことは、伯のえなさぬ所なりき。況や彼の目はをとめの上半身に注ぎて、美しき頭、長き頸、黒き辮髪の解けてかゝりたる間よりかゞやき出る白き肩を見たり。少女が膝の上なりし小兒は眠らんともせざりしこと故、今人の近づきたるを見てまた全く醒め、大きく見張りたる目を光らせ、士官の金もて飾りたる帽と紐つきたる「アチラ」といふ軍服とを見つめたり。

さらば君もまたこゝにて馬を持たんとやし玉ふ。こゝにてはかゝる目に逢ふ人多し。父の持たる馬の數はいと少なければ。されど父もこの利益なき驛路にて馬の數をまさんとは思はず。この驛路の利をばロヂとピヤセンザとにて占むるをいかにせん。母のいましゝ時には、酒うる店を開きたりしが今はなし。父はいふ、この膝の上なるチエッコオが人となるまでは何事をも擴めんとは思はず。若し婿がなさばともかくも。

婿とは何人にか。と士官問ひぬ。

少女は面白げに打笑ひて。婿には、このテレシナの婿には誰かなるべき。

テレシナとは誰が名ぞ。

わが名にこそ。といひて笑みながら、伯が燃ゆるやうなる目にて見つめたるを見て下に向きぬ。さなり。この家を興し、驛舍をも擴めんはこの兒ならずば。といひさして、指を黒き毛の間にさし入れつ。この兒ならずば婿ならむ。かくいひて少女は媚を呈して頭を高くもたげたり。

その婿は早や定まりたるにや。と伯笑みつゝ問ふ。誰が婿。わが。少女は打笑ひぬ。思ひもよらぬ事かな。婿がねとならむ人は、わが愛づる人ならではかなはず。わがこの兒をめづるばかりにめづる人ならでは。されど眞の情にて人を愛でしことはまだあらず。

さらばフレシナ、何れの男も眞情もてめでんまでには心に留まらざりきといふか。と伯は問ふ。否と答へつゝ少女は臂を窗にかけたり。このをりに少女の身垣になり、兒のためには帽と軍服の紐と見えずなりしかば、彼は聲張り上げて泣きいだしぬ。これをなだめむとて、伯は身を窗の内にさし入れたれば、兒は帽に手を觸るゝことを得て泣き止みぬ。少女は支へたる臂をひかんともせず、頭も白き肩も胸のあたりも前に傾きたり。

君が父はプステルレンゴの民をや婿にすべき、又たロヂのあきうどをや。と伯問へり。

少女は俄に色を正して。否々、ピヤセンザの驛長の子や婿となるべき。かれは故もなく父のもとに來しこと幾度ぞ。父には心にかなひし如し。かくいひしが又た聲を低うして、されどわれには少しもよしとおもはれず。

その人は若からぬか、美しからぬか。と伯は笑みつゝ問ふ。

少女はあたりを見廻し。羞ぢたるおもゝちして、若くも美くもあらず。性よこしまにて詐多し。彼を愛でんことは思ひもよらず。若しかれを夫とせんをりには、我若き命は棄てたるものなり。人のいふを聞くに愛なくて結びし緣ほどかなしきものはなしといへば。

さらばめで思ひて夫婦とならぬぞ、中々に善かるべき。と伯いふ。少女は面をあげてその顔を見やり。善からむとは思はねど面白かるべし。

これにて暫しこの珍らしき會話は絕えたり。この間愈よ強く愈ようれしげに鳴くは鶯のみ。士官は窗の高さを心に計りて、音をせで中に入ることのならずやと思ふに似たり。少女はその氣色をや推しけん、指もて廐のかたをさし。物音をなし玉ひそ。老たるピエトロの耳聰きに。かく開きたる窗

にて久しく君と語らむさへ影護けれど。かくいひかけて光ある目を大にあきて士官の顔を見たり。

されど何のゆゑとも知らず、君と語ることのまたなく樂しきは。

ピヤセンザの驛長の子と語るより樂しとにや。

さなり、似もやらず。

さらば、かの人よりもわれと相愛してわが妻とならんことを願ひ玉ふか。と伯はいひつゝ窻より白く美しき腕を取りぬ。

終りにのたまひしことは君が士官にておはせば所詮かなはず、又た始にのたまひしことも明朝千里の外に去り玉はん君なればかひなし。

さらばこゝに留りたらば。

いかでさることあらむ。君は戯にこそのたまふならめ。されど眞にのたまふとも、父の歸らばロチ、ピヤセンザなどの宿を勸めつべければ、兎にもかくにもこゝには留まり玉ふことかなはじ。

かくいひて少女は腕を引くに、温かき手尖まで引きたるとき、伯はこれを離たんとせず。少女もまた強て引き去らんとはせざりき。

少女の心はあやしうなりぬ。嗚呼、かゝることは血の温かき少年の間にはためし少からず。一時前までは一人の胸の世にありて波打てるを、一人は知らでありしに、ふと一目見て、また一言二言あひ交へて、互ひにすてがたく思ふはあやしき限ならずや。

伯は今年十八あり。かれの血は熱し。取りし少女が手尖の顫ひたるを幾度か唇にあてたり。是をばこの閑けく穏なる夜、花の香、鶯のしばなく聲も少許は媒せしならむ。嗚呼この鶯といふしれもの。

我心のいかに樂しきを思ひ玉へ。いかなる神かわれをこゝにはしばし留めし。われも飛立つばかりうれし。されどいかなる故かしらず。笑はんする心はなく、却りて泣かまくほしきを奈何せん。

少女はかくいひて頭を腕の上に垂れたるが、頷は伯が手の上に來たり。伯は僂みて唇を頂のあたりにあてつ。此時この小天地には三人の喜みち〳〵たりき。二人はいふまでもあらず、少女が膝の上なるベムビノは士官の帽につきたる黒と黄とに染分けたる紐に手をかけとらんとすると久しかりしが、この時に引きちぎり得て、嬉しげに高く笑ひたり。戀する二人はこれに心をとめず。伯は伏したる少女の頭を輕く推して横に向かせ、熱き唇を額にあてつ。この時しづけき夜を破りて面白げに吹く喇叭の聲聞ゆ。

あたりの寂寥あるときかゝる音の遠に聞ゆるは、人に不思議なる感を起さしむるものなり。

少女は飛上りて耳を欹てしが、わが父と一聲叫び、又語を繼ぎて、さらずば郵便ならむ。さらば、わが戀しき君。君のこゝにいますを人の見んはため惡し。かくいひて抱きし子を犬の側におろし、身を伸て胸より上を窻の外に出し、手もて士官の頸を抱きて。許せ君。マドンナ（聖母）も許し玉へ。また見ん君にしもあらず。また見ん事をも願はぬ君なり。又見んにはわれ奈にか耻づべき。されどまた見ぬ君なればいはむ。わが君を愛づる心のいとも〳〵深きを。されば君に接吻すとて誰かは咎めむ。かくこそ。いま一たび。いま一つ。マドンナ守れ君を。いざ疾くゆきたまへ。

士官は恍惚の間に三たび少女が燃ゆる唇をあてしを覺えたり。少女はそと士官の手をすりぬけて、手早く窻の戸をさし、燈火を吹き滅しつ。

喇叭の聲は次第に近くなり、蹄の響も聞ゆ。既にして廐の前にとまりし馬の鼻を鳴らすが聞ゆ。其時家の隅より黒き人影見ゆ。これ僕の主を尋ね來しなり。伯は沈思しつゝ僕に伴ひて歩み去りぬ。かれは手を額に加へて夢にはあらずやと思へど、かの熱き唇は今も燃ゆる如き心地す。

彼は久しき旅路にて此瞬間の奇遇を忘れんとする時もありしが、その度ごとにかの唇を思ひ出づれば胸の底までも温かになりて、かの春の夜を思ひ出で、かの驛舍を思ひいでゝ、身は又た鎖したる窗の内を見入りて茫然たる如くぞなりぬる。

廐にては今歸りし馬を拭ひてまぐさ飼ひ、又た車の前につなぎたり。僕は主に問ふ。帽をば車の中にや置き玉ひし、又途にや落し玉ひし。

伯は打笑みて、車にて眠りし時にや落ちけん、新しきを取出せといひぬ。

伯はビヤセンザに留まりて、此夜の奇遇のなりゆきを見んかと思ひしが、別時に少女が色を正して、又た見なばいかに耻かしからむといひしことを思出でゝは、これもあしと自ら諦めて旅立ちぬ。されど途中よりロヂ、又はミラノへ歸りて、猶ほも様子を探らむかと思ひしこともありしが、彼少女は愛すべく又た敬すべきものなれば、かくては彼の身を傷けやせんと、自ら問ひ自ら答へて、おのれはさきの夜得し三たびの接吻のみにて、強て滿足の念をなし、望蜀の心を抑へたり。

ロヂの馭丁は己れに代はるべき男に向ひて、こゝにて失ひし時を取戻せよと勸めぬ。伯は又た車に飛乗り、僕は又た向ひの座を占め、馬はあらん限りの力を出して暗路を進みき。馭丁はこの時一聲喇叭を吹きたるが、此聲、此曲、曩に窗の下にて聞しものにことならず。少女は今いかに。臥床にありてこれを聞き、涙に枕をや濡らすらむ。

嗚呼、思へば少女はこよひのみかは、明日もかの窓に座してこの聲を聞き、暮はしげに窓に對したる岡を望めど、これよりおり來る人はあらじ。少女は同じ境に留まりて、同じ處を望むならん。膝の上なる小兒は猶ほ幾週かわが帽を持ちて遊ぶらむ。父は又た少女の嫌へるピヤセンザの驛長の子を家に伴ふならむ。少女の心の苦は果して其に此の如くなりき。夫れよりはなか〳〵に安かりしは伯が身なり。次の日のしのゝめにはボロニヤに着き、これよりフロレンス、羅馬、ナポリを見て巴里に遊びぬ。されどこの幾都會の快樂の限なきをりも、比なき好景色に對しても、又た華奢を極めたる宴に臨みても、伯が心中に淋しき驛とテレシナが姿とは留まりたりき。

後の夜（千八百四十八年）

物騷がしき蒸氣船、數多き商船はなく、群魚の波に戲れて、忽ちふかき砂原を横ぎり、忽ち岩ほの間を過ぎ、忽ち又た灌木のこゝかしこに散ぜる緣いろこき沃野を貫き、ロムベルダイの平地を流るゝ、清く靜けきアッダの河は、今年の八月一日に、驚くべく又た樂しむべき奇劇の兩岸にて演ぜらるゝを見き。

このフオルミガラに近き流れの畔に立ちて、今や勝に乘じたるラデツキイ將軍は、急に一條の橋を架せんとす。今や破竹の勢ある墺太利勢に、立つ足もなく追ひたてられて逃げゆく敵の縱列は、この橋を渡るべき第一、第二の兩軍團に逢て、能く隻輪を存じ得べきか。

ピエモントの將官等は、僅に備を立てたるのみ。僅に幾中隊かの卒を放て、勝誇つたる敵兵に向はしめしのみ。この伊太利勢は敵の色を望みしのみにて、まだ戰はぬに亂れき。本は戰に慣れて强悍の名を負ひたる隊も、白き線を見ては背を向け、鷲の章を見ては卻き奔りて、踵に追ひづかんとす

る敵の刃を遁れんとのみぞあせりける。騎兵は張りし陣を崩し、砲兵は引く車の音轟々と其場を免れ、歩兵の縱列は瓦の如くに壞けぬ。兵卒の中には横ざまに野原に入りて避けんとしておのが士官に追付かれ、又た敵に向はんよりは馬の跡にこそかゝらめと、地にひれ伏して喞つもありけり。斜に傾きたるアッダの岸は、この時いとも面白き一幅の戰圖に對したり。滿野の兵はさま〴〵の戎種に屬し、折々發雲の間を洩れて熱き光線を射落せる日は、無數の器械、銃身、軍服の金銀に當りて碎け散りたり。樂しげにかなたへ寄せ、又こなたへ返す兵士の幾群、砲兵はその砲車の側に立ち、獵騎兵、「フザアル」、龍騎兵は馬の轡を取り、歩兵の隊々はあちこちの砂の上に憩ひて、中には背囊を卸し、銃を組合せたるも見ゆ。

この間を通りて、架橋の材料を川の方へと運ぶものあり。この面白げなる群の中を辛くも拔けて、軍令を岸邊に傳へんとするは、色々の軍服を着たる走价なり。岸にて劇業の最中なるは架橋隊なり。積來りし材料を卸しては水に浮かせ、鉤を打ちては繋ぎあはす。その早きこと譬へんにものなし。見る〳〵橋は長を增して中流にむかひゆく。さて一材を繋ぎをはる毎に、士卒は「フルラア」の聲を張上げて之を祝し、後の方までも此聲を傳へて相應ず。

この忙はしさは何故、河なる架橋隊がかく非常なる力を出すは何故と問はむと思はゞ、憩ひたる士卒の見やる方を見よかし。彼等は多くはアッダ河中の緊劇なる事業をば見で、岸邊の小高き岡の上をのみ見たり。あまたの聯隊の士官は皆かしこにぞある。令を岸邊に傳ふる走价はかしこよりぞ來れる。下ある架橋隊の使も、後より進む隊の使も皆かしこへぞゆく。岡の上ある士官は大抵馬に跨りて一大半圈を成したり。そが中心と見ゆる處に一人の眇然たる小丈夫立てり。灰色の將官服を着

て、右手を腰にあて、左手に劍と帽とを取れり。此人は馬より下りて、今親しく誠ある目なざしゝて、河の岸と橋の上との群を見下したり。さて或るときは一人の士官に向ひて何やらむ物がたり、或るときは又下なる士卒等を手招きす。この一揮には下なる士卒、必ず高く「フルラア」と呼び、「エ井ワア」と呼び、「エリヤツ」と呼びて答へたり。この白頭の小丈夫は誰れぞ。これぞ士卒に父と呼るゝラデツキイ將軍なりける。今やピエモントの兵を一歩々々と追ひまくりて、このロムバルダイの原まで來ぬ。その力は計られず。其罰はいとおそろし。ミラノはかれの近づくを聞きて、震ひおそるゝのみなり。この府はあるいまはしき夜に、かれを弱く見けるが中々に影護くて。

將軍が傍なる士官の群は、思ひ〳〵の形をなせり。遠眼鏡もて河のあなたを見るあり。おのれが馬に依りかゝりて過ぎにし日の事など語りあひ、又ミラノの府がいかにおのれらを向へむかと噂す。

午後四時頃に橋は出來ぬ。今までより高き「フルラア」の聲聞ゆ。將軍は馬に跨りたり。全軍は立ちあがりたり。今まで散りみだれたりし士卒は、こゝに集り、かしこに群をなし、縱列となり、中隊となり、大隊となりぬ。走价は東西南北に馳せちがひて、先づ令を受けし隊は、早や橋の方へと歩みよる。晴がましき一瞬時よ。もろ〳〵の聯隊の樂手は、國歌を吹きて、今まで混沌たるありさまを見せし河岸には、隊伍森然たる軍を見る。歩、騎、砲、工、序を逐ひてぞ進める。

夢に見ゆるに似たりけり。この五色の打ちまじりたる群は銕、「ブロンセ」、黄金、白銀、この色々の金章の列を正して、長蛇の形をなし、漸く舒びて橋の上に横たはり、既にして末遂に彼岸の野邊に繰り出しぬ。打ち物から〳〵と鳴り、軍歌の聲はこれに雜りて遠方まで聞ゆ。既にしてこなたの岸なる色々は、やう〳〵淋しくなりて、橋を渡れるは數限りなき車なり。次いで將軍はその本部と

ともにわたる。こなたの岸に殘りしは殿をなす一二の隊伍のみ。騎兵二三中隊に砲兵すこしまじりたり。

今軍隊の立ちて行く川岸に一軒の小舍あり。主人は船頭なるが、酒賣る業をも兼ねたり。アッダ川水のをりをり漲り上るを避けんとてにや、家を階段の上に立てたり。主人の住む部屋の外には、唯川に向ひて階段に臨める酒席あるのみ。その小さく輕きさま想ふべし。この階段の上の方は、廊の如く出張りたり。その細大さまざまの材木を組みあはせたるさまは、例の伊太利振りにて、愈輕率に、愈條理なく見えて却りて愈雅致ありと思はる。緊きえび葛の葉、この廊を掩ひて、材木にまとひつき、木の端の處には、うねりを見せたる葛の蔓垂れて、風にゆられ、かなたこなたへ靡けり。この美しき自然の屋根の下にて、粗末なる木卓を前にしたる二人の若き士官あり。質樸に作りし藁椅子の上に座を占めて、代る代る藁にて卷きし「フオリエッタ」(瓶)を取り杯に注ぎたり。二人の馬は僕等に守らせて廊の下に在り。こゝらには猶ほ渡り殘りたる士卒の群多し。こゝに階段の端に腰かけて幾匹かの馬の轡を取りたる「フザアル」卒あれば、かしこに龍騎卒の鞍のしめ緒をかれこれと結べるあり。又た輕騎兵の卒のおのが馬の脊に兩臂付きて、片手に飲みさしたる酒の杯を取り、友に與へんとするもあり。傍には步兵と騎兵との士官、往きつ返りつ今日猶ほ進み行くべきか、こゝに露宿すべきかとかたらふあり。銃を膝に載せて地上に坐せる步卒あり。その間に重もげなる熊の皮の帽を傍に置きて憩へるは榴彈卒なり。又た地に匍匐して頤を支へ、銃を傍に置けるは獵兵の卒なり。空樽の上に踞して緩かに進擊の譜をさらふ樂手は、前度の戰を思ふにや。又この家より遠からぬ處に榴彈卒の取卷きて守れるは、俘虜となりしピエモント人なり。此一幅の畫圖は猶牛に引せ

たる一群の車にて補足せらる。こは酒樽を載せて大隊の後逡につゞくなり。騎兵の馬は身震ひして嘶き、川の彼方よりはきれ〴〵になりて輕き太鼓の音、樂隊のすさび聞ゆ。又時としては後の方より喇叭の聲、兵卒の歌ふ聲、高笑する聲聞えて、牛の群よりは高く吠ゆる聲す。

廊に坐せし二人の士官は、「フザアル」隊の大尉と輕騎兵の中尉となり。中尉は今常に劍に添へて持てる卷烟草入れの革囊をはづさんとす。二人の衣は沙にまみれたり。二人は重き劍、「チャコ」帽、「カルッシュ」を身につけたり。鞶と革袋とは傍なる机の上に在り。

先こゝまでは漕ぎ付けたり。我家の鴨居の下まではや來たり。老爺がこよひ勢よくこの扉を叩かんさまこそ思ひ遣らるれ。と河の彼方を見やりつゝ「フザアル」士官いふ。

輕騎兵士官は答ふ。カル、、アルベルトはミラノまで引くと聞く。かしこにて一合せ充分にありたきことならずや。かく云ひつゝ彼は烟草を吸付けたり。

一合せ。いかでかさる快きことあらむ。砲兵の列を少し見せ、一ひらの檄文を飛ばせ、民に少し狂ひ廻らせ、それにて事は休みなん。われ思ふに、二三日を出でずして、この一行は寺の前の廣小路を行くこととならむ。彼等はいかなる面持して「神よ、大君を守れかし」といふ歌を唱るか。わが樂はこれを見ん事のみ。と「フザアル」士官はいふ。

それは一々面白し。唯だ殘念なるは彼等が我ミラノの客舍を住荒らしたることなり。我美しき武器・は何處にかある。また我銀の器は。

友は打笑ひて、銀の器は代を買はんもいと易かるべし。惜しと思ふは我長椅の上に掛たりしユッエッタ孃の寫眞なり。彼等の粗暴なる、此寫眞の本人を知得て、其墺太利の士官に馴染しを憎む餘り、

酷く賣やしけん。と輕騎兵士官は輕く答ふ。彼等はかのおそろしき五日の中に落のびけん。獵隊の友人何某が色々にまじりし車の一列、泣叫ぶ娘子、行李の山を載せて行くを見きといふを聞きつれば。

この會話は階段の下より呼ぶ一聲にて斷たれぬ。二人は坐より跳上りて外の面を見れば、靑き羽さしたる低き帽を戴きたる年少き士官、兵卒の群を拔け、こなたへ向けて靜かに馬を步ませたり。善くぞ來し。參謀本部づき。と「フザアル」士官は顏の見ゆるほどになりし時叫びぬ。何處よりか來し。本營に行かむとにや。暫しこゝに登りて一憩せよ。參謀士官は馬を下り、韁を龍騎卒の下に立てるにわたし、階段を登り來ぬ。

久しく相見ざりしことよ。エロナ以來と思ふがいかに。今何事かある。と來し人面白げにいふ。

この面倒なる河を越す番のめぐり來んまで、氣根よくこゝにて待てり。と輕騎兵士官は答ふ。いかに參謀士官よ。汝は河越の令を持て來ずや。

こなたは打ち笑ひて。まづそれに似たる事なり。されど越さんは今日の事にあらず。汝等は心をさためてこゝに殘る事となるべし。汝等が酒もおしとは見えず。我慢の出來ざる事はおらじ。やくなし。と「フザアル」士官はつぶやきぬ。我等は四日このかた跡へ／＼と殘りて馬の尾をのみ見ることとなり。打込む樂をば久しく見ず。

參謀士官は打笑ひて。今かしこを進み行く奴等も、別に面白き目に逢ふにもあらず。我等は馬の尾を見れど、大砲の口をもまた見ん。唯だ距離はいと遠きのみ。

さて我等はまことに今日こゝに留まることとにや。と輕騎兵士官は問ふ。

思ふに君等はこゝに殘る事にあるべし。されど余は猶本營より一士官の令を傳へに來るを待てり。見よ、かしこの橋を渡り來る人はあらずや。と云ひつゝ參謀士官は其望遠鏡を擧げて川を見遣り。過たず、「フザアル」士官なり。必ず傳令使なるべし。そが上辯目ならずば、吾黨の伯爵士官なり。見よ、かれが條例に背かず、並足にて橋を渡らんとて轡を引くさまを。さあり、さあり、かれなり。今はこあたの岸に來ぬ。馬は岡を登らむとす。

かく待たれしはまことに伯爵士官なりき。かれは岡を登り來て、酒店の前を横ぎらんとす。「チヤウ」とかれは喜ばしく呼びぬ。階段の上なる三人を見てまた。うれしくも汝等三人を一所に見ることかあ。將軍は何處にか。傳へ畢らば又こゝに來む。一杯の酒を殘し置け。

こなたの「フザアル」士官いふ。右へ曲りて數千步騎れ。岡の上に農家あり。將軍はそこにあり。若しはやサン、パザノの方へ乘出しゝ跡ならずば。されど餘りに久くかしこにな憩ひそ。われらは猶こゝに留まるべきにや。この言葉は既に傳令使の背 より響きしが、かれはふり返りてさなりと答へ、最早馬を丘陵の間に騎入れて見えずなりぬ。

三人は机に向ひ、又一瓶の酒をもてこさせて、平生の大事、小事を語りあへり。まだ十五分ならぬに、伯は馬を跳らせて歸り、家の前にて馬より飛下り、急ぎ階段を上り來ぬ。

みな恙なかりしか。とうれしげに云ひて、兩手をさし伸べしを、人々握りて強く壓す。

我暇は短し。直に本營に歸るべき用事あれば。みな具に恙なかりしか。手疵負ひしものはなきや。

總て皆故に復したり。と「フザアル」士官は答ふ。余はクルタトチにてかすり疵を負ひしが、言ふにも足らぬことにて、直に縫ひつぶさせぬ。又汝は。汝を見ぬことの久しさよ。猶最後に相見しをり

の事を記したりや。

いかで知らざらむ。と伯は答ふ。彼ミラノの客舍の別筵を。わが羅馬、ナポリへゆかむとせし時の別筵を。奇なり。余等は又こゝにて湊まりたり。殆もその擻にて。そのかみいたく望みし戰のもなかに。

まことにさなり。と輕騎兵士官は答へつゝ、その杯を取上げたり。唯このむしろに闕げたるは二八のみ。汝が聯隊のかの男、かれは今マンツアにありとか。それと我面白き龍騎兵士官と。

參謀士官はいふ。龍騎兵士官は今ダスプルの傳令使なり。マンツアのはいかにせし。重痍にや。

脇を刺されたり。と「フザアル」大尉は答ふ。されど醫は治すべしといへり。杯を擧げてかれが健康を祝せばや。一座は高く杯を擧げて、友の痍の早く癒えむことを禱りぬ。

昔と今と。伯は新に杯に酒づきながらいふ。昔と今との間には四年を送りぬ。許多の事はかはりたり。許多の事は出來たり。昔は美しき時を我前に見き。美しく心地好き時を。この酒、この「サラミ」の腸づめも旨からずとはいはじ。されどおもひ出る昔の「チチエ」に如かず。近頃は口腹に幸なければ、そゞろにかの時戀ひし。昔戶前にわれを待ちし車、靜けき夜、その夜の景色を見つゝ、心地好く車の中に伸びて、春の野を驅りしとは事變りて、今は安からぬわが瘦馬の鞍あるのみ。夜は幾たび夢打驚かされんも預め計り知られず。汝等もこの頃の傳令の緊きことは知らじ。この令は皆夜ふけて出でぬ。はかなき傳令使苦めんとてにや、本營に向けて來る問はかはたれ時に着し、答ぶみは夜のみぞ出る。

さばいへ、本營にあるものには好きこともさはなるべし。と他の「フザアル」士官いふ。汝等が息ふ

所には必ず物あり。否、むしろ汝等は必ず物ある所に憩へり。且ついつも屋根の下に居ることを得べければ、縦令藁、枯艸の上なりとも、乾きたるまゝにぬるといふは大幸なり。

さなり。その代りには晝夜をわかぬ劇務にのみぞ逐はるゝ。今宵も歸らば必ず聞かむ、第二の遠乘と第三の遠乘とは已に定まりたりと。さて偶然わが前なる男、外の務ありてゆかずば、余は六時または八時間の夜路を騎通さではならず。されど今の瞬時の樂しさは昔にもまして覺ゆ。と杯を擧げて日のさすかたに向けぬ。嗚呼戰の神よ。このいくさ永からしめよ。

その望はあだならむ。と參謀本部づきが答ふ。芝居ははねたり。あすか、あさてか。ミラノといふ大切は花々しき幕ならむ。さてカル、、アルベルトと其つはものとの後には幕落ちなむ。早や別るゝ時となりぬ。と伯いふ。余は本營に歸らむとす。かしこの地平線より起る黒雲のそらに漲らぬ間に。

何の因果ぞ。と二人の騎兵士官は叫ぶ。こはこの夜外にあらむと思ひければなり。二人はいま湧出る雲を仰視たり。こよひは濕はん。

その濕には血やまじらむ。と參謀本部づきいふ。敵の將官バラは僅かの隊を率ゐて、ピッチェゲトネにいそぎぬ。かしこの砦の守りを固うして、あが軍の車のさはりなくかしこの細路を過ぎんを願ひてなり。されど我先鋒の足だに疾からましかば、到着かんこと易かるべし。その時は一場の血戰起らむ。

雨と血とを一つ列にいはむものかは。と騎兵大尉は不平らしくいふ。余は夜をこめて戰ふを厭ふものならねど、こゝに殘りて一夜濡れんことぞ恨なる。されど神のまに〳〵。又ラデツキイの老爺の

またく〱。「アァメン」。と此語のあとを繼ぎながら參謀本部づきの士官は、羽つきたる帽を戴きぬ。余も今は早や馬に上らむ。我耳にはピチエゲットテの方に當りて砲聲の聞ゆるやうなり。アッダの右岸を掩はむとて、ピエモント人が彼處にて砲を放つことありても、余は毫しも怪しとはいはじ。かしこにて鳴るは、かみなるべし。といひつゝ輕騎兵士官は打ち仰ぎたり。此時いまゝで晴なりし空は雷雨に先だつ鼠色の雲にて掩はれむとしたり。

さらば。儲にて。又ミラノにて相見む。「チャウ」。

伯と參謀本部づきとは馬に打乘り、早足にあゆませて橋にかゝり、馬蹄の下に鳴る假橋の上にて並足にし、右岸に着きて轡を別ちぬ。參謀本部づきの行くは第一軍團にて、「フザアル」士官の行くはラデッキイ將軍の本營を据ゑしフオルミガラありければ。この年若き「フザアル」士官はこのわたりに來しより早や四年を經ぬ。むかし羅馬、ナポリ巴里の旅路を果たしゝ後、かれは外の「フザアル」聯隊に轉任せられ、維也納に留まりて、ロムペルダイの戰の起るに遭ひ、伊太利の役に赴かむと請ひしに、性好き士官の騎馬にさへ達したるなれば、傳令使とせられしなり。フオルミガラといふ小村に往着きし頃は日暮れぬ。

街路には砲兵の緻密なる縱列往來し、その外の車さへあれば、僅に並足にて進むことを得たり。その塲に近づくに從ひて、兵卒の雜沓は甚しうなりぬ。左右の野には、步騎の兵ありて屯したり。そこには薪を運び來と見れば、かしこよりは今焚き着けんとする篝火のいと濃き烟たち上れり。村の路は雜沓その頂點に達し、そが中に酒樽を戴せたる車の幾列かを牛に引かせたるあり。又た大なる木の桶に食を盛りて士卒に頒てるも見ゆ。

將軍の住める小家は、本營の常とていと騷がし。窻々よりは色々の軍衣を着たる士官面を出したり。庭には人車、荷車立ちて、その樹には馬をつなぎたり。戶口に立てる傳令使等は、本營の若き士官の一群と共に、この勝誇りたる兵卒の歡呼するさまを望み見て、面持よろこばしげなり。

伯は此間に馬を乘入れしに、人々は歡び迎へぬ。かれは問はるゝまゝに來し路のさまを語り、又た久しく相見ぬ友の言づてなどを果たしぬ。

若き輜騎兵の士官ありて問ふ。汝が白馬も今はさこそ疲れたらめ。

伯はいふ。馬のみかは。余は今日十四時間を鞍の上にてたゝせたり。足ふみ伸ばして息むべきところやある。

部屋のみかは。美しく廣き床もあり。されど今寐むと思ふは果なき願ならむ。樓上にては「ペン」の飛ばんとする程にもの書きたるを知らずや。少佐の君は令狀を封ずるが忙がはしと見ゆ。余等は既に相約しぬ。次の傳令は汝に賴まむと。かしこの寺の側なる家に往け。汝の僕は幾匹の馬と倶にか待ちたらむ。

伯は聞きて肩を聳かして、手に渡されたる瓶より勢好く一口飲み、おのが白馬を引きて敎へられたる家に往きぬ。げに聞きしが如く、伯が殘りの馬は皆ここにぞありける。伯は英吉利產の一馬に鞍置かせ、用あらむ時のために備へ置かせ、さて本營に歸りぬ。見れば二人の友は早や馬に跨らむとせり。一人はアッダの方へ引還へし、一人はマレオに向ひて第一軍團の方へと行くなり。

殘りし一人の龍騎兵士官はいふ。今は二人になりぬ。余はダアプルに渡すべき重き一包みを引受けたり。されど彼はいづくにかある。鬼も知らざらむ。立ちて行きし隊の人に追付かむと跡より騎ると

は我が嫌ふことなり。街道を行かむとすれば、馬車、大砲の車などの間にはさまれて、進退心に任せず。横道を取らむとすれば、溝の中に落ちんおそれあり。されど奈何かせむ。見よ、かしこよりは梯を降り來る卒あり。彼はわが受取るべきの令の文をや持て來たる。さらば。明日の朝の珈琲か、さらずば午飯までは逢ふことなからむ。その飯はいづこにてか食らふべき。かく云ひつゝ龍騎兵士官は金の肩章を肩に掛け、その總を右の方へ引き下げ、栗毛に跨がりて出でぬ。馬は息ひし後とて勢好し。乘手もさすがに疲れたらず。伯と一握手。蹄に前なる敷石をしたゝかに踏ませて、火花を散らし、見るまに暗の夜を侵して去りぬ。暫しは白き軍服の後姿見えしが、はや影もなし。

伯は梯を上りて相識れる二三の士官に逢ひ、晩飯をかたばかり濟ませ、一本の卷煙草を吸ひて、太く疲れたることにしあれば、「アチラ」といふ軍服をも脱がず、劍もさしたる儘にて、一間の藁蒲團の上に横はり、直ちに深く眠りぬ。

一二時間も寐たらむかと思ふ頃、喚起されぬ。枕邊に立てるは少佐なり。少佐いふ。心なく君を起しまゐらせしは、止みがたき事のありてなり。誰も頼まむ人なし。君が既に太く疲れ玉ひしを知れど、又た夜更けて出しやることゝはなりぬ。

言もまだ畢らぬに、伯は躍り起きたり。劍と革袋とを程よく揺りなほして、令のふみを受取りたり。このふみはピッチエ、ゲトチに持ち行きて、早や澳太利人のかしこに入りたらむには、何某將軍に渡せとなり。

少佐は自ら烹させし珈琲の半盞を分ちて伯に飲せて令をわたすを、伯は受て忙はしく梯を降り、向

ひの家へ馬求めに行きぬ。馬はまたゝく間に整ひぬれば、伯は白き袍を引掛け、之に乘りて村の方へと步ませたり。
天氣はあしく變りぬ。あたりは總て暗く、目の前に手をやりても見えずといふは、蹄のみにはあらじ。大空には一つの星だに輝がず。をり〳〵鋭く乾きし風の掃ふ如くに吹き來るは、口を開きなべ火を吐き天地を荒すべき雷雨の苦しげなる息なりと覺ゆ。野邊に屯したる兵士は、焚ける篝火を消されじとすれど、風にさそはるゝ弱き焰は、要はしげにかなたこなたへ靡けり。露營の馬は身振ひして鼻を開き打仰げり。卒の仲間にも一人として心地好げに寢轉びたるは見えず、皆醒めて、地の凹き處に坐したるあり、叉た路の傍に群をなしたるは、をり〳〵地平線のあたりに閃く電光に照らさるゝ黒き空を指して、何事をかいふさまなり。
士官のむれ居る處を過る每に皆快よく禮をなしたり。さて鞜を添へていふ。心をつけ玉へ。今にも劇しき空とならむと。程なく屯も露營も跡になりて、伯は獨淋しき田舍路に出でたり。この時伯は心に四年前の事を想ひ出しぬ。ミラノをたちて殆ど同じ道を來し夜、そのをりの花の香、鶯の歌、戀のねざしを。今におもひ比ぶれば、いかにおもしろかりけむ。かの少女の三たびわれに觸し唇はいまも忘れず。これより後に溫き唇に觸れしこともあれど、かの熱く甘きには似るべうもあらざりき。今宵は鶯の聲も聞えず。それにはあらぬ風の吹ゆる聲と、漸く頭の上に近づきて鳴る雷の聲とあるのみ。風劇しく、道の邊の木々は橫さまに靡けり。黑雲の間をゆきかふ電火に恐れて、騎れる馬は身を振はすることあまたたびなり。
途にて騎兵の一むれに逢ひぬ。首に立ちし老たる下士官はいふ。河の畔にてピエモント人の今や

ピッチエゲト子を引き去らむとするを見き。餘りにいそぎ玉はずば、墺太利の前哨と行逢ひ玉ふ程ならむ。

夜の一時ばかりにもやあらむ。雷雨はいよ／＼劇しくなりぬ。風は馬の歩を止むる計りにて、騎者のめぐりを吹えつゝ吹きて、その面には沙小石を投げつけ、大木の梢を折りては、馬の左右に投げいだせり。雨は瀑布の如くに降れり。雹は大粒にていと繁く、馬と騎者との身に當りて、慣れし士官の力も、驚く馬を鎭めかねたる程なり。げに恐ろしく心細き使の役なりけり。かく劇しき雷雨は一時ばかりもや續きけむ。雨も風もやゝ輕くなりぬ。

この時騎者の耳に、遠くより車の走る音、歩騎兵のゆく音など聞ゆるかと思はれぬ。この物音は風のまに／＼近くなり又た遠くなりぬ。馬を駐めて、身を少し屈め、敵か味方か、その方角をも覗ひ定めて、眞直に乘らむとも、横に避けむとも定めばやとおもへり。ピッチエゲト子は少し左手に當りたらむに、今の物音はその方より右の方へ引くかと思はる。是は今柵を離れて行くピエモント人なるべし。馬を左の方へ歩ませて、市と流とのあるべき方へ進みぬ。流は程近からむと思ふに、闇なれば水の光も見えわかず。

俄然、馬は躍りあがりて退きぬ。驚きし騎者は轡を堅く引きて、心ともなしに劍のつかに手を掛けて守りをり、目の前にて暗き夜は裂け、大地はその臟腑までもはじけたらんと思ふ計りに、怖ろしき燄は足下より起れり。赤き、黄なる燄は散りて、無量の火の粉となり、天も焦がるゝ計りなり。これ彈藥の爆裂なりき。この火は一瞬の間に消えしが、砦の距離の十五分程ばかりなるを、士官は測り得たり。このをりに橋の毀たれしも見えぬ。されど一瞬の後は、又た眞の闇となりて、今やを

り〳〵毀たれし跡より立ちのぼる小さき焰はあれど、ゆくて照すには足らざりき。爆裂の時には地は震ひて、馬は怖ろしきものゝ目前に見ゆるを避けむと、右へ左へと路を外さんとしぬ。漸くに馬を騎り鎮めて、いかにせんかと暫し考へしが、おもひ定て砦の方へ行むとす。さきに聞しは橋を断て去りしピエモント人のなしゝ物音なりけむ。されど聞け、又物音こそ聞ゆれ。こは耳に慣れし響なり。獵隊の角聲なり。嗚呼、味方のつはものなり。亡る敵を逐ふにや。されど後の推量は當らざりき。後に聞けば、ピエモント人はピッチエゲトチを去らむとするとき、火藥庫に火をかけて空に打上げ、これと共に橋を毀ちしに、これがために命を落すものさへありきとか。それのみならず、敵兵はさきの雷雨にあひて、倒れし木に打たれ、又た大なる雹に傷られなどせしを、敵將バヲ自ら報じぬ。

伯はピッチエゲトチにて使を果たし、怖ろしき破毀の跡を見て市を離れ、アッダを渡り、カサル、プステルレンゴなる第四軍團の本營にゆかむとす。雨には衣の裏まで濡れ、さきよりの變に神經もまだ定まらぬに、淋しき街路を乘りつゝ、かれも心に戰の忌はしきものなることを、今さらのやうに思ひぬ。身のほとりには河水響けり。風の歇みたる後は、この水の音と一歩々軟き泥に踏みこむ馬の息の聲のみ聞ゆ。外套はひたと濡れたれば、身を壓す樣に垂れ、髮と鬚とよりはしづく落つ。雨は雷のなりしをりの如く劇くはふらねど今も止まず。小粒なれども重く衣を透さむとせり。かく乘りて行くこと一時間ばかりにて、前の方に馬蹄の音聞ゆ。追近づきて見れば、旗騎兵の一群なり。これに問ひて第四軍團の果してカサル、プステルレンゴに在るを知りぬ。その殿の輕騎兵は程遠からぬ前を打たせたり。追附き玉ふと難からじといふ。馬は股にて壓されて衰へし力を一際勵ま

して馳行くに、暫くして一群の輕騎兵を見き。蒸は半ば光りを失ひ、白き袍も暗にすかして灰色に見ゆ。午後にアッダ河岸の酒店にて別れし友も此群に居たり。その太くぬれて泥にまみれ、外套は重げに打垂れて、馬は尾を股間に引きこめて行くを見れば、おのが姿のあはれなるさへ推測らる。人々は皆な興なきおもゝちして、馬を歩ませたり。宜なり。衣の一絲も乾きたるはなければ。彼輕騎兵士官は濡れたる卷烟草の火を消さじと頻に吸ひたり。おそろしき空かな。近頃になき夜なりき。と伯にいふ。汝もかの劇しき雷雨に逢ひしか。

かく言ふひまに、此の群の士官等漸くに集り來りて、ピッチエゲトテ、フオルミガラのさまなどを問ふ。

汝等も亦た橋の空中に飛びしを見しか。げに美しかりき。砲の一時に二千發も鳴りしかと覺えき。そのあたりに在りし卒等のあはれさよ。と大尉いふ。

伯いふ。おそろしき樣なりしが、味方の兵には怪我人はなかりき。却りて敵の卒等こそ共に空中には飛されたれ。許せ、汝等は餘りに緩く步ませたれば、余は一鞭加へむ。我鐙より落つる水は馬の全身を洗ふに足りぬべき程なり。

われ等は乾きたりと思ふか。と輕騎兵士官は笑みつゝ答へぬ。されど汝の言もまた理あり。往け、急ぎてプステルレンゴに着き、われ等がために旅店を求め置け。さらば。

伯はプステルレンゴに向ふとき、昔の一夜の紀念ありて、夢心地に引かるゝやうなり。心に思ふは、故らには來べき處ならぬを、此戰はまたわれを引てかしこに行かむとす。此夜を明すは彼人の家ならむも知れず。雨のをやみなく降るに、驛舍の前にて馬より下り、家に入りて、驚きたる娘にいは

む。早や四とせを經ぬ。また來むことは君が欲に違ふに似たれど、戰の眞中なれば許せかしと。娘はこれを聞きて必らず打笑はむ。又思ふに、本營も驛舍に在りて、許多の士官のかしこに住みもやせむ。さらばテレシナは潜に故人のために奥なる小部屋を開きて借すこともあらむ。此の部屋は茴荊繁りたりしかの庭にや向ひたらむ。娘の姿は今いかならむ。少しく肥えしか。目は昔よりも物戀しげにや見えむ。

かく思ひつゝ、伯は砲兵と車輪との間を騎りぬけたり。車馭する卒は不興氣なるおもゝちして轠を引き、高き、卑き、許多の士官は、皆な外套を緊しく纏ひて、乘過る「フザアル」士官を見むともせず。語るものなければ笑ふ人もなく、聞ゆるは馬の鼻を鳴らす音と車輪の鎖のすれあふ響とのみ。車を引ける性あしき馬に引きかけられて車輪の間にて壓されむと、伯は心をつけて馬を御したり。橋を渡りて長き歩兵の縱列を乘り越しぬ。繁き雨に打たれてあはれげに行けり。此の群を通りぬけむとするは、なか〳〵に砲兵などより難かりき。列の首ある士官に禮して一二語を交へ、少しく進めば、目前にやうやく一條の空路あり。

東の空を見れば、鼠色の雲に少しく明き綻あり。地平線の處より狹く黄なる一帶の上らむとして支へらるゝが見ゆ。ブステルレンゴは程遠からじ。伯は衣を乾すべき爐、濃き珈琲を夢見つゝ思ふやう。チエッコオも今は人となりたらむ。彼は果して我帽を千萬片に引裂きしか、見まほし。若し四年の後に又た彼帽を見ば、奇なりといふべし。

はかなき事を思ひ續けて、舌打鳴すに、馬は泥を蹴立てゝ急ぎ行きぬ。暫しありて又あかつき近き霧の中より、一むれの獵隊の後姿見ゆ。氣象の勝ちたる此隊なれば、歩騎兵などにかはりて、物語す

る聲もをり〳〵は漏れ聞ゆれど、ゆふべの疲れは色に出でゝ、人々皆夜の早く明けて、爐ある處に到りつかむことを祈れるのみなり。

獵隊のむれは一大隊ばかりにて、その前には旗騎兵の一群あり。この間を貧しからぬ農民めきたる衣きたる男、手をうしろざまに縛られたるが歩めり。衣は裂けて泥にまみれ、帽を戴かねば、黒き毛は額を掩たり。この男は頭を垂れて深き泥の中を行けり。

伯はそのまゝに行過ぎむとするに、忽ち笑を帶びて止まれと呼ぶ人あり。見かへれど誰ともわかざりしが、灰色の外套の襟を開きて首を出し、緑の毛つきたる帽を少し推し上げて額を露したるを見れば、變の參謀本部づき士官なりき。

參謀本部づきは面白げにいふ。好き天氣に又も逢ひけるよ。余は風ひきて堪へがたし。乾きたる「ハンカチイフ」は持たずや。我巾は濡れとほりて用ゐるべからず。

心得たり。我較なる水を透さぬ囊だに其名に負かずば、乾きたる巾も卷煙草もあらむ。

善きつはものは「フザアル」なり。と參謀本部附は鼻歌歌ひて又いふ。若しわが望かなはむをりには、報に櫻酒を一口飲ませむ。

水を透さぬ囊は名に負かざりき。二人の士官は巾と卷煙草と櫻酒とを代へたり。

さて參謀本部づきは問ふ。汝は何處へ乗り行くか。昨日の晩より馬の脊にのみ居たるにはよもあらじ。

殆ど馬の脊にのみありき。唯だ馬を代へしのみ。寐しは一時間にて、その報にこのおそろしき夜に逢ひぬ。

二人は巻煙草に火を點けむとて、路の傍に倚るに、卒はかの罪人を引立てゝ過ぎぬ。

「フザアル」の伯は問ふ。誰ぞ。

間者なり。ピエモント人に戰はんとする心だにあらましかば、彼はいかにか我兵を苦めけむ。今はカサル、ブステルレンゴの本營へ引かるゝなり。

あやしき物をや持たりし。

充分に。射殺すにも餘あるばかり。かれは貧からぬものなれば、金を得むとての業にあらず。我兵を憎みて間者となりしなり。きのふの事なりしが、我兵の使に立ちし心すなほなる馭者は、河の畔にて殺されたりしに、昨夜捕しこの男の懐より、馭者の持ちし書きもの出でにき。

伯はふびんなりと思ふやうに、肩を少し動かしてこの罪人を打見たり。奈何なる罪人も死地に就くを見るは快からず。この間者は命助からぬものなり。裁判は隊の出發の前に果てたり。されどかれが住まひしカサル、プステルレンゴに引きゆきて、處の役所に糺して、罪を輕うすべきよすがもあらば、兎も角もせんとて引きてゆくなり。

二人の士官は間もなく縱列を迹にして村に近きぬ。地平線に見えし黄なる一帶は、今や廣くなりて、さきには一圏をなしたりし灰色の雲も、やう／＼離れ／＼になりたるひまより、日の光洩れて空に餘光を漲せたり。されど此光は猶ほ灰色を帶びて濁りたり。朝とはいへど氣色は沈みて見ゆ。雲は猶低く垂れて、眠たげに廣き郊野をあなたへ棚引ゆく。路のほとりの高き、卑き、さま／＼の木は、鋭き朝風に靡きて、ゆふべより貯へし雨の水を地上にまき散せり。左右なる溝には水滿ちて、色は褐に似て田舎汁見るやうなり。荒き風に半吹き倒されたる稻の莖は、寒さに堪へでや震ひたるもあ

はれなり。

士官は互に打見やりて、ゆふべより汚れし軍服のはかなきさまなるを笑へり。馬は鞍のあたりまで泥にまみれて、白き外套には處々に褐いろの條あり。靴と拍車と劒とは泥につゝまれたり。

村に近き處にて、又新しき縱列に逢ひぬ。村の路には兵卒みち／＼たり。本營は大なる家にて、二人は馬より下りてこれに入りしが、用果てゝ伯の出しは一時ばかり經ての後なりき。

雨は歇みぬ。步兵の群は路を塞ぎたり。處の民は濡れたるつはものどもに物食せんとて騷げり。民は澳太利の兵を尊みて、自由の贈を得つといへり。是れ半澳太利の帝室を尊む心より出で、半永き戰の止まんことを願ふ心より出づるなるべし。

早や驛舍の見ゆる處に來ぬ。かしこに廐あり。こゝに家あり。廐の前には一むれの輕騎兵ありて、馬を溫き處に引き入れむとしたり。御者幾人かこれを助けんとせり。伯が來て馬より下るを見て、一人の御者は馬の轡を受取りぬ。

驛舍の一家は今いかにぞや。と問はれて、御者は物に恐るゝ如きさまにて、家の方を見かへり、肩を動していふ。家はかしこに在り。戶は明きたれば入りて見玉へ。人のありやなしや。されど外套を干し玉ふばかりの塲所はあらむ。おのれは馬を廐に引きて、さて後より參りて、火かき起してもてなし侍らむ。

誰も家にあらずや。驛舍の主人が一族はあらずや。と士官の問ふに、御者はたゞ知らずとのみ答へぬ。

伯はいぶかしさに頭打ち掉りて入るに、閾の上には大なるむく毛の犬伏して居り、伯の顏をあふぎ

覗て尾をふりぬ。これこそ見覺えある犬なれ。伯の入るとき犬はその後に從ひて來つ。伯はさきの夜立ちし窻ある部屋へとこゝろざして、廊を進みて戸を引きあけたり。

岡にむかへる窻は開けり。さきの夜の如く葡萄のつるは風になびきたり。されどやさしき月の光をば受けで、霧深きあしたの灰色の光を帶ぶ。葉末よりは重げなる雨のしづく、風につれてはら〳〵と落つ。

部屋には二人の子供あり。一人は六つばかりなるが、爐の中に消えなむとする炭火を吹きたり。一人は二つばかりに見ゆるが、床の上に坐りて、小き手を肌寒げなる衣の下にさし入れて温めむとせり。大なるかたは男子にて、小なるは娘なるべし。かの人の娘にや。

おもての善くも似たるかな。大なる光ある目まで。伯は覺えずテレシナと呼ぶに、穉兒は頭をふり向けて笑みぬ。

床の上なる物を見るに、貧げなるにはあらず。されど奈何なればか、皆いたく亂れたるさまに見ゆ。伯は奈何なる故とも自ら知らねど、身の震ふばかりに哀を覺えたり。

男子はチエツコオなるべし。昔少女の膝の上に在しには似ず大人びて。火は今早や燃むに、暫し待ち玉へ。といふあるじぶりも哀なり。伯は出てさきの御者に事のもと末尋ね問はゝやと思ふとき、一束の薪を抱きて御者は入りぬ。

誰も家にあらずや。此子供の外には。主人は何處にゆきし。と伯に問はれて、御者は薪を爐の畔に卸し、又肩を動していふ。こゝに來玉ひしことありや。

四とせばかり前に一たび。

それ故にかくは問ひ玉ふか。

馬を換へむとて、夜こゝに憩ひしをり、美しき少女を見しが。

オレシナ。と御者は答へて、又爐の畔をゆびさし。かしこなるは少女が子なり。

少女は。

仕合せにも一年前にみまかりぬ。人の餘につらきに。

つらかりきとは誰が、少女の父にや。

否、父は早く世を去りぬ。少女が夫にて、おのが今の主人にこそ。といひて又物に恐るゝさまあり。

さてはピヤチエンザの驛舍の子ならむ。と伯は胸迫りたるさまを見せじと聲低く問ふ。

君はかれを知りてやおはせし。

面は見識らねど名を聞きしことあり。

よも君が識り玉ふ人にはあらじ。天の爵は逝れぬものなり。かゝる誠ある妻を、善き美しき妻を。父はピヤチエンザの男を婿にせむと迫りしを、忍びてうけひきし心はいかなりしか。悪き人とは誰れ知らぬものもなきに。さて夫婦になりては誠を盡しゝに、今奈何にぞや。かれは天の爵なれば善し。ふひんなるは子供なり。

天の爵とは何ぞ。と伯は窻に肘もたせて問ふ。心にはいかなるおそろしき事にかと疑ひ思へり。

餘りに久しくなりぬれば、遂にはあらはれにき。さきの程間者なりとて引かれぬ。と小聲にて答ふ。

君はゆきあひ玉ひけむ。同じ道を引かれたれば。一命は助るまじ。將軍の君の言葉玉へとて。

さてはかれが。と伯は靜に云ひて、床の上なる娘の我傍にいざり寄りて、劔の鞘につかまりしを打

見たり。

穉児と顔見あはせて、深く感じたるさまにておもてを背け、懐なる金貨満ちたる財布引き出して、老たる御者にわたしていふ。汝は心まめなる男なりと見ゆ。これは子らがために収めおきて、後に取らせよ。

伯は穉き娘を抱きあげて、愛らしき唇に接吻し、黙して戸を出でむとす。

火の今燃ゆべきに待ち玉へ。士官の君。とチエッコオは後より呼びぬ。

出行く人は聞かぬまねして廐に入り、急ぎ跨りて乗りいだし、首を回らして驛舎に注ぐ最後の一目。

此時左手の方より皷鳴りて、小銃の音三つ四つ聞えつ。伯は緩ゆるめて拍車をあてしが、馬はロヂの方へと疾く馳せ出だしぬ。

舞姫

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきもやくなし、今宵は夜毎にこゝに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残りしは余一人のみなれば。五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記したる紀行は日ごとに幾千言をかなしけむ、當時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもへば、穉き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげにしるししを、心ある人はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ

白紙のまゝなるは、獨逸にて物學びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、學問こそ猶心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更なり、われとわが心さへ變り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感觸を、筆に寫して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ緣故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、ブリンヂイシイの港を出でゝより、はや二十日あまりを經ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知れぬ恨に頭のみ惱ましたればなり。此恨は初め一抹の雲の如く我心を掠めて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古蹟にも心を留めさせず、中ごろは世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すともいふべき慘痛をわれに負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一點の翳とのみなりたれど、文讀むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、聲に應ずる響の如く、限なき懷舊の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかにしてか斯恨を銷せむ。若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によみし後は心地すが〳〵しくもなりなむ。これのみは餘りに深く我心に鏤りつけたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人も無し、房奴の來て電氣線の鍵を捩るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

余は幼き比より嚴しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひつれど、學問の荒み衰ふることなく、舊藩の學館にありし日も、東京に出でゝ豫備黌に通ひしときも、大學法學部に入りし後も、太田豐

太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたるに、一人子のわれを力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には學士の稱を受けて、大學の立ちてよりその頃までにまたなき名譽なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故鄕なる母を都に呼び迎へ、樂しき年を送ること三とせばかり、官長の覺え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遙々と家を離れてベルリンの都に來ぬ。

余は模糊たる功名の念と、檢束に慣れたる勉强力とを持ちて、忽ちこの歐羅巴の新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色澤ぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下と譯するときは、幽靜なる境なるべく思はるれど、この大道髮の如きウンテル、デン、リンデンに來て兩邊なる石だゝみの人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩聳えたる士官の、まだ維廉一世の街に臨める窻に倚り玉ふ頃なりければ、樣々の色に飾り成したる禮裝をなしたる、妍き少女の巴里まねびの粧したる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝靑の上を音もせで走るいろ〳〵の馬車、雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる處には、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てゝ緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像、この許多の景物目睫の間に聚まりたれば、始めてこゝに來しものゝ應接に遑なきも宜なり。されど我胸には縱ひいかなる境に遊びても、あだなる美觀に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物を遮り留めたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、おほやけの紹介狀を出だして東來の意を告げし普魯西の官員は、

皆快く余を迎へ、公使館よりの手つゞきだに事なく濟みたらましかば、何事にもあれ、敎へもし傳へもせむと約しき。喜ばしきは、わが故里にて、獨逸、佛蘭西の語を學びしことなり。彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは學び得たると問はぬことなかりき。

さて官事の暇あるごとには、かねておほやけの許をば得たりければ、ところの大學に入りて政治學を修めむと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せも濟みて、取調も次第に捗りければ、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば寫し留めて、つひには幾卷をかなしけむ。大學のかたにては、穉き心に思ひ計りしが如く、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、此か彼かと心迷ひながらも、二三の法家の講筵に列ることにおもひ定めて、謝金を收め、往きて聽きつ。

かくて三年ばかりは夢の如くにたちしが、時來れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の敎に從ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず學びし時より、官長の善き働き手を得たりと奬ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ被働的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歲になりて、既に久しくこの自由ある大學の風にあたりたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奧深く潛みたりしまことの我は、やうやく表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜しからず、また善く法典を諳じて獄を斷ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私におもふやう、我母は余を活きたる字書となさんとし、我官長は余を活きたる條例となさんとやしけん。字書たらむは猶ほ堪ふべけれど、條例たらんは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題に

も、極めて丁寧にいらへしたる余が、この頃より官長に寄する書には連りに法制の細目に拘ふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらんには、紛々たる萬事は破竹の如くなるべしなど、廣言しぬ。又た大學にては法科の講筵を餘所にして、歴史文學に心を寄せ、漸く蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。獨立の思想を懐きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が當時の地位なりけり。されどこれのみにては、尚ほ我地位を覆へすに足らざりけんを、日比伯林の留學生の中にて、或る勢力ある一群と余との間に、面白からぬ關係ありて、彼人々は余を猜疑し、又遂に余を讒誣するに至りぬ。されどこれとても其故なくてやは。

彼人々は余が倶に麥酒の杯をも擧げず、球突きの棒をも取らぬを、頑固なる心と欲を制する力とに歸して、且つは嘲り且つは嫉みたりけん。されど是れ余を知らねばなり。嗚呼、この故よしは、我身だに知らざりしを、怎でか他人に知らるべき。我心はかの合歡といふ木の葉に似て、物觸れば縮みて避けんとす。我心は處女に似たり。余が幼き頃より長者の敎を守りて、學の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きたるにて、人のたどらせたる道を、唯だ一條にたどりしのみ。餘所に心の亂れざりしは、外物を棄てゝ顧みぬ程の勇氣ありしにあらず、唯ゞ外物に恐れて自ら我手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が有爲の人物あるヿを疑はず、又た我心の能く耐へんヿをも深く信じたり。嗚呼、彼も一時。舟の横濱を離るゝまでは、天晴豪傑と思ひし身も、せきあへぬ淚に手巾を濡らし

たるを我れ乍ら怪しと思ひしが、これぞなか〳〵に我本性なりける。此心は生れながらにやありけん、又た早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。

彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣を纏ひ、珈琲店に坐して客を延く女を見ては、往てこれに就かん勇氣なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挾ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音にてものいふ「レエベマン」を見ては、往てこれと遊ばん勇氣なし。これらの勇氣なければ、彼活潑なる同鄕の人々と交らんやうもなし。この交際の疎きがために、彼人々は唯ゞ余を嘲り、余を嫉むのみならで、又余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が寃罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閲し盡す媒なりける。

或る日の夕暮なりしが、余は獸苑を漫步して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の僑居に歸らんと、クロステル巷の古寺の前に來ぬ。余は彼の燈火の海を渡り來て、この狹く薄暗き巷に入り、樓上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取入れぬ人家、頰髭長き猶太敎徒の翁が戶前に佇みたる居酒屋、一つの梯は直ちに樓に達し、他の梯は穴居の鍛冶が栖家に通じたる貸家などに向ひて、凹字の形に引籠みて立てる、此三百年前の遺跡を望む每に、心の恍惚となりて暫し佇みしことは幾度なるを知らず。

今この處を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、聲を呑みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髮の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてみかへりたる面、余に小說家の筆なければこれを寫すべ

くもあらず。この靑く淸らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。
彼は料らぬ深き歎きに遭ひて、前後を顧みる遑なく、こゝに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覺えず側に倚り。「何故に泣き玉ふか。ところに繋累なき外人は、却りて力を借し易きこともあらん。」といひ掛けたるが、我ながらわが大膽なるに呆れたり。
彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、我が眞率なる心や色に形はれたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼の如く酷くはあらじ。又た我母の如く。」暫し涸れたる涙の泉は又た溢れて愛らしき頰を流れ落つ。
「我を救ひ玉へ、君。わが恥なき人とならんを。母はわが彼の言葉に從はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らでは協はぬに、家に一錢の貯だになし。」
跡は欷歔の聲のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注ぎたり。
「君が家に送り行かんに、先づ心を鎭め玉へ。聲をな人に聞かせ玉ひそ。こゝは往來なるに。」彼は物語するうちに、覺えず我肩に倚りしが、この時ふと頭を擡げ、又た始めてわれを見たるが如く、恥ぢて我側を飛びのきつ。
人の見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戶を入れば、缺け損じたる石の梯あり。これを上ぼりて、四階目に腰を折りて潜るべき程の戶あり。少女は鏽びたる針金の先きを捩ぢ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中よりしはがれたる老媼の聲して、「誰ぞ」と問ふ。エリス歸りぬと答ふる間もなく、戶をあらゝかに引開けしは、半ば白みたる髮、悪しき相には

あらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老媼にて、古き獣綿の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり。エリスの余に會釋して入るを、かれは待ち兼ねし如く、戸を劇しくたて切りつ。

余は暫し呆然として立ちたりしが、ふと油燈の光に透して戸を見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ爭ふごとき聲聞えしが、又た靜になりて戸は再たび明きぬ。さきの老媼は慇懃におのが無禮の振舞せしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨にて、右手の低き窓に、眞白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を掩ひし臥床あり。伏したるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この處は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁を、厚紙にて張りし下の、立たば頭の支ふべき處に臥床あり。中央なる机には美しき氈を掛けて、上には書物一二卷と寫眞帖とを列べ、陶瓶にはこゝに似合はしからぬ價高き花束を生けたり。そが傍に少女は羞を帶びて立てり。

彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。手足の纖く裊なるは、貧家の女に似ず。老媼の室を出し跡にて、少女は少し訛りたる言葉にて云ふ。「許し玉へ。君をこゝまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思ひしシヤウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさん。彼は「ヰクトリヤ」座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、早や二年なれば、事なく我等を助けんと思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手なるいひ掛けせんとは。我を救ひ玉へ、君。金をば薄き給金を析きて還し參らせん。縱令我身は食はず

とも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目には、人に否とはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自らは知らぬにや。

我が隱しには二三「マルク」の銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をはづして机の上に置き。「これにて一時の急を凌ぎ玉へ。質屋の使のモンビシュウ街三番地にて太田と尋ね來ん折には價を取らすべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辭別のために出したる手を唇にあてたるが、はら／＼と落つる熱き涙を我手の背に濺ぎつ。

嗚呼、何等の惡因ぞ。この恩を謝せんとて、自ら我僑居に來し少女は、ショオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日兀坐する我讀書の窻下に、一輪の名花を咲かせてけり。この時を始として、余と少女との交漸く繁くなりもて行きて、同鄕人にさへ知られければ、彼等は速了にも、余を以て色を舞姫の群に漁するものとしたり。われ等二人の間にはまだ癡騃なる歡樂のみ存じたるを。

その名を斥さんは憚あれど、同鄕人の中に事を好む人ありて、余が屢〻芝居に出入して、女優と交るといふことを、官長の許に報じつ。さらぬだに余が頗る學問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、遂に旨を公使館に傳へて、我官を免じ、我職を解いたり。公使がこの命を傳ふる時余に謂ひしは、若し即時に鄕に歸らば、路用を給すべけれど、若し猶こゝに在らんには、公の助をば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶豫を請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我生涯にて尤も悲痛を覺えさせたる二通の書狀に接しぬ。この二通は殆ど同時に發したるものなれど、一は母の自筆、

一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言をこゝに反覆するに堪へず、涙の迫り來て筆の運を妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時までは餘所目に見るより淸白なりき。彼は父の貧きがために、充分なる敎育を受けず、十五の時に舞の師のつのりに應じて、この恥づかしき業を敎へられ、「クルズス」果てゝ後、「ヰクトリヤ」座に出でゝ、今は塲中第二の地位を占めたり。されど詩人ハツクレンデルが當世の奴隷といひし如く、果なきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繫がれ、晝の温習、夜の舞臺と緊しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をも纏へ、塲外にてはひとり身の衣食も足らず勝ちなれば、親腹からを養ふものはその辛苦奈何ぞや。されば彼等の仲間にて、賤しき限りなる業に墮ちぬは稀なりとぞいふなる。エリスがこれを逭れしは、おとなしき性質と、剛氣ある父の守護とに依りてなり。彼は幼き時より物讀むことをば流石に好みしかど、手に入るは卑しき「コルポルタアジユ」と唱ふる貸本屋の小說のみなりしを、余と相識る頃より、余が借したる書を讀みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ。かゝれば余等二人の間には先づ師弟の交りを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事に關りしを包み隱したれど、彼は余に向ひて母にはこれを秘め玉へと云ひぬ。こは母の余が學資を失ひしを知りて余を疎んぜんを恐れてなり。

嗚呼、委くこゝに寫し出さんも要なけれど、余が彼を愛づる心の俄に强くなりて、遂に離れ難き中となりしは此折なりけり。我一身の大事は前に横りて、洵に危急存亡の秋なるに、この行ありしを訝かしみ、又た誹る人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、始めて相見し時よりあさくはあら

ぬに、いま我數奇を憐み、又た別離を悲みて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかゝりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる腦髓を射て、恍惚の間にこゝに及びしを奈何にせむ。

公使に約せし日も近づき、我命はせまりぬ。このまゝにて郷にかへらば、學成らずして汚名を負ひたる身の浮ぶ瀨あらじ。さればとて留まらんには、學資を得べき手だてなし。

此時余を助けしは今我同行の一人なる相澤謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編輯長に說きて、余を社の通信員となし、伯林に留まりて政治學藝の事などを報道せしむることとなしつ。

社の報酬はいふに足らぬほどなれど、棲家をもうつし、午餐に行く食店をもかへたらんには、微なる暮しは立つべし。兎角思案する程に、心の誠を顯はして、助の綱をわれに投げ掛けたるはエリスなりき。かれはいかに母を說き動かしけん、余は彼等親子の家に寄寓することとなり、エリスと余はいつの間にか、有るか無きかの財產を合せて、憂きがなかにも樂しき月日を送りぬ。

朝の咖啡果つれば、彼は溫習に往き、さらぬ日には家に留まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奧行のみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を讀み、鉛筆取り出でゝ彼此と材料を集む。この截り開きたる引窻より光を取れる室にて、定りたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に借して己れは遊び暮す老人、取引所の業の隙を偸みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷なる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小をんなが持て來し一盞の咖啡の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに挿みしを、幾種となく掛け聯ねたるかたへの壁に、いく度となく往來する日本人を、知

らぬ人は何とか見けん。又た一時近くなるほどに、温習に往きたる日には返り路によぎりて、余と倶に店を立出づるこの常ならず輕き、掌上の舞をもなしえつべき少女を、怪み見送る人もありしなるべし。

我學問は荒みぬ。屋根裏の一燈微に燃えて、エリスが劇塲よりかへりて、椅に寄りて縫ものなどする側の机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔しの法令條目の枯葉を紙上に掻寄せしには殊にて、今は活潑々たる政界の運動、文學美術に係る新現象の批評など、彼此と結びあはせて、力の及ばん限り、ビヨルネよりは寧ろハイネを學びて思を構へ、様々の文を作りし中にも、引續きて維廉一世と佛得力三世との崩殂ありて、新帝の即位、ビスマルク侯が進退如何などの事に就ては、故らに詳かなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ藏書を繙き、舊業をたづぬることも難く、大學の籍はまだ刪られねど、謝金を收むることの難ければ、唯だ一つにしたる講筵だに往きて聽くことは稀なりき。

我學問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにといふに、凡そ民間學の流布したることは、歐洲諸國の間にて獨逸に若くはなからん。幾百種の新聞雜誌に散見する議論には、頗る高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、曾て大學に繁く通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、讀みては又た讀み、寫しては又た寫す程に、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、自ら綜括的になりて、同郷の留學生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ。彼等の仲間には獨逸新聞の社説をだに善くはえ讀まぬがあるに。

明治廿一年の冬は來にけり。表街の人道にてこそ沙をも撒け、鍤をも揮へ、クロステル街のあたり

は凸凹坎坷の處は見ゆめれど、表のみは一面に氷りて、朝に戸を開けば飢ゑ凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。室を温め、竈に火を焚きつけても、壁の石を徹し、衣の綿を穿つ北歐羅巴の寒さは、なか〳〵に堪へがたかり。エリスは二三日前の夜、舞臺にて卒倒しきとて、人に扶けられて歸り來しが、それより心地あしとて休み、もの食ふごとに吐くを、惡阻といふものならんと始めて心づきしは母なりき。嗚呼、さらぬだに覺束なきは我身の行末なるに、若し眞なりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は樂しからず。エリスは床に臥すほどにはあらねど、小き鐵爐の畔に椅子さし寄せて言葉寡し。この時戸口に人の聲して、程なく庖廚にありしエリスが母は、郵便の書狀を持て來て余にわたしつ。見れば見覺えある相澤が手なるに、郵便切手は普魯西のものにて、消印には伯林とあり。訝りながら披きて讀めば、頓みの事にて預め知らするに由なかりしが、昨夜こゝに着せられし天方大臣に跟きてわれも來たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く來よ。汝が名譽を恢復するも此時にあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみいひ遣るとなり。讀み畢りて茫然たる面もちを見て、エリスは。「故郷よりのふみなりや。惡しき便にてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に關する書狀と思ひしならん。「否、心にな掛けそ。おん身も名を知る相澤が、大臣と倶にこゝに來てわれを呼ぶなり。急ぐといへば今よりこそ。」

かはゆき獨り子を出し遣る母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせんと思へばならん、エリスは病をつとめて起ち、上襦袢も極めて白きを撰び、丁寧にしまひ置きし「ゲエロック」といふ二列ぼたんの服を出して着せ、襟飾りさへ余が爲めに手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰れも得言はじ。我鏡に向きて見玉へ。何故にかく不興なる面もちを見せ玉ふ

か。われも諸共に行かまほしきを。」少し容をあらためて。「否、かく衣を更め玉ふを見れば、何となくわが豐太郎の君とは見えず。」又た少し考へて。「縦令富貴になり玉ふ日はありとも、われをば見棄て玉はじ。我病は母の宣ふ如くならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑したり。「政治社會などに出でんの望みは絶ちしより幾年をか經ぬるを。大臣は見たくもなし。唯年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。」エリスが母の呼びし一等「ドロシュケ」は、輪下にきしる雪道を窗の下まで來ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を脊に被ひて手をば通さず、帽を取りてエリスに接吻して樓を下りつ。彼は凍りし窗を明け、亂れし髮を朔風に吹かせて余が乘りし車を見送りぬ。

余が車を下りしは「カイゼルホオフ」の入口なり。門者に秘書官相澤が室の番號を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の梯を登り、中央の柱に「プリユツシユ」を被ひし「ソフア」を据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばこゝにて脱ぎ、廊をつたひて室の前まで往きしが、余は少し踟蹰したり。同じく大學に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相澤が、けふは怎なる面もちして出迎ふらん。室に入りて相對して見れば、形こそ舊に比ぶれば肥えて逞ましくなりたれ、依然たる快活の氣象、我失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細叙するにも遑あらず、引かれて大臣に謁し、委托せられしは獨逸語にて記せる文書の急を要するを飜譯せよとの事なり。余が文書を受領して大臣の室を出でし時、相澤は跡より來て余と午餐を共にせんといひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路は概ね平滑なりしに、轗軻數奇なるは我身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閲歴を聞きて、かれは屢々驚きしが、なか〳〵に余を譴めんとはせず、却りて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の畢りしとき、彼は色を正して諫むるやう、この一段の事は素と生れながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はんも甲斐なし。とはいへ、學識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかゝづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯も唯だ獨逸語を利用せんの心のみなり。おのれも亦伯が當時の免官の理由を知れるが故に、強て其成心を動かさんとはせず、伯が心中にて曲庇者なりなんど思はれんは、朋友に利なく、おのれに損あればなり。人を薦むるは先づ其能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。又彼少女との關係は、縱令彼に誠ありとて、縱令情交は深くなりきとて、人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交なり。意を決して斷てと。是れその言のあらましなりき。

大洋に舵を失ひしふな人が、遙なる山を望む如きは、相澤が余に示したる前途の方鍼なり。されどこの山は猶ほ重霧の間に在りて、いつ往きつかんも、否、果して往きつけばとて、我中心に滿足を與へんも定かならず。貧きが中にも樂しきは今の生活、棄て難きはエリスが愛。わが弱き心には思ひ定めんよしなかりしが、姑く友の言に從ひて、この情緣を斷たんと約しき。余は守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものには抗抵すれども、友に對して否とはえ對へぬが常なり。

別れて出づれば風は面を撲てり。二重のがらす窓を緊く鎖して、大いなる陶爐に火を焚きたる「ホテル」の食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さは殊さらに堪へ難く、膚粟立つと共に、余は心中に一種の寒さを覺えき。

飜譯は一夜になし果てつ。「カイゼルホオフ」へ通ふことはこれより漸く繁くなりもて行く程に、初め

は伯の言葉も用事のみなりしが、後には近比故郷にてありしことなどを擧げて余が意見を問ひ、折に觸れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げて打笑ひ玉ひき。

一月ばかり過ぎて、或る日伯は突然われに向ひて。「余は明旦、魯西亞に向ひて出發すべし。隨ひて來べきや、」と問ふ。余は數日間、かの公務に遑なき相澤を見ざりしかば、此問は不意に余を驚かしつ。「いかで命に從はざらむ。」余は我耻を表はさん、この答はいち早く決斷していひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答の範圍を善くも量らず、直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、そのなし難きに心づきても、強て當時の心虚なりしを掩ひ隱し、耐忍してこれを實行すること屢々なり。

此日は飜譯の代に、旅費さへ添へて賜はりしを持て歸りて、飜譯の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亞より歸り來んまでの費をば掩ひつべし。彼は醫者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性ありしゆゑ、幾月か心づかでありけん。座頭よりは休むことのあまりに久しければ籍を除いたりと言ひおこしつ。まだ一月ばかりなるに、かく嚴しきは故あればなるべし。旅立の事にはいたく心を惱ますとも見えず。僞りなき我心を厚く信じたれば。

鐵路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。身にあはせて借りし黑き禮服、新に買ひ求めしゴタ板の魯廷の貴族譜、二三種の辭書などを、小「カバン」に入れしのみ。流石に心細きことのみ多きこの程なれば、出で行く跡に殘らんも物憂かるべく、又た停車場にて涙こぼしなどしたらんには影護かるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出しやりつ。余は旅裝整へて戸を鎖し、鍵をば入口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯國行につきては、何事をか叙すべき。わが舌人たる務めは忽地に余を拉せ去りて、青雲の上に墮したり。余が大臣の一行に隨ひて、ペエテルスブルクに在りし間に余を圍繞せしは、巴里絶頂の驕奢を、氷雪の裡に移したる王城の粧飾、故らに黄蠟の燭を幾つ共なく點したるに、幾星の勳章、幾枝の「エポレット」が映射する光、彫鏤の工を盡したる「カミン」の火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇の閃きなどにて、この間佛蘭西語を最も圓滑に使ふものはわれなるがゆゑに、賓主の間に周旋して事を辨ずるものもまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書を寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく獨りにて燈火に向はんとの物憂さに、知る人の許にて夜に入るまでもの語りし、疲るゝを待ちて家に還り、直ちに寢ねつ。次の朝目醒めし時は、猶獨り跡に殘りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でし時の心細さ、かゝる思ひをば、生計に苦みて、けふの日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書の略なり。

また程經てのふみは頗る思ひせまりて書きし如くなりき。文をば否といふ字にて起したり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。君は故里に頼もしき族なしとのたまへば、此地に善き世渡のたつきあらば、留り玉はぬとやはある。又我愛にて繋ぎ留めでは止まじ。それも協はで東に還り玉はんとならば、親と共に往かんは易けれど、か程に多き路用を何處よりか得ん。怎なる業をしても此地に留りて、君が世に出で玉はん日をこそ待ためと常には思ひしが、暫しの旅とて立出で玉ひしよりこの二十日ばかり、別離の思は日にけに茂りゆくのみ。袂を分つはたゞ一瞬の苦艱なりと思ひしは迷なりけり。我身の常ならぬが漸くにしるくなりし、それさへあるに、縱令いかなるとあり

も、我をば努な棄て玉ひそ。母とはいたく爭ひぬ。されど我身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。わが東に往かん日には、ステツチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せんとぞいふなる。書きおくり玉ひし如く、大臣の君に重く用ゐられ玉はゞ、我路用の金は兎も角もなりなん。今は只管君がベルリンに還り玉はん日を待つのみ。

嗚呼、余は此書を見て始めて我地位を明視し得たり。恥かしきはわが鈍き心なり。余は我身一つの進退につきても、又た我身に係らぬ他人の事につきても、果斷ありと自ら心に誇りしが、此果斷は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との關係を照さんとするときは、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されどわが近眼は唯だおのれが盡したる職分をのみ見き。余はこれに未來の望を繋ぐことには、神も知るらむ、絶えて想到らざりき。されど今こゝに心づきて、我心は猶ほ冷然たりし歟。先に友の勸めしときは、大臣の信用は屋上の禽の如くなりしが、今は稍やこれを得たるかと思はるゝに、相澤がこの頃の言葉の端に、本國に歸りての後も倶にかくてあらば云々といひしは、大臣のかく宣ひしを、友ながらも公事なれば明には告げざりし歟。今更おもへば、余が輕卒にも彼に向ひてエリスとの關係を絶たんといひしを、早く大臣に告げやしけん。

嗚呼、獨逸に來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の絲は解くに由なし。曩にこれを繰つりしは、我某省の官長にて、今はこの絲、あなあはれ、天方伯の手中に在り。余が大臣の一行と倶にベルリンに歸りしは、恰も是れ新年の旦なりき。停車場に別を告げて、我家

をさして車を驅りつ。こゝにては今も除夜に眠らず、元旦に眠るが習なれば、萬戸寂然たり。寒さは強く、路上の雪は稜角ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、きら／＼と輝けり。車はクロステル街に曲りて、家の入口に駐まりぬ。この時窓を開く音せしが、車よりは見えず。馭丁に「カバン」持たせて梯を登らんとする程に、エリスの梯を駈け下るに逢ひぬ。彼が一聲叫びて我頸を抱きしを見て馭丁は呆れたる面もちにて、何やらむ髭の内にて云ひしが聞えず。

「善くぞ歸り來玉ひし。歸り來玉はずば我命は絶えなんを。」

我心はこの時までも定まらず、故郷を憶ふ念と榮達を求むる心とは、時として愛情を壓せんとせしが、唯だ此一刹那、低徊踟蹰の思は去りて、余は彼を抱き、彼の頭は我肩に倚りて、彼が喜びの涙ははら／＼と肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼の如く叫びし馭丁は、いち早く登りて梯の上に立てり。

戸の下に出迎へしエリスが母に、馭丁を勞ひ玉へと銀貨をわたして、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥して余は驚きたり、机の上には白き木綿、白き「レエス」などを堆く積み上げたりければ。

エリスは打笑みつゝこれを指して、「何とか見玉ふ、この心がまへを。」といひつゝ一つの木綿ぎれを取上げしを見れば襁褓なりき。「わが心の樂しさを思ひ玉へ。産れん子は君に似て黒き瞳子をや持ちたらん。この瞳子。嗚呼、夢にのみ見しは君が黒き瞳子なり。産れたらん日には君が正しき心にて、よもあだし名をばなのらせ玉はじ。」彼は頭を垂れたり。「穉しと笑ひ玉はんが、寺に入らん日はいかに嬉しからまし。」見上げたる目には涙滿ちたり。

二三日の間は大臣をも、たびの疲れやおはさんとて敢て訪らはず、家にのみ籠り居りしが、或る日の夕暮使して招かれぬ。往きて見れば待遇殊にめでたく、魯西亞行の勞を問ひ慰めて後、われと共に東に歸へる心はなきか、君が學問こそわが測り知る所ならね、語學のみにて世の用をばなすべし、滯留の餘りに久しければ、様々の係累もあらんと、相澤に問ひしに、さることなしと聞きて落居たりと宣ふ。その氣色辭むべくもあらず。あなやと思ひしが、流石に相澤の言を僞なりともいひ難きに、若しこの手にしも縋らずば、本國をも失ひ、名譽を挽きかへさん道をも絶ち、身はこの廣漠たる歐洲大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝て起れり。嗚呼、何等の特操なき心ぞ、「承はり侍り」と應へたるは。

黒がねの額はありとも、歸りてエリスに何とかいはん。「ホテル」を出でしときの我心の錯亂は、譬へんに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思に沈みて行く程に、往きあふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛ひのきつ。暫くして不圖あたりを見れば、獸苑の傍に出でたり。倒るゝ如くに路の邊の榻に倚りて、灼くが如く熱し、椎にて打たるゝ如く響く頭を榻背に持たせ、死したる如きさまにて幾時をか過しけん。劇しき寒さ骨に徹すと覺えて醒めし時は、夜に入りて雪は繁く降り、帽の庇、外套の肩には一寸許も積りたり。

最早十一時をや過ぎけん、モハビット、カル、街通ひの鐵道馬車の軌道も雪に埋もれ、ブランデンブルゲル門の畔の瓦斯燈は淋しき光を放ちたり。立ち上がらんとするに足の凍えたれば、兩手にて擦りて、漸やく歩みうる程にはなりぬ。

足の運びの捗らねば、クロステル街まで來しときは、夜半をや過ぎたりけん。こゝ迄來し道をばい

かに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル、デン、リンデンの酒家、茶店は猶ほ人の出入盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覺えず。我腦中には唯だ我は免すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ滿ち〳〵たりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寐ねずと覺ぼしく、烱然たる一星の火、暗き空にすかして明かに見ゆるが、降りしきる鷺の如き雪片に、乍ち掩はれ、乍ち又た顯れて、風に弄ばるゝに似たり。戸口に入りしより疲を覺えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふ如くに梯を登りつ。庖厨を過ぎ、室の戸を開きて入りしに、机に倚りて襁褓縫ひたりしエリスは振り返へりて「あつ」と叫びぬ。「いかにかし玉ひし。おん身の姿は。」

驚きしも宜なりけり、蒼然として死人に等しき我面色、帽をばいつの間にか失ひ、髮は蓬ろに亂れて、幾度か道にて跌き倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汚れ、處々は裂けたれば。

余は答へんとすれど聲出でず、膝の頻りに戰かれて立つに堪へねば、椅子を握まんとせしまでは覺えしが、その儘に地に倒れぬ。

人事を知る程になりしは數週の後なりき。熱劇しくて譫語のみ言ひしを、エリスが慇にみとる程に、或日相澤は尋ね來て、余がかれに隱したる顚末を審らに知りて、大臣には病の事のみ告げ、よきやうに繕ひ置きしなり。余は始めて病牀に侍するエリスを見て、その變りたる姿に驚きぬ。彼はこの數週の内にいたく瘦せて、血走りし目は窪み、灰色の頰は落ちたり。相澤の助にて日々の生計には窮せざりしが、此恩人は彼を精神的に殺したり。

後に聞けば彼は相澤に逢ひしとき、余が相澤に與へし約束を聞き、又たかの夕べ大臣に聞え上げし

一諾を知り、俄に坐より躍り上がり、面色さながら土の如く、「我豐太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫び、その場に僵れぬ。相澤は母を呼びて共に扶けて床に臥させしに、暫くして醒めしときは、目は直視したるまゝにて傍の人をも見知らず、我名を呼びていたく罵り、髮をむしり、蒲團を噛みなどし、又た遽に心づきたる樣にて物を探り討めたり。母の取りて與ふるものをば悉く拋ちしが、机の上なりし襁褓を與へたるとき、探りみて顏に押しあて、涙を流して泣きぬ。

これよりは騷ぐことはなけれど、精神の作用は殆全く廢して、その痴なること赤兒の如くなり。醫に見せしに、過劇なる心勞にて急に起りし「ブリヨオトジン」といふ病なれば、治癒の見込なしといふ。ダルドルフの癲狂院に入れむとせしに、泣き叫びて聽かず、後にはかの襁褓一つを身につけて、幾度か出しては見、見ては欷歔す。余が病牀をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。たゞをり／＼思ひ出したるやうに「藥を、藥を」といふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を濺ぎしは幾度ぞ。大臣に隨ひて歸東の途に上ぼりしときは、相澤と議りてエリスが母に微なる生計を營むに足るほどの資本を與へ、あはれなる狂女の胎内に遺しゝ子の生れむをりの事をも頼みおきぬ。

嗚呼、相澤謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我腦裡に一點の彼を憎むこゝろは今日までも殘れりけり。

〇米

惡因緣

この世紀のはじめ、黑人亂をなして白人を害せしとき、セント、ドミンゴ島の佛領、ポオル、トオ、

プリンスなるギロオム、ド、井ルニヨツフが開墾地に、コンゴ、ホアンゴとておそろしき老黑奴住みけり。亞弗利加の黃金岸どいふ處に生れて、若き頃は忠實ありと人に思はれたりしほどに、主人ギロオムがキユバに流せしをり、これに隨ひ行きて、危難に臨みて主人の命を救ひしために、比類なき保護を受くるに至りぬ。即坐に自由なる身とせられ、ドミンゴに歸りし後、家に田地を添へて與へられたるさへあるに、ところの習に拘らず、ギロオムが廣き領分の監督に推しのぼされしは、二とせ三とせ後の事なりき。ホアンゴが妻は早くみまかりたりしかば、再び娶らせむといふに承引かねば、舊緣あるあびの子バベカンといへるを妾のやうにして共に居らせつ。とかくする程にホアンゴが六十になりしをり、主人は彼が職を解きて、隱居料あまた取らせ、猶飽かでや、遺言して若干の產を與へむといひき。

ギロオムがこの重ね〴〵の恩惠もまだ黑奴が心を收むるには足らざりけむ、「ナショナル、コンワン」の拙き政策に激せられて、黑人の一揆起りしをり、眞先に銃を手にしてこれに與せしホアンゴは、おのが故鄕を失ひし昔の怨ありとて、主人が頭を擊ちぬきて、主人の妻が三たりの子を伴ひて難を避けたりし家に火をかけ、ボオル、トオ、プリンスに住める遺族の手に落つべき開墾地を思ふまゝにあらし、この領內に立ちたる家をなごりなく打毀ち、相識りたる黑人をつどへて武器を取らせ、これを率ゐて近鄕に横行し、黑人方の軍を援けき。

時としては戎裝して行く白人を途に要擊し、時としては又開墾地に立てこもりたる白人を劫かして、殘害至らざる所なく、かくても飽足らずやありけむ、老たるバベカンと十五歲なる娘トオニイとに復讎の擧を助けしめむとせり。今住める家は大路のほとりに在りて、白人雜種などの餘所に奔らむ

とするが立寄りて、食を乞ひ、宿を求めなどするを、おのれが歸りこむまで欺きて停めおかせ、歸りて直に殺すを常とせり。パペカンは若きとき殘酷なる刑を受けて、これがために肺癆に罹りたるが、娘トオニイの面の色の黄に近きを利として、善き衣着せて、美しく粧はせ、家に來たりし白人の織るゝとある時、勉めてその意を迎へしめぬ。されど身を汚さむとのみ嚴しく禁じて、若しこれさへ許すとあらば、直に殺さむといひ含めたりき。

世の人の熟く知れる如く、千八百三年に將官デッサリンが三萬の黑人を率ゐてポオル、トオ、プリンスを襲ひしをり、島に住みたる白人といふ白人は悉く與りてこれに抗せんとしき。宜なり、今此島にて佛人の手に殘りたるは此一握の土のみにて、これをしも失はん日には白人は夷滅を免かれがたかるべければ。

ホアンゴはこの時部下の黑人を率ゐて家を出で、佛兵の哨兵をだしぬいて彈藥を將官デッサリンに送らむとせし留守なりしが、或る夜風雨烈しきに、家の裏口の戶を敲くものありけり。

臥床に寢たりし老たるパペカンは、起きて腰のまはりに一枚の衣を纏ひたるのみにて窓に出で、誰ぞと問ひぬ。外なる男は窓の下近く寄りて聲を潛めていふ。わが何人なるかを明かさむに、先づ神に誓ひて我問ふところに答へよ。かくいひつゝ手をさしのべてパペカンが手を握り、おん身は黑人にやと問ひぬ。

然かいふ君は白人なるべし。さればこそ此墨の如き夜の面を見るを厭はず、却りて黑人の面を見るを厭ひたまふあるべけれ。恐るゝとなく入りたまへ。こゝに住めるはあひの子なり。又家の裏には我娘一人のみ。

言畢りてパペカソは窓を鎖し、降りて戸を開けむとするやうに見せて、さて鍵をおき忘れたりとつぶやき、そと箪笥を開きて、娘が善き衣二くさ三くさ取出し、二階に昇りて娘を喚覺ましつ。

トオニイ〳〵と二聲よばれて覺めたる娘は、母上、何事にかと問ふに、早く起きてこれを衣よ、衣に白き汗衫、襪をも添へたり、白人の落人戸の外にありて入らむとぞいふあると告ぐ。

白人の來しとや、と臥床より半身を起したる娘はいひつゝ、母が持ちたる衣を受取り、彼は一人にや、入れて悔むことなかるべきかと問ふ。否、一人にて打物をば持たぬやうなり。そが上にいたく人を恐れて、手さへ慄ひたるやうなれば、何事かあるべき。かく云ひて燭に火を點したり。

娘起きて衣を被き襪を穿けば、母は後にまはりて娘の髮をところの風に結びあげて、「コルセット」の後をしめ、帽を戴かせ、庭に下りて客を迎へしめぬ。

さるほどに二三匹の飼犬の高く吠ゆるに驚かされて、長屋に眠りたりしホアンゴが私生の男兒目を醒ましつ。この子は名をナンキイといひて、ホアンゴがある黒人の女に産ませしなるが、弟のゼッピイといへると倶に長屋に寢たりしなり。月光に透かして見れば、裏口の梯の下に客人のひとり立てるあり。かゝるをりに兼ねて敎へられたるともあれば、疾く起きて客の入りし門に奔りゆき、戸を閉ぢむとす。

客は何とも心得ねば、この童の側に進みちかづきて見るに黒人の種なり。驚きてこの家に住むは誰ぞと問へば、素ギロオムといふ人の栖なりしが、今はコンゴ、ホアンゴ主人となりたりと答ふ。彌々驚きて童を撞倒し、鍵を奪はむとする程に、トオニイは燭を把りてはや家の前に出でぬ。

トオニイは燭を把りたるが、勉めて光の我顏を射るやうにしたり。こは面の黒からぬを見せむとて

なりけり。

おん身は誰ぞといひかけて、客は半信半疑して、少女が顔を打守り、仇か味方か、この家のまことの主人を告げたまへといふ。

わが身と母との外には神かけて人はあらじといひて、娘は客を引入れむとす。

客はナンキイが腕を握りたりしが、一足さがりて手を放ち、今此童が家の主人をコンゴ、ホアンゴといふ黒人なりといひしは、信ならぬにやといふ。

やくなきことをといひかけて、娘はもどかしげに足ずりして、その名の黒人は實に此家の持主なれど今はあらず。今は遠く十里の外に在り。かくいひて諸手にて客を捕へ、童には客ありと人にな告げそと教へ、客の手を取りて梯を上らせぬ。

窻より二人が言葉を聞きたりし媼は、燭の光にて客の士官なるを見ていふ。君が佩きたまへる劍にて用心の程もおもひやらる。かくいひつゝ、眼鏡を挂けて、われらは弱き婦女の身なれど、命危かるべきわざなるを知りて、尙君を迎へいれたるに、異國人の習なりとはいへ、恩を仇にて報いむとは、よも君はしたまはじとつぶやくに、客は媼が椅子のほとりに進みよりて、我心は神こそ知らめといひて、媼の手を取り、これを我胸に當て、なほ一目あたりの樣子を見まはしたる後、腰なる劍を解きてさていふ。われはこよなき窮厄に陷りたるものなり。されど恩知らぬ人にあらず、又惡しき人にあらず。

媼はさらば誰ぞと問ひながら、傍なる椅子を足にて推遣りて、客に腰掛けさせ、娘をば疾く廚にゆきて心ばかりのゆふげの設せよといひつけて出しやりぬ。

客は應へていふやう。われは佛蘭西の軍に從ひたる士官なり。されど生れながらの佛蘭西人ならぬは、おん身等も悟りたまひけむ。我故郷は瑞西なり。我名をグスタアフ、フオン、デル、リイドといふ。嗚呼わがふる里。いかなればわれはわが故里を離れて遠くこの島根には來たりけむ。今はフオオル、ドオフアンを立ちてこゝに來ぬ。かしこにて白人のみなごろしにせられしとは、おん身も知りてやあらむ。ゆくてはポオル、トオ、プリンスとこゝろざしたり。將官デツサリンのかしこを圍みて、人の通路を絶たぬひまにと心のみいそがれたり。

媼、なにフオル、ドオフアンを立ちたまひきとや。君が面の色にてこの遙けき道をよくぞ來たまひし。一揆起りたる黒人國の眞中を横ぎりたまひし苦心さこそと思ひやらる。

客、われらの恙なかりしは、全く神のわざならむ。あるじの老女聞きたまへ。本われは一人旅ならず。我一行には伯父なる翁の、妻と五人の子とを引連れたるあり。これに婢僕などを數ふれば總て十二人なり。騎るべきものとては痩せたる驢馬二匹あるのみ。晝は大路を歩まむと心もとなければ、夜のみぞゆくなる。

媼は聞きて、さても／＼と呼び、憫みの色を見せて頭を掉り、一撮みの嗅ぎ烟草を鼻に入れたり。さて問ふ。君が一行とのたまふ人々は、今何處におはするか。

客は答へむとして暫したゆたひしが、思定めたりと見えていふ。おん身には秘匿さむもやくなし。あるじの面よりは猶我顔の光の照り返したれば。おん身も知りたまはむ。こゝより一里ばかり隔たりて、池の岸より遠からぬ處に、山つゞきの林あり。一行はかしこに潛みたり。一昨日のとなりしが、飢渇に堪へねば、かの林を尋ねて暫し憩はむと思定めしなり。ゆうべは婢僕を出して、ところ

のものより麵包と酒とを少しばかり買取らせむとせしが甲斐なかりき。捕へられて殺害に逢はむかとおもふ恐は、彼等の手足を縛りて、はかばかしくはえ尋ねず。さればけふはわれ自ら命に掛けても少しの食を得ばやとおもひて來ぬ。おん身はところのものゝ如く殘忍なる人ならぬに似たり。おん身に逢ひしは天の惠ならむ。

かくいひて媼か手を取り、又語を繼ぎていふ。報は力の及ばむ限すべければ、一籠の食をかれらに得させ玉へ。ポオル、トオ、プリンスまではまだ五日路あり。我一行をかしこへゆき着かせたまはゞ、再生の恩永くわすれざるべし。

媼、まことにのたまふ如し。狂せるに似たるところのものゝ慣は何事ぞ。一人の身の內なる齒と手と、各その形の同じからねばとて挑爭ふに似たらずや。キユパ島のサン、ヤゴに生れし父が子なれば、我顏に白き光の猶少し殘れりとて誰か知るとかは。又我娘は歐羅巴にて稟けし種なれば、面の色も全く藍のやうなりとて何の罪かあらむ。

客、何とかいひたまふ。我を迎へし美しき少女といひ、おん身までおひの子ならむとは、面の色にて推測らるれど、此亞弗利加を故里とすべき人なるに、我等歐羅巴人に等しく、ところのものに窘められたまふは、故ありぬべきとなり。苦しからずば聞かせ玉へ。

媼は掛けたる眼鏡を脫していふ。われらが年ごろ日ごろ貯へたる僅かの財產の、かのおそろしき土人の心を動かすべきを悟りたまはずや。女子には危急を逭るゝ許多のてだてあればこそ、けふまでは免かれたれ。雜種なりとて土人のそをみゆるすものかは。

客、思ひもかけぬとかな。そのおん身等を窘むる土人とは何人ぞ。

媼、此家の持主なるコンゴ、ホアンゴといふ黒人なり。本此開墾地はギロオムといふ白人のものなりしが、かれは一揆の起りし始に、今の持主に殺され、親戚なるわれらはかのおそろしき黒人に驅使はれて、此街道ををり〳〵過ぐる白人の旅びとに、一かけの麵包、一杯の酒を與へむとする毎に、或は罵られ、或は打ちたゝかれて安き心もあらし。畢竟コンゴ、ホアンゴは白人を犬といひ、我等を犬のかたわれといひて窘め、彼が殘忍なる心にはわれらのなからむ後は、一家の産をおもふまゝになさむと願ふと絕えず。

客、あはれなるおん身等が身の上かな。そのおそろしき黒人は今何處にかある。

媼、將官デッサリンが許に今はあらむ。黒人許多率ゐて、彈藥を運びやらむとて出でしは、久しき前の事なりき。若し別に事なくば、十日十二日のほどには歸り來べし。そのをり白人のボオル、トオ、プリンスへ往くを宿したりなど聞かば、親子が命はなきものと知りたまへ。

客、天は慈悲を喜ぶものと聞けば、其禍はなかるべし。されど若し事の露れむ日には、いかにいひ解かむとするも甲斐なきとなれば、今更に懼りたまふべきにあらず。酬は力の及ばむ限すべし。疲れに疲れたる我一行を、一夜二夜のほどなりとも、この屋根の下に休ませたまはずや。

媼、年若き人。何事をかのたまふ。道ばたなる此家に十人に餘る旅人を宿して、いかでかところのものに知られざるべき。

客、さなのたまひそ。我身今より自ら池のあなたへ往き、人々を促したてゝ、夜の明けぬまにこゝへ伴はゞ、人の知得べきにあらず。猶心もとなくおもひたまはゞ、人々一間に籠もりて、戶を閉ち、外に出でずば、いかに疑深きものなりとも探知ると難からむ。

嫗、ことわりなり。されど先に黒人の前哨と覺しきもの、此村に入りていふを聞きしが、今よりおん身が出て往きたまはゞ、泚のこなたにて一隊の黒人に出逢ひたまはむも計りがたし。

客、さらば是非なし。一行を伴ふとはあすの夜までおもひ留まるべし。それまでに一籠の食を送らむと思へば、われらを哀れとおもひて其用意をしたまへ。

客はこの言葉と倶にあまたゝび嫗が凋びたる手に接吻しき。

嫗、餘りに心を苦めたまふな。我子の父も歐羅巴人なることをおもへば、君が一行なる白人をあはれと思はざらむや。明朝一封の書を作りて、人々をこゝへ呼寄せたまへ。先に戸口にて見たまひし黒人種の子は、食物を盛りたる籠と共にこれを持行きて、その夕はかしこに留まり、明後日の朝は人々を伴ひて歸らむ。

此問答の間に廚にて饗膳の設をなしはてたるトオニイは、皿鉢など携へて出で來ぬ。傍なる机に白き布をひろげつゝ、客のかたを一目見て、母に向ひていふ。母人、まらうどは門の下にて驚きしが、今は心定まりしならむ。われらが手には毒もなく、刃もなし。黒人のホアンゴも家にあらねば。この語氣は戯謔のさまを見せたり。

嫗、世の諺にも身を焦したるとあるものは、永く火を畏るといへり。家の主人の何種の民なるかを見ずして閾を踰えむは危きとなれば、客人の用心深かりしも理なり。

娘は母の前に進みていふ。われは燭の光に面を照させしが、客の心は黒人の事のみおもひつゞけたるゆゑ、猶定かに見ることを得ざりけむ。巴里、マルセイの女の出でゝ門を開くを見ても黒人なりと思ひしか知れず。

客は輕く少女の背に手をまはして少し慚を含みていふ。君が笠の半ば面を掩ひたればこそしばしはたゆたひぬれ。若し今の如くこの涼しき目を見ば、縱令膚は黑くとも、共に葡酒の杯をも飲まざらむや。

媼は客を勸めて坐に着かしめたるに、少女も其側に坐して、肘を机の上に搘き、横より客の物食ふ顏を覗きたり。

客は少女に年は幾つ、國は何處と問ひしに、媼代りて答ふるやう。十五年前の事なりしが、本の主人ヰルニヨッフぬしの內君と歐羅巴にゆきしとき、巴里にて身重くなり、此子を生みき。後にコマルといふ黑人の妻となりしをり、連れ子として伴ひゆきしが、トオニイ、ベルトランといふ娘が名は、マルセイの豪商ベルトランの姓を冒したるまゝなり。

少女、まらうどは佛蘭西に居たまひしとき、ベルトランといふ人を識りたまはざりしか。

客、いな。佛蘭西といふ國はいと廣し。又西印度へゆく舟に乘込まむと暫し待合はせし程には、かかる名の人に逢はざりき。

媼、人の噂に聞きしが、ベルトランの君は今佛蘭西にあらずといへり。名聞を好み、榮達を求めむとする心は、家業を嫌ふ基となりて、革命の頃より公事に與かり、千七百九十五年に佛蘭西の公使と倶に、土耳格の廷にゆきしより、また歸りぬといふ沙汰を聞かず。

客は少女の手を執りて。さらば君は富豪の女なり、將來たらば父のかたへ招かれて、今には似ず、ゆたかに世を送りたまはむ。

媼は怒を抑ふる如きさまにて。思ひもかけ侍らず。ベルトランの君は娘のまだ生れぬさきに巴里に

て法廷に出で、我子にあらざるよし訴へき。こは富める家の女を娶らむ障とならむとを厭ひてなりき。この言葉を聞きし我怨を思ひ玉へ。我はこれがために臆熱といふ病にかゝり、この病のまだ癒えぬに主人井ルニヨツフの君は鞭六十の刑を加へ玉ひぬ。其餘波は倚痨の病となりて我身を困む。手にて額を支へて物おもふさまなる少女は客に向ひて、君はいづこよりか來て、いづこへか往かむとし玉ふと問ふに、客、われはストリヨオムリイといふ伯父と倶にフオル、ドオフアンより來ぬ、伯父は若き從弟二人をつけて、池に近き林の中に殘しおきたり。など語り、又少女に問はれていふ。かしこの市に一揆の起りしは夜半なりき。反間のものありて合圖をなすと齊しく、殘酷なる黑人の兵は、來りて白人をみなごろしにしつ。白人の生を逃れて歐羅巴へ渡らむとするものあるとき、其ゆくてを遮らむと、佛蘭西工兵團の下士にて黑人の長となりし男は、岸邊に繫ぎたりし舟を悉く燒きぬ。此時一族は手に當りしものゝみを持ちて、閭門の外まで逝出でしが、岸の方にも一揆の起りたれば、止むとを得ず二頭の驢馬の力をたよりになして、島國を横ぎり、僅に殘りし佛兵の砦ポオル、ドオ、プリンスへゆかむとてこゝまで來たり。

少女、いかなればかしこなる白人はかく迄、黑人には惛まれけむ。

客、白人と黑人との主僕の中に穩ならぬことありて亂の源とはなりしならむ。我は白人に罪なしといふものならねど、此不平の事は今起りしにあらず、數百年の昔より實に此の如くなりしなり。さればこの度の亂を惹起しゝは、これのみにはあらで、自由の說盛に行はれて、開墾地の民一時に狂し、おの〳〵鎖を脫して、思ひ〳〵に平生の仇を報いんとしたるなり。殊にわが聞きしうちにて、珍らしく又恐ろしかりしは、ある黑人の娘の行なりき。一揆の起りし初、此娘はその頃、市に流行せし

黄熱といふ病にかゝりしが、昔主人とたのみし時、おのれのつれなきを憤りて苛くあたり、果ては雜種の開墾者に賣渡したる白人の、今黒人に迫られて近きほとりの薪小屋に隱れしを聞きて、夕暮に弟を遣りて招寄せつ。男は此少女の病を知らねば、うれしき情に感じて共寢をなし、半晌ばかりも床に在りしが、少女は忽面の色を變へ、冷然たる怒をあらはし、われは疫病やみなり、胸には病毒みち〳〵たり、それを知らで汝は腐觸れたり、往け、往きて汝が友なる白人ばらに此病を傳へよと叫びぬといふ。これを聞きて嫗は速りに其忌はしさを鳴らす程に、客はトオニイに向ひて、おん身はよもかゝる殘忍なることはえし玉はじといふに、トオニイは少し怯れて地に俯し、微なる聲にて思ひも寄らずと答へぬ。

客は食畢りて手巾を机の上に置きて、白人にいかなる殘酷なる行ありきといへども、かゝる報を受くべきにあらず。是れ天も許さぬ事なるべし。されば神の使は白人を助けて讐を報いしめん、といひつゝ立ちあがりて窻の外を打眺めたり。この時風に逐はるゝ村雲は月と星とを蔽ひて過ぐ。後にては嫗と少女と顔見あはせしやうなりき。別に物を示しあはしきとは見えざりしが、客の心の裡におもしろからぬ感觸起りぬ。客はさりげなく振返りて我寢牀はいづこにかといふ。

客の促すまでもなし。壁に掛けたる時計を見れば、早や眞夜中なれば、嫗は手に燭を把りて先に立ち、客に會釋してこなたへといふ。客は後につきて長き廊下を行く程に、娘は客の脱棄てし外套などを持ちて隨ひぬ。嫗は軟なる褥を指して、こゝに寢たまへといひ、娘にはまらうどに湯を參らせよと命じおきて出でぬ。

客は劍を室の片隅に倚せかけ、腰に帶びたりし短銃一對を卸して机の上に置くに、娘は褥の上に白布

を掛けてふしどの用意す。見廻せば此室の美しさ、必ずもとの開墾地の主人の猍たる處なるべし。かく思へば客の心安からず、饑ゑたりとも、渴したりとも、人々の居る森に歸らざりしと今はなか〳〵に悔やしうなりぬ。

近き廚に徃きて、芳しき草を入れたる湯一桶もてきしトオニイは、この隙に窓に倚りて暗き外の方を見て居たりし客に、ゆあみせよと勸む。客は默したる儘にて領をはづし、中單を脱ぎて椅子に腰かけ、今や足を露はさむとしたり。

この時小膝つきて浴盤の用意したる少女の優しき姿を打見るに、波の形したる黑髮は蹲るをりに前に落ちて乳房のあたりにあり。唇のめぐりにも、又下を向いたる目を蔽ふ長き睫毛のめぐりにも、一種人を動かす氣色あり。唯色のみは少し目に障れど、かゝる美しき姿を見るは今こそ始なれとおもひぬ。已に門口にて見しときもしかおもひしが、今おもへば此少女は誰やらむに似たり。誰に似たるかおもひ出さむとはすれど胸に浮ばず。されど此少女は誰やらむに似たるために、始て見し時より惡人なりとはおもはれざりき。

いかで此少女の心根探りみばやとおもひし客は、少女の立ちあがるをり、徐に其手を摻りて我膝の上に居らせ、いひかはしたる人やあると問ひぬ。否と應ふるとき、黑く大いなる目は優しくも羞を含みて下に向きたり。さて膝を下りむともせず、言葉を繼ぎていふ。近き處のコチルリといふ若き黑人、三月がほど前に妻にせむといひしを、猶餘りに穉ければいなみ侍りぬ。客はもろ手にて纎き少女が躰を抑へて猶物語するに、少女は客の頸に掛けたる美しく輝く黃金の十字架を手まさぐりたり。

客、わが故さとにては十四の上を七週踰えたる少女は人の妻となるとあり。君が年は。
少女、十五になり侍り。
客、さらばいつまでか待つべき。おん身を妻にせむといひし若人は望ましきほどの財産ありしか。
十字架を手より放ちたれど目は下に向きたるまゝにて。否、コテルリは近き比富める人となりぬ。
主人なりし開墾者の領地は悉く其父の手に落ちたれば。
さらば何とてその人には從ひたまはざりし、といひて優しく額髮を平手にて掻上げ、その人のおん身が心に協はざりしゆゑならずやと問ふ。
少女は輕くかぶりふりて笑ふに、客は耳に口さし寄せて、さては白人ならでは君が心に協はぬなるべしと打戯れていふ。少女はしばし夢見る如きまなざしして物案ずるさまなりしが、色黒き面をあかめて客の胸に伏しぬ。此態度は客の心を奪得て、その疑は神の手もて拂ひしやうに霽れたれば、客はかはゆき君かなとてかき抱きぬ。
此態度はいかに疑はむとするも疑ふべからず。一擧一動、都て人を欺かむとするものなどの做得べきことは見えざりき。身を取卷きし村鳥の飛去りし如く、心地すが〳〵しうなりて、今はしばしなりとも此少女心を疑ひしことを悔みたり。客は稚兒を弄ぶやうに、少女を膝の上に載せたるまゝにゆり動かして、蘭の如き氣を吸ひ、暫く餘念なかりしが、おのれがかゝる異心ある人を疑ひし罪を謝するしるしにとて、唇を少女が額にあつるを、避けむともせざりけり。
さるほどに少女は遽に打驚されしさま見えて頭を擡げ、廊下を歩みて戸に近く人ありやなしやと思ふやうなりしが、さることなきを知りて又靜まり、夢見る如く、物思はしき如く、手にて胸の前なる

巾の歪みたるを正し、忽又打笑みて客の面を仰見て、湯のさめもやせむといふ。

客は思に沈みて答へず。少女はこれに驚きて、何事のおはすらむ、かくわれを見詰めていらへをもしたまはぬは。少女は羞かしさを包まむとする如く、指にておのが胸のあたりの衣を引きて、故らに高く笑ひ、わが着たる衣の鄙びたるをや笑ひたまふ。

掌にて額を擦りて、ため息を抑へたる客は、徐に少女を膝より卸し、餘りに君の人に似たればとのみいふ。その面愛はしげなるに、少女は近く依りて客の手を取りて、似たりとは誰に似たりとのことぞ。

客、おん身に似たりといふは、名をマリヤンチ、コングレエウといひし少女なり。革命の起らむとする頃なりしが、ストラアスブルクに在りて彼を見き。父はかしこの商人なり。我初戀は半協ひて、少女と母との許を獲つ。この青空の下にかゝるやさしき心根の少女のまたあるべうも覺えず。その少女を失ひしをりのこと、おん身が姿を見るにつけ、頻りにおもひ出でられて、涙を抑ふること能はざりしを、おん身もあはれと見たまへ。

トオニイはひたと客にすがりて、さては其少女は世になき人なりとか。

客、彼は死にき。彼の死にけるとき、われはまことの情といふものを知りぬ。おそろしき革命の裁判所の開かれし時なりしが、われ輕率にももろ人の中にてこれを誹りしに、訴ふる人ありて邏卒の群はわれを捕へに來ぬ。早くこの由聞えければ、街はづれまで逃れて潛居るほどに、我を尋ねて得ざりし邏卒どもは、わがいひなづけの妻の家に亂入りて、往方をや知りたると問へど、知らずとのみ答へぬ。賢を失ひてたゞ止むべくもあらぬ無殘なる荒男、マリヤンチをも公に負きたる一人ありと

いひなして、そがまゝおきての庭に引往きぬ。この風說を聞きて、われは隱家を馳出で、刑塲に跳入りて、こゝにこそ我はあれ、獄卒ばらと叫びぬ。この時少女は大いなる斧を吊りたる架の下に立ちたりしが、不幸にも我を識らざりし撿視の役人に問はれて、我を一目見たるのみ、そのまゝ背向になりて、この男は見覺侍らずと答へぬ。この一目心の底に彫りつけたる如くにて、今も忘られず。物のあはれを知らぬ獄卒の打つ太鼓の音と、觀者のとくとくせよと呼ぶ聲との裏に、斧の光一閃、美しき首は軀を離れき。いかにして其塲を逃れけむ、われは知らず。刑果てゝ後、十五分ばかりに某といふ友の許にて我に還へりたれど、心はさながら狂したる如く、物のあやめもわかぬを、友なる人夜に入りて車に舁載せて、ライヌ河のあなたへ遣りぬ。

客はかく語り果てゝ、面を手巾にて掩ひ、つと立ちて窻のほとりへ往くを、少女は暫し見送りしが、何思ひけむ忙しく追ひかけ往きて、諸手を客の肩に掛けて泣きぬ。

客はいまさらにあやしき緣の末いかならむと思煩ひけり。されど我身のこれにて難をまぬかれて、此家のうちにて娘の方より殘忍なるふるまひなかるべきをも知りたり。少女は床の上に手を束ねて泣居たるを、客はさまざまにいひ慰め、いひなづけの印とて、わが領に掛けたるマリヤンチがかたみの黃金の十字架をはづして少女の首に掛けつ。少女は猶も泣きやまず。賺す言葉も聞えぬさまなり。客は床の片端に腰かけて、少女が手を取り、撫でさすりつ、脣にあてつ、繰返していふ。夜あけなばおん身が母に告げて、醬を堅むべければ、いたくな泣き玉ひそ。われ貧しけれど、アアル河のほとりにさゝやかなる田地あり。人に賴らで世渡るほどのことは難からじ。おん身が母は老たりとて、かばかりの旅をばしつべし。家狹けれど妻と姑とをいるゝには餘あり。家には花植ゑたる園添ひた

り。畑の外に牧もあり。葡萄作る山もあり。父も性やさしき翁なれば、我命助けきといふ妻を心よく迎へざらむや。

かくいへど少女が涙は唯流れて、褥も濕ふばかりなれば、客も燃うるませて、われいかなる罪をか作りし、君はわが犯し丶罪を死さしとか、我戀は浮きたる戀ならず、圖らず心地惑ひてかくなりたれど、君を操なき人とおもはむやうもなしなど切にいふ。

かくても少女は言葉なし。客は猶居よりて、曉の星かゝやげり、おん身が母の來てこゝにあるを見ばいかにせむ、心を勵まして身を起し、暫しなりとも部屋に歸りて眠り玉へ、力なくば抱きて部屋に送らむもいと易し、いざ〳〵といへどいらへなし。組みたるもろ手の上にうつぶしになりたる頭はいよ〳〵沈みて、亂れたる褥の上を起たむともせず。

朝日の光に窓ははや白うなりぬ。うち措くべきならねば抱きあぐるに、肩より手足長く垂れたる少女が姿、息ある人とは見えぬばかりなり。梯子を辛うじて登り、少女が部屋に持ちゆきてふしどの上に置き、さて先に言しとども又繰返して告げ、片頰に唇あてゝ急ぎ我室に歸りぬ。

夜明けてパペカンは娘の部屋にゆき、臥床の端に腰を掛けて、よもすがら案じて得たる計を聞ぎしめしつ。黑人コンゴ、ホアンゴの歸らむは二日が程なり。それまで客人をこの家の中に留め置きて、同行の人々を寄せつけざる手段あり。そは客を欺きて將官デッサリンのこゝを過ぎむといふ噂あり、三日がほどには事果つべければ、そが上にて人々を招きよせむと約すべし。又人々のこゝを隱家とせむ望を懷きて餘所に遷らざるため、食をも送りておかむ。此一行は物多く持ちたるべし。努心ゆるして隙を見せたまふな。

トオニイはこの時半ば床より起きあがりしが、面に怒をあらはして、又もさる恐ろしき心をおこし玉ふか。つゆ疑ふ心なき客人をかくまで欺かむとのたまはゞ、われ往きて眞を打明けむ。

媼、そは何とかいふ。且驚き且怒りて目をみはり、もろ手を腰のあたりに支へたる母をうちみやりて、少女は聲を沈めていふ。今宿れる客は佛蘭西人なりといふにしもあらず。聞けば恩もなく、怨もなき瑞西といふ國の人とぞいふなる。此土地を拓きし白人こそ苛酷なる行ありけれ。彼人の住みきといふ島のとにはあづからず。又まらうどの人がらをも見たまへ。黒人なりとて殘忍に扱ふべき人かは。

媼は唇戰はせていふ。われは汝がいふことを聞きて、驚き呆れて答へむすべを知らず。今の客を罪なしと事あたらしくいふは何事ぞ。先頃家の戸口にて棒もて打殺しゝ葡萄牙の若人に何の罪かありし。三週もたゝぬ前、家の中庭にて射殺しゝ和蘭人二人に何の科かありし。其外鎗、劍、鳥銃などもて此家の内にて殺しゝ許多の白人も、ひとり／＼に問はば、なでふ罪科あるべき。今遽におもひ出でたるやうに、客人の罪のありなしを問ふこそこゝろえね。

少女、天に居ます神も聞きたまへ。そのおそろしき惡業數へあげて誇るべきことかは。強ひられたればこそ今までは仕へたれ、我命にかへても此度の客人をば助けむとおもふものを。かく言ひ放ちて少女は起ちあがり、パペカンに向ひて居り、其氣色思定めたる如し。媼は俄におもてを和げて、さおもはゞ旅人をたゝせもせむ、されどホアンゴの歸らむ日には、といひかけて起ちあがり、娘の部屋を出でむとして、その折には白人のこゝに宿りしを告ぐべければ、それを難なく逃がしたるゆゑよしは汝が口よりいひとけかし。

言葉はゆるやかなれど、内に怒を含みたるがおそろしきに、日頃知りたる母の心、此好機會をあだに過して、白人の旅びとをたゝせむとはおもはれず、直に近き開墾地の黒人を招寄せて、客を殺さむとするともやと思へば心安からず、少女は急ぎ衣引きつくろひ、母の後を追ひて梯を下りぬ。楼下に來たりて見ればペペカンは食物を藏めたる棚のほとりにて何事をかなし居たりしが、今起ちて絲車の下に坐りぬ。

少女は心もとなきさまにて扉の前に立ちしが、この板のおもてには一張の掟文を貼りて、白人に宿かしたる黒人は死罪に行ふべしとあり。少女は暫しこれを打守りてありしが、忽自ら罪を知りたるさまにて母の前にはせゆきぬ。

さて取付きていふ。客人の事につきて前後もわかぬ言いひしを心にかけたまふな。まだ目の善くも醒めぬほどに、おん身が言葉を夢の如く聞きて、ふと爭ふ心起りしを深く咎めたまはで、本の如く使はせ玉へ。われとても國の掟背くべきやうなし。

嫗は初めより少女がふるまひを打守りてありしが、かく心を改めつと聞きていふ。さても客の幸多さよ。汝が言葉にて今日の命は助かりぬ。

言畢りて起ちあがり、卓の上なりし一碗の牛乳を窗の外へ棄てぬ。少女はひたと呆れて母の顔を見つめたるまゝひざまづきて起きむともせず。嫗は近く寄りて扶起していふ。いかあれば一夜の内に心變りし。昨夜客人にゆあみせさせし後、久しく共に物語やしつる。

少女が胸には波打てり。母の問にはえも答へで、うつむきて立ちたるが、手を額にあてゝかつ〴〵いふ。夜あやしき夢見しより心地惑ひぬ。されど今も猶病み玉へるおん身が面を善く見れば、迷の雲

睹れたり。かく云ひつゝ母の手に居をおてゝ、げに白人の憎むべきは幾歳經とも忘るべからず、今又熟〳〵思ひさだめぬ。かくいひかけて後を向き、おもてを前垂に埋めて、心安くおぼせかし、ホアンゴの歸りて流石に我娘なりといはむやうに、此度の事をもしとげむとこそ思ひ侍れ。

娘の常ならず心猛がしきは故ありげなり。事の起りは奈何とおもひ煩ひて媼は默坐したり。この處へ樓を下りてきしは客なり。兩三日が程を黑人ホアンゴといふものゝ留守宅にて過さばやとおもへば、人々を率ゐて來たまへと伯父の許へいひやる文を手に持ちたりしが、やさしく親子に禮をなして、媼に封筒をわたし、早く林の方へ人をやりて約せし如く計らひ玉へといふべべカンは立ちあがりしが、面に穩ならぬ色を見せて、封筒を戸棚の中に置き、さていふ。餘りにいやなき言なれど、おん身がこゝに端近く居たまはむは危し。疾く二階へ上り玉へ。戸の外には黑人の隊、みち〳〵たり。デッサリン將軍の本陣、程なくこゝを過ぐべしと口々にいふを聞きつ。誰も入來べき此家なれば外にすべなし。中庭の方へ向きたるおん身が部屋に匿れて、扉をも窓をも緊しく閉ぢて、人目にかゝらぬやうにしたまへ。

客、なにとかいふ。デッサリン將軍の今この地へ。

媼、こゝは問答すべき處ならず。おん身が部屋にていふべし。かく云ひて心いそぐさまにもてなし、あたりの杖を手に取りて鋪板を三たび敲きつ。

客はかく威されて、下の間を出でむとせしが、戸の處にてふりかへりて、我身の上を思ひわづらふ人々の許へせめて使はやり玉へ。

媼、のたまふ迄もなし。かく云ひて戸を輕く敲くほどに、黑き童いでぬ。この時客に背を見せて壁

に掛けたる鏡の前に立ちたる娘を媼は呼びて、室の隅なる食を盛りたる籠を取上げさせ、娘と童とを伴ひて客のあとにつきて梯をのぼりぬ。

部屋に入りて椅子を引寄せ、ゆたかに腰かけたる媼は客に向ひて、昨夜デッサリン將軍の隊の焚けりと覺しき火影の山の上に見えしとを告げぬ。こは虛言ならず。されど黑人の士卒などは絶えて見えざりしなり。媼はかく先づ驚かしおきて、さておのれが眞心ありて、縱令黑人の隊に求めらるゝともありとも、客に難儀あらせじとおもふ由を告げ、客のあまたゝび促したる上にて、食を盛りたる籠を娘の手より受取り、これを黑き童にわたしていふ。こを池の畔なる林に持往きて、客人の同行のかしこに居玉ふに贈り、客人の恙なくて、同じく黑人に苦めらるゝ或る白人の友のもとに居り、猶に黑人の士卒の絶えむをりを覗ひて人々を迎へむとおぼすとを善く傳へよ。心得たるか。

童、友をいざなひて往きて釣したるともあれば、池は善く知りたり。ことづてたまふとも忘れじ。

童の籠を頭の上に戴くほどに、客は指環を拔取りて人々の疑ひたまはむも計られねば、これをストリヨオムリイといふ伯父の君に見せよとて童にわたしつ。

媼は客のこゝに居るを人に知らせぬためなりとて、娘に窓を鎖し、鍵かけさせなどして、「カミン」爐の上なる燈に自ら火を點さむとするに、火口濕りたればつかず。この隙に客は輕く手を少女の背にまはして耳につきていふ。昨夜はいかにか睡りたまひし。われ等二人の事を今母にな告げたまひそ。

娘は母もや見ると氣遣ふさまにて客の手をほどき、此身をだに棄てたまはずばいかでか告げむ。

母の詭計を目の前に見る少女が心苦しさはいかならむ。さればとて眞を告げむよしなければ、まら

うどに朝げまゐらせばやといひさして、急ぎて梯を下りぬ。
棚を開きて見れば、先に母の入れおきし文は猶そのまゝにてあり。若し文のゆくへを母に知られて、事のやぶれとならばなれ、客と共に死なばやと思ひさだめて、封筒を竊みいだし、今出行きし童のあとを追ひて街に出でぬ。
人々をこゝに呼寄せて、最早客にはあらで夫なる人の味方だにあらば、事の不意に起りて、母の驚慌てたるをりを見あはせ、眞を打明けむとおもひたれば、少女はかゝる英斷をなし得たるなり。
少女は息せはしく童に追ひつきて、林の中なる人々につきての謀を、母のおもふ由ありて變へたれは、急ぎて來ぬ。此手紙をストリヨオムリイの君にわたして人々を伴ひ來よ。善くせばホアンゴの歸りて褒めたまはむ。
童、好し／＼姉御のいふまゝにせざらむやとて、封筒を衣のかくしに入れ、人々の來むといはゞ、われも共に歸るべきか。
少女、固よりなり。道知らぬ人々なれば、先にたちてしるべせよ。童は軍勢の通らむも知られず。眞夜中頃に立ちて、明けぬまに伴ひてよ。いかに。これも能くせむか。
童、ナンキイなるものを。白人ばらをおびき寄するとのいかで難からむ。ホアンゴの褒めむを見たまへ。
トオニイは急ぎかへりて朝げの用意をなし、持ちて二階に上りて見れば、母は猶客と對ひて居り、食果てゝ母子下の間に來ぬ。
暫くして嫗は戸棚を見るに文なし。手を額にあてゝ考ふるさまなりしが、娘を呼びて。われは客人

の手紙を受取りしがいづこに置きしか忘れつ、汝は知らずや。

下を向きて少し躊躇するさまなりしが、娘、手紙は客人のそのまゝに收めて二階に持返り引裂きて棄てたまふを見しやうなり。

媼は目を睜りて娘の顏を打守りしが。そは餘りにまことしからず。われは確に受取りて此棚に置きつとおもふに、今見えぬはいぶかし。かく云ひつゝこゝか、そこかと搜せどなし。年老たる人の癖とて、物置忘るゝこともしば〳〵なれば、はては思絶えて娘のいふ如くならむといひぬ。されど媼は暫しありて又いふ。口惜しきことしてけり。彼手紙を取りて置かば、ホアンゴの歸りて林の中なる人々を誘ふてだてともなるべかりしものを。

晝も夕も食卓にて手紙の事をバベカンの問はむとしたりしを、トオニイ傍より打消して客にしかと答へさせず。夕食畢りし時、媼は用心のためなりとて、客の室を外より鎖ざし、明日は怎にか欺きて再たびさきの如き文を得むといひ〳〵寐ぬ。

母の寐しを覗ひてトオニイは我臥房に入りしが、床の傍なる壁に聖母の像のかゝりたりしを卸して椅子の上に据ゑ、おのれは其下に跪きてもろ手を組合はせたり。さて心を籠めて祈りていふ。慈悲深きマリヤの神。またおん子なる救世主も聞きたまへ。わが造りし罪はいと深し。されど今までの事は夫と頼む人につゆ殘さで告げ、きのふの夕暮に無慙にも誘寄せし恐しき心をも隱さじとおもひ侍れば、彼人の心釋けてわれを歐羅巴へ伴ひたまはむやうに護り玉へ。

この祈禱果てたるとき、何となく心强うなりたれば、立ちあがりて鍵を取り、燭をも把らで狹き廊下傳ひに客の室へ近きぬ。此鍵は家の中なる戸を悉く開くべき鍵なりき。

トオニイは徐にかの部屋の戸を開きて、熟睡したる客の床の前に來ぬ。月の影は若く美しき顔にさして、夜風窓の隙より入りて額髪を吹きたり。息の我おもてに觸るゝまで近づきて名を呼べどこたへず。客は夢に少女を見たりと覺しく、顫ふ唇よりかすかに聞ゆるは、トオニイといふ名なりけり。少女が心はこの時いかに苦しかりけむ。客は今天國に遊べるものを、いかでか呼びさまして此穢土の事を聞かせむ。呼ばでも醒むるをりなからずやはと思へば、床の前に跪きて、輕く客の手を握り、これにあまたゝび唇をあてつ。

この時少女が胸つぶるゝとこそ出來たれ。遙に中庭のかたにあたりて、人馬の聲、うちものゝすれあふ響して、そが中に際立ちて聞ゆるは、思ひしとよ、黒人ホアンゴが聲なり。彼は案内もなくデツサリン將軍の屯したる處より歸りぬとおぼし。

少女はわなゝく膝を踏みしめて窓に近づきしが、我影を見せじと窓かけの蔭にかくれて聞けば、母の聲にて留守の間のとなにくれとなく告げて、白人の家に宿りたるとをもいひたり。黒人は聲をかすめて、部下に物おとなせそといひつけ、又媼に問ふ。客の臥したる室は何處ぞ。媼、部屋はかしこなり。唯心もとなきは娘がふるまひの常ならざりしことなり。推するに娘は心がはりして、謀のうらをかゝむとするならむ。今宵は早くふしどを脱けいでゝ今猶客の室に在り。客は早や落ちたるか。さらずば今頃遁れ去るべき道を求むるなるべし。

黒人、そは餘にまことしからず。少女をかゝるをりに使ひしと幾度ぞ。かく答へて又聲を勵まし、ケルリイはいづこにある。疾く鳥銃取りて來よ。オムラも來よと呼び、梯をさして來ぬ。

この物語はまことに一瞬の間の事なりき。聞きし少女は手足も凍るゝばかり、立ちたるまゝに呆然

たるは、いなづまに觸れて心喪ひし人に似たり。一たびは客を呼覺さむかとおもひぬ。されどこの期に及びてのがれ去るべき道なし。若し打物とりて向はゞ衆寡敵せずしてたちどころに殺されむ。殊に愛ふべきは客いま醒めておのれをこゝに見ば、手引したるものとおもひあやまりて、我言葉を聞かず、無謀にもコンゴ、ホアンゴの毒手に身を委ねむとなり。

ふと目にとまりしは此室の壁にかけたる一條の繩なり。少女はこれを取卸して、神の惠なりとおもひ定め、これにて客が手足を幾重ともなく縛めつ。客の夢心地に拂ひのけむとするとき、はや端引きしぼりて床の足に結ひつけたり。これにて心落居たれば急ぎ客に接吻して、今や梯を踏みならして近づきたるホアンゴを出迎へぬ。

黒人は心にトオニイを疑ひたりしに、今その部屋より出でたるを見て流石に驚きまどひて、廊下にたちとまりしかば、從ひきし男の松取りたるも、打物持ちたるも皆留まりぬ。

ホアンゴは一聲、この恩知らずと叫びぬ。パベカンはいち早く室の戸に近づきてそのあきたるを見つゝいたく驚くをりから、ホアンゴ聲を掛けて、いかに旅人は迯げつらむといふ。パベカン面色變はりて、二足三足たちもどりていふ。憎き女、善くもたばかりしよ。旅人は早や迯げたり。遠くはまだ行かじ。人々疾くゆきて口々を固めずや。

トオニイ、何事のありてか斯くは騒ぎたまふ。かくいひて驚きたるさまにて黒人主從を打まもりてをり。

ホアンゴ、猶しら〴〵しき氣色を見するよと、胸さき引捉へて、客の居たりといふ室へ引きもてゆく。

トオニイ、こは物にや狂ひたまふといひつゝ引かれゆくに、室に入りたるとき、ホアンゴも意外のありさまに、開きたる口えも塞がず。トオニイ振りほどきて床を指し、旅人はかしこにあり、縛めしはわが業なり、かくまで心盡したるものをと云ひかけて背向になり、机に倚りて泣くさまなり。黒人はベベカンに向ひて、さてもおん身、いかなるそら言をかわれに告げし。

ベベカンは耻ぢたる色見えて、床の下に跪き縄の結ひめ改めたりしが、嬉しや旅人は逃げざりけり。されど事のもと末はいかにとも會得しがたし。

黒人は拔きたりし刄を鞘に收めて客に向ひ、いづこより來ていづこへ往く人ぞと問ふに、客は繩をほどかむともがきつゝ、悲しげにトオニイ、トオニイと呼ぶのみにて、答へむともせず。ベベカン代りていふ。こはグスタアフ、フオン、デル、リイドとて瑞西の人なるが、今池の畔の林の中に隱れたる一類の白狗らと、フオヽル、ドウフアンより來つるなり。

少女は机に頬杖つきて深く物おもふさまなり。ホアンゴ進寄りて頬を撫でさすり。いかに善き子、故なく疑ひてわがいひしとを心になかけそ。媼もあたりに歩みよりしが猶疑の霽れねばか、頭打かたげて、もろ手を腰のあたりにあてたり。われは心得がたくおもふとあり。旅人は身の危ふさ知るべきならぬに、何の爲におん身は彼をことさらに縛めたる。

悲しさと腹だゝしさに只に涙を流したるトオニイは、俄に母の方へふりむきていふ。何の爲と問ひたまふか。おん身が目も耳もさとからぬ故なり。旅人は身の危ふさを熟く知りたる故なり。遁れ去らむとしければなり。我に逃路をしへよと迫りければなり。おん身をさへ殺さむと謀りければなり。われ若し縛めざりせば夜のまだ明けぬ間に、おん身が命はなきものとなるべかりければなり。

ホアンゴはさま〴〵に少女を慰めて、パベカンが猶言爭はむとするを抑へ、鳥銃持ちたる兵に疾くこの旅人を率きゆきて法の如くせよといふを、パベカン推しとゞめて耳に口寄せ、今此旅人を殺さむはいと易し、されど森には猶一族のもの潜みてあり、そを森にて攻め撃たば許多の怪我ありぬべし、この旅人に文かゝせて閒曠地に誘出さば勞せずして事成らむ。ホアンゴ此謀に從ひぬ。されど文かゝせむにも、夜の餘りに更けたれば、番兵二人殘しおき、自ら縛めの綱をあらため、人して猶緊しく結ばせて室を出づれば、人々も後につきておのれ〳〵の臥處に入りぬ。

トオニイはホアンゴと握手して、靜にやすらひ玉へと云ひ、自らも臥床に入りしが、家の內の寐しづまりしを覗ひて、獨起き、後門より野路に奔りいでゝ、ストリヨオムリイが一族の來べきかたをさしていそぎぬ。思出すも口惜しきは、客人がしばられたるまゝ床の上より我を睨みし一目の裡に、怨むが如く嘲けるが如き色みえたりしとなり。わが淸淨なる愛に、いまは一種言ふに堪へぬ苦を添へたり。それを思へば客人を助けむために回らしたる此謀の螢となりて、この身の死なむこそなか〳〵快からめ。

人々の來べき路のかたへに一株の松あり。トオニイはその後に立ちて待つほどに、東の地平に一條の白きいろの見えそめし頃、一群の案內して歸りくる黑奴ナンキイが聲、森を隔てゝ聞えぬ。この行はストリヨオムリイを頭に驢に乘りたる夫人、母の側にそひてゆく小供五人、三僕二婢なりき。小供五人の內、アデルベルト、ゴットフリイドの二少年ありて、一は十八歲、一は十七歲になりぬ。二婢の內、一人は乳のみごを懷にしたれば、驢に騎りて隨ひたり。

絹の如くに途上に横はりたる木の根をふみこえて、靜に歩みくる十二人のむれは、彼松の樹のほとりに近づく程に、トオニイはつとゆくての道に出でゝ、留まり玉へ、人々と呼びぬ。

ナンキイはそれと早くも見てはせ寄るに、十二人のひと〲はこの少女をとり圍みたり。いづれかストリヨオムリイの君なるとトオニイに問はれて、黑童は姉を一行の頭に引きあはせつ。

トオニイ、いそぎ聞えまつりたき事あれば、こゝにて欺かし侍り。黑人コンゴ、ホアンゴは不意に一隊の卒を率ゐて開墾地にかへりきたり。おん身等はかしこに往きたまふに、その覺悟なくてはかなはじ。若し俘となりたる姪御を救はむとおもひたまはゞ、直ちに兵器を執りてわれに從ひて來たまへ。

おもひ定めたる色見えて言葉もさわやかに語りぬ。一行はこはいかにと計、おどろきまどへるのみ。病みたる上に旅に疲れたる夫人は氣絕して驢背より墜ちぬ。

ストリヨオムリイに呼ばれて、婢等のはせ寄りて夫人を助けおこすひまに、トオニイはストリヨオムリイ父子をこかげに招きて事の顚末を語りぬ。こはナンキイの聞かむを憚かりてなり。

且つ耻ぢ且つ悔て、はふり落つる涙をとゞめもあへず、トオニイいひけるやう。我家にグスタアフ君を宿せしときは、しか〲の心ありて僞をのみ旨とせしに、二人さし向ひになりて物語したる末、いかなる因緣にや主客の關係頓にかはりぬ。さる程に昨夜ホアンゴの俄にかへりしを見て、危急の場合、いかにともせむすべなく、しか〲に計らひて一時の難は遁れしが、おそろしき黑人の手の裡に、かの君のあらむほどは、しばしも安き心なし、我命にかへても救ひまゐらせむとて、かくは出迎へまつりぬ。

打物の用意せよと、ストリヨオムリイは叫びぬ。心猛きアデルベルト、ゴットフリイドの兩少年はさらなり、義にはやる三僕も、おの〳〵兵器の用意する程に、ストリヨオムリイは妻の騎りたりし驢の側にはせゆきて、我統を驢背より御しつ。

我姪の一族のために身命を輕ぜしは幾度ぞ、いまこそはこれに酬いむ時來ぬれと、ストリヨオムリイいさみ立ちて、この隙に心地、もとに復せし妻を再び驢背に扶けのせ、用心のためなりとて黒童ナンキイをうしろ手に縛りて引かせ、また十三なるフエルヂナントといふ子の兵器持ちたるを頭にして、女子こども等を、先に立出でし池のほとりへひき還させ、おなじく鍪を戴き、槍を執りたるトオニイに黒奴隊の人數、家宅の案内など問糺し、ホアンゴが上をもパベカンが上をも、つとめて寛にせんと約し、唯神の義人を棄てたまはざるべきを頼に、大膽にも此小勢の首に立ちて、トオニイにみちびきせさせ、開墾地さしていそぎぬ。

後門より忍びいりて、ストリヨオムリイの君にホアンゴとパベカンとの寐ねたる部屋ををしへて、人々の兵器懸けたる處に入りて、先づこれを收むるひまに、トオニイは中庭を横ぎりて小屋の方へゆきぬ。こゝにはナンキイが弟のゼッピイといへるが臥したり。

ホアンゴは私生兒二人の中にて殊に猶五歳なるゼッピイを愛したり。この子の母は死にてまだ程なければならむ。

縦令グスタアフを助得たりとも、伴ひて池のほとりへ還へり、これよりポオル、トオ、プリンスへ遁れむとは頗難し。おのれも從ひゆくべき此退口を易くせむには、二童を質とするに若かじ。かくおもひてトオニイは、寐ほれたるゼッピイを床の內より抱き取り、本屋のかたへゆきぬ。

されば又ストリヨオムリイは、音なせそと主從を戒めて、ホアンゴが室に進入りぬ。

ホアンゴとバベカンとは、猶臥床の中に在るべしとおもひしに、耳さとき二人ははや起きて室の中央に立ちたり。されど衣だに整へぬほどなれば空拳なるを幸に、ストリヨオムリイは鳥銃の口をさし向け、神妙にせよ、いなといはゞ只一擊にせむと叫びぬ。

ホアンゴは答なく、瞬くひまに手をさしのべて、壁に掛けたりし短銃を取るよと見えしが、敵の頭をねらひて打放しゝに、丸はストリヨオムリイの小鬢をかすりて飛びぬ。これに驚き怒りし主從は勢猛く詰寄するを、ホアンゴは物ともせず、繼いて放しゝ丸は一人の僕の肩先を擊貫きたり。されどこの隙につけいりし一人は、劍にてホアンゴが隻手を傷け、漸くにして夫婦を捕へ、きびしくいましめて大卓の脚に結びつけたり。

この時バベカンが叫びし聲に驚かされて起出でたる黑奴二十八ばかり、小屋〳〵より中庭にはせ集ひ、奪はれし兵器を取りかへさむと譟ぎあへり。

満痍は負ひたれど屈せぬストリヨオムリイは、部下を密々に配りて、黑人の戶に近づくを射擊せしむ。黑奴の二人は早や丸に中りて中庭に橫はれり。されど多勢なれば勵みあひて、内より鎖したる戶を斧、鐵杖などにて破らむとせり。

恰もよしトオニイはゼッピイを抱きて慄ひながらホアンゴが室に來ぬ。ストリヨオムリイこれに力を得て、直ちに童を受取り、片手に短刀を拔きもちてホアンゴに向ひ、疾く黑奴等を制せずは、たちどころに此子を刺さむといふ。

瘡を負ひて力脫けたるホアンゴは、この強迫に逢ひて暫し考へしが、辭まば我命も危からむとおも

ひて、心得たる旨を答へ、ストリヨオムリイに引かれて窓に赴き、左の手に手巾を打振りて黒奴等に向ひ、我は早や救を要せねば、鎖したる戸をその儘にして、おの／＼小屋に歸れと命じぬ。これにて黒奴の群、少しく鎮まりし處へ、本屋の内に閉籠めし一人の黒奴を使にたてゝ外に出し、又おなじ心を傳へさせしかば、猶評議を凝らして打入らむとせし隊卒等も、いかなる故か辨へねど、しぶ／＼小屋に歸り入りぬ。

ストリヨオムリイは黒酋ゼツピイが兩手をホアンゴが目の前にて縛り、かくするもこの開墾地にて故なく俘となりし姪なる士官を救出して、ボオル、トオ、プリンスまで障なく退かむためなれば、汝等父子が命をば害せざるべし、又二人の子は事果てたる後、恙なくかへし得させむと誓ひぬ。別のきはに握手せむと近よるトオニイを、バベカンは手あらく郤けつ。恩知らずの少女、おしきたくみにてひと時は意を得たりとも、天罰をのがれむや。かくいひて縛られながら身を振りて背向になりたり。

トオニイ、われはおん身を欺きしにあらず。われは本白人なり。おん身等が責むる白人なり。いまこの家に俘の身となりたる客は、わがいひなづけの夫なり。神の責めたまふともいひ解かむと難からじ。

ストリヨオムリイは再びいましめたる黒奴ホアンゴを柱に結ひつけさせて番人をつけ、肩骨を擊碎かれて昏絶したるまゝ地に僵れたる僕を抱きおこして擔ひさらしめ、ホアンゴに向ひて、ナンキイ、ゼツピイの二人の子は二日三日の程に、佛軍の前哨の立てるセント、ルユウズにて恙なく引渡すべければ、受けとりに人をおこせよと云ひ、萬感胸に迫りて泣きいりたるトオニイが手をひきて出づ

るを、ホアンゴ夫婦は罵れども甲斐なかりき。

さる程にアデルベルト、ゴットフリイドの兩少年は、窓の方にて一防ぎしたる後、早く父ストリヨオムリイの命をうけて、グスタアフが俘はれたる部屋に赴き、番したりし黒奴二人を相手に劇しく挑爭ひしが、今や黒奴の一人は息絶えて室の中央に横はり、一人は重痍負ひて鬪ひながら廊下まで出でぬ。アデルベルトは股に薄痍負ひたれど、兄弟かひぐ〱しくグスタアフがいましめの繩を解き、左右より抱きて接吻し、短銃を授け、いまは前の方なる座敷にてストリヨオムリイの君の退口の事を謀りたまふ頃なるべければ、いざ共に來たまへと勸めたり。

グスタアフは床より半ば身を起して、やさしく二人が手を握りしが、さればとて前に置かれし短銃を取らむともせず、限なく憂はしきさまにて、重たげに右手をあげて額をおさへたり。

兩少年は臥床の端に腰をかけて、何をか惱みたまふと問ふに、グスタアフは答へず、二人を抱きよせて、若きゴットフリイドの肩に頭をもたせたり。そのさま氣を喪ふやうなれば、兄なるアデルベルトは身を起して、水一杯もて來むとするとき、トオニイはゼッピイをかき抱き、ストリヨオムリイに手を引かれて入りぬ。

これを見たるグスタアフは面の色かはりて、偃れ臥さむとせしが、兄弟の少年の體を杖にして又身を起し、前なる短銃を取るを見たれど、兩少年はまだその心を測りしらぬまに、グスタアフは齒ぎしりしてトオニイに向ひ、火蓋を切て放しぬ。

彈丸はトオニイが胸のたゞ中を打貫きたり。

打たれながらトオニイは猶二足三足進み近づきしが、力を失ひて抱きしゼッピイをストリヨオムリ

イの君にわたして、グスタアフが前に僵れしに、グスタアフは手に持ちし短銃を少女が體に投げつけ、よろめきながら足を擧げてしたゝかに蹴り、一聲この淫婦と叫びて、臥床の上に僵れぬ。

物にや狂ひしと、ストリヨオムリイ父子叫びぬ。兩少年は少女を扶けおこし、老僕の痍の手あてなど心得たるを喚びよせむと噪ぎぬ。

トオニイは顫ふ右手にて胸の創口をおさへ、左手にて扶けむとする人々をおしのけ、おのれを斃ちしグスタアフを指ざし、片息になりて、言うて〳〵とのみいふ。

何を言へとかとストリヨオムリイ問ひしが、最早死期近づきて言葉なし。

アデルベルト、ゴットフリイドの二人は起ちあがりて、グスタアフに向ひ、何故にこの愛らしき少女を殺し玉ひし、彼は君がために親を讐にし、家を棄て落人なるわれ等に從ひて、ポオル、トオ、プリンスへ往かむといひしを。

されど僵れたるグスタアフは一言の答をもせざれば、皆近く居よりて、いかにグスタアフ、瘂にやなりしと呼び、手あらくゆり動かしたり。

グスタアフは起きあがりて、血にまみれて僵れたる少女が姿を冷淡に一目みしが、極度に達せし怒は今醒めて、僅に一種よの常なる憫の心となりぬ。

ストリヨオムリイは涙をはら〳〵と墜して、グスタアフを見詰めたりしが、いかに、何故に此少女を殺したる。

グスタアフは床を起ちて、額の汗を拭ひ、猶少女がかたを見やりて、彼は夜われを縛めて黒人に引きわたしたる類なき淫婦なり。

この時又少しくわれに還りしトオニイは、あゝと一聲微かにいひて、顔に見るに忍びざる色をあらはし、手をグスタアフがかたにさしのべたり。わがおん身を縛めしは、かくいひ掛けしが力なくて、後ざまにストリヨオムリイが膝の上に仆れぬ。

グスタアフは面色蒼ざめしが、トオニイが前に跪きて何故にと問ふ。

トオニイ自ら答ふるかと、人々その面のみ打まもりて、暫しが程は一室聲なく、をり〳〵聞ゆるは死になん〳〵としたるトオニイが苦しげにつく息のみ。

ストリヨオムリイの君かはりていふ。ホアンゴの遊に歸りてより、別におん身を救ふ道あらざればなり。おん身が抵抗して命を喪はむことを恐れ、又われ等の打物とりて來たりておん身を扶けいださむまで、時を延べむと思ひければなり。

グスタアフは手もて面を掩ひて、唯一聲、あゝと叫びぬ。此時にグスタアフは足の下なる地深く陷いりて、我身沈むかとおもひぬ。

グスタアフは面をあげずして、おん身等のわれにのたまふは誠なるかと問ひぬ。

さてトオニイが傍らに進みよりて、死に垂とせし身を抱き、搖き破られしやうなる心にて少女が顔を見いりたり。

トオニイ、いかなれば、われを疑ひ玉ひけむ。是れ最後の一言なりき。

グスタアフは狂せる如く、みづから我髮の毛をかきむしりて、少女が屍の傍を離れねば、兩少年は手を取りて引きはなしつ。

グスタアフ、さなり。汝を疑ひしは我過なり。二人が誓は言葉にこそ出さね、渝はるべきものには

あらざりしを。

ストリヨオムリイは涙を揮ひて少女が胸の布をかきのけ、老僕にいひ付けて、胸骨に中たりたるべき彈丸を引出させむとしたれど、彈丸はまことに胸を打貫きたれば、魂は早く天に飛去りて還らず。グスタアフはこの隙に獨起ちて窓のかたへゆきぬ。ストリヨオムリイ父子は少女が屍をいかにせむかと思ひまどひて、母をや呼ぶべきといふ程に、グスタアフは短銃もてわれと我腦を擊ちぬいたり。再度の變に狼狽てたる人々、いまは少女が屍を打棄てゝ、グスタアフを救はむとしたれど、憫むべし、頭蓋は微塵に碎けて、短銃の火口を我口にあてしことなれば、血にまみれたる骨の片々は、かなた、こなたの壁に飛びかゝりて、そがまゝにつき居たり。

人々は唯茫然たるのみなりしが、朝日影はやく窓にうつりて、中庭には又黑人等の見ゆるを知らするものありければ、ストリヨオムリイの君、心をとり直して此場を引かむとす。

二人の屍は黑人の辱めむことを恐れて、一枚の板に載せて舁かせ、鳥銃には各彈丸をこめて、この悲しげなるむれは、例の池の畔をさして立ちぬ。

ゼツピイを抱きたるストリヨオムリイは此行の眞先に立ちたり。これに續きて力強き僕二人屍を載せたる板を舁いたり。痍を負ひたるは杖つきてその傍に從ひぬ。兩少年は玉こめたる鳥銃を取りて殿をつとむ。

この行のあはれに力なげなるを見あなどりたる黑人の兵卒等は、刀槍などおもひ／＼の得ものを取りて小屋を出で、遮ぎりとゞめむとする程に、縛めの繩を解かれたるコンゴ、ホアンゴは梯の上まで出でゝ兵卒の群をおし鎮めつ。

さらば、セント、リユウズにてとホアンゴ呼べば、早や門を出でむとしたるストリヨオムリイの君ふりかへりて、セント、リユウズにてこそと應へ、一行は恙なく外に遁れいでゝ森に入りぬ。親族の待居たる地の畔にゆき着きて、二人の屍のためにつか穴を掘り、屍の指にはめたりし環を取かへたる後、禱のことば唱へて葬りぬ。ストリヨオムリイの一行は、五日の後恙なくセント、リユウズに來にければ、こゝに黑人の子を殘しおきて、ポオル、トオ、プリンスの圍まれむとする與際にかしこに着き、この砦にて白人の隊に加はりて暫し戰ひしが、將軍デッサリンのために此砦の破るゝとき、一族英吉利ぶねに便船して、ふる里なる瑞西にかへり、殘りし僅ばかりの金にてリギのあたりに地を買ひて住みぬ。千八百七年の頃には、猶その莊園の木立の蔭に、一基の石塔あるを見き。こはストリヨオムリイの君が、あはれなるグスタアフとトオニイとのために建てたるなりけり。

地震　（クライスト）

チリ王國の首府セント、ジヤゴに、千六百四十七年の大地震將に起らむとするをり、囹圄の柱に倚りて立てる一少年あり。名をゼロニモ、ルジエラといひて、西班牙の產なるが、今や此世に望を絕ちて自ら縊れなんとす。府の貴族のうちにて最も富めるドン、エンリコ、アスタロンが、彼を其家より逐出しゝは一とせばかり前なりき。初め少年はこの家に師傅として雇はれ居たりしが、ドン、エンリコが一人娘なりけるドニヤ、ジヨセフエと通ぜしと、ゆくりなく露れて、そこには身を措きがたくなりしなり。出で

にし後も猶惱にひかれて逢はむとすることもやあらむと、父はいたく娘を戒めし、その甲斐なく、隙を偷みて相見むとせしを、斷えず心を配り居たりし驕慢なる嫡子に見あらはされし時、父は怒に任せて娘を「カルメリイテル」の尼寺に押籠めつ。

僥倖にもゼロニモはたよりを求め得たりしかば、ある靜けき夜寺の後園に忍びて、こゝを快樂の場としつ。

寺の祭の日なりしが、尼達の列をなして本堂を出で、まだ僧とならぬ少女等も、そが後に隨はむとするをり、ふびんなるジヨセフエは打出す鐘の響や身にこたへけむ、產の氣つきて本堂の石段に偃れふしたり。この事はいたく人の視聽を動かしき。常ならぬ身をも憚る色なく、人々はこのうらわかき罪人をひとやに繫ぎ、まだひだゝぬ程に早く僧正の命ありて嚴しき鞠問を行ひき。

府民の怒は少女の身のみかは、尼寺にさへ及びしかば、アステロン家の歎願もせんなく、又少女が擧止の閑雅なるを愛でし老尼のいひなだめも甲斐なく、重き寺法に行ふと定まりて、僅に第二の王の恩赦に依り、火刑を打首に代へ得しのみなりき。これすらところの老若の婦女の怒をば免れざりけり。

少女が引かれゆく道々にては、家每に窗をはづし、窓を價高く貸すものさへありて、神を敬する府内の處女等は、相誘ひてこの奇觀を樂み見むとす。

その時、囹圄に繫がれたりしゼロニモは、この巷說を傳へきゝて、惑きて心を喪はむとしたり。少女を救はむと思ひて運らす百計も今は竭きたり。人の心は翼ありて高く飛べど、到る處に鎖鑰あり、墻壁あるを奈何せむ。格子窓をひき切らむとせしを見あらはされて、一きは狹き處に押籠られぬ。少年

は猶一つの望を懐きて、聖母の像の前にひれふして歎き請ふのみなりしが、早や其日となりぬ。此時彼の胸中には一點の望をだに遺さゞりき。

今鳴りわたる鐘は少女を刑場に導くなり。少年の心は將に狂せむとす。ふとあたりを見ればいかにしてこゝにありけむ一條の繩あり。これを拾ひて立ちあがり、柱の鐵鈎に結びかけて自ら縊れむとぞしたりける。

この時天の墜ちたらむやうなる響して、セント、タヤゴの府の過半は地底に埋もれ、生あるものとして、撓けたる柱、頽れたる壁の下に伏さぬはなかりき。少年は驚怖のあまりに、今まで死を求めたる心をさへ失ひて、たゞ僵れじと柱を抱きつ。足の下なる鋪板は波打つ如く、ひとやの四壁にわれめを生じ、全屋は街のかたへ倒れむとしたりしが、向ひの家のこなたへ倒れむとしたりしと、はからずも相支へて、中に穹窿を成し、地に委ぬるに至らざりき。

獄の前壁はこの時に破れて穴をなしたれば、少年はわなゝく膝、逆だつ髮、身うち悉く顫ひながら、斜なる鋪板をすべりて穴の口に出で、こゝよりはひ退くほどに、地は再び劇しく震ひて、獄のありし街は全く潰れぬ。

八面より襲ひくる死をいかにして避けむと思ふ暇もあらで、縱横に路を遮りたる木石を踏越え踏越え、ゼロニモは近き府の門を出でむとす。大厦の忽ち覆へりて、遠く瓦石の雨を飛ばすに遭ひては、慌てゝ横街に逃げこみ、仆れし家の破風より黒烟出でゝ、その間より火焔の舌のをりをり見ゆるに遭ひては、また外の街へ奔り、マポッチヨオ河の岸より溢れて水音高く逼り來るに遭ひては又遁れぬ。木石に身を打たれし一堆の人のうめき苦むあり。埋もれし壁の下より哀に助を求むる人あり。燃

えあがる屋根の上に立ちて燄をかぎりに呼ぶ人あり。人と獸との波につゝまれて出沒するあり。こゝに氣を負へる壯士の人を救はむとして働くあれば、かしこに色蒼ざめて顫ふ手を高くさしあげ、天に訴ふる男あり。ゼロニモはやう〳〵閭門を背になして、あなたなる丘にはひ登りしが、昏絕して地に倒れぬ。

かくてありしは十五分ばかりにやありけむ。我にかへりて、なかば身を起しつ。彼は手もて額と胸をさすりしが、まだ心は全く醒めざりき。府のかたを後にしたれば、西風さと吹來て、潮氣面を撲ち、眼を披けば、セント、ジヤゴの近郊なる綠いろこき田野に向ひたり。この時一種の言ふべからざる喜は心に滿ちたり。唯だあはれなる面持したる人の群、こゝかしこに見ゆるのみぞ心には關りける。されどまだいかにしてこゝに來しかは知らざりしが、振りかへりて府のかたを見たるとき、怖ろしき瞬時のさまを思ひ出しつ。

心に徹したる危難のさまはそれまでの艱苦を洗ひ去りし如く、少年の念頭には今生を樂む心みちみちて、喜の涙を眼にたゝへ、頭を地につけて神に謝しき。さてふと我手を見れば、指に嵌めし一つの環あり。猛然として思ひ起しゝは少女ジヨセフエがことなり。これと倶に心頭に浮ぶは、己れが囹圄の中に在りしと、家の覆へりし前に聞きし鐘の音などなり。この時歡喜の心は一變して、無限悲哀の情となりぬ。今更に悔やしきは神に謝したるなりけり、かの蒼き處にすめる神は唯畏るべきのみなれば。家財など持ちて閭門を出づるもの猶引きも切らねば、奔りよりてアステロンが娘の刑罰はいかに、早や果てしかと問へど、煩はしがりて答ふるものなし。頂に重荷を負ひ、胸に二人の赤子を抱きたる婦に逢ひて又問ふに、親ら覩もしたらむやうに、早や刎ねられたりと答ふ。ゼロニモはこれを聽

きて其時を計るに、少女が死疑ふべうもあらず。今は力を落して踵を旋らし、淋しき林に入り、地上に坐して泣きさけびぬ。彼は恐ろしき天災のまた頭の上に降れかしと思ひて、おのれが强ひて死を逭れし故をさへ辨へ得ざりき。この時林の老柏の根より折れて倒れかゝりたらましかば、彼はなか〳〵に走り避けむとはせざりしならむ。されど熱き涙の際より又望萠したれば、身を起して郊野を縱橫に馳せめぐりて搜し求めつ。

人の集まりたる丘といふ丘に登り、人の走れる途といふ途をゆきて、風に舞ふ女服の影の見ゆるごとに、蹌ふ足をそなたへ向けたれど、ジヨセフエは見えず。望は夕陽と俱に傾かむとするとき、途は岩稜に出でゝ、災を避くる人も多く來たらざりし谿間を見下したり。思ひ絕えむとするに、流石にまだはかなき望の絲あれば、一群〳〵と見めぐりて、最早立ちさらむとするをりしも、泉の水にて穉兒を洗ひきよめむとする若き女を見たり。胸騷げば聖母の名を唱へて馳寄るに、趾を含みて見かへりしは、尋ぬるジヨセフエなりけり。相抱きし二人が幸はいかにぞや。かの怖ろしき天災は計らずも二人が命を救ひしなり。

ジヨセフエを引きし一行は、早や刑塲に近かむとする時なりしが、霹靂一聲、倒るゝ人家に晴れがましき此行列は打ち散らされぬ。少女は何の慮もなく、一たびは閭門の邊まで出でしが、忽ちに思ひ出だしゝは、尼寺に殘しゝ小兒のとなり。仆れては起き、起きては仆れ、尼寺の畔にゆきて見れば、火焰立ちのぼれり。少女が刑塲の途に就くをり、穉兒をせわせむと諾ひし老尼は、恰も好し、兒を抱きて寺門に在りて、人の助を求めたり。路の左右より湧きいづる烟を事ともせず、寺門に馳寄り、天使の身を守りもしたらむやうに、我子を抱き取りて、さて老尼をたすけ引かむとする時、老

尼とこれに隨ひたりし許多の尼達とは、墮ち來る梁に打たれて、そが儘に息絶えたり。ジヨセフエは思はずも一足後にさがりしが、急ぎて老尼のまぶた推合せて、唯だ子を助けむの一心に馳せ去りぬ。まだ幾歩も來ぬに、人々の家に打たれて死にし僧正が屍を舁きもてゆくに逢ひぬ。第二の王の宮は地底に埋もれたり。少女が死刑を宣告せし法廷は早や燃えあがりたり。貴族ドン、エンリコが家のあたりは湖となりて、赤き色のもや立ちのぼれり。ジヨセフエはあらむ限りの力を出だして自ら勵まし、胸に滿つる愛の狹霧を拂ひのけ〳〵、我子を懷にかき抱きて、街々を走りぬけ、閭門に近づくをり、戀人ゼロニモが繋がれたりと聞きつる囹圄の頽壁斷礎をのみ留めたるを見き。少女はこれを見て、地に俯して泣かむとするに、後なりし家はこの時に又一ゆりゆられて倒れ、石瓦の飛び來るに驚きて走りのき、抱きたる子の恙なかりしを歎の中の喜に、涙飮みこみて閭門を出でぬ。家の倒れたればとて、そが中なりし人必ずはかなくなりきとも云ひ難しと思ひかへして、關の戶の外に暫したゝずみ、抱きしフイリツプにつぎてかはゆき人もや來ると見かへれど見えず。跡よりつゞく人に推されては前へ〳〵と進み、計らずも此松蔭の谷間に來りて、世を去りけむ人のために福を祈らばやと思ふほどに、其人に逢ひにければ、少女が心には此谷間をエデンの樂土にも增してたのしく思ふなるべし。この顚末を語る中に、稱見をば洗ひ果てつ。これをゼロニモにわたすほどに、見は見知らぬ父の顏みて打ち泣くを、父はゆり動かし、又接吻して啼を止めき。

さる程に夜とはなりぬ。白がねのやうなる光、人を醉はさむとする香、その淸絕幽絕なるさまは、詩人の夢にも似たるかな。月影にすかして泉のほとりを見やれば、かくおそろしかりし日の疲を休めばやと、幾群かの人々苔の上に木の葉を敷て寐床の用意す。されどこの中には家を喪へるもあり。

妻子に分れたるもあり。家喪へる上に妻子のゆくへさへ知らぬもあり。皆歎きかなしむもの丶みにて、ゼロニモとジヨセフエとの意はなか〳〵にうしろめたければ、二人は木立深き處に遁りぬ。こ丶には一株の老たる石榴樹あり。廣く四方にさし伸ばしたる枝もたわ丶にほやかなる實のなりにたる、其頂には優しき鶯の笛聞ゆなり。ゼロニモは幹に據りて、膝にジヨセフエをかき抱けば、ジヨセフエは又稚兒を懷にして、唯だ一重の外套を上より掩ひて憩ひたり。木の枝々の影は碎けたる月の光と俱に、三人が頭の上をゆらめきつ丶過ぐ。月は早や蒼然となりて、朝日の光に歩を讓らむとするまで、妹と脊が問答は果てざりけり。

尼寺の庭の事、ひとやの中の事、彼此となく語りあひて、又ふたりが幸ある身となりし原を推せば、數萬の人の哀別離苦あることを悲みたり。さて行末をいかにせむといふに、ゼロニモがは丶方の親類の、西班牙に住めるがあれば、先づラ、コンセプシヨンなるジヨセフエが友をたづねて、少しの路用を借り、舟に乘りてかなたへ渡らむと議り定めつ。この相談整ひたる後、二人は相抱きて寐ぬ。

覺めし時には日高くさしのぼりて、近きあたりに許多の親族のこぞりあひて火を焚きつけ、朝げの用意するあり。ゼロニモも妻子のために食を求めんと思ひて立ちあがる處へ、良き衣きたる若き男、稚兒を抱きて來ぬ。男はジヨセフエに向ひて、この子はかしこの木下蔭に病み伏したる妻が子なるが、あはれ少しの乳を分ち玉ひなむやといふ。ジヨセフエはこの男の面を見るに、しる人なりければ、流石に耻ぢて暫しいらへせず。男はジヨセフエが猶豫ふを見ておもひ違へていふ。否、少しにて善ければ、ひたすらに願ぎまつる、きのふ一同の災に遭ひし頃よりまだ一滴だに口に入れぬをさな子をあはれと見玉はずや「ドニヤ」ジヨセフエの君と。その言葉いと切なり。

「ドン」、フエルナンドの君、さな宣ひそ。わが答へざりしは別に故あればなり。此天災の時に當りて、誰かはおのが力に及ぶべき助を辭まむ。いざ、といひつゝジヨセフエは抱きたる子をゼロニモが手にわたし、人の子を抱き取りて胸にそへつ。「ドン」フエルナンドは深くこの一片の情に感じて、親子に勸めていふ。かしこなる木の下にて、今あさげの用意とゝのひたり。君等も倶に來たまへと。ゼロニモも頷きたれば、ジヨセフエは打ちつれてかしこに到るに、セント、ジヤゴの府に名を知られたる貴婦人なりし「ドン」フエルナンドが兄弟の婦達皆なやさしきさまにてジヨセフエを迎ふ。足を傷つけられて伏したる「ドン」フエルナンドが妻「ドニヤ」エルヰンも、おのが飢ゑ衰へたる子を胸にそへたるジヨセフエを見て、我側に招き寄せて居らすれば、「ドン」フエルナンドが岳父「ドン」ペドロも肩に受けたる創の痛を忘れたるやうに、ジヨセフエを打見て笑みぬ。

ゼロニモとジヨセフエとが胸にはあやしき想浮かびぬ。今人々のかく優しくもてなすを見れば、先きの法庭、囹圄、鐘の響は夢にはあらずや。彼のおそろしき天災は忽ち人心を激動して、夙怨を釋きもやしけむ。地震より前の事は誰も語らず。誰だ「ドニヤ」エリサベツトはきのふ友の招きて、倶にジヨセフエが刑場に引かるゝを見むといふを辭みし人なるが、をり〳〵ジヨセフエが姿を見て、深くもの思ふさまなり。されど人のこの災につきて珍らしき一話を傳ふるごとに、むかしに飛びかへらむと纔に羽ばたきせし人心は又今に引きもどさる。

人は言ふ。地震の起りし時、幾千萬の婦女は一時に子を夫々の目の前にて產みおとしつと。又言ふ。許多の僧侶の手に十字架を把りて、世の末は今ぞと叫びて街々を馳せめぐれるを見きと。又言ふ。第二の王の詔を傳へて、番卒にある寺を片付けさせむとせしに、卒はわれは早や第二の王といふも

のゝあらむとも覺えずと答へて、絕えてうけひく氣色なかりきと。又言ふ。第二の王は地震の起りしをりに、府の處々にいそぎて絞罪に用ゐる柱を立てさせて、盜賊を刑せしめしが、家の裏門より難を避けむと逃げいでし人の、賊なりと疑はれて、絞首にせられしもありきと。

傷を負ひたる「ドニヤ」エル井レは人々の物語の盛なりしとき、ジヨセフエにいかに難を遁れしかと問ひぬ。ジヨセフエはことの概略をもの語りしに、此貴婦人は目に淚を浮べつ。猶物語らむとせしに、「ドニヤ」エル井レは手を執りておし止めつ。

ジヨセフエは心の中におそろしかりしきのふの地震の、今はなか〳〵にうれしきものになりしを訝り思ひぬ。宜なり、天地も覆へらむとして、人の產といふ產、悉く亡せはてしをりなれば、人のまことの心は麗しく咲きいでゝ、惠みの露の新たにかゝりし花に似たりければ。極目の郊野に、或は立ち或は臥したるは何人ぞや。王者も丐兒も貴婦人も農家の媼も官吏も工人も比丘比丘尼も、入りみだれて差別なく、互に相憐み相助けて、そのさま殆ど一家の如くなり。

面を見るごとに語ることは、茶卓の上の寒喧常話頭にあらで、多くは任俠のふるまひに似たる奇行などなり。今までは世に知られざりし人の、此天災に遭ひて、忽ち英雄豪傑に耻ぢざるべき羅馬氣質を見せしあり。義を見て進み、我を棄てゝ拯ひし話、おのが命を拋つに數步の前にて復得べきものゝ如く、顧みる所もなかりしとなど許多あり。さばかりならぬも人々悲しき目に逢ひ、又は慈善の行をなしたれば、自ら功德ある如くおもひなして、一毀一譽、いづれ重しとも定めかねたり。

ゼロニモはジヨセフエが手を執りて、石榴樹の下を逍遙しつゝいふ。人の心の今の如くならむには、海を渡らむもやうなかるべし。若し第二の王のなほ生きてましまさば、歎き請ひて俱にこゝに居ら

ばやと。ジヨセフエ打ち聞きて、わが思ふ所もこれに似たり。父も此變に遭ひて心釋けたらましかば、君をゆるさでやはあらむ。されどセント、ヂヤゴに還らむは、餘りに計なきに似たるべければ、兎にも角にも、ラ、コンセプシヨンまでゆきて、かしこより審もて第二の王に歎き請はむこそ好からめ。さすれば事の成らむをりに歸らむもいと易かるべく、又敗れむをりに歐羅巴にわたらむもいと易からむといふ。ゼロニモもげにもと思ひて、しか せんと約しき。

語り果てゝ人々の中に歸るほどに、午後になりて地震の餘波も漸く衰へたれば、人の心僅に安からむとす。此時に傳ふるものありていふ。此地震に唯「ドミニカアヂル」の一寺院の崩れざりし、ありて今僧長は自ら經を誦し、行末に難なからむとを天に祈らむとすと。これを聞きし民は山の隅、林の邊より起ちて、先を爭ひ、涙を打たせて府の方へ歸りゆく。

ゼロニモ等の居る處にても、寺にゆくべきや否やといふ相談起りしが、「ドニヤ」エリサベットは眉をひそめて、かゝる祭はまたもあらむに、そのをり心安く與らむには若かじといふ。ジヨセフエは獨りはやる心を面に見せて起ちあがりていふ。神のみ威稜のかしこきを知り得たるは、今に増す時なければ、神のみ前にぬかづきて恩を謝せむとおもふ心も今を最も強しとぞおもふ、往かばやと。「ドニヤ」エル井レはジヨセフエが言を理ありとして言葉を添へつ。人々聞きて席を離れしかば、「ドニヤ」エリサベットも遂には洩れじと起ちぬ。

されど「ドニヤ」エリサベットは心ならぬさまにて、息せはしく人々の後に從はむ用意をなすさまなり。何故ぞと人々怪みて問へば、いたく心にかゝるとありと答ふ。「ドニヤ」エル井レはこれを聞きて、さらば創負ひて伏したる父のほとりに殘り留まり玉へといふ。ジヨセフエはエリサベットの殘

らむとするを見て、我子をあづけ置かむとせしに、泣きて止まねば抱きて往くととしつ。「ドン」、フエルナンドはジヨセフエが擧止の閑雅なるを愛敬したるとなれば、このをりに腕を藉して導かんとす。ゼロニモは我子を抱き取りて、「ドニヤ」コンスタンチエを携へ、餘の人々はその後に隨ひて「ドミニカアチル」の寺さして立ちいでぬ。

一行の立ちいでゝまだ五十歩もゆかぬに、跡より「ドン」フエルナンドの名を呼びて馳せ來たりしはエリサベットなり。エリサベットはフエルナンドが病める妻エル井レと久しく劇しき聲音にて言ひあひしさまなりしが、今思ひさだむるよしありてか追ひ來たりしなり。フエルナンドは立ちとゞまりて振り向きたれど、ジヨセフエをば離さず、追ひつきしエリサベットに何事かあると問ふ。エリサベットは馳せよりて、フエルナンドが耳に口をよせて、ジヨセフニの聞かぬやうに何をか囁きぬ。フエルナンドは若し然らば又何事をか要ふべきと問ふ。ニリサベットは益す〳〵色を變へて囁ぐに、フエルナンドが面は忽ち紅を潮しつ。さて聲あらくいふ。さても善し、「ドニヤ」エル井レは復た思を勞するとを要せじと言ひ棄てゝ、ジヨセフエが手を引きて先だちし人々に繼きぬ。

「ドミニカアチル」の寺の前に來てみれば、音いろ優しき「オルゲル」の響聞えて、堂の内には人の頭の波を打ちたり。堂に溢れし人は寺門まで滿ち〳〵て、壁に掛けたる額の縁にさがりて脱ぎたる帽を手に持ちたる童さへあり。寺堂の內にありとあらゆる吊燭臺よりは、悉く光を射降して、今や暮れなむとする薄暗がりに、怪しげなる柱の影墮ちたり。堂の奧に据ゑたる色硝子の薔薇花は將に落ちむとする夕日に映じて、光采人を射るばかりなり。

「オルゲル」の響絶えて、一堂聲なく、萬人の胸は唯だ靜かに波立てるのみなり。かく煖かき基督教

の火の寺堂より天を指しゝとは、今日のセント、ヂヤゴの「ドミニカアデル」寺より立ちし外にはありとも覺えず。中にもゼロニモとヂヨセフエとが天に謝する情はあだし幾千人に勝りたりけむと思ひやらる。

祭の始は一老僧が壇に上りて開きし一段の說法なりき。僧は飾ある衣を著たるが、綴はる袖を打ち拂ひて、顫ふ手先を高く天にさしあげ、上帝の譽を讃して後、謝恩の辭を出だしつ。この土崩瓦解せし大地の一隅よりも、猶神にものいふ人はありけりとは、彼がはじめの句なりき。

彼は上帝の怒を說きて、世の末の獄といふもこれより嚴なるはあらじといひ、寺の壁に其迹を留めたりける破隙をゆびざし、かゝる災は猶大禍の前兆たるに過ぎずといひしをりには、滿座の客、みな戰慄しつ。僧はこれより府の風俗の頽壞に說きおよぼして、ソドムとゴモルラとの憎むべかりしもこれには過ぎじ、この府の一人を留めず、夷滅せらるゝに至らざりしは、神の惠の深きなりとて、府民が罪惡を數へ、「カルメリイデル」の尼寺の密通の事をいと詳しく說き起しつ。說法の前段を聞きしのみにて、胸の裂けむとしたりし二人が耳には、この話いかに聞えけむ。この引證は身を貫く劍よりもおそろしかりしなるべし。

僧は尙一步を進めて、かゝる罪を犯しゝ二人が今も生きのこれるは、これを恕したる人々の罪なりといひて、二人が名を高く讀みあげ、彼等が魂を地獄の主に引きわたさむと叫びぬ。

ゼロニモに手を引かれたる「ドニヤ」コンスタンチエは覺えず傑ひしが、小聲にて「ドン」フエルナンドと呼びぬ。呼ばれし男は斂めたる聲に力を籠めて、聲をな立て玉ひそ、又眼をな動かし玉ひそ、唯氣を失ひたるさまにもてなし玉へ、我一群は君を扶けひくさまして寺を出でむといひぬ。

されどまだ此謀を行ふひまあらざりし程に、老僧の說法の聲を遮りて叫ぶものあり。避けよ、セント、ジヤゴの民。そのおそろしき人々はこゝにこそあれ。これを聞いて蛇蝎を嫌ふやうに、この叫びし人の周圍より驚き騷ぐ氣色やうやく擴がりゆく程に、忽ち又一人ありて、何處にと叫びぬ。こゝにこそと叫びし三たりめの男は、あな優しの信徒の心や、ジヨセフエが髻を握みて引き倒さむとしつ。フエルナンドが支へとゞめむとせざりせば、フエルナンドが子を抱きたるまゝにて地に倒れもやしけむ。

ジヨセフエを片腕にてかき抱きたるフエルナンド壯なる聲を張りあげていふ。われは「ドン」フエルナンド、オルメスなり。汝たちも皆知りてやあらむ。市の令の子なるを。

「ドン」フエルナンドなりとにやと、フエルナンドが面前に立ちはたがりたる靴造りいひぬ。この男はジヨセフエが靴を造りしとあるゆゑ、かれのジヨセフエを熟く知りたるとは、其足の小さき尺度の如くなりき。靴造りは又アステロンが孃を打ちみて、その子が父は誰ぞと問ふ。そのおもゝちいと憎げなり。

この言葉を聞きてフエルナンドは色蒼ざめたり。かれは少し惡を帶びてゼロニモの方を見て又あのれを知れる人やあるとあたりを見廻しぬ。

この危き事情に迫られたるジヨセフエは心苦きさまにて、こは我子にあらず、ペドリルロの翁もさな思ひたがへ玉ひそ、又フエルナンドのかたを見て、このかたざまは、人々も知りたらむ、市の令の子フエルナンド、オルメスの君なるを。

靴造りは叫びぬ。誰かこの若者を知りたるものぞと。畔ありける人々は叫びぬ。ゼロニモ、ルジエ

ヲを知りたるものあらば出でよと。

この騷動は偶然、ジヨセフエが抱きたるホアンといふフエルナンドが子を驚かしければ、子はジヨセフエが胸より手をフエルナンドのかたへ差しのばしつ。

これを見し一人は、この男ぞ子が父なると叫びぬ。又一人はこれぞゼロニモ、ルシエラなると叫びぬ。又一人はかれ等こそ神を辱めまつりしものなれと叫びぬ。又一人は石投げつけて、かれ等を殺さずや、早や殺さずやと叫びぬ。

これに應じて耶蘇の寺院にむれ集ひしありがたき基督敎徒は皆な殺せ〳〵と叫びたり。

この時、待て、人の心なき奴原、汝たちはゼロニモ、ルシエラを求むるか、われこそ其人なれ、罪なき若者な窘めそ、と呼びしはゼロニモなりき。

怒氣熾なる一群もゼロニモが自ら名乘りいでたるを見て暫したゆたひぬ。

「ドン」フエルナンドをとらへし手先もいつか離れたり。この時に人を押し分けて近づきし位高き海軍士官ありて、「ドン」フエルナンド、オルメスの君よ、何事にか逢ひたまふといふ。これにてフエルナンドが厄は全く解けたれば、彼は義氣ある心に早く思案をさだめて、見たまへ、「ドン」アロンゾの君、この獄卒等を、若しわれを助けむとて自らゼロニモ、ルシエラなりと名乘りし此俠士なかりせば、我命は危かりけむ、君が武官たる權をもて、この俠士と此若き婦人とを護送したまへ、そはこの一塲の葛藤をほどくに宜しからむ、又この騷ぎを惹きおこしゝ靴造りのペドリルロをも忘れ玉ふなといひぬ。

靴造りいふ。「ドン」アロンゾ、オチヒヤア、君はこの娘をジヨセフエ、アスタロンにあらずといひ

玉ふかと。

アロンソはヨセフエを平常より熟く知りたりければ、流石にさにあらずとも云ひかねたるに、人々は又騒ぎたちて、其人なり、其人なり、殺せ〳〵と叫びたり。

ヨセフエは此時に思ひさだめて、今までゼロニモが抱きたりしおのが子のフイリップを受け取り、おのれが抱きたるホアンと共にこれをフエルナンドが腕にわたしていふ。君が二人の子を助けたまへ。われらをば唯運命に任せ置きて。

フエルナンドは子を受けとりたれど、縦然身は死すとも我一行を傷つけさせじと誓ひぬ。

彼は又海軍士官に向ひて、其佩刀を請ひ受け、さてヨセフエに腕を借し、ゼロニモと「ドニヤ」コンスタンチエの二人を顧みて、われに繼けといひ、徐々と寺堂を出でぬ。

その用意と氣色とを見たりし群集は、地を讓りて堂を出づるを妨げむともせざりけり。

既に寺堂を出でしとき、一行はや此危難を遁れ得たりと思ひしを、この堂前の廣場にも儀に與る人々滿ち〳〵たりしが、皆な目を此一行に注ぎつ。

一行の跡よりは又た寺堂の内にありし群集の隨ひ來たるありしが、其中よりひとり高く叫びていふ。これこそゼロニモ、ルヲエラなれ。われは彼を知りたり、人々、われは彼が父なればと。此聲はまだ畢らぬに「ドニヤ」コンスタンチエを携へたりしゼロニモは、おそろしき棍棒にて打たれければ、何か堪らむ、聲をもえ立てず地に横はりぬ。

あなやと叫びて、「ドニヤ」コンスタンチエは姉婿の方へゆかむとするを、又側より、この淫婦と叫びて打ちたる棒の冴えに、これも絶命して地に倒れぬ。

無殘なり、そは「ドニヤ」コンスタンチエ、クサンスなりしをと知らぬ男いふ。靴造りは透さず、我等を欺かむとせし罪よ、其のを捜しいだして、はや殺せと叫びぬ。「ドン」フエルナンドはコンスタンチエが屍を見て怒にえ堪へず、佩刀をひきぬきて打ち振りぬ。婦人を殺したる男、若し身をひねりて避けざりせば、其二つになりて果てけむ。されどフエルナンドに逼る衆人の勢は、一人にて制しがたきを見て、ジヨセフエは思ひさだめ、さらば、「ドン」フエルナンドの君、さらば子供、と云ひ棄てゝ衆人のかたに向ひ、汝たち、血に餓ゑたる虎、いざさらば我を殺せと叫びて、その間に飛び入りぬ。待ち搆へし靴造りペドリルロは、手に持ちたる棍棒にて唯一打に殺しぬ。靴造りはジヨセフエの血にまみれながら、そのてゝなし子にも地獄の供せさせずやと叫びて、猶飽かず進み寄りしが、「ドン」フエルナンドは寺の壁を背にして突っ立ち、左の腕にて二人の子を抱へ、右の手に刀を揮ひて一揮ごとに必ず一人の敵を斫り倒したり。追ひつめられし獅子もこれより善く防がむとは思はれず。今や七人の屍骸は算を亂してフエルナンドが前に横はれり。

靴造りペドリルロは身に淺疵を負ひしが、猶懲りずまに進み近づきて、フエルナンドが抱きたる一人の子の足を握りて引きずりおろし、これを誇りかに高くさしあげ、輪の如くに振り廻りて、寺の隅柱に打ちあてゝ殺しぬ。

これにて人の心靜まりて、皆次第〳〵に散じぬ。

「ドン」フエルナンドは我子ホアンの腦髓溢れいでゝ地上に死したるを見て、泫然として涙を流し、

大空を打ち仰ぎたり。

海軍士官は、又この時に進み寄りて、おのれが此騒動を傍観して救はざりしは、さまぐ〱の故あるとなれど、今さらに悔ゆる所なりとわぶ。フエルナンドはこれを責めず、唯一行の屍をこゝにさらすべきにあらねば、手を借してかたづけさせ玉へと請ひぬ。

海軍士官は人を呼びて屍骸を舁かせ、我家を差してゆく。後よりフエルナンドは抱けるゼロニモが子フイリツプの面の上に涙を流しつゝ隨ひゆく。時に夕の空はやうやく暗うなりぬ。「ドン」フエルナンドは此夜を「ドン」アロンゾが家に明かして還りしが、妻には久しく此日の事をいはず。こは妻の病をいたはり又その思はんほども影護しと思ひければなり。

「ドニヤ」エル弁レは或る日客にこの顛末を聞きて、子を喪ひし歎に一夜を泣きあかしたるが、次の朝は殘りの涙を目に宿してフエルナンドの頸を抱きつ。

これにて妻の心も知られたれば、「ドン」フエルナンドは妻に謀りて、フイリツプを養ひて子としつ。この後フエルナンドはフイリツプが面をみるたびに、これを獲たりしをりの事を思へば、殆ど我子ホアンを持ちたるまゝならむにも勝りたるやうなりき。

うきよの波

その石德利取りて、媼の側へ寄り玉へ、おん僧。酒は年經たる匈牙利酒なり。メエレンより旅商人ヤブロニツツが持て來ぬ。まだ一樽えりぬきの酒あれば、「クリスマス」に物足らぬ樣なるとはあらじ。今惜むに及ばぬとなり。風もやうやう靜になりぬ。歸路は穩ならむ。我も例の森の角までは送

りゆくべし、グラアフエンスタインよりの間道ある邊までは。かしこより庵へは迷ふべき道なし。こゝろ安く飮みたまへ。

かく勸めらるゝは「フランチスカアネル」派のかち色の衣を着たる逞しき老僧なり。廣き間の机の傍なる背あき椅子に坐して、勸むる人を打見て、こゝろよげに笑みぬ。こなたは大なる爐の前に立ちて、今しも薪一抱投げこみしに、焔高く擧がりて、机の上、僧が前なる小さき金の「ランプ」の覺束なげなるに似ず、一間をあかく照しつ。主人は身の丈高く、力ありげにて、顏は紅を帶びて清し。僧の方を見やりたる目の黑き瞳には、稻妻のやうなる光あり。髯を左右にわけてかいたるさま、果斷ある男のやうなり、すべて打見には二十三ばかりとおもはるれど、年にはまして大人びたり。今椅子をもたげて爐に近く据ゑたる僧は主人の年の三倍は取りたるべし。

主人は綠色の獵衣の古びたるを着たり。衣ひたと身につきて、殆美しともいふべきやうなり。高き獵靴の代りにたゞの靴をつけたり。槍と重げなる鳥銃とをば、爐に近き壁にかけたり。廣き鹿の皮の帶にさしたるは、ブラアグ拵の獵刀にて、そのつかにをり〱筋太き手をかくるは主人が癖なり。主人は僧に向ひて腰掛け、客の盃にも我盃にも酒を注ぎて、家根の上をわたる淋しき風の音を聞きたり。風の音の長く吼ゆる如く聞ゆる毎に、爐の火かきおこすは、僧の天氣に怕るゝとなく、猶留らむを願ひてか。

僧も歸らむとおもふ氣色なし。火をかきおこす毎に、焔高くあがりて間の隅なるさま〲の道具、柱にかけたる衣類打物、天井の木組など照せるが、忽又暗うなるを僧は見やりたり。しばしありていふ。

この秋は家も堅固になりて、焚むるにも便よからむ。冬は嚴しからむどおもはるれば、これならでは凌ぎがたかりしならむ。

この冬の寒さ嚴しかるべきは、疑もなきとなり。まだ九月の初なりしに小鳥去りぬ。狐兎の毛衣近年になき厚さなり。おん僧も庵にて、雪にふりこめらるゝ用心して、グラアフェンスタインの城より薪多く運ばせおき玉へ。曉に溫き床を離れて、森に出づるときは、はや冬のこゝちす。

僧は聞きて笑みながら主人の面を見やりて。その事なり。朝あまりに早く出ださぬやうにひかふる妻迎へむとはせずや。といふに、主人が顏赤うなりぬ。僧は盃の底見つめたるやうなりしがこれをば見脱さゞりき。

いかに我言は當りつらむ。この千六百二十年といふ年の暮れぬまに、嫁御の顏見るべきか。わが敎の內の庵にて、婚禮せさせたけれど、ホイエルスパハなる新敎の宣敎師に任するとなるならむ。されど隣のつきあひは、昔にかはるべきにあらず。かう二人にてあらむよりは、この爐の側に三人坐して、樂しきものがたりせむ時ぞうれしかるべき。

主人はといきつきて、ゼバルド和尙の夢物語したまふぞをかしき。かくいひし時、さきに赤かりし顏の色、いまは著くなりしやうにて、下火になりし爐をかき起さむともせず。やゝありて。

否々、おん僧。グラアフェンスタインわたりの少女連れて來て妻にせむとはおもはず。この家にて妻迎へむともおもはず。わが今の心、おん僧は知り玉はじ。

そは善き心がけにあらず。老いたるわがいふことを聞け。神のみ敎守りて職を盡すわれは妻子なくて世をわたれど、外の人の妻子なうてかなはぬとをば善く知りたり。この森のたゞ中にて、いつま

でか淋しき世渡りせらるべき。

さらば妻娶りたらば、この淋しき世わたり止まむとのたまふにや。わが年は若し。一生の門出またせぬやうなる心地す。朝まだきに森深くわけ入れば、木梢の風の音、泉の流るゝ聲、をり〳〵それにまじりて、おん庵の鐘のひゞくのみ。人げ遠き此間、われとおん僧とのみ栖めりとおもへば、覺えず我獵刀に手をかけて、肩にしたる鳥銃、堅う握りもつとあり。こは物に懼るゝやうなり。さればわが物に懼れぬはおん僧も知りたまはむ。夕まぐれ家路あゆみ來て、黒く尖りたる此番小屋の屋根、木立の間に見ゆれば、浮世の緣離れたるやうなる心地して堪へがたし。

それも獨住めばぞ。竈の火赤く燃えて、愛らしき顔、門の戸の隙よりおん身が歸るを望まば、いかに樂しきとならむ。

夢見るやうなるまなざしゝて、否、それも甲斐なからむ、と主人エエリヒは答へぬ。夫婦は浮世知らで日を送り、年を累ね、いつと知らぬまに共白髮の翁嫗となり、子供は年取りて、われは死なん、われは死なん、まだ一生の門出せぬまに。

ゼバルト打消して。さてもおん身のめづらしき世捨人なるとよ。ひと里近く栖まむとならば、國の守に申してグラアフエンスタイン、ホイエルスペハなどの番小屋に遷れかし。かしこの小屋は皆村に近し。今までは此絶頂の番小屋に居りて、淋しき隣づきあひするを、おん身も樂しとおもはるゝやうなりしが。

かく言ひて、心配ありげに見ゆる僧に、エエリヒは右手をやりて。わが心を解きあやまり玉ふな。村へゆかむと願ふこゝろはつゆばかりもなし。かしこなる村々は浮世に近からむや。それよりは此

住ひ遙にまさりたり。寧こゝにありて夕ごとにおん僧の來ますを待たむ。その盃こなたへ。あまりに益なきかこち言して、火の消えむとするをも知らざりし鈍ましさよ。いで少しかき起してむ。されどわが望はたやすく絕たじ。この山ずみの事をおもへば、苔間に隱れて湧く泉の、一人の渴をとゝむるにも足らぬやうなり。山を下りて長江大河を見むとこそ願はしけれ、千萬人の汲みても盡きぬその流を。

僧、そは神の惠を忘れたる言なり。こゝの泉こそ、淸くして飮むに堪へたれ。かしこの荒浪は、おん身が命をも危うせむ。そのおそろしさを思はで、山を下らむといふはいかに。己れ等二人は宗派もおなじからず。わが打つ鐘は加特力の祭のためにて、君が受けし洗禮は新敎のなれど、心に隔はなきにあらずや。麓なるビヨオメンにては、唯此二つの差別のために、互に刄を揮ひ、血を流せり。プラアグにての大戰爭の噂は、まだ聞えねど、今頃はさだめて酣ならむ。そのおそろしかるべきは、ヤブロニツツもいひぬ。かれなどはおん身が望む流を、いま泳ぎたらむ。それを浦山しとおもふや。

エヱリヒは獵刀を手まさぐりて、われとてもヤブロニツツが身の上をうらやまむや。一年餘り前の事なりき。遠き島國より來て、プラアグの宮を栖とせし國王と、その美しき妃とを見むと、村人あまた往きしをりは、暑き夏の日に、淸き流の人招きがほなるに對ひて、旅人の心動くに似たる想をなしゝが、縱令往けばとて、幾多の榮華も唯遙にのみながめむと、心憂からむとおもひ測りて止みぬ。かゝるをりの渴は、我山川に向ひての渴にもまして苦しかるべければ。

僧、見玉へ、おん身が夢のあだなるとは、明ならずや。世の人に迎へられて、古き「リブッサ」の玉座にはつきたれど、王の心安かるべきや。妃の事は誰もいはねど、これも落付きて居玉ふと難から

む。一時の榮華も今は跡なく消えて、うきよの波は此一對の貴人を弄ぶなるべし。

わが思ふところは然らず。かくいひし主人が目は遙なる空をながむる如くなりき。わがおもふは榮華にもあらず、快樂にもあらず、眞の生活のみ、眞の潮流のみ。不運にして、波は我頭の上にて合ふとありとも、その正中に入りたりとおもはゞ、我心は安かるべし。

さてはいよ／＼神の敎に負かむとし玉へり、といひて僧は立上りぬ。事を好まず、危きに近よらぬは、神の敎なるものを。われはははや庵にかへりて、おん身がかゝるよしなき望を絶ち得むやうに、神に願はんとおもふなり。例の路まで導かむとおもはゞ來たまへ。

主人は答へねど、僧の言に服したりとは見えず。その面には世に出でゝ身を立てむとおもふ心、明にあらはれたり。こは今宵にかぎりたるならねど、僧は今宵僅に其意をさとりぬ。

ゼベルド法師は褐色の帽を被りて、扉に寄せかけたりし荒木の杖取るほどに、エエッヒは狐皮の長靴穿きて帽を取り、壺に殘れる酒を二人が盞に注ぎつ。いま一杯傾け玉へ。こゝにてはきのふは今日におなじく、あすもけふに殊ならじ。こよひはこれにて盞を收めて、又明日は相對ひて飮まむ。僧は答へずして飮乾し、戸を開きて庭に出で、こゝより二人は外にいでぬ。十一月の雪の夜冴えて、寒さは膚を刺すばかりなれど、二人は慣れたるゆゑにや、事ともせず、僅に一二語を交ふるのみにて並びゆく。今宵の物語は、猶二人が胸に穩ならざる迹を留めたるなるべし。暴風は殆止みぬ。をり／＼高き林の方より、一陣の風吹來て、木立透きたるあたりの雪を捲起すとあるのみ。足の下なる雪の踏むごとに鳴るは、こよひ漸く寒くなるべき徵なり。されど二人はこれを心に掛けず。いつも別るゝ道の角に來しとき、エエッヒは僧に向ひて。今宵はおもひしよりも寒さ甚しからむ、

庵まで共にゆきて、語りあかさむとおもふはいかに。
僧は笑ひて。そは益なき心づかひなり。例なればこゝにて袂を分たむ。おん身は直に番小屋へ歸り玉へ。最早見廻もやうなからむ。
われもしかおもへり。さらばあすの夕また來玉へ。エエリヒは僧に別れて獨り立ちとゞまりたり。こゝは三條の道の集りたる處にて、シユレナエンへの大路、隧道に似たるグラアフエンスタインよりのぬけみち、僧が庵への登りみち、皆こゝを過ぐ。暫し僧が後影見送りしエエリヒは、かへり路に就かむとして、間道の方を見るに、雪にて眞白に見ゆる巖壁のさきは暗くなりて見えず。見あぐれば高き木々の梢、みな氷を被りたり。かれは暫し立ちとまりて、風の音の谷間に響きて斷えむとするに耳を傾けぬ。こは皆夜ごとにおなじ景、夜ごとにおなじ聲なり。さるに今宵は此景此聲常に殊なるやうに聞えて胸騷ぐは、僧その物語のなごりにや。
小屋近くなりしとき、ふと目につきしものあり。立ちとまりて右手を見やり、耳を欹てたり。こゝは木立疎にて、遙なる谷間を見おろし、一面の雪白きのみなるに、棲む人なき下道に火の光見えしやうなりき。この時風ふきかはりて、谷の方より雪少し捲上ぐるにつれて、常ならぬ響、耳に入りし如くなりしが、纔に慣れたる聽き耳にも何ともわかざりき。彼はといきつきて、又目を鋭くして見卸すに、微なる火の光、乍ち遠ざかり乍ち近づく如く、その近づく如きとき、物の響又聞ゆ。彼の心はいたく騷ぎたり。この火光、この物の響、この風の音は夢みし浮世の波にあらずや。此波は來りて我に迫るにあらずや。
暫しありて火の光も見えずなりて、物の響も聞えずなりぬ。遙なる谷底まで光るは白雪のみにて耳

に入るは又ひとしほ寒くなりたる風の音のみ。

エエリヒは唯夢心地になりて、猶も谷間を見御してありしが、四邊に聲なく、寒さ骨に徹する如くなれば、頭打掉りて小屋にかへりぬ。

爐の火は半ば灰となりて、小「ランプ」も消えたり。されど一間には猶煖まりこもりて、殘りたる火の紅に見ゆる處もありき。さきに僧の腰かけたりし椅子に坐して、やうやうに消えゆく火を見詰めたりしが、かくて心ともなく一時あまりをや經にけむ。忽ち耳に入りしは門の戸を叩く聲なり。道に迷ひし木こり、獵師などの夜半に來しとはしばしばありしが、こよひは此樹の扉の鳴る音、いつに殊なる心地しければ、誰ぞやと問ひもあへず、かけがね脱してあけつ。

來し人の顏を月影にすかして見れば、めづらしからぬメエレンの旅商人ヤブロニッツなり。日にやけたる顏に、黑く逆立ちたる頬鬚の生ひし間より、刺す如き細き目見えたり。この男は年々貨物を持ちてこゝを過ぎ、この番小屋へも酒などもて來ることあり。人の噂にはあやしきふみの使すといへど、主人は心にもかけざりき。

主人、誰かとおもへば、ヤブロニッツならずや。はや最夜中なれば、爐の火も消えたり。されど酒一杯、冷き肉などはあるべし。

ヤブロニッツ、否、何もほしからず。われはよき仕合せを持て來ぬ。かくいふ客は早く入りて、家のたゞ中に立ち、兩手を主人が肩にかけたり。主人は急ぎて點しゝ松の火にて、ヤブロニッツが面を見るに、亂れたる黑髮は額を掩ひ、唇震ひて吐く息忙しく、そのさまいたく疲れたれど、心せきて暫しもやすみがたきやうなり。エエリヒはおどろきて其顏打ち守りたり。

ヤブロニツツ、わが顏のみ見るとかは。急がずは、今までの我骨折もあだになるべし。近路よりわれをグラアフエンスタインまで案內せよ。かしこに訴へて、いそぎ手くばりせば彼等は手の中の物ならむ。

主人、彼等とは誰がとぞ。誰がこゝへ來むとか。かく問ひつゝやう〳〵にヤブロニツツが手をふりほどきつ。

ヤブロニツツ、五日前まで奢を極めしフリイドリヒ、フオン、デル、ハルツと美しき妃となり。今は榮華の夢さめて、白山のあたりにては、官軍のかばねを繞りて、鴉のうたげ闐ならむ。ベワリヤ勢は打勝ちて、スタイエルマルクのフエルヂナントははやプラアグに入りぬ。

エエリヒはいよ〳〵呆れて言葉なければ、客は又その肩をおさへたり。

ヤブロニツツ、いかに我言ふと耳に入りしや。國王夫婦はブレスラウへとこゝろざして、いま此山路にかゝるべし。プラアグを出しときより、次第々々に人數減りて、今はあはれなる有樣になりたらむ。グラアフエンスタインの伯だに人を借さば、こゝにてくひ留めむといと易からむ。王の首を取りしものには、三千「グルデン」の賞あるべしと、天子よりの約束なり。ハルラハ伯は侯ともならむ。我等も一生安く暮すべし。

主人、そは思ひもよらぬ事なり。浮世のことは善くも知らねど、フリイドリヒはしばしなりとも、こゝの王なりき。恩はあれど、怨はなきものを。

ヤブロニツツ、おん身こそ怨はなからめ。足の踵裂くるまで奔りて、ヲイベンビコルゲンへゆき、ベトレン、ガボオルに密書屆けてやりしに、却りてわれを犬と罵りぬ、聞かずや、犬と罵りぬ。若

し其處にて位にあらば、われをしばり首にも行ひかねぬ奴なり。時遷らば甲斐なからむ。疾くグラアフエンスタインへ。

主人はといきつきぬ。胸に波立ちて、血面にのぼりしが、しか思はゞ共に來よと答へて出でぬ。戸口を出でゝ二三歩の處に深き谿あり。エエッヒはこゝを過ぐるとき、此旅商人を突落さむとおもひしが、ゼバルド法師の姿、おも影に立ちたれば止みぬ。ふと心付きしは近きところなる荒木作りの倉なり。物をもいはずヤブロニッツを引捉へて、叫びもがくを事ともせず、倉の戸あけて狹き間に推入れ、手早く戸を掩ひて、重き閂をかけつ。內よりは力を極めて戸を推すやうなりしが、しばしありて物音止み、唯罵る聲のみ聞えぬ。

エエッヒはいそぎて我家の前を過ぎ、下道の方に向ひて、息を屛め、目を睜りて覗ふに、馬の嘶く聲、蹄の岩に觸るゝ聲など次第に近く聞えぬ。法師を送りてかへりしとき、夢の如くに見し紅の波は、今こゝへ張り來むとす。幾本の松火は乍ち高く乍ち低く、一群の先にたちて進みちかづけり。エエッヒは醉ひたる如く馳出でゝ迎へたるに、此群の人は皆外套などにて、深く身を掩ひたるが、各々打物取りて、中には馬に乘りたるが雜りたり。松火取りたるは、燃えさしたる束を高くさしあげたり。獨逸語、ビヨオメン語、その外聞きもあらはぬ語にて皆罵りあへり。

出迎へたるを何者か見むとて推しあふ人、遽に足搔をとめられて伸びあがりたる馬、重荷負ひたる驢などの間に、蒲團毛革など被ひたる擔架を舁かせて、これに乘りたる美人あり。「ブロンド」の髮の包みあまりたるは、肩にこぼれかゝりたり。先手なりし兵卒等の今エエッヒを捉へて、騎馬の間へ引込みしとき、此美人の靑く淸き目は、番小屋の主人が面に注ぎたり。

何者ぞ、何故に君のゆくてを遮りしかなど呼ぶ聲いと荒らかなり。われは此の林の番人にて、こゝなる家は我番小屋なりとエエリヒ、ワルラムは靜に答へぬ。

誰が領内ぞと列の後のかたより問ふものあり。

グラアフエンスタインなるハルラハ伯の領なりと答ふるを聞きて、人々氣色悪しく、何事をか呟きあへるさまなり。此時エエリヒは引かれて彼搖架に乘りたる美人の側近く來しが、その氣高きさまを見て、覺えず地に俯しぬ。美人はこれを見ていふ。起て、獵人。汝はやさしきビヨオメンの民の一人ならむ。汝等が國王なりし我夫に、しばし番小屋借して憩はせずや。慣れぬ旅路に疲れたるに、供人も多く途にてはぐれたり。番小屋の爐に煬りて凍えし手足を煖めさせよ。

妃が美しき姿、やさしき聲は、世なれぬエエリヒが心を奪ひて、その答ふる聲をも澀めつ。この氣色を見て取りし妃は、面を毛革に埋めたる側の騎者に向ひて。彼が家に憩ひたまはずや。おん身がためにも、わが爲にも、けふの旅はあまりに劇しき骨折なりき。しばし息ひて力を養はずば、後にいたく疲れやせむ。途よりはぐれし人の、こゝにて息ふうちには、追付くこともあるべし。

王は力なげなる聲にて。離れしものは、歸らむともおもはれず。こゝまで來し人も次第に逋去るべし。息ふは好けれど、チルリイが騎兵の逐迫ることあらば。

此言葉まだ畢らぬに、一人の騎士進みていふ。そのおん心遣ひには及ばざるべし。プラアグを出でしより、二日路が程は確に驅けぬけたり。けふの晝過ぎ、馬に馴れたる獵兵一人七時程餘も乘戻らせしが、夜に入りて歸りて、敵らしきものの見えずといひぬ。こゝ等わたりへは、まだ戰の噂だに聞えぬものを。

王の答はよくも聞えず。この騎士の言をば伺疑ふさまなりき。

その隙に妃が指にてさしまねき玉ふを相圖に、人々エエリヒを先に立てゝ、番小屋の戸開かせて入りぬ。この淋しく薄暗き山家は、忽熱鬧の境となりて、松火の焔明に、笑罵の聲喧し。

戸を入るとき妃は、爐に埋火あらばかき起してよとのたまひしを、主人は聞きもあへず、樅、ぶななどの薪を惜氣もなく爐にくべて焚付けたれば、程なくはち〳〵と音して燃上る火、宵の間セパルド法師が腰掛けし破榻に今倚りたまふ妃の、蒼ざめたれど猶美しき顔を照しつ。苦々しき面持して、王は其側に立ちたりしが、身に纒ひし美しき毛革の外套の、床にすべり落ちたるを、妃が足の下に推遣り玉ひぬ。珠玉もて飾りたる王の衣も、急ぎて旅立ちしさま見えて、整はぬ處ある如く、王の背後なる一人の衣は烟に燻され、塵に塗れて、猶戰の痕を留めたり。此人の黒き瞳は、かはる〴〵王妃二人の身に注げるを、エエリヒは側より見て、二人の心苦しさいかならむと推測りぬ。王は僅に口を開きて。キンスキイ伯、馬引入れたる處を閉し、哨兵を置きて頻に交代せさせ、ようなき輩はこゝへ入らせよ。

伯は妃に向ひて、あまりに人多くありたらば、煩はしとはおぼさずやといふを、妃はさしまねきて、疾くゆきて仰せの如くし玉へといだしやりぬ。

エエリヒも伯の後につきて、いでゆかむとするを、妃は呼留めて傍に居らせ、伯のうしろ影見送りて王に向ひ。流石仰せには負きまつらず。

王は苦々しき面持して。まだ負かねど、久しからじ。ブレスラウまでも隨ひて來なば、志は致したりとおもふなるべし。侍みし人も一人二人と落ちてゆけば、行末はいかならむ。

主人は此問答をかたへぎゝして王妃の身の上をおもひやり、慷慨の色面にあらはれたるを、妃は早くも見て、エエリヒが名を問ひ、プラアグを出でゝより、心おかれぬ宿とては此番小屋の外にあらざりしを、いつまでも覺えおきて、又世に出でむをりにむくいせばやとおもふなり。こゝを出立つときは、林のはづれまで送りてよ。

笑を含みての妃の頼に、エエリヒはかたじけなさ身に染みて、言葉も出でぬばかりなりき。一たび流に委ねたる身は、最早奈何ともなしがたきにや。主人が目は、心ともなく我家の隅々を見わたすに、王の舍人等兵卒と打雜りて、坐したるあり、臥したるあり。戸のほとりにて、髯いかめしき馭者の一群、舌打して食ふを見れば、こは冬の料にとて貯へたりしものなり。室の眞中にて、號衣きたる僕の酌みかはしたるは、「クリスマス」の祭に飲まむとて殘しおきし匈牙利の上酒なり。あすの夕セパルド法師の、例の如く尋來て、この樣を見ば、何とおもふらむと、一瞬間思ひしが、忽又きのふ迄の我生活は、迹もとゞめず消失せて、けふよりは新しき世の人とならむと思ひかへしぬ。心ばかりの餉を妃にまゐらせむとて、「ブロンド」なる英吉利種の扈從と共に給仕するに、いづれ劣らぬ眞心の通じてか、年久しく宮づかへしたる友達の如く、互に痒き處に手の屆く心地す。今や浮世は此番小屋の中に入りぬれば、さときエエリヒが心にも外面の事を打忘れたるはことわりならむ。

エエリヒが酌みて捧げし匈牙利酒の盞を、妃の纔に唇にあて玉ふとき、キンスキイ伯は衣帽雪に塗れ、面の色赤くなりて入りぬ。

伯、心安くおぼし玉へ、陛下。外面はいと靜なり。哨兵は程よく配りおきたれば、不意を襲はるゝ憂なし。馬もそれ／＼に屋根ある處に引入れて、行李もきのふよりは善く整へさせ侍り。猶聞えあ

げたき一條あり。そはおん旨をも伺はで、猥に罪人一人赦免せしことなり。かゝる樣になりたる我に、赦免を請ふものあらむとはおもはれず。

伯、否、先頃おん使を承はりしとあるヤブロニッツといふものなるが、この林の木を伐り、また獸をや射たりけむ、こゝの主人に捕へられて、近き小屋の中におかれしを見いだし、彼が陛下のおんゆるしを請ふ心の切なるにめでゝ放ちやりぬ。

ヤブロニッツとかといひし王は、しばし首を傾けたりしが、そは彼マチヤス、ツルン伯が我に告げし名の一つなり。わが聞きしを悔ゆる名の一つなり。

王のかくいひて、疲れたるやうに目を閉ぢ玉ふを、妃は心に掛けて見やりしが、不圖頭をめぐらして、主人エエリヒが顏を見て驚き玉ひぬ。色青く、眼血ばしりて、キンスキイ伯を見詰めたるさま、劇しき怒をやうやう抑へて、言葉を求むと見えたり。妃のまだ唇を開き玉はぬ程に、エエリヒ聲ふるはせていふ。キンスキイ伯、よしなきことをし玉ひしよ。其男は半時ばかり前にこゝへ來て、雨陛下を賣らむと我に勸めしを、かしこに推籠めおきしなり。事のまぎれに今まで忘れて、取逃しゝこそ口惜しけれ。利にさときハルラハ伯なれば、彼が言を容れて、討手をこゝへさし向くるとならむ。

王妃は齊しく坐を起ちて、顏見合しゝが、彼も此も此家の主人を打見る目の中に、符節を合す心は、明に讀まれたり。妃の一時の危急にこゝろ怯れて、面を掩ひ玉ふとき、王は石像の如く凝立したるキンスキイ伯が黑き瞳の底を看透かさむとおもふやうに睨みて、おん身はかく迄。粗忽なる振舞し

玉ひしか、さらずば心ありてかく計られしか。我等を訴へむとする惡人を、故なく助け玉ひし心を、われは咎めむとも思はねど、自ら省み、また神にむかひて言ひ解き玉へ。

伯はかく改まりたる王の言葉を聞けども、毫しも騒ぐ色なく、主人が方を指ざして。此男は陛下を宿したる榮に眼くらみしか、さらずは危くもあらぬことを、危しといひて、後に手柄顔せむとおもふなるべし。かくまで遠く走り玉ひし陛下、また何事をか氣遣ひ玉ふ。敵の騎兵に翼はなきものを。

主人エエリヒが心は波間に漂へり。心の中にては、さきにヤブロニッツを殺さゞりしことを悔しくおもひ、目の前にては王の眉根に、皺のやうやく寄來るを見て、我身の安危をおもふに遑あらず、いかにもして王妃の命を助けばやと、妃の前に跪きて、兩手高くさし上げたり。

エエリヒ、我無禮を咎め玉ふな陛下。都離れし山里に栖めば、彼メエレンの旅商人のいひしこと、眞ありや否やを知らねど、若し彼が告げし如く、金を懸けて、陛下のおんしるしを求むるものあらば、財を好む領主ハルラハ伯が手を空しうして過さむとはおもはれず。即時にこゝを立ちて、大路を進みたまはゞ、御命助かり玉ふともあらむ。ハルラハ伯が兵は間道より追迫るべければ、おん供の中より殊死の士卒十餘人を殘しとゞめて、我と倶に間道の出口を防がせ玉へ。

此時主人が心は、恍惚の間に我身の行末をおもひて、國王夫婦を落しゝ後は、領主の祟さこそと知りたれど、浮世の波に漂ひては、餘所をおもふ遑なく、面に誠を呈はして王妃を仰見たり。

王は伯と主人とを、あちこちと見比べて、思ひ迷ふ如くなりしが。エリサベット、いづれか誠ならん、と妃に問ひ玉ふ。この時妃の面は忽ち雲破れ、日出づる如くなりて、靑く美しき瞳にて、きと主人の方を見やり玉ひ、我夫こなたを信じ玉へ、かゝる面持したる惡人の世にあるべきか。

妃は白くやさしき手にて、エエッヒが肩を拔へ玉ひ。われ等ははや此處を落ちむとこそおもへ。追手の來べき道をしばし遮りて、我往方を安くせよ。エエッヒがこの時の嬉しさは譬へむにものなかりき。キンスキイ伯は强ひていひ解かむともせず、出發の用意に忙しげなり。王の從卒ははや群を成して戸口を出づ。そのさま入りし時よりもあわたゞし。夜は曉近くなりて、寒さ膚を裂く如くなれば、一夜のやどりだに安からぬこそ物憂けれと呟ぐ聲、王妃にも聞ゆるなるべし。王妃は猶先に主人が焚付けし爐の火に向ひて居り。外面にては荷を縛るものあり、馬に鞍置くものあり。されど打物を改めみむとするは、僅に數人に過ぎざるべし。中には互に目ぐはせして馬に打乘り、もときし道へ引返すもありき。

程なく入來りしキンスキイ伯は王に向ひて、近衞よりも三騎ビヨオメンの方へ落ちぬといふ。その面に冷笑の色を帶びたるを、妃はよくも見ず、顏打そむけ玉ひぬ。王はなかなかに慌てたる氣色なし。

王、エッサベット來よ。縱令二人になりたりとて、ゆくべき處までは往かむ。かゝる見苦しきありさま、いつまでか見てあるべき。

王妃は番小屋を出で玉ひぬ。さきに乘り玉ひし擔架を舁きし卒も、いまは見えずなりぬとて、知らぬ男の柄を握みしを見て、妃は英吉利種の舍人を呼近づけ玉ひて、馬を牽かせて騎り玉ふ。エエッヒは早くも進寄りて、その鐙を取るに、妃はうれしげに見御じ玉ふも却りて悲し。今一度立還りて我家を見れば、人去りて闃然たる跡の景色、消えかゝりし松火の光にて、いとあはれげに見えたり。鎗と鳥銃とを手早く取りて、戸をさゝむとするに、外よりは我名を呼ぶ聲頻なり。浮世の波は弼來

りて、よるべき岸はいづくとも定らず。
王妃の一行れはや大路を進みゆくに、舍人はとゞまりて主人に向ひ、調子殊なる獨逸語にていふ。おん身は誠ある人と見ゆ。其の逃路を敎へ玉へ。一行には恃むべき人少くなりぬ。キンスキイ伯は褒美の金慘にしたらむも計られず。われ王ならば、今まで待たで彼を擊殺すべかりしを。
エエリヒが心は狂せる如くなりき。譜第のもの皆離るゝをりなるに、今宵はじめて逢ひしおのれのみ、いかなれば忠臣たるべき。かく思へば我ながらいと怪し。
足をはやめて一行に近づけば、妃はふりかへりて、いづれの道を進むべきかと問ひ玉ふ。その隙にエエリヒは、妃の乘り玉へる白馬の側におひすがりぬ。妃は言葉を繼ぎて、汝が間道といひしはいづくにか。
エエリヒ、一時ばかりの程には、間道ある處にいづべし。我と共にとゞまりて、追手を防ぐべき人をそこにて敎へ玉へ。
そこに殘るものは、いかに成行くべきか。妃はかく問はむとして、又止みぬ。路は林の間に入りて王妃は英語にて何事をか叫ぎあひ玉へど、エエリヒには分らず。この時エエリヒは心の中にて、今此木立に入りて逃去らば、我身に後難なからむとも思ひしが、かくなりて逃去らむは我志にあらずと又おもひかへしぬ。一行はいよ〳〵急ぎゆくに、エエリヒは心ともなく隨ひあゆみて、間道のほとりに出でぬ。
法師と別れし時の盛にて、半ば雪に埋もれて、寂として聲なき間道に幾歩か踏入りしエエリヒは、眸を放ちて見れど、グラアフエンスタインの方より一點の火も見えず、又耳欹てゝ聞けど何の音も

なし。岩壁に攀登りて、猶遠き方を見ばやとおもへど、嶮しければそれもかなはず。本街道に立ちもどりて、王妃の前に頭を下げ、おん往くての妨すべきものは、悉く此口にて遮留めつべし。命惜まぬ士卒七八人我と共にこゝに殘し玉へ。五六時間の猶豫は屹と得玉ふやうにすべし。

フリイドリヒ王が一揮の下に、猶志遷らざりし殊死のつはもの、手に〳〵得物を持ちて列を離れ、エエリヒが傍に簇れば、英吉利舍人も馬より躍りおりてこれに加はりつ。エリサベット妃がやさしき目は、暫し舍人が方に注ぎしが、忽ち思出したる如く獵人エエリヒを呼近づけ、細きおん指に嵌め玉ひし指環、手袋手早くぬぎて拔き取り、これをわたして、言葉に盡されぬ今宵の恩義、その報といふにあらず、國王夫婦が志のしるしまでにとの玉ふ。王も何事かいひ玉ひしが聞えず。キンスキイ伯が下知に、疲れし馬に鞭をあてゝ、一行は動きはじめぬ。

エエリヒは妃の一目、今また我頭に落つべきかと思ひしが、別に臨みて跪きし舍人をのみ見玉ひぬ。月に透して此一行の後影、猶數分時の間は見えしが、道の下りになりし處にて隠れぬ。

エエリヒは人々に持場を定めて守らせ、ふと頭を擡げて見れば、向ひの坂道は靜けさいつに變らず。ゼベルド法師は草の庵に穩なる夢を結びて、年若き友なるエエリヒが、かゝ迄深く浮世の波を淩ぎて泳ぐとも知らぬなるべし。

この時忽ち蹄の音響くに、人々驚きて見上やれば、間道の方にはあらで、今落人のゆきし街道を取つてかへしゝキンスキイ伯なり。喘げる馬を巧に乗りしづめて、一群をきと見やり、うつけたる人々何ごゝにありや。追手のために捕へられなば、絞首に逢ふべきに。此言葉を跡に殘して伯ははやピヨオメンさして引返じゆくを、憤恚胸に溢れたるエエリヒが背より放つ銃一發。その響まだ止ま

ぬに、間道の方、俄に騷しく人許多罵りあふ聲、重く土にひゞく足音聞ゆ。エヱリヒを取卷きし士卒は、これを迎へて戰はむとはせで。げにキンスキイ伯の言葉の如く、こゝにありて何の益かある。打物棄てよ、人々。かくいふや否や、伯が去りし方へと皆急ぎぬ。舍人は罵りながら丸をこめ、忽ち憂はしげに頭を回らして、寒に凍えて耳を低れたる我馬を見き。エヱリヒはなか〳〵に面にゑみを帶びて、われも丸をこめて居たりしが、遽に聲を勵まして。只二人となりはてゝは、充分なる防は覺束なし。我鳥銃一つにてもなす程の事はなし得む。おん身は早く王妃の跡追行きて、馬のつゞかむ限急ぎ玉へと傳へよ。尙こゝにあるとかは。舍人は厭辭みしが、俄に悟る目の色燿ぎて、我馬にひらりと跨り、一行のあとを慕ひて去りぬ。

舍人の殘しゝ一聲は、不思議の恩義に感ぜし言葉ならむ。朝風に散り、蹄の音に消されて聞えず。法師に別れし宵々とおなじく、エヱリヒは唯一人、間道のほとりにぞ立ちたりける。されど今宵のみは、家に歸るべきにおらず。間道の奥よりは、むら〳〵と黑き人影近づきぬ。手馴れし鳥銃取上げて、一發二發。かなたにては人影の進みては又退くさま、明に見えて、防禦の功流石空しからず。十五分又十五分と時伸びたり。エヱリヒが胸には熱血沸きたちて、嬉しく面白きは、こゝにての一分時、落ちゆき玉ふ妃のために玉の緒繫ぐに等しきとなり。

この時、間道に沿ひたる小山の上より、土石崩れおつる音して、かねて知りたる旅商人ヤブロニツが聲、道の邪魔するは林の番人エヱリヒなりと叫ぶと共に、打物取りて續きし敵兵早や頭の上より落來りぬ。進退已に谷まりながらも、間道に向ひて最後の一發、出口に迫りし追手は喚きさけびて又退きぬ。この時上の方より狙擊せし一丸に、エヱリヒは中てられて、もろ手に銃を緊と握りて

僵れぬ。

忽ち人馬の聲、本街道をビヨオメンの方より響くと共に、ヤブロニッツが引來りし群は木の間に隱れて、間道もまた靜になりぬ。王妃のあと追ひて來し一隊の騎兵は、獵フリイドリヒが號衣脫がぬもの共なりき。これと一時に、鳥銃の音に夢を破られしゼベルド法師は、峰を降りてたどり來つ、僵れたるエエリヒが側に跪きて、死に垂たる頭をそと抱きあげしに、將に瞑せむとせし目を開きて、めぐりの騎兵の號衣をつく〴〵と見やり。王妃は街道をかなたへ落ち玉ひぬ。おん身等はしばしとゞにて時をたゝせ、夜の明けはなるゝ頃、追着きまゐらせて、わが發落をも申しあげてよ。かく言ひはてゝ、一たび目を閉ぢたるが、又開きて法師を見。おもひ當りしは君が敎なり。浮世の波のげに怖ろしさよ。われも最早出でゝ吞まむとおもふ心はなけれど、一たび流にいでゝおひては、今宵の如くならでは協はじ。我導を忘れ玉ふな、法師。美しき妃は忘れ果つとも。

夜明けて騎兵のシユレタエンの方へゆくとき、ゼベルド法師は淚眼乾かず、足はよろめきながら庵に登りて、浮世の波に洗はれたる淋しき死人一人、折累ねたる松が枝と雪との下に殘りぬ。

瑞　西　館

余は昨夕ルチエルンに來りて、瑞西館といへる第一等の羈亭に投じたり。

マルレイの云く。「四林湖畔なる聯合區の市は瑞西風流の都城中之を推して白眉とす。三條の大道は此に交叉して、滊船一刻リギに逵すれば、世界無二の畫圖は我前に陳ずと。」

余は其眞なりや否やを知らず。然れども他の風土記も亦たこれに似たる文を記せり。宜なり、萬國

の旅客こゝに麕至するとぞ。就中尤も夥しきは蓋し英人ならん。

瑞西館といへる莊麗なる五層樓は、近頃湖に臨みて起したるものなり。今此樓の起れる處には素と屋根ある曲木橋ありて、其隅には小龕を置き、その棟木には畫像を着けたりき。英人の雜沓、その需要、その嗜好及びその金錢は能く此古橋を毀ち、これに代るに一直線をなせる堤を以てしたり。此堤の上にぞ彼の方形五層の館は築かれたる。館の前には兩行の綠樹を植ゑて、之を挾くるに木柱を以てし、此並木の間に、恰も好し、綠に塗りたる榻を据ゑ付けたり。これ所謂散步場なり。而して彼の瑞西の藁帽を戴ける英國婦人と寬濶にして久しきに耐ふる衣を着けし英國男子とは、此間を往きつ戾りつ、造化の功德を賞美す。嗚呼、此堤、此家、此並木、此英人は之を他の或る地に遷すときは頗る觀るに堪へたるものなるべけれど、その之をこゝに置けるは奈何ぞや。この超然たる偉觀を呈して、一種言ふべからざる優美の調和を得たる自然の中央に。

余の樓に上り室に入りて、水に臨みたる窓を開けるや、一瞥の間に我目を眩まし、我心を動かしたるはこの山、この水、この天の美なりき。余が中心は不穩になりて、この忽然と我心を動かしたる感觸を、怎にもして發表せんとする欲望熾なりき。此時に余に遭ひしものあらば、余は之を擁き、緊しく之を擁き、之をくすぐり、之を搯り、その外、渠と倶に常ならぬ、極めて癡なることを始めたるなるべし。

時に夕の七時なりき。終日雨ふりて今は天晴れたり。湖は熱硫黃の如くに靑く、平に、靜に、一面の凹鏡かと見るまでに窓前に橫はり、平遠にして奇變なき綠の岸は之が緣となれり。唯だ時に扁舟の

過ぐるありて、水面に長き皺を留むれども、この皺は轉瞬の間に消えて痕もなし。皆を決して遠く望めば、突出せる兩岸の丘陵は水を壓め、水の色は漸く黝然となりて、果ては重疊せる山谷と氷嶺と雲堆との間に沒せり。

目前には又淡綠の岸、廣く布かれて蘆葦、牧場、田圃、林舍これを點綴し、少しく後には岡の上の密林鬱蒼たる間に古城址を認むべし。最も後には「リラ」花に似たる淡紫色の遠山の磊塊ありて、その種々の狀をなせる巖は、雪を戴きて白し。此渾ての景色は透碧なる清鮮空氣に浸され、また裂けたる雲間より射出する夕陽の暖き光にて照されたり。

湖上にも、山下にも、天宇にも、一直線なく、一純色なく、一靜點なし。隨處にあるは動搖、參差、任放、錯雜、線盤と陰翳との絶えず交流することにして、萬物皆穩靜、睍軟、調和と美の約束とを備へたり。

然るにこの不定、不整、不羈の美觀の中央にて、尤も我窓に近き處にありて、我眼を遮ぎるものは、堤に直立せる頑然不靈の一白木柱と、木杖にて扶けられたる並木と綠に塗りたる榻と、皆あ毫厘の假なき人工の物にて、遠所の村舍、城址などの如く美觀を補ふことは扨置き、無作法にもこれを嘲るものに似たり。

我目は彼の厭ふべき程に眞直なる堤堰を打倒し碎き去ると、直に目の下、鼻の上にある一黑斑を拭ひ去るが如くならんことを欲せり。

然れども彼堤と、その上を逍遙する英人とは依然として存じたれば、余は覺えず、この堤を背にして立ち、食時に至るまで獨り此不完全なる、少しく悲酸なる、而れども亦た之が爲に愈々旨美なる

自然の嘗味に耽りき。此の如き嘗味は獨り心を潜めて自然の美を受用することを解するものゝ知る所なるべし。

余が「チチェ」の食卓に呼び出されしは七時半の頃なるべし。華美なる裝飾ある樓下の一室に二長卓を据ゑ、百人許も坐を占むべき準備あり。群客が相互に言葉をも交さず來り聚るには、三分以上の時を費しつ。嗚呼、この女服の戰ぐが如くに鳴る音、靜なる跫音、又た彼の慇懃なる、善き衣着たる僮僕に向ひての纔に聞くべき吩咐。既にして復た一空榻なし。紳士も、淑女も、服裝は頗る美なり、否、貴く且つ世の常ならず濟潔なり。

此館にても客の過半の英人なることは、瑞西全國の習に洩れず。されば卓前の光景は總て英國流なり。習慣法にて鍛ひ上げたる嚴格の態度と、相親み相交ることとの禁制とは、その流義の神髓なり。此の光景は未だ必ずしも衆賓の相倨れるためならず、職として座間一人として友を求めむとする心あるもののなきに是れ由れり、職として人々自ら安じておのれが欲を充たし、己れが望を達するに是れ由れり。

顧望の間何方にも璨閃たるは白き「レエス」なり、白き襟なり、白き眞成の琺齒なり、太だ白き顏と手となり。この顏の中には頗る美しきも見ゆれど、唯だ一身のみの安寧を反射したり。渠等は四邊に底事のありても心をば留めぬさまなり、縱然其事は直に己れに關係するものなればとて。嗚呼、この白く光れる手の指環嵌めたるは、時に衿を正さむため、肉を截らむため、酒を盞に注がむために動くのみ。その動くや毫釐も心よりして動くと見ゆる迹なきなり。

親眷の交坐したる間にては時として閑に語を交はすとあり。其題目は肉の味に非ざる時は酒の香

なり。又稀にはリキの頂より四望すれば景色好しといふもあり。他の男女の孤客等に至りては、徹頭徹尾一聲だに發せず、否、並坐したるものも相見ることだになし。

此一群の人の中にて時に一二語を交はすものあれば、問はずしてその天氣の晴陰、若くはリキの登臨を題となしたるを知る。肉叉と肉刀とは殆ど聲響なし。是れその皿上に往來することの甚だ密かなればなり。嗚呼滿卓の儀容の嚴肅なることは、實に其極に抵れり。見よ、彼果さへ肉叉に貫きて口に投ずるにあらずや。

僮僕も亦た衆賓の沈默を學びて、何れの酒を嗜み玉ふかと問ふにすら、耳につきて呷ぐ程なり。此の如き筵に與る毎に、我心は憂へ且つ困めり。筵の撤せらるゝ頃には又悲めり。此情を分析すれば、何となく罪ありて罰を受けたる如き心地す。恰もまだ穉なかりし時に、長者が余を捕へて我惡譴を責め、余を一椅榻の上に据ゑ、嘲笑を帶びたる聲にて、見よ、姑く此に憩へかしといへるに似たり。不快なるは此時の情なり。余は止むことを得ずして榻上に坐し、隣室の姉妹が笑ひ哄動くを聞けり。我脈絡の中には少壯なる血の波を打ちつゝ循れるものを。

余がこの死に果てたるが如き感觸を拂ひ去らんと欲したるは幾度ぞ。奈何といふに、余は此食卓に臨みて起れる感觸の奇なるを知りて自ら憤りたればなり。然れども遂に除くこと能はざりしものはこの癖なりき。嗚呼、この死に果てたる夥多の顏は、我心に一種の避くべからざる痛苦を與へて、兎角する程に余も亦た死者の群に入れり。余は願なく又た思なし。余は四邊に何事あるか知らざる程になれり。

當初余は並坐せる客と語らんと思ひて言葉を掛けたれど、渠の應ふる所は既に百たび千たび渠の口

より出で丶我耳に入りし俗間の套語の外には隻言もなかりき。

されぱとて客は悉く癡にして情なきにはあらず。否々、此死人の群中には余と同じ心を懷けるもあらん、或は又たその心の我心よりも迥に面白く奥深きもあるべし。

然らば渠等は何の心ぞ、故らにこの人間第一の好受用を避けんとするは。この人間の交際にて生ずべき快味を回想すれば、何等の反對ぞ。余がかつて巴里に在りし時の「パンジオン」の生活。鄉國も職業も氣風も皆な相殊なり。されど二十人が共に食卓に赴く心は殆ど一遊戯の塲に行くが如くなりき。

卓の一端にて起りし談話は、直ちに卓の他端に波及して、滿堂の問題となり、これを飾るには、時に未熟なる佛語にて出せる諧謔と小話とを以てせり。座にあるものは一事の心頭に浮び出づる毎に、これを語に發せり。豈必ずしもその影態の奈何を問はんや。此座には吾黨の哲學者もありき、吾黨の論客もありき、吾黨の審美家もありき、又た衆人の諷刺の的となりたる人もありき、而してこの數多のものは皆な一卓の共有なりしあり。

客の卓を離るゝや、塵多き氍毹の上をも厭はで、「ポルカ」の舞を始めたり。調に合へるも合はざるも自からなる興致あり。彼處にては余等は少しく人に媚びて餘りに賢くはあらず又た端正にもあらぬ人物なりき。されど猶是れ活人物なりき。

思ひ出すは彼西班牙伯爵夫人の「ロマンチック」に傾きたる、彼伊太利の「アッベエ」の食後にダンテが「チ井ナ、コメヂヤ」の一節を余等に讀み聞かせたる、彼亞米利加爵士のトエンリインに出入するを事としたる、彼年若き狂言作者の長き頭髮を垂れたる、彼「ピヤノ」を皷する女子の世界第一の

「ボルカ」を作れりと自ら信じたる、彼薄命なる未亡人の指毎に環を嵌めたる。此夥多の人々の余と交りしは深きにはあらねど、亦た人の道に協へり、否朋友の道に合へり。されば余等は相別れたる後も互に相思ふなり。唯中には轻々心に痕を印したると、頻りに心に關れるとの別あるのみ。余は英人の群坐したる食卓に就く毎に、此夥多の「レエス」、指環、油したる髮、絹の衣を見て渠等が何とて好んで自ら歡娛を求めざるかを問ひ、又渠等の心次第にて奈何ばかりか、余等の快樂をなさんものをと思へり。

此際我心頭に不思議なる念を發せり。此群の中には兩心相愛し相親むべきもの多かるべし。否、相愛し相親んで各々その所を得べきもの多かるべし。渠等は或は袂を聯ねて坐せり、而してこれを知らず、これを聞く時もなし。この兩心の幸福はこれを成すこと容易なるべきに、これを成すに意なし。嗚呼この兩心の幸福は人々の常に遠かんとする所なるを。

余は斯かる食卓に坐したるがため、例の如く心太だ樂しからねば、果を供するをも待たで立ち退き、怏々として館を離れ、足に任せて街頭を逍遙したり。燈を點ぜざる狹き街、戶をさしたる商家、出逢ふものは被酒したる工夫、水汲まんとにや影の如くに走り去る貧家の婦。此光景は獨り我憂を散すこと能はざるのみならず、亦たこれを深くしたり。日の暮れ果てたる頃、余は疾く眠りてこの憂を忘れんものをと、多く觀たる所もなく歩を回らしつ。我靈魂の上には、怖ろしき迄に冷なるものありてこれを壓せんとせり。我心は寂寥なり。この心は物に譬へて言はゞ、居を移したる初に故もなくて起れる悲痛に劈竟たり。我眼は曚然として直視し、我足は瑞西館に向ひ、岸に沿ひて歩みぬ。此時に我耳に入りしは世の常ならぬ甚だ快き物の音

なりき。この聲は余をして再生せしめたり。この聲は彼喜ばし氣なる白日の光の如く、我靈魂の宅れる所を照したり。我心は快くなり、我情は放たれたり。

我心中に假寐したる感情、人間世上の事に接觸すべき本性は、俄然として覺めて、目を開きつゝ四邊を見たり。凄涼の夜色、明媚の山水は忽焉として又た我を襲ひ、殆ど將に我心を醉はしめんとせり。余は仰で藍碧の上に灰色の斑を畫けるが如き曇天に、夕月の影さしたるを觀、俯して深綠にして鏡の如き湖面に、月の光の映射して様々の色したるを觀、又た眥を決して霧をこめたる遠岫を望み見たり。時に彼方の岸よりは蛙の聲、露の珠を貫きたる小鳥の聲の彼面白き物の音に和するを聞きつ。

余が往方にて聲の聞ゆる處を諦視すれば一群の人あり。半規形をなして、一個の黒衣を纏へる眇然たる小男子に對ひたり。

此群の背後には、寺院の兩側に當りて暗黒なる二塔尖の影、深碧なる暮天の間に聳えて立てり。余はこれに近づきぬ。物の音は愈々明かに、愈々清し。余は分明に辨じ得たり、優しくも日暮の顥氣中に浮沈する手琴(ギタルラ)の圓滿したる絲聲と、一曲の歌に屬せるにはあらで數曲中の面白き節を合したりと覺ゆる肉聲とを。

曲の題は一種の「マヅルカ」なりと覺し。而れども甚だ暢美にして愛らしく、淸楚なる趣きあり。その肉聲を聽けば、乍ちにして近きが如く、乍ちにして遠きが如く、乍ちにして「テノル」の高調に似て、乍ちにして「バス」の低調に似、又た乍ちにして粗く顫ひたる「チロル」節を聞へたる「ファルセット」調に似たり。

知るべし、その一歌曲にあらずして、輕妙の手を以て巧に出したる一歌曲の「スケッチ」なることを。余は實にその何物たるを知ること能はず。而れども爭ふべからぬはその妙處なり。嗚呼、この情に迫りたる旨美にして纖き手琴の音を奈何。この愛らしき輕軟の調を奈何。又この暗碧の湖、滑絶なる月色、天を仰で高く聳え、默然として語らざる雙尖塔に圍繞せられたる黒裝の小丈夫の姿態を奈何。嗚呼、此瞬間の事物は皆奇怪なり、されど甚だ優美なり。

この偶然にして湊合したる雜駁ある人世の影象は、忽然余がために意味あるものとなれり、價値あるものとなれり。これを比喩にて言はゞ、我靈魂の中にて此瞬間に一大輪の花新に開きて、香氣四徹せりともいはんか。今までも我心は疲れ、亂れ、人間の萬事を土芥視したるに、忽ち又た愛を求むる情ありて、我心頭を襲ひ來れり。無限の歡喜は我胸に滿ち渡れり。而して余はその何の故なるを知らず。思はずも余は自ら問ふ、爾は猶ほ何をか願へる、爾は猶ほ何をか求むると。嗚呼々々、彼等も此處にこそあれ、彼等は今こそ四隣より爾に迫り來るなれ、彼等、美と詩とは。酌めや、くめや、この滿觴を。醉ひに醉へかし、力のこれに耐へん限りは。爾は猶ほ何をか捕へんとする。嗚呼、渾然として爾が手掌の裡に有るにあらずや、人世の樂事は。

余はこれに近づきぬ。此小丈夫はチロル村裡より出でて國々を遍歴し、曲を賣りて口を糊するものなるべし。渠は館の前に立ち、跂脚を前にし、首を昂げて謠へり。渠は頻りに聲調を換へて、その優しき曲を唱へ、且つその琴を彈ぜり。

我心は弛み、我情は此小男子に牽かされたり。こは我愛を轉じて喜びとなしゝは渠の力なればなり。此半明半闇の間にて見分くべき所に依れば、渠は古き黒衣を纏へり。渠の髮は短くして黒く、渠が

頭に戴けるは古く粗き帽子なり。渠の衣は毫も風流の趣なけれど、その小兒に似て輕く嬉し氣なる身の構へと、その小き體に適へる敏捷なる擧止とは、人をして痛惜し且つ愛憐せしむるに足れり。燈光閃爍たる館の戸前、窻の間、「バルコン」の上には、華美なる粧したる淑女、白き襟かけたる紳士立てり。又金條の「リフレエ」を衣たる門者と從者とあり。街頭には半規の狀をなしたる群衆あり。少しく隔たりし堤の上、菩提樹の間には善き衣着たる僮僕、白き帽を戴き、白き前垂掛けたる廚夫等聚まれり。小女の手を組合ひて木の間を歩めるも見ゆ。

この衆人の心は我心と同じきにや、皆な默して謳者の周圍に立ち、心を專らにしてその歌を聞けり。

この時は四隣寂然たり。唯だ隙を措きては遥か彼方の水を渡りて聞ゆる鐵槌の響あるのみ。又た濕り勝ちにて變更なき小鳥の聲に打消さるゝ蛙の鳴く聲あるのみ。

街の中央、ほの暗き處に立ちたる小丈夫は、歌を以て歌に繼ぎ、曲を以て曲に續ぐこと、さながら黄鸝の囀づるが如くなりき。夫れ余は既に渠に近づけり。而れども渠が歌曲の余を樂ましむることは前に減ぜず。

渠の聲は廣くもあらねど、その優しく快きこと言はんかたなし。渠が此曲を操るに當りて、これを調べたる抑揚の趣味と感觸とは、現に世の常ならず、亦たその天性の人に踰えたるを知るに足れり。渠の歌へる曲には各々結語（レフレエン）あり。而して此面白き轉換は渠の咄嗟の間になし得たるものなること明かなり。

瑞西館の「バルコン」の上なる人も、街頭に集まりたる人も、時に感嘆の聲を洩せるのみ、皆恭やし氣に默聽せり。

既にして「バルコン」の上、窓の間には、衣裳の奢を極めたる紳士、淑女の數漸く增さり行きて、中なる燈燭のために照らされ、畫圖に似たる程に美し。散歩に出でたる客は皆な立留まりて、暗き湖堤の彼處此處に男女夥多群をなし、菩提樹の下に、わが立てる所に近く、彼群を離れて、口に卷烟草を啣へて立ちたるは、一貴紳の從者と厨夫となり。

厨夫はこの奇しき樂を聽きていたく心を動かしたりと見えて、一聲の高き「ファルセット」を出せる毎に感嘆したる様にて、從僕に向ひて打頷き、又た肘にて彼を擣きたるは、「何ぞ彼の善く歌へる」と云ふものに似たり。從僕にもこの曲の心に適ひし様は見ゆれど、彼は厨夫の擧動に答ふるに肩を聳かすことのみを以てせり。その狀、己れの心の倒々に駭かし易からぬを示さんとするがごとし。彼はこれよりも遙に善き歌を聞きしことあればなり。

謳者が暫く歌を止めて謦咳する間に、彼從僕に問ひて、此小丈夫の名と渠の果して頻りに此に來るかとを知らんとせり。

「然なり、渠は年に二度此に來」と從僕は答へぬ。「渠はアアルガウの者なり。所々をさまよひて食を丐へり」。

「渠の如き男は多く此に來るにや」。

「然り、極めて多く」と從僕は答へぬ。彼は余が何事を問ひしかを遽に解し得ざりしなり。暫くにして彼は我意の在る所を曉りて、「否、今來るは此男のみ。始より多く此般の人物あるにおらず」と言葉を添へたり。

この時小丈夫はその初闋を歌ひ畢りて、氣味よく手中の樂器を揮り動かし、獨逸の俚語にて何か言

ひしが余には分らず。されど渠を圍繞せし群衆はこれがために高く笑ひぬ。
「渠は何をか言へる」と余は問ふ。
「喉の乾きて酒欲しやと渠は言へり」と我が側に立てる從僕は答へたり。
「渠は酒を好むか」。
「彼奴等は皆な然なり」と從僕は打笑みつゝ謳者を指して答へぬ。
謳者は今や帽を脱し、樂器を揮り動かしつゝ館に近づき、首を仰いで窓に立てる紳士等に向ひたり。
「紳士、淑女達」と佛語に半ば伊太利、半ば獨逸の抑揚を附け、世の覩せもの師が客に申すが如き音調にて言ひ掛けたり。「君等は我を以て餘瀝を得るものと思はゞ是れ大なる過ちなり、我は窮鬼たるに過ぎざるを」。渠は暫く立住まりて默せしが、誰も物與へねば又樂器を揮り動かして曰く。
「紳士淑女達、今我が『リギ』の曲を歌ふを聞き玉へ」。
樓上の客は物も言はねど新らしき曲をや歌ふと待ちつゝ立てり。街頭の客は笑ひ始めたり。是れ半は謳者の言の奇怪なるに依り、半は人の彼に何をも與へぬに依る。余は渠に一二「サンチイム」を與へき。渠はいち早くこれを一手より他手に移し、隱しの中に入れ、又た帽を戴き先きに「リギ」の曲と云ひし面白き「チロオル」節を歌ひ初めたり。
此最終の曲は前に聞きつるよりも面白かりき。聽衆は愈々多きを加へたり。この人を醉はしむるばかりなる音を聞かんとて人々は四方より集ひ來たり。
渠は歌ひ畢りぬ。

渠は又たその樂器を揮り動かし、帽を脱ぎて前に差出し、一二歩進んで館に近づき、又た「紳士、淑女達、君等我を以て餘顧を得るものと思はゞ」云々と、彼言葉を繰返したり。これは渠の心にては甚だ滑稽の趣ある語なりと思へる者に似たり。而れども渠の聲と擧動とには何となく思ひ定めぬ所あり、又た穉き羞怯あり、此態度は渠の身の小きがために特に憫れむべき樣にぞ見えける。

彼豪奢なる聽衆は畫圖の如くに照され、その價昂き衣裝を耀かして、依然として「パルコン」の上、窻の中に立てり。或る紳士と淑女とは共に語るもの丶如し。その談資となれるは樓下に手を差伸ばして立てる謳者なりとおぼし。他の人々は物見だかき心にて此の小丈夫を見御すもの丶如し。最も近き「パルコン」の一つには一少女の淸き聲して喜ばしげに笑ふを聞きつ。

樓下の群衆中には嘲る聲、笑ふ聲愈々高うなりぬ。

謳者は三たびその謌を反復したり。而れどもこの度は其聲始より弱かりき。否、渠はその謌を終へずして止みぬ。又も帽を持ちし手を差伸べしが、直ちにまた之を引きつ。

されどこの度も彼が曲を聽かんとて聚ひ來し百人以上の美服きたる客の中に、一人の憫れなる一片の銅貨をも投げ御したるものなし。

群衆は愈々情なく笑ひ初めたり。

余は此小丈夫が愈々小くなるかとぞ見し。彼は樂器を把り、帽を被りて曰く。

「紳士、淑女達、我は君等に謝す、我は君等の安く眠り給はんことを祈る」。

群衆は餘りの面白さに哄笑し又た歡呼しき。美しき紳士、淑女等は斷えず行儀よく物語しつ丶次第々々に「パルコン」より引き去りぬ。

堤上にては人々又た逍遥し初めたり。謳歌を聽ける間は靜なりし街はまた閙しくなり、唯二三人の殘りて遠き所より謳者を望みて笑ふあるのみ。余は謳者が何やらん語を髯中に吐きしを聽きしが、渠は踵を回らし、殆ど初よりも小くありしが如く、疾歩して市の方へ行きぬ。
遠くよりこれを見たりし面白さうなる散步の客は、猶ほ笑ひつゝ少し隔たりて渠に隨ひ行けり。我心は全く亂れたり。余は此總てのことの何故なるを解せず、初より立ちし所に住まりて、心ともなく目を暗き處に注ぎ、この早足に馳去る小丈夫を見送るに、渠は愈々其足を早めて市に向ひぬ。余は又たこれに隨ひて笑ひつゝ行く旅客を見送りたり。
この時痛楚苦悶の情は我に迫り來れり。余はこの小丈夫のために、この群衆のために、又た我身のために深く恥ぢたり。恰も余が人に錢を乞ひしに人のこれを與へざりしが如く、又た人の余を嘲罵せしがごとくに。
余は苦しき胸を押へて館の石階の方に趣きぬ。我室に還らんとてなり。余は我感情の何物なるかを未だ具には知らず、唯だおもく苦しきものありて我心に滿ち我を壓すことをば明かに知れり。
華麗なる館の門前にて、余は謙遜りて側に寄る門者と英人の一家族とに逢へり。男は丈高く肥胖りて色赤きに、英國流の黑髯を蓄へ、黑帽を戴き、臂に「プレエ」を掛け、手に價高かるべき杖を持ちたり。これと相携へたる婦人は、生絹の價高き衣を着て、赫然として赤き紐付たる帽を戴き、上等の「レエス」にて自ら飾れり。
この男女の傍を行くは、美にして若き小娘子の、步兵形の羽を挿したる華奢なる瑞西帽を被ぶりたる下より、軟かなる、長き、明黄の縮髮出でゝ白き顏を縁取りたるなり。その前をはねつゝ行くは、

十計りの女兒にて、頬紅に膨れ「レエス」を附けたる薄き衣の下よりは白く肉づきたる膝見えたり。

「好夜色」と、余が行逢ひし時に、婦は無窮の幸福を感ずるが如く甘き聲にて云ひき。

「洵に然り」と男は不性々々に吠えたり。此男には生計あまりに容易くなり過ぎて、物いふだに面倒なりと見えたり。獨り彼男のみならず、否、彼等一同には人生の容易きことと便利なることは果して何如ぞや。其擧止と顔容とには、他人の生活と毫も相關せざることと分明に見ゆ。彼等は決して露程も、門者の道を讓りたるは己れ等の爲のみなると、其一拜は己れ等に對するのみなるとを疑はず、又た歸り來ん折には閑かなる臥房、潔き臥床を見るべく、この待遇は固より然ざると能はざるものにて、己れ等のこれを受くべき權利は少しにても犯すべからぬものなるを疑はず。余はこの一親族を以て覺えず彼の疲れ果て、或は飢に泣きつゝ、嘲笑する群衆に耻ぢて逃げ去りし謳者と對比したり。今や余は覺り得たり、何故に我心頭に非常に重きものありてこれを押へたるが如くなりしを。而して余は言ふべからざるまでに、この輩を憎む念を生じたり。

余は故らに二度、此英國男子の傍を過ぎ、二度彼を避けずして、眞個の快味を以て、彼に肘を喰はせたり。斯くて余は梯を下り、闇を摭いて市の方へ、小謳者の去りし市の方へ馳せ行きぬ。

余は逍遥する三八の外客に逢ひて、謳者の往方を問ひぬ。笑ひながら彼等は余に指示したり。嗚呼、渠は現にひとり彼處をこそ行け。群衆は總て散じぬ。而れども渠は猶ほ足疾く行けり。且つ渠は何事やらん口の内にてつぶやく者に似たり。

余の渠に追付きしや、勸むるに一處に往きて倶に一杯の酒を飮まんことを以てしたり。

渠は舊に依りて早足に行き、有らずもがなといふ樣なる目にて余を見たり。されど漸くにして我意

を解したる時、渠は立ち住まりぬ。

「嗚呼、君既に此好意あり、奴何ぞ敢て辭せん、」と渠は答へぬ。「彼處には一小珈琲店あり、彼處あらば平人にても行くことを得べし」と渠は語を添へて、余にまだ鎖さぬ一小舗を指し示したり。

この語、「彼處ならば平人にても行くことを得べし」といふ語は、覺えず我心頭に一念を呼び起したり、余が渠と倶に小珈琲店に入らずして瑞西館に入らばやといふ念を、彼壯麗なる客舍に、彼歌を聽きし人々の住める瑞西館に。

渠は猶ほ或る怯氣づきたる逆上を見せて、二たび三たび辭みて、瑞西館は己れがためには餘りに貴きに過ぐと云ひしが、余は猶ほ勸說して止まざりき。最後に渠は我言を容れ、樂器を揮り動かし、湖の岸傳ひに、余に隨ひて瑞西館に來ぬ。

無事漫步の客兩々三々、余が謳者に步み寄りしを見て、早く既に傍に聚ひつ。余が渠と語るを聞きて、二人の後に付き、瑞西館の前まで來れり。渠等は此チロル人が又一曲を謳ふかと思ひしなるべし。

廊を步める一僮を喚びて、余は一瓶の酒を命ぜしに、彼は余を笑みつゝ見て、答もせで馳去りぬ。

余は同じ請を僮長に向つていひ出でしに、眞面目になりて我言を聞き、彼羞を含みたる謳者を、頭頂より足尖まで見て、嚴しき聲にて門者に向ひ、余等を左方の室に導けと命じたり。

此廊の左の室は蓋し平人のために設けたり。室隅には罷癃の病ある一婢ありて器を滌へり。室の器具は被はざる木卓、木榻のみ。

余等の命を聞くべき僮僕は、短き、嘲けるが如き笑を呈して、余を見て、兩手を袴のかくしに突込

み、佝僂の婢と語れり。彼は此謳者の社交上の地位と、其職業との上に出づること數等なるが故に、此の如き客の命を聽くは、辱を受くとせんよりは、寧ろ自身の慰み半分なりとおもふといふ心を、余等に示めさんとするものに似たり。

「尋常の酒を命じ給ふや」と彼は問ひぬ。彼はこの時意味あり氣なる目にて余を見て、我同座の客を尻目に掛け、その持ちたる巾を一手より他手に移したり。

「三鞭を、上等のを」と余は成る丈威嚴ある、物昧ぶりたる樣にて誂へぬ。

されど三鞭といふ一聲も、我威貌も、この僮僕をば毫も動かすこと能はざりき。彼は笑ひて暫時余等二人を諦視し、ゆる〳〵と己れが金時計に目を注ぎ、散歩にてもしたらんやうに、徐々と歩みて室を出で去れり。

程なく彼は酒を携へ、猶ほ二從僕を伴ひて入り來れり。そが二人は婢の傍に座を占めて、面白げに氣を付け、友愛らしき微笑を帶びて余等を窺ふさまなり。其狀恰も老親が穉兒のおとなしく遊べるを見るが如し。唯だ彼廢疾ある女子は余等を嘲ける心もなく、少しく同意を表しつゝ、余が爲す所を見るものゝ如し。

この僮僕の目睛の火を受けたる所にて、謳者と語り、これを饗せんことは頗る面白からねど、余は尙ほ勉強して大度量を示し、この饗應を做し果てんと思ひき。

燈前に來りて、余は熟々渠を見ることを得たり。渠の身は小なれども、比例善く出來て肉づきたり。たゞその小きことは、侏儒ともいふべき程なり。髮は黒く荒らかに立ちて、目は大きく黒ゝ、何時も愁を帶び、睫毛は環がり生ひて、口は甚だおとなしき恰好にて小さし。

渠は髮を生やし、髯をば短く截らせ、尋常なる見すぼらしき衣を穿たり。渠は少しく不潔にて、衰へたる處見え、日にやけて、生涯を困苦の中に送るものと云ふこと分明に見えたり。其姿は藝に遊ぶものよりは、寧ろ人家に就いて雜貨を賣り、口を糊するもの丶如く見えたり。唯だその斷えず耀げる艶やかなる目と、閉ぢたる口とには、人に殊ある處と、人を動かす處とあり。見る所にては、歳は四十の上を五つ計も踰えたらんといふめれど、これを問へば三十八と答へぬ。

渠が快よく諾ひ、眞ならんと思はる丶口吻にて、余が問に答へたる身の上の概畧は、アアルガウに生れ、稚き時に父母を失ひ、親族もなく、家產もなければ、指物師となりしに、二十二年前手に骨蝕といふ病を受け、復たこの業を取ることを得ざる樣になりぬとなり。

渠は語を繼いでいはく。稚き頃より歌謳ふことを好みしかば、又たこれを試みしに、時としては外人の錢を與ふることもありき。これよりして渠は謳ふことを業とし、手琴を買ひて瑞西、伊太利の間を遍歷し、客舍の前にて歌を謳ふこと十八年なり。渠の行李はその樂器と一財囊とのみ。今囊中に貯へたるは今夕の晩餐と臥床との代に拂ふべき半「フラン」のみなりと。

渠は瑞西、チユウリヒ、ルチエルン、インテルラアケン、シヤムウニイ等の名所をば年毎に、最早十八度、廻りて、サント、ベルナルドを踰えて伊太利に赴き、サント、ゴットハルトを踰えてサヲヤンに歸るを常とす。

今は渠も少しく行惱めり。渠は風引きたる上に自ら節の病と名づけたる病に苦めばなり。この病は年毎に强うなりて、それに目と聲さへ愈々衰ふといへり。

されど渠は撓まず、今よりインテルラアケンに行き、小サント、ベルナルドを踰え、伊太利に入ら

んとせり。伊太利は渠の殊に愛づる國なり。兎にも角にも、渠は己れの運命を樂しみて、これに安んじたりと見ゆ。

余は渠に問ひぬ。何故に又た郷に歸らんとするか。家ありや、土地ありやと。この時渠の口には樂しげなる笑を示し、「然り、然り、砂糖は好し、小見には好き食なり」と云ひて、僮僕等に目ぐはせしたり。

余は此言を解せざりしが、僮僕等は笑ひ出したり。

渠は語を繼いで、「否、余はかゝるものを持たず、されど家に還るは樂し、故郷は何時も人を引き戻さんとするものなり」といふ。

渠は又た怜悧げなる、自ら足れりとするが如き笑を帶びて、「然り、然り、砂糖は好し」と繰返し、又た人の好げなる顏にて笑ひぬ。

僮僕は皆な面白げなる樣にて斷えず笑ひたり。唯だ彼佝僂の婢のみは親切らしき大きなる目にて眞面目に此小丈夫を見てありしが、遂にはその談話中に誤つて榻下に墮しゝ帽をさへ拾ひて與へき。

余は謳者、高組伎をなす人、手品師などの殊に好んで自ら藝人と稱することを知りしが故に、二たび三たび我客に向ひて、渠の實は一藝人なることを言ひ試みたり。而れども渠は敢てこの稱呼に當らず、渠はその歌をば糊口の資となすに過ぎずといへり。

余は渠に問ふに、その或は自ら謳ふべき歌を作るかを以てせしに、此の奇しき問は、殆ど渠をして一驚を喫せしめたり。渠は答へて云はく。「僕が謳ふ所は皆な當りたる『チロル』節なりと。」
『ツキ』の歌も然るか、想ふに此曲は太だ古きものにはあらさるべし」と余は言ひぬ。

「然り、此詩の成りしは五十年前なり。その頃パアゼルに一獨逸人住みき。彼は賢しき男なりしが、此曲を作りき。實に美しき曲なるかな。是れ彼が特に旅客のためにとて作れるなり」。

渠は斯く云ひて、リギの歌の意を余に敎へんとせり。渠はその力の及ばん限り、これを佛語に譯したり。

　リギへの道に舟あれば、沓なきをいかで憂へむ。エギスにて舟はてなば、ふとき杖買へ、をとめを抱け。さて酒飲まば多くな飲みそ。酒は巓けて飲むべきものぞ。

「嗚呼、好き歌曲なるかな」と渠は語を結びき。

僮僕等も此歌を面白しとや思ひけん、皆な近く寄り來れり。

「扨誰かこれに節付したる」と余は問ひしに、「誰もせず、君は知らずや此の如き曲を外人の前にて謳ふには新しき節を作るまでもなし」と答へぬ。

氷桶の來りて、余が一杯の三鞭を酌みて渠に遞與しゝときは、渠が心は次第に穩ならずなりて、榻上に座したるまゝに、僮僕の方を見つゝ、彼方此方へ向きかへたり。余は渠と杯を突合はして、共に藝人の安寧を祝せしに、渠はその酒を半ば飲みて、物思はしげになり何事をか考へ出さんとするものゝ如く眉を蹙めたり。

「此の如き酒は久しく飲まざりき。奴が君に言ふべきはこれのみ。伊太利にては『アスチ』酒の太だ好きあり、而れどもこの酒はそれよりも好し。嗚呼、伊太利、美しき國よ」。と渠は語を添へたり。

「然り、彼處にては人々樂を知り、藝人を愛す」と余は云ひぬ。是れ渠をして今日此館の前にて逢ひし不平の事を説き初めしめんとてなり。

「否」と渠は答へぬ。「其の樂にては、奴が彼處の人々を飽かしめんとは思ひも寄らず。伊太利人は皆な自ら音に通ず。是れ殆ど全世界に類なきとなり。されど余は彼處にて『チロオル』節を歌ふ。是れは彼國にて新し。」「奈何、彼處にては人の客なると甚しからざるか」と余は語を繼ぎぬ。是れ渠をして余が此の館の客に對して懷ける不平の心を分たしめんと思ひてなり。「彼處にては此處の如く、富人の多く栖める客舍にて一藝人の技に心を慰めたる百人の中にてこれが報をなすもの、一人もなきとはなかるべし。」

この問は余がこれに依りて喚び起さんとせし働きをば倒々になさず、渠は英人仲間を憎む念とてはなかりき。否、我言を解し違へたるが故に、渠はその力の足らで聽衆をして物を與へしめ得ざりしを譴められたりと思ひ、余に對してこれを言ひ釋かんとしたり。

「聽衆は必ずしも多く物を與ふるものに非ず」と渠は答へぬ。「時としては聲の潰れたることもあり、又は身の疲れたることもあり。譬へば今日余は九時間歩み、殆ど終日謠ひたり。是れ頗る難し。且つ貴族の方々は必ずしも常に『チロオル』節を聽くことを願ひ給はず。」

「然し毫厘も與へぬとは」、と余は反復して言ひたり。渠は余が心を解せず。

「是れ何ぞ言ふに足らん」と渠は云ひぬ。「此處にて大切なるは法に觸れぬ用心なり。此一事のみ。此處には共和國の律ありて、歌ふとは許されず、唯伊太利にては人々行かんと欲する處に行くとを得べし。誰か又た一言もいふべき。此處にては許さんと思へば許しもすれど、さらぬときは牢に入れらる。」

「いかでか斯る事あるべき。」

否々、君とても一たび咎められたるを聞かで歌ひ玉はゞ、囹圄の裡に鎖ち込められ玉はん。余も嘗て三日を獄中に送りたり」と渠は微笑みつゝ答へぬ。此一回想は渠が爲には面白くもあらんかと見ゆる樣に。

「嗚呼、駭くに堪へたる事」と余は云ひぬ。「何とて又」。「其共和の律の此の如きを奈何にかすべき」、と渠は少しく調子に乘りて語り繼ぎたり。「君は己れが如き窮鬼も亦た奈何にかして命を繫がんとする心を得揣り玉はず。奴も侏儒にてだにあらずば、然るべき業を操るべきを。されど我歌にて誰か傷はるゝものぞ。奴當にいづくにか出づべき。富める人こそ思ふが儘に世をば渡れ。己れ如き窮鬼の世渡るすべは如何。共和の律は何者ぞ。彼れにして斯る事さへ禁ぜんとならば、共和國はなくもがな。奴が言は理に合はぬか、君。奴等が願ふ所は共和國にあらず。願ふ所は。願ふ所は唯だ。願ふ所は」。渠は少しく語に窮したり。「奴等か願ふ所は自然の律なるのみ」。

余は渠に猶ほ一杯を酌みて與へき。

「君は何とて飮まざるか」と余は云ふ。

渠は杯を手に取りて余を拜したり。

「奴は君が心を忖り得たり」と瞬し、指を擧げて戲に人を嚇すが如き樣をなして云ふ。「君は奴を醉はしめて、我醉後の狀を見んと思ひ玉ふならん、否、君はこれを爲し得ざるべし」。

「何の爲にか余が君を醉はさんと思ふべき」、と余は云ふ。「余は唯だ君を懽ばせんと思ひしのみ」。

渠は余を誣ひて余を傷けたるをいたむものゝ如く、その樣を色に見せて立ち上り、肘にて余に觸れたり。

「否々、」と渠は歎願するが如き顏にて、彼濡れたる目にて余を見つゝ云へり。「奴は唯だ戲れに云ひたるのみ」。斯く云ひたる後渠は更に厭に文飾したる言葉にて、余が元來善人なりといふことを余に告げんとしたり。

「余は唯だこれを君に云ふのみ」、と渠は語を結びぬ。

余等二人は此の如く飲み且つ語れり。此間僮僕等は物知りたげにこれを窺ひて、私に余等を嘲るものに似たり。謳者は余と語るを樂しむが如くなれど、余は彼僮僕等の無禮を見て、心次第にこれを憤りたり。

僮僕の一人は立ち上りて、此小丈夫の傍らに歩み寄り、頭の上より渠を見下して微笑み初めたり。余は既に此館中の人に對して無限の不平を懷き、誰に向ひても未だこれを洩らすべき機會を得ざりしことなれば、今この僮僕等の所爲を見て、怒心頭より發りたり。此時門者は帽をも脫せずして入來り、余が傍らに坐を占め、肘を机に持たせつ。此無禮の擧動は、我が自ら愛する心、我が人に傲る心を傷くること甚だしかりければ、余が勘忍の力は此瞬間に斷え果てたり。

此一夕に我心中に鬱積し、我を抑壓したる不平の氣は、此時に當りて洩さゞることを得ずなりぬ。余の獨り過ぎしとき、渠は何故に背を曲げて余を避けたるか。余が謳者と坐せる時、渠は何故に粗暴なる氣色にて來りて我傍に坐するか。我五內は劇甚なる怒氣のために沸きかへるが如くなりき。この怒は時としては余が好んで迎ふる所なり、否、時としては故らに自ら喚起す所なり。余はその我に迫り來るを覺ゆる毎に、これを喚び起して、之を發し、以て我心を鎭めんとせり。且つ余は此怒の、縱令暫時の間にもせよ、余に活潑なる擧動を與へ、余が心身に迫つて、これをして敢往して善

を行はしむることを知れり。

余は躍り上りたり。

「汝は何をか笑ふ」、と余は僮僕に問ひ掛けたり。而して余は我面色の變じ、我居の覺えず引きしまりたるを知れり。

「何ぞ敢て笑ひ候はん」と僮僕は傍らを遠ざかりつゝいふ。

「然し汝は我客を嘲笑したり。又た汝は客の此に在るをも憚らで此に來り、この机に倚るは何の心ぞ。敢て猶ほ此に在ると勿れ」。と余は呼びたり。

門者は何か獨語し乍ら、立ち上りて戶の方へ徃きぬ。

「我客を嘲笑するは何ぞ。來りて余等二人の傍に坐するは何ぞ。我客は客あり。汝は奴僕に非ずや。午餐の卓にては、汝何ぞ余を嘲笑せざりし。汝何ぞ來つて我傍に坐せざりし。是れ我客の衣の敝れ垢つきて、渠がまた街頭に歌ふがためなるか。是れ其理由なるか。勿論我衣は渠の衣より美なり。彼は貧窶なり。而れども渠は汝に優ること千倍なり。渠は何人をも侵すことなく、汝は渠を侮辱すればなり」。

「豈渠を侮辱せんと欲せんや」、と恐る〳〵僮僕は答へぬ。「渠果して我儕と共に坐するとを愧づるか」。僮僕は我意を解せず、故に我獨逸語の罵責は其効を見はさゞりき。此時門者は僮僕を辨護せんとしたりしに、余は酒ち劇しく門者を罵りしかば、渠も亦た解せざる似して腕を振り動かしたり。廢人なりし婢は、余が怒の甚だしきを見て、事の起らんとするをや恐れけん、又たは余と意見を同じくやしたりけん、余に味方して余と門者との間に周旋し、門者をして默して我言の理あるに服せ

しめ、又た余をして自ら心を安んぜしめんとせり。

「貴客の言は理あり。何處までも理りあり」。と婢は反復していへり。謳者は憫れに懲き呆れたる顏色にて、何故に余が怒りしかを知らざるものに似たり。渠は余に請ふに、成るべく早く暇を得んことを以てせり。されど次第々々に余が辯舌は勢を加へたり。余は滿腔の不平を説出して、毫厘も遺すことなかりき。余は彼衆人の謳者の歌を聞き、これを嘲笑し、これに錢を與へざることをも言ひ出でゝ、婢の勸めをも聽かざらんとせり。余は信ず、若し僮僕と門者とにして、此の如くに柔和ならざりせば、余は快よく彼等を引裂きしならんことを。然らずば余は英產の一女兒を捕へて、その自ら禦ぐと能はざるをも顧みず、杖にて打懲らしゝなるべし。

「又た汝は余が此客を伴ひ歸りしとき、何故に彼室に導かずして、此室に導きしか。何故に」。と余は逃れんとする門者の臂を握りて詰問しつ。「何故に汝は此客の衣の舊きを見て、これを彼室に導かずして、この室に導きしか。客舍に於て價を償ふ以上は、人々同等の權利あるにあらずや。是れ豈共和國に於てのみ然りとせんや。全世界、何れの處か然らざらん。汝等が畜生共和國。それにても四民同權ありといふや。英國人なりせば、汝は敢てこれを此室に導かざりしならん。その英國人は我客の歌を聽いて、價をば償はざりき。然らば彼輩は我客の物を盜みたり。我客の聽に得べき錢を盜みたり。汝は善くも余等を此僕隷の室に導きけるよ」。

「彼室は塞がりたり」。と門者はいふ。

「是れ實に違へり」。と余は叫ぶ。「彼室は塞がりたるにあらず」。

「然らば君は我儕よりも委しく知れりと宣ふか」。
「余は汝が虚言を構へたるを知る」。
門者は余に背を向けたり。
「然らばこれを何とかせん」。と彼は獨語したり。
「なすこと太だ易し」と余は叫びたり。「汝は直ちに余等を導きて彼室に入らしめよ」。
廢人なる婢のなだめんとするをも、謳者の去らんと請ふをも聽かず、余は僮僕を呼びて、余等二人を案内せしめ、大食堂に赴かんとせり。僮僕長は余が劇しき聲を聞き、余が怒れる面色を見て、余と爭ふことを好まず、馬鹿にしたるが如き恭順の態を見せて、余が客と共に往かんと欲する所に往くを許したり。余は門者の面前にてその詐を發くことを得ざりき。彼は余が大食堂の戸に達せざる間に早くも影を隱したればなり。
堂は開きて燈火明し。一つの卓には男女の英人ありて晩餐を喫せり。案内者は余を他の机に導き行かんとせしが、余は故らに彼餘り清潔ならざる謳者を率ゐて、英人等の倚れる卓に就き、また飮み乾さぬ酒瓶を此處に移さんことを命じたり。
英人は我傍に坐したる謳者を見て、初めは驚けるさまなりしが、後には怒を帶びて睨みたり。彼等は少しく語を交へしが、女子はその皿を押し退け、絹の裳をさら／＼と鳴らし、共に室を出でさりぬ。
余は硝子戸の外にて、彼英男子が斷えず余等二人を指しつゝ、怒聲にて僮僕と語るを見たり。僮僕は頭を戸より出して余等を留見す。余は滿心歡喜して、人の來て余等をして此室を去らしめんとす

るを待ちたり。果して此事あらば、余はこの好機會に乘じて、我怒氣を彼の頭上に向つて吐出すことを得べければ。幸にして人の來つて我安を妨ぐる者なかりしが、その時の心にては、余は殘惜しきことに思ひぬ。

初めは頻りに杯を辭したる謳者も、今急ぎて殘酒を飲み盡して去らんとせり。唯だ渠は余に向つて深く懃慇の恩を謝したり。その泣けるが如き目は、愈々泣けるが如くなり、又た光を放ち、渠は不思議に文飾したる言葉にて、余に謝せんものと、心を苦しむる樣なり。而れどもこの語、天下の人が皆な余が如くに藝人を愛しなば、その生計は易かるべきにといへる語は、猶ほ能く我心を慰めたり。

余等は共に庭に出でぬ。彼處には僮僕と我敵たる門者とあり。見る所にては門者は僮僕に向つて余の罪を鳴すものに似たり。想ふに彼等は皆な余を以て狂人なりとせしなるべし。余は我小丈夫をして、此僕隷群衆の前にて歩を停めしめ、自ら敬を厚うして帽を脱し、渠の骨蝕病にて指の乾枯したる手を握りたり。

僮僕等は毫も余等を見ざる似したり。唯だ其中の一人が嘶くが如き聲にて笑ひ初めたるのみ。謳者の闇を衝いて去りし後、余は我室に上り、この許多の奇怪なる感動の後、この許多の卒然として余を襲ひし兇態に似たる奮激の後、一睡して心身を安んぜんと思ひぬ。而れども余は餘りに怒を激したるがために眠ること能はず、故に我心の安んずるまで、戸外を歩まんとて、又た樓を下りて街頭に出でたり。

余は猶ほ別に白狀せざる事を得ざる一念を挾さみたり。一念とは今一たび彼門者、諸僮僕、及び英

國人等と相逢うて、彼等にその心の能く忍べると、その行の甚だ邪なるとを思ひ知らせん願をいふ。而れども余に逢うて直ちにわが方に背きたる門者の外には、何人にも邂逅せず。余は只だ獨りにて湖畔を往きつ還りつしたり。

「嗚呼、これこそ詩趣の不思議なる過ならめ」、と余は漸くにして心を落付けつゝ考へぬ。「誰かはこれを愛せざらん。誰かはこれを求めざらん。人の生ける間に促し又た討むる所は、唯だ此物のみ。而れども人の嘗てその勢力を承認することなく、人の嘗て此世上第一の産を崇ぶことなく、又た人の嘗てこの天の賜を人間に介致するものに向つて能く謝意を表することなし」。

「汝若し意あらば、請ふらくはこれを挙げて瑞西館裏幾多の客に問へ。この地上にて何物か最美なると。余は彼等が皆、然らざるも彼等の中百の九十九は、冷笑の色を露はして、人間最美のものは金なりといふを知る」。

「此思は或は汝の意に愜はざるべし。汝の張り詰めたる想像と合はざるべし」。と人は汝に答へむ。「然れども唯だ金の人に幸を與ふる世の通態を奈何せむ。余は我心に逼りて有の儘に世を見せむことをえせず」。と人は語を添ふべし。「世の眞を見せむことを」。

嗚呼、憫むに耐へたる心。汝のかくまでに求むる福祉は取るに足らず。又汝自身、汝便なき生物。世間果して汝よりあはれなるものあるか。汝等は何故に郷を離れ、二親一族と分れ、業を止め、金を棄てゝ此瑞西の小都會ルチエルンには來れるか。汝等は何故に今宵欄に倚り、屛息して此小丐者の歌を聽きしか。且つ渠にして若し又た歌はんといはゞ、汝等は復た愿に來りてこれを默聽すべし。汝等が貯へたる巨萬の金は果して能く汝等を驅つて郷を出で、この小隅なるルチエルンに來らしめ

しか。彼金は果して能く汝等をして欄に倚らしめ、叉半時間より永く默然として靜立せしむるか。否、これを能くするものは一あるのみ。而してこの一つのものぞ、未來永劫、人間萬般の撥條鐵より強く動くべきものなる。この一つのものぞ詩趣を得んとする願ある。汝等は承認せざれども、振觸せざること能はざる、叉た未來永劫、縱令微塵ばかりなりとも、汝の身に人性の存じたらん限りは、振觸せざると能はざるべき詩趣を得んとの願なる。

詩と云へる語は、汝等の笑ふべく思ふ語なり。汝等はこれを或譏責の意味にゐたり。汝等は詩の趣を愛づるをもて、小兒、癡女子の態になすべきこととなりとてこれを嘲笑せんとす。汝等は只管に把握すべきものを求む、實なるものを求む。然れども彼小兒輩は天眞の眼を以て人生を視るものなり。彼等は人の須らく愛づべきものを知てこれを愛づ。渠等は福祉を求むべき個所を知る。憫むべし、人生は汝等を破り、亂し、汝等をして須らく愛すべきものを笑ひ、却て獨りその原來憎めるもの、即ちその禍殃たるべきものを愛せしむるに至れり。

汝等は此の如くに良心を失ひたり。故にかのチロオル人が與へたる淸淨なる歡喜に酬(むくい)すべき大責任をも解し得ぬなり。而るに汝等は因緣もなく、目的もなく、叉た曾て歡喜を與へられたる事もなき一「ロオド」に向ひては、これを禮拜すべき責任あるがごとく思ひ取りて、叉殆んどこれが爲めに己れが安を抛ち、適を棄つるに至る。嗚呼、何等の愚なる業なるぞ。何等の無分別なるぞ。

而れども今夕余を激したるはこの事にあらず。この歡喜を受けて、その由りて來たる所を知らぬと、この詩趣の受用の恩を忘るゝことと、是れ等は猶ほ余の解する所なり。否、これ等には余が生涯に幾度とあく逢ひしが故に、余はこれに慣れたるなり。余は叉た彼群衆の能く忍びて恩寡なきをも珍らしと

は思はず。彼民の良心といふことを辨護する論者のあらばあれ、衆人といふものは、固より或は善き人の集まれるなるべけれど、要するに生活の穢欲の引き寄せたる圏躰なり。故に又た人性中の弱點と殘忍とをのみ表に顯すことを得る圏躰なり。

然りと雖ども汝等は自由の民の兒孫なり、耶蘇敎徒なり、平人なり。何故に彼不幸なる同胞が汝等に與へたる歡喜に對して、唯だ嘲笑を帶びたる冷遇を報としたるか。嗚呼、否否。汝等の國には丐者を養ふべき貧院あり。丐者あることなし。否、丐者あるべき筈なし。故に人に慈悲の情ありて、他の貧窶を公認すべきにあらざるべし。

而れども渠は操作したり、勞働したり、汝等を歡ばせたり。渠はその上にて汝等の剩餘をその業の報として汝等の利用したるその業の報として申し受けんと請ひしにあらずや。さるを汝等は冷然として笑ひ、自ら華麗なる大厦に坐して渠を看下して、或る珍異の品ものとなしたるが如し。而して汝等、百に餘れる富貴の人の中にて、一善男、一善女の一錢を抛つて渠に與へたるものなかりき。耻を懷いて渠は汝等と別れたり。而して彼無分別なる群衆は笑ひつゝこれに跟隨し、汝等を嘲らずして渠を嘲りつ。嘲りしは渠の罪あるがためならずして、却りて汝等が冷淡に且つ殘忍なるがためなり。汝等が渠の與へたる快樂を自取したるが爲めなり。嗚呼、渠は實にこれがために嘲られたり。

「一千八百五十七年七月七日。有貧謳者遠來。立于瑞西國六戠輪城客舍瑞西館前。皷洋絃而歌。館之賓百有餘。皆富豪也。出而聽之。謳者三乞纏頭。而無人與一錢者。衆人反笑謳者」。

是れ寓言にあらず、事實なり。この事實はこの日に瑞西館に宿りしもの丶知る所にして、その頃の新聞紙を閲するときは、かしこに宿りし人々の名も具さに知らるべし。

嗚呼、是れ今の史家の、不滅の火の如き文字を以て、その編年記事に特書すべき事なり。この事や、これを彼新聞紙及び史冊に記せる紛々たるものに比すれば、廣大にして眞面目なる價値あり、又た深遠なる意味あると、殆ど日を同じうして語るべからず。彼支那人が英人の貨物を買ふことを辭みて、その擅に利を占むるを許さゞるが故に、英人が又た千人の支那民を殺害したりといふこと、彼亞弗利加の地の豐饒にして、佛蘭西の兵の始終なしたる戰の鋭鋒を養ふに便なるが故に、佛蘭西人は又た千人のカビイル人を殘戮したりといふこと、彼拿剝里駐劄の土耳格公使が、猶太敎徒たることを得ずといふこと、又た拿破崙帝がプロムビエエルにて徒歩し、又た己れが位に居りて全國を治むるは、全く民の惠に依ると印刷したる謄文を民に頒つといふこと、是等は皆な意味なき死文字なり。　唯だその內にて天下に知れ渡りたると否るとの別あるのみ。若し夫れ七月七日ルチエルンに於て出來たる一事蹟は、則ち甚だ新奇なるに似たり。而して此事蹟は人世の發達の分明なる一部と大關係あるものなり。是れ彼人間の行爲を取りて一事實として世に傳ふるものにあらず、これぞ眞の人間の進歩と開化との歷史に屬するものなる。

此の如き事實はこれを獨逸、佛蘭西、若くは伊太利の大村落に見ることもなからん。此の如き事實は唯だこの開化と自由主義と同權主義とをその極端まで追ひ來りたる處にあり。唯だこの開化國の開化人が漫遊の次に落ち合うたる處に在り。是れ抑も何故ぞ。この敎育素ありともいふべき博愛の人士は、實に社會公衆に對する慈惠の事業には熱衷することを得るに、一箇人に對しては眞の人情に遊ひて一善事を施すことだに能はず。是れ抑も何故ぞ。この人々のその第宅に坐し、又たその讌會に臨むや、遠き印度の境に住める支那人の地位を想ひ、耶蘇敎と歐洲の開化との亞弗利加人民の

間に普及せんことを望むことなるに、彼等は却りて彼未だ腐敗せざる一箇人が一箇人に對して必ず起すべき平夷なる自然の感動を起すこと能はず。是れ抑も何故ぞ。此の如き人情は果して皆な亡び去つて、その代りには倨傲、卑吝、自利の心のみ殘りたるか。彼第宅に居り、讌會に赴くものを動かす撥條鐵は、此卑猥の心のみなるか。彼名譽を重んずる習、教育の普及、理想の錬磨、社會と國家との組織、此許多の物、即ち所謂開化は、果して能く吾人の心内に深くも動ける感情を滅ぼし盡したるか。彼無數不幸の血を流し、無限の罪惡をなしたるは、果して同權主義の爲なるか。萬國の民は果して同權主義といふ裸文字の響をのみ聞きて心を慰むること、小兒の情と同じきか。法律に對する同權主義、斯く言へば何となく人生が悉く法の範圍內に在るが如し。殊に知らず、吾人の生活の千分の一程こそ、法の領分には屬すれ。その餘は總て社會の風俗と觀念との法の外なる區域に在るものを。

然るにこの社會にては、善き衣着たる僮僕の敝衣を纏ひたる謳者を侮辱することあり。門者は又た余を以て已れより貴きものとなし、謳者を以て已れより賤しきものとなす。余の謳者と坐を並べたるや、彼は自ら余等と地位を同じうするものとなし、遂にその粗野の態度を示すに至れり。余の之を憤るや、門者は始めて又た已れを以て余より賤しきものとなしたり。僮僕の謳者を侮辱するや、謳者は又た已れを以て僮僕の下に居るものとなしたり。且つ夫れ所謂自由の憲法は安にかある。若し此自由の憲法にして一平民を捕へ來つて、彼の何人をも敢て侵さず、何人をも敢て煩はすことなく、技を鬻いで飢を救はんとせし一平民を捕へ來つて牢獄に下すときは。嗚呼、人間は不幸にして不便なるものかな。彼は凡百の問題の終結の解釋を求めながら、一たびこの善と惡と

の、又た順と逆との、無際限に波立つ海上に放たるゝ時は、その出づる所を知らざるものなり。人間は既に幾千年の昔より、一面に善を置き、一面に惡を置かんとしたり。今よりして後、又た幾千年か立つらん。彼所謂公心は善と惡とを秤量し、差別せんとすべけれど、何れの時にか能くこの兩者は相分るべき。否、秤の左右は決して毫厘も動くべからず。その一側に善惡の同量を載せたることは猶ほその他側の如けん。嗚呼、せめて人間にして一事を惡なりと斷定することの非あるを知らば、せめて彼無窮の大問題の無窮の大問題あることを覺悟して、復た涙りにこれに應へんとせざらんには、せめて人の思考は必ず半ば正しく半ば非なるを知らんには。非なりとは、人性の偏頗なるがために、全眞を知り得ぬを謂ひ、正しとは人性の一邊はこれにて露るゝを謂ふ。人はこの永劫不静、無限變易の善惡の混沌に向つて、　して而してこれを別たんとしたり。彼はこの海面に勝手なる線を引き、海の自らこの線に從つて分れんことを望みたり。知るや否や、猶ほこの一種の區分の外に幾百萬のこれと殊なる區別を設くるを得べきことを。此の如き新區分の生ずるには猶ほ幾千載をか經ん、又たこの千載といへる刧も亦た幾百萬かあらん。

開化とは善きものあり。野蠻とは惡しきものなり。自由とは善きものなり。壓制とは惡しきものなり。この所謂知識は天然の人性、常に善に向ひて己れが福祉を求むる人性を滅すものなり。而して誰か能く余に自由の何物たるを告げん。誰か壓制、開化、野蠻の何物たるを告げん。而してこの相反對したるものゝ限界は何處にかある。何人の心中にか、善惡の權衡明に備はりて、人生の警然たる葛籐をば、公平に商量し得る。

誰が心か能く廣大にして、彼不動の過去に屬する事實のみをも漏れなく概括し商量することを得ん。

而して誰か純善の行爲、又たは純惡の行爲を見たることある。而して余は何に緣てか我立てる地位の正しくして、善を悉く見、また惡をも悉く見て敢て還すことなきを知らん。而して又た誰か誓しにても全く人生を離れし心にて無明着の上よりこれを見御すとを得ん。

余等は唯だ一人の最良の案內者を知る。是れ萬有を綜攬する神なり。この神は全體を見わたすと同時に、一人々々をも見透して、各々の心に須く願ふべき願を發せしめたるものなり。彼の木をして日に向つて長ぜしめ、花をして秋實を散らさしめ、又た人の心に人の人たる、他の生類と殊なる願を植うるも、皆この神の業にぞありける。

されどこの唯一の秋毫も迷はざる、福祉を降すべき聲を、喋がしくも打消すものは、開化の進み行く勢なり。嗚呼、孰れか人には近き、何れか野蠻とはいふべき。彼の謳者の弊衣を見て怒て卓を離れながらも、謳者の估りし業を償ふに、己れが財產の百萬分の一を以てせんことをも肯ぜず、今は飽くまで食ひて、燈火明き閑室に坐し、心安げに支那の事を談じ、支那人の殺害に逢ひしを道理に協へりと論ずる「ロオド」其人が、人に近きか、又たは彼の獄に投ぜられやせんとおもひつゝも、二十年來財囊中に僅かに一「フラン」の錢を持ちて、同世の人を傷くることもなく、山を踰え、谷を渡り、歌を謠ひて人の心を慰め、却りてその嘲罵に逢ひ、今や疲れ、飢ゑ、耻辱を懷いて木賃宿に入り、腐れたる藁の上に休める謳者が、人に近きか。

夜は漸く寂寥たるに、市ある方に當りて遠く彼小丈夫の絲聲と肉聲とを聞きつ。

「否」と覺えず余は云ふ。「謳者は哀むに足らず。彼偷安の「ロオド」豈又た憎むに足らんや。何人か此二人の胸臆に入りて、その內心の幸福を秤量せし。今や謳者は誰が家の古びたる閾の上に坐してか、

光り耀げる星を蒔散したる大空を見上げ、此美しく、心地好く、匂やかなる夜をうれしみ、絃を撥いて歌ふらむ。而して渠の心中には一點の悔なく、一點の憤なく、又一點の恥なからむ。

若夫れ之に反して、此高潤にして文飾の美を盡したる堂裏に坐する人々の心中には、今何事をか思へる。誰かその此小丈夫の如き純にして真なる人生の歡喜、渠の如き滿足、己れと世とに對しての滿足を懐くこと能はざるを知らん。嗚呼、無窮の慈悲なるかな、無窮の智恵なるかな。この許多の矛盾をして並び存ぜしむるものゝ心は。嗚呼、その矛盾と見ゆるは唯だ我が目の中にのみなるぞ、大膽に身の程をも得知らで天法、天意を究はめんとする蛆蟲の目の中にのみ、唯だ汝にのみなるぞ。彼大慈悲、大智恵なるものは滿心の愛を以て彼開豁なる不可測の高處より下瞰し、汝等個々が矛盾を相爲して、無窮の時に蠕動する廣大無邊の調和をぞ喜ぶなる。汝に大我慢の心ありて、天の通則を離れんとす、これを離れ得るものと思ふ。否々、汝も亦た、彼無慈悲なる群衆に向ひて不便なる小憤怒を懐きし汝も亦た、他の無窮時間、無際空間の大調和には協へるものぞ。

該撒

目の前なりし霧は全く消えて、我脚の下には極みなき野原みゆ。我頬を吹く風の温かさにても、既に此境のロシヤの外なることを知るべきに、野原のさま、わが故さとのものには似ざりけり。見仰せば、暗く又淋しく、一もとの草もこゝには榮えずとおもはるゝに、こゝかしこに湖の面の鏡に似たるあり。遠く望めば風なく又波なき海原あり。頭の上には廣く美くしき雲の絶間より大なる星輝げり。いづこよりも絶間なく物の聲の上りきて人の眠を催すに似たり。

「こゝはポンチニの澤なり。聞ゆるは蛙の聲、立ちのぼるは硫黄の氣なり」とわれを負ひて飛びゆくエリスさゝやきぬ。
「さてはポンチニなりとか。いかなれば我をかゝる哀しきところには伴ひたる。疾くこゝをさりて、羅馬に導け。」余はかくいひしとき、心の中の悲しさ、忍びがたきほどなりき。
「羅馬は遠くもあらず、いざ」。と我を促がしたてゝ、ラチウムの道に沿ひて飛行けば、澤をわたる老たる牛は、短く曲れる角を戴いたる怪しげなる頭を擡げて、恐なれど猛く見ゆる目をみひらき、暫くあたりを見廻して、濕ひたる鼻を高く空中に擧げ、聲あらゝかに息す。飛行く我等をや見たりけむ。
「今は羅馬にこそ來たれ、見よ」。かく勸められて見おろせば、地平線のあたりに黑き物あり。昔神の作りたる橋か。されど流の見えぬはいかに。いかあれば又處々の斷えにたる。こは橋にあらず、むかしの水道のなごりなり。こゝは羅馬のカムパニヤとて世に聞えたる名所なり。かしこに聳ゆるはアルバンの峯なり。今昇らむとする月に、水道の穹窿と山の頂とはひかりかゝやけり。
雲の通路を忽又上ぼりて、とある古蹟の前に來ぬ。墓か温泉か、さらずは宮居なるか。はひまつはりたる色黑き蔦かづらは、中に鬱したる氣を洩らさじとするにや。下の方に喉を開きたるは、半壞れたる堂なりけり。正しく積疊ねたる石垣よりも、包みし大理石の埃となりて飛去りし後は、古墓に似たる陰森の氣たちのぼりたり。
エリスは高く手を擧げて、「こゝなり、こゝなり。羅馬のむかしその名聞えし英雄をこゝにて呼び玉へ」。といひぬ。

「そは又何のために。」

「唯呼び玉はゞ見ゆるものあらん。」

余はしばしたゆたひしが聲高く「ヂウス、カエス、ユリウス、チエザル」と三たび叫びぬ。

この聲のこだまに響きて、まだ絶えぬほどに、あなや。これを寫出さむとするに力及ばず。始は鼓の音とおぼしきもの微に聞えて、極めて遠き處ならずば、極めて深き大地の底にて、數限なき人の俄に騒立ちたる如し。立ちあがり、馳せちがひ、さて呼びかはすやうなれど、此聲は千載の眠の夢醒めて、僅に胸より出でたる如し。とみれば、空中にうごめくものありて、古蹟の上は暗うなりぬ。この時、我面の前を影の如きものゝ過行くあり。頭の圓きは鎧にもやあらむ。尖りたるもの持ちたるは鎗にもやあらむ。この鎧の如く鎗の如きものは、月に映じて青き光を放ちたり。この陰兵は往きつ還りつ、やう／＼にその數加はりて、怪しき力ありて動かす如し。この力は大地をも動かすべう見ゆれど、數知れぬ陰兵の影はおぼろげにのみ見えて一としてあざやかなるはなかりき。こはいかに。むら立つ影は色めきて、あとへ／＼と引かむとす。千萬人の口より聞ゆるは

„Caesar, Caesar Venit!"

といふ聲。風に捲かるゝ木の葉の如く、いまゝで見えし陰兵はなごりなく消失せて、神おどろ／＼しく鳴りわたり、古蹟の後の方よりは、頭に桂の葉の冠を戴き、色あをざめたる人の瞼を垂れたるが出でたり。見れば帝王の相なりけり。

この時の我心、おもひ出すだにおそろしさに耐へず。此眼の開かむをり、此唇の開かむをり、わが弱き身のいかでかこときれざらむ。

「エリス、エリス疾く我を伴ひて還れ。このおそろしき羅馬を去れ、このおそろしき羅馬を去れ。」「君の心弱さよ。」とつぶやき〳〵エリスは我をたすけひきて虛空はるかに昇るほどに陰兵の高く呼ぶ聲又一たび遠く聞えて、脚の下暗うなりぬ。

文づかひ

それがしの宮の催し玉ひし星が岡茶寮の獨逸會に、洋行がへりの將校次を逐うて身の上話せられし時のことなりしが、こよひはれん身が物語聞くべき筈なり、殿下も待かねてれはすれば、と促されて、まだ大尉になりて程もあらじと見ゆる小林といふ少年士官、口に啣へし卷烟草取りて火鉢の中へ灰振落し、仔細らしく身搆して語出でぬ。

わがザックセン軍團につけられて、秋の演習にゆきしをり、ラアゲ井ッツ村の邊にて、術語に定まりたる敵といふ陣につけられしとあり。小高き丘の上に、まばらに兵を排りて、敵と定めれき、地平の波面、木立、田舍家などを巧に楯に取りて、四方より攻寄するさま、めづらしき壯觀なりければ、近郷の民こゝにかしこに群をなし、中に雜りたる少女等が黑天鵝絨の胸當晴れがましう、小皿伏せたるやうなる縁狹き笠に卯花挿したるもをかしと、携へし目がね忙はしくかなたこなたを見廻らす程に、向ひの岡なる一群きは立てゆかしう覺えぬ。

九月はじめの秋の空は、けふしもこゝに稀なるあゐ色になりて、空氣透徹りたれば、殘る隈なくあざやかに見ゆるこの群の眞中に、馬車一輛停めさせて、年若き貴婦人いくたりか乘りたれば、さま〴〵の衣の色相映じて、花一叢、にしき一團、目もあやに、立ちたる人の腰帶、坐りたる人の帽の

紐などを、風ひら〳〵と吹靡かせたり。その傍に馬立てたる白髪の翁は角扣紐どめにせし緑の獵人服に、うすき褐いろの帽を戴けるのみなれど、何となく由ありげに見ゆ。すこし引下がりて白き駒控へたる少女、わが目がねはしばしこれに留まりぬ。鋼鐵いろの馬のり衣裾長に着て、白き薄ぎぬ巻きたる黒帽子を被りし身の構けだかく、今かなたの森蔭より、むら〳〵と打出でたる獵兵のいさましさ見むとて、人々騒げどかへりみぬさま心憎し。

「殊なるかたに心留めたまふものかな」。といひて輕く吾肩を拍ちし長き八字髭の明色なる少年士官は、おなじ大隊の本部につけられたる中尉にて、男爵フオン、メエルハイムといふ人なり。「かしこなるは我が識れるデウベンの城のぬしビユロウ伯が一族なり。本部のこよひの宿はかの城と定まりたれは、君も人々に交りたまふたつきあらむ。」

と言畢る時獵兵やう〳〵わが左翼に迫るを見て、メエルハイムは馳去りぬ。この人と我が交りそめしは、まだ久しからぬ程なれど、善き性とおもはれぬ。

寄手丘の下まで進みて、けふの演習をはり、例の審判も果つるほどに、われはメエルハイムと倶に大隊長の後につきて、こよひの宿へいそぎゆくに、中高に造りし「シヨツセエ」道美しく切株殘れる麥畑の間をうねりて、をり〳〵水音の耳に入るは、木立のあなたを流るゝムルデ河に近づきしなるべし。大隊長は四十の上を三つ四つも踰えたらむとおもはるゝ人にて、髪はまだふかき褐いろを失はねど、その赤き面を見れば、はや額の波いちじるし。質朴なれば言葉すくなきに、二言三言めには、「われ一個人にとりては」とことわる癖あり。遽にメエルハイムのかたへ向きて、「君がいひなづけの妻の待ちてやあるらむ。」といひぬ。「許し玉へ、少佐の君。われにはまだ結髪の妻といふものな

し。」「さなりや。我言をあしう思ひとり玉ふな。イ、ダの君を、われ一個人にとりては斯くおもひぬ。」

かく二人の物語する間に、道はデウベン城の前にいでぬ。園をかこめる低き鐵柵をみぎひだりに結ひし眞砂路一線に長く、その果つるところに蔭りたる石門あり。入りて見れば、しろ木槿の花咲きみだれたる奥に、白堊塗りたる瓦葺の高どのあり。その南のかたに高き石の塔ありて埃及の尖塔にならひて造れりと覺ゆ。けふの泊のとを知りて出迎へし「リフレエ」着たる下部に引かれて、白石の階のぼりゆくとき、園の木立を洩るゝ夕日朱の如く赤く、階の兩側に蹲りたる人首獅身の「スフィンクス」を照したり。わがはじめて入る獨逸貴族の城のさまいかならむ。さきに遠く望みし馬上の美人はいかなる人にか。これらも皆解きあへぬ謎なるべし。四方の壁と穹窿とには、鬼神龍蛇さまぐ\の形を畫き、「トルウヘ」といふ長櫃めきたるものをところぐ\に据ゑ、柱には刻みたる獸の首、古代の楯、打物などを懸けつらねたる間、いくつか過ぎて、樓上に引かれぬ。

ビユロウ伯は常の服とおぼしき黑の上衣のいと寛きに着更へて、伯爵夫人とゝもにこゝに居り、かねて相識れる中なれば、大隊長と心よげに握手し、われをも引合はさせて、胸の底より出づるやうなる聲にてみづから名乘り、メエルハイムには「よくぞ來玉ひし」と輕く會釋しぬ。夫人は伯よりおいたりと見ゆばかりに起居重けれど、こゝろの優しさ目の色に出でたり。メエルハイムを傍へ呼びて、何やらむしばしさゝやぐほどに、伯は「けふの疲さぞあらむ。まかりて憩ひ玉へ」と人して部屋へ誘はせぬ。

われとメエルハイムとは一つ部屋にて東向なり。ムルデの河波は窓の直下のいしづゑを洗ひて、む

かひの岸の草むらは緑まだあせず。そのうしろなる柏の林にゆふ霧かゝれり。流めての方にて折れ、こなたの陸膝がしらの如く出でたるところに田舍家二三軒ありて、真黑なる粉ひき車の輪中空に聳え、ゆん手には水に枕みてつき出したる高殿の一間あり。この「バルコン」めきたるところの窻、打見るほどに開きて、少女のかしら三つ四つ、をり疊なりてこなたを覗きしが、白き馬に騎りたりし人はあらざりき。軍服ぬぎて盥卓の傍へ倚らむとせしメエルハイムは「かしこは若き婦人がたの居間なり、無禮なれどその窻の戸疾くさしてよ」、とわれに請ひぬ。

日暮れて食堂に招かれ、メエルハイムと倶にゆくをり、「この家に若き姫達の多きとよ」、と占問ひしに、「もと六人ありしが、一人は吾友なるファブリイス伯に嫁ぎて、のこれるは五人なり」。「ファブリイスとは國務大臣の家ならずや。」「さなり、大臣の夫人はこゝのあるじの姉にて、吾友といふは大臣のよつぎの子なり。」

食卓に就きてみれば、五人の姫達みなおもひ〳〵の粧したる、その美しさいづれはあらぬに、上の一人の上衣も裳も黑きを着たるさま、めづらしと見れば、これなんさきに白き馬に騎りたりし人なりける。外の姫たちは日本人めづらしく、伯爵夫人のわが軍服褒めたまふ言葉の尾につきて、「黑き地に黑き紐つけたれば、ブラウンシユワイヒの士官に似たり」、と一人いへば、桃色の顔したる末の姫、「さにてもなし」、とまだいわけなくもいやしむいろえ包までいふに、皆をかしさに堪へねば、あかめし顔を汁盛りし皿の上に低れたれど、黑き衣の姫は睫だに動さゞりき。暫しありて稚き姫、さきの罪贖はむとやれもひけむ、「されどかの君の軍服は上も下もくろければ、イ、ダや好みたまはむ、」といふを聞きて、黑き衣の姫振向きて睨みぬ。この目は常にをち方にのみ迷ふやうなれど、一たび

人の面に向ひては、言葉にも増して心をあらはせり。いま睨みしさまは笑を帶びて呵りきと覺ゆ。われにこの末の姫の言葉にて知りぬ、さきに大隊長がメエルハイムのいひなづけの妻ならむといひしイヽダの君とは、この人のことなるぞ。かく心づきてみれば、メエルハイムが言葉も振舞も、この君をうやまひ愛づと見えぬはなし。さては此中はビユロウ伯夫婦もこゝろに許したまふなるべし。イヽダといふ姫は丈高く瘦肉にて、五人の若き貴婦人のうち、此君のみ髮黑し。かの善くものいふ目を餘所にしては、ほかの姫たちに立ちこえて美しとおもふところもなく、眉の間にはいつも皺少しあり。面のいろの蒼う見ゆるは、黑き衣のためにや。

食終りてつぎの間にいづれば、こゝはちひさき座敷めきたるところにて、軟き椅子「ソファ」などの脚きはめて短きをおほく据ゑたり。こゝにて珈琲の饗應あり。給仕のをとこ小盞に燒酎のたぐひいくつか注いだるを持てく。あるじの外には誰も取らず、たゞ大隊長のみは、「われ一個人にとりては『シャルトリヨオス』をこそ」、とて一息に飮みぬ。此時わが立ちし背のほの暗きかたにて、「一個人、一個人」とおやしき聲して呼ぶものあるに、おどろきて顧みれば、この間の隅にはおほいなる鐵がねの籠ありて、そが中なる鸚鵡、かねて聞きしとある大隊長のこと葉をまねびしなりけり。姫達、「あな生憎の鳥や」とつぶやけば、大隊長もみづからこわ高に笑ひぬ。

主人は大隊長と卷烟草喫みて、銃獵の話せばやと、小部屋のかたへゆく程に、われはさきよりこなたを打守りて、めづらしき日本人にものいひたげなる末の姫に向ひて、「このさかしき鳥はおん身のにや」、とゑみつゝ問へば。「否、誰のとも定らねど、われも愛でたきものにこそ思ひ侍れ。さいつ頃までは、鳩あまた飼ひしが、あまりに馴れて、身に縈はるものをば、イヽダいたく嫌へば、皆人に

取らせつ。」この鶺鴒のみは。いかにしてかあの姉君を憎めるがこぼれ幸にて、いまも飼はれ侍り。
さならずや」」と鶺鴒のかたへ首さしいだしていふに、「姉君憎むてふ鳥は、まがりたる嘴をひらきて、
「さならずや、さならずや」と繰返しぬ。

この隙にメエルハイムはイヽダひめの傍に居寄りて、なに事をかこひ求むれど、溢りてうけひかざりしに、伯爵夫人も言葉を添へたまふと見しが、姫つと立ちて「ピヤノ」にむかひぬ。下部いそがはしく燭をみぎひだりに立つれば、メエルハイムは「いづれの譜をかまゐらすべき」と樂器のかたはらなる小卓にあゆみ寄らむとせしに、イヽダ姫「やうなし」と辭ひて、おもむろに下す指尖木端(タステン)に觸れて起すや金石の響。しらべ繁くなりまさるにつれて、あさ霞の如きいろ、姫が臉際に顯れ來つ。ゆるらかに幾尺の水晶の念珠を引くときは、ムルデの河もしばし流をとゞむべく、忽ち迫りて刀槍齊く鳴るときは、むかし行旅を脅しゝこの城の遠祖も百年の夢を破られやせむ。あはれ、この少女のこゝろは恆に狹き胸の内に閉ぢられて、こと葉となりてあらはるゝ便なければ、その纎々たる指頭よりほとばしり出づるにやあらむ。唯覺ゆ、絲聲の波はこのデウベン城をたゞよはせて、人もわれも浮きつ沈みつ流れゆくを。曲正に闌になりて、この樂器のうちに潛みしさまゞゝの絃の鬼、ひとりゞゝに窮なき怨を訴へをはりて、いまや諸聲たてゝ泣響(なきとよ)むやうなるとき、訝かしや、城外に笛の音起りて、たどゞゝしうも姫が「ピヤノ」にあはせむとす。

彈じほれたるイヽダ姫は、暫く心附かでありしが、かの笛の音ふと耳に入りぬと覺しく遽にしらべを亂して、樂器の筐も碎くるやうなる音をさせ、座を起ちたるおもては、常より蒼かりき。姫たち顔見合せて、「また缺脣(いぐち)のをこなる業しけるよ」、とさゝやくほどに、外なる笛の音絶えぬ。

主人の伯は小部屋より出でゝ「物くるほしきイヽダが當座の曲は、いつものとにて珍らしからねど、君はさこそ驚きたまひけめ」、とわれに會釋しぬ。

絶えしものゝ音わが耳にはなほ聞えて、うつゝごゝろならず部屋へ還りしが、こよひ見聞しとに心奪はれていもねられず。床をならべしメエルハイムを見れば、これもまだ醒めたり。問はまほしきとはさはなれど、流石に憚るところなきにあらねば、「さきの怪しき笛の音は誰が出しゝか知りてやおはする」、と僅にいふに、男爵こなたに向きて、「それにつきては一條のもの語あり、われもこよひは何ゆゑか寢られねば、起きてかたり聞かせむ」、と諾ひぬ。

われ等はまだ煖まらぬ臥床を降りて、まどの下なる小机にゐむかひ、烟草燻らすほどに、さきの笛の音、また窓の外におこりて、乍ち斷えたちまち續き、ひな鶯のこゝろみに鳴く如し。メエルハイムは謦咳して語りいでぬ。

「十年ばかり前のとなるべし、こゝより遠からぬブリヨオゼンといふ村にあはれなる孤ありけり。六つ七つのとき流行の時疫にふた親みなゝくなりしに、鈌唇にていと醜かりければ、かへりみるものなくほと／＼饑に迫りしが、ある日麪包の乾きしやあると、この城へもとめに來ぬ。その頃イヽダの君はとをばかりなりしが、あはれがりて物とらせつ。玩の笛ありしを與へて、『これ吹いて見よ』、といへど、鈌唇なればえ啣まず。イヽダの君、『あの見ぐるしき口なほして得させよ』、とむつかりて止まず。母なる夫人聞きて、幼きものゝ心やさしうかくいふなればとて醫師して縫はせ玉ひぬ」。

「その時よりかの童は城にとゞまりて、羊飼となりしが、賜はりしもてあそびの笛を離さず、後にはみづから木を削りて笛を作り、ひたすら吹きならふほどに、たれ敎ふるものなけれど、自然にかゝ

る音色を出すやうになりぬ」。

「一昨年の夏わが休暇たまはりてこゝに來たりし頃、城の一族とほ乘せむとて出でしが、イ、ダの君が白き駒すぐれて疾く、われのみ繼きゆくをり、狹き道のまがり角にて、かれ草うづ高く積みし荷車に逢ひぬ。馬はおびえて一躍し、姫は辛うじて鞍にこらへたり。わがすくひにゆかむとするを待たで、傍なる高草の裡にあと叫ぶ聲すと聞く間に、羊飼の童飛ぶごとくに馳寄り、姫が馬の轡をば緊と握りておし鎭めぬ。この童が牧場のいとまだにあれば、見えがくれにわが跡慕ふを、姫これより知りて、人してものかづけなどはし玉ひしが、いかなる故にか、目通を許されず。童も姫がたま〳〵逢ひても、こと葉かけたまはぬにて、おのれを嫌ひ玉ふと知り、はてはみづから避くるやうになりしが、いまも遠きわたりより守ることを忘れず、好みて姫が住める部屋の窗の下に小舟繫ぎて、夜も枯草の裡に眠れり」。

聞畢りて眠に就くころは、ひがし窗の硝子はやほの暗うなりて、笛の音も斷えたりしが、この夜イゝダ姫れも影に見えぬ。その騎りたる馬のみる〳〵黒くなるを、怪しとおもひて善く視れば、人の面にて缺唇なり。されど夢ごゝろには、姫がこれに騎りたるを、よのつねの事のやうに覺えて、しばしまた眺めたるに、姫とおもひしは「スフィンクス」の首にて、瞳なき目なかば開きたり。馬と見しは前足おとなしく並べたる獅子なり。さてこの「スフィンクス」の頭の上には、鸚鵡止まりて、わが面を見て笑ふさまいと憎し。

つとめて起き、窗おしあくれば、朝日の光對岸の林を染め、微風はムルデの河づらに細紋をゑがき、水に近き草原には、ひと群の羊あり。萌黄色の「キッテル」といふ衣短く、黒き臑をあらはしたる童、

身の丈きはめて低きが、おどろなす赤き髮ふり亂して、手に持ちし鞭面白げに鳴らしぬ。
この日は朝の珈琲を部屋にて飮み、晝頃大隊長と倶にグリンマといふところの銃獵仲間の會堂にゆきて演習みに來たまひたる國王の宴にあづかるべき筈なれば、正服着て待つほどに、あるじの伯は馬車を借して階の上まで見送りぬ。われは外國士官といふをもて、將官、佐官をのみつどふるけふの會に招かれしが、メエルハイムは城に殘りき。田舍なれど會堂おもひの外に美しく、食卓の器は王宮よりはこび來ぬとて、純銀の皿、マイセン燒の陶ものなどあり。この國のやき物は東洋のを粉本にせしといへど、染いだしたる草花などの色は、我邦などのものに似もやらず。されどドレスデンの宮には、陶もの丶間といふありて、支那日本の花瓶の類おほかた備れりとぞいふなる。國王陛下にはいま始めて謁見す。すがた貌やさしき白髮の翁にて、ダンテの神曲譯したまひきといふヨハン王のおん裔なればにや、應接いと巧にて「わがザツクセンに日本の公使置かれむをりは、いまの好にて、おん身の來るを待たむ」、など懇に聞えさせ玉ふ。わが邦にては舊きよしみある人をとて、御使撰はる丶やうなる例なく、か丶る任に當るには、別に履歴なうては協はぬことを、知ろしめさぬなるべし。こ丶につどひし將校百三十餘人の中にて、騎兵の服着たる老將官の貌きはめて魁偉なるは、國務大臣フアブリイス伯なりき。
夕暮に城にかへれば、少女等の笑ひさゞめく聲、石門の外まで聞ゆ。馬車停むるところへ、はや馴染みし末の姫走りきて、「姉君たち『クロケツト』の遊したまへば、おん身も夥になりたまはずや」、とわれに勸めぬ。大隊長は「姫君の機嫌損じたまふな。われ一個人にとりては、衣脱ぎかへて憩ふべし」、といふをあとに聞きなして隨行くに、尖塔の下の園にて姫たちいま遊の最中なり。芝生のとこ

ろ〲に黒がねの弓伏せて植ゑおき、靴の尖もて押へし五色の球を、小槌揮つて横ざまに打ち、かの弓の下をくゞらするに、巧なるは百に一つをも失はねど、拙きはあやまちて足杯撃ちぬとてあわてふためく。われも正劍解いてこれに雜り、打てども打てども、球あらぬ方へのみ飛ぶぞ本意なき。姫たち聲を併して笑ふところへ、イヽダ姫メエルハイムが肘に指尖掛けてかへりしが、うち解けたりともおもふさまも見えず。

メエルハイムはわれに向ひて「いかに、けふの宴おもしろかりしや」、と問ひかけて答を待たず、「われをも組入れたまへ」、と群のかたへ歩みよりぬ。姫達は顔見あはして打笑ひ、「あそびには早倦みたり。姉ぎみと共にいづくへか往きたまひし」、と問へば、「見晴らしよき岩角わたりまでゆきしが、この尖塔には若かず。小林ぬしは明日わが隊とゝもにムッチエンのかたへ立ちたまふべければ、君たちの中にて一人塔の頂へ案内し、粉ひき車のあなたに、滊車の烟見ゆるところをも見せ玉はずや」、といひぬ。

口疾きすゑの姫もまだ何とも答へぬ間に、「われこそ」といひしは、おもひも掛けぬイヽダ姫なり。物おほくいはぬ人の習とて、遽に出しゝこと葉と共に、顔さと赤めしが、はや先に立ちて誘ふに、われは訝りながら隨ひゆきぬ。あとにては姫達メエルハイムがめぐりに集まりて、「夕餉までにおもしろき話一つ聞かせ玉へ」、と迫りたりき。

この塔は園に向きたるかたに、窪みたる階をつくりてその頂を平にしたれば、階段をのぼりおりする人も、頂に立ちたる人も下より明に見ゆべければ、イヽダ姫が事もなくみづから案内せむといひしも、深く怪むに足らず。姫はほと〱走るやうに塔の上口にゆきて、こなたを顧みたれば、われ

も急ぎて追付き、段の石をば先に立ちて踏みはじめぬ。ひと足遲れてのぼり來る姫の息促りて苦しげなれば、あまたゝび休みて、漸う上にいたりて見るに、こゝはおもひの外に廣く、めぐりに低き鐵欄干をつくり、中央に大なる切石一つ据ゑたり。

今やわれ下界を離れたるこの塔の頂にて、きのふラアゲ井ッツの丘の上より遥に初對面せしときより、怪しくもこゝろを引かれて、いやしき物好にもあらず、いろなる心にもあらねど、夢に見、現におもふ少女と差向ひになりぬ。こゝより望むべきザックセン平野のけしきはいかに美しくとも、茂れる林もあるべく、深き淵もあるべしとおもはるゝこの少女が心には、いかでか若かむ。

險しく高き石級をのぼり來て、臉にさしたる紅の色まだ褪めぬに、まばゆきばかりなる夕日の光に照されて、苦しき胸を鎭めむためにや、この頂の眞中なる切石に腰うち掛け、かの物いふ目の瞳をきとわが面に注ぎしときは、常は見ばえせざりし姫なれど、さきに珍らしき空想の曲かなでし時にもまして美しきに、いかなればか、某の刻みし墓上の石像に似たりとおもはれぬ。

姫はこと葉忙しく。「われ君が心を知りての願あり。かくいはゞきのふはじめて相見て、こと葉もまだかはさぬにいかでと怪み玉はむ。されどわれはたやすく惑ふものにあらず。君演習濟みてドレスデンにゆき玉はゞ、王宮にも招かれ國務大臣の館にも迎へられ玉ふべし」。といひかけ、衣の間より封じたる文を取出でゝわれに渡し、「これを人知れず大臣の夫人に屆け玉へ、人知れず」。と賴みぬ。

大臣の夫人はこの君の伯母御にあたりて、姉君さへかの家にゆきておはすといふに、始て逢ひしと國人の助を借らでものとなるべく、またこの城の人に知らせじとならば、ひそかに郵便に附しても善からむに、かく氣をかねて希有なる振舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらず

やとおもはれぬ。されどこはたゞしばしの事なりき。姫の目は能くものいふのみにあらず、人のいはぬをも能く聞きたりけむ、分疏の樣に語を繼ぎて。「ファブリイス伯爵夫人のわが伯母なるとは、聞きてやおはさむ。わが姉もかしこにあれど、それにも知られぬを願ひて、君が御助を借らむとこそおもひ侍れ。この人への心づかひのみならば、郵便もあめれど、それすら獨出づると稀なる身には、協ひがたきをおもひやり玉へ」。といふに、げに故あるとならむとおもひて諾ひぬ。入日は城門近き木立より虹の如く洩るゝに、河霧のたち添ひて、おぼろげになる頃塔を下れば、姫たちメエルハイムが話きゝはてゝわれ等を待受け、うち連れて新にともし火をかゝやかしたる食堂に入りぬ。こよひはイヽダ姫きのふに變りて、樂しげにもてなせば、メエルハイムが面にも喜のいろ見えにき。

あくる朝ムッチエンのかたをこゝろざしてこゝを立ちぬ。

秋の演習はこれより五日ばかりにて終り、わが隊はドレスデンにかへりしかば、われはゼエ、ストラアセなる館をたづねて、さきにフォン、ビュロゥ伯が娘イヽダ姫に誓ひしことを果さむとせしが、固よりところの習にては、冬になりて交際の時節來ぬ內、かゝる貴人に逢はむとたやすからず、隊附の士官などの常の訪問といふは、玄關の傍なる一間に延かれて、名簿に筆染むるとなればおもふのみにて止みぬ。

その年も隊務いそがはしき中に暮れて、エルベ河は上流の雪消にはちす葉の如き氷塊、みどりの波にたゞよふとき、王宮の新年はな〴〵しく、足元あやふき蠟磨きの寄木を蹴み、國王のおん前近う進みて、正服うるはしき立姿を拜し、それよりふつか三日過ぎて、國務大臣フォン、ファブリイス

伯の夜會に招かれ、墺太利、バワリヤ、北亞米利加などの公使の挨拶畢りて、人々こほり菓子に匙を下す隙を覗ひ、伯爵夫人の傍に歩寄り、事のもと手短に陳べて、首尾好くイヽダ姫が文をわたしぬ。

一月中旬に入りて昇進任命などにあひし士官と共に、奥のおん目見えをゆるされ、正服着て宮に參り、人々と輪なりに一間に立ちて臨御を待つほどに、ゆがみよろぼひたる式部官に案内せられて妃出でたまひ、式部官に名をいはせて、ひとり〳〵こと葉を掛け、手袋はづしたる右の手の甲に接吻せさせ玉ふ。妃は髮黑く丈低く、褐いろの御衣あまり見映せぬかはりには聲音いとやさしく、「おん身は佛蘭西の役に功ありしそれがしが族なりや」、など懇にものし玉へば、いづれも嬉しとおもふなるべし。したがひ來し式の女官は奥の入口の閾の上まで出で、右手に摺みたる扇を持ちたる儘に直立したる、その姿いと〳〵氣高く、鴨居柱を欄にしたる一面の油畫に似たりけり。われは心ともなくその面を見しに、この女官はイヽダ姫なりき。こゝにはそも〳〵奈何して。

王都の中央にてエルベ河を横ぎる鐵橋の上より望めば、シユロス、ガツセに跨りたる王宮の窗、こよひは殊更にひかりかゞやきたり。われも數には漏れで、けふの舞踏會にまねかれたれば、アウグスツスの廣こうぢに餘りて列をなしたる馬車の間をくゞり、いま玄關に横づけにせし一輛より出でたる貴婦人、毛革の肩掛を隨身にわたして車箱の裡へかくさせ、美しくゆひ上げたるこがね色の髮と、まばゆきまで白き領とを露して、車の扉開きし劍佩びたる殿守をかへりみもせで入りし跡にて、その乘りたりし車はまだ動かず、次に待ちたる車もまだ寄せぬ間をはかり、槍取りて左右にならびたる熊毛帽の近衞卒の前を過ぎ、赤き氈を一筋に敷きたる大理石の階をのぼりぬ。階の兩側のとこ

ろ〴〵には、黄羅紗にみどりと白との縁取したる「リフレエ」を着て、濃紫の袴を穿いたる男、項を屈めて瞬もせず立ちたり。むかしはこゝに立つ人おの〳〵手燭持つ習なりしが、いま廊下、階段に瓦斯燈用ゐるとゝなりてそれは止みぬ。階の上なる廣間よりは、古風を存ぜし吊燭臺の黄蠟の火遠く光の波を漲らせ、數知れぬ勳章、肩じるし、女服の飾などを射て、祖先よゝの油畫の肖像の間に挾まれたる大鏡に照反へされたる、いへば尋常あり。

式部官が突く金總ついたる杖、「パルケット」の板に觸れてとう〳〵と鳴りひゞけば、天鵝絨ばりの扉一時に音もなくさとあきて、廣間のまなかに一條の道おのづから開け、こよひ六百人と聞えし客、みなくの字なりに身を曲げ、背の中程までも截りあけてみせたる貴婦人の頸、金絲の縫摸樣ある軍人の襟、また明色の高髻などの間を王族の一行過りたまふ。眞先にはむかしながらの卷毛の大假髮をかぶりたる舍人二人、ひきつゞいて王妃兩陛下、ザックセン、マイニンゲンのよつぎの君夫婦、ワイマル、ショオンベルヒの兩公子、これにおもなる女官數人隨へり。ザックセン王宮の女官はみにくしといふ世の噂むなしからず、いづれも顏立よからぬに、人の世の春さへはや過ぎたるが多く、ながにはおい皺みて肋一つ〳〵に數ふべき胸を、式なればえも隱さで出したるなどを、額越しにうち見るほどに、心待せしその人は來ずして、一行はや果てなむとす。そのときまだ年若き宮女一人、殿めきてゆたかに歩みくるを、それかあらぬかと打仰げば、これなんわがイ、ダ姬なりける。

王族廣間の上のはてに往着きたまひて、國々の公使、またはその夫人などこれを圍むとき、かねて高廊の上に控へたる狙擊聯隊の樂人がひと聲鳴らす皷とゝもに「ポロチエス」といふ舞はじまりぬ。こはたゞおの〳〵右手におひての婦人の指をつまみて、この間をひと周するなり。列のかしらは軍

装したる國王、紅衣のマイニンゲン夫人を延き、つゞいて黄絹の裾引衣を召したる妃にならびしはマイニンゲンの公子なりき。僅に五十對ばかりの列めぐりをはるとき、妃は冠のしるしつきたる椅子に倚りて、公使の夫人達を側に居らせたまへば、國王向ひの座敷なる骨牌卓のかたへうつり玉ひぬ。

この時まことの舞踏はじまりて、群客たちこめたる中央の狭きところを、いと巧にめぐりありくを見れば、おほくは少年士官の宮女達をあひ手にしたるなり。わがメエルハイムの見えぬはいかにとおもひしが、げに近衛ならぬ士官はおほむね招かれぬものをと悟りぬ。さてイヽダ姫の舞ふさまいかにと、芝居にて贔負の俳優みるこゝちしてうち護りたるに、胸にさうびの自然花を梢のまゝに着けたるほかに、飾といふべきもの一つもあらぬ水色ぎぬの裳裾、狭き間をくゞりながら撓まぬ輪を畫きて、金剛石の露翻るゝあだし貴婦人の服のおもげなるを欺きぬ。

時遷るにつれて黄蠟の火は次第に炭の氣におかされて暗うなり、燭涙ながくしたゝりて、床の上には斷れたる紗、落ちたるはな片あり。前坐敷の間食卓(ビユツフエエ)にかよふ足やうやう繁くなりたるをりしも、わが前をとほり過ぐるやうにして、小首かたぶけたる顔こなたへふり向け、なかば開きしまひ扇に頤のわたりを持たせて、「われをば早や見忘れやし玉ひつらむ」、といふはイヽダ姫なり。「いかで」といらへつゝ、二足三足跟きてゆけば、「かしこなる陶物の間見たまひしや。東洋産の花瓶に知らぬ草木鳥獸など染めつけたるを、われに釋きあかさむ人おん身の外になし、いざ」、といひて伴ひゆきぬ。

こゝは四方の壁に造付けたる白石の棚に、代々の君が美術に志ありてあつめたまひたる國々のおほ

花瓶、かざふる指いとなきまで並べたるが、乳の如く白き、琉璃の如く碧き、さては五色まばゆき蜀錦のいろなるなど、蔭になりたる壁より浮きいでて美はし。されどこの宮居に慣れたるまらうど達は、こよひこれに心留むべくもあらねば、前坐敷にゆきかふ人のをり〳〵見ゆるのみにて、足をとゞむるものほと〳〵おかりき。

緋の淡き地におなじいろの濃きから草織出したる長椅子に、姫は水いろぎぬの裳のけだかきおほ襞の、舞の後ながらつゆ頽れぬを、身をひねりて横ざまに折りて腰掛け、斜に中の棚の花瓶を扇の尖もてゆびざしてわれに語りはじめぬ。

「はや去年のむかしとなりぬ。ゆくりなく君を文づかひにして、ゐや申すたつきを得ざりければ、わが身の事いかにおもひとり玉ひけむ。されど我を煩惱の闇路よりすくひいで玉ひし君、心の中には片時も忘れ侍らず」。

「近比日本の風俗書きしふみ一つ二つ買はせて讀みしに、おん國にては親の結ぶ縁ありて、まことの愛知らぬ夫婦多しと、こなたの旅人のいやしむやうに記したるありしが、こはまだよくも考へぬ言にて、かゝることはこの歐羅巴にもなからずやは。いひなづけするまでの交際久しく、かたみに心の底まで知りあふ甲斐は否とも諾ともいはるゝ中にこそあらめ、貴族仲間にては早くより目上の人にきめられたる夫婦、こゝろ合はでも辭まむよしなきに、日々にあひ見て忌むこゝろ飽くまでつのりし時、これに添はする習、さりとてはことわりなの世や」。

「メエルハイムはおん身が友なり。惡しといはゞ辨護もやしたまはむ。否、われとてもその直なるこゝろを知り、貌にくからぬを見る目なきにあらねど、年頃つきあひしすゑ、わが胸にうづみ火ほど

のあたゝまりも出來ず。たゞ厭ふにはゆるは彼方の親切にて、ふた親のゆるしゝ交際の表、かひな借さるゝともあれど、唯二人になりたるときは、家も園もゆくかたもなう鬱陶しく覺えて、こゝろともなく太き息せられても、かしら熱くなるまで忍びがたうなりぬ。何ゆゑと問ひたまふな。そを誰か知らむ。戀ふるも戀ふるゆゑに戀ふるとこそ聞け、嫌ふもまたさならむ。」

「あるとき父の機嫌好きを覗得て、わがくるしさいひ出でむとせしに、氣色を見てなかば言はせず。『世に貴族と生れしものは、賤やまがつなどの如くわが儘なる振舞、おもひもよらぬことなり。血の權の贄は人の權なり。われ老たれど、人の情忘れたりなど、ゆめな思ひそ。向ひの壁に掛けたるわが母君の像を見よ。心もあの貌のやうに嚴しく、われにあだし心おこさせ玉はず、世のたのしみをば失ひたれど、幾百年の間いやしき血一滴まぜしとなき家の譽はすくひぬ』といつも軍人ぶりのこと葉つきあらく〳〵しきに似ぬやさしさに、兼ねてといはむかく答へむとおもひし砦（てだて）、胸にたゝみたるまゝにてえもめぐらさず、唯心のみ弱うなりてやみぬ」。

「固より父に向ひてはかへすこと葉知らぬ母に、わがこゝろ明して何にかせむ。されど貴族の子に生れたりとて、われも人なり。いま〳〵しき門閥、血統、妄信の土くれと看破りては、我胸の中に投入るべきところなし。いやしき戀にうき身窶さば、姬ごぜの恥ともならめど、この習慣の外にいでむとするを誰か支ふべき。「カトリック」敎の國には尼になる人ありといへど、こゝ新敎のザックセンにてはそれもえならず。そよや、かの羅馬敎の寺にひとしく、禮知りてなさけ知らぬ宮の內こそわが家穴なれ」。

「わが家もこの國にて聞えし族なるに、いま勢ある國務大臣ファブリイス伯とはかさなる好あり。こ

の事おもてより願はいと易からむとおもへど、それの叶はぬは父君の御心うごかし難きゆゑのみならず。われ性として人とゝもに欵き、人とゝもに笑ひ、愛憎二つの目にて久しく見らるゝことを嫌へば、かゝる望をかれに傳へ、これにいひ繼がれて、あるは勸められ、あるは諫められむ煩はしさに堪へず。況んやメエルハイムなどの如く心淺々しき人に、イヽダ姫われを嫌ひて避けむとすなどゝ、おのれ一人にのみ係ることのやうにおもひ做されむと口惜しからむ。われよりの願と人に知られで宮づかへする手立もがなとおもひ惱む程に、この國をしばしの宿にして、われ等を路傍の岩木などのやうに見もすべきおん身が、心の底にゆるぎなき誠をつゝみたまふと知りて、かねて我身いとほしみたまふファブリイス夫人への消息、ひそかに賴みまつりぬ」。

「されどこの一件のことはファブリイス夫人こゝろに秘めて族にだに知らせたまはず、女官の闕員あればしばしの務にとて呼寄せ、陛下のおん望もだしがたしとて遂にとゞめられぬ」。

「うき世の波にたゞよはされて泳ぐと知らぬメエルハイムがごとき男は、わが身忘れむとてしら髮生やすともなからむ。唯痛ましきはおん身のやどりたまひし夜、わが琴の手とゞめし童なり。わが立ちし後も、よな〳〵纜をわが窗の下に繫ぎて臥しゝが、ある朝羊小屋の扉あかぬにこゝろづきて、人々岸邊にゆきて見しに、波虛しき船を打ちて、殘れるはかれ草の上なる一枝の笛のみなりきと聞きつ」。

かたりをはるとき午夜の時計ほがらかに鳴りて、はや舞踏の大休となり、妃はおほとのごもり玉ふべきをりなれば、イヽダ姫あわたゞしく坐を起ちて、こなたへ差しのばしたる右手の指に、わが唇觸るゝとき、隅の觀兵の間に設けし夕餐にいそぐまらうど、群立ちてこゝを過ぎぬ。姫の姿はその

間にまじり、次第に遠ざかりゆきて、そり〳〵人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣の水いろのみぞ名殘なりける。

新浦島

「サクソンの畏き神に縁みてぞ、けふをば『エンスデイ』といふ。その神見ませ、よるよりも暗くさびしき墳墓に、降りゆくまで我が守る實といふは誠のみ。」

ホトソンに沿うて登つて行つたことのある旅人は、屹度タエツキルの山を覺えて居ませう。これはアパラッチエン山の幹から出た小枝で、遙に西に向つて、仰いで見れば、麓は河の畔に垂れて、巓は空に聳え、自づと近隣の地を支配して居ます。四季の變、天氣の更は勿論、一日の中でも、一刻一刻に不思議にも色と形とを改むるは此山です。それだからこの山の見ゆる處に住む女房は、皆なこれを晴雨計にします。好い天氣の續くときは、青か紫かの衣を着て、その大膽らしい界の線を翳のあい夕空に畫き、時としては、近き傍の森には、雲も烟も見えぬに、その巓は、鼠色の霧の環を掛けられ、西山に這入り掛つた夕日の、最後の光に觸れて、凱旋の人の戴く冠の樣に光り輝きます。

此奇怪な山の麓で、旅人はある村から立ち騰る、弱々しい烟を見ましたらう。丁度あの晴れた空の青「インキ」が、近い林の緑色に移り行く所で、木の間からちら〳〵と屋根の見ゆる村です。この村は小い、古風な村です。それも尤も、むかし和蘭陀の移住民が、當時善政の聞えのあつたピオトル、

ストユイフサント(渠は無窮の平和に息め)の時代に建てたのだから。四五年前までは、まだ和蘭陀から持て來た、小い黄いろな煉化石で積み上げた、格子窗の附いた、屋根の正面に破風を造つた、その上に風の響きを知らする鷄が立つて居る家が、澤山殘つて居ました。

丁度この村に、この家の一つに、本たうを言へば、隨分雨風に打たれた破れ家に、まだ此邊が英領であつた頃、愚直な、氣の好いリツプ、フアン、井ンクルといふ人が住んで居ました。先祖を問へば、ピイトルのまだ軍の功名を世にとゞろかした時、屈竟の武士で、フオオト、クリスチナを打圍いた一人のフアン、井ンクル氏です。然し先祖の勇氣は遺傳しないとか、私が見た處では、此人は愚直で、好い氣で、隣には親切で、女房には上靴の下に布かれて居ました。渠が喧嘩を好まず、兎角柔和で、世間の人にすかれたのは、全く右の最後に擧げた遭遇の結果でせう。大抵内で喧嘩の好きな女房に支配せられて居る男は、世間で平和を好み、誰にでも從つて、好い人だと言はるゝものです。人の性質は家内の不和といふ火力の強い爐で柔に、撓み易くせらるゝもので、善人になるには、世界中の高僧の說教を聽くより、女房の寢帷の下の說經を聽くに限ります。この說經の外に、また何が柔和と忍辱とを敎へませう。して見ると矢釜しい女房を持つた人は、仕合せです。嗚呼、リツプ、フアン、井ンクルの仕合せもの。

また此人が近隣の女房共の憐を受けたとは非常です。總て婦人は他家の內訌に就て、評議を凝らすときは、亭主の黨派に加はるものですが、フアン、井ンクルの家の事では、殊に亭主を贊成し、晩の會議で、罪の全體を負ふのは、フアン、井ンクル夫人に極つて居ました。その外、村中の小供の仲間で、此人の景氣は盛なもので、この人の姿が近寄る度に、村童の群が、凱歌を擧げて迎へまし

た。かれ等の爲めに玩具を作つて遣り、紙鳶を飛ばして遣り、獨樂を廻して遣り、また幽靈や、魔女や、銅色人種の面白い譚をして遣るのは、此人の外にはないからです。村童は乍ちにこの人を圍繞いて上衣の裾に縋り、脊中に攀ぢ登り、思ひの儘な惡劇をしても此人は腹を立てません。小供が馴染む許りではない、此人に吠えた犬は、近村に一疋もありませなんだ。

唯だリツプが性質の中で、一番惡いのは、利潤になる樣な業を、一切嫌ふのです。それはかれが耐忍力に乏しい爲めでせうか。韃靼人の槍よりも長い釣竿を握つて、息を屛めて濕り勝な岩の上に坐り、一尾の魚も取らずに、平氣で一日も居るのは、耐忍力ではありませんか。鳥銃を肩に掛けて、沼を渡り、森を穿ち、登りつ、降りつ、幾時となく彷徨うて、山鳩一羽、栗鼠二三頭を捕つて、喜んで還るのは、耐忍力ではありませんか。隣の人の業にならば、どんな六つかしいとにでも、手を借すのは、此人です。祭の時に蜀黍の莢を剝ぎ、石垣を築くとき、第一に力を出すのは、此人です。村中の女房が、亭主の辭退する用は、皆な此人に賴み、走り使は皆な此人にせさせます。このとほりにリツプは世にありとあらゆる人の仕事をします。そのしないのは、自分の仕事計りです。自分の家を治め、自分の畑を耕すとは、かれには所詮出來ませなんだ。

實に妙な性分です。然し其譯を問ふと、何時でも立派に言ひ解きます。私の田を耕す程、世に損なとはない。これは國中で惡いのです。いくら骨を折つても、穀物が實つたとはない。垣は誰も破らぬに獨りでに破れて仕舞ふ。牛は逃げて仕舞つたり、菜の中へ這入つたりします。無益な艸は外よりも早く延びます。此畑へ仕業に出ると、何時でも意地惡く雨が降る。斯う言つて、打ち棄てゝ置く程に、先祖から讓り受けた田は、年々に減つて仕舞ひ、今は唯だ些し計りの、蜀黍と馬鈴藷を種

付くる畑ばかりが殘りました。

またリツプの子供は、汚れた腐、破れた衣、誰をも親に持たない子の樣です。父にそつくりなリツプといふ息子は、唯だ貌計でなく、心まで父に似やうといふ、賴もしい望のある小僧です。何時も馬の子の樣に、母の跡に附き、親父の穿き古した、ぼろ〳〵の袴の、垂れて地を拂ふのを、片手で撮んで歩くのは、丸で天氣の惡い時に、善い衣を着た女が、裾を蹇ぐるやうです。

リツプ、フアン、井ンクルは例の仕合せもの丶、例の恐直な、放任な、世間を易く見て、白麵包でも黒麵包でも、心にせよ體にせよ、成る丈少し勞して得らる丶ものを食ひ、一弗竊けやうと骨を折らうよりは、一錢竊けて飢ゑてもよいと云ふ人物の一人でした。かれの安を妨ぐるものがなかつたなら、かれは口笛を吹き乍ら、さぞ面白く世を渡つた事でせう。然し煩聒しい女房は、かれの懶惰無頼着杯が、一家の破滅だといつて斷えずかれを責めます。朝も晝も晩も女房の舌は止むときなく運轉して、何かこの男が言つたり、爲たりすると、直に長演說が始まります。こんな演說に出逢つた時のリツプが答辨は、唯だ一つで、この一つはかれの癖になりました。かれは肩を聳かし、頭を掉り、上目を使つて一言も云ひません。この答辨に次で、何時でも女房が最う一遍新に丸を籠めて發砲し、リツプは僅に身を以て免かるといふ樣な勢で、兵を引上げ、外へ出て行きます。これは何處でも上靴で踏まれて居る亭主のたつた一つの迯道です。

家内でリツプに服從して居るものと云つては、チルフと名の付いた犬計りで、この犬も矢張上靴で踏まれて居る仲間です。何故といふに女房の目から見れば、此犬は亭主の懶惰の友で、亭主が頻に失策をするのはかれの爲めのやうに見えます。だから女房の目は憎氣にこの犬を見ます。全體、犬

の德といふべきものは、皆な備へたこの犬、昔よりこの邊の蓊鬱たる林を穿つた中で、最も大膽なこの犬ですが、一女子の舌のいつまでも猛烈なのには、何等の膽力か挫折せずに居られませう。ヲルフは家に逼入るや否や、頭を低れ、尾は地まで垂げて、股の間に挿み、間の惡るさうな顏で歩き廻り、折々横目で主婦を見て居ますが、箒の柄、杓子の音が少しでもすると、一目散に戸口を駈け出します。

夫婦になつて居る歳が移るに從つて、リツプの地位は段々に惡くなつて來ます。原來酷い性は決して年を經て寛にはならず、鋭利な舌は斷えず用ゐるに連れて尖つて來る刄物です。既に久しい間、リツプは家から逐出さるゝ度に、村中の學者、儒者、その外の懶けものが開いて居る一種の常置會に臨むことにして居ました。會場は戸口にジヨオジ第三世陛下の赤い樣な像が掛つて居る小い酒屋の前の長椅子です。永い眠むさうな夏の日に、かれ等はこの日蔭に腰を掛けて、村中の噂や、譯もない怠屈な永譚をします。然し稀に旅人の手から古新聞を一枚貰つたとき、この仲間でする細な議論を聞く事が出來たなら、或る政治家は隨分金を拂つたかも知れません。學校教師デリツク、フアン、ブムメルがぼつ〳〵と讀む文句を、かれ等はまあどんなにか眞面目に聞いて居ましたらう。讀むものは字書の中のどんな難字に遭つても駭かない、すばしこい、賢い小男です。聽く人は紙上の政治問題に就いて、まあどんなに賢く議論をしましたらう。この既に二三月前に濟んだ問題に就いて。この會議の首座で、その意見を支配して居たのは、村の故老で、宿屋の主人ニコラス、ベツダアです。この人は家の前の大木の蔭に何時も座つて居て、毎日丁度、日光を避けらるゝ丈體を動かします。ですから近所の人はこの人の座を見て、時刻を知るとは、丁度沙漏刻と同じとです。この人

は多く議論を致しませんが、煙草はその代りに絶えず喫みます。かれの黨（世の英雄には屹度その黨があります）は、それでも善くかれの意を解します、かれの向背を探ります。人の讀むと、言ふとなどが氣に入らぬときには、渠は劇しく煙草を吸ひ込み、また頻に短い怒つた樣な烟の吹き方をします。若し又氣に入る時は、烟草を閑に緩くり吸ひ込み、輕い穩な雲を吹き出し、時としては烟管を口から引き出し、匂ひの善い烟に鼻のあたりで環を書かせ、物體らしく頷いて、その腹からの大賛成を表します。不便なリップは、此砦からも、彼喧嘩好きの女房に逐はれました。彼女房はこの平和な集會に突然駈け込んで、誰彼の嫌なく、會員一同を益々に立たずと罵り、例の至尊なるニコラス、ベッダアの身さへ、この恐ろしい變生男子の大膽な舌で傷られました。女房は靦面にかれに向つて、自分の夫を懶惰にする人だと責めました。

遂には不便なリップも偪迫に堪ぬ樣になりました。農家の力作と女房の喧嘩とを逊るゝ最後の策は、鳥銃を手に把つて、山深く迷入ることです。さて山の中では、折々木の根に腰を掛けて、嚢の中の物をヲルフに頒けてやります、この同じ危難に遭つて居る同病相憐む獵犬のヲルフに。リップは犬に向つて言ひます。「不便なヲルフ、そなたの主婦は犬同樣に汝を扱て居るぞ。然し苦勞にするな。吾兒よ。おれが生きて居る間は汝の力になる友達が一人はあるといふものだ。」ヲルフは大抵尾を掉つて、もの思はし氣に主人の顔を見ます。嗚呼犬が不便といふことを知るものなら、ヲルフがこんな時に心の底から主人をふびんがるのは疑ひもないことでせう。

◎ある秋の晴れ渡つた日に、リップ、ファン、井ンクルは例の通りケエッキルの山に迷入つて、われ知らず、この山の絶頂に近い處まで來ました。かれは栗鼠狩といふ道樂に引かれて來たので、かれ

の放つた鳥銃の音を反射する谺響は、また一たびこの無人境の寂しさを破りました。渠が疲れ果てゝ喘ぎつゝ、崖の縁を冠の樣に飾つて居る、山苔で裹まれた綠の丘の上に倒れたのは、晝過ぎ遲くでした。木々の隙間から見渡せば、丘の下の數哩に亘つた森が見えます。少し隔つた處を遙に、ずつと遙に見下せば、美しい、靜な、然し莊嚴なホトッツの流が帶の樣に見えて、紫の雲、又は（此處彼處にその水晶の胸の上で假寐をして居る樣な）徐々とすべつて行く小舟の帆が、影を寫し、その末は靑う見ゆる高原で、そのはては恍惚と知れなくなつて居ます。

外の側を見下せば、淋しく荒れた深い谿で、その底の岩には、許多の罅隙が這入つて居て、所々には崖から飛出した石もあり、夕陽の光線の屈折反射した末が僅にこれを照らして居ます。リップはこの景色に對して暫くは思ひ沈んで居ました。藹然たる暮色は段々に迫つて來て、山々は長い靑色の影を谷に落し初めました。かれはこの樣子では村に歸り付くより、餘つ程早く日が暮れて仕舞はうと考へ、還り付いた時に女房の怒は何程だらうかと、覺えず太い息を吐きました。

リップが奮發して歸らうとし掛つた折に、遠くから「リップ、リップ」と呼ぶ聲がします。四邊を見廻はすに、頭の上を飛んで行く一羽の鴉の外に、目に遮るものもない。渠は心の迷であつたかと、又た行かうとすると、同じ聲で「リップ、リップ」と呼ぶ。この聲が靜な日暮の空氣に響き渡る時に、連れて居る獵犬ヲルフの毛が立つて來て、犬は靜に鼻を鳴らし乍ら、リップに擦り倚つて、物に畏るゝ樣な風で、谷の底を覗きます。リップも何となく薄氣味が惡くなつて、ふと犬の見詰めて居る方角を見ると、岩を踏んで登つて來る怪しい人の姿が見えます。かれは脊に負うて居る重荷の爲めか、腰を曲めて步く樣子です。この浮世を離れた場所で邂逅うた人の姿には、リップも少し驚きま

したが、また近村のものでもあるかと思つたから、かれの重さうな荷を負ふのを、少し扶けて遣らうと急いで崖を下りました。

近くなればなる程、不思議なのは異人の摸樣です。丈は低く、力のありさうな老人、髮は濃くて箒の樣にあり、髯は灰いろです。打扮は和蘭陀の古代の風俗（帶で腰を約した木綿衣）袴は幾重も穿き、外の分は濶くて、兩側は各一列の鈕で留めてあります。膝の處には紐が附いて居ます。肩に載せて居るのは重い桶で、その中にあるものは藥酒と見えます。異人は手具似でリップを呼んで、少しすけて吳れと賴む樣子です。リップは少しはこの新知己に對して嫌疑の心を懷きもしたが、例の氣の好い所から、手を借してやりました。異人とリップとは代り〳〵に荷を負つて、谷間を登つて行きました。此谷間は古代に山川の流れた痕と見えます。攀ぢ登つて行く中に、折々遠い雷の樣な音が耳に達します。この音は登つて行く道の窮まる所に見ゆる岩の裂け目から出る樣です。リップは初めこの音を聞いた時、立ち留つて耳を澄ましたが、深山で折々逢ふ一時の、通り過ぎの雷かと思つたから、又た疑はずに進で行きました。扨て例の岩の裂け目を通り越して見ると、こゝは一つの岩窟です。窟の形は劇場の棧敷に似て居て、その周匝は急な崖です。この崖の上には老樹が枝を交へて、唯だその隙間に、藍の樣に靑い空と、光のある夕の雲が見ゆるばかりです。リップはこの異人と一所に登つて往く間始終無言でした。何故この山奧へ、藥酒を一桶負うて運入るか。その譯は解りませんが、この異人の姿には何となく馴れ難い、敬はねばならない所があつて、何うも話を仕掛けられませなんだ。

岩窟に這入ると、また驚くべきものが目に觸れました。窟の中央の窪んだ處に諧謔けた人物が寄つ

て、尖柱戯（向うに立てゝある尖つた木の柱を、こちらから木の丸を轉し掛けて倒す戯）をして居る。その人物の衣は可笑しい外國風の仕立です。一人は短い袍を衣て、外の連れは半臂に長い劍を佩き、大抵皆な（彼の荷を負うて來た人の穿いて居る通りな）無暗に寛い袴の中に嵌まり込んで居ます。それにその人々の顔は皆な妙です。一人は頭が大きく、額が廣くつて、目は豕の樣に狹く、外の一人の顔は丸で鼻計りで出來て居る樣で、その上から赤い鳥の羽で飾つた、白い棒砂糖形の帽子が被ぶさり掛つて居ます。どれも色々な形の、樣々な色の髯を生やして居ます。中で一人は頭と見えます。此人は日にやけた顔で、力の強さうな老人です。渠は紐で飾つた袍を着て、廣い帶に劍を懸け、羽附きの高く尖つた帽を戴き、赤い襪に踵の高い、花飾りの附いた靴を穿いて居ます。リツプは此仲間を見て、村の牧師シエエクさんの部屋にある、和蘭人の移住の時に來たフランドルスの古い畫を思ひ出しました。殊にリツプの目に可笑しく見えたのは、此人々が眞から樂んで居るに違ないのに、皆な眞面目な顔をして、さも秘密らしく默つて居ることです。ですからリツプが今迄見た内でこれが一番沈んだ會でした。この場所の靜かなのを時々破るものは、丸の音計りです、抛げ出さるゝ度に、山傳ひに谺響を喚起す、鳴渡る雷の樣な丸の音計りです。

桶を擔うた人に連れられて、リツプがこの異人の群に近寄つた時に、渠等は俄に遊を廢めて、此方を見ました。その氣拔のした、そしてむかし一目で人を殺したといふ龍の「バシリスク」の樣な目と、粗相な澤のない顔附を見たリツプは、心の臓が胸の中で顛倒つて、膝は緊がなくなりました。一所に來た男は桶の藥酒を大きな瓶に分けて入れましたが、入れ仕舞ふとリツプを喚んで、異人達に酌をせさせました。かれは怖がつて慄ひ乍ら酒を注いで出すと、異人は默つて飲み乾し、また遊

の方へ顔を向けて、邊には搆ひませなんだ。リップは段々に怖いと羞かしいとを忘れて、渠等の見ないを僥倖に藥酒を試めして見ると、上等の杜松子酒の樣な味がしました。此男は元來咽の乾く性ですから、一度この味を占むると、また一口飲みたく成る、つい二度三度と瓶へのお見舞を重ぬる中に、段々に氣が遠くなつて、目がちらつき、頭は何時ともなく項垂れて來ました。かれは眠つて仕舞ひました。

目が覺めて視れば、また原の綠の岡の上に居ました、丁度あの異しい桶を擔うた男を始めて見た所に。目を摩つて見れば、夜は明け離れて、旭が麗かに照つて居ます。木の間には枝から枝に渡つて鳴く小鳥、淸い山風に抗つて高く舞ふ青空の鷲ばかり。「はてな、一晚是處でねかして仕舞つたか知らん」といふのが、リップの最初の考でした。渠は寐附いた迄の事を繰り返して思ふに、桶を負うた異人との邂逅、岩窟、物凄しい岩陰、陰氣な尖柱戯の遊仲間、瓶。「嗚呼、その瓶だ。その因果な瓶だ。まあ、何と女房に言譯をしやう。扨々困つた。」

かれは鳥銃が四邊にあるかと見廻しました。何うしたとか傍にあるのは、持ち慣れた、磨き立つた、好く油を引いた鳥銃ではなくつて、古い銃身には一面に錆の附いた、撥條の落ちた、柄を蟲の喰つた鳥銃です。かれの考では、あの眞面目腐つた、生醉の山男が、おれに一杯喰はせて、醉ひ倒れたのを幸に、鳥銃を盜んだとかと思ひました。ヲルフも見えないが、これは栗鼠か、鳥かを追掛けて往つたかも知れません。かれは口笛を吹いて見たり、名を呼んで見たりしても、口笛と犬の名とを呼び戻す谺響は聞えて、犬の姿は見えませなんだ。

かれは昨日の怪い目に逢つた處へ往つて見やうと思ひ定めました、若し尖柱戯仲間の一人に出逢つ

たら、鳥銃と犬とも、取り戻さるゝかも知れぬから。扨て斯う思つて立ちあがるとき、何となく節々のあがきが不如意なのに氣が附きました。「何うも石の上なんぞに寢ると、體をだいなしにして仕舞ふ。若しこれがこうじて僂痲質斯にでもなつたら、さぞ女房に矢釜しく云はるゝとだらう。」と獨言を言ひ乍ら、漸うの思で溪間に降りて、昨日異人と連立つて歩いた道の處に來ました。然し不思議なは、この溪間は山河になつて、岩から岩へと跳る水は、聒ましい小言で、此無人の境を賑はして居ます。骨を折つて、「河の岸に生茂つた樺や榛や「サッサフラス」の小枝を押し分け乍ら、岸に沿うて登つて行くに、樹々の枝に蔓を渡して、往方の途に網を張つた、野生の葡萄が、折々足に搦んで、その困難、實に昨日の比ではありませなんだ。

漸う岩窟の入口まで來て見れば、今日は穴も何もありません。削立つた岩は罅隙のない壁の樣で、しかもその上から瀑布が泡を飛ばして墜ちて來て、直ぐ下にある、周圍の森の影に裹まれて、眞黒な淵にはいります。可愛さうにリップはこれから先へ一足も行かれません。かれは又た口笛を吹いたり、ヲルフの名を喚んだりして見ても、應ふるものは遙に高い枯木の周匝を飛んで居る惰鴉の一群ばかりです。かれ等は高い處から、この氣を揉んで居る人間を見御して、馬鹿にする樣に見えます。はて何うしませう。日景は段々移る。朝飯を食はないリップは追々飢を覺えて來ました。犬と鳥銃とはなくして仕舞つて、腹は立ちます。家へ歸らうには、女房が何んなにか叱るだらうと氣に成る。然し山の中で餓死をする譯にも行きません。かれは首を掉つて、古鳥銃を肩に掛け、心配を胸に歸途に掛りました。

村に近くなつて來ると、一群の人が行き交ひましたが、一人も知つた顏でありません。かれは村中

に知らない顔はなかつたものを。それに邂逅うた人の衣が、皆んな見慣れない仕立です。かれ等は皆なリップを見て驚く様子で、また言ひ合はせた樣に、頤を摩ります。リップは覺えず自分の頤を摩つて見て駭然しました、鬚が一尺も長く伸びて居たから。

リップが村境に這入ると、識らない小供の一群が、跡から跟いて來て、白い鬚に指をさして笑ひ、また聲を立てゝ叫びます。犬の居る前を通過ぐる度毎に吠えらるゝから、氣を付けて見れば、皆な識らない顏の犬仲間です。村も變つて、大きくなり、また人も殖えて居ます。見馴れた家は痕もなくなつたかと思へば、昨日まで家のなかつた所に、檐を連ねた街が出來て、家々の入口には、知らない名が書いてあり、窓からは知らない人が顏を出して、何も彼も知らないもの計りです。かれの胸には心配が起つて來て、つひにかれは自分も周圍の世界も、一所に化かされて仕舞つたのではないかと思ひました。これが我村に違はないものを、昨日出て行つた我村に。クエッキル山は彼處に聳えて、ホトソンの淸い流は此處に流れて、丘も谷も何時もの通です。リップの心は千々に迷うて、何となく悲しく成つて來ました。「あゝ、きのふの瓶の酒だに飮まなかつたら、こんな氣違ひにはならなかつたらうに、」と渠は歎息しました。

漸うの思で、渠は我家を探し當てゝ、怖々に近寄りました、女房の耳に立つ聲が、今するか〳〵と思ふから。見れば哀れな家の有樣です。屋根は落ち込み、窓は破れ、戶は蝶番からはづれて居ます。何處かヲルフに似たやうな、饑死をし掛つた犬が一匹、家の周圍を彷徨いて居るから、名を呼んで見ると、廝奴は齒を露出して、嘷咻つて逃げて仕舞ひました。隨分これは面白くない待受けといふものでせう。「おれの飼狗まで、おれを見忘れて仕舞つたか、」とリップは大息を吐き乍ら云ひまし

た。
かれは家の閾を跨ぎました。原とリップの女房は矢釜しい丈、家の掃除はよくして居たが、今見れば荒れ果てゝ、人影もない樣です。この有樣を見て、女房の怖さも忘れて仕舞つたリップは、女房と小供との名を高く呼びました。この聲は虛になつて居る部屋々々へ響いたが、それつきりに、又た靜かになりました。

落膽して家を出て、急足で何時もの酒屋に來て見れば、これも何うしたか消えて仕舞つて、その代に大きな、古びた、木造りの家がありました。破れ掛つた處を、襤褸や古帽子で埋めた窓が、廣く開けてあつて、戶の上には、「ジヨナタン、ヅウリツトルの聯邦客舍」と塗字で書いてあります。昔し酒店の擔端を掩うて居た古木はなくなつて、その代に太い裸な棒が一本立つて居て、その尖には乘る時に被ぶる赤帽子の樣なものが附いて居る、その處から旗が一流れ懸つて居るのを、善く見れば、星と條とが妙な工合に組合はせてある、渾て見るものが皆な不思議です。「然しジヨルジ王の赤顏の招牌は、まだ彼處に掛けてある。いや〳〵赤い袍の色が、青と黃とに變つて居る。杖の代に、手に持つて居るのは劍だ。頭には緣の飜へつた帽を被ぶつて居る。何んだ。下には將軍華聖頓と書いてある。」何時もの通り、戶口には大勢の人が寄集つて居るが、皆な知らない顏です。全體人の風儀が變つて、見慣れた、眠むさうな、靜かな性は迹もなく、誰も彼も忙しさうに、喧ましく、爭を好むといふやうに見えます。リツプはあの廣い顏の、頤の二重になつた、綺麗な、長い烟管から、空論の代りに烟りを吹く、賢いニコラウス、ベツダアか、又は古びた新聞の話を聞かする、敎員のブユメルは居らぬかと、見廻はしても、遂に見當りませなんだ。是等の人物の代には、瘦枯れた、

苦々しい顔の男が、外套の隠しへ一杯紙片を入れて、民權、撰擧、議員、自由、バンカアスヒル、七十六年の英雄抔と、譯の解らない、彼のバビロン城の工人の言葉のやうな事を、無暗に饒舌つて居りました。

リップが長い髯を垂れ、異風な装束を附け、錆で眞赤になつた鳥銃を肩に引掛け、跡には許多の婦女子を随へて、この塲に現れたを見て、酒店に集つた政治家連は、一同喫驚しました。渠等は立つて來て、リップを取巻き、さも珍らし氣に、頭の頂から足の蹠まで見ました。中にも如才のない演説家は、群集を押分けて側に寄り、リップを引張つて「君は何黨の人を撰擧しますか、」と問ひました。リップは呆れた顔をして、かの男を瞠視めた計り、一言も出しませなんだ。その内に又た人を押分けて來て、リップの腕を握つたのは、忙し氣な丈の低い男で、足を爪立てゝ耳に口を寄せ「君は聯合黨員ですか、または民政黨員ですか、」と問ひました。リップは矢張り呆れた顔をして、一言も出しませなんだ。この時に又た群衆を肘で撞き退け〳〵、リップの面前へ出て來たのは、仔細らしい、物識り顔な老人で、隻腕を腰に突張り、隻腕を杖の上に置いて、尖つた帽の下から、鋭い眼を光らせ、リップの顔を、魂まで見抜きさうに睨んで、「君はこの撰擧塲に、武器を携帯して來るさへあるに、許多の人民を従へて居らるゝのは、暴動でも起さうといふ所存ですか。」と云つた。これを聞いたリップは、少し慌てた聲で。「何うして私が暴動抔を致しませう。私は此土地の根生ひのもので、王さまの大の信仰者です」と云ひました。

王さまの信仰者と名乗つたリップが一聲は、倘圍繞いて居た撰擧人の群に、劇しい混雑を惹起しました。「それ勸王家だ。それ間諜だ。落人だ。捕へて仕舞へ。いや逐出して仕舞へ。」このさま〳〵の

聲を鎭めた、例の綠の翻へつた帽を被つて居る老先生の骨折は、大抵ではありませなんだ。さて十倍眞面目な顏付をして、リツプに向つて、（かれが爲めにはこの怪しい犯罪人に向つて）何の仔細があつて、誰を搜しに此處へは來たかと問ひました。ふびんなリツプは、何んにも惡意は挾まず、唯だ何時も此處に來る、近處の知己を搜しに來たと答へました。

「宜しい、それは誰れか、名をお言ひなさい。」リツプは少し考へて、「ニコラウス、ベツタアは何處に居ますか、御存の方はありませんか。」

群衆は暫く靜まつて居たが、中で老人が一人、薄い悲し氣な聲で答へました。「なに、ニコラウス、ベツタア。あの男が死んだのは、もう十八年前の事だ。墓の上に建てた木に、行狀が書いてあつたが、その木も何時か腐れて仕舞つて、今は痕もない。」

「そんならブロム、ダツチヤアは。」

「あれは軍の始まつた時に隊に這入つた。ストニイ、ポイントの進擊の時に死んだといふ人もあるし、又たアントニイス、ノオスの颶風に逢うて溺れたといふ人もある。何しろ歸つては來ない。」

「そして敎師のファン、ブンメルは。」

「おれも矢張軍に出て、仕舞ひには土兵の大した將官になつて、今では議員だ。」

この恐ろしい世間の更り樣、又た友達の榮枯得失を聞いて、自分の唯だ此處に取殘されたとを顧みたリツプの落膽は思ひ遣られます。それに人の答が一々心を迷はす種になる、幾歲月を經た間の歷史上の出來事を、遠慮會釋もなく、並べて話さるゝから。戰爭、國會、ストニイ、ポイントの進擊。かれは最う外の友達の事を問ふ氣力がないから、さも困つた樣に、「そして誰も此内でリツプ、ファ

ン、弁ンクルを知つたものはありませんか。」

「なにリツプ、フアン、弁ンクル」と二人か三人が一度に應へました。「知らなくつて。それ、其所に木に倚つ掛つて居るのがリツプさ。」と云はれて、リツプは驚き作ら、人の指ざす方を見れば、成程自分に酷背た、同じ樣に貧乏らしい、此度また同じ樣に無性な男が、木に倚掛つて、四邊搆はずといふ姿で居ます。此時リツプが呆れ加減は、極端に達しました。かれは自分が果して自分だか、將た他人だかと疑ひ始めました。この精神の錯亂して居る最中に、例の飜へつた縁の帽を被つた先生は、又たリツプに向つて、其方は誰だと問ひました。

「それをまあ誰れが知つて居ませう、」とかれは答へました、かれは丸で判斷力を失つて仕舞つたから。「私は矢つ張私ではありません。私は外の人です。彼處に居るのが私です。然し、いゝえ。彼處に居る人は、矢つ張私の蛻に這入つた外の人です。昨晩までは、まだ私は私でした。一晩山の中に明かして、鳥銃は取換へられ、世間は丸で別物にせられ、その上私まで更りましたから、私の名は何と申しますか、私は誰ですか、迚も申すとは出來ません。」これを聽いて居た群衆は、互に顔を見あはせて頷きあひ、又た意味あり氣に手眞似をして、額を指ざしました。中にはこの危ない老人の持つて居る飛道具を取上げねば、何か事を起さうも知れぬと、騒ぐものもありましたが、かの飜へつた縁の帽を被つた先生は、これを聞くや否や、直ぐにこそ／＼と逃げて仕舞ひました。この時に若い愛らしい婦人が、群衆を押し分けて、リツプの側へ近寄りました。この白髯の翁の貌に驚いてか、抱いて居た頬の膨れた子は、聲を放つて泣出しました。「おや可笑な子だねえ。この老爺さんは何うもしはしないよ。リツプ坊は善い子だ。靜にお仕よ。」小兒の名！ その母の顔と聲音と、これ等

は食なリップ、ファン、ヰンクルの心に夥多の記念を喚起しました。かれは「おかみさん、あなたのお名前は、」と問ひました。

「ジユヂス、ガアヂナア」

「そして貴君の乃翁の名は。」

「えゝ、氣の毒なのは私の阿爺、名はリップ、ファン、ヰンクルと云ひました。鳥銃を肩に掛けて、家を出て往つてから、最う二十年立ちましたが、それつ切り音沙汰なしです。伴れて往つた犬は獨で還りましたが、主人は自殺でもしましたか、銅色人種にでも引張つて行かれましたか、誰も様子を知りません。私はまだその時に小さい娘で御座りました。」

これでリップの問は、只だ一條を餘したが、かれは吃り乍ら、漸う言葉を出しました。

「そしてお前の老萱は何處に居ます。」

「孃々はたつた此間無くなりました。ニユウ、イングランドから來た旅商人と喧嘩をして、餘り怒つたので、卒中とかいふ病を發したのだといふことです。」

リップが爲めに、少し心を慰むる媒になつたのは、此れ一つです。かれは怺へず、娘と孫とを抱いて。「おれがお前の親父だ、祖父だ、家を出た日には、まだ若かつた、今日は年寄つたリップ、ファン、ヰンクルだ。まあ此多人數の中に、誰もおれを見覺えた人はないか、」と云ひました。一同呆れて立つて居る中から、跟蹌け乍ら出た老媼は、手を翳して一分時程リップの顔を見て居たが。「やあ、お前はリップさんに違ない。善う歸つて來ました。この永の歳月、まあ、何處に居ました。」と云うたが、その時のリップの嬉しさは、實に思遣られます。リップが二十年間の話は、すぐに濟み

ました、かれがためには、二十年が一夜ですから。聞いたものは又た互に目を見合はせました。中には舌を頬へ推込んだ人もあります。危くないと見極めて戻つて居た、翻へり帽子の先生は、口の角を引下げて、頭を掉ると、一同が同じ様に頭を掉りました。

この時街を徐々と歩いて來たのは、ペエトル、ファン、デルドンクと云つて、此府の古記錄を編輯した、同名の人の後裔です。今ではこの村の一番古い人で、昔しこの村にあつた珍らしい事といへば、この人の知らないことはない位です。この人は一同にリップが話に就ての意見を尋ねられて、何か思ひ當ることでもあるやうな身振をしましたが、その言ひ出すのを聞くに。先祖の歴史家の著書の内に、ケエッキル山に異形な人が現るといふことは、分明に書いてある。これはこの洲と河とを發見したヘンドリック、ホトソンの仲間で、二十年に一遍づゝこゝへ來て見るのが常になつて居り、かれの父は一度この仲間が山の洞の中で、和蘭風な打扮で、尖柱戯をして居るのに邂逅つたことがあり、かれもある夏の晝過に、丸を轉ばすやうな音を聞いたことがあるといひます。

群衆はこの話を聞いて安心して、また重大な選擧事件の方に心を寄せました。リップが娘は父を勸めて同居せさせやうと、連れて歸りました。その家は倒々美しく、諸道具も備つて居ます。その亭主といふものは、壯健な農夫で、熟々見れば昔しリップが脊中に攀ぢ登つた惡劇兒の一人です。親にそつくりな二代のリップ、あの木に倚掛つて居た男も、この家に喚ばれて、庭で仕事をすることになりましたが、矢張り自分の業よりは、人の業に力を入るゝ珍らしい性でした。

リップはまた元の通りに、散歩、其外の慣れた生活を始めました。昔しの友達をも一二人は見出しましたが、何れも〳〵衰へ果てゝ、言葉敵にもならないから、それよりは寧ろ若いものをと、段々に少

年の友達をこしらへ、この少年等も、また程なくリップを二なきものに思ひました。

かれは家に用事もなく、又た幸に最早用事がないと云つても、人の彼此と批評をしない丈の年になりましたから、異議もなく、元の通に酒屋の前の或る榻を専有して、村のものには故老の一人、また戰争前の活きた歴史として敬はれました。渠の話の流が淀みなくなり、自分の寐て居た間の變遷を解するまでになつたのは、これより大分後の事です。獨立戰争のあつたと、國が英吉利の羈絆を脱して、ジヨルヂ第三世陛下の臣民たるリップが、合衆國の自由の民になつた抔も、次第々々にその腹におちました。リップは元から政治家ではないから、國の發落には餘り感じませなんだが、かれも曾て一種の壓制の下に立つて、大息ばかり吐いて居た事がありました。それは女房の壓制です。仕合せにも、この政府は轉覆じました。かれは夫婦の桎梏を脱して、家の出入にも、時の制限のない、自由の身となりました。ファン、井ンクル夫人の名を聞く度、リップは相替らず頭を掉り、肩を聳かし、空目を遣ひますが、この身振は彼の自分の運命を諦めた徴とも、又た壓制を脱れた喜の徴とも取られませう。

ヅウリットルの客舎に泊る客がある毎に、リップは身の上話をしました。初めの内は話す度に何か少しづゝ變る様でしたが、これはかれがまだ目が醒めたばかりで、考も後先になるのでありましたらう。仕舞には話がこゝに書いてある通に、確かに定つて、近處に住む老若男女共、皆な熟くその始終を知つて居るやうになりました。ある人は到底リップの話を信ぜず、かれは久しく氣が違つて居たのであらう、かれの頭は元から少し怪しかつたからと云ひました。これに反してリップを何處までも信じたのは和蘭の遺民です。今も夏の午後にケエッキル山の方に雷がなる度に、かれ等は屹

度ペンドリック、ホトンンの尖柱戯の話をくり返して、生計に困つた人はリップ、ファン、井ンクルの瓶から蒙汗藥が飲みたいと云ひます。

洪水

水の引いた跡で見れば、デットロウの澤の惘れ氣な姿が、丸で打出して目の前に見え、低い、海綿の樣な表面はゆら〳〵として、夢見かとおもはるゝ程に黒い沼になつて居て、そこから泥雜りの水が、蛇のやうに委它りながら、靜かにねば〳〵した滑りさうな滯をこしらへて、太平洋の廣い入江に流れゆく。彼處此處に青黃いろい艸の取殘されたやうな斑が見えて、此艸の痩せた、ぬる〳〵した莖には厭な、濕つた、土臭い香がするから、日の目を見ずに育つたものといふとが直ぐに知れう。この沼の平たい、變りのない淋しさは、人の妄想を呼出すとはない筈だが、それでも妄想を起せば、あの波のうねりのやうな、打寄せられた浮木は、直ぐに又た、今一日引きは引いたが、また厭でも高潮になつて戻つて來る水の、悲しい知らせの使になるだらう。かう思つて見ればこの一面の土地には暗い影がさして、縱令日が照つたと云つて、この影は消し散らして志まふ譯には往かぬ。緣いろな牧の草さへ、かう思つて悶いで居て、思切つて生えて見やうとはしないやうだ、最う何時までもあの壓制な水を逐ひ拂つたと知る日までは。かたはになつた覆盆子の木に下つた苦い實に附けても、この原來優しい質も無暗な水療治で、かうまで苦くせられたかと思はる。

この澤では、物の聲までが、何となく壓付くるやうで、鬱々として居て、五位鷺のがらんどうな、咳嗄れた、墓の中からでも聞えさうな聲、木つゝきのきい〳〵いふ聲、空を飛んで過ぐる雁の聲、

喧嘩好きな野鴨のべちや〳〵いふ聲、擾かされた鷸の鋭い、哀れに泣くやうな抗抵ひ、鳴の節のある歎き、この合奏は、この鳥の滅入つた、悲し氣な顔付に善く似合つた。實に何一つ氣を慰むるものはない。あの青鷺の足を半分水に漬けて居る奴は、足の濡るるをも、それで後に起るかも知れぬ病をも、無頓着におもふと見ゆるが、屹度風でも引かうといふ下拵へと思はる。あの氣の重げな木つゝきも、氣病らしい鴫も、矢張青鷺の附合に命懸けの見えをするか。又たあの感じのない水鳥は、羽族のマリウス將軍といふ風で、絶えず眉を攢めて、この廣〳〵とした地面をながめて居り、又たあの黒い鴉も、羽を休めずに、往きつ戻りつ飛んで居るが、あれは水が本たうに引いたか、さうでないかと思定めかねて、いくら骨を折つて考へても、ノアが舟に從つて確とした返事が出來ないのに困つて居るだらう。何にしろ、この澤の悲し氣な景色は、そこに住んで居るものに迄悲い心を催へて、一年目の交代を今か〳〵と待たせるが、その待つにも年を取つた鳥はやれ〳〵先づそれで滿足だといふやうな心で待たうし、若い鳥は出來もせぬ樣々の望を夢に見て待たう。

此デットロウの澤は乾いて居る時だに、この通りに面白くないが、扨丁度あの滿潮が力一杯に差掛つて來る時、丁度あの濕つた風が冷く無作法にちらつく水の面を擦つて通り、脇を向いて見れば、次の潮が正面に吹付けて來る時、丁度あの沼の涯のない深みが、鋼鐵の樣な青色に光つて來る時、丁度あの隙間もなく蝸殼に喰付かれて倒れて居る大木の幹が、又た起き直つて、目當もない陰氣な道中を始めて、神に見離された猶太の老人の樣に、絶ず彼處此處と迷ひ歩く時、丁度あの鴨が光る羽を擴げて音もせさせず、又た平な水の面にさゝ波も立てずに、潮の上近く過ぐる時、丁度あの狹

霧が潮と一所に寄せて來て、水が柳の縁を包むと倶に空の青さを隱す時、丁度あの漁師がほぐすにほぐされない霧の網にからまれて、行先も知らず、櫓をぴちや／＼と動かし乍ら、舳が鳴る度には、水に住む怪しい女の惡い手が觸れたかと思ひ、情なくも泥を離れた一艘の艀が水の面に浮んだに出逢ふ度には、溺れて死んだ人の髮に比べて喫驚し、さてはデットロウの澤に迷込んだかと心付いて、しん氣な一夜を明さうと思ひ諦むる時は、この澤の景色は、まあ何程悲しからう。

これで讀者にも、略ぼこの不祥な土地の想像が付かう。こゝであつた話、こゝに私しが邂に來る度に、屹度思ひ出す話を聞かせたい。尤も二三週前に、ある田舍新聞にこの話が出ては居たが、私が直にこの話の主人公とでも云はるゝ女の口から聞き取つたまゝを話さう、中／＼その情態を一々寫し盡す譯にも行かず、又た女の口の持前で景色を畫の樣に言ひ顯すにも所詮及はぬが。

かれの栖家は、丁度このデットロウの大沼と、こゝから四英里ほど先きで、太平洋の入り込んで居る海に這入る、隨分大きな河との間に當つて、綺麗な入江の西南の界になつて居る、纖長い沙勝ちな半島の上で、外の此河に傍うた人家とは、一時程計り離れて居た。家は小さい板小屋で、丈夫な柱の上に据ゑてあつた。柱は此家を二三尺ほど澤の上へ浮かせて居た。かれの亭主は木樵りで大工、材木を仕立てゝ積み出すを主な仕事にして居る土地では、中々巓のある職人であつた。

春の始めの事、夫は何時もの通り、高潮の引くを便に、材木を筏に仕立てゝ、入江の彼方まで漕ぎに出た。その出て行くを見送つて、小屋の前に立つて居るとき、西南の天を見れば、黒い處が見えた。その時夫は友を促がして、西南のあらしが出し拔けに來ぬ内に急げというたのを聞いた。

この夜風が出て、つひに逢はぬ劇しい暴風になつた。河に近い森の大木は、幾つともなく根こぎに

せられ、家のふるふことは、小兒を戯せてゆさぶる船底の籠の様であつた。
恐ろしいまで暴風は吹ゆるが、かれは安心して居た。自分の信じて居る人が、手づから固めた家の戸前、又た若し少しでもあぶないと思ふことがあつたなら、何うしてあの人が獨り殘して往かう。かう確かに思ふことと、小さい病氣勝ちな兒の守に氣を取られて、心は天氣の事を餘所にして仕まつた。唯だ氣がゝりなは、あの人はあの筏と諸共に、下手のエトピヤに着いたかと思ふことばかり。然しかれが庭鳥に物をやり、犢牛の様子を見やうとして出た頃には、波は小さい庭の垣根まで寄せて居て、一里も遠いに、南の岸のあら波の哮ける聲が、手に取るやうに聞えたから、誰かこの心細さを話す人もあつたらと思つた。若し暴風がこれ程でなく、路もこれほど遠く、又これほどに惡くなくば、乾度見を連れて、あのライクマン、一番近いライクマンの所へ往かうに、いや、若しさうしたら、あの人が濡れに濡れて、暴風を侵して歸つて來たときに、誰が世話をして遣らう、それに又た小供は少し咳もするし、一躰弱々しいから、あの長い道を連れて行くも恐るからうから。かう思つて抑へて居た。

さて夜に入つてからは、何故だか少しも知れぬが、どうも寐られぬ、いや、横にあらうとも思はれぬ。暴風は少し止んだが、かれは起きて坐つて居て、少し何か讀まうかと迄思つた。私はかれがこの時に見た本は聖書であつたか、又たは世の中の本であつたか知らぬが、思ふに大抵世の中の本であつたらう。何故といふに、本の中の言葉は、ゆら〳〵と一團になつて妙な形を見するで、仕舞には是非なくそれを措いて、目の前の籠の中に寐て居る、直打のある本の方へ向いたといふから。この本のはじめの一枚はまだ清淨で、少しの穢もない。かれはその秘密な將來のことが見えはせぬかと、

のぞいて見やうとした。この籠を動りながら、何やかや考へて居たが、どうも眠られぬ。最う十二時でもあつたらう、かれが丸で衣を着たまゝで、床の上に仆れたのは。何時寐たか、知らなかつたが、目の醒めた時には、頸に何か知らず苦しい覺えがあつて、息がつまるかと思つた。正氣にあつた折には、手足が慄ひながらも、わが子を胸に緊り抑し附けて、何か自分に聲を立てゝ、部屋の眞中に立つて居た。子がむつかり始むるから、賺さうと思つて部屋の中をあちこちと歩くとき、戶にがた〳〵と捼る音がした。こは〳〵乍ら明けて見て喜んだ。びしよ濡れになつて這入つて來たは、年ごろ飼ひならしてあるピイトルといふ犬であつたから。この時、夫が戻らうとは思はないが、天氣の樣子が見たいから、外を覗かうとした。然し風の强さは、戶も押へ切れぬほどだから止めた。さて少しの間は靜かに坐つて居たが、又た橫になつた。小さい家のとだから、壁から遠くもない耳に聞ゆるものは、度々そつと、ゆつくりと、何か戶に捼る音、丁度戶の外がはを木の枝でもかするやうに。その內まづかに、ぐび〳〵といふ樣な音がして來た、丁度小供が乳を飮む時のやうに。その內この聲がごぼ〳〵といふやうになつたから、床の上で起き上つた。この機會に不圖氣が付いて見れば、裏の戶の所から、部屋の眞中へ向つて、這つて來るものがあつて、初の內は自分の指ほどに見えたが、直ぐに手の掌ほどに擴り、段々に床一つぱいになつた。這つて來たのは水であつた。

表口に驅けて往つて、細目に引きあけて見れば、水ばかり、裏の戶を開けて見てもまた水ばかり、又橫の窓を開けて見ても水ばかりだ。亭主が兼て、潮はおそろしいものではない、時が來れば引いてしまうから、それで河のはたに住むよりは、入江に住む方が氣樂ぢやといつた。今のは潮であら

うかと、又後の戸をあけて、薪を一本投げて見た。薪は却つて入江の方へ流れた。水を手の掌に掬んで、唇にあてゝ見た。水は冷く甘ひ。あゝ、家に寄せて來たのは潮ではない、川の水であつた。女房は倒れたが、仕合せと氣は確であつた。神もこのふびんなものを助けたであらう。かれがおそろしいと思つた心は着ものを脫ぐやうに失せて、ふるひさへ止まつて仕まつた。

臥床を部屋の眞中に出して、机をその上に載せて、そのまた上に小供の入れてある搖籃を据ゑた。家の中の水は、はや踝まで屆いて、家が風にゆすられて、水勢が强く寄するために、押し入れの開き戸は獨りでにあいた。又戸の外がはをこするやうな音がするからのぞいて見れば、水上の方の牧場の畫頭に立つて居た柳の大木が倒れて流れて來たのであつた。仕合せと長い根が水底を引きずつて來たから、流れにつれて、早く家を擡かなかつたが、さうでなかつたら、家はこの一擡きにこらふることは出來なかつたらう。犬は床の水で濡れて居たが、今柳の木の流れついたのを見ると、幹の上に這ひあがつて、根に近い處へいつて、身慄ひをしながら横になつた。この時女房が心に、一條の望が起つたから、急いで焚さうな蒲團を臥床から引きおろして、子をその中に包んで、段々に高うなる鋪板の上の水をかちわたりして、木の上に乘つて、犬の居る側へ坐らうとした。この時木は又家を一擡き擡いて、めり〳〵と音をさせた。女房は片手に木の根を握んで、片手で泣き出す小供をしつかり抱いて居た。この時家の前の戸が、又めり〳〵といふと思ふと、今出た家は前の方に傾いた。丁度その樣子は牝牛が踩やうと思ふをりに、前脚を折つたやうであつた。これと一所に柳の樹はぐるりと半分廻つて、生きた獲ものを載せたまゝに、波につれて漂ひ出した、行く先きは眞黒の夜だに。

風はいよ／＼吹えて、抱いて居る子を驚かすにも、中々骨は折れたが、波に任せた家の方を、最う一度ふり向いて見た。この大變の最中に、かうもつまらない心が起るものか、この時、ふと家の中に殘して置いた衣と小供のためにこしらへた晴衣の事を思ひ出して、持つて來れば善かつたと思つた。家もまた丸で跡もなくなつてしまつては困る。夫が戻つて來て何もなかつたら、さぞ力を落さう。それに女房や子の行方をどうして知らうか。こゝまで思ふと、胸が一ぱいになつた。しかし中々今は歎いて居られる處でない。柳の木は物に中るたびに、ぐる／＼廻るので、最う二度まで眞黑い水が體にふれた。犬は始終幹の上をあちこちと歩いて居たが、とう／＼落ちた。暫くの間は木の側を泳いで居たから、扶けて上げてやらうと思つたが、犬も一所懸命になつて、却つて馬鹿な振りをするので心に任せず、とかくするうちに姿を見失つた。

今は柳にすがつて漂つて居るものは、自分と小供とばかり。みかへれば今まで燃えて居た小屋のあかりが忽ち消えて、それからは方角もわからず。

をり／＼人の呼ぶ聲、牛や羊の鳴く聲がするかと思うて耳を傾けたが、耳が鳴るのと動氣の響くのであつた。ふと氣がついて見れば、身内は凍え切つて、挣きも不自由になつて居た。抱いて居る小供がこの時泣きだして止めないから、何故かと考へて乳の枯れたとに氣がついたので、張りつめた氣が弱つた。女房はこのをり始めて泣いた。

頭を擧げて見れば、流が大さうゆるうなつたから、手に掬つて嘗めて見ると、涙のやうに鹹つぱい。こゝは潮だ。木のかたがはにあたる水も、今はさゞあみを打つばかり。その外はすべて一面に黒く、その靜な樣子は、丸で墓の中のやうだ。女房は小供にものをいひはじめた、唯だ自分の聲を聞いて、

まだ喉が潰れないといふことが知りたさに。この時目前の危ふさが游らぐと一所に心に浮んだは、ノアの舟が亞細亞の山の上に止まつたをりの事と、沈む船の帆檣につかまつて居たといふ舟人の事と、筏の上に載つて波に打たれたといふ女の事とであつた。それまでの危ふさに遭はなかつたのが有りがたいと神を拜んで、ふと見れば南の方に大きな火の光がゆらゆらと見えた。かれが胸は冷い小兒の頰にふれて劇しく跳つた。見えたのは入江の口の燈明臺であつた。かれは驚いて見て居るうちに、木が少しかしいで物にさはつてずるゝかと思ふと、その儘止まつた。燈明臺の方角から推して見れば、こゝはデットロウの沼であつた。

小供の病氣と自分の乳の枯れたとだになかつたら、さぞ女房の心はこの時に落付いたとであらう。水が早く引きかゝると、一群の鴈が鳴きながら目の前を横切つた。その内に鴫の一群が來て、乘つて居る柳の木の周圍を、悲しげになきながら廻つて居たが、灰色の雲がおつるやうに、怖れげもなく枝にとまつた。程なく又騷がしさうに鷺が一四頭の上を飛んで來て、少し前の水の中に、長い、瘦せた足をおろした。

一番不思議な身振をしたのは奇麗な白い鳥で、(これは「ペリカン」に似て居たが、「ペリカン」ではなかつた)始は此柳の木の周圍に輪をかいて居たが、段々に近寄つて來て、丁度女房の肩の上の處の根の枝に止まつた。手を伸ばして白い頸をさすつてやるに、驚く樣子もなく、その儘に止まつて居た。餘り面白いから赤ん坊に見せたいと思つて、抱きあげて見ると驚いた。その筈子供はつめたくあつて、節々も剛くなり、目はふさいだまゝで、緣に靑い輪が見えたから。女房は驚いて大聲をあげると、鳥はこれに驚いて飛んで往つた。女房はそのまゝ暫しの間氣を失つて居た。

氣が付いたをりには、日が明く照つて居て、潮の引き盡した跡に、焚き付けた火が燃えあがつて居た。耳もとを續つて聞えるのは、一種の喉音で、これは年寄つた一人の「スカウ」(「インヂヤン」人種の女)が「アイヤポペイヤ」を歌ふのであつた。子供はと問はうとすると、早く其心を悟つた女は、籃に入れた子を持つて來て見せた。丁度「インヂヤン」人が子供を入るゝ、柳の枝で編んだ籃の中に、色は蒼ざめたが、生きて我子は居つた。「スカウ」が白い齒をむき出して、「小さい『モ井ッチユ』(小兒)はすぐに丈夫になる、旦那は今來やう」といふのを聞いた、そのうれしさ、黒い「スカウ」の顏を嘗めてやりたいほど。後に聞けば、この「スカウ」は籃を持つて覆盆子をさがしに來て、木の枝にかゝつて風に吹かれて居る衣を見つけ、ほしさに近寄つて親子を見付けたのであつた。程なく夫が「スカウ」の亭主にユトピヤで逢つて、樣子を聞いてから、こゝへ來て迎へ取つた。衣は勿論「スカウ」が貰つた。

夫は喜んで妻を「カノエ」に抱き戴せて歸つたが、程なくかの柳の大木を挽いて還つて、新しく作る家の大黒柱に据ゑた。これにつけた名は「マリヤが船」といつた。こん度の家の地面は、洪水の屆かない高い處であつたとはいふまでもなからう。

話はこれぎりだ。この意味を充分にのみこむには、二度や三度はデットロウの沼を滿潮のとき漕ぎめぐり、又た引潮にも沼地をさまよひ、霧の中で夜をも明かした上でなくば無理だらう。

綠葉歎

重傷を負うた亞非利加獵兵聯隊の軍曹カドユウル、ベン、ゲリツフアをザウエルバツハの百姓リツ

ペルトの家へ擔ぎ込んだは、丁度五週間程前であつた。彼は始終人事不省で、熱度が高く、久しく生死の海に漂うて居つた。そして譫語を云ふを聞けば、いつもワイセンブルクの麻畑の上で戰つて居る話でなくば、故郷のアルジエリヤで村長をして居る「マトマタ」種の所に歸つて居る話であつた。

やつと今日始めて目を見開いて驚いた。まだ見た事のない大きな室の窓には、白い布が懸つて居つて、雲の間から折々漏れて來る日の光を最一度遮つて居つた。窓の前にはおほきな木があつて綠の枝をこちらへ延ばして居つた。また寢床の側に居るのは物靜な看病婦で、着物を見れば病院で介抱する尼とは違ひ、顏に綱もかけず、珠數も持たぬ。その交りには、襟に銀の十字形の飾をかけて居つて、俯いた所を見れば、二つに分けて編んだ髮が長く腰まで垂れて居た。隣の室でケエテ〳〵と呼ぶ聲がすると、娘はそつと足の爪先で立上がり、音のせぬ樣に出て行き、靜かに物を言ふを聞けば、その話聲がとんと銀の鈴でも振る樣であつた。その度毎にカドユウルがあゝいゝ聲だと思つた。

リツペルトの一家で、よく看病して、よく躱つたので、鷹の目の樣に鋭いプロイスの探偵の目に掛らなんだから、仕合せと隊の仲間と一所に、マインツの土の牢に打込まれなかつた。其中病氣が段々と癒つて來て、物が云はるゝ樣になり、時々笑ふ時に見ゆる齒は、色が黑いで尚ほ目立つて白く見えた。暫くして立つて歩かるゝ樣になり、手を繃帶で吊つた儘軍服の片袖丈を肩に通さずにぶら下げて歩いた。

其後リツペルトの庭を散歩せらるゝ樣になつたから、をり〳〵散歩に出た。その度にケエテは籐の

椅子を持つて來て、日中りの好い處に据ゑて休ませた。カドユウルは村長の子丈あつて、亞拉比亞高等學校で佛蘭西語も少しは習つて居たから、ケエテと片語雜りには話が出來た。話をして見て、カドユウルは心の中に此娘は空氣の中を自由に飛び行く鳥の様だと考へた。考へたのも無理はない。カドユウルが故郷で見慣れた女は、皆んな白い網で顔を裹んで、男の目に觸れぬ用心をして居る上に、宗旨の習慣で女は鐵の格子の内に居る位だから、ケエテの様なのは珍しい、珍らしいと思つて見る内に、何となく見るのが嬉しくなつて來た。

ケエテの方では、カドユウルさんはちと色が黒いとは思つたが、あんなに心立の善い、あんなに勇氣のある、あんなにプロイスを憎む人だから、隨分惡くはない、だが人の話にアルジエリヤでは男が一人で女房を澤山持つと云ふことだが、眞實かもしらんと心配した。

或る日カドユウルはケエテをからかつて居る折に、「私は國へ歸れば、女房を四人持つ積りだ、四人だよ、」と云ふと、ケエテは「嫌なカドユウルさんだ、」と氣色を變へて怒つた。カドユウルは其顔を見て、吹き出して笑つたが、不圖何か思ひ出した様に眞面目になつた。そしてケエテの顔を大きな目を開いて見詰めた。その見方が何んだか人に別るゝときに顔を覺えて置かうと思つて見る様であつた。是れがカドユウルとケエテとの戀の始であつた。

カドユウルは病氣が痊つたから國へ歸つた。此事が聞ゆると、「マトマタ」種の總代がカドユウルを迎ふる爲に、笛太鼓を鳴らして村の入口まで出た。一同に取卷かれて息子の歸つて來るを、門口に立つて見て居る親は、一旦死んだと思つた息子の事だから、覺えず目に涙を浮かべて身を慄はせた。是時から彼處の祭、此處の祝と招かるゝで、一月計りは夢の間に立つて仕舞つた。カドユウルの戰

話は一頃此村の珈琲店で絶えなかつた。

あゝ、面白くない。何處の祭も詰らない。親の家に昔し居つたときは、欲しいものは何んでもある。こんな愉快な事はないと思つて居つた。今でも矢張馬でも獵犬でも、銃でも、何でも欲しい者はある。万事昔の通だに、こんなに面白くないと云ふは、何が不足なのかしらん。カドユウルは自分では自分の心が未練だと云ふことを、成丈確めまいと思つた。然しどうしても確めねばならぬ樣になつた。全く未練なのだ。カドユウルが足らない樣に思ふは、あの銀の鈴を振る樣な笑聲に違ない。亞剌亞種の娘の小聲で高低のない話を聞くと、昔しは何となく胸がどき〳〵したが、今では何となく脇を向きたくなつた。あゝ、五月蠅い聲だ。それに何であんな花を髮の中へ編み込んで居るのかしらん。「ジヤスマン」花の臭いのは實に閉口だ。あの赤い絹の袴は全躰何の眞似だらう。あの珠の鎖も外に使ひ道がありさうな物だ。あの鎖を、あの金の絲で編んだ樣に見えて、日の當る處ではきら〳〵と光つて腰まで屆いだ髮に掛けたらどんなだらう。カドユウルは氣が附かぬが隣村の村長の家の前を通る度に、鐵の格子の嵌つた窓から眞黒な目が二つ覗く。然しカドユウルの聲は思ひ、夜は夢に見る目は、此れとは丸で違つた、嬉しさうな、苦のなささうな、晴れた空の樣な、青い目であつた。何時も床で寐て居ると、何か不自由な物が有りはせぬかと見廻りに來た時の目は、實に可愛かつた、あの目は親切な目であつた。

然し青い目の魔力は段々衰へた。さうして見ると少しは病氣の痊り掛つた時の心細いと思ふ弱みと、アルサスの温和な天氣が青い目の魔力を助けて居たかも知れぬ。カドユウルは暫くするとゲエテの事を忘れて仕舞つた。

カドユウルと隣村の村長の娘ヤミイナとの婚姻が程なくあるさうだと、近村では大評判をして居るとき、カドユウルは親と婚禮の時の贈ものを買ひに都へ行つて、金銀や玉を織り綴つた絹や、美しい花を縫うたスミルナの敷物や、首に掛くる鎖や、耳に掛くる環を、かれこれと撰つて買つた。此時は此買物を少しも早くヤミイナに遣りたいとは思つたが、ケエテと云ふ名は最早一度も心に浮ばなんだ。

日の西山に傾くころに、數頭の驢馬に積載せた貨物を宰領して、親子は故鄕の村へ歸つた。此時横街へ曲り掛つて見ると、大さう人立がして居つた。此處は亞剌比亞役所と云つて、歐羅巴から來た移住民の世話をする所で、今日はアルサスから移住民が來たが、役所では何んにも待受をしなかつたと見えて、來た移住民が役所の前に集つて、皆んな不足を言つて居る、その中には泣くものもあり、永の旅で勞れた老人や女小供は、路の傍へ少しの荷物を置いて、それに凭り掛つて休んで居つた。近處の人は珍らしさうに集つて來て、色の白い歐羅巴人を見て、噪囃と罵つて居たが、心細い移住民の爲には、實に氣の毒な事だつた。その中に日が段々暮て來た。カドユウルは驢馬がある故、漸うに人の中を通り抜くる間に、移住民の顏を見ながら來たが、卒に駭然して胸がどきどきした。晝は思ひ、夜は夢に見たケエテの姿が見えた。他人の空似か知らん。いやいや、あの側に居るはリッペルト親父だ。おや母親も居た。其筈だ、リッペルトの一家は揃つて移住したのだ。今はザウエルパッハの水は、空しく住み棄てた家の前を流るゝばかりでっ

「おやカドユウルさん。」

「おやケエテさん。」

と云つたとき男は眞著に成つた。女は少し赤くなつた。

「まあ私と一所にお出なさるが好い。私の地面は廣いから、お前方が一家内位は家を建つて住つても差支ない。」

ケエテの母は此聲を聞いて、いそ〳〵と荷物を纏めた。カドユウルは自分の乘つて居る驢馬から下りて、それにケエテを載せた。亞剌比亞の鞍に乘つたからケエテは思はず吹き出して笑つた。「あゝあの聲だ。」カドユウルは附合に笑つたが、我ながら不思議な聲であつた。夜は寒くなると思つて、今日買つた珠を織込んだ絹を出して、ケエテに着せた。此絹を體へ卷いて驢馬の背中につんと澄まして乘つた姿は、色が白くて髮の毛が金色な計り、顏の網を除けた亞剌比亞種の女の樣に見えた。あゝ隣村の娘をばいつその事に斷つて、此可愛いケエテを女房に持たうか知らん。若し村で矢釜しけりや、夫婦で市に出ても濟む事だ。其時は村邊の森の間を唯だ二人で行かう、其時は矢張こんな笑顏をして、驢馬に乘つて居るだらう。おれは今の樣に驢馬の轡を取つてやらう。

カドユウルは夢の樣な事を思つて居たが、氣が附いて驢馬を牽き出さうと思つて、「もう徐々行かうではないか。」と云つた時に、ケエテは優い聲をして耻かしさうに。

「まあ待つて下さりませ。今彼處の役所からやどがまゐりまするから。」

カドユウルのふびんさ。

玉を懷いて罪あり

路易第十四世の寵愛が、メンドノン公爵夫人の一身に萃まつて世人の目を驚かした頃、宮中に出入

をする年寄つた女學士にマグダレエン、ド、スキユデリイと云ふ人があつた。丁度千六百八十年の秋の事で、或る夜の十二時過ぎに、其女學士が住つて居るセントノレイ町の家の戸を劇しく敲くものがあつた。其夜下男のバプチストは妹の婚禮に招ばれて行つてまだ歸らず、家の內で目を醒まして編物をして居たは仲働きのマルチニヽルといふものであつたが、今此響を聞くと、何となく怖氣立ち、急に自分と主人と女二人で家に居ることに氣が付き、昔から巴里であつた人殺しや、押込の怖い話が皆一時に胸に浮んで、只慄々と震ひ乍ら室の片隅に蹲んで居た。戸を敲く音は段々劇しく成つて、それに時々男の聲で、早く此處を開けて下さい、後生だからと云ふを聞付けて、仲働きは少し考へたが、それでは主人が不斷から親切なのを聞いて居て、難義を助けて貰ひに、態々來た人かも知れぬ、然し物は用心が第一だからと、立上つて徐々と行き、窻の戸を半分開けて成丈男らしい聲をして、何故夜中になつて人の家の戸を敲いて、高聲をするのだ、と問ひながら、今雲の間から少し顏を出した月影に透かして見ると、灰色の長外套を着て、緣の廣い帽子を目深に被つた男が戸の前に立つて居た。仲働きは一層聲を張上げて、居もせぬ下男の名を呼び立てゝ、バプチストや、クラウドや、ピエエルや、誰れか早く起きて出て、戸を打ち破されない中に亂暴人を逐ひ歸してしまへ、と云ふと、外に立て居る男は、下から優しい、哀れな聲をして。さう云ふはマルチニヽルさんの聲ぢやあいか。私は貴君が御主人と唯二人で御出のことは、よく知つて居ます。何も怖いものではありません。唯御主人に御目に掛つてお話をせねばならぬ事があるのです。と云ふを聞いて、マルチニヽルは少しは心が落付いたから、窻から顏を出して、お前さん、何の御用だか知りませんが、御主人は先刻お休みなさつたから、明日出直してお出なさい、と云ふと下から。そんな僞をお

吐きなさるな。御主人樣の漸つとお作り掛けの小説を下に釋いて明日メントノン公爵夫人に讀んでお聞かせなさる歌の草稿に、お手をお入なさる處なのも熟く知つて居り升。私の用は人の名譽、どうかすると人一人の命に掛る事で。後生ですから戸を開けて下さい。若し後で御主人が私の一件を聞いて、貴君が戸を開けない計に、不幸に陷つたと御思召すと、却て貴君をお憎みでせう。と云言葉の中に、涙に咽んで居る樣子。マルチエヽルも何となく此年若な男の聲が胸に響く樣に覺えたから、急いで錠を持出して入口の戸を推開けた。開くるが早いか、外套を着た男は家の內に飛び込んで、遽たゞしい聲で、早く奧へ案內しないか、と云ひながら、仲働きを撞き倒しさうな勢で、奧へ行かうとするから、マルチエヽルは驚きながら、手燭を差出して顏を見て、あつと云つて震ひ出した。震ひ出した筈だ、此の男の顏は色蒼ざめて、何となく物凄く、その上外套の前の少し開いた處から、ちらりと見えたのは衣の胸に挿してある匕首の柄であつたから。此時男はきら〱と光る眼を見張つて、早く〱と催促した。マルチエヽルは年頃マグダレエンに仕へて、眞實の母の樣に思つて居る程だから、今は主人の一大事だと、屹度思案を定めて、部屋の方へ行く戸を後手で確り押さへ、男の前に立ち塞がつた。まあ、お前は何者だ。外ではあんな哀れな聲を仕て、這入てから無理に奧へ行かうとは、大方グレエウ巷で死耻を曝す人だらう。どうでも行く氣なら、私を殺してお仕舞ひ。中々動く氣色が無いので、男は倚々急き込んで。あゝ、焦燥つたい。然し私がこんな形をして居るから、成程推込み、强盜と。かういふ內も時が立つ。一寸奧へ。と云ひながら、胸に挿して居た匕首を抽き出して手に持つた。マルチエヽルは最う命はないものと覺悟をした時、表の方に其頃「マレショツセイ」と云ふ邏卒が此街を通ると見え、馬の足音と器械の響とが聞えた。これを聞

くとマルチエ、ルは生き返つた心地で「マレショッセイ」さん〳〵、人殺し〳〵と大聲で叫んだ。男は左も口惜しさうに、えゝ、所詮望は叶はぬか、あゝ、是迄だ、と云ひながら、隙を見てマルチエ、ルの持つて居た手燭を取つて振り消し、小い筐の樣な物を、マルチエ、ルの手に推付けて、そんならこれを今夜の内に、せめて奥へ、所詮あきらめたから、明日でも、といふ言葉も終らぬ中に、表へ驅出して逃げて仕舞つた。

マルチエ、ルは先刻からの心配と骨折とで、躰が非常に勞れて、足腰も立ぬ位だから、戸の鍵を錠の孔にさした儘で、それを拔く力もなく、這ふ樣にして自分の部屋に戻つて仆れて居ると、卒に門の戸の開く音がして、締めて置いた鍵を拔き取ると見え、戛然と鳴るかと思ふと、程なく錠をかける音がして、拔足に近寄る者があるが、マルチエ、ルは最う腰は立たず、唯慄つて居ると、這入て來たのはバプチストであつた。甚く驚いたものと見えて、顔の色が變り、息を切らして居つた。おゝ、お前に變はなかつたか。家の前で「マレショッセイ」の一組に逢つたが、何時もと違つて嚴重に物の具を付けて居つて、おれを取り卷いた。仕合せと警部のデグレエさんが居たので、釋して貰つて家へ這入らうとする機會に、匕首を持つた男が飛び出して、おれを突き仆して逃げた。鍵は指してあり、戸は開けてある。それにお前は何うしたのだ。御主人樣に變はないか。と問ふ内にマルチエ、ルは漸う人心地が附いて、前の次第を話した。二人連立つて室の外まで出て見るに落ちて居る手燭の外には何んにもなかつた。

マグダレエンの家の奴婢が心配したのも無理ではない。其頃巴里に怪しい死樣をするものがあるので、府中の人心が恟々として居た。何者の仕業か知れぬが、金銀や、珠玉の飾を持つたものは、何

時となく盗み取られ、又た飾を持つて日暮から後に歩行くものは、多く殺された。此難に逢うて飾は取られたが、不思議と命を拾つた人の話に、何心なく道を行くと、突然頭を強く打たれ、其儘仆れて氣を失ひ、暫くして心付いて見れば、遙か離れた町に居て飾はなかつたといふ。家の中で殺されたものも、途で殺されたものも、撿屍の時に見ると、皆んな唯つた一つの突創が胸に在るばかり。解剖して見れば、心の臓が差し貫ぬかれてある。何にせよ畏ろしい手練と見えた。當時法蘭西上流の紳士は、路易第十四世を手本にして、惡い風儀になつて居つた。密夫のない婦人と情婦のない男子とは人に侮らるゝ程であつた。男が飾を持つて女の許へ忍ばうと思つて、途で殺され、又は女の家へ首尾好く忍び込み、廊下で殺されたのを、知らずに女が部屋から出たとき、情人の死骸に躓いたことが數々あつた。

當時の警視總監のアルジヤンソンも、其前流行した毒殺事件の裁判をする爲めに立てられた「シャンブル、アルダント」の頭レニイも犯罪者の蹤跡がとんと知れぬには困り果てゝ居て、盗まれた飾は巴里中の飾屋を穿鑿しても見付からなかつた。

デグレエと云ふ探偵自慢の警部も、今度こそ彼の男も手を引いたと云はれまいと、有丈の智恵を絞り出して、血眼に成つて探したが、自分の見廻る町には、何時も何事もなく、遙か隔つた巷で相變らず不思議な横死があつた。又た工夫して僞デグレエを澤山製へて、方々の町に配つて、自分は常の服で飾を持つて歩く人の跟に付いて歩行いて見たが、自分の付いて行く人丈、何時も無難で、人殺しは外にあるから、此策略も賊が知つて居るやうだ。

或る朝レニイは漸く床から起きたとき、警部デグレエが色青ざめて驅け込で來た。夕べは例の曲者

につひ〳〵出つくはしました。レニイは手を拍つて喜んだ。それは善い事をした。最う曲者は此方の物だらう。デグレヱは口惜しさうお顔をして。所が何うも、實に殘念です。昨夕夜中過に、ルゥブルの近處に立つて居るところへ、臆病らしい男が、跡を見反へり〳〵通り過ぐるを、朧な月明りに透かして見れば、待つて居たデ、ヲ、フアヽル公で。公が飾を持つて昨夕忍んで行くことは、疾つくに嗅ぎ出して置きました。公はまだ一町も行き過ぎぬとき、片影から稻妻の樣に飛び出した奴があつて、見る間に公を擲き倒して、隱しに入れてあつた飾を取るや否や、颶風の樣に逃出す。私は直に飛び出さうとする機會に、何時にない泡を食つて、石に跌いて顚びました。起き上つて追つ掛け乍ら、呌子を吹くと、彼處是處から笛で答へ。馬の足音、器械の響がする。驅乍らデグレヱだ。此處だ此處だ。逃がすな。と町々へ鳴り渡る樣に呼びました。曲者が半町許り先きに逃ぐるは、月明りがあるから始終見えて居て。ニセヱス町まで來たとき、曲者も少し疲れた事か、足を緩めたから、距離が十步程に成りました。レニイは目を段々見張つて聞いて居たが、覺えずデグレヱの肩を押へた。其曲者をお前の手際で。私も最う緊めたと思ひましたが、御存の通り、あの間に膽大職人や、店を張らない小商人の家があつて、石垣があります。曲者が石垣に身を寄せたと思ふと、つひ消えて仕舞ひました。なに消えて仕舞つたとは。お前は氣でも違ひはしないか。私も自分で氣が違ひはせぬかと思つた位で御座りました。其内に仲間の邏卒は諸方から集つて來、デ、ヲ、フアヽル公も拔刀で追つ驅けて來られ、松火で石垣を彼處此處と改めても、戶も窓も孔もありませなんだ。此話は巴里中に廣がつた。繪草紙屋の店には、呆れて手を張つて居るデグレヱの目の前で地中に半分埋まり掛つた畏ろしい顏の鬼の霤を掛けて賣り出した。夜途を步くものは、邏卒計で、

それさへ「アミュレット」(お守り)を胸に懸け祈禱の水を被びて、怖々に歩くのだから、職分を盡す所ではない。

總監アルシャンソンは氣を揉んで、「シャンブル、アルダント」を最う少し嚴重にした樣な役所を立てやうと國王に願つたが、國王は「シャンブル、アルダント」にすら權限を許し過ぎたと思つて居ることだから、聞居けなかつた。

世の人は王の心を動かす道を餘所に求めた。王は午後になれば愛妃メントノンの宮居の一間で、大臣杯をも是所に呼び集へ、夜深くるまでも、政事を談じて居つたが、或る日是處へ長篇の詩を上つたものがあつた。詩の作者は不幸なる戀人としてあつて、己れの愛する美人に贈ものをしたくても、怪しき賊の爲めに心に任せぬ。美人の爲めには矢石劍鉾をも犯かすは男の務だが、暗打ちに逢ふは本意でない。愛情の泰斗と仰がるゝ國王が、何時も外寇を破ぶる武勇の手で、ヘルキュレスが多首の大蛇、テゼウスが半人半牛の妖怪を滅ぼしたやうに、怪しい曲者を退治して、情世界の中與の祖とは何故仰がれないか。

國王は讀み畢つて、メントノンの意見を問うた。メントノンは詩の心は兎も角も、曲者の探索を充分にしたら善からうと生返事をした。王は少し不滿足らしく顏を蹙めて、隣の間に居る內閣書記官に詩の卷を交付さうと思つて行き掛るとき、メントノンの側の小い椅子に坐つて居る女學士のスキュデリイに目を注いだ。

王は口の周と頰の邊とに笑を見せて、女學士の側につか／＼と歩み寄り、詩の卷を開いて。メントノンは途あらぬ戀は助けずともと思ふと見ゆるが、學士は何う思はるゝか。マグダレエンは椅子を

立ち上つて頭を少し下げたときに、夕日の光の様に顔を少し赤くして、笑を含んで。

人目を忍ぶ通ひ路に、寄る白波避くといへば、思の海に浮き沈み、慕ふ甲斐こそなかりけれ。

文飾を費やした長篇の光は、此簡勁なる女學士の歌に消されて仕舞つた。

篋に入れた秘密を持つて、翌朝主人の室に這入つた仲働きのマルチエヽルは、まだ惴々と震ひ乍ら、心配しつゝ踵て來た下男のバプチストは手に持つて居る帽子を揉みながら、頻りに主人に用心を勸めた。

疑心暗鬼とはお前達の事。此年になる迄、自分で造つた小説の中の人の外をば、困めた事もない私の處へ、殺しに來る人があるものかね。又た盜みには、少し計りの金字を入れた書物計の私の室へ、誰れが這入るものかね。どれ、篋を。と開け掛けた女學士の平氣な樣子に引き代へて、下女、下男は覺えず三足程後へ下つた。

篋から出たのは金銀珠玉で惜氣もなく飾つた首飾と腕環とで手に持つたとき、窓から指し入れた旭の光で、燦爛と光を發つた。仲働きは覺えず進み出て。まあ、綺麗な飾では御座りませんか。あの持物自慢のモンデスパンさんでも此樣な飾はお持ちなさりますまい。マグダレエンは篋の底に疊んだ紙のあるに氣が付いた。これを見たら樣子が知れやう、と讀むや否や、あつと云つたぎり、椅子に仆れ掛つて暫く氣が遠くなつて居たが、少し氣が付いて、口の内で。心ともあく詠んだ歌を、世間で彼此云つたならどう言譯が。

マグダレエンの樣子に驚いた仲働きは落ちた紙を取上げて見ると、その文言は。

人目を忍ぶ通ひ路に、寄る白波よくといへば、思の海に浮き沈み、慕ふ甲斐こそなかりけれ。

慕ふ甲斐なしと御仰有之候、弱く卑怯なる人々の手に置きても無益なる飾を奪取候は私共に御座候。御歌の御蔭にて嚴重なる上の探偵を免かれ候段、難有奉存候。御禮の印迄に此飾御受納被下度、尙後々迄も私共の事御忘れなく、御眷顧の程奉願候。

マグダレエンは漸く心を落ち付けて、仲働きに云ひ付けて、衣を出させ直に被替へて車に乘つて、メントノン夫人の所へ行つた。夫人は何時になく女學士の氣色が好くないから怪んで仔細を尋ねた。女學士は一部始終を話して、首飾と腕環とを出して見せた。飾を手に受取つた公爵夫人は、持つて窓の下に行つて、日に照して鎖に繋いである鈎を一々改めて驚いた。此程の價値のある仕事は、流石者に耽つて居る巴里の貴夫人でも見たことがなかつた。夫人は熟々見て居たが、急に振り向いて。此程の仕事をするものは、今の世にレチエ、カルヂリヤツクの外にはありますまい。

カルヂリヤツクはその頃巴里の飾職の中で、第一等の地位を占めて居つた。高妙な技藝を能する人物には善くある事で、カルヂリヤツクが畸人だと云ふ噂は、其妙藝の名と共に高かつた。通常と云ふよりは寧ろ大きい方の男で、肩が廣く、筋肉が逞しく、五十を踰えた年で居ながら、輕捷なことは少年にも劣らなかつた。唯頭髮が赤く、目が綠色に光つて居るので、何んとなく怖い樣だけれど、貧民を憐れむことと抔は人より深いから、評判が好かつた。カルヂリヤツクの技藝は寶石の天性を識破することに基くと、具眼の人は云うた。晝夜を別たず勉強してカルヂリヤツクの仕事部屋には槌の音が斷えない。一番感心な所は數日間骨折つた仕事でも、氣に入らぬ所があると、直に鎔鑪に打込んで仕舞ふのであつた。

カルヂリヤックに仕事を頼むは易いが、カルヂリヤックから出來上つた品物を受取るはむづかしい。金錢を貪ぼる性質でないから、貴人の頼でも、貧乏人の頼でも、快く受け合ふが、出來上つて渡す日になると、彼處を直す、此處を直すと猶豫を求め、果は顔色を變へて受取人を罵り、漸々の事で渡して返すことであつた。王侯貴人の頼は時としては强ひて謝絶した。近頃メントノン夫人も文人ラシインに贈らうと思つて指環を頼んだがたつて辭退した。

マグダレエンは夫人の言葉を聞いて喜んだ。飾の製造人が知るれば、それに問うたら持主が知れやうと思ふから、今から徃つてカルヂリヤックに遭はうと云ふと、夫人は止めた。なに、私も樣子が知りたいから、飾職を此處へ呼びませう。又た指環のことだと思ふと來ませんから、誂へ物ではない、鑑定を頼むのだと、使に善く云つて遣りませう。と腰元を呼んで、使の事を言付けた。カルヂリヤックは程なく此間に這入つて來た。女學士を見ると逢ふ積でない人に逢つた故か、少し遽てた樣に、先へ女學士の前で丁寧に拜禮をして、公爵夫人の處に進んだ。夫人は深緑色の机掛けの上で光つて居る飾に指をさして、此の飾は其方の作ではないかと問うた。カルヂリヤックは一目見ると駭然した樣子で、飾を籠へ手早く仕舞つて。此飾が私の作だと云ふことは、御妃の御目では、私に御問なさる迄もなく知れさうなもので御座ります。夫人は親父の顔をきつと見て。それでは誰に頼まれて、此程お仕事をお仕のだえ。と問はれたときに、些しも猶豫せずに。誰にも頼まれは致しません。私が自分の爲めに製へました。兩婦人は齊く飾職の顔を見詰めた。公爵夫人は僞ではないかと云ふ樣な顔をすると、女學士は何んで自分の爲めに製へたかと、說明を待つ樣な顔をした。

御不審は尤ですが、私は飾職には好んでなつた位故、善い寶石をより集めて、時間を措まず此飾を

捺らへたは、一つは自分の樂で御座ります。それにつひ此間何う云ふ譯か、私の仕事場に置いたのが見えなくなりましたから、切角尋ねて居ました所で。此言葉を聞いた女學士は。あゝ、それを聞いて安心しました。と喜びの色を顯はし、身輕に椅子より起ち、飾の這入た筐を、カルヂリヤックの前へ寄せて、飾を獲た歷史を話した。カルヂリヤックは下を視ながら聞いて居て、時々聞えぬ位な聲で。ふん。はあ。などの間投詞を挿んで聞いて仕舞ふと、何か急に思ひ付く事が有つて決斷が出來ぬと云ふ樣な風で、額を摩り、大息を吐きなどしたが、漸く思ひ定めたか、前に在つた筐を把つて、女學士の前で膝を地に撞いた。此飾があなたのお手に入つたのは、何うも不思議で。何う云ふものか、此の飾を製らふる時に、あなたの事が折々心に浮びました。どうか此れは天道さまが彼方へ授けたものだと思つて、取つて置いて下さい。これを聞いたマグダレエンは持前の愛敬を見せて。此の萎びた手首に其腕環を。此の何時も包んで居る頸へ其飾を。どうしてまあ。飾職は此裡立上つて筐を猶も女學士にさし付け目の色をかへて。さう言はずにどうぞお受なさつて。メントノン夫人は見て居たが、筐を間で受取つて。あなたも年を取つた事計り言ひ乍ら、あれ程カルヂリヤックが勸むるに、小娘の樣にはにかんで居ずと、人の志だからお受なさつたらよからう。と無理に手に握らせた。カルヂリヤックはさも嬉し氣に叉た膝を撞いて、女學士の手を吸ひ、涙を流したが、急に立ち上つて、其儘驅け出して歸つた。其劇しい運動の爲に、机の上に列べて有つた杯が相觸れて響を發した。

此れから二三箇月後の事で、女學士はモンタンシエエ公爵夫人の硝子馬車に乘つて、ポン、ニヨッフといふ橋を渡りかゝつた。珍しい馬車を見やうと、橋の上に一つぱい人立がして、暫く馬の足掻

を停めた。此時遽に橋の向ひが騒々しく成つたから、驚いて見ると、一人の男が群集の人を掻き仆す樣に押し分けて、車に近づいて來た。側で見れば色の蒼ざめた若者で、遽たゞしく車の戶に手を掛けて、推し開くるや否、手紙を一本女學士の膝の上に抛げ上げて置いて、直ぐに群集に混ぎれて逃げてしまつた。此男が車の戶を開くると、女學士の側に居た仲働きのマルチエヽルはあつと云つたぎり、氣絕した。これに驚いて、女學士は連りに鈴索を引いたが、御者は何と思つたか、無暗に鞭を馬に加へたから、馬は口の圍りの白泡を振り拂つて、暫く體の前半を持上ぐるかと見えたが、足を速めて驅け出した。

女學士は懐から臭ぎ藥の這入つた瓶を出して、氣絕した仲働きに嗅がせた。仲働きは暫くして漸う目を開き、慄ひ乍ら主人に向ひ。まあ、何といふ怖い人で御坐いませう。あの人で御坐います。先頃の夜筐を持つて參りましたは。女學士はマルチエヽルを樣々に賺しなだめ、受け取つた紙を披いて見れば、其文に。

私儀冥々の裡に御恩を蒙り、御身の上を案じ候事、子の母を思ふよりも切に御坐候。扨先夜御宅迄持參仕候腕環首飾の儀、倘御所持有之候ては、御命にも懸り候禍出來可申候に付、何とか名義を御考被遊至急飾職レチエ、カルヂリヤック方迄御遣し可有之候。若御遲滯被遊候はば、御恩を蒙りし此身、貴君樣の御危難を見るに忍びず候故、明後日の夜半御宅へ參上、御面前にて自殺し相果可申候。

スキユデリイ學士は既に其翌朝飾を持つて、カルヂリヤックの宅まで往かうと思つたが、生憎と詩歌を求むるものが多く、彼此とする內に、早晝近くなり、早やモンタンシエヽ公爵夫人を訪はねば

ならぬ時刻になり、兎角して其日も暮れた。

女學士の目の前には、何時も色の蒼ざめた、目の血走つた彼の若者の顔が見えて居る。此顔は何となく昔から見覺えがあれど、何と思つても思ひ出されぬ。夜になつても穩に眠られず、彼の若者は夢にまで來て救を求めた。何か心の中に人に竭さねばならぬ事を打ち棄てゝ居る樣な。

次の朝女學士は衣服を改め、飾の箱を持つて、飾職の家へ行かうと思ひつゝ、ニセエス町迄來て見ると、町中何となく騷がしく、飾職の家の前には大勢の人が聚つて、がや〳〵と云つてゐるを、邏卒が制して居た。中には其人殺しを引出して殺して仕舞へ等と叫ぶものが有つた。此時俄かに家の戸が明き、警部のデグレエが多人數の邏卒を從へ、一人の男を鎖で縛つて引いて出るを見て、聚つて居る人は皆人殺し〳〵と罵つた。此男が引かれて出るとき、家の內で一聲高く叫ぶ聲がした。女學士はこの躰を見て、若しやと思ひ當る事があるから、頻に御者を促がして、漸々群集の間を通り抜けて、車をカルヂリヤックの家の前に駐めた。見れば今若い男を引て徃かうとするデグレエの膝に縋つて留めやうとして居る一人の娘があつて、髮は解けて亂れ、衣は綻びて雪の膚を露はし、蒼ざめた面に天然の人をうごかす美を備へて居た。無殘な、情ない、罪のないオリ井エヽを。と叫ぶ聲が顫うて言葉が好くは分からぬ。デグレエは振り離さうとしても、仲々離れないから、傍の邏卒が荒呉れた手で、娘の躰を抱いて引き離した。此機會に力が餘つて、娘は家の入口の石段を輾轉と轉がり落ちて、街の敷石の上に俯伏になり、其儘氣を失つて仕舞つた。スキユデリイは見るに忍びないから、手づから車の戸を推し開いて下り立つと、世に知れた女學士の事だから、群集も自然に分かれて、一條の路が開いた。此內物の哀を知つた近所の女が二三人、倒れた娘を抱き起して、石

段に腰を掛けさせ、額を藥水で摩つたから、娘は漸う我に歸つた。女學士は警部に向つて。何事があつて、此騒ぎは。と慌忙しく問ふと、デグレエは落ち付いた顔附き。何事所ぢや御坐りません。カルヂリヤックは今朝刺し殺されて居りました。其人殺しは弟子のオリ井エ、といふもので、今引かせて遣つた處で。そして此の娘は。え丶、これで御坐りまするか。此れはマデロンと云つて殺された飾職の娘で、人殺しのオリ井エ、の情婦で御座ります。やれ罪のないものを引いて行くの、代りに自分を縛れのと、先刻から私共に無益な骨を折らせました。なあに、娘も矢つ張り同類かも知れません。孰れ出る所へ出た上でなけりやあ、眞實の事は分かりません。警部デグレエは斯う答へ乍ら、娘を尻目で見たが、此眼は何うも一通りでなかつた、何うも人の憂を自分の幸に思ふ樣な處があつた。此時娘は漸う息を吹き返したが、まだ手足を動かす事も出來ず、物も言へぬ。唯だ眼を閉ぢた儘で、石段に倚り掛つて居た。スキユデリイは目に憐の涙を含んで、此少女を見て居るとき、又た家の內からがや〳〵と言ひ乍ら、多人數の邏卒がカルヂリヤックの屍骸を舁いて出た。女學士は警部に向つて。成程此娘は嫌疑のあるものでもありませうが、私しは少し見る所があるから、何うか暫しの間貸して置いて貰ひませう、と請求した。當時スキユデリイ學士といつては、日每に王宮に出入して、所謂影響の多い人だから、デグレエは溢々承諾した。聚まつて見て居たものは皆んな女學士の計ひに感服して居たから、寄り集つてマデロンを抱き起して、女學士の車の中に擔ぎ込んだ。嗚呼、公衆と云ふものは果敢ないものだ。デグレエが來て人殺だと云へば、オリ井エ、に石を投げ掛け兼ねぬ樣な勢であつたが、今又た女學士が娘を不便だと云ふと、今まで面白がつて見て居つた殘酷な所作を何となく惡む心が生じ、淚をも溢ぼすものだ。此性質は何處の國でも、今も昔も

かはらぬ。

當時巴里第一の醫師セロンが盡力で、我に還つた娘マデロンは、マグダレエン女學士に慰め勵されて、やうやう涙を歛め、斷々の聲で前夜の樣子を話した。

眞夜中頃に部屋の戸を靜に敲く人が有るゆゑ、誰かと問へば、オリ井エヽの聲で、お父さんが死に掛つて居るから早く起きて、といふ。驚いて戸を開て見れば、オリ井エヽが色蒼ざめ、額からは汗を流し、片手に手燭を持つて居た。オリ井エヽは自分の顏を見ると、手眞似で物を言ふなと知らせ、直に踵を旋らして、廊下傳ひに仕事場の方へ行つたが、其足元は蹣跚として居る樣であつた。自分は心も臟氣に、跡に附いて仕事場に這入つて見ると、父は目を恐ろしく睜り、喉の奧で息をして居た。覺えず聲を立てゝ泣き乍ら、父の體に縋つた。この時始めて血斑れな襦袢に氣が附いた。オリ井エヽは靜に自分を引き退けて、父の左の胸にある創を藥で洗つて綳帶した。此內父は正氣になり、息遣ひも直つて、先づ自分の顏を見詰め、又たオリ井エヽの顏を見て居たが、自分の手を取つて、オリ井エヽの手に渡し、二人の手を一にして力一つぱいに押した。自分は悲いと嬉いとで、胸が一つぱいになつて、物が言はれぬから、オリ井エヽと一所に父の寢臺の前に膝を搶いた。父は感動した樣子で、聲を立てゝ起き直らうとしたが、其儘息は絕えて仕舞つた。此樣子に二人共聲を揚げて泣いた。須臾してオリ井エヽは主人の吩附で、夜一所に出て行くと、或る町で主人は曲者に出遭つて手創を負つたから、漸くの思で重い體の主人を肩に掛けて家へ戻つたと話した。夜が明けて泣き聲を聞いて居た隣住居の人が來た時には、二人共まだ恍惚として尸骸の側に居た。

始終を話した娘マデロンはオリ井エヽが平生の誠實な事を繰り返して、又た若し目の前であの人が

刄を父の體へ刺したのを見たならば、あの人が此程な惡事をする譯はないから、惡魔の所業で人の目を昏ましたのだと思ふより外はないと、何處までもオリ井エ、を保護した。

女學士はカルヂリヤツクの家の近所を聞き合はせて見ても、親子師弟が和睦の生活は知れ渡つて居り、又た法廷でオリ井エ、の言うた事を聞いても、娘の話と總て符合して居た。此符合の外、娘が平生の言語擧動に注意するに、罪のない、從容な處が何しても詐をいふものとは見えないから、意を決してかの「シヤンブル、アルダント」と云ふ役所の頭レニイの所へ往つて自分の考を陳べた。役頭の前で眼に涙を浮べて言つた女學士の詞は、丸で聾な耳の前を通り過ぎなかつたといふ徴は、唯だレニイの顏に顯はれた極精微な、殆嘲弄を帶びた笑のみであつた。成程犯罪の事などに立入つて見た事のない貴君の目には、戀人の爲めに訴ふる少女の涙が哀れに見えませう。又たオリ井エ、を罪人だといふ私もさぞ殘酷に思はれませう。然し裁判官の目を持つて居まする私の云ふを聞いてから、篤と考へて御覽なさい。先づカルヂリヤツクの突創を負うて死んで居たを見出したのは夜明です。其側に居たは娘とオリ井エ、と二人切りです。オリ井エ、の部屋を搜すと丁度創口に嵌まる血の附いた劍が出ました。オリ井エ、は主人が目の前で殺されたといひます。主人に創を負はせたは盜人か。それは存じません。縱令其曲者を遮ぎり得ない迄も、何故人の助を呼ばなかつた。私は二十歩計り遲れて主人の跡について行きました。何故そんなに遲れて行つた。主人がさうしろと云ひましたから。主人はまた夜更に何の用があつて街を歩いた。カルヂリヤツクは平生九時過ぎに戸をしめて寢る人ではないか。それは申されません。何うです、此あやしい言分は。其上カルヂリヤツクの住つて居る家の大戸口の側に、クラウド、バトリユウといふ老人が夫婦暮しで居ますが、呼

び出して聞いて見るに、何うも飾職のカルヂリヤックがあの晩に外へは出ませなんだ。此家の入口の大戸は、跡で検査もして見ましたが、錠前の撥梅と蝶番の工合とで、開閉をする度に一番高い樓上まで鳴り響きます。丁度あの晩九時の頃でしたが、下で聞いて居ると、飾職は何時もの通り梯子を下り、戸を閉めて錠を掛け、又登つて行き經を誦み、それから寢間へ這入りました。パトリユウは最う八十に成つて居て、眠られぬ癖があるから、女房に燈火を附けさせ、女房は古い年代記を讀み、自分は椅子に倚り掛つて見たり、又た部屋の内を彼此と歩いたりして居たが、夜中までは樓上が静でした。すると遽に頭の上で劇しい足音がして、重荷を舗板の上に卸した様な音が聞えた。二人は驚き乍ら息を殺して聞けば、人の呻吟る聲がした。此時二人の神經をば今行つた惡事の感動が一陣の雨の様に通り過ぎたのです。此暗い處で仕たことが、翌朝の旭の光と倶に世間に知れたは貴君も御存じでせう。

これを聞いたマグダレエン女學士はまだ半信半疑であつた。成程お話を聞いて見れば、オリ井エ、に疑の掛つたも尤ですが、あの男がまあ何うしてさういふ怖い心を起したでせう。御存の通りカルヂリヤックは貧乏ではありません。それに大分好い寶石を持つて居ました。それにしても娘の婿になれば我物だに、何も與になる人を殺さずともの事ではありませんか。オリ井エ、はその寶石を一人で取る事は出來ず、人と配分する義務を持つて居たかも知れません。また人に頼まれて殺したかも知れません。まあ、その配分するの、頼まるゝのといふは、それは誰れとの事です。殺された私はまた久しく巴里の人に苦勞させさせた秘密な犯罪の露顯する緒口は此處かと思ひます。殺されたカルヂリヤックの創口を善く調べて見ますと、丁度今迄巴里の町々で殺された人の衝傷と同じ事で

それにオリ井エ、が捕縛せられた日から、何處にも人殺しがありません。どうも彼此を考合せて見れば、あの男が例の人殺仲間の首領で。それでもあのマデロンは。娘も同類かも知れません。お內へは御氣の毒ですが、其內迎ひに行つた時はお渡しを願ひます。

此言葉を聞いた女學士の心はひやりとした。役頭レニイの樣な人の心には、贓だの義理だのといふものは、虛空な意味のない文字で、此人の目は人の心の尤も深い、尤も秘密な襞の底を探つて、殺人犯や奸淫罪を見出しさうだ。女學士は立上つて、促つた胸から苦しい息を衝き乍ら。それでも少しは物の哀れといふことも考へて、と漸う〳〵の思で云つた。役頭は導いて梯まで徃つた。女學士は既に梯を降りやうとしたとき、我乍ら不思議な想が浮んだ。その不幸なオリ井エ、といふ人に一寸逢ふことは出來ますまいかと振り向いて役頭に言つた。役頭は訝かし氣に暫く女學士の顏を見詰めて居たが、固有な憎らしい笑を見せ。成程貴君は目前の出來事よりは、感じを恃んで、心の聲に耳を傾けて、オリ井エ、ブルッソンの罪を自分で試さうとの思召でせう。若し犯罪の暗い隱家を見たり、世に棄てられた惡事の梯を段々に降りて見るのが五月蠅くなくば、二時間が程には牢屋の戶を貴君の爲めに開けさせます。

女學士の胸中では二種の感觸が鬪つて居ます。事實に就いて見れば、天下の裁判官誰れでもレニイの決斷より外の決斷を下さうとは思はれず。然し飾職の娘マデロンが活潑な色で畫いて見せた、一家幸福の圖は、光輝燦爛として、此嫌疑を打消し、此暗處を照徹した。何うも女學士の心の尤も深い處には信仰が居つて、嫌疑の這入るを防いで居た。

オリ井エ、の口から最う一遍始終の話を聞いて見たら、餘り證據が充分に出た爲めに、裁判官が打

棄て丶置いた瑣末な事の中に、何か秘密を許く手續が出はすまいか、と女學士は考へた。
女學士は牢屋に伴はれて往つて大きな明い部屋に遣入つて、暫く待つと、鎖の響がした。獄丁はオリ井エ丶を引いて來た。女學士は戸の所まで來たオリ井エ丶を一目見るや否や悶絶して、覺めて見た時は最うオリ井エ丶の姿は見えなかつた。女學士は覺むるや否や、自分の車まで連れて往つてと、案内者を無暗に催促した。早く、一刻も早く出て行きたい、此の惡孽の巣窟を。
嗚呼、女學士の驚いたも尤だ、飾職の娘マデロンの結髮の夫だといふオリ井エ丶は、彼の橋の上で怪しい手紙を車の中に投げ込んだ、彼の眞夜中に人の家に遣入つて怪しい筐を中働きの手に渡した癖者であつた。さては役頭レニィが畏ろしい嫌疑も仔細があらう。オリ井エ丶は定めてあの怖ろしい人殺しの仲間であらう。若しさうなら師匠のカルヂリヤックを殺したのも無理ではない。然し娘マデロンは。今迄に一度もない程、心中に信じた事の爲めに欺かれ、今迄此世にありとも思はなかつた魔神の爲めに不意に攫まれ、最早此世には眞といふものは決してないかと迄も一時は思つた。その位だからマデロンは若しや惡事の仲間ではないか、親殺しではないかといふ事が段々心中に浮んで來た。總て人の心は一蕭圖を得る毎に、我知らず五色を求めて彩り、その想像圖が人の目を射る樣にならでは滿足しないものだ。女學士はマデロンの言語擧動を一々思ひ出して、怪しいと思はる丶節々に心を留めた。扨斯うなつて見ると初めに罪のない娘心だと思つた事も、故らに巧んだ仕打かと思はる。あの胸を裂く樣な泣聲、血の涙も、オリ井エ丶の殺さる丶を怖れてヾはなくつて、自分の罪の發覺するを怖れてかも知れぬ。
女學士は車に上るときには、娘マデロンを、あの我胸の血で飼つて置くやうなマデロンを、早速逐

ひ拂つて仕舞ふことに思ひ定めた。家に歸つて來ると、その足元に突つ伏したマデロンの姿、波の打つ胸の前で組んだ兩手の優しさ、泣き乍ら救を求むる聲の哀れさ、また涙を帶びて見上げた目は雨後の青空の樣で、神の使の童にも斯んな目はない。女學士は弱る心を推し鎭めて、成る丈剛い聲をした。彼處へ往つてお出で。縱令お前の結髮でも人を殺したからには仕方がない。それ〳〵のお仕置に逢はねばならぬ。私しは聖母がお前を守つて同じ罪に落さなかつたことを祈る計り。そんなら、貴君まで。マデロンは目を廻してその儘仆れたから、仲働きに任せて、女學士は部屋に這入つた。氣の毒なは此人の心だ。年寄つた今まで人の善惡は大抵看破せらるゝものだと思つたに、此奇怪な運命が自分の身の邊に迫つて來たとは。

聞けばマルチエエルに引かれて次へ下る娘の聲。あのお情深いお方までが。あゝ、何處までも不仕合せな私。不便なオリ井エ、。此聲は胸の奧に通つて、心の臟を截る樣だ。すると又心の極の奧に隱れて居た信仰が、オリ井エ、の爲めに寃を鳴らした。何か別に譯がありさうなと思ふ疑が起つて來た。まあ、何の惡魔が私を此不思議の中に引き入れたか。私の命を取るまでこの半信半疑の苦をさせするか知らん。此處に色蒼ざめて下男のバプチストが這入つて來た。その筈だ、彼の巴里の山中で疫鬼の樣に忌嫌はれて居る探偵のデグレエが主人のマグダレエン女學士に面會を求めたから。部屋に通してデグレエの口狀を聞けば。今日役頭レニイの使に參つたは別の事では御座りません。實は役頭も若し貴君の德義と聰力の世間の御婦人方と違ふことを知らずば、又た貴君の方から此度の怪しい人殺しの事に關係をお求めなさらずば、又たこの怪しい犯罪の露顯する手掛りが貴君の手の內になかつたならば、このお願を致しますまい。罪人のオリ井エ、は貴君のお顏を見た日から半

狂亂です。理を推して責めて見ると、言譯が出來なくなります。然し彌〻主人カルヂリヤツクを殺したかといふ一段になると、急に顔色を變へて基督を始め、夥多の神使に誓を立てゝ、成程自分に死んでも好い科はあるが、主人計りは殺さないと云ひます。御覽なさい、此死んでも好い科とは何でせう。その科はと問へば、縱令拷問に逢つても云はぬと、仲々聞きません。それに先刻貴君を見てからは、貴君お一人に向つてなら、始終の樣子を白狀せうと云ひます。お氣の毒ではありますが、何うかして白狀を聞て遣つて下さる樣にと、役頭の頼です。女學士はこの口狀を聞いて怒の色を顯した。それは切角のお頼ですが、何うして私が人の陰慝を許く實道具になられませう。何うして人の秘密を聞いてそれを裁判官に告發しませう。縱令オリ井エ、は罪人でも、私を信じて私に打明けて話すといふ事を聞いて置いて、それを外の人に言はれませうか。若又私が獨發して、オリ井エの秘密を聞いても、それは宗門の師父の聞いた懺悔と同じことで、この胸に蟄んで人には話しませんから無益かと思はれます。デグレエは尊敬の蔭に何處か役頭のレニイに似た冷笑を帶びて。成程一圖にさうお思召すも尤ですが、オリ井エ、の白狀をお聞きなさつた上で、また御思案も出ませう。貴君は役頭に物の哀れを知れと仰有つたといふ事ですが、役頭が物の哀れを思へばこそ拷問に掛くるを見合せて、態々貴君の處までお頼み申すのです。女學士の吃驚したのをデグレエは見て取つた。なに、拷問にする運には最う疾つくになつて居るのですが、貴君の御返詞を伺つた上と扣へて居ます。然し御承諾なら、またあの牢屋まで御運を願ふも恐れ入りますから、世間に目立たぬ樣に、夜更けてオリ井エエをお宅へ連れて參ります。當人の白狀は倫聽は致しません。私共は唯だ堅固に守つて居て、若又た當人が貴君に無禮でも致す樣なら、私が扣へて居ますから、命懸で貴君

のお體を守護します。その上お聞きになつた事も殘らず伺はうとは云ひません。唯だ貴君のお心でこれ程は言つても好いとお思召す丈お話にならば、それで宜しいのです。女學士は天賦の慈悲心に任せて答へた。それでは今夜オリ井エヽを連れて來るのを待つて居ります。神を賴に應接をして見ませう。

丁度あの怪しい箱を持つて來た時の樣に、眞夜中に女學士の家の戸を敲いた。この夜の客のことを兼て聞いて居た下男のバブチストは下りて戸を開けた。靜な足音と幽な話聲で、オリ井エヽを連れて來た番人が家の廊下々々へ分れて張番をする樣子が知れた時には、女學士は氷の樣に冷たい風が肩を襲ふ樣な心持で、覺えずぶる〳〵と慄うた。

暫くして部屋の戸が靜に開いた。綵絁は解けて人柄な衣を着せられたオリ井エヽを連れて警部デグレエは這入つて來た。丁寧に禮をし乍ら。これがオリ井エヽで御座ります。と言ひ畢るや否や警部は部屋を出て往つた。

オリ井エヽは床に膝を擡いて、兩手を擧げて目から淚をはら〳〵と流した。

女學士は面に血の色を失つて、同く無言でこの男を見御した。この窶れ果てた、否、憤恚と酸痛とでめちや〳〵になつた顏容から、依然として射出するは、この少年の心の誠だ。それにこの男の顏は、何時か自分の可愛いと思つた人の顏に似て居る事が、見れば見る程分明だ。然し其人は誰だか思ひ出されぬ。斯う思つて見て居る中に、初め氣味の惡いと思つた念は遂に跡をも留めず、女學士はカルヂッヤックを殺したといふ嫌疑のある男が、自分の前に膝を擡いて居るこの若い男だといふ事を、段々に忘れて仕舞つて、持前の優い聲で云つた。オリ井エヽ、お前の私に言ふ事があるとお

云ひのは、まあ何の事だえ。オリ井エ、は膝を搶いた儘、さも哀しげに太い息を吐いて。貴君はそれ程に、痕も殘らない程に私を忘れてお仕舞なさりましたか。女學士は答へた。成程顔に何處やら覺えがあるが、何うも思ひ出されない。然し人殺しだと人の云ふお前を、斯うして側近く呼んで譯を聞かうと思ふも、畢竟このぼんやりした記臆の痕の爲だ。この言葉にオリ井エ、は少し無念らしい樣子で立ち上つて、一歩後へ下り、視線を鋪版に着けて、かすめた聲で。貴君はアン、ギオオをお忘なさりは仕ますまい。彼が子のオリ井エ、、貴君の熟くお膝の上にお擁なされたオリ井エ、は私で御坐ります。おやまあ、お前が。女學士は兩手を顔に當てゝ長椅子の上にどうと坐つた。この驚は無理ではない、アン、ギオ、といふ婢は、小い時からスキユデリイ家に仕へた女で、マグダレエン女學士を吾子の樣に膝の上に載せて育て上げたは渠だ。女學士が大きく成つた時に、誠實な美少年のクロオド、ブルッソンといふものが、この婢を貰ひ受けて女房にした。クロオドは上手な時計屋で、巴里の町で評判も善く、收入もあることだから、スキユデリイ家でも喜んで結婚を賛成した。この新夫婦は當時靜な一家の幸福の基礎を築いて、その緣の絲が猶ほ密になつたは、二人の間に生れた、母の美しい姿に生寫しな男子であつた。

この子を女學士の可愛がつたは非常で何時間も何日間も、母の膝から離して連れて歸つて、撫でつ摩りつした。子も主家の令嬢のこれ程の愛に應ふることを知つて居た。渠がマグダレエン孃を愛することは、母を愛すると同じであつた。その內クロオドの時計が段段に巴里中の評判に成つたので時計屋仲間が妬く思つて、樣々の奸計を逞うして、つひ〳〵クロオドの時計の賣れない樣にして仕舞つた。實に當時クロオドが家の竈の烟は絶え〳〵に成つたから、繁華の巴里に長く居るは不得策

たと、クロオドが決心した。この男は、故郷のジユラウで、山水の景色の善い、閑靜なジユラウで今の困窮と倶に、懷郷の病をも治さうと思ひ立つて、スキユデリイ家の扶を餘所に、一家揃つて故郷に歸つた。ジユラウへ往つてからも、アン、ギオ、は一二度手紙を主家へ寄せて安否を問うたが、その後に少しも消息がなく、スキユデリイの家では故郷で暮しが樂に成つて、巴里の記念は段々に薄らいで來たことゝ思つた。

憶へばクロオドが妻子を連れて、巴里からジユラウへ歸つてから、今までは丁度二十三年になる。まあ、敢ない。あのお前が、オリ井エ、あのアンが子のオリ井エ、。この驚いた女學士の聲を聞いて、オリ井エ、は色の蒼ざめた儘で中々に氣を落ち付けて答へた。御尤で御座ります。貴君のお内で品の善い風を見習つた、殊に貴君のお膝の上で優しいお氣質を受けた私、それが今この汚名を被つて。「シヤンブル、アルダント」のお役所で、私しをお召上げに成つたは、實は無理ではなく、私しは罪を犯したに相違御座りません。然し縦令首斷り役の手に掛つて死にましても、天帝の御前に出ては、怖い事は少しもありません、人を殺した覺えもなく、また主人の殺されたも、全く私しのせいでは御座りませんから。と云つて居る内に張詰めた氣が段々弛んで、オリ井エ、はぶる／＼慄うて來た。女學士はものを言はずに傍にある椅子に指をさして腰をかけさせた。

オリ井エ、は坐つて語を繼いで。斯う貴君にお目に掛つて私の一生の事を申上ぐるは唯つた一つの私しの願で御坐りましたから。あゝ、これを協へて下さつた天帝は有がたい。成丈心を落ち付けて順序を立てゝ申上げうと、久しい間掛つて心構を致して居ります。何うぞお慈悲に、まあ、どんなにか恐ろしく、氣味惡くもお思召しませうが、私の申上ぐる機密をお聞なさつて下さりませ。私

の親父は、何故まあ、この巴里を立ち退きましたらう。それがなかつたら。思ひ出しまする二親のダユヂウの生活。私の物覺の附いた初から、唯の一日も父母が涙を流さなかつた事は御坐りません。小供心に何事とも辨へませなんだが、何時も私は貰ひ泣きばつかり致して居りました。私が段々生長して浮世の事が解つて來た、その事は唯だ兩親が貧苦に迫つたといふこと、その日の喰べ物にも困るといふことで御坐りました。人の命は末の望で繫いで居るもの、その望をなくした父は、身をも人をも怨んで、つひ〳〵亡くなり、私しの爲めに致して置いた事と云つては、ある飾職の内に私を托けて置いて吳れたと云ふのみで、實に敢ない記念、母は貴君のお家へお願申さうと云たことも御座りましたが、それ丈けの膽が御座りません。凡そ世の中に貧苦程人の膽を破るものが御座りませうか。その上母の重傷を負つた樣な精神を、羞といふものが鋭い齒で斷えず嚙んで、度々思ひ立つてお願に出うとする決心を、その度毎に推し戻して仕舞ひました。それで母は願をば遂げず、父が亡くなつてから、僅か三月立つた時に、跡を逐うて墓へ這入つて仕舞ひました。あの、それではアンが最う死んだとお言ひか。と堪へ兼ねて女學士は、オリ井エ、が話の緒を截つた。いゝえ、母は結句亡くなつたが仕合せといふもので御座ります。何うしてまあ、あの私をまたとなく可愛がつた母が、私の首斷りの手に掛つて死ぬるを見て、生きて居りませう。と云ひ乍ら空を見たオリ井エ、が目は哀れな、然し運命の繩で縛られた心の俘が、天に訴ふる怖ろしい目だ。

此時廊下が騷がしく、人の彼方此方へ行く足音がした。オリ井エ、は苦笑をして。はあ、デグレエが私が逃げでもするかと、氣を配る樣子で御座ります。それは兎も角も、私は飾職の家へ參りましてから、職業に勉強しましたので、師匠にも劣らない位だと、人も讃めて吳るゝ樣になりましたが、

師匠は何うも私に虐く當りました。その頃店に參つたお客が、私の細工を彼此と出させて見たするに、私の頬を叩いて。これが全く貴樣の仕事か。いや中々若いにしては感心だ。手前はこの片田舍に燻ぶつて果つる職人ではない。今巴里に居る世界一のカルヂリヤツクといふ飾職があるから、そこへ往つて一番腕を揮つて勉强しろ。カルヂリヤツクの跡續ぎに屹度なられう。この言葉は私の心に深い痕を印しました。此日からといふものは、ツユチウに居ても、何時も心は名計り聞いたカルヂリヤツクの所に飛んで居ります。やつとの思で師匠を離れ、遥々とこの巴里に參りました。あゝ、想へば一昔し、私が始めて、起て思ひ、寐て夢に見たカルヂリヤツクの家の閾を跨いだ時、胸を躍らし乍ら逢つたカルヂリヤツクは、冷淡な、意地の惡るさうな、目付の怖ろしい人、先づ試にと云て私に指環を一つ製へさせました。一生懸命に力を入れて細工した指環を持つて前に出ますと、カルヂリヤツクはちよつと見た計りで御座りました。此希代な人は寶石や飾細工を見る一種の眼力を備へた人で、大抵何の飾でも二目と見ずに蒋惡を決めました。私の心の奥まで見らるゝことかと思つた程。そして置いて、私の顏を穴の明く程見詰めました、簡短にこれなら善い、家へ越して、おれの手傳をしろ、給金も善く拂つて遣らうと云ひました。此時から私は内に這入つて弟子になり、幾週か立つ内に、ある日の事で御座りました。カルヂリヤツクは細工は其儘にして置いて、田舍の親類に托けてあつた師匠の娘のマデロンといふものが、鄕へ戻て參りました。あゝ、これも思へば一昔、どの天の使の見違の樣なマデロンの姿を始て見た時。オリ井エ、は兩手を顏に當てゝ、暫らく物を言はなかつたが、漸々言葉を繼いで。マデロンの私を見た時の顔つきは、親切に見えました。氣のせいか別に用もないに度々仕事場に來て見るかと思ふ樣で。その内段々に愛情が現はれ、親の目を

忍んで交はす握手。その嬉しさ。その頃から私の一心は唯だマデロンが妻に欲しいといふ一點に注いで居りました。と云つて何も職業を怠けは致しませんが、職業をするに付けても、早く一人前の職人に成つて、思ふ人を妻に持たるゝ樣にしたいと思ひました。兎角する內、ある日主人のカルヂリヤックが暗い目元に怒と蔑とを見せて、仕事場に這入つて來て、例の手短な言ひ樣。最う手前の仕事は入らぬ。唯つた今出て失せう。二度と閾を跨ぐな。譯は言はなくても、手前の胸に覺えがあらう。と私には言譯も何んにもせさせず、私しの領髮を引きずつて、戶の外へ出しました。私は頭と腕とに創を受けて、悔やしくつて堪りませんが、別に仕方もないこと故、町盡處のサン、マルタンといふ處迄往つて、心易い人の家を頼み、二階の明き部屋へ入れて貰ひました。然し片時も安い心はなく、夜になればカルヂリヤックの家の匝りを彷徨ひあるき、若し私しの歎息の聲を聞いて、マデロンが窓から顏を出すこともあらうかと、空頼めに時の遷るをも知りませなんだ。この時私の腦の中を行き違ふ考は、實に樣々で、中にはマデロンに逢つたときに話して實行せうなどゝ思ふこともありました。御存じの通り、ニセエス街のカルヂリヤックの家の處には石垣があつて、その處々に窪んだ中へは石の像が刻み込んであります。ある夜私がそんな石像の傍に立つて居ますと、石垣の方へ向いて居る主人の仕事場の窓に、不意にぱつと明りがさしました。時は眞夜中、カルヂリヤックは此時分に起きて居る人ではありません。何時も九時を打てば燈火を消して床に這入ります。私は急に胸騷がして來ました。何か內に變事がありはせぬか。然し電の樣に私の腦に起つた考は、何うかして事があつたら、それを便に門を這入られやうかといふ事で御座りました。その內窓の燈火は又たふつと消えて仕舞ひました。私は身を石垣の像に寄すると、愕然致しました、この石像が

生きたか、動きます。私の躰を推戻します。愕いて傍へ飛退いて見て居ると、月の微光で石像が段々に廻はるのが知れます。廻つて仕舞ふと像の脊中に貼いて出て來た眞黒な人の姿、この人は音のしない早足で町を下つて行きます。私は石像に近寄つて熟く見るに、元の樣に正面に向いて立つて居ました。深く思案する隙もなく、私はかの怪しい人の跡に附いて行きました。御存じの通り、あの街の曲り角には聖母の祠があつて、常夜燈が點いて居ます。癖者がこの前まで來て、心ともなく跡を振向くと、常夜燈の明りが丁度顔にさしました。思ひも掛けぬ、この癖者はカルヂリヤックで御座りました。この時私は覺えず身の毛が彌立つ樣な心持ちをしました。さては主人は夢中夜行とか云ふものか。是れが急に心に浮んだ考で、まだ深く考へて見る隙もなく、跡に附いて行きました。後に思へば夢中夜行の人は、滿月の時に出て歩くものだに、あの夜は月の缺けた、微暗い夜で御坐りました。行く中にカルヂリヤックは横へ曲つて、陰の處へ這入りました。然し聞きなれた輕い謦咳で主人の居る所は知れます。ある家の戸口の處に身を寄せて、何か待つて居る樣子に見えます。待つものは何んで御坐りませう。私は樣子が見屆けたいから、家の陰に身を寄せて、同じく覗つて居りますと、程なく小歌を謠ひ乍ら來たは、一人の士官と見えて、盔の尖から下げた鳥の羽は薄明で善く見え、靴に附いて居る拍車の音は、澄み渡つて聞えました。この士官が主人の隱れて居る所まで通り掛かるや否や、跳り出したカルヂリヤックの勢、獲ものを見て飛び付く虎の樣で、やれと思ふ間に士官は聲も立てずに倒れ、引く息計り僅かにする樣子。私は覺えず聲を立てゝ驅寄つて見れば、主人は死に掛つた士官の上に俯伏して、何かして居る樣で御坐りました。親方まあ、何うした事ですと言ひ乍ら走寄ると、振向いて、逆に盤きた奴めと一言云つたその聲、何時も大抵荒々し

いカルヂリヤックの聲が、別に又た氣味惡く、淒く聞えました。言ひ畢ると電の樣に早く私の前を走り拔けて、その儘見えなくなりました。私は餘りの驚に足の慄ふを踏みしめて、倒れた士官に近寄て膝を撿き、若し息があるかと思つて見ますするに、全く死にきつて、居ります。兎角する內に、私を取卷いた邏卒の一群、又た一人遣つて退けられた、附て居る若い男、手前はまた何者だ、癖者の仲間か、抔と言ひ合つて、私しの肩を押へて、屍骸の傍から引退けました。私は先刻からの驚で言譯をする氣力もなく、おど／＼して居まするど、邏卒の一人が燈火を私の顏に差付けて。何んだ、カルヂリヤックさんの處の職人ぢやないか、それもさうか、人を殺す奴が何んでまた死骸の處に接付いて居て人に捕まるものか、まあ手前は何うして此處へ來たのだ。と問ひますから、私は此人の殺さるゝを圖らず通り掛つて見たが、癖者は電の樣に早く影を隱して仕舞つた故、倒れたこの人がまだ助けられはせぬかと、來て見る內に、貴君方がお出になりました。といふと一人が死骸を抱き起し乍ら創を見て、何うしてこれが助かるものか、何時もの通り心の臟の突創だと、仲間と一所に死骸を擔いで往つて私には別に不審も置きませなんだ。

獨り寂寞しい夜の街に殘された私は、眞から夢ではないかと思つて、體を摘つて見た位で御座りました。カルヂリヤックが、私の可愛いマデロンの父が、あの人殺し。體に力が拔けて仕舞つて、傍の家の石段に倒るゝ樣に腰を掛けて居る內に、東は段々に白んで來ます。目の前の敷石の上に落ちて居るは鳥の羽で飾つた士官の毳。あゝ、夢でも何でもない、主人の人殺しは私の目の前であつたに違ありません。私は急にその塲所に坐つて居るも嫌に成つて逃ぐる樣に、サン、マルタンの宿へ歸りました。

部屋に歸つて打倒れた儘、まだ兎角の考も出ない內に、戸を明けて這入つて來たは舊の主人カルヂリヤックで御座りました。私はあつと云つた計りで擡臥すと、靜に步み寄つて、何時にない優しい聲をして、私の名を呼びました。私の居る藥湍圝の側まで、壞れ掛つた椅子を寄せて、それに腰を掛けて云ふには。手前は善く達者で居て吳れた。一寸腹を立つて出て往けと云つたは、何處までもおれが善くない。さあ手前が居なくなつて見ると、何處の隅にも手前が足らない。それに二三日前に賴まれた仕事なんぞは、手前が助けて吳れなくては、兎ても思ふ樣に出來はしない。何うだ、手前は腹も立つたらうが、そこは師匠と弟子との間柄を思つて勘辨して、最う一度歸つておれの家で仕事をして吳れまいか。手前は默つて居るが。成る程おれは手前に濟まない事も仕た。何も娘と手前との間の事は、手前一人が惡いといふ譯でもない。それもおれは飮込んで居るから、手前が今迄の樣に勉强するとなら、心立から腕前まで、マデロンの婿にして不足はない。何うぞ思ひ返して戻つて吳れ。カルヂリヤックの言葉はまあこんなもので御坐りました。

さもしら〳〵しいカルヂリヤックの言葉、私は腹が立つて一言も口に出ません。するとかれは氣色を更へて。それぢやあ分つた。手前は外に用事があつて、おれと一所にこられないな。デグレエの所へ行くか。それとも鞠問所の役頭の所へでも行くか。だが手前まあよく考へて見ろ、おれの名前は巴里で知れ渡つた飾職の親方で、然も慈善家といふに、夢にも想像の出來ない人殺しの罪科を着せやうなど丶すると、誰れでも手前を氣違ひと思ふ計りの事だ。それだから何もおれが手を下げて手前に賴んで、またおれの家へ戻つて吳れと云ふにやあ當らないが、可愛さうなのはおれの娘だ。手前が家を出たあとで、おれの膝に抱付き、オリヰエ丶と始終離れて居る程

なら、生甲斐はないといつたが、おれも最初は一時の出來心と思つて打遣つて置く内段々に病氣附き、痩せ衰へて來たので、捨てゝも置かれず、昨夕彌々腹を決めて行末手前を婿に取ると云つた時の娘の喜、一夜の内に打つて變り、今朝は新らしく咲いた薔薇の花の樣お顏の色。手前のおれを嫌ふは熟く知つて居るけれど、迎ひに來たのはこの譯だ。あゝ、天道さま、許して下され。私は何うして歸つたか知りませんが、つひまた師匠の家の座敷に這入る。すると、オリ井エ、さん、内の人の、と聲を立てゝ私に縋り附いたマデロンの可愛さ、この時に聖母に誓を立てゝ、死んでもこの子には離れまいと思定めました。

女學士は不斷正直ものゝ手本の樣に思つて居たカルヂリヤックの恐ろしい罪惡を聞いて。まあ、思ひも掛けない、カルヂリヤックが、あの人が、あれ程世間を騒がした人殺しの仲間とお言ひか。貴君は矢張仲間があつたと覺召しませう。それも御尤で御座ります。あの久しい間、今日も明日もと噂に立つた人殺し。然しあれは皆んなカルヂリヤック一人の仕事で御座ります。固より仲間はありもせず、又たあつた事も御座りません。一人ゆゑ秘密が破れず警察探偵の目が屆かなかつたので御座ります。まあ、跡を聞いて下さりませ、この罪惡の極度に達した、また不幸の極度に達した人の話を。師匠の家へ戻つてからの私の心の苦しさ。折々は人殺しの手助をする樣な心持がして、胸が痛みまするが、マデロンの顏を見ては、つひ忘れて仕舞ひます。然し仕事場で前の樣にカルヂリヤックと向ひ合つて仕事をする時は、何うも頭を擧げて師匠の顏を見ることが出來ません。思へば氣味の惡いこの人の行、晝は職業に勉強して、家の暮しも裕かで、都府で評判せらるゝ程の慈善をするかと思へば、夜は人を殺して物を取る怖ろしい業をする、何うも譯が分かりません。それに日頃か

ら孝行なマデロンは神の使の樣な淸い心で父に仕へて居ます。若しあの子が親の惡事を聞いたなら、まあ、何んなに驚きもし、歎きもせう。これ一つでも私しは此事を口外することは出來ません。斯うとつおいつ考へて居ます內に、ある日のこと、何時も造り聲をして面白さうに戲謔けたり、笑つたりするカルヂリヤックが眞面目な顔をして仕事をして居ましたが、俄に起つて細工を仕掛けた飾を荒らかに床の上に抛り出しました。師匠はばら〱と板の間に散る寶石と珠玉とには目も掛けず、私しの仕事机の眞ん前に立つて。オリ井エ、、何時まで手前と睨めつくらをして居やう。おれは最う辛抱が出來なくなつた。あの狡猾なデグレエと彼奴の仲間の狐共とが手を盡した探偵も水泡に成つて居たに、不思議に手前に知られたおれの惡事。まあ、何んな惡い星の所作で、おれの跡を跟て來やうと思ふ心が手前の胸に浮んだ事か、また手前の足音がおれの耳に聞えなかつたか。おれは久しい熟練で、何んな暗の夜にでも、虎より鋭く物が見え、また幾町も隔てゝ蚊の鳴く聲まで聞ゆるに、不思議にもあの晩には少しも心が付かなんだ。手前も今斯うしておれの家へ戻つたからには、兎ても訴ふる譯には行かないから、おれも隱すにも及ばぬ譯、兎てもの事に洗ひ浚ひ、言つて聞かするから、聞いて呉れ。斯うカルヂリヤックの云つた時に、私しはその話は聞きたくない、縱令何んな家に居つても、心は潔白なオリ井エ、だと申し度はありましたが、餘りの氣味の惡るさに、咽がつまつた樣で、一言も口に出ません。私しの言ひ掛つた言葉は、言葉と云ふよりは、寧ろ一種の節のない聲で御座りました。カルヂリヤックは机の傍の椅子を引き寄せて、腰を掛け、額から出る汗を拭ひました。渠も昔の事を思ひ出してか、頻りに迫つて來る胸を推鎭むるかと思ふ樣に見えましたが、漸くまた語を繼いで物語を始めました。好く世間で聞く事だが、姙婦が物に感じて、そ

の感じが胎内の子に憑くといふのは、何うも本たうかも知れない。おれの母がおれを含して一箇月に成るとき、トリヤノンに御幸があつて、母は友達を誘ひ合はせて見に行つたさうだ。その時母の目に付いたは、西班牙仕立の服を着て、寶石の飾を首に掛けた一人の貴族で、その掛けて居る飾りが欲しいといふ念が起り、何んと思つても我慢が出來なくなつた。この貴族は母がまだ娘の折に、一度不義を言掛けた事があつたを、母の方で强顔く斷つて仕舞つたが、今この飾を掛けた處を見れば、飾の寶石の光で照されて、世にまたと無い美しい姿で、その人が何となく慕はしく成つた。貴族も母の顔付を見て取つたが、これはまた寶石には心付かず、この女が思返へして自分を愛する念を起した様に思つたので、便りを求めて言寄つて、そう／＼ある日、人通りのない所で逢ふことに約定した。扨出逢つて男はさも嬉し氣に母の躰を抱くと、母は男の頸に掛けてある飾を確り持つ。この時何うした因果か、男は其儘地に倒れたから、母も一所に引き倒されて仕舞つた。この貴族の不思議な死にざま、卒中でもあつたのか、又たは別に仔細のある事か、今に成つても知れないが、この男の母を抱いた手は、何う腕いても離れず、空洞になつた様で、母を見詰めた目の恐ろしさ、母は堪らず聲を立て助を呼んだので、近い町を通り掛つた人が來て、母の躰を死人の腕から離したが、家へ歸つてからその儘、病氣になつて床に就いた。親類中がこの様子では胎内の兒は助かるまいと言つて居たが、思ひの外に産が輕く、生れたは已れだつた。然し彼の不吉な遭遇ひは何處までもおれに跟いて廻るものと見えて、一度顯れた悪い星の射御した光は、不思議な欲念の焔をおれの胸の中に焚き付けた。

最う小供の時からおれの目に何より有難く見えたは金銀珠玉であつたが、人は矢張り小供の癖と許

り思つて居た。然し此癖はなか／＼直らず、年を取るに連れて、飾類を盗み匿すことが始まつた。それに不思議な事には金銀や寶石抔の眞僞が獨りでに分つて來て、僞のものは少しも欲しくなく、眞のものは死ぬる程欲しかつた。父の隨分殘酷な打擲で、一先づ盗む癖丈は直つたが、兎に角に飾類が持扱ひたいので、飾職になり、骨を吝まずに働いた程あつて、僅の内に此上もない飾職だと人に云はるゝ様になつた。その内に無理遣りに押へて置いた生れ付きの欲が堪らない様に熾になつた。飾が一つ出來上つて人に渡して仕舞ふや否や、落膽して、胸騒がして物も食へず、夜も寐られず、殆ど生甲斐もない様な心持ちがした。おれの目の前には何時も飾の持主が飾を持つて立つて居て、その間始終誰の聲となく、おれにさゝやぐには、まあの飾はお前のではないか、取り返せば善い、あの戸骸にまあ、何で寶石がいるものかといふ。これがおれの盗賊人殺しになつた始だ。何處の内でもおれに出入を許さあいものはないから、様子は知れて居り、自分の職で扱ひ付けた錠前は、仕舞ひには少しも障りにならず、飾は直に取返した。所が飾りを取返して見ると、また一つの欲が起つた。かの怪しい聲はまだ、はあ、手前の飾りを幽靈が掛けて居るとおれを嘲して、つひ／＼その男を殺さねばならぬ様にした。然し初めには殺したい／＼と思ふ心の間から、まだ不斷の魂が傑ひながらそれを遮ぎつて居た。おれの今住つて居る此家は、丁度その頃に買つたのだが、家の引渡しが濟んで、この部屋で賣人と一所に酒を飲んだ。扨て日が暮れて賣人は歸りかゝつたが、また一寸立戻つて、――カルヂッヤックさん、まだお前に知らせて置きたい事があります、何んだといふとこの家にある一つの秘密な仕掛です、といひ乍ら、其處の戸棚の戸を明けて後ろの壁を脇へ寄すると、これが小部家の入口になつた。中に這入つて蝶番になつて居る戸を、ちよいと跳ね上ぐると、そこに狹い險

しい梯が見えた。それを降るとおり口に人の目に掛らあい小さい戸があつた。それを明けて庭に出て、石垣の傍の鐵の棒を横へ引くと、石が勝手に廻る。これが丁度外の石の像に當る處だから、石に附いて廻つて外へ出ることが出來るが、常は石像の爲めに園りの界が知れない。孰れ手前にも一度見せうが、原とこの仕掛けをしたは、此家が寺であつた頃に、戒の守られない坊主が、夜々抜け出す爲めであつたさうだ。おれはこの仕掛を見ると妙な感じを起した。それはおれがこの家を知らずに買つて還つたは、矢張約束ごとであらうといふ樣な感じであつた。今まで手段に窮して居て行はなかつた人殺しの秘密は、この仕掛で思ひ掛けない便利を得た。その頃ある客が舞妓に遣る飾を誂へたを仕上げて渡したが、さあ居ても立つても居られない。耳の傍には耳語ぐ惡魔。跟の後には附き纒ふ幽靈。おれはこの家へ越して來て、床の中へは這入つたが、身を責むる怪しい聲が斷えない、血の汗を流して蒲團の中を轉げ廻ると、目の前には飾を受取つた男が手に飾りを持つて居ると見えた。仕舞には床から飛起きて外套を引つ掛け、秘密の梯を下り、石垣を抜けて街に出た。來かゝる飾を持つた男。おれは飛び掛かる。渠奴は叫ぶ。おれは後から抱き付いて、左りの胸に刺通す劍。これで飾は吾物になる。あゝ不思議、この人殺しを仕遂げた時のおれの心の安堵、滿足。實に久しくこんな好い心持に成つたことはなかつた。惡魔の聲はふつつり聞えなくなつた。幽靈の影はばつたり見えなくなつた。此時善く解つたはおれの運命であつた。おれはこの惡い星の指圖に隨へば好し、逆へば躰も心も弱り果てゝ死ぬより外はない。オリヰエヽ、これがおれの洗ひ浚ひの話だ。手前も善くこの哀れな身の上を呑込んで與れゝば、おれを不便とは思つても、憎いとは思ふまい。おれもまた決して丸で人らしい心を失つて仕舞つたといふ譯ではない。おれは飾を拵へ上げて人に

渡すとき、何時も二の足を踏むのは、誰でも知つて居り、またおれが人の誂物を強て辭退するとがあるのは、あれは其人が氣の毒で殺したくないからだ。此事を話して仕舞つて、カルヂリヤックは私を連れて丸天井なりに造つた寳の間に這入りました。王様でもこの様な寳の數々を持ては居るまいと思ひました。一つ〳〵の飾りに札が附けて何年何月何日造る、何年何月何日竊盜(又は暗殺)にて取還すと書いてあります。カルヂリヤックは沈んだ聲で。オリ弁エ、、手前はマデロンと祝言をした晩に、おれに誓言を立てゝ、おれの死んだ跡でこの寳を微塵に毀して棄てゝ呉れ。手前夫婦はいふまでもなく、この祟の附いて居る寳を人が身に附けてはならぬからと申しました。嗚呼、思ひ出しても恐ろしい、その折の私の位置、犯罪の迷路に引入れられて、愛慕と厭惡、歡樂と恐懼で心を掻きむしられ、譬へて申せば、半空からは優しい顔をして神の使が笑を含んで招くに、脊中からは惡魔が燃ゆる様な爪で握んで離さず、それで彼の天の平和を持つて來た神の使の笑が却つて尤殘酷な責苦の様に思はれました。私しは逃げやうかとも思ひ、また自殺せうかとも思ひましたが、それもならぬは、マデロンの愛情の爲で御座りました。いえ、私しの決斷のなかつた事は何の様にも惡く思召しませうが、今のこの寃罪を思へば、報は充分に受けて居ります。ある日カルヂリヤックは何時になく好い機嫌で内へ戻り、優しい目で私を見、またマデロンと戯謔けて、食事の時に祭日でゝもあるやうに上等の酒を吞み、歌を歌つたり何かしました。食事も濟んで、マデロンは立つて往き、私も仕事場へ行かうと思ひますと、師匠が引留めて。手前まあ坐つて、おれの云ふことを聞け。それに今日は何うせ仕事は休む積だから。おれと一所に當時巴里で第一等の貴婦人の健康を祝つて、この酒を飲んで呉れと云つて、杯を擧げて私の杯と突合せ、快げに飲み乾して。

人目を忍ぶ通路に、寄する白波よくといへば、思の海に浮き沈み、慕ふ甲斐こそなかりけれ
何うだ、手前はこの歌を何と聞くかと、顏に喜の波を寄せて私しに云つて、それから國王樣の御殿で、貴君のお歌を遊ばした事、自分が昔から何となく貴君を信仰して居た事抔を話し。まあ手前善く聞て呉れ。それでおれが思ひ付いたはあの有難い、神さまの樣なスキユデリイ女學士なら。何んな立派な飾を造へて上げても、取り戾さうの、殺さうのと思ふ恐ろしい心は、おれの頭の內に起るまい。幸ひおれが英吉利のヘンリエツトさまのお誂で極上の寶石を撰り集めて造へた首飾があるが、あれは前後に比類のない程に旨く出來たで、何んと思つても手を離すことが出來なかつた。ヘンリエツト樣の無慘な暗殺に逢はつしやつた事は、手前も知つて居るだらうが、飾はまだおれの手元におつた。あれを探偵せられて居る人殺し仲間の名で女學士に差上げて、おれの胸一杯になつて居る信仰を後楯にしたら、恐しい惡魔の聲も打消されて仕舞ふかと思はる。その上に意地惡のデグレエ等には丁度好い面當といふものだ。手前は何うか手段をしてあの飾を女學士のお手許まで屆けて呉れと、折入つて賴みました。不思議で御座ります、師匠が貴君のお名前をいふと、譬へば私の心に被さつて居る黑い紗が引除けられて、私の小供の時の仕合せな生活の畵が光り輝きながら五色に美しく見ゆる樣な心持がしました。私の苦しめられた心が一つの把へ處を探し出しました。この望の日の光に逢うて怪しい惡玉等が散々に逃げて仕舞ひました。この私の感じを見て取つたカルヂリヤツクは又た莞爾と笑ひ作ら、おれの發心が大分、手前に氣に入る樣だが、おれだつて心の極の奥の處には善い心が住まつて居て、あの惡魔の、意地の穢い猛獸の樣な吩附を抑へやうとして居る。それに折々はおれも妙な心持になつて、不思議な心細い樣な風が極の遠方から吹いて來て、此時に

はおれは、おれの極奧の心は善人で、それが惡魔に欺されて罪人にせられて居る內に、段々原との善い心が惡魔に引入れらるゝかと思つた。それでふつと思ひ付て「サン、チユウスタツシユ」のお寺にある聖母樣に金剛石の冠を造へて上げて、惡念の止む樣に祈らうかと、その冠の細工に手を出し掛つたが、矢張惡魔に妨げられて仕舞つた。今度は腹を据ゑて何處までも惡魔に抗抵つて善人になりたいと申しました。

カルヂリヤツクは兼て貴君のお身の上は熟く知つて居ますから、何時頃に何うして筐に入れて飾を持つて往けば、お手元へ屆けられうと、丁寧に敎へて呉れました。原と師匠の心では、飾がお手元へ屆きだにすれば善いと云ふのですが、私は天の惡人の口を藉つて言はせた、この嬉しい言葉を種に、この機會に、貴君にお目に掛かり、御奉公をしたアンが一人息子と名乘つて、私しの果ない身の上を打明けて、何も彼も皆打明けてお賴み申さうと思ひました。あの淸潔な、罪のないマドロンの事を申し上げたなら、定めてこの秘密を御他言は成さるまいし、又た貴君の賢いお心で、何うかカルヂリヤツクの罪も許かず、私しの身扳もなるやうに出來やうかと、それを賴に思ひました。斯う申上げたら、そして何ういふ方便で、そんなむつかしい事が出來やうと思つたかとお尋も御座りませうが、私もそれは知りませなんだ。然し私の心の中で、確かに定つて居たは、貴君がお助なさつて下さるといふ事です、丁度世間の人が聖母樣を賴に思ふやうに。扨御存じの通り、私の此望は協ひませなんだが、又た折もあらうと控へて居ました。するとカルヂリヤツクが急に妙な素振を見せ始めました。苦い顏をして家の中を彷徨き、遠方を見詰むる樣な目をして、解らない事を口走り、何か目前に見ゆるものを追拂ふやうな手附抔を致して、兎角惡念の心に萠すを抑へやうとするかと思

はれました。こんな鹽梅で或朝は丸で何にもせず、漸く晝前になつてから何時もの仕事机に向ひましたが、又た立ち上つて、道具を抛出し、窓の方を見詰めて、あゝあの飾を矢張ヘンリエットの身に付けさせておきたかつた。この言語に私は慄然と致しました。師匠の身を責めて居るは、例の惡魔の聲に相違御座りません。危いは貴君のお身の上。それを救つてお上申すには飾をカルヂリヤックの手に戻すが捷徑。斯う思つて貴君にお近づき申したはポン、ニヨッフの邊で御座りました。貴君のお車の中へ、首尾能く文は投込みましたが、お待申しても師匠の宅へお出はない、師匠は連りに飾々と獨言を云つて、彌々思ひ惱む樣子、私はこの時に發悟を極めて縱令師匠の命を取つても、貴君をお助申さうと存じました。カルヂリヤックが何時もの臥房へ閉籠つて仕舞ふと、私は直ぐに庭へ忍び出て、石垣の外に廻り、小影に隱れて樣子を覗つて居ました。程なく例の通り石像の脊に付いて出て來たカルヂリヤックは、立留つて考ふる樣な振もせず、其儘街を下つて行きます。私は跡から跟いて行きます。師匠の曲つたはセン、トノレエ町。無暗に跳る私の胸。そつと通り拔けて、貴君のお宅の入口の蔭に成つて居る所に身を寄せて見て居ますと、又た先度の樣に小歌を歌ひ乍ら來る一人の士官。飛掛かるカルヂリヤック。引留めうと驅寄る私。倒れた一人は士官でなくつて師匠で御座りました。士官は飛掛つたカルヂリヤックと引組んで、持つて居た短劒で、渠を刺し殺した上、今私の奔り寄るを見て、賊の同類とでも思つたか、短劍を抛棄てゝ自分の劍を拔いて身構を致しましたが、私が倒れた師匠の體を引起さうと計りするを見ると、早足に行て仕舞ひました。カルヂリヤックはまだ息があります。私は落ちた短劍を拾ひ上げて、師匠を肩に掛け、漸々の思で家の仕事場まで擔ぎ込みました。それから跡の事は貴君も御存じの通りで御座ります。唯私の罪といふ

は、師匠の大罪を知つて居乍ら、訴へなかつたと云ふ計りで御座ります。この秘密は又た何んな責苦に逢つても白狀しない積で御座ります。若し私が白狀すれば、カルヂリヤックの一旦埋められた屍骸を堀出され、掟の通りにせられませう。その時のマデロンが心中。あゝ、それを思へば此秘密を持つた儘で死んだ方が遙に增で御坐ります。言ひ畢つてオリ井エヽは暫く默つて居たが卒に淚をはら〳〵と流して女學士の前に膝を捨いた。貴君は私に罪のない事を御信用下さりませう。それに違ひ御坐りません。若しマデロンの身の上をお聞き傳へは御坐りませんか。女學士は仲働きを呼んで何か吩附くると、程なく飛んで出てオリ井エヽの首に兩手を掛けて抱付いたマデロン。最う何んにも言ふことはない。お前が此處へ來てお吳なら。これも皆んな御主人樣の御恩。二人は夢中に成つて時も所も打ち忘れて仕舞つた。

若しマグダレエン女學士が二人に嫌疑を置いて居たなら、此時始めて渠等の寃を悟つた事だらう。何故と云ふに、愛慕の幸福で浮世の苦艱を忘るゝは汚のない心でなくては出來ない事だ。疑心互に釋けて和氣氤氳たる三人の群。この群を窻から斜に照らす朝日の影。輕く戶を敲いて這入つて來た警吏デグレエはオリ井エヽを連れて歸つた。不便なは飾職の娘マデロン。

怪しい飾の筐を持つてオリ井エヽが、音信れた時から、唯だ何となく氣に掛つた事が、今はマグダレエン女學士の身の上に怖ろしい影響を及ぼした。兼て愛した召仕の一人息子は、斯く迄込入つた、逃れ方ない秘密を懷いて、死に就かねばならないか。何うかしてかれを救つて遣りたいとは思ふが、心に浮ぶ考は、皆な浮ぶや否や、棄てゝ仕舞はねばならない樣な、所詮實地に行はれない事計りだ。

然し手を空くしても居られないから、得意の筆を揮つて長い手紙を書て役頭レニイの所へ遣つた。手紙の中にはオリ井エ、の決して罪のない事、その秘密は決して白狀せられない事、この二つを反復して述べて、勉めてレニイが鈍い、惰性の强い情感を動さうとしてあつた。是れは女學士がまだ彼の「シャンプル、アルダント」の役頭を善く知らなかつたのだ。まだ一二時間も立たない内に、役頭の返事が來た。オリ井エ、の寃罪が果して實ならば、實に結搆だ。然し「シャンプル、アルダント」は人の秘密を保護する事は知らない、否、人の秘密を許發するがその職掌だ。この役所にはオリ井エ、の秘密を白狀せしむる方便があるから、三日の内には乾度許いてお目に掛けうといふ。これが返事のあらましで。

この役所の方便、問ふまでもない拷問だ。平生落付いて居る女學士も少し慌てゝ、又た思廻らすに最早自分一人の考ではいかぬ。是非法律に明な人の助を求めでは叶はぬ譯になつた。當時巴里で一番法理に通曉して、德義を蔑視しない代言人は、ピエル、アルノオ、ダンヂリイだとは、常から聞いて居る事だから、直に車を飛せて、その門を叩いた。女學士の問を默して聞いて居た代言人ダンヂリイは、聞き畢つて哲學者ボアロオの言葉を以て、簡截に意見を述べた。

凡天下之信、未必似信矣。

猶ほ說明を求めた女學士に對して、代言人の言うたは、先づオリ井エ、の身上に充分の嫌疑ある事、役頭レニイの所置は法律上毫も不都合と認むべき廉なき事、自分が假にオリ井エ、の辨護者なりと思うてもオリ井エ、の遭ふべき拷問を禁めさする手段のない事、これを禁めさするは、オリ井エ、が全く秘密を滅却するか、さうでなくば、せめてカルヂリヤックが殺害に遭つた時の細い事を

白狀して、他の人殺の手掛を求むる機會を法吏に與ふることが必要だと云ふこと抔であつた。女學士は力を落して、目に涙を浮べ、憐れな聲を出して。それでは最早國王陛下に跪いて救を求むる外はありますまい。代言人は答へた。それはまあ見合せた方が善いかと思はれます。何故といふに、それは最後の手段ですから。一度其場で却けらるゝと、又た取付く譯には往きません。國王も國民の望に背く事は仕ないものです。オリ井エヽ程の重い嫌疑の掛つたものを、故なく放免させては先づ世間に對して言譯がありますまい。それよりはオリ井エヽに秘密の全躰か、又は一部を白狀させて、それから得た事實を基礎にして、充分に王の心を動かした上、哀訴するが善からうと思はれます。賢い女學士だが、こんな事情になつては、迚も經驗に富んだダンヂリイの言ふ所より外に思案は出ないから、心に慊らない乍らも同意して歸つた。

家へ歸つて思案に暮れて居る女學士の部屋の戸を叩いて、仲働きが通じた名刺には、伯爵ド、ミオッサン近衞大佐と書いてあつて、その客は至急の用事で是非共女學士にお目に掛りたいと云はせた。

私はド、ミオッサンといふものです。何うか唐突に御面謁を願つた處は御容赦下さい。と軍人の禮をして丁寧に客は述べた。女學士の示した椅子に腰を掛けて。兎角軍人の性質で、物を文飾することは出來ませんから、必要な事柄を撮んでお話致しませう。先づ斯く唐突に貴君を犯した申譯は一言で出來ます。私の參つたはオリ井エヽ、ブルッソンの爲めです。此名は女學士の胸の中で一種の御響を喚起した。あの、オリ井エヽの事で。この名をお聞になれば、自然と耳を傾けて私のいふ事をお聞き下さるだらうとは、兼て思つて參りました。オリ井エヽを人殺しだといふは今世間一

般です。それに同意しないは貴君だとの人の噂、然し貴君の御同意なされないは、唯だオリ井エ、即ち嫌疑を受けて居るものゝ辨解をお聞になつて、それを御信用なさるといふのみですから、外から見れば一寸根據のない話です。私はそれとは少し違つて外に、オリ井エ、の人殺しでない立派な證據を持つて居ります。これを聞いた女學士の目は喜で光つて來た。その證據は外でもありませんが、カルヂリヤックといふ飾職を殺したは私しです。あの、それでは貴君が人殺し。この驚いて發した言葉に腰を折られずに語を繼いだミオッサン伯は。成程人殺しに違ひはありませんが、この人殺しには充分人に誇つても好い程の價値があります。大膽にも久しい間、巴里の都を騷がして跡を韜んで居たカルヂリヤックに、私も飾を誂へましたが、それを私が受取るとき、廝奴が見せた怪しい樣子、人には今まで知れなかつたでせうが、私は何となく嫌疑の心を起しました。さてさう思つて見ると、猶ほ怪しいは、私の僕の話です。カルヂリヤックは速に私の僕に世辭を云つて、私が平生往く婦人の所と、そこへ行く時刻とを問ひました。私の思つたには今迄飾を持て殺された人の創は、皆な心の臟に中つて居ます。それは全く賊が一種の手錬を以て胸を刺すので、その一擣を避けて仕舞へば、跡は敵味方同等の勝負になりませう。私は衣の下に輕い金の兜衣を當て行きました。これ程簡易な方法に誰も氣が附かず、幾人となく果ない死を遂げたは、實に不思議に思はれます。果して私の後から飛付いたカルヂリヤックは、力を極めて私を抱いて、胸を覗つて刺しましたが、金に觸れた短刀ハ側へ滑つて仕舞ひました。その機會に不意を喫つたカルヂリヤックの胸へ用意の短刀を刺したから、廝奴ハ聲も立てずに僵れました。それに貴君ハ屆もなされず。何故打棄てゝお置なさりました　いえ、それハ一寸さう思召すも尤ですが、若し私が直ぐに屆をしたら、

假令私が寃罪を受けて刑には逢はないまでも、面倒な裁判沙汰になつたに違ありません。御存じの通りカルヂリヤックは世評の高い慈善家です。それを私が殺して置いて訴へたら、まづ疑は私の身の上に掛かりませう。全躰レニイといふ男は人の迷惑に逢ふのを身の樂にする性で、殊に貴族や何かを罪に落すことを好くことは、「シャンブル、アルダント」といふ役所が立つてから以來、誰も知つて居ります。そんならば貴君はオリ井エ、を不便とは思召しませんか、無罪のオリ井エ、を。なに、貴君はオリ井エ、を無罪と、全で無罪と思てお出なさりまするか、人殺しのカルヂリヤックの同類を。オリ井エ、といふ若い男は、始終師匠の人殺しの手傳をしたことは明白です。私はあれが殺されたと云つて、左迄氣の毒にも思ひませんが、兼て貴君の人柄が信じて居ますから、縱令實事をお話申しても、まさか私の秘密を許いて、「シャンブル、アルダント」へ知らせる樣な事はあさらず、オリ井エ、が身の上に就いての御參考には充分にならうかと思つて斯う申上ぐるのです。

女學士はこの話を聞いて伯の人柄も分つたから、オリ井エ、の秘密を打ち明けて話して仕舞つた。それから伯と相談して、猶ほ此成績を持つて伯と一所に最う一度代言人ダンヂルリイの家へ行く事と定めた。

女學士とミオッサン大佐との話を熟く〳〵聞いた代言人は、細い所まで繰り返して問うた。中にも主に氣を付けたは、大佐が飾職のカルヂリヤックを殺した時その塲に居つたオリ井エ、を見覺えて居るかといふことであつた。大佐はその夜の月明りは飾職の顏を確かに見定むることが出來る程であつたから、倒れた師匠に飛び付いたオリ井エ、の、頭から帽の飛んだ儘の顏は、屹度今見ても知るゝだらう。又た飾職を刺した劍も、柄に見覺えの鏤刻があつて、既に先日役頭レニイの所へ往

つて確かに見て來たと答へた。

代言人は頷いて。承つた所では、矢張法律上からオリ井エ、を救ふ譯には行きませんが、國王の赦を願ふには、以前よりは善い手段が出來たといふものです。伯には今から「シヤンブル、アルダント」の役頭にお逢なされて、一部始終をお話なさい。さうすればオリ井エ、が再審を受けて人殺しの罪丈は遁れませう。然し隱慝した罪と手助をしたといふ嫌疑とは仲々遁れられません。又た伯のお身には別段に危險はあるまいといふ譯は、飾職の家を充分に捜索させさせたら、實が出ませうから、それが刧盜の第一の證跡になります。さてさうなればオリ井エ、が連累の罪に行なはるゝまで、多少の時がありますから、女學士はその隙に國王に仔細を打明けて、特赦の御沙汰をお願なさる事が出來ませう。

此代言人の言葉は渾て數日の中に事實になつたが、偖てむつかしいは國王に、彼の何處までもオリ井エ、の罪を憎んで居る國王に願ふといふ一段で、メントノン夫人は國王の機嫌に障る事は一切言はぬといふ平生の心意氣で居るから、所詮紹介を受合ふ氣遣はなし、との重荷を負うた女學士は晝夜心を碎いて居た。或日女學士は彌々思ひ定めて、黑の服を着け、黑のかつぎをして、何時も國王がメントノン夫人の部屋へ來る時に出仕した。王は笑を含んで椅子を起つて、女學士を迎へた。女學士は此日殊更にカルヂリヤツクの飾を首に掛けて出た。王はこれを見て、夫人の方に振り向いて。女學士は結髮の夫の忌中であらう。と戯に云つた。女學士は矢張笑つて。陛下の仰せでは御座りまするが、結髮の夫に別れた娘なら、かう飾つてはお目通りを致しません。飾職の事は最う思ひ出すも否で御坐ります。あれが死顔はまあ何んおで御坐りましたらう。それでは女學士は哀れなカル

ヂリヤックの死顏を見たのですか。此問を女學士は工夫を凝して釣出したのだ。これに縋つて、これを緒にして、女學士は飾職の死んだ日に、その家の前へ往つて樣子を見た事を話した。飾職の一人娘マデロンが無殘の境遇、これを自分が救つたこと、ラ、レニイ、デグレエとの關係、斯う段々に歩を進めて王の耳を傾くる樣に說いて、最後に本題のオリ井エ、の事に遷つた。王は今迄オリ井エ、と云ふ名は聞くことを嫌つて、誰でも言ふものがあると直ぐに旨に忤らうといふ勢であつたが、事の奇怪と辯の巧妙とで、知らず識らず、この不思議な一世界の中に身を置くやうになつた。それで夢中に成つて聞いて居る隙に、とは奈何に、あし元に伏して救を求むる女學士の樣子。王も驚いたが手を取つて引き起して。是は何うした事です。その不思議な、證據もない犯人の言立を。仰せでは御座りまするが、ミオッサン大佐の自首、マデロンが潔白な心、何うか御賢察なされて。この話の最中に心配らしい顏を次の間から差出した書記官。王は起上つて書記官の方へ往つた。女學士は背中に冷汗を流した。切角の骨折で、王の心を動かした所を、譯もなく妨げられて、若し王がその儘で、また外の話を始めたら、今更に同じ手段も出來ず、奈何にも困難な事にならう。暫くして王は歸つて來て、物をも言はず部屋の內を彼處此處と歩いて居たが、急に女學士の前で、手を後にした儘、立留まつた、別に眼を注ぎもせず。そのマデロンとやらを見ても善いが。女學士は喜んで。有難いその仰せ、只今お目通へ。といひながら黑い禮服の重みで妨げらるゝ足の運を成丈早めて戶を出て往つたが、程なくマデロンは王のあし元に伏した。斯んな仕合せもあらうと思つたから、女學士はマデロンを車の內に隱して來た。羞慚、恐懼、悲痛、情愛、この許多の薪で焚られた血が、豚の枝々を循つて、顏には紅葉の色を現はした。水晶の樣な涙の球は、濕うて光を放つ

目から、絹の樣な睫毛に漉されて、百合花に似た胸の上に落ち掛つた。洵に世に稀な菩の名花。王は覺えずマデロンが手を取つて居に當てうとして、ふと氣が附いたやうに、又た離した。此時に王の目にも少し涙が浮んだ。メントノン夫人は瞬もせずに見て居たが、この時幽な、然し王に聞ゆる樣な聲で。まあ、善くラ、ワリエルに似た子ではありませんか。女學士のお望通り、これでは何事も出來ませう。嗚呼、無情。昔し思を掛けたラ、ワリエルの名を、妬を帶びて言はれたから、王の顏にさつと赤みがさした。王は夫人を横目で見て、マデロンの指出した願書を讀んだ。この願書は兼て女學士が代言ダンヂリイに書かせて置いたのであつた。王は讀み訖つて、領き作らマデロンに向つて。オリ井エ、に罪がないとお前が確かに思つて居るとは、奈何にもさうかと思はるゝから、孰れ「シャンブル、アルダント」へ廻はして意見を聞いて見やう。と云つて涙に咽んで居るマデロンを手眞似で却けた。想ふにワリエルといふ名を聞いた王の心は、夢を見て居る人が急に喚び起されて、はつと思ふ機會に樣々の幻が一度に消ゆるやうであつたらう。それとも彼のワリエルはソオ、ルイズ、ド、ラ、ミセリコルドと法名を名乗つて、精進と苦行とで王の心を苦めたことがあるから、王がそれを思ひ出して斯うは素氣なくもてあしたか。

ミオッサン伯の自首は早くも巴里の隅々まで傳播した。南極から北極に飛び渡る樣な擧動を見するは人心の常で、昨日まで極惡人のオリ井エ、が冤罪を被た少年になり、「シャンブル、アルダント」の役所は再び殘忍の名を流した。ニセエス街に近い處でも、目が醒めた樣にオリ井エ、の篤行を想ひ出した。飾職の偏屈の親爺カルヂリヤックに對しての平生の忠實、その娘マデロンに對しての更らぬ眞心、是等は人殺しに不釣合だと心付いた。役頭ソニイの家の前には、日毎に幾人となく集つて、

大聲を擧げて、無罪のオリ井エ、を返せ、と叫び、果ては窓へ礫を投げ付くるから、レニイは邏卒の警衞を頼むことにして、漸く一時の急を逃れた。

女學士は玉座を犯してオリ井エ、の命請をしてから、數日を經ても、何の音沙汰もないから、遣りに氣を揉み、メントノン夫人に問うても、矢張王の機嫌計り覗つて居て、果てしが付かず、お負に御最負のワリエル孃は何う致しました、抔と、マデロンの容色風姿に就いての諷刺を言ふから、少しも頼にはならない。

唯だ代言人ダンヂリイの周旋で漸うに聞き出したは、國王がある日大佐ミオッサン伯を召して、久しい間御對談なされたといふ事實と、王の尤も信任して居る内豎ボンダンといふ人が獄に往つて、オリ井エ、に逢つた上、ニセエズ街の飾職の家に夜中に役人と一所に這入つて久しく居たといふ巷説とであつた。この巷説を確めうと、飾職の居つた家へ人を遣つて平屋に住んで居るクロオド、パトルユウに聞かすると、成程ある晩に役人らしい人が多人數來て、夜の明くるまで何か劇しい物音がしたが、その中にはオリ井エ、が居つたかと思ふと云ふ。何故かと問へば、オリ井エ、と同じ聲が下へ洩聞えたとの事だ。兎も角も國王が手を廻して事の實否を捜させて居るには違ないが、何故又結果が世に表はれないか、それとも一度齒の間に挿まつた獲は決して出さぬといふラ、レニイが本願で、何か故障でもある事か。

殆ど一月も立つてからであつたが、國王がメントノン夫人の室で女學士に面會したいと云ふ案内をした。女學士の胸は騷がしく跳つて、マデロンの祈禱は聖母を始め夥多の聖使の許へ屆いた。それに王の談話は何時に變つたこともなく、人殺し事件は殆忘れて仕舞つた樣で、女學士は氣計り

揉んだが、其甲斐もなかつた。扨て最早お暇を賜はるかと思ふ頃に、例の內豎が這入つて來て、王の側に依り、何か耳語いだ。スキユデリイ學士は心の內に戰慄した。王はつと立つて、女學士の前に來て笑ひ乍ら。お喜びなさい。御贔屓のオリ井エ、は赦免になりました。女學士の目からは數行の淚が落ちて、其身は王の足の下に仆れうとしたを、王は急に扶け起して。貴君は私の考を議會に持出して辨護して下されば好い。この辯舌なら世界に誰も心を動さないものはありますまい。然し。と少し眞面目になつて。いや篤行が辨護人に出れば、「シヤンブル、アルダント」は愚なこと、天下何處の裁判所でも勝利の得られぬ筈はありません。女學士は漸く胸が落付き、辭を極めて謝せやうとすると、王は押留めて。「學士は私に禮を言はうより早く家へ還つて人の禮をお請なさい。ポンタンに兼て言付けてありまするから、マデロンが結婚の料に一千路衣を私の手元から拂ひ出させます。其代りオリ井エ、夫婦れ巴里の外へ遷るやうにせさせます。

家へ還り掛かると、半途まで迎ひに出たマルチエ、ルとバプチストとの奴婢。「お喜なさりませ。あれは赦されて參りました。閾を跨ぐと足元へ伏つた二人。可愛いオリ井エ、をお扶け下さるは貴君許りとは、兼て存じて居りました。とマデロンは云つた。貴君に置いた信用は、片時も私の心から離れませなんだ。とオリ井エ、は云つた。二人は女學士の手に唇を當てゝ、熱い淚を流した。かれ等がこの時の喜は今までの苦を充分に償うた。

程なくオリ井エ、とマデロンとは薦卓の前に手を握り、恩賜の金で旅裝を整へ、スキユデリイ女學士に辭別して、故鄕のジユネウへ還つた。かれ等は王の命はなくても、瑞西の都へ還る考を懷いて居た。師と父とに當るカルヂリヤツクが隱慝の跡は何時までも巴里では消えぬから。嗚呼、オリ井

エ、が父の願は、子の代になつて悟つて、これから暫く後に飾職といへば、人が瑞西首府のオツ井エ、ブルツソンを唱ふるやうになつた。

この若夫婦が巴里を離れてから、一年程經て左の公告文が世に表れて、大に社會の注意を喚起した。

近頃過を知り非を悟れる罪人あり。寺に詣りて懺悔し、金銀珠玉の贓品を献ず。是れ蓋し聖敎に重んずる所の懺悔の秘密を頼んで、聊か罪障の萬一を滅さんとするなり。千六百八十年の臈月な前に當り、寳を街上に奪はれしものは、ダンヂリイの許に就いて、詳に貨物の形標を述べよ。棄捐の品中、これに吻合するものあるときは精査の上、交付せらるゝことあらん。某年某月、巴里僧官アルロア、ド、ヨオワロン、議院代言士ピエ、ル、アルノオ、ダンヂリイ記す。

彼カルヂリヤックの簿記中に殺害の符標のなかつた寳は、それ〲に受取人が出て來たが、跡に殘つたのは皆「サン、チユウスタツシユ」寺の庫中に收まつた。

附　「シヤンブル、アルダント」の由來

打金匠カルヂリヤックが兇刃、巴里の街を閙しゝより前にグランゼルと呼ばれたる獨逸の化學者ありて、佛都に來りて黠金の術を唱へ、聖賢石をも煉出さんずる勢なりし、その門下の伊太利人エキシリイは心術正しからぬものにて、「プウドル、ド、サクセッション」といふ猛烈なる毒藥を調合せり。この名は即効散といふ義あれど、所謂効は痾を療し痛を鎮むる類にあらず、一たびこれに近づく時は、幺微の分子、鼻口に入りて、立ろに命を隕さぬものなし。この事遂に發覺して、エキシリイ獄に下りぬ。時に大尉サント、クロアといふもの、公爵夫人ブランヰエ、と密通せし罪に依りて同じ獄中に繫がれたりしが、竊にエキシリイの方を傳へ、赦されて出でし後、公爵夫人と心を合せ、

この淫婦の父を始とし、一家の老若を暫時の間に殲し盡し、其悪業の報にや、遂に利を求め財を奪ふべき標的なき場合にても、藥を投じて人を殺し、面白きことに思ひけり。或は毒を麵包の裡に裹んで「オテル、ドユウ」といへる巴里貧院の男女に施與し、或はこれを鳩肉「パステエト」の内に混ぜて、紳士貴婦人に饗し、形迹漸く現るゝものから、威權あるブランヰエ、家の事なれば、言ふもの絕てなかりしに或日サント、クロアは獨り密室に籠りて、毒粉を壜に盛らんとするに、恒に被りし玻璃の假面地に墮ちて碎けしかば、毒粉乍ち鼻口に入り、即座に命を隕したりき。夫人は情夫の死を聞きて、身の上危ふしと思ひしかば、リユッチヒの女僧院に迯入り、この院の特權を藉りて罪を免れんとせり。この處は縱令政府の命を帶びたる捕手にても、踏込むこと叶はねば、奈何せんと議する程に、邏騎の一人デグレエ僧に扮して寺に入り、色を以て夫人を欺き、或る夜街盡處の公苑に誘出し、首尾好く擒へて箱馬車に乘せ、其儘都に送りて刑に行ひ、屍首の灰をば空中に散じて、毒悪の痕を世間に留めざらんとせり。然るに誰人かこの怖るべき藥方を傳へけん、彼處此處に奇怪の死多く、親は子を疑ひ、夫は妻に心を置き、中には富豪の烹飪の事を親らするもありて、筵を張る時は酒殽を口にせず、互に相疑ふのみなりき。警察署は打ちも措かれず「パスチイ」の側に「シャンブル、アルダルト」といへる獄庭を設け、ラ、レニイと喚ばるる刻薄の探偵吏をその長とし、手段を盡して罪人を搜索せり。その頃サン、ジエルメンの街盡處に、幽に烟を立て、祈禱を名として諸家に往來する老嫗あり。其名をラ、ヲアサンといひしが、何なる人に介してかエキシリイの毒方を傳へ、サアシユ、ヰグレヨオといふ二人の破落戶を夥伴とし、親を弑さんとする不孝の子、夫を殺さんとする不貞の妻に、即効散を賣て謝金を貪りぬ。デグレエは這回もこれを訐發し、三人を擒へて、グレ

エゥ巷に引出し、遂に火刑に處せしが、チアサンの家より出でし帳簿に姓名を記したりしが爲めに、連累せられしものいと多く、中には高官の人もありきとぞ。當時「シヤンブル、アルダント」が慘毒を流しゝは嫌疑を受けし公爵夫人ブリヨンがレニイに答へたる言葉にて明かなり。レニイは夫人に向ひ君もチアサンの藥を買はれし一人なれば、彼老媼が役せし鬼の姿を見玉ひしかと問ひしに、夫人はチアサンが家にて鬼は見ねど、今日は眞の惡鬼に對する心地すと應へき。

埋木

第一回

「アルフオンス、ド、ステルニイ氏は十一月にブルクセルに來て、自ら新曲惡魔の合奏を指揮すべし、」と白耳義獨立新聞の紙上に出でしとき、府民は目を側だてたり。樂人は肩を聳かし、唇を嚙みてステルニイが音に通ずるとの深からざるを刺り、又府民が鄕土の樂人を蔑にして外をのみ求むる癖あるを憤りき。樂を知らざる府の富豪は、いつになくこれに應じて、ステルニイが噂をなすと八日ばかりなりき。噂は大抵彼が情事に關る話にて、其伶人たる技倆につきては、隻語をだに聞かざりき。かく評判ありしも秋の頃にて、語るべき事の少なかりければなるべし。

ステルニイはその頃伶人として名を博したりしのみかは、社交上にも獅子と仇名せられて、人を凌ぎたりき。名ある貴婦人の彼を戀慕ひしものあり。ジヨルジ、サンが彼のために書きし稗史といふものさへ世に傳はれりき。今其書の名を何といひしやらむ、知る人なきのみ。又某侯の夫人はかれがために硫酸のみて死にき。

五年前なりしが、彼は忽然跡を潜めて合奏をもなさず、新曲を梓に上すともせずなりぬ。今や新曲「悪魔」の名と倶に彼が名は萬人の口に上ぼりて、世の人は訝り、伶人は笑ひぬ。

第二回

悪魔の曲の試を始めむと定めしは十一月五日のゆふべなりき。

「クラシ、ダルモニイ」の樂堂には、早や人々集まりたり。常の試のをりには増して、瓦斯燈の數も多けれど、暗き客座と怪しげなる焰閃く指揮臺とのさま、何となく物すごく、瓦斯、ほこり、濕りたる布の臭、空氣の裡に滿ちて、鼠色なる霧は後に入りし人の衣の上に凝りて、潤ひたる光を放ちたり。堂内に坐しても、門外の天氣のあしさ思ひやらる。おどけたる謠ひての瓢簞なりに下ぶとりしたる顔にて、毛だらけなるが、美しく褐いろになりたる上「シャッ」を見せ、長靴の黄なる泥を敲き落し、裏返して捲き上げたる袴の下の端を伸ばして卸したる、髮おどろなす謠ひめの、心地あしといひあひて、懐中藥取りかはしたる、伶人どものしぶ〳〵に樂器をいぢりて、節を成さゝる「井オッン」の音の間にをり〳〵截れたる絲の耳を裂くやうなる響をせさせたるなど、見聞くもの皆何となくすさまじきさまなり。

人の世話にて仲間入りしたる素人二人あり。一人は獨逸うまれの「ピヤノ」の師匠にて、將來の樂に醉ひたり。一人はところのものにて、人にロシニが友とあだなせらる。

調子は合せたり。こゝかしこにて「井オッン」の一手二手、試みたる聞ゆ。瓦斯の焰はかすかに鳴りたり。謠女らは寒がりて足踏みならし、赤くなりたる手をすりあはせたり。ステルニイはまだ來ず。

ロシニが友は謠女らの側に寄りて相識りたる次高音謠ひに向ひて。「御身には氣の毒なり。ステルニイは將來の樂といふものにのみ耽りたる人なれば、彼が曲を歌はせむとするは、人の喉を苦むる最上の手段とやいふべからむ。彼が曲中の『アリイ』を歌ふは、今まで得たる音樂上の快樂の罪滅ぼしなるべし。」

次高音謠ひの婦人、「そは餘に酷ならむ。ロシニが友といはるゝ君なれば、將來の樂といふものを好みたまはぬは怪むべきにあらず。此度の曲の中にも、人の倦むべき處なきにあらねど、また面白き處もあり。」

ロシニが友は打聞きて、「將來の樂といふ派に、おもしろき處あらむとは、おのれは思ひかけず、」とつぶやきぬ。

「されど君もワグチル、ベリオツなどを、非凡の人なりとは思ひたまふべし。彼等は音樂の世界に一生面を開きしと疑ふべきならねば。」

「君がのたまふ一生面は、鬼の假面かぶりて人を嚇す類なりとは知りたまはずや。ワグチル、ベリオツはげに凡人ならざるべし。唯これに附和する輩の心こそ知られね。世には『ミユシツク、デクリプチイフ』といふ新發明の樂を說くものあり。何ぞと問へば、一揆おこしたらむやうに叫びあふ『井オリン』の響のみ。これに題して該撒が死と云ひ、ホラチイルとクラチイルとの鬪と云ひ、エズウフの噴出と云ふ。聞く人は何事にか感動すべき。徒に頭痛の種となるべきのみ。」かくいひてロシニが友は高く笑ひ、さていふ。「ステルニイが曲には何事をか巧に寫しいだしたる。才なき人の心のさまにや。」

「悪魔には珠を含みたり。彼ペサロの水禽も。」と次高音うたひはいひかけしが、「見たまへ、ステルニイのはや來と見ゆるを。たゞ離別の一ふしに心をつけ玉へ、」といふ。

樂長と親しき友の一群とに伴はれて、ステルニイは壇に上りぬ。獨逸うまれの「ピヤノ」の師匠は、嬉しげに彼が面を見つめたるを、かゝることには慣れたるステルニイなれば、目にてこれに答へ、一同に輕く禮をなして、倚譜架の前に立ち、鷹の眼を睜きて、伶人の一隊を見わたすに、「井オリン」の組一人闕げたり。「闕げたるは誰ぞ、」と問ふ。

「井オリン」の組の人々は、顏見おはせて聞えぬやうにあらぬ男の名をいひ、「彼は猶病みたりとて斷りいはせぬ」とつぶやく。

樂長、「彼が病院を出でしより幾日かたちたる。彼はをり〳〵試の席にはいでぬとあり。」

ステルニイは笑みつゝ、「それを君は咎めたまはぬにや」、といぶかりて問ふ。

樂長は愧ぢたるさまなり。「彼は此の席にて錯せぬものなれば、深くも責め候はざりしなれど、不都合なるとはいふまでもあらねば、必ず罪を正し候はむ。」

ステルニイは肩を聳かして、「罪したまふはやうなし。されど次の試には闕げたる人のなからむこそ願はしけれ。

言畢りて架を敲きつ。」

彼が指揮するさまは、エルヂイの花々しき、ヘクトル、ベリオッの物凄きには似ず、一種の面目を具へたり。初のはたらきは靜にて、殆疲れたるやうなり。面は睫毛も動かぬばかり、見るまに目かゞやき、唇のほとり引きつけたるやうにあり、胸に波打てり。曲の頂點に到れば、次第に高く手を

擧げて、鳥の翼を舒ばす如く、地を離れて飛ばむとし、忽然沈みたる面色を見せ、いたく疲れたる如くなるは其癖なり。

命にや障らむと「ピヤノ」の師匠は氣を揉み、ロシニが友はこけ威しなりとて憎みたり。

曲の初は果してわが思ひし如くなり、とロシニが友は刺れど、「ピヤノ」の師匠はなだれの落ちたる如き音を聞きて、背に冷汗を流したりといふ。

この處をば一たび繰返して、温習は猶次の日を期して止みつ。次高音(アルト)うたひは、この時裳ぬぎすてロシニが友を一目見て立ちあがり、式の如くに笑を帶びて歌ひはじめぬ。辭は戯曲に似たる「レチタチイフ」に起りて、泣く如き「メロヂイ」に入る。

嗚呼其の「メロヂイ」なり。工を弄したる跡なくして、一徃情深きさま、モツアルトにもをさ〳〵劣らじとおもはるゝに、少し沈鬱の氣象を含ませたり。ロシニが友はおもひかけずといふやうなる面持す。

をり〳〵に挾みたる粗大なる「インテルメツチイ」を除いては、惡魔の曲は歩ごとに其妙を加へて、人間界が天堂を失ひて泣くといふ心を寫したる離別の段に至りて其頂點に達したり。伶人ども皆一時に立ちて、覺えず喝采するに、ステルニイ涙を流して「かゝる、喜はけふ迄知らざりき。諸君の盡力は肝に銘じて忘れざるべし。」と謝す。「ピヤノ」の師匠は狂せむとし、ロシニが友は「剽竊なり。恐ろしき剽竊なり。されど何處よりか得たる。」とつぶやき〳〵愈々不平なる面持す。

この後にはいと醜き尾を附けたれど、今迄の美しき處を思ひて、人々咎めず。妬を帶びて敬禮す。されど人々怪しとおもふのみにて、其故を解せざりき。

ステルニイはこれより某伯の夫人の車に乘りうつりて、モンタク、ド、ラ、クウの街を上らせ、かしこにて貴人の優しき聲して饗むるを聞きて、豐なる饌に向はむとす。車の「惡魔」與行の赤き貼札の前を過ぐるとき、ステルニイは其前に立ちたる男を見たり。

そは敗れたる「フイルツ」の帽を耳まで被ぶりて、古く毛の截れたる衣を纏ひ、踵のすれたる靴を穿きたる肩廣き男なりき。

前なる車に支へられて、ステルニイが車はしばし止まりたるをり、彼はこの男の横顏をのぞきしに、不思議なり、ステルニイ色蒼ざめて青天鵞絨の車の蒲團の上に後さまに倒れぬ。

立ちたる男は酒に耽りて、面のいたく萎りたるを、ステルニイはその昔識りてやありし。

いかにとも知られねど、此男の姿は途ゆく人の目にもたちて、何ともなく氣味惡し。流れ肩に力なげなる身の搆、歩むさまさへ哀れげに見ゆるに、其風世の常ならず。燃えけん焰の迹猶殘りて故ありげなり。少し厚きに過ぎたりと見ゆる赤き唇、大なる鼻、廣き額、目は半ば閉ぢて物を見るともなきさまなるが、日を懼るゝ猛獸の如く、又世をはかなみておのれがゆくべき狹き路の外を見じと誓ひし人の如し。此面に表はれたるは舊き悲痛と新しき惑溺となり。

程なく道にゆるみのつきたれば、伯家の車は客を載せて馳去り、彼あやしき男は「バタ」店に入りて、燒酎賣る机の前に立ち「シユチウル」一杯と叫びぬ。

第三回

この人は誰ぞ。

おほ空のをり／＼地に下して、解かせむとする謎語の一つなり。されど地は、この謎語のあまりに

怪しきために、これをえ解かずして、そがまゝに葬らむとす。この人はブルクセル(白耳義)にて生れぬ。母は「ド、ラ、モンテエ」といふ芝居のうたひめにて、父は匈牙利の樂人なり。匈牙利の樂人とのみにては、猶そのいかなるものあるかを知りがたからむ。かしこには「チゴイチル」だねの樂人ありて、隊を成して歐羅巴大小の都に往來し、乍ち來り、乍ち去り、野馬の生滅に似たる社會をなすなり。この人の父もさる類なりきといへり。

母の名をマルガンエタ、ファン、ザイレンといふ。その子の名は、はゝかたの祖父の匈牙利名にて、姓も外戚の姓をつぎたり。こはその子のまだ生れぬ間に、父の逃去りたりければなり。このダザ、ファン、ザイレンが稚きときは、黒き髮圓き顏を圍みて、瞳墨を點じたる如く、身の何となく重たげなる、ひら地にて流れ多きふるさとのさまに似たる所ありき。その心ざまは夢みる如く穩にて、又燃えあがる如くはげしく、いづれとも定めがたかりき。

この人のおひ立ちし街は、ルユウ、ラアエスタインとて、高く低く曲りて、臭きと堪へがたきところなり。ルユウ、モンタニエ、ド、ラ、クウのサント、ガチエウルに向へるかたの背にあたりたれど、世には殆どこを知るものなからむ。

都の開明は、この街の隣までは來たれど、そこよりは入らず。貴人の車も、このあやしげなる街を驅りて過ぐるとなし。白耳義は平遠の地なれど、その都は丘多し。この街の高く低く、定めなきも、それに依れるなれど、その幅の狹きに併せて、車の入るを防ぐに足れり。これが習となりて、この街の民は、多く其家を街の半ばまで、引きのばしたり。この民のしわざと汚れたるさまとは、街にみなみの國の風情を與へたり。天然の

あはせたる道の上には、半ば腐れたる野菜の屑、南京兎の革、糊紙もて作りし花の凋れたる、ふりたる舞の手袋、灰などさま〴〵の塵あくたうづたかく、そのたゞ中をゆる〳〵と流るゝは黒き水なり。

ぬしなき犬あり。足きはめて長く「ヒユエ、チ」といふ獸めきて、背曲り、毛ちゞれたるが、食を求めて、塵芥の裡をさまよふさま、コンスタンチノオプルにて見たるに似たり。研ぎもの師、また其外のいやしき業に日を送るもの、時候によりて、日のあたり善き處にすまひ、又蔭をもとめて座を占めたり。ねまきのまゝにて、髮も蓬なす女ども、窗より首つき出して、はてしなき物語す。さらぬは紅く腫れたる兩の拳を、腰のあたりに推しあてゝ、門口にたゝずみ、目をしばだゝきて、時の還ひもてゆくを見やりたり。

軒端揃はず、狹くして高きあれば太くして低きあり。その低きものは、上より壓されて、土中にめりこみたる如く、赤みどり色の、おそろしげある屋根をいたゞきたり。かしこゝの窓には、小さき鉢植の木あり、また布を垂れて深く藏したるもあり。家なみのところ〴〵には、きたなげなる酒店あり。赤黒くぬりたる戸の上に、白く「ヒイル、フエルコオプト、メン、ドランク」（こゝにては酒を賣る）と題したり。

これより裏の街々は、ゲザが若かりし頃、みな見ちがふるばかり相似たりしが、尤も汚れたるはルユウ、ラアエスタインなりき。ねぶたげなる街の物おとを破りて、をり〳〵聞ゆるは棺つくる槌と石きざむ鑿との聲のみ。年を經て灰色になりし寺の後壁には、あやしげに大なる十字架倚りかゝりたり。これに縛りつけられて、濟度しがたき衆生を見おろしたる耶蘇基督の光明は、煤にて包まれ

たり。街を流るゝ水の、あまりに濁りたらぬ日には、色硝子張りたる、狹き寺の窓、これに映じたり。

この間にてゲザはおひ立ちぬ。母はかの時の過ぐるを門口に立ちて見る女の一人なりき。美しき白耳義の女子なれば、身のたけ高く、少しおもたげなる處ありて、手足は白く肥えて力あり。おもての色は紅さしたる乳汁のやうなり。白き齒を見せて、輕く開きたる朱唇、まはりに薄くれなゐの色ある鼻翼、少し飛びいだしたるやうなる目、ルベンスが畫のマグダレナに似たる獅子色の髮の波打ちたる、これ其姿のあらましなり。芝居に出でぬとき、また門口に立たざるときは、屋根裏の一間なる蒲團の上に坐して絶えず物を讀みたり。そのふみは古道具店にて、何人か買來たりし數年前の畫入雜誌にて、中には多く盜俠の事など書いたり。ラアエスタインの女はかはる〴〵これを讀みて、心の養としたりしなり。

ねふたきまでに怠り、力なきまでに人好く、ゲザには甘き言葉のみかけて、いつの頃よりか、此家に迷ひきたりし灰色の大猫にも、やさしくのみしつ。唯束の間の快樂知りたるのみなれば、月の初には子に旨きもの食はせ、月の終には人に物借りて暮しぬ。

ゲザはいとけなき時より音樂を好みて、まだ物もえいはぬころ、母の抱きて小歌うたふを聞くとに目をみひらきて、母の顏を打まもりぬ。

始てこの子に「ヰオリン」を敎へしは、マルガレエタが友某なり。ゲザが進歩は驚くばかり速なりき。その隙に母の困苦甚しうなりしかば、吾子の「ヰオリン」彈くを奇貨として、これに賴らむとする心起りぬ。まだ九歳なりしゲザは、幾程もなく、その頃「クラン、サブロン」に假小屋掛けたりし

藝人仲間に雇はれて「井オリン」を彈くことゝなりたり。この藝人仲間といふは、美男の輕わざ師一人、モラロとて極めて醜き矮人一人、驢馬一頭、猿四匹なり、驢馬には三本のあしにて行く藝ありといへど、恐らくは藝を須たずして、かく行くならむ。この仲間に髮長く、胸いと狹き「スピチット」彈きあり。取れたる器より、あやしげなる「ワルッアア」、「ポルカ」などの曲を打ち出だせり。ゲザが役は年老いたる笛ふきの女と共に、この男の業を助くるなり。あはれ、この男、生涯に一たび輓歌なりともかなでたしといへど、その望かなふべきか、いかに。

この仲間は、日ごとに午後二時より四時まで、技を奏するに、その小屋は常に空し。ゲザは樂屋の上に坐して、心ともなく「井オリン」彈きて、小屋の棧敷を見御すに、輕わざ師は白粉つけて粧ひ、紅衣緑袴、頭にこがねの環をはめて、蜻蜓がへりし、また倒に横木に懸りなどす。又矮人は半身黄に半身青き肉じゆばん着て、赤き毛の生ひたる大頭ふりたて、卑猥なる戲したり。喝采を得るは、いつも矮人なり。小猿は顫ひながら、覺えたる技をなせり。鋸屑、瓦斯、橙の皮、猿などの胸わるき臭絶えず來りて鼻に入れり。暫くしてえ堪へねばくさみす。また暫くしてねふたくなりて、「井オリン」の弓動くとゆるし。この時、「いざ〳〵、いかにかしたる、」と足ずりして責むるは、例の「スピチット」彈きなり。驚きて目を開けば、下棧敷の端に坐して、これもねふたげなる母と、おもはず目を見あはせたり。ゲザは力づきて又彈く。母は芝居のひまあるごとに必ずこゝに來居たり。そをゲザは我「井オリン」聞きに來たりとのみおもひぬ。

ある日ゲザは、矮人モラロとものあらそひして、この仲間の雇を解かれぬ。されど母の小屋に入る

とは猶止まざりけり。

さる程に、四月某の日の晝過ぎ、風勁くふきて、雨窓を打ち、いと寒きに、いまは榮なくなりたるゲザは、あやしく傾きて、四脚よろめく机に兩臂つきて、兩手の拇指を耳の穴にあて、素と母の翫びし古雜誌の怪談に讀耽りて、戶の外にて冬と春とのおそろしき戰するをも知らでありけり。そこへ遽しく入り來し母は、吃りながら「晩食は調へておしいれの中にあり、わが歸は遲かるべければ待たでたうべよ」といひき。

母の遲くかへらんといふは、常のとなれば、ゲザは「さらば」と答へしのみ、讀みかけたる書をすてゝ、母の顏見むともせず。

母は出でゝゆきしが、まだ五分もたゝぬに歸りぬ。

ゲザ、「物を忘れたまひしか。」母、「さなり」。

母の顏はいと赤く、そこか、こゝかと物を搜すやうなりしが、忽ち身を屈めて童の頭を抱き、二たび三たび接吻し、又童の頭をわが胸におしあてゝ、「すこやかにてあれかし、」と口の裡にてつぶやきて出でぬ。ゲザは何心なく雜誌を讀みたりしか、さらでだに印刷善からぬ紙の上に、きら／＼と光るものありて、字を掩ひたれば、塵りのけんとして見るに、こは母の淚なりき。

ゲザはいつもの如く戶口に錠をも掛けず、床に入りしが、朝目醒めて見れば、母の床は宵のまゝなり。驚きて一聲二聲、「母樣、母樣」と呼びぬ。

童ながらも、此聲の母に聞ゆべきにあらざるは、明に知りたれど、唯我胸の閉ぢたるを開かんためにかくは呼びぬ。さて獨起きて衣を着て、街に走りいでぬ。

いと寒き朝なりき。融けたる雪に、水かさ増したる街の溝は、朝風にさゝ波立ちたり。赤き旭日の光は、斜に寺の窓を射て、灰色なる壁の内より、悲しげなる「オルゲル」の音洩れきこゆ。ゲザは泣きいだして「母様、母様」といよ／＼聲高く呼びぬ。マルガレエタは常に子を愛するとをば忘れざりければ、理なるべし。

童はかなた、こなたを見れど、物言ふべき人もなし。母に棄てられて、よるべなき身なりとは、此時悟りぬ。ルユウ、ラアエスタインの子の物わかり早さよ。

この時痩せて細長き手にて、ゲザが肩を抑ふる人あり。見れば我側に立ちたるは知らぬ人にもあらず。マルガレエタが屋根裏借りたる家の二階に住める老人なりき。色の青さは、彼十字架にかけられたる耶蘇の人形に殊ならず、面に悲を帶びたるさへ、かれに劣らず見えたり。「ふびんさよ、母に棄てられて。」

ゲザは覺えず下唇を噛みて、顔の色赤くなり、此人の手を振りおとしつ。人の憫を受くるつらさをこのをり始て覺えたるなるべし。老人は猶もやさしく童の頭を摩りて。「母を憎しとな思ひそ。戀はかゝるものなり。」ゲザはその顔打守りて「戀とは」と問ひぬ。

老人は謦咳して。「病なり、熱ある病なり。これを煩ふ人は美しき夢見て、きたなき業するものぞ」。

第四回

ガストン、デリレオと名乘れる此人をば、ルユウ、ラアエスタインにて誰も知りたれど、唯「トロオ井イゲ、ヘエル」(かなしげなる君)とのみ呼びぬ。年は四十と五十との間なるべし。面は黄にて、ふるびたる象牙の彫物に似たるところあり。まだ黒き髮の長く、すなほなるを、額を掩ふやうにか

きて、頬髯生やしたり。暑き盛の外は必ず赤裏つけたる濃き藍色の外套きて街を歩みぬ。こゝへ遷りしは七月許前なるべし。行逢ふ小兒の頭を摩り、女の前通りすぐるたびに禮をかゝねば、皆善き人なりといへど、誰も交るものなし。

マルガレエタは驅落する前に、子供の行末のと、くれ〴〵も頼みたる文一通、此人の戸口の郵便箱に投入れおきつ。常には手紙の入りたるとなきこの箱を、ことさらに撰びたるは、天晴人を識る才ありてのとあらむ。デリレオが妻は世をさりて、跡に殘りし一人娘は、男世帶にてをしへ育てむと難ければにや、佛蘭西へやりて、家にあらず。此人は情深き性なるに、生涯おもひの儘に人をも愛し、人にも愛せられしとなければ、今の淋しさ忘れたく、深く案じわづらふともなくて、ゲザを迎へ取らむと思定めて、「朝食に來よ」とやさしくいひて、童の手を引き我家に伴ひいりぬ。

朝食果てゝ、デリレオは机に向ひぬ。都て世慣れぬ人は、益なき事にもすぢ立する癖あるものなり。今この童のために敎育の時間わりを作り、いまより十年が程に此童の用ゐるべき品を考出して記すも、さる類ならむ。その隙に紺青染めの壁紙はりたる部屋を、あち、こちと見廻りたる童は、帝國時代の道具の角張りたると、ルイ、フイリツプ時代の道具の曲りくねりたると、打交れる飾付のあはれげなるを、珍らしげに見つ。

壁に掛けたるは嘗て一たび名高かりし畫工の作れる圖にて、「ア、モン、セラミイ」(贈我親友)云々と題したる綠の文字猶讀まる。その側には黑欄に挾みし詩人某某の自筆あり。眞中には早がきの肖像一つあり。稀なる美人の白き「アトラス」絹の衣きて、首に玉をつなぎし紐を結び、頭に小き冠を戴きたるなり。

ゲザ、「こは女王にや。」デッレオはまだ物書きてありしが、面をあげて、「そはガルチエッなり。」ゲザは「さなりや」と答へしが、心には何ともえわきまへざりき。

宜なり、まだ穉き身には、ガルチエッが當時、世に聞えたるうたひ女にて、妙藝の名は、無賴の噂と共に高かりしとを知らざりしも。

しばしありてデッレオは語を繼ぎて。「かれも女王なりき。うたひ女の王なりき。」

ゲザは猶圖を打守りて、「おん身はその人を知り玉ひしや。」デッレオは徐に、「かれは吾妻なりき。」

ゲザ、「さらば此女王はおん身をいたくかはゆがりしならむ。」こは主人をうれしがらせむとおもひていへるなり。

デッレオはこの言葉や胸につかへけむ、顏打そむけつ。此肖像の前には大理石造の卓に載せたる青色の古花瓶ありて、絶えず新しき花束を挿したり。

第五回

迎取りてより程もなきに、デッレオは童がうまれつき音樂を善くすべきものなるを看破りたれば、ブルクセルの音樂傳習所にて評判好き「井オッン」彈き某といへる師を賴みて、其業を磨かせぬ。その他の敎は、デッレオ自ら授けたり。この人の說にては、善き敎ありといふは、假名づかひ正しく物くとを覺え、廣く書籍讀むとなりき。

主人の骨折は一方ならねど、ゲザは兎角假名違へてかきぬ。これとはうらうへにて、著しく進みたるは讀書の方なり。デッレオが愛讀の書「エッセエ、ド、モンテエン」れはや諳rec記へて、その自作の小說「プロメトイス」に遷りぬ。此書は梓行の書肆に逢ざると十年、例の濃き藍色の外套と共に老

たるものにて、一種えならぬ臭氣ありて、通篇ふるびたる社會改良的思想を寫出したり。その發端は「メエルヘン」に似て、その結末は讃美歌なり。

夕ごとに此小說を讀みきかせらるゝを、ゲザは耳欹てゝ聞けど一言をもえ解かざりき。

げに二人は珍らしき一對なり。生涯に何一つしいだしたるともなく、つか穴に片足ふみこみたる翁の忙しさ、身によの常ならぬ才能ありと自ら信じて、行末きはみなきやうにおもふ少年の氣の閑けさ、彼は果敢なき今の世を厭ひて、斷えず三十年代の夢を喚びかへし、此は經驗なき心に將來の樂しさのみおもひぬ。二人は疑もなき空想家なり。　されど最氣の毒なるは主人デルレオの方あるべし。

憐むべし、デルレオ。彼は世に所謂萬能の人なりしが、生涯何事をも得遂げざりき。音樂、繪畫、文學、經濟、いづれも時の次第もなく究めつ。その頃社會改良論の盛に起りしを見て、彼は又いたくこれを信じ、サン、シモンが徒に從ひて、後にて結ぶ中單を着け、我名書きし鉢卷をしめなどしたりき。

人の噂には初サン、シモンの徒が分業の手つゞきをなしゝとき、デルレオの受持ちしは、人のために靴を磨き、又人に金を配るヿなりといへり。げに彼はこの外に使ひかたなかりしならむ。後にマダム、スタエルが分派の母の位を辭せしとき、これに就くべき婦人を求めむとて出でし三百人の組にも、デルレオ居たりといひ傳ふ。かゝる由なき事にデルレオは家財を失ひ、平生の望は霧の如くに消えて、うしろめたきヿのみ多かりければ、しばし身を浮世の外に置きて、人にわれを忘れられ、われも亦人を忘れんとおもひぬ。されど彼も猶一つの望をば懷きたり。そは例の小說を世に公

にせむとおもふ果敢なき願なり。

いまの所にてデリレオが業といふは、樂譜寫して錢を獲るのみ。これも昔ルウソオがせしなりはひなりと思へば、賤しと嫌ふべきにあらずと、自ら諦めたるなるべし。

二三年が程に、ゲザは美しき少年になりぬ。心さとく情深きとは、デリレオが敎にて人並に勝れたり。されどサン、シモンの殘黨を師としたのめば、男らしき性の闕げたるもことわりならむ。ゲザが傾のやう〳〵醒めて夢みる如くなりて、思慮に整ひたるふしなきを見て、心あるものは行末覺束なしとおもひぬ。その仕事するを見るに、熱を病める如く勉强するときありき。又いたく倦みて一事だになさゞる時ありき。久しく忍びて、物をしとげむとする力は絶えてなかりき。敎課の上にては、心にて悟ると人に優れたれど、記臆などの性を頼みては、よの常の音樂傳習所生徒に一等を輸くると多し。「井オリン」をしふる師は、これらの性質に心もとめず、只進歩の早きをのみ見ていたく喜び、かしこ、こゝの好事家に引合せなどしつ。

ゲザが「井オリン」は、譜によりて巧に彈くのみならず、をりに觸れて當座の曲をなすに、凡人の及ばぬところありと師は褒めたゝへき。

沈みたる性の人多きブルクセルにて、ゲザが破格の音樂は聽く人を駭かし、その「チゴイ子ル」種なりといふ噂高きと共に、色黑き美しき顏を愛づるもの少からず、絶頂のほめ詞は必ず「コム、セエ、チガン」の語なりき。

或る日ゲザは始めて音樂會に出で、公衆の前にて技を奏せむとするに、若き人の癖とて、自負心强く、時刻遲しとのみおもふを、デリレオ我事のやうに憂へて、食はず、寐ず、「もし仕損ずるとあ

りても、心になかけそ」、とうるさきまで諫めつ。

ゲザは此諫に腹立ちて、帽を額深く被ぶりて、走出で、足ぶみしてルユウ、ラアエスタインをゆきつ戻りつすれば、デリレオは胸のみ痛めて、部屋の內を驅廻りたり。場に上るときとなりては、デリレオが心配いよ〳〵甚しく、いかに勸むれども座敷に入らず、樂屋の出口に立ちて息を凝らし、兩手にて耳を塞ぎて居たり。

忽ちおそろしき響、おさへし手を洩れて、デリレオが耳に入りぬ。驚きて手を放ちたる老人は、初火事起りしかと疑ひしが、あらず、此響は幾百人の喝采拍手の聲なりき。デリレオは夢の如く、樂屋に跳り入りてゲザを抱きぬ。藝人は皆手を握りて祝し、前途の事さま〴〵にいひて褒めそやすを、世間知らぬ少年なれば、おほやうに聞きたりしが、前なる戶の俄にあきて、兩手さしのべ入り來たりし美男子の面を見て、流石のゲザも驚きぬ。その人はアルフオンス、ド、ステルニイありき。

「今宵を過さで、おん身に近づきにならむとおもへば來ぬ。わがよろこびをも受けたまへ。」

ゲザは聞きて、今までそらしたりし頂を垂れて、慄ひて冷たき手を、此名高き「ピヤノ」彈きに握らせぬ。

第六回

アルフオンス、ド、ステルニイ。此名の響善かりしとは、冷淡になりて、批評の眼に誇る今の人にはわからぬなるべし。當時の音樂世界にて、二三の「ピヤノ」彈きの占めたる名譽は、神も若かざるべく、其首に居りし人はステルニイなりき。ステルニイに逆上せて狂人となるさまは、さながら時疫の如く、かれが技を奏する街々にはびこりぬ。後言するものは、此譽を藝よりは人品に依れりと

いひき。

ステルニイが人となり、所謂「ホム、ア、サクセエ」にて、品格善しといはるゝほど身だしなみし、氣象高しといはるゝほど物に拘らず、才ありといはるゝほど口惡く、非凡なりといはるゝほど輕游にて錢づかひ荒し。顏かたちは美しきに、髮を新樣に斬らせて、額を掩ふやうにかき、衣は僅に過去りたる流行の形を用ゐて、毫も藝人の癖見ゆる異態を成さず。父は佛蘭西の外交官にて、財産は二萬五千「フラン」ありと人皆知れど、この財産はかへりて伊太利の某婦人のかたみなりといふとは、誰も知らざりき。

ステルニイが「ピヤノ」は珠の雨を降す如く、花を鎖に編みたる如し。技藝の調和に深く心を用ゐて、手を下すに及びては、つとめて卑しからざらむことを求めたり。さればこれを聽くに、いつにても一敲の誤なければ、よの常の妄に指板を擊つものに似るべくもあらざりき。匈牙利產れの名高き「ピヤノ」彈き某といへるは、嘗て之を誹りて「ステルニイが技は貴女子の指より出づる如し」といひき。此言は早くもステルニイが耳に入りしが彼は僅に微笑したるのみにて、舊に依りて其「ピヤノ」を撫づること、愛子を弄ぶやうなりき。當時世人の耳は實に樂器を虐使する者に倦みたれば、この優しきふるまひは、却りて人を動かすに足れりしなり。彼が交る所は最貴きわたりのみ。されど同業のものをも、常に引立つるやうにすと噂せられぬ。

ステルニイはまことに能なきに非ず。されどゲザが始て逢ひしときは俗慮胸に滿ちて、名利をのみ事とする人ありき。その人をも世をも欺くに至りしは、後の事なり。世俗に推されて、餘りに高き礎に上りし後の事なり。この位を守らむとするには、別にせむすべなかりしなるべし。思ふに

ステルニイならぬ人を、かほど力に踰えたる位に置かば必ず目くるめきて墮ちむ。人を引立つるは、ステルニイが得意のわざなれば、こたびもゲザが手を握りしのみにては、足れりとせず、「オテル、ド、フランドル」へ次の日の朝來なば、行末のことをも相談せむと契りおきて、さて他の藝人にもそれ〴〵に挨拶し、涙を頰に傳はせたるデリンオが手をも握り、つひには又ゲザが肩を叩きて去りぬ。

今日の會主が催しゝ晩餐の席にては、ゲザは一臠をも食はず、又一言ものいはず、顏の色蒼ざめて、目はきはみなき空をのみ見やりたり。この未來の空には、無垢世界湧出して、金葉珠果の樹茂りおひたるも見ゆべく、刺なき薔薇の花分けゆけば、美しき女神福を賜ひて、月桂の梢は唯おのづから我前に打靡くなるべし。かの光を怯るゝ猛獸に似たる目は當時なほ靑空を飛ぶ鷲の眼にて、おそろしき夏の日をも憚らざりけむ。

第七回

能あれどまだ名を成さざる、若き藝人をもてなすとの厚きに、ゲザ深く感じぬ。二たび三たび引繼きて朝食に招かれ、果はステルニイが「オテル」の置ものゝやうにせられぬ。或時は「井オリン」抱いて來させ、當座の曲にあはせて、我「ピヤノ」引き、こゝにてもステルニイは人の心を奪ふとの難からぬを知りぬ。或時は又共に語りて、童の言を可笑しとて高笑す。人に逢ふごとにいふ。「我『チゴイネル』の童見しや。珍らしきものなり。當座の曲を善くするとはショピンにも劣らず。唯其途おなじからぬのみ。きのふはシエ、クスピヤ引いだして、今日は『マルサラ』を『トカイエル』に劣れりといひき。(並に酒名)顏は喰ひつきたき程美し。」

世の七不思議に、又一不思議添へたりといふ、少年の「井オリン」引の評判は、早くブルクセルの貴族社會に高く、某の侯爵夫人はあるとき、ゲザがために夜會を開きしが、この折角の評判、今少しにて泥土に委ぬべかりきとぞ。

その夕暮には、ステルニイが世話至らざる所なく、兼ねて自ら誂へて與へし漆靴穿かせ、白き襟飾の端まで手づから引直しておのれが車に乘せ、侯家のやかたへ伴ひぬ。怜むべし、ゲザが自重の心は、早く彼古き兵器にて美しく飾り、珍しき黒色の鎧二領を据ゑつけたる玄關にて挫けぬ。公衆に對しては、獅子にも似たる勇氣を見せし少年、今は小供らしくもステルニイに寄りすがりて、僅に座に進むほどに、侯爵夫人はステルニイを出迎へて。「評判の世界の不思議とやらを連れて來玉ひしや。」

この夫人薄色の髮に、細き顏を圍ませ、並々ならず愛相好く、また極めて活潑なるに、劇しき度の近視なれば、「ロニエット」といふ柄つきの目鏡、片時も目より離すことなし。その世界の不思議とやらといひし聲の裏に、何となく可笑しとおもふ心を含みたるやうなるは、此社會の習にや。

「これこそ其人なれ。名はゲザ、フアン、ザイレン。いかにおもしろき名とは思召さずや。」とステルニイ答へき。さて言葉をつぎて。「この子はまだ人みしりする癖あれば、其心し玉ひてよ。」夫人、「そはまことにや。そは面白し。總て藝人には自重の心あるこそ善けれ。其心は藝人に似合ふものなり。この子の目の美しさよ。」と例の目鏡にて見て。「侯爵もこの目をほめ玉ひぬ。殆まことの『チゴイネル』種のやうなり。頃日シエ、クスピヤを引いたりとか、われもいたく笑ひぬ。」外の客來にければ。「ステルニイ、君はこゝを内のやうにしたまふとなれば、この子にも心おかせ玉ふな。」是

れど夫人が人みしりする童を扱ふ仕方なりける。

ステルニイはしばし童を片隅に措きしが、程もなく又引出して、男女さま〴〵の客に引合せつ。ゲザは努めて人に臆せぬやうに見せたり。婦人は皆やさしくもてなし、何につけても此少年の肩持つやうに見ゆれど、さればとて言葉をかくるものもなし。一座はゲザが目の前にて、ゲザが事のみ語れど、物いふものなければ、彼人々はゲザを石像の如くおもひたるか、さらずは佛蘭西語解せぬ人とおもひ謬りしかと疑はる。ゲザは猶目の前に立ちたるに、人に向ひてこれを譽め、これをながめ、遂には外の人に向ひて外の話するを見るも心惡き限ならむ。

ゲザは薄き氷を踏む心地して、寒からぬに慄ひぬ。渾て身のめぐりのものを見るに、皆ひかり耀きて、又いと冷なり。上等社會に行はるゝ靜なる聲は、大に耳を痛むる如し。實に人々の言葉は、ゲザが燃ゆるやうある頰を打つと、輕けれど痛き雪片の如くなりき。

ゲザは泣かまほしう思ひぬ。世界の不思議と稱へられ、柄ある目鏡にて覗かれ、さま〴〵に許せらるれど、心ありて顧みる人なきに。

物語の中に、あの子はラアエスタイン街にて生れぬと云ふ人あり。婦人方口々に、ラアエスタインとはいづくの街にか、ラアエスタインとは何の事にかあるといへば、そを婦人の方々に聞えむは憚ありと答ふ。そは又實にや、されど善き育の見ゆるはいかに、げに卑しきものらしき處絶えてなし、唯「チゴイネル」に似たるのみなど婦人いひあへり。これを聞くゲザは喉を緊めらるゝ心地しつ。

「今宵は君がみ聲を聞くこと出來ぬにや。」と婦人幾人かステルニイに迫りて問ふ。

「我聲をいかでか。我は今宵世話役の積なり。それさへあるに頭痛みて耐へがたし。」

今やゲザが技を奏すべき時來たりぬ。胸の動悸は激しくおりて、頸のあたりまで響き、常の我をばいづくにか失ひて、指を絃上に加へしときは、唯是れ衆人の前に推出されて、遽に度を失ひし田舍人のやうなりき。

メンデルソンの「ゲ、モル」調の半ばにて、忽ち曲を忘れ、慌てゝ絶えし音を繼がむとして、聞きぐるしき過をなし、やう〳〵彈じはてぬ。かゝる拙き技は、げに珍らしかるべし。ステルニイは失望の色を面にあらはし、ゲザは地の底にも入りたく思ひぬ。

拍手の聲かしこゝに聞えざるにあらねど、そは毫も聞かざりし人と、聞けど解せざりし人とのみにて、多くは唯肩を聳かして、「ステルニイの人に心醉する可笑しさよ」といひき。

ステルニイはゲザが斯く拙き曲を聞かせしと、前後に無きを明して、あはれなる少年のために無實の罪を雪がむとおもひしが、人々は唯、「我等はおん身を咎めむと思はず、おん身は人に心醉し玉ふ癖あれば、」とのみ云ひて取上げず。

一座ははかなき物語し、笑ひ、嘗むるともなしに酒茶を嘗めなどしたりしが、美しき貴婦人一群、衆人の使に立ちて、ステルニイに一曲を求むるほどに、こなたは心よげに受引きて、勝を赤然に知りたる面の色晴やかに、「ピヤノ」に向ひぬ。

さて曲を終りて、ゲザが傍に歩寄り。「我見よ、心を鎭めて、我が外に聞く人あるをしばし忘れ玉へ。さらば先に我に聞かせしとある當座の曲に似たるもの、出來ぬともあらじ。こは汝が身の上にもかゝるとなり、我も汝が聚めらるゝを聞きたきに。」

此言葉にゲザは自ら奮起して、君が辱にならぬやうに、一曲を試みでは止まじ。」と口の裡につぶやきしが、面の色は眞蒼になりて、身うち慓ひ、手に「ヰオリン」取りし時、眼一たび輝ぎて、忽又黒き睫毛の背にかくれぬ。

その時童が目の前には、火の雨降るやうに見え胸の中には欲うづまき起りて、狂へる如く戀ふる如き物の音耳を衝きたり。

あはれ此曲、夢中にや成りし、さらずば、遠き父のふる里より木がらしや吹送りし、さらずは又、悲しげなる救世主の見御し玉ふ、あやしき街の戸口にて、我見を眠らせむと歌ひし母が、夫より傳はりたる節々を、また此童に傳へやしけむ。

唯聞く、ゲザが手中の「ヰオリン」は、乍ち歌ひ、乍ち泣けるを。匈牙利の「チゴイチル」ならで、かゝる聲音を出し得るものあらむや。

人を醉はしむる節奏、溢るやうなる音の曲折、情と樂との亂狂へる風雨雷電。さて最後の一聲は虚空に向ひて放ちたる歡呼なりき。

ゲザは目をみはり、息を凝らして立てり。彼は自ら力限の技を奏せしを知りたり。彼は耳を欲てたり。されど公衆の前にて受けし如き喝采は、此上等社會に無きものにて、唯秋風枯葉を捲く如き聲座に滿ちて、遙か後の方より。面白し。珍らし。人の猶くならず。「チゴイチル。」などゝいふ語聞ゆるのみ。

この有樣にゲザは頭を低れしが、忽黒雲目の前を飛ぶ如き心地しつ。ステルニイはさし寄りて、輕く肩を打ち。「好し、好し。それにて名譽は回復したり。」と慰め、笑を帶びて人々の方に向ひ。これに

ても我を心酔したりとの玉ふや。」
ステルニイが此言葉はゲザには聞えずゲザは唯ステルニイが手に熱き唇をおし當てゝ涙をはらはらとこぼして泣きぬ、ステルニイは彼がためには只神の如くなりき。ステルニイは大いなる幼兒、早や止めよ、と慰むるを、人々打見て、ゲザが技にも増して貴みぬ。
或る日ゲザは『シメエル』とは奈なる物ぞ、」とステルニイに問ひかけぬ。
こは甚前の事にて、佛人ボオドレエルが著したる「惡の花」といふ書を、解せぬながら翫へし居たるゲザが口より出でし問なりき。ステルニイは日本絹の黄なる寢衣を衣て、その襟大なる王蠟燭といふ草花めきたるが、書きかけたる手紙をおきて、伸をなしたるさま、顏の色の蒼ざめたるも際立ちて、十五年來一夜も穩に眠らぬ人と知られたり。
『シメエル』とは奈なる物ぞ、」とゲザ再び問ひぬ。
「なに、『シメエル』とか。そは羽ある女怪の名なり。」とふりかへりて答ふ。
「さなりや。」と瞼を低れて、暫し考ふるさまなりしが、又目を開きて。「さては刧を歴たる女怪なりと見ゆ。」
「まづ左樣のものならむ。」
ステルニイは足を温めむとて「カミン」爐の前に椅子を寄せつ。「堪へがたき寒さかな。そこなる『シヤルトリヨオゾ』を。それにて善し。修行を積みし女怪とおもふも可ならむ。常の女怪は人の腕を持ちたれば。それを枕に樂みて身を滅すものあり。『シメエル』の手にはおそろしき爪ありて、人の心を搔裂くとあり。常の女怪は人を沼に引入るれど、『シメエル』は人を天に招きのぼさんとす。天は

達しがたきものなれど、沼に入り、泥の中にはまりては、なか〳〵樂しきとあるものなり、限なく樂しきとあるものなり。されどそは汝がまだ知らぬ境なり。」とゲザが耳をつまみて引きつ。

ゲザは呆れたる面持して跼居たりしが、スタルニイが講釋は半ば分らざりしなり。「されど我等の中、天に達するものあきにはあらざるべし。美術の天に、『ワルハルラ』(樂土)に、『パンテオン』(人を神に崇めたる祠)に。唯々早く途に上ぼるをこそ善しとすべきならめ。」かく言ふは、多く讀みて少しく解したる若き人の口吻なるべし。

「さなり。天に達するものなきにしもあらず。」とスタルニイは微笑しつ。「ミケランジエロ、ラファエル、ベエトオフエン、」と並は數へつ。

「シエ、クスピヤ、ミルトン、モツアルト、レオナルド、ダ、井ンチ。」とスタルニイは高く笑ひながら言ひつぎたりしが。「されど天に達するには、非常の力なくては協はじ。又天にあらむとせば、その灝氣を吸ふために、一種の肺を備ふべきものならむ。」

スタルニイは斯くいひて輕く欠しつ。彼は嚴しく「シメエル」(不朽を誅らむとする妄想)を遠ざけて常の女怪と遊びたはふれ、その女怪に心を奪はれざる一人なりき。

ゲザは猶心に落ちざる節ありと覺しく、「さて『シメエル』には皆羽あるものにや、」と問ふ。

「否、羽なきもいと多し。されどそは怖るゝに足らず。人を功名の道に誘ふなどは、そのえなさぬとにて、彼等は唯四足を泥に植ゑて、月に向ひて吠ゆるものぞ。」

「されど。」

猶問はむとするゲザが口を遮りて打笑ひ。「我學問は早やこれ迄なり。猶疑あらば、呼鈴鳴らして、會

話辭書取りにやるべし。

第八回

七年ばかりたちて、五月半ばに、ゲザ久し振にてブルクセルにかへり來ぬ。ステルニイが勢力にて、官費と貴人の醵金とを得たるゲザは巴里にゆきて、當時名高かりし師を訪ね、「井オリン」を學びぬ。巴里にては、學びもし、又遊びもして、人に譽められ、又妬まれ、三鞭酒の杯擧ぐる手つきを覺え、禮を守らざる男を憎む婦人と、禮を守る男を憎む婦人とを見分くる術を得たり。

ゲザがはじめての旅かせぎには、名高き伊太利の歌姫と、それよりも名高きメエレンの座元(イムプレサリオ)とを同行としたりしが、途々にて桂冠を得たると幾度といふとを知らず。ニッツアに至りしとき、歌姫の事にて、「井オロンセロ」(膝胡弓)彈きの男と爭ひ、遂にこれに決鬪を言込みて座元を辱めつ。されど座元マリンスキイはかゝる瑣事を心に留めず、實利をのみ心掛くるものなりければ、二月後に巴里にて亞米利加ゆきの一行を募りし時、再び巨額の給金にてゲザを雇はむとせしに、ゲザは懷中に蓄へたる、前度の旅かせぎの利益金數千「フラン」を賴みて、技を賣らむよりは譜を作るこそ我本意なれ、と答へき。ゲザは當時二十四歲、この齡には已に不朽の業をなしゝ樂人も少からぬを、ゲザが公にせしものとては、十年ばかり前に印刷せしめし「レエウリイ」(夢曲)あるのみなりき。此曲は白人著作の習とて、美しく仕立て、首に少年作者の像を附けたる一冊子にて、フオオブウル、サン、ジエルマンにて家ごとに購はれ、それより外へは出でざりき。

その後紙に上しゝものは少からねど、これを完うせしとなし。さるを猶自ら著作に富めるやうに思ひしはこれを完うせむと思立ちだにせば、直ちに成らむと信じければなり。曾て筆取りて紙に臨み

しこと屢ばありしが、さま〴〵の趣向亂れおこりて捉ふるに由なかりき。唯餘閑だにあらば、事は成るべし。されど閑といふものは、巴里にて價貴き貨物なり、貴人ならでこれを得むこと難からむ。この時想起しゝはブルクセルなり。かの「ゴチック」風の寺院高く聳えて、隘き街は曲りくねり、加特力敎人を醉はしめ、草木繁り、生路塞がりたるブルクセルなり。ブルクセルなつかしと思ふ心止みがたくて、ダザは途に上りぬ。

時は五月半ばなりき。こはブルクセルの美しき時節なり。日は雨と久しく戰ふとなく、唯折〳〵小ぜりあひをなして大氣を淨め、こがね色したる靄は虛空に滿ちて、遠方の見えずなりたる街道を夢物語のやうに包み、「サント、ガヂウル」寺の「ゴチック」風の石塔のめぐりに光まばゆき彩雲を起し、公園の青草に「ブロンド」なる面紗を被せたり。げに怪しきは此濕りたる澤、此金色の霧となりたる日影、此春ごとに灰白なるブルクセルを包める佛頭光なり。

園中の石像は今や蘚の帽子を脫ぎすてたり。日光は彼六月初旬に失せぬべき春の薰を溢く心地よく吐きたる木々の若葉の間をすべりぬけ、中に橫れる枝の輪囷として色黑きあたりに白かね色の輪廓を作り、十圍もあるべき巨幹に澤ある大光斑を印し、おもしろげに露を帶びたる草葉の上に落ちて、透きとほりたる木の葉の影と捉迷藏の戯をなしたり。

オラニエン太子が家の前には、白きと海紫なるといり雜りたる接骨木花、ゆたかに頭を掉り、御苑のわたりには菫花の如く碧き「ロドデンドレン」咲亂れて海をなしたり。この上を有るか無きかの溫き風、花の香に飽きて吹けば、これに觸るゝもの眠を催さむとす。是れ北國ながらの「シロッコ」風なるべし。

ゲサはガアル、ドユ、ミヂイよりブウルワアを横ぎりてラアエスタインに向ひ、すこやかに歩をはこび來しが、物として面白からぬはなく、皆故人の如く、我を迎ふるやうなりき。暫し行きては立留りて、後を見かへり、獨り打笑み、又行き又住まり、殆世を忘れたるやうなりしが今モンタグ、ド、ラ、クウルを出りてラアエスタイン街に來ぬ。この時胸を緊めらるゝ如き心地して、何となく苦しく、踵を旋らさむとおもふばかりなりしが、却りて足は進み〳〵ぬ。遠見には濕ひたる金光かゝやきて、此中古建築法の痕を留めし街と、黑き寺壁に倚りかゝりたる救世主とは、金地に畫きたる如し。

「デッレオ君は居玉ふか。」と門口を洗ひゐたる(こゝには珍らしき喫𣝣しならむ)婢に問ひぬ。フラミヤ語は久しく操はねば、唇を出づるといと難かりき。婢は驚きて面を擧げしが頷きぬ。ゲザは胸を騷がして門口に入り、足音高く梯を登り、戸を敲けど答なし。入りて見れば、綠なる砧石の壁紙昔のまゝにて毒氣を吹く如し。されどゲザが養父と二人にて住みけるをりに比ぶれば、室內何處となく淸らにて、媚を呈するやうに見えたり。人を醉はせ、人を眠らしめむとする香氣に襲はれて、向ひを見れば、ガルチエリが像の下なる、缺け損じたる花瓶に、美しき罌粟の花束をいけたり。こは「パチオ、ト、ニイス」とて名高き大輪の花なり。

此間の戸はあきたるに、次の間の建添へ、硝子張の中に、圓き卓を前にさし向ひに坐りたるは、ガストン、デッレオとぞが娘となり。

ゲザはおどろきながら、娘の姿を見て、暫し我を忘れゐたり。かゝる輪廓正しき顏貌は、伊太利にてこそ見しともあれ。頭は小き方なるが、希臘形の强き兩肩の上に据わりて、蒼白く變化少なき面に、黑く光れる目、燃ゆる如き唇、際立ちて附きたり。

この子はまだ十七なれど、北國の少女の常なる角張りたる態度なく、身うちすべて豊に、人を醉はしむる氣を吹きて何處となくませたり。一言にていへば伊太利の「モルビデッツァ」(肌の軟さ)を具へたり。

ゲザは少女の姿に見とれて立ちたるを、デッレオ頭を擡げて見しが、領さし伸べて、日に向ひたるやうに瞬する有樣に、ゲザはほゝゑみて一步進みぬ。

「ゲザならずや。」此聲未だ畢らぬに「悲しげなる君は簔子を抱きて、彼も此も喜の涙を灑ぎつ。しばしありてデッレオは、ゲザを少し推しのけて、つく〲其姿を見、また引寄せて抱き、「いかに嘗く又こゝに留まるべきや、」といふ、その聲は慄ひぬ。

ゲザ、「父上、おん身の許し玉ふ限、こゝに留まりて、靜に著述をなさむとおもひ侍り。されど我が居るべき場所も、はやあらじと見ゆれば、近きところに一間借るべし。」また娘の方を見て。「妹とはまだ近づきにならず。引合せ玉へ。」

デッレオ、「げに、さなり。アンテット、こはかねて噂せしゲザ、ファン、ザイレンなり。中善くせよ。ゲザ、おん身は妹に接吻一つせよ。」

夕飯果つる頃、灰色のかはたれ時は、ブルクセルの金光を銷し盡し、僅に街燈の火ありて狹き紅を瀞の水面に印し、又寺窓の色硝子を射るあるのみ。

ゲザは彼綠色の室にて、最軟なる椅子に倚り、デッレオに著述の見込を話しつ。アンテットは默して聞けり。獨りその大なる目は闇にかゝやきたり。

ゲザが言は極なく長けれど、デッレオは謹みて聞き、唯をり〲そはいと面白からむといふのみ。

遠き市の賑は、微なる子守歌のやうに此ラアエスタイン街に洩來り、夜に入りて罌粟の香氣次第に強くなり、時として冷き白石板の上に、枯れて落つる花瓣の音聞ゆ。

第九回

罌粟の花は漸に棄てられ、さま〴〵の花束ガルチエリが像の前にて枯れぬ。五月は六月になり、六月は七月になりぬ。ゲザはいまも猶夜な〳〵わが著作の見こみを養父にかたり「メロヂイ」二つ三つ「井オリン」にて彈いて聞かせ、合歌(アンサンブル)のところの見こみはかうと「ピヤノ」にてまねその度ごとに面白からむといはせ、當座の曲多く作り、夢ごゝろにて精神のうちに響く怪しき聲を聞き、さて何一つ仕出さゞりき。

ゲザはガストンが家の向ひなる洗濯婆の住居の一間を借りて、居どころと定めたれど、ほと〳〵朝より夕までガストンが家に來て、アンチツトともに面白き時をすごしつ。ガストン、ヂリレオはいまおのがために役を見付けて、めづらしくもこれに名を署せしが、こは娘のためを思ひてならむか。役といふは芝居の書記にて、その外にある新聞の雜錄を受持ちたり。それにて事足るほどの金をば贏けつ　いまこの家に入るものは、貧しさをば見で、みだりなる滿足のさまを見るなるべし。これラアエスタイン街の富なり。

このやり放しの中にてゲザは快く日を送りつ。かれがためには坐りごゝろよき椅子一つありて、その兩側の手すりに腕をもたせて、未來の望を語り、その背に頭をもたせて、「カポラル」烟草の烟のゆくへを見やるはおもしろく、又かれが臨む食卓の上には、いつも一瓶の好き「ボルドオ」酒あるぞ嬉しき。

ゲザは何もなさゞるゆゑ、これを掩ふにたよりある長き食事を悦べり。珈琲飲むときには、アンチット向ひに座りて、をり〳〵一匙づゝ取りて飲むとあるを樂としたり。また日を消するには、はや世の中にいひ傳ふる人なき樂譜を渉獵り、名のかくれたる詩人の作りしものを求めなどす。その中にて氣に入りたる句を得たるときは、誇大なること葉にてこれを譽め、二たび三度、甚しきは二十度もアンチットに讀みて聞かす。彼は一語も佛蘭西語を解せざる門外の婢によみて聞かせても善きはずなり、されど門外の婢は、アンチットのやうなる美しき笑顏なきをいかにせむ。さて此句を新に譜に作りて、舊びたる「ピヤノ」に上ぼして彈くに、この器は血氣の少年の作りし激しき曲を、慄ふ聲にて導くさま、老祖母の墓に片足ふみ入りて戀の歌をうたふ如し。

かゝるをりにはアンチットはその句を歌はせらるゝことあり。アンチットが聲はうるはしき「コントラルト」調なるに、ゲザよろこばせむとて、力を極めて歌ひぬ。ゲザは飽足らぬ面持して、いま少し樣子がありたし、いま少し氣を入れよ、といひ、指尖にて少女が胸の邊をさして、こゝに何をも感ぜざるか、と繰返して問ふ。少女は打笑みたりしが、忽ち赤くなりて面をそむけつ。

ガストンは始よりゲザと娘とを兄妹の扱にしたれば、何の面倒もなく、治りきはめて善かりき。父は娘がゲザがまはりにて立働き、かれがためにさま〴〵の用を足して惡き癖をつけ、をり〳〵大なる目にてかれを見るに心づかざりき。

ゲザがアンチットに對するさまは、初極めて冷淡にて、その優しさは兄の妹にやさしきに似たりしなり。七月の末には冷淡の度いつもよりも甚しく、ゲザは少しラアエスタイン街を忘れて、當時「ガレリイ、サント、ユベル」の芝居に居りて、ブルクセルに倦みたる巴里の女優に交りたりき。

アンチットはこのさまに、相貌變るまで妬みしが、ゲザは何ゆゑに少女の樣子の常ならぬか知らで過ぎぬ。
ある日ゲザは少女が瘦せたる頰の邊を優しく摩りて。「奈何せしか、何ゆゑに悲しげなる、街の空氣のあまりに惡しきためならむ。父上、この子をしばし海邊へやり玉はずや。」
ガストンは肩を聳かして。「殘念なれどわれはさる費を出すと能はず、」と答へき。
ゲザは。「なに、費とや。われも已に久しうぶん身等が惠にあづかりたれば、そればかりの事は怎にともせむ。」といひしが彼は女優「マドモアセル」イルマに贈りし金の頗多かりしを忘れたるにて、この時急ぎて我室にかへりて、銀行紙幣二三枚取出さむとおもひて見れば、囊底唯二十「フラン」の貨幣一つのみありき。暫しは呆れて頭を掻きしが、忽又打笑ひて虛になりし財囊を叅父に持てきて見せ。「いまこそわが高慢らしき言を笑ひ玉へ。わが富はこれのみなり。さはいへ、暫しのことなり。我頭にも我手にも黃金の源はあるものを。唯仕事にかゝる與だに來ば。唯少しの熱だに起らば。おん身は我吟歌戲曲の艸藁のおきどころを知らずや。」
八月の末女優イルマ、ブルクセルを去りぬ。ゲザが心は鬱々として樂まず。この心は業に就く緖となりぬ。
彼はある朝例の著作の熱を得たりとて、譜を書くべき紙を陳べ、手にてこれを平にし、鵝「ペン」を截り、屋根裏の一室に唯一つありし脚あやふき小机に肱をもたせ、一行かきては忽又消し、欠伸し、みづから苦しさに堪へぬやうなりしが、暫し散步したる後にこそとて公苑に出で、時々精神にひゞく聲にきゝほれて步を停め、また行人につき當り、物思はしげに椅子に腰掛けつ。彼は忽ち左右の

顳顬のあたりを押へつ。此時一曲ありて心中を流來れり。

ゲザは急ぎて室に還り、只管書きに書いたり。

ガストンが役所よりかへりて、二度目の朝食をなす頃は、はや過ぎて次の食の時となりしが、ゲザはまだ頭を譜紙の上に低れて書けり。紙の散りたるは、二ひら三ひら床の上にあり。戸を叩く人あれど、知らねば答へず。ガストン入りて「わが子、けふは何とてひねもす顔見せぬぞ。病めるにはあらずや。」

ゲザはあやしき夢を喚覺されたる如く、眼を瞬りたりしが、「否、仕事するなり、」と答へき。その面は異著にて、その手は慄ひたり。デリレオは強ひてすゝめて、一時なりとも業を停め、何にても少し食へといひき。ゲザは謐りながら引かれてゆき、食卓に向ひしが何一つ食はず、何一つ言はず、唯一ところを見詰めたるさま、怪しきものを視る人の如し、食後には此間の中を歩みて、聯絡なき曲をつぶやくやうに唱へ、をり／＼古き「ピヤノ」の木端を押へて、唇を堅く閉ぢたるまゝにて、音一つ發するは、ある大なる「フィナアレ」の終るところなるべし。また「オルケスチル」の群を指揮するまねして、手を空中にふり動かし、遽に床を強く踏みて、宜し／＼と叫びぬ。デリレオはむかし詩人、樂人など多く交りしとあれば、これを止めもせず。彼は狂人、不幸に陷りたる人、その外著作をなす人に對する心にて、ゲザをやさしく扱ひぬ。されどアンチッツトはゲザが心知らねば、いつも鄭重にもてなすには似ず、いま聲高く笑ひしを、ゲザ又いつになく腹立て、善く休み玉へ、と輕くいひて去りぬ。此夜はゲザ曉までその「オペラ」を作りき。

これより數日の間はゲザ食はず、眠らず、面色變はりて、餘所目には樂しからざるやうなりしが、

みづからは言ふにいはれぬ愉快を覺えき。デリレオは「あまりに働きて精神を傷ると勿れ、聲を失ふやうに空想をも失ふことありといはずや。唯程を守れかし。」と諌むれど、ゲザは美しき頭を打ち振りて、目をなかば閉ぢて笑ひぬ。おもふに褒父がいひしことは耳に入らざりしならむ。

ある日ゲザは喜ばしげに聲を擧げ、第五齣を造畢りしが、第三第四の兩齣はまだ形もなきに、空想忽絶えぬ。天馬は恚しかれを拋落したり。天馬はあまりに鞭打たるゝときはかく情なきものありとぞ。彼は拋落されて下界にあり。さきに見し上天の境はいま烟の如し。

頭痛甚しく、沈鬱の症となりて見れば、さきに作りし曲遽に厭ふべきものなりし如く、いまは前に善きところのみ見し代りに惡きところのみ見て、これを古人の作に比べ、齒を切りて額を擊てり。ゲザは今おのれが作りしものを渾て過激にて可笑しきやうに思ひて、唯極めて冷淡なる樂を弄び、好みてバハが「シャコンヌ」を彈き、ショピンが「ノッツルノ」は我神經を傷るといへり。

彼が態度は重き病をわづらひて、今將に治に就かむとする人の如く、衣は緊りなく、膝はふら／＼とゆらぎ、常に綠いろの部屋の最暗き隅に坐して、頭を手掌にもたせ、目を見詰めたるまゝ空しく時を過しつ。

あるときおのが作を「井オリン」にて試みしが慌たゞしく樂器を擲ちて、例の椅子に倒れかゝり、自ら爪を嚙み、忽ち痙攣のやうに泣きいだしぬ。アンチットはこれを見て耻かしげに近寄り、かれが頭を摩でゝ、「ゲザ、才ある人はかくまで悲しきものにや、」と問ひぬ。

ゲザは聞きて少女を我膝の上にかき抱き、髮に、目に、唇に接吻するを少女は、はじめ愕き、中ごろはうれしく、後にはまた耻かしくなりて避けむとす。ゲザは少女が身をばゆるしたれど、手を取り

て離たず、やさしき聲して、「アンチット、おん身はわれを嫌ひ玉はぬにや。おん身は我妻となり玉ふべきや。今とはいはじ。わが名高き樂人となりたる上の事なり。われに力はなくとも、おん身を力にて名高くならむ。」

少女は赤うなりて、「わが如きおろかなる少女を何とかし玉ふべき、」とさゝやくに、こなたは戯れて、

「おろかなりとも、わが心に協ふを奈何せむ、」といふ。

少女は頭を垂れてゲザが手に接吻し、身をずらして、ゲザが椅子の下なる低き踏臺の上に坐りぬ。ガストンは還りてこのさまを見、二人がいひなづけを許しつ。

第十回

ゲザがアンチットを愛づる心は日にけに深くなりて、アンチットはいまゝでの恥しげなる樣子を棄て、戯れに抗抵する如き癖を見せたり。

最早二人を兄妹と看做すべきにあらねば、デツレオはゲザと少女との交際を夕のみとし、その外日に一たび共に散歩するとを許しつ。

樂しきはこの日ごとの散歩なり。アンチットは好みて人氣繁き街を歩み、飾店の前に立駐りては、「おん身名高き人になり玉はゞあの飾買うて玉はれ、」などいふ。その飾といふは美しき紐、こがね色の靴などなれば、ゲザは心にゑみて翌朝のぞみの品に短き文を添へてやりなどす。かゝる貨はこの頃人に樂を敎へて得らるゝなりけり。

ゲザはまた好みて少女を引きて、人げなく淋しき公園にゆき、霜月の風物凄く、木々の梢を鳴らすとき、浮世を忘れて、唯夢の如くならび行けり。をり〳〵道に大なる水たまりあるときはゲザあ

たりに人なきを幸に少女を抱いてわたす。少女はゲザが腕に身を寄掛けて、かれが餘り氣抜けしたるやうあるとき、手に力を入れて呼醒し、「何か少し話して聞かせ玉へ、」と請ふ。この時ゲザ濕ひたる目にて少女が面をみ、「おん身が愛らしきとよ、」とのみいひ、繼ぐべき言葉を知らず。

ゲザは戀に物みな忘れ、退屈極なき情人なりき。この頃彼はまた著作をはじめ、前のやうに奮ふとはなけれど、勉めて業を取りたり。「オペラ」のかたは暫く打ち置きて、今殆ど作りをはりしは、ダンテが地獄の段を「オラトリウム」やうの譜にせしものなりき。

第十一回

十一月の末つかたの事なりき、或る夕暮ゲザ忙はしげに緑いろの部屋に馳入りて、「父上、アンネット、」と呼びぬ。ヂリレオに何事ぞと問はれて、「ステルニイが手紙届きしが、次の週にはブルクセルに來むと書いたり、」といふ。アンネットは望を失ひたる樣子にて、「あまり慌たゝしくのたまふゆゑ、富の大籤引得たまひしか、さらずは月に五千『フラン』にておん身を雇ふものありとの事ならむとおもひしに。」

ゲザが不平の色を見て取りし養父は優しく、「娘が心づきなき言葉をあしうな聞きそ。ステルニイといふ人を、奈何なる人とも辨へねば、おん身が喜をも解せざりしならむ。」此夕ゲザは少女にステルニイが上悉しく語り、おのれが十年以來の交際の事をも告げき。

第十二回

少女は解し得たり、ステルニイといふ樂人の聲價いかなるかといふことを。今はゲザも少女が客を迎ふるこゝろの冷ならむを憂へざるべし。それもことわりなり。今はブルクセルの府内、到る處ステ

ルニイが名を聞かざることなきやうになりぬ。新製の菓子、新形の膝靴、又は手拭など、皆ステルニイが好といひ、小兒の遊にもステルニイが合奏のさまをのみ見つ。當時の小兒のかゝる遊をなしゝは、今の世にて「コンシエル」をマレンゴの役とを演するに同じかるべ[illegible]アンチットはこの頃唱歌ならひに行けり。これもゲザが少女可愛がりての奢な[illegible]アンチットと共に唱歌習ふ少女等は唯ステルニイが事のみ物語りぬ。

弟子の一人は「モンチエ」の樂長を伯父に持ちたりしが、或日ステルニイが伯父の家に忘れおきたる手袋なりとて、稽古所へ持て來しを、人々徹塵に引裂き、爭ひて守袋に收めつ。この毳革のきれを二十年間胸に掛けたる少女もありきとぞ。

ステルニイが名聲は當時其極處に達したりき。その最後の魯西亞行は、いにしへの戰國の民が凱旋の王を迎ふる如く、オデッサに入りしときは祝砲轟き、モスコオに入りしときは大學の書生群をなしてその車を迎へ、はては車前の馬を脱して手づからこれを牽き、街の兩側の窻よりは、婦女の擲ちし花束、雨より繁く、ペエテルスブルクに入りしときは某の大侯の夫人おのが宮居を明け渡して旅館にせしめ、最負の人々より贈りし裘、桂冠、金剛石嵌めたる環、「カ井ヤ」盛りたる大樽など許多の外に、純金の「サモワル」(茶器)さへありきと聞えぬ。

ゲザはこれ等の噂を洩らすことなくアンチットに語りきかせしが、魯西亞の貴婦人が爭ひてステルニイを寵し、渠に郤けられしゲオルグ家の侯爵夫人は、興行の最中に短銃にて自殺せしことには及ばざりき。

ステルニイが若きしときは、ゲザもガル、ドユ、ノオルといふ停車場まで出迎へしが、ブルクセル

の民の過半、塲の内外に集りたれば、唯一握手を得たるのみ。その時ステルニイは「オテル、ド、フランドル」に投ずる積なれば明朝來よといひき。
翌朝「オテル」に往きて見しに、ステルニイは机に向ひて、左手額を支へ、右手筆を握りて、塗抹したる跡多き樂譜の稿をながめ居たり。顔は鋭くなりたり。斷えず上流の人と交はりしためにや、神經質を帶びて際立ちたる動作、器械的に人を敬ふ癖など、渾て一種名狀しがたき容體を養ひ得たりと見ゆ。想ふにステルニイは今眼を開きたるまゝにて眠るやうになりしなるべし、兎の如く、又宮中に伺候する人々の如く。
ゲザが一間に入るを見て、こなたへ振向き。「恙なかりしや。又相見ることこそ嬉しけれ。いつもおん身と目を合はするときは、若やぐやうなる心地す。おん身が餘りに久しくブルクセルに留まりたるを聞きて、思惑ふのみなりき。何事ありての滯留ぞ。今頃はマリンスキイと海山のあなたにあるべきに。」
ゲザは面を赤めて、吃りながら答へき。「彼約束をば破りたり。この身を縛られむも望ましからざりしゆゑ。」「彼約束をば破りて、怠惰ものにやなりたる。」ステルニイが我子に對するやうなる待遇は故の如くありと知るべし。「さてもおん身の肥えたることよ。少年の技術家には似つかはしからぬことなり。われを見よ。骨と皮とのみ。今は何事をかなしたる。目的ありや、奈何。」ゲザ。「怠惰ものにはならず。人に樂を教へて、忙しき目を見る身なれば。」
ステルニイ。「なに、人に樂を教ふとか。不思議なることを聞くものかな。それよりはマリンスキイと亞米利加へ往きて、金を掘るかた遙に優りたらむに。『井オリン』ならふ少女に美しきは少きものを。

おん身が業はそれのみにはあらじ。教授時間の外は何事をかあしたる。」

ゲザ。「譜を作るのみ。見ればおん身もおなじ業をなし玉ふやうなるが。」

ステルニイは、「否、我境界にては、譜を作らむこと思ひも寄らず、」と答へつゝ忙はしく草稿を畳紙の中へ収め。「明けても暮れても、滊車の一室、合奏の座敷。かゝる境界には早や厭果てたり。唯欲しきものは、四週間ばかりの休暇なり。馬鈴薯添へたる『ビフステエキ』、田舎の空氣、花畑と心おかれぬ友一人。」

この時戸を敲く音して、従者入來り、何事かいはむとするを、ステルニイ遮りて。「われは不在なりといひしに。」

従者。「されど例の伯爵の君なれば。」

ステルニイ。「没分暁漢（わからぬをとこ）かな。われは不在なりといはずや。客は何人にもあれ。」

従者の退くを待ちて、ステルニイ不興げに。「あのとほりなり。十五分の間には、十八の客に逢はねばならず。これ程五月蠅き生活は少かるべし。その上、いつも同じ戯して、いつも同じやうに喝采せらるゝも苦しき限ならずや。」

「いかに喝采の聲に厭きたまひしとて、一たび口笛の音聞かむとは願ひたまはじ。」とゲザ笑みつゝいひしに、ステルニイ少し面色變はりて、先づ少年の顔をながめ、次に樂譜を收めたる畳紙を見つ。されど少年の顔は常の如く優しきに、ステルニイが疑忽ち晴れぬ。暫しありてゲザ遠慮なく言出づるやう。「げにおん身が世わたりのあまりに忙しくて、譜を作る暇なきは惜むべきことなり。おん身の出しゝものは、今まで書更（かきかへ）の外なかりき。何にても少し見せ玉は

ずや。

ステルニイは額に皺を寄せて。「餘り他人には見せたくなし。公にせぬうちに匂失せなば、いと惜しかるべければ。」

ゲザが面は朱を濺ぎたるやうになりぬ。「餘り他人には、他人には。」

ステルニイは聲高く笑ひぬ。「昔の癖はまだ失せずや。おん身を怒らせむとはおもひ掛けざりき。あれはふと言ひ損ぜしなり。誰かおん身を他人扱にすべき。我著述といふべきもの出來たらば、最初に見すべきはおん身なり。されど此疊紙の中なるは、見るに足らぬものなり。おん身も知りたる某の侯爵夫人が、わざ〳〵維也納まで手紙を寄せての賴なれば、辭まむやうなく責塞ぎに作りしものなり。所謂姫の「ペレット」、眞面目なる沙汰にはあらず。いかに、我心は分りつらむ。機嫌をおほして、そこの鈴索を引いて吳れよ。早や朝食喰ふべき時なり。おん身が此地に留まりたる眞の理由は喰ひながら聞くべし。譜を作らむためのみとは思はれねば。」

食間ゲザはおのれが秘事をステルニイに告げしに、ステルニイ驚きたる面持して。「さてはかゝる事ありしか。おん身がためには、それより癡なるしぐさあらざるべし。若し苟且の戀のあまり久く結ぼれたるならば、我力にて救出さむとおもひしが、結婚の約束したりと聞きては力及ばず。意外なる事かな。おん身が年にて妻を娶り、一家のあるじとならむは、これ身の破滅なり、これ自ら墓穴を掘るに同じ。かく言へばとて、おん身が軀を埋むる墓穴とな思ひそ。埋もるゝはおん身が藝ならむ。おん身が軀はよの常の交をなして、淺々しき德義のために縛せられ、これがために榮ゆるなるべし。おん身は『オ、ルデルメン』のやうに肥ゆべし。洗盥は頻に行はるべし。よぢれ上りたる袴を

穿きて、樂譜の冊子を小脇に挿み、街より街へと走りめぐりて、人に音樂を敎へ、芝居に出でゝ『井オリン』ひきの首座を占めむとおもふより外には、望なき身となるべし。若しその眞中に立ちて調整ふる杖を揮はむとおもはゞ、是れ望の絶頂ならむ。馬鹿らしさよ。おん身が脊には旅仲間の勧進元の杖をこそ受くべきなれ。安樂なる家中の椅子の軟き撥條入りの革に、まだうら若き才子の頭を据うべきことかは。矧てや汝が頭を据ゑむとする張革の裏には、羽毛多からむともおもはれず。(姻家は貧しかるべし。)然しそはおん身が問はざるところならむ。藝に倦みて憩はむとするに、善き遁辭だにあらば、おん身はそれにて安堵するならむ。おもふに馬鈴藷盛りたる嚢も、汝がためには恰好の臥床なるべし。」

ゲザ聞きもあへず。「おん身が言は無宗旨の論に似たり。おん身は愛情の上の無神論者なり。」此答を聞きても、ゲザが夸張の癖まだ止まぬを知るべし。又語を繼ぎて。「われとても明後日婚禮を擧げむとはいはず。位地定まりての後ならでは、夫婦にはならざる積なり。」「責めてもの事なり。敵手は誰ぞ。敎子の一人なるべし。胖大りたる市人の娘にて、「ブロンド」なる少女ならずや。」

「少女は我養父の娘なり。」

「さてはガルチエリが産みし子ならむ。それを御身は妻にせむとおもへるにや。妻に。」

ゲザ小聲になりて。「その愛らしさをおん身は想得ざるなるべし。」

スタルニイは。「ガルチエリが産みし子の美しく愛らしかるべきを、爭でか想得ざらむ。」といひて、目に夢みるごとく、戀ふるごとき色をあらはし、さて言葉を繼ぎて。「されどそれを妻にせむとおもふこそ訝しけれ。おん身はガルチエリが性を知らぬなるべし。」

ゲザは唇を噛みて。「我養父はガルチエリを得てみづから幸なりとおもひき。」
「いかにも幸なりとは思ひしならむ。ガルチエリがために狂せしは、彼のみにはあらざりけり。彼はガルチエリが韈を磨きても、みづから幸なりとおもひしならむ。デリレオが夫婦の間の事をば、己れも善く知りたり。今は昔語になりにたれど、藝人の仲間には猶これを傳ふるものあり。唯人の名をば早や錯りたり。われはデリレオといふ名を忘れざりき。彼はおん身が親類なれば。又彼はわれに初戀せさせし女の夫なれば。」
ゲザ驚きたるさまにて、言葉忙しく。「ガルチエリがおん身の初戀の女なりとか。」
ステルニイは掌にて額を按りて、苦々しく笑ひぬ。「さなり。わがガルチエリに逢ひしは「ダグウル」の座敷にての事なりき。我齢はまだ十八にならぬ程にて、容貌は女子の如くなりき。我戀はさこそをかしかりけめ。ガルチエリは只我を嘲笑ひしのみ。我戀は片思にて、遂に協ふ期なかりき。それより早や二十年を經たれど、ガルチエリといふ名我耳に入るときは、蒸熱き氣わが脉絡の中をめぐる如き心地す。さても彼の美しかりしことよ。其姿。其笑顏。其髮容。彼が髮は暗色なりしが、顳顬、項の邊に赤き光ありき。その光あるところは黃金の粉をふり掛けたる如くなりき。そが上にその立居振舞の大やうなりしことと。」
ステルニイは忽ち語路を斷ちて、空を見詰めたり。ガルチエリといふ記念は、此人の胸の瘡痍なり。
ゲザは友人の面色變はりたるを見て、おのれも氣色安ならずなりぬ。
ゲザ。「かくまで類稀なる美人のいかなれば我養父の妻にはなりけむ。」
ステルニイ。「いかなれば。いかなれば。ガルチエリは聲を潰され、戀人を失ひ、病身になりぬ。其

齢は三十八なりき。デリレオは產ある家の子にて、嘗て慈善事業のために失ひし金は少からねど、猶殘りたるところ妻を養ふには餘ありき。デリレオは妻におもひの儘の奢をせさせしに、妻は娘一人を產みて半年ばかりの後、由緒あやしき波蘭人と驅落しつ。おん身が娶らむといふ少女は、そのとき跡に遺しゝ娘なるべし。程經て後、デリレオはとある屋根裏ずまひにて、病みおとろへたる妻に邂逅ひ、優しくもまた我家につれ歸りて、その終を見屆けつ。おもへば憫むべき男ありけり。ガルチエリを娶りしは、固より親戚の言葉に負き、朋友の諫を用ゐでの事なりき。今は財產もなくなりたれば、さてこそラアエスタイン街には遷りしなれ。デリレオが運命は果敢なかりき。されど一年半ばかりの間、ガルチエリが傍に居りしは、せめてもの事なるべし。」

言畢りてステルニイは暫し空を見詰めて物案じするさまなり。

ゲザは進寄りて輕く其臂を按へ。「おん身が斯くまで牢記して忘れたまはぬガルチエリが面影を傳へて、その罪障を傳へざる少女なれば、わがこれを娶らむとおもふも宜ならずや。」

ステルニイは少し苦味を帶びたる笑を漏しつ。「少女が年はいくつぞ。十六か十七か。」

ゲザ頷きて。「先づその位なり。」

ステルニイは「その位にて性質の知られむ樣やある、」とつぶやき、指にて卓を敲きて、輓歌の節をなしたり。ゲザは面をあかくせしが、少焉ありて。「われは深くおん身を愛すれども、今のやうなる語氣にて物を言はるゝときは、怎にも堪へがたければ、先づ兎も角も我結髮の妻に逢ひて、さてわが善く擇びしか、見誤りしかの判斷を聞かせよ。ラアエスタインの街をおそろしと思はずは、近きに我養父の家に招きて茶一つ薦むべし。」

ステルニイ「いつにても善し。明日にても、明後日にても。おん身が家の人は早起ならむ。朝疾く出掛に寄るべし。」

數分時の後、ゲザ暇乞して歸るを、ステルニイ戸の外まで送りて、梯の欄越に。「さらば明後日の朝八時頃に往くべし。おん身が結髪の妻こそ見たけれ。」

第十三回

ラアエスタイン街の十番には、けふしもさも事ありげに見えたり。蒸したての菓子の香は、梯にも廊にもみち／＼たり。アンテツトはおもての色絶間なく變りて、道具のおき處、幾度となく革むるもかしこあゝの損じたるを掩はむとてなるべし。手を收めて後、美しき目にて綠いろの壁を見て、「彼君はこのあばら家をいかにか見玉ふらむ、」とおそる／＼いふを、ゲザほゝ笑みながら慰めて、額に接吻し、輕く頰のわたりを敲き。「心をな苦めそ。吾友は汝を見むとてこそ來れ。この家を見むとてにはあらず。」

娘にも增して心を痛むるは、父のデリレオなり。黴ばみたる行李より舊き禮服を掘出し、その龍腦の臭を帶びて、襟の太きところは公民王の時の趣味を見せたるをも厭はず、これを身に着けて、彼室より此室へとさまよひありき。「ハンカチイフ」引出して壁に挂けたる畫の欄を拂ひ、半ば曇りたる鏡の前に立ちて、愧かしげに斜睨し、顫ふ指尖にて大なる「アトラス」の襟飾を整へなどす。この襟飾は縫とりいと美しき「バチスト」の汗衫の黄ばみたると共に、ルイ、フイリツプが世に時めきしものと見えたり。

ゲザは一家の騷しきさまを見て、竊に嘲りたれど、心の中には大事の前なれば、さもあるべきこと

ゝ思へるなるべし。

八時の時計響くときは、皆胸に波打たせ、八時を過ぐること五分になりしときは、デリレオ、「彼君は來ぬやらむ、」とつぶやき、十五分過ぎしときは、アンテット訝かしげに結髮の夫を見やりて、「彼君は慥におん身に約し玉ひしか、」と問ひぬ。八時三十分になりしとき、外の廊のわたりに物音するを聞きて、失望に慣れたるデリレオは「斷の使にはあらずや」といひき。

「デリレオ君の住居はこゝなりや、」と梯の上にてうら問ふ聲はいとみやびたり。老いたる新聞記者デリレオは左手の拇と人さしゆびもて、おのが頰を擦り、强ひて鎭まりたるさまを見せむとしたり。アンテットは身を匿しつ。

二三秒にして扉開き、あやしき綠いろの座敷に入來りしは、氣高き明髮（ブロンド）の男なり。着たる裘を戸の外にて脱がざりしため、しばしは度を失ひたるやうなりしが、そは眞に一瞬間の事にて、ゲザ馳寄りてこれを脱がするや否や、ゲザが引合せの禮をなさむとするを遮りて、デリレオが手を優しく握り、われらは舊識なる者をといふ。デリレオは輙くこれを受けば、無禮なるべしとおもひて、手を動かしてとゞめむとせしに、スタルニイ重ねて。「君はその昔ダグウル伯爵夫人の許にておち合ひし情痴の一少年を、はや忘れやし玉ひけむ。こなたにては、當時君がわれを憐み、われに友情を寄せたまひしことを忘れ侍らず。君が友情はまことに我を慰めき。當時は君と我と殆同病相憐むやうなるさまなりしが、後には君のみ福を稟けたまひき。」かくいひつゝスタルニイは壁に掛けたるガルチエリが像を仰見たり。そのいち早き目には此油畫を見出すこと何の苦もなかりしなるべし。

デリレオはこのやさしき言葉を聞きて、目に泪を浮べ、親しく客の手を握りたり。

さてといひかけて、ステルニイは面白げにゲザが顔を見たり。君がわれに約し玉ひしは、この再會のみにはあらざりき。この外に猶生面の人に引合せ玉ふべき筈なりしが。

ゲザは後を見かへりて。「おろかなる子ならずや。耻かしとて隠れたりと覺ゆ。」言畢りて次の間に出でしが、かなたより優しく促す聲聞えたり。「いざ〳〵、子供らしき振舞して、人に笑はれ玉ふな。」

ゲザが腕に依りて。面には羞を帶び、唇には熱を見せて出でたる少女は、氷の如く冷なる指尖をステルニイが掌の内におきたり。

心迷ひたる如くステルニイはしばし少女を見詰めて居たりしが、みづから抑へて輕く少女が手を執り、唇におし當てゝ。「かく慣々しきを怪み玉ふな。君が結髮の夫の爲には年久しき友にて、又君が母御のためには崇拜者の一人なりき。」さてデッレオに向ひて。「餘りに面影の似玉ひたれば、ほと〳〵おそろしき心地しつ。おもふに母御の再來にやおはすらむ。」

ラアエスタイン街にてステルニイが優しさはげに類なかるべし。されどこの優しさは、彼がためには何の苦をもなさざりしなり。おのれが永く居らむことをおそるゝ處にも、しばしは遊びて興ありとおもふは、富貴の人の癖なり。ステルニイがこの家にての心は、斯の如くなりしのみ。

デッレオに向ひては、彼を敬しておのれを謙け、ゲザに對しては、半ば朋友間の調子を取り、半ば父の子を遇する如き氣色を見せて、これに戯れたり。さて二碗の茶を喫みて、菓子の旨味を讃め、おのが飢に誇りたり。デッレオは其禮服とおなじ舊さの説にて、げに昔の趣味には善く恊ひたりけむと思はるゝことゞもを語りいだしぬ。

面の色蒼ざめ、一たびも口を開かで、客に對坐したるガルチエッリが娘は鼻白みて仰見むともせず。

さてありながら、少女は客の姿をも、その振舞をも洩らさず見たり。客はラアエスタイン街より外へ廻らむ心擣に、集會に赴く時の服を着けたるが、この服はいとよく似合ひたり。少女がためには、客の白き襟飾、その「タレエ、アン、キヨオル、」その式の如くなる髮の形など、皆尋くのみ見ゆるなるべし。

ステルニイは屡優しく言葉を掛けしが、少女は唯こと葉ずくなに應するのみ。會話のあまりにはえぬに、客はデリレオに向ひて。「娘御は音樂のおんたしなみあるべし、怎に。」

「唱歌少し學ばせしことを侍り。」

「み聲は定めて。」ステルニイはガルチエリに似たるべしといはむとせしが語を畢へざりき。ゲザ傍より。「何なりとも少し歌うて聞かせずや。強ひてはいはじ。されど賓人のために。」

「そはいかに嬉しからむ、」とステルニイ引取りていひき。少女は答をもなさで、夢の中にさまよひありく人の如き姿にて立上り、「スピチツト」（樂器）の側にゆき、譜を倚譜架（けんだい）の上に載せだり。譜はマルチニの作にて名高き「戀の樂（プレシイル、ダムウル）」と題したるものなりき。スアルニイいち早く彈かたにならむといひしに、少女は羞を含みて頷きつ。少選ありてこの貧しげなる緑いろの部屋に、不朽の戀の歌の中にて最不朽なる言葉、柔く哀なる聲に擔はれて漂ひたり。全歐羅巴の唱歌女生徒の力の猶未だ滅すこと能はざるは此曲なるべし。

Plaisir d'amour ne dure qu' un instant

Chagrin d'amour dure toute la vie —!

（戀の樂てふものは、唯ひと時の もの なれど、戀の苦 艱は絶えざらむ、人の命のつくるま

で。)

少女は式の如く雨手を輕く疊ねたりしが、頭をば式にかゝはらで右の肩に傾けたるさま、その重さに堪へざる如く見えたり。その聲は徹におそる〳〵胸より湧出でたり。聲の胸のうちにて震ふさまは、抑へたる欷歔の如くなり。

少女が側に歩寄りたるゲザは、客に向ひて「おん身を恐れてなるべし。常には膽細き少女にあらねど。」とつぶやき、「ポオウル、プチイ、キヤツト」(あはれなる小猫といふことなり)といひて、アンチツトが髮を撫でつ。

この罪なき戯も、見るに忍びざる如く、ステルニイは眉を蹙めて、デリレオの方に向ひ。「變らぬ聲なり。少しも變らぬ聲なり。善くも似たることよ。」さて少女に。「いま一つ歌うて聞かせたまはずや。吾願なれば。」

ゲザは積疊ねたる譜の中より手づから寫したる一枚を引出し、これを見臺に載せ、「心を措かで歌へ」とアンチツトに說き勸め、自ら「スピチツト」の上なりし「井オリン」を取り。「此曲は聲と『井オリン』とに作りたるなり。ステルニイ『ア』の聲を。」

ステルニイは賴まれて「ア」の聲を彈出しつ。

ゲザが見臺に載せしは、おのが作りし「ダンテが地獄」の曲の一段にて、「子ツソン、マヂオル、ドロオン」(Nessum maggior dolore) と題したるものなりき。この段は世に珍らしき結搆にて、「井オリン」の絃聲薔薇のかたみを喚起して、媚ぶるが如き調をなすとき、肉聲は低く柔なる夢寐中の調に始まりて、腸を斷つ苦惱の調に終るやうに作りたり。こはゲザが著作中にて最得意の一段なれば、少女が歌

ひ畢りしとき、ゲザが頬は燃ゆる如くなりき。爾時ステルニイは覺えず手を木板の上より滑落させて、ゲザが面を屹度見詰め。「こはおん身が作か。」

ゲザは頷きぬ。

「さらばおん身がために賀せむ。疑もなき傑作なり。」言畢りてステルニイはその少年の友を擁きたり。

十一時に垂とせし頃、ステルニイは用事ありとて辭し去りぬ。それ迄にはゲザに自作の曲の種々の節を彈かせ、いづれをも面白しと稱へき。

ゲザは客を送りてラアエスタイン街を出で、賑はしき處まで隨行きしが、ステルニイは何事をか思居たりけむ、言葉ずくなにのみもてなしたり。ゲザ聲高く、「おん身が見たるところはいかに、」といひしに、ステルニイわれに返りし如く、「結果好きこと必定なり、」と答へき。

ゲザ笑ひて。「結果好しとは。我夫婦の間の結果にや。」この反問は意外に出でたりと覺しく、ステルニイは慌てたるさまにて。「なに、その事か。ガルチエリの後、はじめてかく美しき女を見たり。それさへあるに、聲のめでたさ。マリブランはものかは。」

「さて。」とゲザが問はむとせしとき、二人は恰もプラス、ロアヤルに來ぬ。ステルニイは急に友を顧みて。「かしこに車あり。最早無かるべきかと思ひて氣遣ひたりしに。さらば。明日は『地獄』を皆持て來よ。」

言畢りてステルニイは車を招き寄せ、これに飛乘りて去りぬ。

ラアエスタイン街にては此夕物語いと繁かりき。デリノオは頭[illegible]

に増して能辯なり。ゲザは少女に向ひて、ステルニイが褒めし節々、おちなく語傳ふれど、少女は眠足らで喚起されし穉兒の如く、何事をもうるさがりたり。少女は唱歌のいつになく拙かりしを悔て、返らぬことをつぶやき、平生父の言葉多きを喜べるに似ず、けふはすこしも耳を借さず、果は眉を蹙めて、父上の部屋の中を彼方此方と歩み玉ふを見れば、目眩きて堪へがたしといへり。デリレオ聞いて、興を損し、椅子に倚りしに、少女は今更に氣の毒がり、許し玉へとかこちて、忽泣出でぬ。

ゲザは少女を膝の上に抱上げて、代りて涙を拭ひ、かにかくと言慰め、その頬を撫でつゝ父に向ひ。

「この子はあまり引籠りてのみ世を送ればこそ、些細の事にもかく劇しく感動するならめ。この子の心慰めむ術もがな。」

父は苦々しきおも持して應へざりき。

ステルニイは夜の三時すぎに客舍の梯を上りぬ。けふも衆人のおのれを喝采せしことは常の如くなりしが、何故か心樂まず。

「路なる童も今は吾名を知り、掃除人足さへ振返りて、あれこそ名人のステルニイなれと指せり。されどわれ死なば、能く何物をか遺さむ。『ピヤノ』の曲譜一つ二つはあれど、そは後人の笑を招くのみなるべければ。」かく獨言ちて思に沈める時、ゲザが歌は心の中に響きわたれり。寒からぬに膚粟立ちぬ。忽又美しきアンチットが事をおもひ出でゝ額を撫でつ。「家の中なる生活あまりに靜ならば、藝術の行末覺束なからむといひしが、彼がためにはその憂はなかりけり。彼少女は猶睡れり。されど母よりは熱情を傳へ、父よりは神經質を傳へたりと覺ゆ。その姿のめでたさ。」

第十四回

この頃ステルニイは心さわがしくなりて、名聞を好むことむかしに倍する如くなりき「ピヤノ」彈く手も變りたり。强ひて非凡ならむと欲して、あやしき癖に陷り、指に任せて木板を敲きちらすを、聽衆は夢中にて譽め、批評家はいみじき發達なりと稱へけれどステルニイが胸はなか〳〵に安からざりき。

ラアエスタイン街の溝は凝りて流れず、基督の像のもろ手よりは氷柱(つらゝ)長く垂れ、みどり色の座敷の窓硝子には、この頃の凍(いて)に時ならぬ花咲き出でぬ。されどアンチットは唇いつも燃えて、掌いつも熱かりき。あるきざま足を曳く如く見えて、立振舞に夢心地ならずやと疑はるゝところあり。目は遠きところをのみ見たる如し。今迄は結髮の夫に對して、子供らしき强情をありの儘に見せ、絕えて氣を兼ぬることなかりしに、近ごろはいづくよりか他人行儀出でゝ、ゲザが言葉をば一も二もなく守り、時ありては又故もなく怒を帶びて、そのいひつけに負くことあり。さてかくつれなくもてなすこと久うなりて後、俄におもひ立ちしやうに、また心を籠めてゲザに親み、淚を流して日頃の無禮を謝びなどす。ゲザはこの定なき振舞を見れどもあながち心にかけず、をり〳〵面白からずおもはるゝ事あるをも、病ある子供の所爲のやうに、たゞ知らず顏に看過しぬ。とあるゆふ暮、ゲザと父とは例の文學美術の話に深入して、あたりの事を打忘れたるをりしも、いま迄こと葉少く、思ふことありげに、馬尾裝(うまのをつめ)滿たる剛き長椅子の片隅に倚り居たりしアンチットおきなほりて小き頭を擡げ、なにやらむ聞くやうなりき。

この時輕く扉を叩く人あり。ゲザもデッレオもまだ聞きつけぬ間に、アンチット忙しく入り玉へと

呼びぬ。扉は開きぬ。「邪魔にはおぼさずや」と優しきこわ音にて會釋し、此間に入るはアルフオンス、ド、ステルニイなり。

數日の後ゲザ外稽古を畢りて歸りしが。「こはいぶかし、アンチット、こゝには龍涎(アンブラ)の香殘れり。ステルニイは來ざりしか、」と問ひぬ。

「次の合奏の切符をもて來ぬ、」と答へし少女は面を擧げざりき。

障なくば明日來よ。語るべきことあり　ステルニイ。

この口上がきをばゲザある夕おのが部屋にて見出しつ翌朝正直に「オテル、ド、フランドル」にゆきしに、ステルニイ出で迎へて。「金おほく願くる心はなきか。」

ゲザ。「問はるゝ迄もなし。我が窮したるをば、御身も知らずや。例の曲を用ゐるべき機會ありとの事か。」

ステルニイ。「まだその口をば見出さねど、外に善きことあり。それがしが昨日得し電報を見れば井ナンスキイが臂を折りたるために、マリンスキイは食はせて一萬「フラン」の月給にて、上等の「井オリン」ひきを雇はむといふ。おん身は雇はるゝ心なきや。」

ゲザは頭を低れて小ごゑになり。「幾月の旅ならむか、」と問ひかへしつ。

ステルニイほゝ笑みて。「六月、おそくとも八月をば越さじ。返事をば明日聞かむ。よもや船に醉ふことをおそるゝ男にはあらざるべし。」

ゲザ。「その事にはあらず。されど一應アンチットにも相談すべし。六月か八月かといへば、短き間にもあらず。道も隨分遠し。アンチットはおそらくは承知せざるべし。然しおん身が心入の程はあ

りがたし。」

かく答ふるところへ下部來て、貴き客の刺を通じければ、ゲザは避けて歸りぬ。

マリンスキイが雇入の事を聞きしときのアンチットが喜は、ゲザがためには意表に出でにき。アンチットは、いさましく「おん身がかゝる名家になりしをば、今までも知らざりき、」といひぬ。

「雇はれて行くべきか、」と問ふゲザが聲は震ひ、その眼には涙みちたり。アンチットは暫し驚き呆れたるさまにてゲザが面を打守りしがおん身はことわらむとおもひ玉ひしか。富める人になりて、亞米利加より歸らむ時をおもひ玉はずや、」とつぶやきぬ。

ゲザは猶一たびといき吐きしが、頭を屈めてアンチットが額に接吻し。「まことにおん身が言ふ如し。わが猶豫ひしは臆病なりき。」

ゲザはマリンスキイが夥に入りぬ。

數日の後ラアエスタイン街にめづらしく立派なる會食ありき。坐につらなりたるゲザは日ごろ嗜むものをも皆その盤におきて食はず。デリレオは勉めて雜話をなし、哀しげなる一座の光景を掩ひ隱さむとして、胡椒を果汁の上にふりかけ、最後に震ふ手もて杯を擧げ、ゲザが歸鄕の早からむことを祈るといひぬ。

今までは興ありげにゲザが出發の日を數へしアンチットは、この時に至りて刻々別離の苦を覺ゆる如く、面の色變り、饌には手だに觸れず、また一言をも出さずなりぬ。その目の中には限なき苦痛見えたり。ゲザあはれがりて引き寄せ、血色なくなりたる頰を撫でしに、少女は咽び泣きてゲザが體にからみ付き、繰返して「ひとり殘して往き玉ふな、」といひぬ。

この理なき言葉にはゲザ答へず、唯優しくもてなして賺し慰め、さて父に向ひて。「つとめて此子を慰め玉へ。折々は芝居にも伴ひゆき、時候好くならば、すぐに田舍へ引越し、興あるべき書を撰びて讀み聞かせ玉へ。我等二人に面白きやうある書は惡し。此子に面白かるべきものあるべし。」

アンチットは涙の中より父に向ひて、「この人より善き人、世にあるべきか、」とかつ〴〵いふ。

この時婢入り來りて。「車はロアヤルの廣こうぢに待ちて居り。ゲザ樣の荷物を取らむとて、會社の役人來ぬ、」といふ。ゲザは仰いで時計を見。「最早時刻なり。泣き歇め玉へ。」とアンチットをすかしつ。

アンチットは猶繰返して、「ひとり殘してゆき玉ふな、」と泣きつゝいふ。

ゲザは少女の軟き腕をゑひて引きほどき、言葉もなくデリレオが手を握り、走りて出でぬ。街に降り立ちしとき、樓の上に窓を推しひらく音して、アンチットが「かへり玉へ」と呼ぶこゑす。ゲザは仰ぎ見て「さらば」といひしのみ、足を速めてロアヤルの廣こうぢに向ひぬ。

滊車の出でむとするとき、「ブロンド」にて背高く、毛革の外套を被たる人、車の踏板の邊に駈け付けたり。「スラルニイ」かと呼びしゲザが聲の中には感激の情みち〳〵たりき。

「わが來べきことをば知りつらむ。某の許に居りしが、いま一度あひて開運を祝せむとおもひて、人目をぬすんで來ぬ。」

車掌室の扉を開けばゲザは入りぬ。

スラルニイは再びよろこびをのべたり。

ゲザは車の窓より半身を出して。「おん身が親切はいつまでも忘れざるべし。嫌ならずは明日あれが

樣子を見て呉れよ。」
「明日は必ずおとづれて、おん身が機嫌好く立ちしとを話さむ。」
車の動きはじむるとき、ステルニイは猶笑を含みてさしまねきたり。
別るゝときのステルニイが顔はやさしく、親切氣なる笑がほなりき。ゲザが念頭に殘りし友の顔もまたやさしく、親切氣なる笑顔なりき。

第十五回

南米諸國にブラヂリヤかけて黄熱盛に行はれければ、マッソスキイが一群は預め定めし時を待たで歸鄕の途に就くことゝなりぬ。
期に先だちて雇を解かれしために少し削られたる給金を受取り、誇張を極めたる批評ある新聞一束とアンチットがために買ひし紐育チファニイの飾二三種とを持ちて、ゲザは彼一群の人々を載せて歸るべき「アルカヂヤ」號の滊船に乘り遷りぬ。
アンチットをおもふゲザが心はいと切なりき。ブルクセルを立ちし時、少女が氣色あまりあしかりければ、別れたりし間のかなたの悲おもひ遣らるゝまゝに、復相見む折の喜もまた一入ならむとおもひぬ。ゲザは不意にかへりて少女を喜ばせばやとおもひぬ。その時の少女が目はいかならむ。船中に眠りても、忽ち歡の聲をあげ、アンチットと呼びて醒むること屢なりき。
ゲザが歸思矢の如き譯をば一行の人皆知りたり。ゲザはアンチットが事を人々に語りぬ、アンチットとステルニイとが事を。人々は皆ゲザを可愛がりて、アンチットが樣をおもひ遣り、無理ならぬゲザが歸思を慰むるうちにも、ステルニイを憐むるをば怪みけるが、ある低音(バス)うたひの翁は

て、「あれはおそろしき人なれば、捕へて心許し給ふな、」と諫めつ。

ゲザは其諫を悪く取りて怒の色をあらはし、低音(バス)うたひをきびしく責めしが、翁は唯ほゝゑみて相手にせざりき。

夥の中にジユセッピナといふ娘ありき。赤き髮ゆたかに生ひて解きたるときは踵に達せり。色青く、黒き目圓く、鼻低く、口大なれば、その顔おのづから髑髏めきたり。されどこの娘にも女らしきところありて、微笑むときは愛敬あり。その絶間なくほゝゑむさまは、何事ありても喜ぶことなき人に似たり。ゲザはこの少女にアンヂツトが事を話すこと屢なりき。少女はいつも耳を傾けて聽き、時としては泣きぬ。少女はこの群の最高音(ソプラン)うたひなり。中音(テノル)うたひの男を夫にしたる次高音(アルト)うたひは品行自慢にて妬深ければ、ジユセッピナとは中善からず。

巴里にて夥を解かむとせしとき、ジユセッピナはゲザが頸を抱いて親暱しつ。おなじ別離の式をば品行自慢の次高音(アルト)うたひもせしが、ジユセッピナは小き黄金の十字架をわたし、小聲にて、「こはわが始めて尊き晩餐(宗門の式)に列りし時、母上に貰ひし物なれば、おん身が結髮の行末を祝きておくりまゐらす、我持物の中にて御身が結髮の人におくらむ程のもの此外にはあらじ、」といひぬ。藝人のうちには婚禮のをりよろこびに往くべしと契るもありき。

ゲザは人々にわかれて巴里を出でぬ。頃しも六月の末の半にて聖屍祭(キリストのむくろのまつり)に當れりき。停車場ごとに白衣きたる娘幾人かありて、折々は加特力敎の法師の行列、遠きところに見え、その歌は世になき人の聲の如く、旅人の耳に褒ひ響きぬ。

夕暮にブルクセルに着きて車を雇ひ、モンタグ、ド、ラ、クウル街の角へと命ずるにこゝの馭者の

癖とて、さも面倒らしく、さもうるさげに高低不定の道をあゆませたり。北國の夏の常なる蒸す如き暑はこの市を掩へり。空氣の人を壓し、人の息を塞がむとするは、花卉をそだつる室の裡に入りたる如くまた餘りに爐火を熾にしたる部屋に居る如し。地上の物はつゆばかりも動かずして、唯本街(ブウルワア)の並樹の嶺にすこしの戰(そよぎ)を見る。きのふの雨の餘波なる路上の水潦は蒸氣を立たせたり。大空にはまたの雨催に雲やうやく聚れり。いづかたに向ひても、地平線のあたりに微なる雷の音を聞く。重く又哀に雰圍氣の裡にみち〳〵たるは、けふの祭の記念なる護摩の烟、蠟燭のゆえん、凋るゝ花のにほひなり。家々の壁には猶供物卓を倚せかけたるあり。卓のめぐりの木葉は萎び、花は枯れたり。ゆたかなる薔薇、やさしき向日草(ヘリオトロオプ)、おとなしき鐵痛草(レセダ)の花、皆甃石の上に落ちて、人に踏まれ泥にまみれたり。

ゲザがロアヤルの廣こうぢにて車より下るゝとき、五色の縁とりたる帽を戴き、紅の「シヤウル」を引掛けたる女ありて、道の上なる花を拾はむとあわたゞしく身を屈めつ。彼は法師の行列に逢ひては躱れ避くる女の一人なり。その家はラアエスタイン街にあれは、ゲザにおもてを知られたりき。ゲザはあはれに思ひて手を衣のかくしに入れ、二十「フラン」の貨幣一つ探り出して取らせしに、女は首を擧げて、銳く惠人の面を見、一禮して俄に紅粉を粧うたる顏をそむけつ。

ゲザはラアエスタイン街に來ぬ。溝よりは穢らはしき瓦斯立ち昇れり。蚊は雲の如く群りて四邊を閙うしたり。基督の像の姿はいつよりも悲しげなり。行き逢ふ人は多く會釋せり。「ヒユエテ」といふものめきたる痩狗どもは尾を掉りて近づき、中には冷なる鼻をゲザが手におし付くるあり。デリレオが家の平間にて青物あきなふ女に、「誰もうちには居らぬか」と問へば、主人の君も孃樣も不在な

り」といふ。便ながりて「散歩に出でしにや、」と問へば。「否、然にはあらざるべし。孃様は寺にまみられぬと覺ゆれば、最早歸り玉はむ。寺は鎖さるべき時なれば。若し『サント、ガヂユウル』の寺に往きたまはゞ、出逢ひ玉ふべし。」

ゲザは寺の方へ馳去りぬ。その背後にはヲアエスタイン街の女房共集りて彼を笑へり。

第十六回

大小さまぐの街、車輻（くるまのや）の如く集りたる凸凹ある辻に立てるは、「サント、ガヂユウル」の寺なり。造作は輕くして看透すべく、勢はあたりを拂ひて、エグモント、ホオンの魂のさまよふ市に聳ゆるはこの寺の塔なり。寺の壁の黒くなれるは神の名をかたりて罪惡をかさねし人々のために喪に居るかと疑はれ、寺の冷なる堂よりは墓穴に似たる陰森の氣出でゝ人の面を撲てり。

ゲザは進み入りぬ。堂の内はほの暗く、褐いろにして蝕みたる榻としらけたる藁の圓座とのあたりは、深き影に掩はれてよくも見えず。こゝに坐したる人數は最早いと少し。アンテットはいづくと尋ぬれど、たやすくは見出されざりき。目に觸れたるは老女二三人の磕頭きたる、青き前垂したる子供の足をつまだてゝ銅盤の水を掬ばむとしたる、二人の乞兒の門の傍に立ちたるのみ。式は早や果てゝ、高座には僧あらざりき。見るがうちに子供は外面に歩み出で、老女等もあらずなりぬ。

ゲザは又目を四方に放ちて覓めしが甲斐なかりき。やうやく高座に近きて新のごと薬一つ二つ陳べむとす。あやしげなる汎神教（パンテイスムス）を奉ずるデリレオには育てられぬれど、猶加特力の祭に心引かるゝは、稺き折の母の躾殘りたるなるべし。

その時忽ち大息つく人ありと覺えて、影暗き方を見れば、わが足許に近く蹲踞りたるものあり。喜胸に溢れて、却りて胸苦うなりぬ。「アンテツトにはあらずや、アンテツト、」と繰返してさゝやきしに、うづくまりたる人は影の中より立ち現れぬ。アンテツトはしばしゲザが面を打守りたりしが、一聲細く叫びて身をふるはせ、傍なる柱に倚りてわづかに自ら支へつ。

ゲザは餘りの迎へざまに驚き呆れ、怒を帶びたる聲にて。「アンテツト、いかにかせし。我面を見ておそるゝは何事ぞ。」

少女は頭を掉りぬ。その顔色の灰の如く見えたるは、薄闇き寺堂の内なればにや。「かく遠に來り玉はむとは、おもひかけざりければ。そが上に病身なれば。」

「病めりとか。さては無理ならざりき。わが俄に呼び掛けしを怪きものゝやうにや思ひけむ。先觸なしに歸りて喜ばせむとおもひしは、誠におろかなる心なりき。」かく謝罪して、身の寺内にあるをも打忘れ、引寄せむとするを振り拂ひて、「こゝにては」と四邊を見廻はしぬ。さてアンテツトはゲザが肘に身を持たせて寺を出でぬ。

空氣は濕りて鬱陶しげなり。雲は低く垂れたり。適ま燕一羽力なげに辻を横ぎりて飛び去りぬ。寺の内の薄闇きに比ぶれば外面は猶明かりき。

ゲザは慕はしげに目を少女が面に注ぎつ。色は死人の如く青く、頰は昔より狹く、脣は昔より赤く、目は昔より大なり。昔の美しさは重味ありて、全くその形にありしに、いまは口鼻のめぐりに細なる線あらはれ、目のあたりに物おもはしげなる影生じて、その風情人を惱さむとす。

「おん身がかくまで美しきをば早や忘れたりき、」といふゲザが聲は强き情に壓されて僅に洩れ出で

たり。アンチットは笑みつゝ仰ぎ視しが、その笑は狂ほしげに怪しかりき。笑ふとき目のまはりの影の濃くなりしために、顔の美しさはいや増したり。

この時ゲザはアンチットが顔の何物にか酷く肖たるをおもひ出しゝが、その物をばおもひ得ざりき。色褪めて凋れ掛り、よわ〳〵しき頭を街の敷石に持たせたりし薔薇の花にはあらじ。然らば何物なりけむか。然なり、いまこそ想得たれ、アンチットが今の面の少しヂユセツピナに似たるを。初に輕くゲザが肘に掛けたりし手は、今親しげに腕にからみ付きたり。ゲザがラアエスタイン街に曲らむとせしとき、少女は留めて。「すこし迂路なれど公園を歩みて歸らばや。おん身が好みて往き玉ひしところ〳〵を見て歸らむはいかに。」

「よくぞ心づきし、」と答ふる聲に意はみち溢れり。

凋るゝ花の香は猶空氣の中に漲りて、其間には新しき「アカチヤ」の花のにほひ雜れり。

二人は公園に入りぬ。園の内には人氣なかりき。黑き木の頂を折々わたる風は震ひ戰く如くなり。

ゲザ、「おん身はまことに病身なりや。」

「然なり、」と答へしアンチットが聲は低く濁りて、やうやく抑へたる苦痛の叫の如くなりき。暫くしてアンチットは劇しく。「いかなれば我をひとり殘して往きたまひし。」

「我を出し遣り玉ひしは君ならずや。」とゲザ囈のやうに答へぬ。

「げにそは眞なり、」と少女は輕くいひぬ。

二人はしばし言葉なかりき。天は次第に暗くなりぬ。少女は遽に立ち留りて。「秋の頃いつも水潦ありしはこゝなり。おん身はその時我を抱いて渡り玉ひしが、猶それを忘れ玉はずや。」

ゲザは笑みつゝ頷きぬ。又二足三足ゆきしところに大ある石盤ありて、夕日のしらけたる影は水の面に浮びたり。

アンチット「こゝはおん身がニッツァ(伊太利)の事を語り玉ひしところなり、神使の入江の事を。」

ゲザは又ほゝゑみぬ。とかくして或る石像の下に出でぬ。アンチット「こゝはおん身が我にボルチゲラの莊をおくらむとのたまひし處なり。猶覺えてやおはする。われ等二人が造りしは蜃氣樓なりき、美しき蜃氣樓なりき。」

木の頂の戰ぎは劇しくなりぬ。少女は身を仰らせ、面を擧げて、夢見る如くゲザが顏を打守り「誰も見ぬは親嘴(キス)して、」とさゝやきぬ。この親嘴は長く、燃ゆるやうなりき。アンチットは微哂みて、かすかに「今一度」といひしが、其聲はなかば梢の戰に消されぬ。再び親嘴せし後、ゲザ「浮世はいかにうれしく、めでたきものなるか、けふまでは知らざりき。」

咽ぶ如き聲は長く木々の上をわたりぬ。アンチットは我にかへりし如く、「夕立の來ぬ間に歸らばや、」といふ、其聲は忽ち銳く聞えぬ。二人は踵を旋しつ。

第十七回

結髮の妻に、シユセッピナが十文字の飾を遞與しゝとき、ゲザはいひき「これをおん身が身につけさせむとにはあらねど、せめては大事に藏めおき玉へ、こはシユセッピナがためには最も大切なるものなりしを讓り呉れたるなれば。」

ゲザはこの時かの歌女のあはれげなる姿にて、羞を含みて、優しくもかの飾をおくりしときの事をも物語りぬ。アンチットは家の調にてゲザに別るゝとき、[illegible]

中ならでは歸り玉はざるべし、さらば、」とさゝやぐ。ゲザは暫しアンチットが顔を打守りたりしが、さてあるべきにあらねば、明日こそまた相見めとて別れぬ。

ゲザは歸りて、かの十番の家に向ひたる、昔の小部屋にあり。獨り坐してこよひの事を思ひつゞけたり。嬉しくて、却りてまた物苦しきやうなる情は脉といふ脉を張らしむ。アンチットが斯く人を迷はしむるやうに美しく見えしことは今日までもあらざりき。又斯く心を攪るやうに親しく物言ひしことも今日まであらざりき。少女が優しき微笑、少女が大なる目の照りわたれりしなどおもひ出せば、そのさま猶我が胸のあたりを離れざる心地す。かの少女と夫婦になりたらむ折の樂はいかなるべきか。まことに思ひ遣るにも餘あるべし。

されど少女は病めりといひき。これを思ひ出せば、寒き風一陣、暖なる夢の中にぞ吹き入りたる。おもふに少女はまことに病めるならむ、いたく病めるならむ。その親しかりしは別に臨みての親にやありけむ。その美しかりしは。こゝまで思ひつゞくる程に、おそろしき憂ゲザを襲ひ來ぬ。折しもあれ、戸の外を吹くは毎に雷に伴ふなる、蒸す如き風なりき。枯れなむとする花の香は、腐るゝ物の臭に雜りて窗より入り來れり。

あまりに心に掛りければ、ゲザはアンネットが窗の方を見やりぬ。窗は開きたり。優しき頭は窗の外に傾さし伸べて、こなたを望めり、青き色を帶びたる月の光は、彼方なる古家の壁に落ちて、少女が優しき姿の影畫（シルエツト）を眞黑に寫し出したり。

人氣絶えて、眠れる如き街を隔てゝ、ゲザは「アンネット、アンネット、」と呼びぬ。

少女のほゝゑめるは、かはたれ時の灰いろなる紗を隔てゝ見ゆ。少女は「安らけく臥させ玉へ、」と

微にいひ、小きもろ手を唇にあてゝ、親嘴（キス）の形をなし、さて窓を鎖しつ。ラアエスタイン街は鉛の如くおもくろしき沈默に掩はれたり。ゲザは幸に醉ひたり、心の底にアンネットが微笑を包みて、彼は眠りぬ。

まだ朝の五時にもならぬ頃、前なる街はあやしく賑はしうなりぬ。ゲザは醒めたり。外の面には物に激せられたるやうなる聲、忙はしき跫音聞ゆ。火事を出しゝ家あるにや。さわがしさはいよ〳〵増りぬ。何事にかあらむ。ゲザはいそぎ衣を衣て梯を下りぬ。

空氣はまだ濕りたり。朝日はまだ澤なきに、かすかなる紅の色雜りたり。屋根の上には雀の常にもまして囂しく啼けるあり。デリレオが家の前には人立したり。いかなる人にかと見れば、まだ夢のよくも醒めざるにや、指もて眶を擦りたる女の、髮はおどろなしたるあり、仕事にとて出で立ちたりと覺しき職人躰の男あり。いづれも塵塚の腐れし肉をねらふ鴉の群なんどの如く、眼を光らせ、頭長くさし伸べて、近う寄らむとひしめいたり。中にて物言ふは野菜あきなふおうななり。その面には珍しきものを目のあたり見きといふ慢心あざやかにあらはれたり。ゲザはその言葉をかたへ聞せしが、はじめは何の事とも辨へざりき。されど暫しありて、やうやう事の情を曉りつ。おうなはいひき。「いま倅をくすりやへ遣りぬ。されど最早間にあはざりき、間にあはざりき。」

「デリレオの君が卒中にてもせしと言ふにや」とゲザ問ひしに、「なに、デリレオの君のいかで、」と人々いへるが中に、女ばらの顏打ち背けたるもありき。「死なれたるはアンネット孃なり。」ゲザは目くるめきぬ。「何故ありて、アンネットが。」

魂も身に添はで、ゲザは梯を上りぬ。あわたゞしくアンネットが部屋の戸を開きつ。この部屋をば

かねて熟く知りたり。こはゲザが穉かりし程、母と共に住みたりしところなり。唯だそのさま今は昔にかはりて美しく飾りたり。老いたるデッレオは小き臥床の縁に腰掛けて、あまりの事に涙も出でざる目を見張りて、白き布に掩はれたるものを打ち守りて居り。

「爺御よ」、とゲザ呼びぬ。

老人は此聲におどろかされて跳ね起きたり。身うち悉く震はせ、手を額に加へたるが、あはれに黄ばみたる顔には肉の顫見えたり。

「あはれと思へ、」と呼びし聲はきれ〴〵になりて、吃りて、僅に聞ゆるのみ。「あはれと思へ。娘は悔たり。娘はみまかりぬ。」

ゲザは布を引き退けつ。白き床の上に臥したるアンチットは別の時の微笑をなほ唇のあたりに見せたり。臘の如くに色あせたれど、なか〳〵に美しさは變らざりき。

十四箇月の前、初めて相見し折の青き衣を身に着けて、ジヨセツピナが十字形の飾をば頸に掛けたり。

世の中に歎あり。いかなる手も、これに觸れむには、優しさ足らざるべく、いかなる胸も、これを究めむには、强さ足らざるべし。これに向ふ人は、言葉はなくて、頭のみ俯かる。この歎をおもひ遣れば、畏きものゝ前に出でたるやうに、一種の敬おこるべし。

ゲザが心いかでかこれに向ひて怨ずることを得む。少女が身に着けたる青き衣は、その襞ごとに聲をなして「許し玉へ、」といふに似たり。「許し玉へ。わが破りし愛には、われいかでか訴ふべき。われは優しく、嬉しかりける初の友誼に訴へむとす。結髮の妻には許されまじき事をも、妹と思はれ

し我には許し玉へ。」

ゲザがこゝろ爭でかこれに向ひて怨ずることを得む。ゆふべの親嘴(キス)は猶彼が唇の上に燃えたり。結髮の禮の指環をば拔きて狀袋の中に收め、これを臥床の傍なる小卓の上においたり。狀袋の上には稚き手して、筆太に書いたる文字あり。「戀しき兄上にかへしまつる。神よ、兄上を護りませ。」

ゲザは指環を少女が冷なる指に戻して、その手に接吻したり。

生死のわかれ路はまことにあやしきものなり。生者は死者の屍を目の前に見る間は、その相隔りたることのいかばかり遠きを知らず。死せる身に對してする事も、なき人知るらむとおもはれて、此迷念は少しく生き殘りたる人を慰む。

まことに死別の苦を知るは、なき人の遺體を葬りたる後にあり。常の日の習、つねの日の需など我に迫り來りて、「いつ迄か汝は死と相戲れむとすらむ、われは我が權利を求む、」といふとき、まことの死別の苦は、はじめて知らるゝものなり。

あはれなるアンチットを墓田に送りて、父と共に歸りて見れば、綠いろなる部屋を取り片付けて、アンチットが日ごろ用ゐなれたる物を藏め匿し、食卓には二人前の食の準備整ひたり。ゲザが悲痛はこの時忍び難うなりぬ。

今は若き「井オリン」彈きと、老いたる新聞書きと相向ひて居り。二人は何をも食はざりき。ゲザは言葉なかりき。デリレオはゲザが手をさすりて、連りに、「あはれなる我子、」とさゝやきぬ。

俄にゲザは眼を父が面に注ぎ、聲をかすめて、「誰なりしか、父上、」と問ひぬ。デリレオは下の方を見て、膝の上なる巾(セルヰエット)をつまさぐり、「われは知らず、」と答へぬ。

「父上よ、何とかの玉ふ、」とゲザはいきまきたり。

「われは始終の事を、つゆばかりも知らざりき。アンチットはわれには打ち明けざりき。わが嫌疑の心をおこしゝは、つひこの頃の事なり。」デッレオはこの言葉の中に、次第に慚愧の色をあらはしたるのみ。

「さもあらばあれ、アンチットが誰にか心を寄するを、よも絶えて知り玉はぬことはあらざりしならむ、」といふゲザは、目に怒、頬に耻を見せたり。

「かれが迷はまことに鬼ありて魅するが如くなりき。」老人はかく語りて口を閉ぢ、おそろしき秘密あるが如く、復た一言をも出さゞりき。

一日々々と悲しくのみ暮しぬ。デッレオは勤あれば、また常の如く出入す。ゲザは緑いろなる部屋にありて、獨り物をおもへり。かれは再び旅立たむとせず。かれは故人に逢はむことを願はず、わが未來の幸を語り聞かせし故人に。かくはかなき中に、猶慕はしき人ひとりおり。そはステルニイなりき。

ステルニイの人の憂を解し、人の歎を慰むるさまは、めづらしく優しく、ほと〳〵婦人の如くなりき。そが上に、わが未來の幸の頼み難かるべきをば、かれその初にいひき。かれはわがこの歎に逢ひたるを怪みもせざるべし。

ゲザは人にステルニイが在處を尋ねしに、いま英吉利にありといへり。ゲザは書をおくりて、アンチットが俄にみまかりしことを告げ知らせ、さていはく。「また巴里に來むをりは我に知らせよ。われもかしこに引き越して、暫く汝が側にて業を操るべし。この浮世にて、なほ我を慰むべきものは、唯

だ汝が交のみ。」

この文には何の答もあらざりき。ゲザはデッレオが家に遷りて、アンチットが居りし緑いろなる部屋に住みき。

ある日少女が用ゐ慣れたる机に向ひて、封筒やあると、引き出しの隅を掻い探るほどに、板の罅隙に介まりて、ちぎれ殘れる小さき手紙の端あり、取りて見れば、まがふ方なきステルニイが筆の迹なり。

「うれしさいかばかりなるべき。リユウ、ド、ラ、モンタニエにて、一時に逢ひまゐらせむ。君を戀ふるステルニイ。」

ゲザは再び讀み返し、鈍く、おろかなる目なざしゝて四邊を見まはしゝが、胸を射扱かれたる人の如く、もろ手を高くさし伸ばし、氣を喪ひて舖板の上に仆れぬ。

緩なる熱病に侵されて、ゲザは蓐に就きしが、僅に殘りたる力さへ、これにて斷たれたり。

髮疎になりたる病後の人となりて、一間のうちを漸う歩きまはるやうになりしとき、ゲザは先づ紙と筆とをたづねき。書かむとするは、ステルニイにおくるべき文なり。かれは日毎に稿を屬しては、また扯き裂いて抛げ遣りつ。病める間、うみの母も及ばぬ看病せしデッレオは、おし止めて、「心をな苦めそ、」と繰り返していへど、ゲザは太息つきて、「これを出しやりて我心を輕うせむ、」といふ〱も、書いたる文をば出しやらざりき。ある日ゲザは忽ち悟るところある如く。「この事は文に書くべきにあらず。わが名聲をとり返さむには、まのあたり言ふに若かず。」といひしが、これよりは養生に心を用ゐて、また文かゝむとはせざりき。

ゲザは又ものおもひの中に日を送りぬ。その悲には燃ゆる如き耻雜りたり。結髪の妻の事、むかしの友の事を問ふ人に逢ふこともやあらむと思ふごとに、血雨の頬にのぼり來て、家の内にはことなる人のなきときも、壁にのみぞ面はれける。

時ありて結髪の妻を欺き汚したる友の事をおもひ出せば、心を狂はしめむとする怒氣おこり來りて、總身戰けり。さてかの友のその昔われに竭しゝさま〴〵の情誼、その交際の優しさ、その聲音の誠ありげなりしなどにおもひ及びては、ゲザは顳顬のあたりを抜へて太き息をつき、かゝる人のいかなればかゝる事をなし出だしけむと訝りぬ。

幾日か立ちぬれど、ゲザはスタルニイを尋ねに出でむともせざりき。かれはいたく人を怯れて、晝の間はデリレオが家をしばしも離れねど、身漸う健になりたれば、今はとて夜に入りてより出で歩くやうになりぬ。ゲザは年尙若かりければ、興を買ひ自ら忘れむものをと、猥なる筵にも列ることあれど、かれは人々の戯れ罵るをりも、色蒼ざめ、目を遠きところに注ぎて、言葉もなく片隅に坐するのみ。

ゲザはこれをも面白からずとして程なく止めつ。後には憂を忘るゝ術を餘所に求めて、やう〳〵酒に耽るやうになりぬ。

音樂をば殆全く打ち棄てたり。そを何故ぞといふに、音として昔の紀念を喚び起さぬはなかりければなり。縱令食を得むためなりとも、せめて樂を奏する業を棄て果つるに至らざらましかば、斯くまで衰ふるとはあらざりけむ。惜むらくは、亞米利加より持ち歸りたる金ありて、かれの醉ひ痴れて世を渡るにさし支なかりき。

デッレオはわが愛で育てづる子のかく望を絶ちて悲痛にのみ沈み、そのめでたき材能も次第にいひがひなく廢れゆくを見るにえ堪へず、をり〳〵行末の事をばいかにかすると問へど、ゲザは唯だあはれなる聲にて「われもいつかは再び勤むるときあらむ、されど今はあまりに憂きに堪へねば。」と答ふるのみなりき。浮世に遠きラアエスタイン街の片蔭に、ゲザが身はやうやく沈み果てなむとす。むかし養父なるデッレオが沈み果てし如くに。

おほよそ大都會といふ大都會には、ラアエスタイン街に似たる街あるものなり。巴里にはかゝるところいと多し。事の敗に逢ひ、心の苦を負へる人は、敵に嘲られむことをおそれ、友にはまたやさしき中に侮を包みたる憫の目にて見られむことを嫌ひて、かゝるところに遁れ入れり。この類の人も身を終ふるまで、かくまであやしき闇の世界にあらむとはおもはず。その初の心にては、志ばしこゝに耻を掩ひて、創の癒えむ時を待たむとするのみ。この類の人はその自ら設けたる配所にて、さまゞ〳〵の經营をなし、再び世にあらはれで、會稽の辱を雪がむと、美しき夢を見るなり。されどこの夢や、絶えて眞になりしことなし。

その故奈何といふに、かゝる街は墳墓なり。年經てこの淋しき世界より出で來りし人は、身のまはりに朽ち腐れたる土の臭を帶びて、早く廢れたる思想を懷きたれば、甦りたる屍の死したる語を操ふに似たり。

第十八回

白耳義獨立新聞には、「惡魔」は近き世にあらはされたる樂譜の上乘なりとあり。

伶人等は「惡魔」の中には不朽なるべき節々いと多しといひあへり。

「悪魔」は大喝采を博したり、と上等社會の人々は物語す。

されば、ラアエスタイン街までも、「悪魔」の噂聞えぬ。十とせあまり前にはパガニニにさへ比べられ、今は人知らぬモンチエの伶人の末に列なりたる、衰へ果てし「井オリン」弾きもこの噂を聞きつ。

デリレオが身まかりてより久しうはなりぬれど、ゲザはなほおなじ古家に住めり。少しばかりなる財産の殘れりしをも、養父が老病の藥餌のまろにつかひ畢んぬ。今は唯だ僅に朝夕の烟を立つるのみ。

心は闇くなり、力は衰へたるに、酒にさへ耽りたれど、今も折々は何時にまれ爲さばやとおもふ念生ぜざるにあらず。されどいつも色々の事ありてこれを妨ぐ。ステルニイが「悪魔」の曲の合奏を指揮すべしといふことを聞きしとき、かれが怒は極めて劇しかりき。いかなればステルニイは我に出逢ふべきことをおそれで、再びこのブルクセルには來むとすらむ。さてつぶやきていはく。否々、世の人の皆我を忘れたる如く、ステルニイも我が世にありといふことを、つゆ念頭におかざるならむ。さらずばステルニイは我を死せりとおもへるならむ。ゲザ若し世にあらば、その名聲の絶えて聞えずなるべきにあらねば。

ゲザは限なき苦惱を覺えき。この苦惱は結髮の妻の歿りしが故にもあらず、心を傾けたりける友の我を欺きしが故にもあらず。ゲザが前に立ち現れたるは、滅びたる技倆の鬼なりき。

「悪魔は近き世にあらはされたる樂譜の上乘なりとか。利分(たわい)もなきこと哉。嘘(ブラック)の皮を。」ゲザはかくつぶやきぬ。

ステルニイが作譜の技倆をば、冷なる心もて早く測り知りたり。おもひ出せばステルニイが當座の曲、その剽竊して主意を失ひたる節こそ可笑しけれ。さいつ年ある貴婦人に頼まれて、「パレット」の曲を作らむとせしときも、ステルニイは徒に心のみ苦めて、日を累ぬれども稿を脱すること能はざりしを、當時交深かりければ、咄嗟の間に作りてやりぬ。かの「パレット」の曲のみは、その頃評判よかりきとぞ聞えし。

さるを今ステルニイ大作譜家となりぬとか。

わが受持の譜の一段をば、ステルニイが手並いかにと、眼を鋭くして見度せども、間のみ多くてよしあしを知らむやうなし。

兎角するほどに二度目の試の日になりぬ。初度の折の如く、こたびも假病して休まむかともおもひしが、それも心ならず。何ともわかねど、胸引き緊むるやうなる感ありて、我身は「クラン、ダルモニイ」の樂堂へ引き寄せられき。こたび來しは「ピヤノ」敎ふる女とロシニが友とのみにはあらず。ブルクセルにて名を知られたるしろうとの伶人は皆壇のめぐりに聚ひぬ。樂を知りたる貴婦人は平間の前の列を占めて踏段に向ひて居り。一座の氣色は何となく改まりたり。心待する熱はありあふ人々の脉に漲りたり。中には評判きはめて高きものを迎ふる心には離り易き疑念を懷けるもあれど、そは一座の少數のみ。嘗て忙はしき交際官なりしシルワ伯は、暇あるごとに「井オロンセル」を弄ぶ人なるが、しきりにけふの曲のすぐれたりといふ噂を説きて、貴婦人に聞かせたり。ステルニイが作譜の力かほどならむとは、われもそのかみは思はざりきと伯もいへり。

「われもしか思はざりき」とロシニが友もつぶやきぬ。

そはわが解せぬことなり。されどかの曲の傑作なることは爭はれず。何等の「メロヂイ」ぞ、人を歴し、人の神經に偷み入り、人の血にしみ込まむとするは。まことに彼曲を奏づるときは、鬼物ありて聲波の間をさまよふ如し。」

某の侯のいはく。「大いなる器は晩く成り上がるものと聞く。婦人がたの中には、猶ほ記臆え玉ふもあるべし。ステルニイがあるとき『チゴイチル』の童を伴ひ來て、その業を誇り示しゝことあり。あれはいかになりぬらむ。世に神童といひはやされし童の、まことに天晴なるものになりしことは、昔よりなかるべし。」

「童とは紐付きたる衣を着たりし倫傻の子のことにや、」と一人の貴婦人いふ。

「否、さにあらず。紐付きたる衣を着たりしとは別なり。わがいふはラアエスタイン街より伴ひ來し子の事なり。」侯はかく分疏せしかど、貴婦人の群には、ひとりとしてゲザが事をおもひ出すものなかりき。「そはいかなる童にかありし、」と人々問ふに、侯。「させるものにはあらねど、神童のためしにとて引きつるなり。當座の曲の妙なることと、かの童の如きは稀なりき。されど後にはいかにか成りゆきけむ。」貴婦人等も聞きて。「げにさることもありけり。かの童のなりゆきこそ知らまほしけれ、」といふ。

この問答の間に一座の氣色動きぬ。壇に登れるはステルニイなり。掌を拍ちて迎ふるものあり。進み近づきて手を握るものあり。身を曲げて禮するものあり。

かれは倚譜架に歩み寄りて、伶人の群を見渡しつ。この群にはけふ闕げたる人なかりき。この時かれは忽ち色を失ひつ。打拍杖を取りたる手は、力なげに脇に垂れたり。されどかれを崇拜したる貴

婦人の目は、光を帶びて彼がかたを仰ぎ見たり。かれは架を敲きつ。凄しくなれる廣間に響き渡るは、冗なる聲多き「惡魔」の曲の初段なり。

聽衆は望を失ひて肩を聳かしつ。ゲザは卑む色を見せて口角を引き下げたり。ゲザは初め俯きたりしが、今はやうやう頭を擡げ、後には膽太くなりて、むかしは我本尊ともあがめ、我世界とも賴みしステルニイが面に、眼を注ぎて苦笑せり。

暫くして「アルト」謳ひの女最初の歌を謳ひつ。聽衆は電氣に撲たれたる如く震ひ。魂を喪ひたる如く耳を傾けたり。そが中に誰にも增して耳を欹てたるはゲザなりき。

ゲザが胸にはあやしき感おこりて、身うち恐く慄ひぬ。この感は駿なる少年の樂の如く、喜餘りて狂へるこゝろの如くなりき。この感はむかし彼歌をみづから書き卸しゝときの感なりき。我曲を聽く樂は、我曲を偷まれたる怒を抑へて、その起るを妨げたり。ゲザは一たび喪ひたる魂を、人ありて再び贈りかへしゝやうなる心になりぬ。かれは唯〻これを聽きて餘念なかりき。

喝采はいよ〳〵高くなりぬ。ゲザは夢心地にありて、人と共に「ヰオリン」を彈いたり。ところ〴〵にステルニイがみづから挿みたる冗なる聲あるに逢ひて、ゲザはうるさげに肩を曲げたり。

「絕妙の處は今ぞ、」と聽衆のうちにさゝやぐ聲す。「これは棄てられたる人の對歌とて、不朽の價ある節なり。」

別るゝ人の聲は怨むが如く、訴ふるが如く、これに雜りたる神の使の童の歌は、やさしく、軟に、忽ち斷え、忽ち續きて、過ぎ去りし歡の夢を喚び起さしむ。

ゲザは唯〻聞きに聞きたりしが、その「ヰオリン」の弓は俄に動かずなりぬ。目の前に浮ぶは綠い

ろなる部屋の壁なり。ステルニイは微笑みて「スピチツト」に向ひたり。我側には愛らしき少女ありて、式の如く兩手を輕く疊ね、頭をば重さに堪へぬやうに右の肩に傾けたり。あゝ、これ「チツ-ツン、マタオル、ドロオン」の段なり。

聽衆は物狂ほしく呼びぬ。伶人の群は立ちあがりて掌を拍てり。しろうと伶人は壇のめぐりに集りぬ。折しもあれ、こは何事ぞ。息もたえ〳〵に、唇の上には泡沫(あわ)を見せ、眼の裏には怒を輝(しば)がして壇の上なるステルニイが前に馳せ寄るは、「井オリン」ひきの一人なり。「盗人、人殺し、」と咳嗄れたる聲にて叫びつゝ、「井オリン」の弓振り翳して、ステルニイが面を打ち、氣を喪ひて鋪板(ゆか)の上に倒れたり。

ステルニイは徐に額を撫でたり。いかなる變に遭ひても度を失ふことなく、斷頭臺にのぼりても、猶餘勇を示しつべき、世慣れたる魂は、かゝる事には動ぜずとおぼしく、人々の氣を喪ひたる「井オリン」ひきを舁きて出づるを見送りつゝ、今しも進寄りたる「オルケステル」の長に向ひて。「譫妄狂といふものゝ興りしなるべし。さりながらわれをかゝる目にあはせ玉ひしはおん身が無念ならむ。」人々は席に戻りて、試はまたはじまりぬ。「井オリン」ひきをば舁かせて家にやりぬ。ゲザはわれに還りて、篳篥といふ篳篥、手筐といふ手筐を掻きさがしつれど、「地獄」の曲の原稿は一ひらもあらで、作りかけの「オペラ」の斷篇のみ、こゝかしこより出でぬ。

第十九回

犯罪の街と諢名せらるゝブウルワア、エクステリヨオとパツト、モンマルトルとの間に一條の巷あり。世を離れたることは、ラアエスタイン街の如くならねど、貧しきことはかの街より甚しかる

べし。ラアエスタイン街には、十字架に懸りたる基督の像ありて、我手だにかく釘づけにせられずば、汝達をこの胸に引き寄せて、煖めてもやるべけれど、かくせられては力なしといはむやうなれど、こゝにはこれだになし。ラアエスタイン街には彩りたる寺の窓より光洩れて、貧苦と罪悪とを照せども、こゝにはこれだになし。古き寺は既に潰えて、新きはいまだ立たず。

バット、モンマルトルの假づくりの塔に、あやしげなる吊鐘あり。職人の仕事場か、さらずは滊車の停塲にあるべき鐘のやうなる聲して、斷末魔とおぼしき加特力教少しばかりを、興醒めたる共和の民の敗宅にひゞかせ遣れり。

こゝには古本屋せぎあひたり。おほくは尨犬に守らせたる木づくりの骨董店の、風にゆらぎたるもあり。

このモンマルトルの一區には珍らしき事一つあり。こゝにて賣るものをば、必ず反古に包みたり。畫をかきたるあり。文を書きたるあり。譜を書きたるあり。人の面を吹くものは、滅びたる技藝の生活のなごりの塵なり、夢にのみ見つる蜃氣樓の燓け失せたるのこんの灰なり。

數かぎりなき貸部屋には、年若き藝人あまた住めり。こは世に何事をもえ成すまじきもの共なり。又年老いたる藝人あまたあり。こは世に何事をもえ成さゞりしもの共なり。耻を知らずして猥なる行するものと、慣を呑みて饑渴に苦むものとに打ち雜りて、力ぬけて、疲れ果てたる空想家さまよへり。

ボオドレエルが作りし散文小詩（プチイポエム、アン、プロオズ）といふものに、疲れ果てゝ倒れむとしたる三人の、おの〳〵背の上におそろしき「シメエル」（女怪の形したる不朽を謀らむとする妄想）を負ひたるあり。「シメエル」は

鋭き爪を人々の肩尖に立てゝ、その肉を掻き破らむとしたり。このモンマルトルの區内に住める藝人もおの〳〵その「シメエル」を負ひたり。その疲極まりて倒れむとしつゝも倘ほ倒れざるは、未だ重荷を卸さゞればなり。その「シメエル」の消ゆるときは、即ちこれを負ひたる藝人の臨終の期日なり。この區のうちには、材能なきに材能ありとおもへる藝人群をなしたり。されどこの痴なる人の間には、をり〳〵まことの名人の老いて世に棄てられたるあり。かゝる人は最早影だになくなりたるむかしの夢を、取り返さばやとおもひまどひて、唯だ埃の上にのみ名を署するなり。こゝの人は皆夢の中に日を送りて、魂はつねに本通りのかたに飛べり。かしこは僥倖の街なればなり。その息を屏め、耳を欹てゝ來ぬものを待つ心は、博奕する人の仇なる望に智を滅ぼし、髓を枯らすにや似たらむかし。

とある朝モンマルトル區なるステンケルク街といふところの最も卑しき貸部屋に遷る人ありき。こは藝人のカリフオルニヤと聞えたる巴里に迷ひ來ぬるゲザ、フアン、ザイレンなりき。かれはラアエスタイン街を住み憂くおもひて佛蘭西には遷りしなるべし。

滊車の中にて邂逅ひし中音うたひの男、この貸部屋をばかれに敎へき。こゝはいと靜なるところにて、勉强して樂を成すには究竟なりといへば、ゲザは喜びてその敎に從ひぬ。ゲザは今もなほ樂を立てゝ名を成さむとおもへるなり。

むかし或る貴族のおくりし上等の「井オリン」ありしを賣り拂ひて、かれは千「フラン」の金を懷にしたり。かの「井オリン」を千「フラン」に賣らむは、ほと〳〵途に投げ棄つるにおなじと思ひき。されど此巴里行は身を立つる基とおもへば、樂器一つは物かは、おのが脉のうちを流るゝ血を

賣らむも容易かるべし。

遠からずして我新作を出さむをりは、喝釆の聲雷の如くならむ。その時にはステルニイもわが前に俯して、頭をばえ擧げざるべし。悲憤の念は胸に逼りて、握り詰めたる指の爪は手の甲にも通るべき程なれど、ゲザは自ら抑へて、その氣色なか〳〵に落着いて見えたり。ステルニイが戴ける冠は原と是れ贓品なれば、まことの主なる我、いまより勉めてまた此の如き著作を出さば、かの冠をかれが頭上より扯き落さむこと、なんでふ事のあるべき。

いさゝかなる才を懷けるものにも、一生涯にひと度は凱歌をうたふ時あふものなり。いはむや我はよの常の才にあらず、我には天才あるものを。

巴里に還りてのはじめの日には、ゲザは心地すが〳〵しうおぼえぬ。中音うたひの男はゲザを促し立てゝ、まことの本通りをそゞろ歩せむといふ。まことの本通りとは、新「オペラ」とマドレエヌとの間をいへるなり。ゲザは大都の人ごみのところを五月蠅しとおもひてこれを辭み、中音うたひが都に來たる田舍人の習とて、忙はしげに巴里の眞中さして行くを見送りつゝ、おのれは獨りベットマルトルのかたに足を運びつ。

とみれば草木疎なる小公園を、丘の上に開けるありて、あやしげなる木づくりの梯をかけたり。シャム、セリセエ、パルク、モンソオ抔にて遊ふ華奢なる子供とは殊にて、身は痩せ、顏は垢つき、破れたる衣を着たる小兒あまた、朱の如く赤き砂道の上につどひたり。園のあなたは、荒蕪にて、石灰の塵を帶びたる草ところ〳〵に生えたるが、向ひの破屋の檐下まで續きたり。巴里はこゝより幾里かあらむと疑はる。

ゲザは園の中に据ゑたる木の長椅子に腰懸けたり。ゆくすゑは職工になりて人を罵る聲なるか、さらずば卑しき女になりて妄りに笑ふ聲なるかとおもはるゝ小兒のもろごゑは、耳に滿ちたり。かれはこの時に限なき疲を覺えき。

若かりし程はブルクセルより巴里への旅をば旅ともおもはざりしを、いかなれば今日はかく疲れけむ。かれが頭はやうやく低れて胸につきたり。この假寐の夢にゲザはブルクセルの公園なる眠ぶたげに戰げる木の下を、アンチットに肘をかしてそゞろあるきす。こゝには大いなる水たまりありて赤き罌粟のはな片二つ三つその上に浮び、青き空のいろはこれに映じたり。かれは少女に向ひて、我にはまことの天才あれば、ゆくすゑは大いなる業を成さむとさゝやきぬ。

美しき少女の暖なる身、われに寄り添ふとおぼえて、ゲザはおどろきて醒めぬ。目の前には袖つきたる青き前垂して、白き帽子を被りたる小娘ありて、冷き指を假寐したる人の手に觸れ、「園は早や鎖さるゝに、醒め玉はずや」といふ。

空には「アンゲルス」の祈禱（神の使マリヤが許に來ぬといふ祈禱）の鐘の聲響きわたれり。ゲザは立ちあがりて、丘を下りぬ。物の腐るゝ濕氣の臭、丘のほとりより立ちのぼりて、きれ〴〵なる霧は次第にモンマルトルの貧苦の境を罩めむとす。

ゲザは部屋に歸りて燈を點じ、身慄ひしつゝ一間の隅々に眼をくばりつ。こゝの壁をばもと柑子いろの地に青き文をおきたる紙にて張りしものなるが、單調なるよごれ色にぞ今はなりたる。一方には灰いろの「カミン」爐に鐵のおほひしたるありて、その爐板の上には素燒の厩なる人形二つ据わりたり。ステンケルク街の事に詳しく、おなじ家に部屋を借りたる、かの中音うたひの男の話に聞け

ば、こゝに据ゑたる人形はヲオドリユイルといふ人の作なり。「ヲオドリユイルはいにしへのミケランツエロにも劣らざるべき彫工なりしが、情なき公衆はこの天才を顧みざりき。」と中音うたひ云ひき。「なに、天才ありきとか。」とゲザはこの厭ふべき人形を見て叫びぬ。「かゝるものを造りし男には、よの常の才だになかりけむものを。」ゲザは天才といふ言葉のかくまで濫に用ゐらるゝを歎きぬ。

「さなり、さなり。」と中音うたひ答へき。「世に藝術の妙を知らせむとて、かれは産を傾け、力を費して、『エクチエ、ホオモオ』(こゝにこそ其人はあれといふ拉甸語なり、かくいひて、ピラツスが基督を猶太人に引きあはするところ)を刻みき。されど大理石は價高きものなり。かれは鬱症になりて酒に耽り、つひにはかゝるものゝみ作るやうになりにき。

ゲザはこの言葉を聞きて身ぶるひしつ。「その人は今いかにかなりし。自殺をや遂げつる。」中音うたひ、「否、かれは猶世にあれど、その業をば止めて、娘の世話になりたり。藝人の娘のいかなるものなるかは、君も知り玉はむ。昔は親子の縁を截つたりといひて、逐ひ出しゝ娘なれど、今はその世話になりて、何事をも忘れたる如し。かれはたゞ娘の上をのみ忘れしにあらず、世事をばすべて忘れ果てたり。陿き部屋に居りて、をり〳〵は「アプサン」酒一杯飲み、球突の戯するを、かれはこよなき樂とせり。その宿は「オテル、ド、ナンシイ」とてこの街の隅なり。往いて見むとおもひ玉はゞ明日伴ひまゐらせむ。若き藝人共はをり〳〵かれに馳走して、可笑しき藝術論を聞くことあり。」

ゲザが部屋に歸りて先づおもひ出でたるは、「オテル、ド、ナンシイ」に住めりといふミケランツヲ

エロが事なり。ゲザは爐板の上なる人形をおばし打ち眺めてありしが、猶熟く見むものをと、その一つを取りおろして、ほの暗き「ラムプ」にさし付けたり。塑像を觀る眼あるも、ゲザ流石に具へたれば、このあやしき人形にも、こゝかしこに名匠の手の冴殘りたるを見出しつ。

ゲザは覺えず聲を放ちて泣きぬ。持ちたる手のいたく震ひければ、人形は床の上にはたと墮ちて、そのまゝ微塵になりぬ。されど部屋の貸主は、直打あるものとおもはねば、償を求めむともせざりき。

ゲザは酒を絶ちしに、胸は緊めらるゝやうにて、目の前には紅の雲の圈をなしてまろがりゆくあり。おそろしき疲に、身は痺えたる如くなりき。されど彼は復た飲まんともせで、作譜にとりかゝりぬ。初の程は例の「オペラ」の局を結ぶも遠からじとおもはれぬ。瞬く間に書き終りたる譜の紙、身のほとりに堆をなせり。勢づきて唯だ書きに書く程に、忽ち空想の絲絶えしかど、ゲザは深くも意に介せざりき。かく製作の力弛むことは、壯なる時にもありければなり。また興の動かむをりまでは、しばらく銳を畜へて、今まで書いたるを删潤せばやとおもひて、こゝろみに翻し見るに、こはいかに、我ながら通曉しがたきまで妄なる節おほく、ところ〳〵には拍子(タクト)の全く脱ちたるあり、地は皆きれ〳〵なりき。中にはめざましく美しきところあれど、そはいと稀なれば、唯だ是れ灰燼のうちに殘りたる立派なる斷礎にぞ似たりける。心にかゝるはこれのみならず。樂譜に用ゐる符標のうちに忘れたるもの少からず。これをおもひ出さむとて、夜を通して藏書の中なる作譜論を閲し、あくる朝また始より書き改めなどすることありき。

造作もなき一小段をも書損なきやうに仕上ぐるは、堪へがたきまで難義になりぬ。心を専にし、思

を凝すやうなることは、最早及ばずなりぬと覺し。されどゲザは骨をば惜まざりき。唯だ堪へ忍びてなさば、いつかは出來上がる期あらむと、みづから志を勵ますものから、生憎に紙の上にたばしるものは涙なり。

ゲザは業の成らぬうちに、錢の盡きむことを恐れければ、節儉すること甚しく、今は柑子いろの部屋より屋根裏に引き遷りぬ。食事も日に一たびとしたり。

髮は白うなりぬ。物いはむとすれば口吶り、もの書かむとすれば手慄ふ。

夕暮に淸き空氣を吸はむと、パットモンマルトルにゆくが習となりたれば、かしこに遊ぶ小兒は皆この翁の面を見識るやうになりぬ。ゲザが木の長椅子に坐して、手に鉛筆を持ち、膝の上に手帳をおき、空を睨みて何事やらむつぶやくとき、小兒等は近く寄り來て、やさしく挨拶す。嬉しければ愛らしき片頰を撫で、時によりては一人を抱きて膝の上に戯するに、おそるゝ色もなし。昔がたりなどして聞かせば、さぞ喜ばむとおもへど言葉出でず。

ある日ゲザは「ヸオリン」を抱いて來ぬ。子供の心に協ふやうにと勉めて、短き踊の曲を奏づるに、酒を絶ちてより指頭に剛くなりて、手に持ちたる弓さへ震ふを、穉きものゝ手前も恥づかしとおもひぬ。されど子供のためには、この曲もおもしろきにや、さま／＼の戯したりしを、皆打ち揩きて、聽きに來ぬ。中には手を背後に組みて、頭を少し仰向け、心を籠めて聞くもありき。さらぬは興に乘じて、相抱きて舞ひ狂へり。

さて子供のために、當座の曲を奏でむとするほどに、指頭より張り出づる聲の、何とやらむ耳慣れたるに心づきて、おもひ廻せばこれはこれ、三十年の昔「サブロン」なる曲馬小屋にてつねに彈きし

節なりき。
ゲザはこれのみを樂にして、日ごとに「井オリン」を抱きてきたなき公園にゆきぬ。あはれなる子供の喝采もいまはかれが渴を醫すやうになりぬるなり。中音うたひの男との交はやうやう深うなりぬ。この男は「オペラ」座にゆきて試驗を受けしに、採用せられざりしかば、その試驗には依怙の沙汰ありといひ、その座をば伶人ばらの亂行場（セツリイ）にて、今にも滅ぶべきものなりといひ、人に向ひておのれがその群に入らざりしを物怪の幸なりと誇りぬ。モンマルトル區のうちなる踊茶屋（カッフエ、シヤンタン）に傭はれて、衣食に不自由なきほどの給料を受くるやうになりしは、この頃の事なり。
ゲザはこの男に著作中の「オペラ」の一節を聞かせよと所望せらるゝこと頻なれど、はじめは辭みて應ぜざりき。されどこの男の氣色にも、わが作譜の槃をおすといふを、眞僞いかにとおやぶむさま見ゆることとの心苦しければ、今は我より求めて聞せむとするに至りぬ。形ばかりなる古き「ピヤノ」に向ひて、時を吝まず彈いて聞かせ、をり〳〵は志は嗄れて空洞なる聲張りあげて「アリイ」を歌ひぬ。今は「そは面白からむ」といふ人の誰なるを問はぬやうになりしなり。彈き果てゝゲザは興なき興に乘じ、眼をひからせ、もろ手打ち振て、いかに、規模のおほいなるを見玉へ、と誇顏にいふさま、むかしの謙遜には似ずなりぬ。
とかくする程に錢竭きぬれば、錶を賣り、沓を賣りて僅に自ら支へたり。されど中音うたひの男をば、今も後輩扱にするを、かの男氣の毒がりて狂人を看護るやうにいたはり慰めつ。
ある日ゲザ中音うたひの男の部屋をおとづれて、共に「カミン」爐の前に坐し、さま〳〵の物語せし

折、かの男指もて縺れたる髪を掻き上げながら、「おん身が天才もおん身を養ふには足らじとおぼゆ。」といひき。

ゲザは眉を蹙めて敵手の面を見つめたり。

かの男はやさしく。「あしくな聞き玉ひそ。おん身が「オペラ」ほどの大作の興行せらるゝまでには、猶歳月の立つべきを、かくて居玉はむは、あまりに謀なきに似たるべし。それ迄の繋とおもひてさるべき糊口の業をもなし玉はずや。」

ゲザはといきつきて。「短き譜を作らばいかに。『ロオマンス』のやうなるものを。」

中音うたひ。「そは錢にならざるべし。『ロオマンス』など作るものは、これを歌はすべき歌女、をんな役者などと相結びて、その歌を流行らするなり。おん身縦令かゝる因縁を求め得玉ひても、かゝるものを作らむとて、切角の力を砕き玉はむは益なかるべし。それよりは伶人の群に入りて、『井オリン』弾き玉はむかた、なかなかに優りたらむ。」

「さなり、座に出でむは一つの手段なるべし。」と答へしゲザはひそかに我指の剛くなりたるを思ひて、身も震ふほどなれど、この耻を人に言ふべきならねば。「それもよけれど、座の勤はあまりに五月蝿かるべし。度々の試を奈何せむ。をりをりは夜に入ることもあらむ。」といひまぎらはしつ。

中音うたひ。「否、さる煩はしき業は御身には出來ざるべし。そは著作のためにいみじき妨ならむ。わが心當りはさるむづかしき位地にはあらず。試などいふことはなき處なり。」

ゲザは「そはいかなる處にか。」と微なる聲して問ひぬ。

中音うたひ。「われこのごろ『オテル、ド、ナンシイ』にて、ある曲馬師の群なる茶利役とちかづきにな

りぬ。性の善き男なりき。興行の場所はブウルワア、ロシユクア丶なりといへり。最上等の曲馬にはあらねど、躰裁わるき處にはあらず。おん身が上をかの茶利役に話しこゝろみしに、丁度『井オリン』ひき一人闕げたりといへば。」
中音うたひが言葉はいまだ畢らぬに、ゲザは跳り上りて、無禮なる友の部屋をのがれ出でぬ。ゲザはこれより後はかの男に物いふことなかりき。
ゲザが力は次第に衰へゆきぬ。豚の中をば、冷えかゝりたる鉛の如き血、澱みながら流る。目の前にはいつも塵舞へり。耳には蝴蝶の疲れて羽打つ如き音聞ゆ。食粗なれば饔足らず。つひには蓐に就くやうになりぬ。
人善きゲザなれば、おなじ家に住めるもの一人として氣の毒がらぬはなし。部屋の貸主さへ酷くは扱ひ得ず。食をおくりて食はするものあり。臥床を整へて寐さするものあり。新聞紙もて來て貸すものあり。ゲザはかゝる惠を受くるごとに、耻づかしげに微笑み、遠方にのみ注ぎたる目にて禮を陳べ、人去れば半醒半睡の境に入れり。
ある日の晝過ぎの事なりき。夢とも現ともわかぬ間に、軟なる手にて我額を撫づるものありと覺えて目を開きつ。臥床に居寄りて、項を屈め、我顔を覗き込みたるは、老いても猶美しき女なりき。白くはなりぬれど、まだ豐なる髮は、やさしく老いたる面を圍みたり。嫗は口籠りながら「ゲザよ」と呼びぬ。その聲は遙なるところより聞ゆる如くなりき。
ゲザはおもひ掛けねばおどろきぬ。かく呼びし聲は我母の聲なりき。我臥床に居寄りて立てるは、相見ざること二十五年なる我母なりき。

ゲザが母はフエルナンドオといふ輕業師の妻になりてより久うなりぬ。中音うたひの男が話しゝブウルワア、ロシユクア、なる曲馬小屋の主はフエルナンドオ夫婦なるが、この頃は仕合せよく世を安う渡れり。ゲザが母は上氣にこそありつれ、もとより惡しき人にはあらざりき。棄てゝ出でし後も、しば〳〵我子はいかになりしかと心に掛けて、人をして搜らせしに養親に厚くもてなされて、上等社會の人に交れりと聞えたれば、心やゝ落居るものから、上等社會の人に交れりといふに膽を奪はれて、近づかむともせで止みぬ。されど遠くよりはゲザが姿を見て、心を慰むること屢なりき。とかくする程にゲザが名世の中に聞えずなりぬ。さるにこの頃相識りし中音うたひのアウグスチイが滊車にて道づれになりて、おなじ家に住めりといふ珍らしき友の事を語るをしば〳〵聞きしが、その名をばきのふ始めて知りぬ。

マルガレエタはこの顚末を涙ながらに物語りて、その間汚れたる枕を据ゑ直し、衾おほひの巾の皺になりたるを伸ばしなどす。ゲザはたゞするが儘になりて、をり〳〵は口の內にて禮をいひなどすれど、あまりに意外なる再會なれば、何事とも思ひ分かず。母はゲザが應せぬに氣おくれして、聲をかすめて語りつぎていふやう。「おん身が『井オリン』ひきしを聞きしことあり。幾年前の事なりけむ。ところはニッツァなりき。わが子とおもへば、面目あることにおもひぬ。その時おん身の作りし譜を買ひ、今猶持てり。卷の首にはおん身が像ありき。美しき姿なりき。」

ゲザはこゝまで聞きて、顏を衾の中に埋め、死に瀕みたる人の如く息たえ〳〵なりき。この苦痛を見て、母は今までの遠慮を忘れ「あはれなる子よ」と耳語きつゝ、ゲザが白うなりたる髮を撫り

つ、むかし軟き緑髪をさすりしやうに。母、「あまりに思ひな屈しそ。おん身に天才ありといふこと、おん身に世の人のつらかりしことをば、われ皆知れり。これよりは看病怠なく、おん身が本復の日を待たむ。體だに健にならば、また何事か成らざらむ。わが家に引き移れかし。誰も邪魔はせじ。唯だ邪魔にならぬやうに世話してやらむ。人の來ぬやうなる小き部屋もあり。そこにて心任せに仕事せよ。」

ゲザは徐に面を擧げしが、劇しき咳に瘦せ窪みたる胸はゆすられたり。母はゲザが骨立したる肩の下に手をやりて、少し擁へ上げ、疲れ果てたる頭を我胸に倚せかけて、呼吸のたやすく出來るやうにしつ。さて涙聲になりて。「いたうも瘦せたることよ。この汗衫はいかに。最早きれ〴〵にならむとす。あすは新しきをもて來べし。落着きたらば、少し食べよ。力づくやうに。」かく言ひて、手づから煖めたる汁を飲ませつ。

ゲザは物をもいはず、言ふが儘になりたり。汁もいつになく旨かりき。日ごろの苦痛、日ごろの恥辱をば、かくやさしく款待さるゝことの嬉しさに打ち忘れて、眠ぶたきまでに心おち居ぬ。ゲザは言葉はあらで、母の手に接吻しつ。

母の目には喜の色見えたり。「曲馬所の帳場をば六時に開けば、今は往かでは協はず、八時頃にはまた來べし。それまで眠りて心をやすめよ。」

言畢りてゲザが顳顬に接吻して出でゆきぬ。

ゲザは眠りぬ。夢にはむかしの事浮びぬ。浮びしは歿りし結髮の妻の事にもあらず、我を欺きし友の事にもあらず。浮びしは苦痛なき記念なり。

ゲザは夢にヲアエスタイン街にかへりぬ。人を醉はさむとする花の香は身を繞れり。目の前には色めでたき罌粟の花束あり。枯れたる花びらは大理石の板の上に墮ちて、かすかに聲をなせり。ゲザが心鹿は跳りて、いふにいはれぬ苦痛また起りぬ。今これにて心滿ち足らば、我身は底なき淵に沈み果てむ。

ゲザは起き上りぬ。逃げ去るべきか。自殺すべきか。かれは脫ぎ棄てたる上衣を取りあげしが、上衣はあへなくも手より落ちて、身はまた臥床の上に仆れぬ。かれが魂は碎けて、慷慨にも苦痛にも堪へずありぬ。四壁のみ立てる屋根裏の一間を、この時あやしき神ありて飛び過ぎぬ。こは絕望の神なりき。この神の手には一束の罌粟の花を取りたりき。

日は月と立ち、月は年と立ちぬ。その日ぐらしの藝人おほきブウルワア、ロシエクア、とシツシイとの間にて、ましばしば見らるゝ男あり。丈高く、翁進びて、風に亂るゝ白髮は頰のあたりを打てり。これゲザ、フアン、ザイレンがなれる果あり。

顏はまだ美しけれど、心を喪ひたるやうに鈍く見ゆ。折々立ち留まりて頸を延べ、手を耳の後にあつるは、遠方の物の音を聞かむとする如し。まばしありて頭を掉り、太息つきて又步きはじむ。かれは母の許に住めり。母も、繼父も、弟妹も、むかし名譽ありし人なりとて敬ひかしづけり。淨き衣を着せられ、旨き食にて養はれ、何につけても善く扱はるれば、今は不幸の身なりとも思はず。待たるゝものは食事のみ、又一杯の「グログ」(熱酒)のみ。

かれは心やさしく、言葉寡く、人には親切にて、母に賴まれたる用をば嚴重に行へり。常には「カミン」爐の前なる腕木ある大椅子に倚りて、睡れる如く、醒めたる如し。

をり〳〵は心の狂ひたることあり。譜を書くべき紙に、忙はしげに何やらむ書きて、その反古身のほとりに堆をなせり。かゝる時は人々につらくあたり、倨傲の色見えて、故なきに怒り罵り、わが行末の禁を見よといへり。されど人々は意に介することなし。

かゝる疾の作ることは漸く稀になり、又おこりてもその間短うなりぬ。

モンマルトルの「ラァエ」とてかれを知らぬ人なし。畫工はその横顔を戯畫に作り、路なる童はその通るを見るごとに、肘にて知らせあひて、痴なる翁のえらがるがをかしとて笑へり。

調高矣洋絃一曲

ザックセン王城の鄰巷に、「タベルナ」（酒鋪）といふ一廓を區したる小家あり。日光斜に低き窓より入り、室の內半ば闇ければ、卒に外より入る人、破れたる机、粗き榻に躓く處あれども、遍に當れる少女が瞳の漆の黑さなるが、能く一種の磁石力を起して客を引けり。少女はもと西班牙の產なり。父に隨ひてこゝに來てより、既に葛裘を更ふること三たびなりといふ。のどかなる嶺南の天より、この易北(エルベ)河畔に移し植ゑられし故にや、花の容も衰へて、瘦せたる影の憐むべく見ゆるに、わが如く木强なるものすら、銷魂のおもひありき。わがこの少女と相識りしは、南亞米利加の客ペニヤ、イ、フエルナンデスによりてなり。われ屢ゝペニヤと西班牙傳奇を懷にして、この酒店に入り、且つ讀み且つ飮みき。芳烈なるその酒、痛快なるその文、逸興湧くが如くなりき。とある夕カルデロンがザラメヤ村長の曲を讀みて、イサベルが虐に遭ふ段に至りしに、少女忽ち叫びて止めよ止めよといふ。顧みれば柳眉は堅ち、星眼は張りたり。われ驚いて故を問へば、少

女のいへらく。人間不平なる事は到るところにあり。君等何ぞまたこれを書中に求め玉ふといふ。再び問へど敢て答へず。これより後もこの酒店に來しことはあまたゝびなりしかど、われ遂にこの少女の平生を盡すことを得ざりき。わがザックセンを去りてベイエルンに赴きしころ、羇亭の燈下にて、ザラメヤ村長の曲を譯せむとせしは、まことにわが心中に牢記したるかの夕の事を追懷する餘に出でにき。されど當時の譯稿は、第一齣の初五六葉に過ぎざりしを、故郷に歸りて後、弟篤次郎と共に飜譯の業を繼ぎ、二三日にして稿成りぬ。固より人に示すに足るものならねど、これを日就社に寄するは、竹の舍主人が眷顧の厚きに酬いむとてのみ。されど獨逸のギヨオテ、英吉利のシエヽクスピヤは今人口に膾炙するに、未だ世の人のカルデロンが名を唱ふるを聞かず。若し彼の久しく北歐羅巴の詩人の情を牽きし檸檬の樹の花の香をして、東亞細亞の文客の夢に入らしむることと、此篇より拗まることしもあらば、われ等二人が喜、果して奈何ならむ。

明治二十二年一月。鷗外漁史識す。

西班牙の近松と、稱へらるべきカルデロンが、得意の筆を今こゝに、寫す言葉はみ國振。ワスポンさしてゆく隊の、長なる大尉が、諂へる下士の詞に唆かされ、宿なる庄屋のまな娘イサベルといふ嬬女を、戀ふる甲斐なく斥けられ、恨を呑みて覗ふとも、志ら髮の親が月の夜に、旅立つ倅に涙の意見。隙を覗ひて勾引し、花を散らしゝエストレ山の、谷を隔てゝ親と子が、いふに言はれぬ歎の狹霧。義理に迫りて妹を、殺さむとするホアンをも、大尉と共に捕置きて、役目の手前將官の、ロオペに屈せずクレスポオが、命を棄てゝ爭ふ折柄、來合はす王の賞罰に、かげひなたなき大團圓。倅ホアンを侍に取立てられし其上に、親は處をザラメヤに、千代も動かぬ裁判役。調高矣洋絃一曲。

場割

エストレマヅラ坂道の場

クレスポオ宅前の場

クレスポオ部屋の場

クレスポオ宅前の場

クレスポオ宅奥庭の場

引返し

ザラメヤ村はづれの場

クレスポオ宅前の場

エストレマヅラ山の場

引返し

ザラメヤ村百姓屋の場

クレスポオ宅前の場

牢屋前の場

役名

西班牙王フヱリッペ第一世

將官ドン、ロオペ、デ、フイゲロア

大將ドン、アルハロ、デ、アタイデ

農夫ペドロ、クレスポオ
倅ホアン
娘イサベル
姪イネス
貧乏貴族ドン、メンドオ
僕ヌニヨ
下士官某
卒レボルレドオ
從軍の婢チスパア
裁判所の書記某
その外王の從者、兵卒、農夫大勢

序幕

エストレマヅラ坂道の塲

本舞臺上下、小高き岩の坂道。下手、坂の上り口。道の兩側、所々に立木をあしらふ。向うザラメヤ村火の見臺を遠見の書割。總べてエストレマヅラ坂道の塲。こゝへ下手より一群の兵卒大鼓を打ち、卷きたる旗を持ち、坂道を登り來て、舞臺にかゝりしとき大鼓を止め、よろしくすまふ。兵卒レボルレドオ、婢チスパア、兵卒△三八、前なる石に腰を掛く。

レボルレドオ　今度こちとらが行軍は王樣がリスボン府で御即位の御儀式に間に合ふ樣に行くこと

ゆゑ、いつもの軍の時とは違ひ、實に目出度譯なのだが、明けても暮れても山道を、腹を減らして歩くのは、巡禮ぢやあるまいし、下さらない役ぢやあないか。

△　レポルレドオのいふ通り幾年月の雨風に、色の褪めた旗にも見厭き、大皷の音にも聞き厭きた。唯だ日が暮れて宿に着き、一杯やるのが樂だ。

レポルレドオ　其宿だつて宛にやあならない。工面の好い百姓は暴されるのを迷惑がり、軍吏さんにわいろをつかませ、甘く泊りを斷るゆゑ、草臥足を引きずつても、又十町か廿町、先の村まで行かにやあならない。然し今夜はどうしてもザラメヤ村に泊らにやあ、とても跡がつゝかない。

△　其上宿に落付いても、酒も樂にやあ飲めはしない。聯隊長のドン、ロオペさんは、戰爭の事には巧者だが、音に聞えたやかまし屋、少し怠けた樣子を見ると、直ぐに刀をひねくつて、成敗すると威す流義、些とも油斷はなりはしない。

チスパア　皆さん、愚痴もよい程になさい。私は女の身で有乍ら、長の年月行軍するも、レポルレドオさんの傍に居たい計り。大抵の事ぢやござんせぬ。

レポルレドオ　こりやあチスパアが尤だ。一番こゝで兵隊の流行節でも歌つた上、ちつと氣でも晴さうか。チスパア四つ竹でも出さないか。

△　それは何より聞き事だ。旅の憂を晴す爲め。

兵卒一同　さあ〳〵早う歌うた〳〵。

チスパア　私は何だか氣耻かしいが、それでは此處で歌ふ程に、皆さん笑うて下さんすな。

とチスパア四つ竹を打ち、レポルレドオと歌ふ。

チスパア　申し〳〵大尉さん、お前の心で往く氣なら、阿弗利加までも往くがよい。

レポルレドオ　黒ん坊征伐したとても、私の頭の病めぬこと、こちやかまやせぬ〳〵。

チスパア　申し〳〵厨人さん、羊の肉にも飽いたれば、鷄を煮て下さんせ。

レポルレドオ　麵包の切れない用心に、釜の出し入れ精出して、小言をいはれぬ樣にしな〳〵。

△　おつと待ちな。歌を聞くのに身が入つて、今迄些とも氣が附かなんだが、向うに見える火の見臺は、こつちが今夜泊り込む、ザラメヤ村に違ひはあるまい。

チスパア　夫れならこれで止めませう。世間の御婦人樣がたは、口舌の時の涙には不自由を成されぬ樣子なれど、私も聲には不自由はせぬ故、今日に限らず何時でも、歌うて聞せて上げる積。

レポルレドオ　八里近くなつたからには、隊伍を組めとの號令が、何時あるまいものでもない。何んにしても下士官が、最う程なく見えさうなもんだ。

△　噂をすれば影とやら、向うに見えるは慥に下士官、大尉も一所に來られる樣子。

と皆々立上り、下手を向く。下手より大尉ドン、アルハロ下士官某と出て舞臺に上る。皆々禮をなす。

大尉　日を重ねたる行軍なれば、定めて孰れも勞れつらん。聯隊長がユエナより來られし上ならでは、聯隊揃うてグアデロオペへ進行は爲し難し。それには餘程時間もあれば、今番號の札を渡せば、其割付の順序に因り、ザラメヤ村に宿を求めて休息せよ。何んと結搆な命令であらうな。

レポルレドオ　こんな結搆な事は御座りませぬ。私し初め兵卒一同。

兵卒一同　有難う存じまする。

と此中下士官は番札を兵卒に渡す。

大尉　下士官には尙ほ用事もあれば、其方共は一足先に進行致せ。

チスパア　今宵の宿が定つたら、食事の用意は私の役。先つき歌つた通り、鷄でもしめませうか。さあ皆さんござんせいなあ。

と一同上手に這入る。大尉と下士官殘る。

大尉　軍曹、身共が宿札は。

下士　此處に一枚取つて御座ります。

大尉　さうして宿は何者の家ぢや。

下士　村一番の物持と、噂の高い大庄屋、其處の親父の氣が高い事は、レオンの太子も跣足だと、近村までも評判で御座ります。

大尉　鳥なき鄕の蝙蝠と、下世話でよく云ふ譬の通り、田舍分限には有勝の事だ。

下士　それに立派な家の構へ、先づ此處らでは第一等、然し私が此家を、貴君のお宿に撰んだのは、夫れ計りでは御座りません。

大尉　ふうん、そんなら如何いふ譯あつて。

下士　さあ、その譯と申まするは、家の娘が村中で、無類と名うての別品故。

大尉　えゝ馬鹿を申す。別品などゝ云つた處が、高の知れた百姓娘、太い手足は眞平だ。

下士　そう打遣つたものでも御座りません。女房に持つと云ふではなし。一寸一時の慰には、田舍娘の解らない、話を聞くも一興では御座りませぬか。

大尉　身共はどうも感心致さぬ。人柄の温順い、立振舞のしとやかな娘なら、それは隨分氣に入るけれど、田舍育の娘を相手に、話をするのは下さらない。
下士　そりやあ貴君は兎も角も、私なんぞは少しも早く泊に付き、どの娘でも手當次第に、冷笑てやりたいと思ひますするが。
大尉　それは貴様達の事だ、身共が世間で附合つて居る娘は、みんな令孃といつて敬ふ樣な人計り。どうも百姓の娘では、令孃とは言はれまい。先づこれが第一に相手にならないと申す譯ぢや。
　それはさうと貴様はなんで向う計り其樣に詠めて居るのぢや。
下士　今あの向うの曲角で、瘦馬から下りて路を曲つた男は、滑稽作者セルワンテスが小說中の貧乏貴族ドン、キホオテといふ身の拵へ。
大尉　馬鹿を云ふな。そんな物が世の中に本當に有つてたまる者歟。
下士　それはあつても、なくつてもどうでもいゝとした處が、大變遲くなりましたから、もうそろ〳〵と參りませうでは御座りませぬか。
大尉　それぢやあ一足先に行き、一寸旅宿の事を辭り、荷物を預けて置いて貰はう。
下士　そんなら荷物を預けた上、例のが愈々居るか居ないか、よく見屆けて參りませう。
大尉　さても女の好な奴ぢやな。
下士　あなたもあんまり嫌な方でも御座り升まい。
大尉　えゝ口の減らぬ奴ではある。
　と此模樣にて兩人上手へ這入る。これにて道具廻る。

クレスポオ宅前の場

本舞臺、前の方村の通路。少し下りて、舊びたれど立派なる石作りの二階家。眞中石段の上り口。左右硝子窻の中、白き窻掛を垂れ、上下は柵矢來ある石の垣根にて見切り、此中樹木の植込み。入口の左右に腰掛を据う。總てザラメヤ村豪農クレスポオ宅、外構の摸樣。爰へ下手より貧乏貴族ドン、メンドオ、同僕ヌニヨ出づ。

メンドオ　何とヌニヨ。身共の乘馬は何してゐるかな。」
ヌニヨ　旦那の馬は立ちずくんで居まして、最う一足も歩きません。
メンドオ　それぢやあ、馬丁に吩附けて、少し引廻さすればいゝに。
ヌニヨ　成程飼葉をやる替りに、それも宜しうございませう。
メンドオ　何故また麥をやり居らぬのだ。
ヌニヨ（小聲にて）へえん、おれの食ふ物もないに、馬なんぞに麥がやられてたまるものか。
メンドオ　また身共が飼犬は、繋がずに放して飼へと、乘々申付けて置いたが、あれは全躰どう致したな。
ヌニヨ　被命通りにして置きました。（小聲にて）犬は大層仕合せうが、近所では大迷惑だ。
メンドオ　何をぐづ〳〵云て居る。その牙杖と手袋とを、まあ此方へよこして呉りやれ。
と牙杖をくはへ手袋をはめてめかす。
ヌニヨ（小聲にて）へん、笑かしやあがる。これが本當の武士の高楊枝と云ふ奴だ。
メンドオ　最一つ申付けて置くが、其方誰にでも遇つたなら、身共が今日の晝飯に、雉の吸物を吸

つたと、話して聞せてやつたがよい。ひよつと嘘だと云うたなら、身共の家へ來いと申せ。何時でも吸はせてやるは、何の造作もない事ぢや。

ヌニヨ　知らぬ他人に吸はせうより、家來の私に吸はせて下さつたら、どんなにか喜びませう。

メンドオ　又た減らず口を叩き居る。それはさうと、今日此村へ兵隊が繰込むと云ふ噂だが、本當の話かな。

ヌニヨ　えゝ、本當で御座りますとも。

メンドオ　又た百姓家に宿を取り、さぞ困らする事であらう。あゝ考へても氣の毒な。

ヌニヨ　宿を借られる百姓が氣の毒なより、借られない人が餘程氣の毒で御座ります。

メンドオ　そりやあ全躰誰の話だ。

ヌニヨ　其氣の毒と申しましたは、貴族の事で御座ります。旦那は何故貴族の家に、兵隊が宿を借らぬか、御存じで御座りまするか。

メンドオ　其方何故だと思つて居るな。

ヌニヨ　今日食ふ麵包の無い家に、いくら向う見ずの兵隊でも、宿を借る譯が御座りません。

メンドオ　其方何も存ぜぬな。亡き父上の臨終に、身共に殘し置かれたる、紺地へ金で書いたる由緒。

　と懐より包を出して頂き。

是れを持つて居る故に、夫で徵發に逢はぬのぢや。

ヌニヨ　由緒なぞを殘すより、金でも殘して置た方が、餘つ程役に立ちましたらうに。

メンドオ　然し實の處を云へば、身共を貴族に拵へたとて、親父がそんなに有難くもない、と云ふのは、親父も隨分あせつたらうが、身共が母上の胎内で、貴族より外の者には、拵へさせなかつたに違ひない。
ヌニヨ　そいつは少しむづかしい話では御座りませぬか。
メンドオ　なに、むづかしいものか。譯のない話だが、學問をしないものは、物の變化と云ふ事を知らぬから困り切る。人間の子といふものは、食物の精液が、凝り固つて出來るのだ。
ヌニヨ　へえ、それぢやあ貴君の御兩親は、矢張り物を召上り升たか。私は又た貴族と云ふものは、代々食はずに居るものかと、今まで思つて居ました。
メンドオ　親父の食物は、身共の肉になる理屈だから、葱なんぞを食込んで、臭い跡が出來た日には、それこそ閉口致したらうが、さうなかつたは仕合せだ。
ヌニヨ　その講釋を承つて、解つた事が御座ります。
メンドオ　何を解つた事と申すか。
ヌニヨ　腹の減つた時は、能い智惠が出るものと、兼々聞いて居りましたが、貴君ですら今の樣な、理屈をおつしやる所を見ますれば、それに違ひは御座りませぬ。
メンドオ　人間の惡い事を申す。何で身共が腹が減つて居らうぞ。
ヌニヨ　それでも最う三時になり升ものを、晝飯なしでは隨分腹の減る時刻で御座ります。
メンドオ　腹の減るなどゝ云ふのは、百姓の事だ。武士は食はずに高楊枝、と云ふ事を存ぜぬか。あゝうか〳〵と饒舌つて居る中、いつの間にかイサベルの、家の前まで來てしまつた。早く顏が

見たいものぢやが。

ヌニヨ　旦那、それ程執心なら、親父に談じてお貰ひなされはいゝに。さうなる日には、親父の方では、孫が貴族で嬉しからうし、旦那の方では、第一に食物に有附かれるし、こんな結搆な事は御座りせまぬ。

メンドオ　何だ、馬鹿な事を申す。あんな素生のない娘なんどが、貴族の夫人になられるものか。

ヌニヨ　へえ、女房にできぬものならば、何にする思召で御座りまする。

メンドオ　思の儘に樂んで、否になつたらブルゴスの、尼寺へでも擲込んでしまへば、それで濟む事だ。まあ娘が窓に出ては居ぬか、一寸樣子を見て參れ。

ヌニヨ　旦那私はもう、あのクレスポオの藥鑵爺につかまるのは、眞平で御座り升る。

メンドオ　身共の家來にクレスポオが、指でも差してなるものか。主人の詞だ。見て參れ。

ヌニヨ　お前の麵包は貰はぬに、お前の歌を唄はにやならぬ、とは本當にこの事だ。隨分辛い役前だな。丁度向の窓があき、二人の娘が出て來ました。

メンドオ　なに、イサベルが出て參つたと。

とこの時クレスポオの宅の窓を開き、イサベルの從妹イチス顏を出す。

イチス　ちよいと〱イサベルさん。もう兵隊の繰込む時刻、玆へ來て見なさんせいなあ。

と此家の娘イサベル顏を出す。

イサベル　兵隊は見たいけれど、彼處に居る二人の人、五月蠅いではござんせぬか。

イチス　ほんとに五月蠅い奴なれど、お前の樣に腹を立てるは損な事、搆ふことはない程に此方か

らも散々に、馬鹿にしてやらうでは御座んせぬか。

メンドオ　其處に見えるはイサベルさん。こりやお好い處に通り掛つた。今まで茲へ來る道は、暗路をたどる氣持だつたが、お前の顏を見ると其儘、朝日の光が目に輝き、頓と夜が明けた様な心持になりました。

イサベル　さう仰有はメンドオ様。貴君の様に一日に何遍となく私の家の近所を廻り、イサベル〳〵と仰しやつては、他人の手前もあるもの故、是からはちとたしなんで下さりませぬか。

メンドオ　さう怒つたその顏が、何とも云へぬ美しさ。云はゞお前はお化粧を、さつぱりと止めにして、何時も怒つて居たがよい。

イサベル　こんな處に用事はない。さあイチスさん、其處を閉めて、此方へ早く來なさんせ。

イチス　色男のメンドオさん。本當にお氣の毒様。ゆつくり其處にお出なさんせ。

と窻をぴしやめ切る。

メンドオ　美しい女には、どうしても勝たれない。ヌニヨそろ〳〵行かうかな。

と下手へ行掛るとき、下手より此家の主クレスポオ出づ。

クレスポオ　又してもあの乞食貴族が、此巷をうろつき居る。忌々しい奴等だはい。

ヌニヨ　あそこへ來るはクレスポオ。

メンドオ　それぢやお道を替へやうか。

と上手へ行く。上手より此家の倅ホアン歸る。

ホアン　いつ通つても家の近所に、手袋を穿めた化物を、見掛けねえ時きやあねえ。五月蠅せい獣だ。

それに付けても家の妹は、百姓の娘にこそは生れて來たが、顏に似合はぬ氣丈もの、彼奴等を見た樣な、見掛倒しの貴族手合が、跡を付けても及ばぬ事だ。

ヌニヨ　親に劣らぬ倅のホアン。斯う前後に敵を受けては。立往生より外はない。

メンドオ　そんなに怖がる事はない。身共と一所に此方へ來やれへ

とクレスポオの方へ往き帽をとり。

メンドオ　やあクレスポオ殿。相替らず御精が出ますね。

とメンドオ、ヌニヨそこ〳〵に下手へ這入る。クレスポオ跡を見送り。

クレスポオ　今日丈は見逃すが、いつか一度はぶつちめて、骨身に堪へさせざあなるまい。

ホアン　とつさん、御前は何處へいきなすつた。

クレスポオ　うゝん、何時もの通り畠の見廻はりよ。それでも餘程草臥れた。今年は麥の實入が滅法よく、畑中が金色に光てゐる位だが、是から惡い雨が降り、大事な穗を倒さにやあいゝが。さうして手前は又た何處に居たのだ。

ホアン　お前に言ふなあ面目ねえが、又た例の附合で、球突に引掛かり、散々に打負たのよ。

クレスポオ　自分で尻の拭へる事なら、そりやあ手前の勝手だが。

ホアン　所が生憎足りねえので、濟ねえが又たお前に。

クレスポオ　おつと跡は俟つてくれ。乘々己が云ふことだが、出來ねえ仕事を受込まぬ樣にして、遊をするにも財布丈の事で仕末を志なくつちやあ、金はともあれ仲間同志の、第一聞えを惡くするぜ。

ホアン　其御意見は辱けねえ。其代りには己も又た、お前に心付けにやあならねえことがある。それやお外の事でもねえが、他人の困つて居る時に、金は呉れずにその代りに、小言を呉れてやるなんざあ、餘り有難いものでもねえよ。

クレスポオ　（笑ひながら）こいつは一番敵を取られた。手前も口の減らねえ方だの。

と云ふ處へ、下手より下士官革包を持ち來る。

下士　ちよいと物を尋ねたいが、クレスポオの宅はどこかな。

クレスポオ　クレスポオとは私だが、そして何ぞ用で御座るか。

下士　あゝ、左樣か。それは大層好い都合だ。私の持つてるこの革包は、今夜此家に泊を賴む一中隊の大尉殿の御荷物だが、何と預つては呉れまいか。

クレスポオ　それは兼々望む所。其荷物は此處に置き、直に大尉樣をお連れ下さい。國王樣と御附人とのお宿の爲には、家を明けてお倏受を致すのが、私共の家の古格。どれ掃除でもして置きませう。

下士　その志を傳へなば、大尉も定めし喜ばれん。程なく御出に相成まで、然らばこれを預かつて呉れ。

と革包をホアンに渡し、下手へ還入る。ホアン革提を腰掛の上に置き。

ホアン　誰か居ねえか。

と呼ぶ。僕出づ。ホアン革包を渡し。

ホアン　是をお客室に入れ、御泊客があるのだから、よく掃除をしておきな。

僕　畏まりました。

と入る。

ホアン　親父さん、おめえは此丈の身代をして居り乍ら、幾ら古格があればとて、まだ徴發に逢ふと云ふのは、隨分五月蠅い話ぢやあねえか。

クレスポオ　五月蠅いと云つたところが、百姓の務だから、どうもこれは仕方がない。

ホアン　仕方があるから云つたのさ。早く貴族の株を買つて置きやあ、それ丈で大丈夫だ。

クレスポオ　なんで手前にも似合はねえ、そんな弱い音を出すのだ。クレスポオが百姓なのは、世間で知らねえ者はないに、貴族の株を買つたとて、貴族の血統は買へはすまい。高が四千か五千枚の、金さへあれば出來る事だが、そりやあほんの錢金だ、榮譽といふ者ぢやあねえ。榮譽は金では買はれねえ。早い譬が已の樣な、禿た頭へ鬘を被つたら、世間の人が蔭口に、好い鬘とは云ふだらうが、禿頭とは誰でも知つてる。是と丁度同じ事だ。

ホアン　そりやあ一應聞えたが、臭いものには蓋といふ事もあるから。お前の樣な「ランプ」でも、鬘を買つて被つたら、第一日の照る晝中でも、帽を被らずに歩行ける道理。

クレスポオ　その附燒刄はよしにせう。おれは何處が何處までも、先祖が代々百姓ゆゑ、孫子も代々百姓で、暮させる了見だ、そりやあさうと、手前一寸家へ這入つて、イサベルを呼んでくれ。

ホアン　呼びに行く迄もなく、丁度あそこへ出て來ました。

と家よりイサベル、イチス出づ。

クレスポオ　イサベルや。其方も噂に聞いたらうが、今度國の王樣の。リスボン府での御即位の儀

式に行くとて、夥多の兵隊フランデスから、カステルラアまで行軍する、其隊長は兼ねてより、西班牙國の弓矢の神と、人に言はれるドン、ロオペ、其聯隊の半分丈、今宵此地に御泊とて、一中隊の大尉樣の、御宿に家も當てられたれば、手前達は足手まとひ、其上士官の暴者の、若し目にかゝるそのときは、又彼是と面倒故、明日のお立迄二階のおれが室へ行き、成る丈忍んで居つて呉れ。

イサベル　私も御前に其事を、話して見やうと思つた所、そんなら私はイチスさんと、一所に二階へ行きませう。

クレスポオ　どうか面倒が無ければよいが。おれはまだ御馳走に不足の品もあれば、市場まで誂へに、一寸行つてくる程に、ホアン手前は氣を付けて、随分粗匆のない樣に、大尉樣を迎へてくれろ。

と下手へ入る。

イチス　一人前になつた娘を、子供かなんぞの樣に、親父さんが案じなさんすが、幾ら先が兵隊でも、もう馬鹿にはせられぬものを。然しあゝおつしやるから、一所に二階へ行きませう。

イサベル　そんなら兄さん。

ホアン　はやく行きねえ。

と二人内へ入る。下手より大尉と下士官と出づ。

下士　あれが御宿で御座り升。

大尉　それでは番所に殘してある、身共が所持の背嚢をも、どうか跡から届けて呉れ。

下士　背嚢よりは例の娘を、どうか早く見たいものです。

と舞臺へ來り、ホアンに向ひ。

下士　此處に御連申したが、先程話した大尉樣ぢや。よく御會釋をしたがよい。

と大尉に向ひ。

私はお室へ行き、鳥渡樣子を見て參りますれば、お先へ御免を蒙り升。

と大尉に禮をして內へ入る。ホアン大尉に禮をして。

ホアン　これはお着になりましたか。御覽の通りの敗屋へ、位階貴き將校の、お泊りあるは家の規模、花は櫻木人は武士、お着用の御軍服、近く寄つて拜見致すも今日が始めて、お立派な事で御座りまする。

大尉　其方が今宵の宿の主か。

ホアン　いゝえ、親父が居り升るが、今方お夜食の仕度をするとて、市場まで參りました。

大尉　不思議な緣でいかい事、厄介になる事であらう。

ホアン　私は御夜食の用意を是より致し升れば、お供も一所に客室へ、お通り成されて下さりませ。

と入る。入替つて下士出づ。

大尉　軍曹、娘は何う致した。

下士　お室を見る振をして、客の間から部屋〳〵まで、殘らず樣子を伺ひましたが、一向娘は居らぬ躰。

大尉　それぢやあ親父が隱したな。

下士　仰しやる通りで御座り升。如何捜しても見えぬ故、臺處にて下女に聞けば、親父が惡く邪推

を廻し、二階へ上げて置くとの事。

大尉　廻り氣なのは下人の常、此處へおれを出迎へれば、左迄心は惱まさねど、隠して見せぬと云ふを聞いては、どうも見ずには心が濟まぬ。

下士　如何か娘の見られるやうな、好い御思案は御座りませぬか。

大尉　かう思ひ立つ上は、どうでも此儘見ずには置かれぬが、それには一狂言書ねばなるまい。

下士　强て御覽になればとて、貴君の事なら娘の爲には、譽にこそあれ耻にはならねば、何の遠慮に及びませう。

大尉　その狂言と申すのは、軍曹手前が、おつと、それより好い事は、向うからくるレポルレドオ、こんな事にいはしこい男、彼奴を一番使つてやらう。

と下手よりレポルレドオ、チスパアと出づ。

レポルレドオ　あそこに御出なさるは、おれが組の大尉様、例の事を願つて見やうか。

チスパア　願つて見やうとお思ひなら、脱らない様に旨く持込まなけりやあいけないよ。

レポルレドオ　この願の協ふまでは、又お前の智恵を借らにやあならない。

チスパア　そりやあお互の事だもの、云はなくつても承知だよ。

レポルレドオ　然し一足先へ行き、親玉へ當つて見るから、手前は此處に俟つて居ねえ。

と舞臺へ來り、大尉に禮し。

レポルレドオ　大尉様、私は少々お願が御座り升が、何と協へては下さりませぬか。

大尉　手前の願ふ事ならば、随分協へて使はさう、と云ふは常から其方は、働のある男だと、身共

も思うて居つたからぢや。さうして手前の願とは。

レポルレドオ　錢金には緣のない、躰と疾から諦めたれば、その御無心は申しませんが、只私のお願は、隊の旗長に仰つて、私をどうか公衆の前で樂を奏するとき、指揮役の勤められる樣に、御取計は出來ますまいか。

大尉　それは造作もないことだ。身共が許を出してやらう。

チスパア　內の人は大尉さんの、お首尾が大層好い樣子、此鹽梅では近い中に、指揮役の御かみさんと、云はれるかも知れないよ。

レポルレドオ　願を協へて下さりまするか。どうも有難う御座りまする。善は急げと申し升る故、少しも早くその御意を、旗長まで傳へませう。

と往かゝるを大尉とめて。

大尉　そんなに急ぐ事はない、手前の頼を聞く上は、此方もちつと頼がある。なんと聞いては吳まいか。

レポルレドオ　聞かないでどう致しませう。どんな御用か存じませんが、早く御用を伺へば、早く埒の明く譯故、どうか仰しやつて下さりませ。

大尉　此處の家の二階の中に、隱れて居る娘をば、どうか早く見たいのぢやが。

レポルレドオ　そんなら早く二階へ行き、何故御覧にはなりませぬ。

大尉　それが出來ればよいけれど、甘い調子がなくつては、どうも無暗に人の室へ、踏込む譯にも行かぬ故、それで身共が考には、手前が惡口致したので強く怒つた振をなし、劍を拔て追ふ程に、

手前はそれに摺れる振で、二階の上へ逃上り、外に路なき躰をなし、娘の室の戸を押開け、馳込んではくれまいか。

レポルレドオ　それですつかり解りました。そんな事なら朝飯前、何の造作もないことです。

チスパア　餘つ程話が好い樣子、事に因つたら今日中に、私の願が協ふかもしれぬ。

とレポルレドオ樣子を替へ、聲を高くして。

レポルレドオ　そりやあ餘り理不盡で御座ります。これしきの目腐金、乞食にでも恵むが常、それを貸さぬと仰しやるは。

チスパア　なんだか風が替つた樣だ。

大尉　手前それは誰に云ふ口上だ。

レポルレドオ　あんまり解らな過ぎるから、いくらお頭の前だつて、どうも虫が承知しません。

大尉　まだ無駄口を叩くのか。唯今の云ひ過ごしは、此儘聞き流して遣はすから、有難いと默つて居れ。

レポルレドオ　默つて居れと仰しやるなら、默つても居りませうが、若し私が卒でないなら。

大尉　卒でなければどうすると云ふのだ。

とチスパア馳出してレポルレドオを止め。

チスパア　大尉樣、どう云ふ麁匆か存じませぬが、まあ〳〵俟つて下さりませ。（とレポルレドオに向ひ、）お前まあどうしたんだい。

レポルレドオ　手前の知つた事ちやねえ。（と大尉に向ひ、）若し私が卒でなければ、お前に八の交(つら)

際(あい)を數へて上げうと思つたのさ。

大尉　言はせて置けば附け上り、思の儘の憎き雜言、その舌の根を引裂きくれん。

と佩劍を拔く。

レポルレドオ　お前なんぞが怖くはないが、將校の襟印に、對しておれが逃てやるのだ。

と家の内へ驅込む。

大尉　逃ぐればとて逃がさうか。

と同じく追驅入る。

下士　そりやお貴君御短慮でムります。まあお俟なされませ。

と續いて驅入る。

チスパア　人殺し〳〵、誰ぞ來て下さりませ。

と呼ぶ。この聲を聞付け、上手よりホアン刀を持ち、下手よりクレスポオ驅出づ。

クレスポオ　これ女中、何の騷ぎが起つたのだ。

ホアン　人殺しとはどうしたんだ。

チスパア　大變でござります。樣子は何だか知りませんが、大尉樣が私のかはいゝ亭主を追驅て、此處から二階へ上つた樣子。

クレスポオ　おれが兼々云はねえ事か。そりやこそ大事が起つたはい。

チスパア　少しも早く貴君方、助けて遣つて下さいまし。

ホアン　二階へ行つたと云ふからにやあ、二人の身の上が氣遣だ。とつさん、來ねえ。

クレスポオ　手前もぬかるな。

と兩人驅て内へ這入る。チスパアも跡より入る。これにて道具廻る。

クレスポオ部屋の場

本舞臺、眞中に卓子、廻りに椅子を並べ、壁には聖母の圖の額掛あり、上手に簞笥長椅子など飾り、下手に姿見の大鏡をかけ、向う硝子窓に窓掛をかけ、正面入口の戸閉り居る。爰に椅子にかゝり、イサベル、イチスの兩人編物をして居る。レポルレドオ戸を推明けて驅込む。

レポルレドオ　姉さん、さぞ駭然しなさつたらうが、一所懸命遁た故、後先見ずに飛込ました。どうか堪忍して下さい。これと云ふのも罪無くて、命を取られる人達が、尼寺へ驅込む格で、私も此處へ遁込んで、お前の樣な女神に、助けて貰ひたい計りさ。

イサベル　そりや私で協ふ事なら、事に因つたらお詫を申すまいものでも御座んせぬが、誰が全躰お前さんを、出入のならぬ女子の室へ。

イチス　追ひ込んだのでござんすえ。

とこの内大尉扱刀にて追驅け來り、下士官も付いて入る。レポルレドオ下手の隅に慄ひ居る。

大尉　一方口の此部屋へ、追込んだる上からは、如何に此上詫ぶればとて、摺つて成敗致してくれる。さあ尋常に覺悟致せ。

と劍を振りかざす。イサベル思入ありて、大尉とレポルレドオとの間に出で。

イサベル　まあ〳〵お俟ち下さりませ。私共の差出口は、お氣に障るか知りませぬが、女の言葉をお立てなさるが、貴き方の習とやら、私に免じて此塲をば、お助なされて下さりませ。

と此間大尉は暫くイサベルの顏に見とれて居る。

大尉　何ものが止むればとて、助け難き奴なれど、花かと見まがふそなたが詫、此が聞かずに居られうか。

と劍を鞘に納め、レポルレドオを尻目にかけ。

命冥加な奴ではある。

イサベル　私風情の願を叶へ、助けてお遣り遊ばすとは、有難う存じまする。

大尉　其方の願なら何でも聞いて遣はすが、其交り身共が願をも、どうか協へてはくれまいか。

イサベル　改まつた其詞、してお賴と仰しやりまするは。

大尉　さう云はれては言ひ惡いが、そなたの姿のあてやかさが、名におふヘレナも及ぶまいと、思ふた上に先程より、我怒をも憚れずして、刃の下に理を責めて、詫をなしたる氣性と云ひ、實に見上げた娘御だと、思つてぞつこん惚れ申した。

イサベル　えゝ。

大尉　軍人なれば否でもあらふが、見掛と違つた信切男、なんと協へてはくれまいか。

イサベル　御戲談も大牀になされませいなあ。

大尉　戲談處か、大與實ぢや。

と側へよる。

イサベル　その樣な事は知らぬわいなあ。

とつゝと立つてゆかんとする處へ、クレスポオとホアンと出づ。ホアンは手に刀を持ちたり。

跡よりチスバア續いて出る。

クレスポオ　これは大尉樣、貴君は何う遊ばしました。私は又誰か一人御手討にでもなつたことかと、驚いて驅付けましたに、案に相違の此場の樣子は。

イサベル　よい處へ父さん、兄さん。

大尉　組下の兵卒が、無禮なしゝを憤り、手討にせんと思ひしが、御息女の詞にめで、此場ヨりは見遁したり。夫に付ても御息女の、氣性に感じて此後とも、お近附になりたいと、それを折角頼んだ所ぢや。

クレスポオ　御息女なぞとは勿躰ない。私風情の娘の言葉で、怒をお鎮め下さるとは、流石貴き方々は、又違つたお心懸。

ホアン　（獨言）先刻から樣子を見て居りやあ、二階へ這入らう許りに、立派に書いた狂言と、睨んだ眼星に違はあるめえ。百姓風情とこけにして、勝手な事をせられちやあ、どうも虫が我慢をしねえ。

　と大尉に向ひ。

若しえ、大尉さん。家の親父が親切に、お前さんを泊めて上げたのを、何も顔に泥をなする樣な、耻をかゝせるにも當るめえ。

クレスポオ　手前また何を云ふのだ。大尉樣が御腹立の餘り、二階へ追驅てお上りになつたのは、何も不思議はねえぢやあねえか。

　と大尉に向ひ。

年端も行かぬ娘をば、人並に思召しての御取扱、有難う存じます。

大尉　いや、その禮には及ばぬが。

と ホアン に向ひ。

手前はちつと後先を見て、これから物を言ふがよい。

ホアン　へえ、私は後先を見たから、それで言つたのです。

クレスポオ　どうしたもんだ。手前まだ何をぐづ〳〵言つて居るのだ。

大尉　根もなき事を彼此と、無禮を申す上からは、きつと糺命致すべきぢやが、親父、貴樣の面に免じ、此儘に免し遣はす。

クレスポオ（むつとして）お詞では御坐り升るが、ホアン は私の倅奴で御座り升れば、折檻してよいことなら、私が如何樣にも折檻致します。

ホアン　成程親なら負けても居やうが、外の奴らにさう手輕く、なんで打たれて堪るものか。

大尉　然らば身共に手向ふ所存か。

ホアン　まあ命のあるその中は、大事なこつちの家の名前、めつたに傷は付けさせませぬ。

大尉　百姓風情の分際で、名譽などゝは鳴呼がましい。

ホアン　その百姓は國の基、百姓が働かずば、お前方は立ち行くまい。

大尉　はて云はせて置けば。

と刀を拔く。ホアン 刀を拔く。

クレスポオ　まあ騒がずとおれに任せろ。いゝから控へて居ろと云ふに。

とホアンを抑ふ。

レポルレドオ　そりやこそ大事が持上つた。チスパア來ねえ。己達の居る幕ぢやあねえ。

チスパア　早く連れて逃げておくれ。

と二人にて入口の戸を開く。内より聯隊長ドン、ロオペ、將官の立派なる軍服、令杖を携へ、兵卒夥多從へて出づ。

レポルレドオ　やあ、聯隊長樣が。

ロオペ　この有樣は何事ぢや。ロオペが此地に着する早々、拔合せたる白刃の光を、眞つ先きに見せるとは、持つての外の事ではないか。

大尉（獨言）これはしまつた。悪い處へ親父奴が。

クレスポオ　いゝ處へ隊長樣。

ロオペ　これはまたり。この年寄が痛風の痛い足を引ずつて、二階まで上つて來たに、どいつも返事を爲居らぬな。

と大尉に向ひ。

いやアルハロ殿、全軆何事が起つたのか。仔細を身共に語られよ。

と大尉刀を納め、ロオペの側に進み、一禮し。

大尉　固此家は拙者の止宿、部下なる一人の兵卒が、無禮の詞を發せし故、怒に任せて拔刀せしに、彼は早くも此室へ、逃込みし故某も、續いて入りし計なるを、娘の居たりと云ふを根になし、此處の倅が拙者に向ひ、覺えなき儀を彼此と、云ひ募りしが事の起り。

ロオペ　なに、それ式の事なるか。然らば双方怨の無き様、此親父が納めて遣はすが、其兵卒とはどの男ぢや。

レポルレドオ　こりやあ、あの罪も、この罪も、おれ獨りて脊負ふのかおらん。

イチス　この室へ逃込んだのは、あの隅に居る人で御座りまする。

ロオペ　然らば彼の骨身に堪へる樣、のおと呵も責を致し遣はせ。

レポルレドオ　へえ、それぢやあ、あの私に。

チスパア（獨言）大事な〳〵内の人を、不具にしてくれねばいゝが。

と氣を揉む。大尉は竊かにレポルレドオに目顏仕方にて默つて居てくれと賴む。

レポルレドオ　私が默つて居つたらば、喜ぶ人もありませうが、それだといつて意久地なく、默つて杖で打れるは、餘り氣が利きませんから、すつかり饒舌つてしまひますが、實の處はこの室へ、驅込んで參つたのは、大尉さんに賴まれたので御座り升る。

と皆々驚く。

ホアン　あれをお聞成されましたか。なんと私が申す事が、尤で御座りませうな。

ロオペ　いや尤とは云はれぬぞ。それしきの事があればとて、村中の騷とも成兼まじきに、軍人と爭を初むるとは、餘り出來したことではあい。

と從者に向ひ。

少しも早く皷を鳴し、兵卒共に番所に集り、一人も出ぬ樣、若し此命に違ふときは、嚴刑に處すべしと、申付けて參れ。

と從者入る。
いや、先づ斯うして置く上は、喧嘩の大きくなる氣遣ひない。
と大尉に向ひ。
貴殿は別に宿をとられよ。グワデロオペに出で立つまで、此處は拙者の旅宿に致さん。
大尉　其義承諾致して御座る。
と行きかけ。
とは云へ折角。
と後に向く。
ホアン　まだ何を言やあがる。
クレスポオ　いゝから隊長樣に任せて置けと云ふに。
ロオペ　はて早く行かれぬか。
大尉　今行きかゝつて居ります。
と大尉出て行く。諸兵卒レボルレドオ、チスパアも從ひ行く。
クレスポオ　（子供に向ひ）おれはロオペ樣に話もあれば、貴樣達は暫く下へ行つて居やれ。
ホアン　左樣ならば隊長樣、御先へ御免を被ります。
とイサベル、イチスと共に入る。
クレスポオ　まづそれへお懸け成されませ。
とロオペ椅子に腰をかく。

クレスポオ　とんだ大騷動になる處を、貴君の御蔭で事なく濟み、大仕合で御座り升る。

とロオペ心付かぬ樣子にて。

ロオペ　大騷動とはそりやあ全躰何の大騷動ぢやな。

とクレスポオむつとして、づか〳〵と行つて、ロオペの右手の椅子に腰をかけ。

クレスポオ　百姓風情の私共が、大尉さんを殺したら、まさか只の者を殺したとは、ちつとは違つて居りませう。

ロオペ　これは呆れた奴ではある。それでは貴樣は我隊の大尉を殺す積であつたか。

クレスポオ　これは呆れた御方ではある。私の名譽を傷けらるれは、大尉なんぞは恐な事、大將でもなんの用捨はなりませぬ。

ロオペ　いや、こいつは物を知らぬ奴だ。我部下に從うて、軍服を着けをる上は、譬へば卑い兵卒でも、指でも差して見るがよい、直に絞罪に致して呉るは。

クレスポオ　ふうん、己の名譽を針程でも、傷けた者があつたら最期、神に誓つて此親父が、自身に首を絞めて呉るは。

ロオペ　然し其方達百姓は、國に對して務と思ひ、兵隊には相應に、不勝をして遣らねばならぬぞ。

クレスポオ　その不勝をして遣ると云ふは、それは物入丈の事、王樣のお爲なら、なに私共の身上を、皆んな粉にはたいても、それは惜みは致しませんが、それとは違ひ名譽ばかりは、人の心の上のこと、是をとやかう致すのは、神の外には御座りませぬ。

ロオペ　えゝ、業腹な。手前の云ふ事が、どうも尤に聞える樣だ。

クレスポオ　そりやあ不思議は御座りませぬ。生れてから今日が日まで、眞直な事ぢけやあ、言た事のない親父。

ロオペ　それはさうと、どうも身共は、持病の痛風で足が痛んで相成らぬが。

クレスポオ　誰も休むなとは申しませぬ。寢床はとうから出來て居れば、行てお休なさるがいゝ。

とロオペ立つて行かゝり。

ロオペ　あんな剛情な親父には、今迄つひぞ遇つたことがない。

と這入る。クレスポオ殘り。

クレスポオ　あんな剛情な客人にやあ、己もつひぞ遇つたことがない。どうか首尾よく明日は此處を立つてくれゝばいゝが。なにしろ今夜一晩は、枕を高くは

と云ふを木の頭。

寐られぬはい。

と腕を組んで心配の模樣宜しく。幕。

二幕目

クレスポオ宅前の場

本舞臺序幕の道具と同じく、クレスポオ宅前の躰。暮方の景色。上手より序幕の貧乏貴族メンドオ同僕ヌニヨ出づ。

メンドオ　その話は誰に聞いたのぢや。

ヌニヨ　御饒舌と評判の、クレスポオの家の厨婢から、一伍一什を聞きました。

メンドオ　さうしてその騷の後で、大尉はまだイサベルを、思ひ切らぬ様子かな。

ヌニヨ　どうして思ひ切る處か、首つ丈箝り込んで、私共の家同前、物さへ食はず一心に、例の狡猾な卒に云ひ付け、毎日この邊を立ち廻らせ、始終様子を探らせますと。

メンドオ　俟つてくれ／＼。それ丈聞いても氣が揉めて堪らぬはい。

ヌニヨ　成程腹に堪へがないから、それは堪らぬ筈で御座ります。

メンドオ　いや戲談處ぢやない。さうしてイサベルの方は、少しは出來て居る様子か。

ヌニヨ　あの色氣のない別品は、大尉もやつぱり貴君同前、振て／＼振り扱くさうだが、成程大尉にしろ、貴君にしろ、あれに思ひ付かれやうとは。ちつと押が強うございます。

メンドオ　また相變らず出過ぎ居る。

とヌニヨの横顔を打つ。

ヌニヨ　あゝ痛い、いたいと云へば貴君はまだ、こゝに居たいで御座りませうが、大尉が向うから來る様子、早く逃げずば成りますまい。

メンドオ　卑怯な事を申し居るな。戀の敵のあの大尉、事に因つたら男の意地、打果たさねば相成らぬ。

ヌニヨ　あべこべに遣られぬ様、よく御用心なされませ。

メンドオ　それは跡の事にして、まづ此處に隠れて居つて、彼奴が様子を見屆け呉れん。

と上手石垣の側に隠る。下手より大尉、下士官、レボルレドオ出づ。

大尉　あの娘の事に限り、身共が此様にせつなく思ふは、戀情計の爲ではあるまい。少し心が狂つ

た様ぢや。
レポルレドオ　男の戀病と云ふものは、餘り感心せぬものです。
大尉　又しても無禮を申す。先程もロオペの前で、我輩を明白に、饒舌たる罪あれど、イサベルの返事をば、聞いて呉れると申す故、その儘許し遣すに。
レポルレドオ　さあ、そのお許故クレスポオの、下女を欺して金を遣り、貴君の手紙を渡した上、御執心の處をば、よく話せと申しました。
大尉　してその返事は如何ぢやな。
レポルレドオ　さあその返事は、ちつと大な聲をしては、申惡う御座りますれば、一寸お耳を。
と大尉に耳語ぐ。メンドオこの様子を見て焦立ち。
メンドオ　身共は最早決闘と覺悟したれば、日の暮ぬ中邸へ參り、身共が刀を取つて參れ。
ヌニヨ　貴君の家で刀と云つちやあ、あの入口の石の鴨居に、彫り付けてある物の外に、ほんとの物は御座りますまい。
メンドオ　具足部屋を探して見たら、一本位出るであらう。
ヌニヨ　刀なんぞはともかくも、大尉の目にかゝらぬ中、少しも早く逃げるが勝。さあ、早くお出なされませ。
メンドオ　あゝ、是非に及ばぬ事ではある。
と兩人そつと上手へ逃げて還入る。
大尉　それぢやあの百姓娘は、そんなに自分で高く止まり、身共が此程思ふのに、色好い返事を

致さぬのみか、手紙も手には取らぬとな。

レポルレドオ　百姓の娘と云ふものは、矢つ張同じ百姓が、解る樣に話をしたら、隨分きくまいものでもなけれど、貴君が彼此おつしやつても、どうも世界が違つて居るから、話がむづかしう御座いませう。それに明日お立になれば、唯つた一日計の間、慰み物になる事故、返事をせぬのも、こりやお尤もで御座ります。

大尉　なんと申す。たつた一日ぢやぞ。例令一日と申しても、日の出入より潮の滿干、その外戰の勝負より、人の生死に至るまで、一つと致して一日の中、短い時間に出來ぬと云事はない。ましてこれ式の娘の事、如何やうに手を盡すとも、かくまで惱める迷の雲、今日一日のその中に、どうあつても晴さにや置かぬ。

ときつと云ふ。

下士　いやはや、唯の一度丈け、御目に懸けた計りで、それ程迄に御心勞とは。

大尉　なに、唯の一度丈ぢやぞ。一度光りし電にても、落雷致す事もあり、一度燃えたる焰にても、火山の裂くることもあるに、一度なりとて此樣に、心痛せぬとは定らぬは。

下士　それだつて、最初御勸め申したとき、貴君は高の知れた百姓娘、何程の事があらうぞと、仰しやつたでは御座りませぬか。

大尉　それが身共の一生の不覺、初より覺悟すれば、左迄驚きも致すまいが、百姓娘と侮つて、馬鹿にしたるに顏を見れば、世にも稀なる彼が器量、不意を打たれて鬼神をも、取拉かんずる身共なれど、ぞつと身に染む戀風に、早や一命を絶たるゝ思、此上は顏なりと、責て最一度見たいも

のぢや。

レポルレドオ　それにはいゝ事が御座ります。私は不斷から歌が好で居るこそ幸ひ、あのチスパアと連立て、今夜此處の家の前で、門付を致しましたら、娘が聞きに出るは必定、さうすれば顏も見られ、都合がよくば甘い話も、隨分出來まいものでも御座りませぬ。

大尉　然しそんな馬鹿をして、ドン、ロオペが目でも覺ますと、それこそ大變が起りはすまいか。

レポルレドオ　なに、あの隊長さんは、きまりで足が痛いと云つて、夜は中々寐付きません。さうして見ると捕まつて小言をくふのは又私、いゝ迷惑で御座りまするな。

大尉　先に立つ役前故、そりやあ貴樣に氣の毒なれど、その埋合せはいづれするから、隨分危い仕事だが、出來るか出來ぬか氣休に、それぢやあ一番やつて見やう。そんなら日が暮れてから、仲間を揃へて集つてくれ。

レポルレドオ　そりやあ承知致しました。

大尉　男殺しのイサベル奴、よくも〳〵この樣に人に苦勞を致させ居る。今にどうするか俟つて居よ。

と下士付いて上手へ入る。レポルレドオ殘る。下手より、チスパアいそぎ出づ。

チスパア　私はまあとんでもないことをしたよ。

レポルレドオ　大分逆上せて居る樣子だが、まあ何事を仕出來したのだ。

チスパア　今一人の卒の顏へ、私が傷を付けたのさ。

レポルレドオ　何でまた女だてらに、喧嘩なんぞを始めたのだ。

チスパア　今玉突の遊の場處で、うんと旨い儲をしたが、そこへ來た兵卒が、遊の代をごまかさうと、思つたのが面の憎さに惡口をした上句、手に持て居た小刀で、そいつの顏を搔切つたのさ。今其奴は軍醫に賴み、縫つて貰つて居る處、此間に早く番所へ行き儲けた金を分けるから、さあ一處にお出でゝないか。

レポルレドオ　そいつは何しろ有難いが、折角大尉に賴まれて、手前を一役使ひてえ、此處に面白い狂言が出來かゝつている最中に、惡い邪魔を持つて來やがつた。

チスパア　面白い話とは、それは歌でも歌ふのかえ。譬へば喧嘩をした跡でも、聲に不自由はしないのさ。丁度四つ竹も此處にあるよ。

レポルレドオ　何だ馬鹿に氣の早い。その鳴物は晩の仕事だ。それまで此處ぢやあばつが惡い。それぢやあこれから番所へ行き、又た出直しと遊ばさうか。

チスパア　そんなら今夜は充分に、私がいつもの手際を出し、お前の出世になる樣に、きつと腕を。

とレポルレドオの手を握るを、道具替りの知せ。

振はうかいあお。

とこの摸樣、兩人連立ち、上手へ入る、これにて道具廻る。

クレスポオ宅後庭の場

本舞臺上手奥へ下げて石作りの家躰。硝子窓に布を掛け、中より燈の光差し居る。家躰の眞中石段の上り口、入口の戸閉り居る。この前芝生の敷物、上に葡萄棚を裝置ひ、此下小き卓子廻りに椅子

を並べ、下手泉水、此奥築山立木など遠見の書にて見切り、總べて、クレスポオ宅後庭の躰、月明り、夜の景色。此處へクレスポオ先に、ロオペ出來る、クレスポオ家に向ひ。

クレスポオ　あゝ、此處は大分涼しくて好い、旦那の召上る物を此處へ持て來て差上げな。

　とロオペに向ひ。

此處では物がおいしく上られませう。この八月一ぱいは、晝間の酷しく熱い交り、又夕方の涼しさ加減は、實に何とも云へませぬ。

ロオペ　これは成程心地好い。そして庭の作り方が、かはゆらしう出來て居るな。

クレスポオ　これは私が娘に拵へてやつた庭で御座り升。まあ御覽なされませ。晴度りたる月の夜に、翠滴る松が枝や、紅添ひし蔦の葉から、吹き送りまする涼風が、あの泉水の面に觸れ、滑き樂をば奏しますれど、それに合する歌とては、晝は小鳥の囀づる位の、事は隨分御座りますれど、夜に入りましてはそれもなく、寂しさ勝さるこの眺。それはさうとまづ此處で、御足の痛をば、暫しの間御休め遊ばせ。

ロオペ　中々身共の足の痛は、止むときはないけれど、かういふ景色を見て居たら、少しは忘れて居るかもしれぬ。

　と椅子に腰を掛け。

まあ、クレスポオ、貴樣も腰でも掛けたがよからう。

クレスポオ　なに、私は立つて居るが、結句宜しう御座ります。

ロオペ　まあ、遠慮せずに掛けたがよい。

クレスポオ　さういふ事あら掛けませう、これはお互ひづくの事、私が勸めたのでお悪になつたものだから、貴君の御許が出たからは、私も懸けずばなりますまい。

とクレスポオ腰を掛く。

ロオペ　いや貴様も晝間は餘程腹を立てたと見え、少し夢中になつた樣であつた。

クレスポオ　どう致して、私はどんな事が御座りましても、中々夢中になる氣遣は御座りませぬ。

ロオペ　それでも貴樣は身共が許しもせぬに、しかも身共が右の方に、遠慮なく腰を掛けたではないか。

クレスポオ　それは貴君の方で、ろくに會釋も成されぬ故、それで勝手に掛けましたが、今夜は掛けろと丁寧に會釋をなさつた故、それで遠慮致し升た。

ロオペ　それに晝間はどうしたものか、餘程口が悪るかつたが、今夜は大層柔順いな。

クレスポオ　私はいつも先の奴等の、會釋の仕樣一つで、大きな面をする奴あら、事に因つたら喧嘩も買はうし、又た手を合せて賴まれりやあ、隨分肩を入れる氣質。晝間は貴君が不條理を、仰しやつた故私もつひ失禮を申しましたが、今夜は大層信切に、仰しやつて下さる故、貴君が足が痛いと聞いて、どうやら私もこの足が、痛い樣に思はれます。

ロオペ　身共の痛は久しいもの。フランデスにて勤務したも、今では丁度三十年、暑さ寒さも厭はぬ處から、遂には斯うした疾に罹り、片時痛まぬ隙は無い。

と此處へ内よりホアン風除けのつきし燭臺を持ち、下部酒肴を持ち出來り、卓子の上に列ぶ。

ホアン　さあ、お酒を持つて參りました。何うか一つお過しなされて下さりませ。

ロオペ　給仕には身共が兵卒でも參るのか。

クレスポオ　いゝえ、貴君のお供の衆は、休息にやりました。お供はなくとも私共で、決してお間は欠かぬ積り。

ロオペ　さうか。そんなら兵卒が參らぬ代りに、そちの娘を此處へ呼び、一處に食事をさせてはどうぢや。

クレスポオ　それはなによりお易い御用。
　とホアンに向ひ。
手前一寸奥へ行き、早く娘を呼んで來い。

ホアン　宜しう御座ります。
　とホアン内に入る。

ロオペ　こんな痛い足を持て居ては、どんな別品をだしたとて、決して心配には及ばぬ　て。

クレスポオ　私が娘に引込んで居れと、兼々言付けて置まするは、多くの人に兎や角と、冷かされるが氣の毒故。あなたの樣に丁寧に被仰つて下されば、足は痛まうが痛むまいが、娘を此處へ出しまするに、少しも猶豫は致しませぬ。

ロオペ　（獨言　中々抜目のない親父だ。
　此中ホアン　イサベルを伴ひて出づ。

イサベル　父ん、何の御用で呼ばしやんした。

クレスポオ　オペ樣が其方も、此處へ出る樣にとの難有いお許、それで其方を呼んだのぢや。

イサベル　不束者で御座り升れど、御用の節は何時でも、お呼なされて下さりませ。
ロオペ　以後厄介に成る事であらう。
　とクレスポオに向ひ。
さて〳〵貴様は美しくて柔順しい、善い娘を持つて居るの。
　と又イサベルに向ひ。
其方も此處で遠慮なく、一處に食事をしたがよい。
イサベル　左樣ならば私が御給仕を致しませう。
ロオペ　まあ夫へ掛けたら善からう。
クレスポオ　あゝ彼仰るから、御免を蒙つて、其處へ腰を掛けたが宜い。
イサベル　そんなら御免下さりませ。
　と腰を掛く。此時舞臺後にて樂器の音聞ゆ。
ロオペ　凄しき庭にあの音樂。あれは全躰何處であらう。
クレスポオ　表の巷で兵隊が怠屈混れの頑要（いたづら）でござりませう。
ロオペ　彼等が勤務は隨分骨が折れるから、あの位の慰を、時偶致すは餘義ない譯ぢや。
ホアン　辛い勤と被仰れど、兵隊の勤計りは、何うも面白さうに思はれまするが。
ロオペ　然らば其方は軍人になる志願があるのか。
ホアン　若し願ひ出ましたら、お許に成りませうか。
　と此時舞臺の後にて兵卒レボルレドオの聲にて。

レポルレドオ　一番例の小歌を歌ひ、夫れでも目を醒さずば、小石を投げて威嚇かさう。

レポルレドオ　（歌ふ。）姉さん〳〵、イサベルさん、ロメエロオの草花は、今日まで青いまゝなれど、明日は蕾にもなるはいな。堅くするにも程がある、何時かは解けにやならぬもの。

と此內石の窻に中たる音聞ゆ。

クレスポオ　（獨言）何奴かは知らねえが、窓へ石を投げるとは。

と立ち掛り、氣を替へ。

ロオペ殿がお出なければ、思ひ知らせてやるものを。

と此內又々石の中たる音す。

ロオペ　ペコ〳〵やるのは我慢もするが、石を投げるとは何事だ。それのみならず、身共が泊る宿と知りつゝ、彼樣な卑しき歌を歌ふとは、不屆至極な兵卒共。

とクレスポオに向ひ。

さて〳〵騷がしい奴等ぢやな。

クレスポオ　どうせ若い人達故、惡戯も致し升のさ。

ホアン　（獨言）惜か奧の間に小銃が掛つて居つた筈。どれあれを持つて來て。

と立つて行かうとする。

クレスポオ　これ手前は何處へ行くのだ。

ホアン　えゝ。なあに跡の御馳走を持つて來やうと思つて。

クレスポオ　跡の馳走を運ぶのあら、何も手前が行くには及ばぬ。下女も下男も居るではないか。
ホアン　むゝ。
　と詰まる。
クレスポオ　言い付けて善いときやあ、此親父が言付けるから、おれに任せて控へて居ろ。
　と制す。此時舞臺後にて大勢の聲。
大勢　（歌ふ。）イサベルさん、イサベルさん、少しも早く目を醒まし、その窓の戸を開けて見な。
　お前の顔を見たいとて、好な男が居るはいな。
イサベル　此身に覺もないものを、斯様な耻辱を受けるとは。
ロオペ　最う我慢は出來ぬはい。
　と立上りしなに椅子を仆す。
クレスポオ　最う此親父も堪忍がならなく成つた。
　と同じく立上り、態と椅子を蹴仆す。ロオペ氣を替へ。
ロオペ　身共が我慢がならぬと云ふは、足の痛の事だのに、貴様は又た何を怒つて、椅子を態々蹴
仆したのぢや。
クレスポオ　あなたが椅子をお仆しなされた故、私もお付き合ひに、私の椅子を仆した計。
ロオペ　夫ならば夫で善いが、身共は食事は欲うないから、此杯盤を片付けて、貴様達も休んだか
よいではないか。

クレスポオ　成程夫ぢやあさう致しませう。

ロオペ　(娘に向ひ。)其方もゆつくり休んだが善い。

イサベル　あなたもお休みなさりませ。

ロオペ　(獨言)おれは慥か客部屋に、小銃を掛けて置いた筈。

クレスポオ　おれの古い一腰は、慥か戸棚にあつた筈。

ロオペ　此家のものが寢靜まるを、待つた上にて兵卒等を。

クレスポオ　娘の部屋に緊りと、しまりをしたる其上で、表の奴等を。

と兩人氣を替へ。

ロオペ　そんなら皆々休むが好い。

クレスポオ　明日お目に。

ホアン、イサベル　掛かりませう。

とロオペ内へ入る。クレスポオ思ひ入れあり。

イサベル　(獨言)大さう父さんが心配なさる樣子ぢやが、案ぜられた事ぢやなあ。

と此内ホアンそつと拔足して出やうとするを、クレスポオ見付けて。

クレスポオ　これさ又しても何處へ行く氣だ。己れと一所に來いと云ふに。

ホアン　そして何ぞ用なのか。

クレスポオ　なあに用ぢやあねえけれど、最う更けたから若い者は。

とホアンを止めるを、道具換りの知らせ。

寢るが善いと云ふことよ。

と此摸様クレスポオ先に、ホアン、イサベル付いて入る。是にて道具元へ戻る。

クレスポオ宅前の場

本舞臺元の宅前に戻り、月夜の體よろしく、此處に大尉、下士官、レポルレドオ、チスパア、その外大勢住ひ、レポルレドオ、チスパアは樂器を持ちたり。

レポルレドオ　こんなに皆が顏を揃へて、さつきから骨を折るに、家の中では音もせぬので、ちつと張合が拔けて來た。

チスパア　何のお前のせつかちな。最う一息歌うて見やう。

大尉　其方共にも餘程骨を折らせたから、最う向うのあの窓を開けて呉れても善さゝうな物ぢや。

下士　其癖内で悦んで、聞て居るかも知りやあしません。

レポルレドオ　そりやあさうと、向うに誰やら人影が。

チスパア　大方夜廻りの百姓で御座んせうと。

と下手よりメンドオ、ヌニヨ出づ。メンドオは劍と楯とを取りたり。

メンドオ　彼處の奴等のする事が、手前には善く見えるか。

ヌニヨ　見えもすりやあ、聞えもします。

メンドオ　あんな事をせられちやあ、誰でも我慢が出來ぬはい。

ヌニヨ　へえ、私しなんぞには痛くも痒くも御座いません。

メンドオ　然しイサベルが感心に窓を開けて覗き居らぬ。

ヌニヨ　なあに今に開けませうとも。

メンドオ　馬鹿を申すな。イサベルがあんな事で、何で窓を開けるものか。一寸様子を見た計りで、おれも腹が立つたから、此刀で斫り入つて、卑怯な奴等を片端から、逐ひまくらうかと思つたが、どうも是れはイサベルの知つた事とも思はれぬ。まあ篤と様子を見届けねば、迂濶に手は下されぬ。

ヌニヨ　夫ぢやあ其所等に隱れて居ませう。

と垣の側に隱る。

レポルレドオ　楯なんぞを擔いで來た、様子は威勢が善かつたが、何だか怯れが出たと見え、彼處の陰へ引込んだな。大方彼奴等あ戰爭に、打死をした兵卒の、幽靈位なもんだらう。あんな奴等に搆はずと、さあ〳〵跡を歌うたり〳〵。

とチスパアとレポルレドオと樂器を彈き。

チスパア　（歌ふ。）アダルシヤの剛の者と、名高い赤毛のサンパヨオと、好い中で居たチルロオナが、丁度ある日の。

レポルレドオ　おつと或る日の事ぢやあるめえ。大方夜の事だらう。

チスパア　混つかへしちやあいけないよ。丁度或る日の夕方に、同じ仲間のカルロオと、ちゝくり合て居る處へ、通り掛りしサンパヨオ、それと見よりカルロオも、仇名は晴間の稻妻とて、矢張劣らぬ氣早者、直に劒を拔き翳し、相手を目掛けて斫り附けた。

と歌ふ中、月雲隱れする心にて、舞臺暗くなる。上手よりクレスポオ、入口よりロオペ、各々

劍と楯とを持ち伺ひ寄る。

クレスポオ　そりやあかういふ鹽梅だつたか。

ロオペ　其斫れ味は斯うだらう。

と兩人斫り込む。是より暫く立廻りあり。とゞ大尉始め兵卒一同逃出す。メンドオ、ヌニヨも是に捲き込まれ、輾轉げながら上下へ逃げ入る。クレスポオは下手、ロオペは上手迄追つ掛け行き、追ひ棄てゝ戻り、兩人透かし見て。

ロオペ　殘らず逃げて行つたのに、彼處に一人殘つて居るは、負けぬ氣の奴と見える。

クレスポオ　一人殘つたあの人影、矢つ張さつきの仲間であらう。

ロオペ　彼奴もこゝを逐つ拂はねば、此胸が霽れぬはい。

クレスポオ　彼奴等如きを逐ひこくるは、何の手間隙入らぬ事だ。

と兩人近寄り、斫り結び、暫く默りの立廻りあり。此處へばた／＼に成り、下手よりホアン拔身を持ち、松火を把りたる百姓數人を連れて出づ。

ホアン　其處に居るのは父さんか。

とロオペ松火の光でクレスポオを見て。

ロオペ　やあ、貴樣は主人のクレスポオ。

クレスポオ　さういふあなたはロオペ樣。

ロオペ　道理で手剛い奴だと思つた。

クレスポオ　私しも實に我が折れました。

ロオペ　さうして貴樣は寢ると申して置きながら、何故是處等をまごつくのぢや。

クレスポオ　貴君も何故お休なされず、表へお出掛なさりました。

ロオペ　實を申せば部下の兵士が、色々無禮を致せし故、彼等を懲らしてやらうと思うて、是迄出掛けて參つたのぢや。

クレスポオ　實は私も同じ事、恥辱を受たが口惜く、仕返しに出て參りました。

ホアン（親に向ひ。）おいらもお前に知らせずに、出て來た所へ兵卒の、逃げて來るのを逐散らし、折よく此處へ還つて來たのさ。

とロオペは腰掛に掛り。

ロオペ　いやなにクレスポオ、身共が部下の兵卒が、そちに無禮を致したは、最早懲らして遣つたれば、どうか是で許してくりやれ、其上明日は日の暮れぬ中、早く此處を立たせるから、必ず共に案じぬが好い。

クレスポオ　色々の御心遣、難有う御座り升る。

と側へ向き。（獨言）

隨分剛情な客人だと、實は苦勞して居たが、此樣子で安心した。

ロオペ　まだ夜明には程もあれば、暫く休息致すとしやう。

クレスポオ　どれ御案内致しませう。

と先に立つを木の頭。

とクレスポオ先に、ロオペ、ホアン隨ひ入る。是模樣宜しく幕を引付け、音樂にて直ぐに引返す。

ザラメヤ村盡處の躰

本舞臺前の方、田舍の阪道。所々に蔦の掛りし杉の立木をあしらひ、正面麥畑、向うザラメヤ村百姓家遠見の書割。上手カトリック宗村界の心にて、黑塗の剝げたる十字架を立て、これに下手に製へたる血付きの耶蘇の人形を掛け、都べてザラメヤ村盡處の躰。是處へ上手よりメンドオ、ヌニヨ出づ。ヌニヨは頭の創を布にて卷き居る。

メンドオ　どうだ、手前の傷は餘程痛むか。

ヌニヨ　痛むといふ程でもないが、此位で澤山で御座り升。

メンドオ　おれは昨日の樣な怖い目に逢つた事はない。

ヌニヨ　然し私の樣な傷を受けない丈でも、結搆で御座り升。

と此中上手にて太鼓の音聞ゆ。

メンドオ　あれは何の音であらう。

ヌニヨ　昨夕泊まつた中隊が、今引き上げる所です。

メンドオ　中隊が引き上げれば、おれの苦勞もなくなる道理。それは何より安心だ。

と下手へ徃きかゝる。此處へ上手より大尉、下士と出づ。

大尉　かう中隊を立たせておき、身共丈は人目をくらませ、跡に殘り居つたる上、かく輝ける太陽

が波間に沈む頃までには、兼ねての望を遂げるつもり。

下士　大きな聲をなされまするな。また昨夕の幽靈が、彼處に迷つて來て居ります。

とメンドオ主從を指ざす。

メンドオ　おれなんざあ最う行くとしやう。然しあんまり弱身を見せ、侮られぬ樣用心致せ。

ヌニヨ　さう被仰つても此傷では、あんまり强身も見せられますまい。

と匆々に兩人下手へ入る。

下士　然し引返して御出になるは、大分危い仕事故、若しもの時の用心に、隊の中にて役に立つ、男を撰んで二三人、連れてお出になりますが、よろしからうと存じまする。

大尉　念には念を入れる譬。それは成程尤故、氣の利いたる男をば、撰つておれに付けてくれ。

下士　そこに脫りは御座りませぬが、若し將官に目附かつては。

大尉　その事は大丈夫だ。今朝聞けばドン、ロオペは、ジアデロオペの方へ向き、今日中に出立する由。國王も此地へ向け、已に出發ありしはずゆゑ、彼が急ぐも尤だ。

下士　それで漸う安心しました。

と此處へ上手よりレポルレドオ、チスパア出づ。

レポルレドオ　大尉樣、御褒美を頂きに參りました。

大尉　そりやあまた何の褒美を。

レポルレドオ（頭を掻き。）こりやあちつと氣が早かつた。實は好い御便をお知らせ申しに參りました。

大尉　そりやお耳よりだが、さうしてどういふ便だな。
レポルレドオ　早く云へば敵方で、一手を守る番人が、居なくなつたと同じ事。
大尉　その番人とは誰の事だ。
レポルレドオ　あの別品の兄弟のホアンといふ若い男が、ドン、ロオペの手に就いて、一所に出立するとの事故、跡に殘るは親父計り。
大尉　何からなにまでよい都合。
レポルレドオ　甘く事の出來るは必定。
大尉　これと云ふのもそちが骨折、當座の褒美これを遣す。

と隱しより金子を出して、レポルレドオに與ふ。

レポルレドオ　チスパア、お禮を申し上げろ。
レポルレドオ、チスパア　難有う存じまする。
大尉　それに付けてもレポルレドオ、其方には猶ほ用事あれば、身共と一所に此村に、一先づ殘つて居て呉りやれ。
レポルレドオ　畏つて御座りまする。
大尉　身共は出立の中隊に、命令致す事あれば、暫く隊へ行かねばならぬ。

と下士と共に上手に入る。

レポルレドオ　今も手前が聞く通り、己は大尉様と此處に殘り、是から一骨折らにやあならねえ。
チスパア　虫の好い事をお言ひでない。私一人を先へやつて、いつかちう傷を付けた、あの男にで

も出合つて御覧、ひどい目に逢はうぢやないか。

レポルレドオ　そりやあなに一所に行つたつて、別段邪魔にやあならねえが、手前こんな仕事のできる様な、いゝ度胸を持つて居るか。

チスパア　衣物はさつぱり持つてゐないが、度胸はちつたあ持つて居らあね。

レポルレドオ　あゝに衣物は人目に立たぬ様、己が外套でも引掛けて、男に化けて居るがいゝ。何んにしろ手前が一所に行き、相方をしてくれれば、一倍狂言が引立つて、己も心強いと云ふもの。

チスパア　その口だから獨りでは、手放せないと云つたのさ。それかういふ歌があつたぞえ。

と歌ふ。

兵隊さんのいゝ人は、一時間とは持ちはせぬ。本當に甘く云つたものだよ。

とレポルレドオの肩を叩く。

レポルレドオ　又た極りを云つて居らあ。

とこの摸樣宜しく道具廻る。

クレスポオ宅前の場

本舞臺元のクレスポオ宅の前に戻る。暮方の躰、夕日のさしたる誂。此處へ内よりロオペ先に、クレスポオ、ホアン付いて出づ。ホアン兵卒の服を着し居る。三人宜しく腰掛に仕ふ。ロオペ、クレスポオに向ひ。

ロオペ　色々手前の世話になり、禮は詞に盡されぬが、取分けこゝに居るホアンを、兵隊に出して

くれたのは、身が何よりの喜ぢや。

クレスポオ　そりやあ私共より申す事。どうぞ是から末長く、家來ぢやと思召し、お使なされて下さりませ。

ロオペ　家來などゝは以ての外、彼の氣性と膽力とは、身共の心に協うたれば、朋友として交際致せば、必ずともに案じぬがよい。

ホアン　勿体ないその仰せ。是よりは貴君樣を、實の父上同樣に、何事なりともお詞には、決して背かぬ私の所存。

クレスポオ　氣立は好い者で御座りますれど、何を申すも片田舍で、鋤と鍬とばつかりを、書物に交へて育ちし故に、上つ方の禮儀には、到つて疎いがさつもの。どうかそこをば御容赦なされ、御指圖なされて下さりませ。

ロオペ　もう大分夕景で、表も涼しくなつたから、番所へ往きて隊を纏め、徐々出立致さうか。

ホアン　それでは私は番所へ參り、御駕籠の用意を申し付けて置きませう。

と下手へ入る。イサベル內より出で來り、腰を掛け、ロオペに向ひ。

イサベル　何事も行屆かず、御泊り中は失禮計、御許なされて下さりませ。

ロオペ　その會釋では痛み入る。何かお前に進ぜやうと思うたが、おゝ、丁度よい。

と十字架の首飾を取り。

此十字がたの首飾、これに埋めた金剛石も、其方の光を増すには足らぬが、この親父が寸志故、失禮ながらお納下され。

と首飾をイサベルに渡す。

イサベル　難有う御座りますれど、私共こそお宿を致して、殊に心得居り升るに、斯様な物迄頂きましては、どうも心が濟みませぬ。

と受け兼ぬる仕打。

ロオペ　いや〳〵お前方の親切は、金や寳石では購はれぬ。これは左様お心ではない。只朋友仲間の贈り物と思うて、受けて置いたがよい。

イサベル　左様なら有難く、頂きまするで御座りませう。

と首飾を受納め。

イサベル　此度は又た兄さんは、お供を致しまする事故、どうか宜しう願ひまする。

ロオペ　その事は心配致すな。兄は身共と行くのぢやから。

と爰へ下手よりホアン出づ。

ホアン　お駕籠の用意が出來まして御座り升る。

ロオペ　然らば直に出立致さん。いやクレスポオ、健固で居やれ。

クレスポオ　貴君も御無事でお出なさりませ。

ロオペ　イサベルどのも變り無う。

イサベル　御機嫌好うなさりませ。

とロオペ下手へ入る。

ホアン　それぢやおとつさん、妹、もうおさらばだよ。

と同じく付いて入らうとする。

クレスポオ　これホアン、手前一寸俟つてくれ。

とホアン後へ返る。

クレスポオ　ロオペ様が番所にて、御仕度の出來る中、言つて聞かせることがあるから、ちつとの間俟つてくれ。その話とは外ではないが、手前も衆々知る通り、おれが先祖は此村で、數代續いた庄屋役、穢のないが自慢の家柄、手前もそれを忘れずに、どんな人にも負けぬ様、其身を勵んで勤めてくれ。然し百姓と云ふ事は、常々胸に納めて置き、出過た事をしねえがいゝ。見ねえ、先祖は悪い家柄でも、控目な爲め世の人に、立てられて居る者もあるし、縱令先祖は好くつても、出過る爲に毀られるは、珍らしくない事ぢやあねえか。何でも人に禮儀を盡し、腹にある事を隱さず打明け、そして錢金の事にかけて、けちくせぬ様に心掛けるが、世の中を渡る爲には三つの秘訣と云ふ物だ。諺にも云ふ、帽を脱ぎ、財布をさげて居る人なら、友達はいくらでも、出來ると云ふのは此處の事。然し印度の土から出て來る金は、大切な物ではなく、大切なのは心から、打明けて頼む友達だ。それから手前の持前で、矢たらに人と喧嘩をするが、あれは何より禁物だ。己は劍術の道場の、表を通る度毎に、劍術の稽古をば、敎へてやると一どきに、どういふ塲合に劍術は、使ふ物だと云ふ事を、敎へたら好からうと、つひぞ思はぬ事はねえ。さういふ師匠が居つたらば、世間の親は子供等を、皆んなそこへ頼むであらうに。手前も拔かねばならぬ塲所の外は、刀を拔いちやあならねえぞ。

と金包を出し。

立身をしやうと云ふには、第一身形を拵へにやあならねえから、これは少し許だが、足のそし前にするがいゝ。おれが信心する一念と、ロオペ樣の取立で、手前に今度遇ふときは、立派な士官になつて居てくれ。今云つたおれが異見が、手前にの餞だ。

ホアン　親父さんの其異見、とくと胸に納めて居て、生涯忘れは致しません。それぢやあこれは貰つて置きます。

　と金包を隱しへ入る。此中舞臺段々に暗くなる。

クレスポオ　子供の時から手一つで、育て上げたその上に、少しも側を離さぬから、少しの間の別でも、何だか心細くなつてならねえ。

ホアン　それぢやあ親父さん。どうかたつしやで居ておくんなせい。

　とクレスポオと握手し、次きにイサベルの手を握り乍ら。

ホアン　親父さんも最う寄る年だから、手前よくおれに交つて、介抱をして上げて呉んねえ。

イサベル　それは承知して居りまするが、お前は是迄とは違つて、兵隊になる事なれば、食物に氣を付けて、惡い病に罹らぬ樣、よく用心なさんせいなあ。

クレスポオ　愚痴を云ふので暇取つた。最うロオペ樣が御立であらう。

イサベル　そんなら兄さん、最うお別で御座んすかいなあ。

　と此處へ内よりイネス出來る。ホアン又手を握り。

ホアン　イネスさんもたつしやでゐねえよ。

イネス　御暇乞を仕たうても、聲より涙が先立つて、私しや物が云はれませぬ。

クレスポオ　手前が此處に居れば居る丈、別が惜くなつて來て、嘆が增さる計り故、ロオペ樣に後れぬ樣、もう早く行つたがよい。

ホアン　そんなら親父さん、最ういきます。皆もさらばだよ。

とホアン下手へ早足にて入る。跡次第に月の上る躰にて明くなる。

イサベル　兄さんが別を惜んで居るに、好う親父さんは氣强うに、出してお遣りなさんした。

クレスポオ　おれも別が惜くはあるが、あんなに年を取つた者を、長く此處に置た日には、怠惰者になる計り、それより王樣の勤をするが、あれの出世と思た故、實に氣强うやつたのだ。彼奴が影が見えなくなつたら、此處で顏を見て居る時より、餘つ程我慢がしよくなつた。

イサベル　さういふ譯なら是非もないが、一晩の事はあるまいもの、最う日が暮れるに、山路へお掛りでは、さぞお困りなされやうと、それが氣に掛つてならぬはいなあ。

クレスポオ　然し夏の間の夜の旅は、晝より結句樂なものだ。それに明日の朝立てば、ロオペ樣の御供に後れて相濟まぬ故、それで立たしてやつたのよ。

と云ひかけ。

（獨言）とこゝろでは立派に云へど、實は其方の云ふ通り、最う一晚止めて置きたかつた。

イサベル　もう暮れて仕舞つたから、家へはいらうでは御座んせぬか。

イチス　まあお侯ちよ。兵隊の居る間こそ、五月蠅うもあつたれど、最う皆んな立つて行つて、心配はない程に、少し爰で月でも見て、凉い風に當らうではござんせぬか。

クレスポオ　おれも最少し此處に居やう。向うの小徑を見て居れば、何だか伜の後影が見える樣に

思はれるから。
イサベル　それはさうと今宵此村で、村役人を撰擧すると聞きましたが、本當で御座りまするか。
クレスポオ　今日は裁判役を改選すると、村中の寄合ぢやが、おれは倅が旅へ立つし、心持が好くないから、辭つて行かなんだ。
イサベル　さうで御座んすか。
　と話す處へ、下手より大尉、下士、レボルレドオ、男裝したるチスパア、其他卒四五人窺寄る。
大尉　成丈彼等に氣取られぬ樣、そつと身共に付いて參れ。
レボルレドオ　あれ彼處を御覽なさい。皆んな表で腰を掛け、涼んで居る樣子です。
下士　今照りかゝる月影で、透して見ればまがひない、あすこに居るのはイサベルぢや。
大尉　おゝ成程イサベルに相違ない。こんないゝ都合はないから、思ひ切つてやつて仕舞はう。先づ身共が娘をば引さらつて行く程に、貴樣達は兵士と共に、邪魔を致す親父奴を、喰止めて居つてくれ。
下士　それぢやあ皆んな聞いたらうが、今大尉樣の仰の通り、しつかりとやつてくれ。
　とこの中大尉、下士、レボルレドオ外套を脫ぐ。
レボルレドオ　チスパア、一寸此處へ來てくれ。
チスパア　私を呼んだは何の用だえ。
レボルレドオ　この外套を預つてくれ。
　と三枚の外套を渡す。

チスパア　何んだねえ、皆んなして泳ぎに行くのぢやあるまいし。
大尉　それぢやあ皆んな仕度はいゝか。
と先に立ち忍び寄る。
クレスポオ　大分涼しくなつたから、最うそろ〳〵家へ這入らうかの。
イサベル　それがよいはいなあ。
と三人立上がる。
大尉　そら今だ。皆んな脱るな。
と驅け込み、イサベルを小脇にかゝふ。
イサベル　あれえ。
と叫ぶ。大尉は引抱へたる儘上手へ驅け行く。
イチス　あれえ。
とクレスポオに縋り着く。
クレスポオ　性懲もなく大尉だな。憎い奴め、逃さうか。
と追掛けて上手へ行かむとするを、下士以下皆々遮りとゞむ。この中大尉上手へ驅け入る。
イサベル（上手にて）とゝさんえなう。
クレスポオ　えゝ、口惜い。おれが刃物を持たぬ計りに、手前達にむざ〳〵と、娘を奪ひとられることか。
と兵卒と打ち合ふ。この中イチスそつと家へ入る。

レボルレドオ　どうせ仕方のねえことゝ、諦めてしまへばよし。ぐづ／＼云へば老耄奴、手前も生けては置かねえぞ。

クレスポオ　刃物がなければ取返されず、刃物を取りに這入つて居ては、娘の生死も覺束ない。えゝ殘念な。

と身をもがく處へイチス家より刀を持ち來り。

イチス　おぢさん刀は此處にあります。

と渡して家へ入る。

クレスポオ　おゝ、忝けない。これさへあれば相手は嫌はぬ。娘を再び取返すか、おれが死ぬるか、二つに一つ。卑怯な賊共覺悟しろ。

と刀を拔き、切つてかゝる。

下士　多勢に無勢だ。協はぬことだ。

クレスポオ　何をおのれが。

と立廻り、とゞ石に躓きて倒る。兵卒折重なりて押ふ。

レボルレドオ　早く息の根を留めておやんなせい。

下士　そりやお餘り手酷いから、皆んなでこいつを縛り上げ、裏の山へ連て行き、一寸人目にかゝらぬ處へ、繋いでおけばそれでよい。

と是にて皆々クレスポオを縛る。

下士　さうして置けばこいつめが、百姓原に云ひ傳へ、仕返しをする氣遣ない。

クレスポオ　小石に躓いた計にて、おのれ等如きに手込に合ふとは、えゝ口惜い。

と身を揉む。レポルレドオ細をとり。

レポルレドオ　やかましい。默つて居ろ。さあぐづ〳〵せずとこつちへこい。

と引立てゝ上手へ入る。此處へ下手よりばた〳〵にあり、ホアン驅け出し來り、宜き處に止まる。

ホアン　別の嘆に暇取つて、番所へいけば隊長には、早や御出立ありし跡、直に追懸行かうとしたれど、村の者が大尉等を、見掛たといふ話を聞き、家の事が氣に成る故、一旦跡へ歸つて來たが、變つた事がなければいゝが。

とこの時上手にて遙に。

イサベル　とゝさんえなう。

と叫ぶ。

ホアン　やゝ、あの聲は妹イサベル。南無三おれが居ねえ間に、大尉に擄つて行かれたか。最一足早かつたら、こんな目にやあ逢はすまいに。出立の節とつさんが、拔く塲處を見て刀を拔けと、異見をしたのは此處の事。少しも早く跡追懸け、取り返さねば。

と外套を脱ぐを木の頭。

ならねえはい。

と劔を取り直し、上手を見込んで、一散に驅けて入る。これにて幕。

三幕目

エストレマヅラ山の場

本舞臺一面、岩山の張物。前の方深き谷間。上手奥より下手まで通して狹き山道。處々松杉の立木。これに蔦蘿の纒ひし好。向う山又山、立木など遠見の書割。一面に薄暗く、霧深き誂。ずつと上手の立木に、クレスポオ後手に縛られ居る。都てエストレマヅラ山夜明の躰。此處へ下手よりイサベル髮を亂し、衣裳の破れたる拵にて出で來り、下手宜しき處、岩の上に倒れ住ふ。

イサベル　あゝ情ない此身の上。今明け掛かる空の色に、見かへる影も耻しい。私を哀れと思ふなら、疎に殘るあの星も、朝日に光を讓るのを、少しは俟つても善からうに。又た天道樣もその通り、若しお情があるならば、なぜ暫しの中波津海の、波間に隱れて居て下されぬ。無味氣世に顯はれて、こんな汚れた痕を見て、心地好からう筈はないに。

とこの中、向う山影より次第に朝日の差昇る仕掛。これと一しよに舞臺段々に明くなる誂。

あゝこれ程に願うても、神も哀れと思さぬか。あれ〱朝日は情なう、次第に昇り來る樣子。と、斯う怨むのも得手勝手、神に授かる此身をば、耻しめられて阿容々々と、生て居るのを未練なと、怒つて苦め玉ふのぢやと、覺悟するより外はない。死ぬる命を存命たも、家へ歸つて親父さんの、顏が最一度見たい計。然し思へば昨日まで、滑く輝く月に比べ、かはゆがつて下さつた、此身にかゝる村雲を、拂ふ樣なき一期の不運、さぞ御心痛なさるであらう。と云うて此儘身を隱さば、あの惡者に連られて、驅落したと世の中の、さがない口に唄はれん。いつそ兄さんが私の難義を、救ひに御出のその折に、つひ殺して貰うたら、今の歎はあるまいに。顏を合はすも耻づかしいと、逃退いたのが口惜い。あゝ何としたらよからうぞいなあ。

と泣伏す。この時上手にてクレスポオ縛られて居乍ら。

クレスポオ　極悪非道の大尉主従。なぜ一と思に此首を、打落してはくれぬのぢや。生ながらへてこの様な、憂き苦しさを受けるより、いつそ死んだが増ぢやはやい。

とイサベル顔を上げ、方角を聞定むる思入ありて。

イサベル　霧にて慥に見えねども、往來も稀な山道に、かすかに聞えるあの聲は。

クレスポオ　早く歸つて此身をば、殺していつてくれぬかやい。

イサベル　なに殺してくれと。さては此身と同じ樣に、世を果なんだ人なるか。身につまされて氣の毒な。女の身ではあるけれど、出來る事なら難儀をば、救つて上げたいものぢやなあ。

と立上り、坂道を傳はり上手へ近寄る。クレスポオは目を閉ぢて居る。

クレスポオ　どなたかは存じませんが、此處をお通りのお方なら、此　父を一討に殺して行て下さりませ。

とこの中仕掛にて段々霧晴れ、舞臺明くなる。これにてイサベルはクレスポオを見付け。

イサベル　やゝお前はとゝさん。

クレスポオ　(目を開き。)やゝ手前は娘。

イサベル　お前はまあ荒々しう縛られて。

クレスポオ　手前はまあ取亂した髮形。

イサベル　少しも早うその繩を。

クレスポオ　手前來て解てくれ。

と此内イサベル繩を解く

イサベル　とゝさん。

クレスポオ　娘。

イサベル　逢ひたうござんした。

クレスポオ　逢ひたかつたはやい。

と兩人抱合ひ、聲を上げ泣く。とゞクレスポオは娘の手を引き、前の方岩の上に連れ來り、宜く住ひ。

クレスポオ　咋夜手前が大尉めに、攫はれたのを追はうとして、多勢に無勢の悲さは、とう〳〵斯うした手込に合ひ、無念の齒嚙をして居たが、手前はまあどういふ譯で、此處まで迯げて來られたのだ。泣て居ては解らねえ。さゝ早く云つて聞かせてくれ。

とイサベル顏を上げ。

話をするさへ耻しい、此身の受た不仕合を、どうか聞いて下さりませ。咋日迄は親父さまの、お側に居つた心强さ、他人には後指をさゝせたこともさへない私が、丁度餓ゑた狼に、攫つて行かれた小羊同樣、初の中こそ親父さんの、お聲も聞えて居つたれど、段々聞えず遠ざかり、追手のないを幸に、私に向つて無躰の言掛、折から月は雲隱れ、此身は怖さ腹立しさ、樣々詫れど聞ばこそ。最う助けて貰はうと思ふ願は絕果てゝ、仕返をする願より、外に思案はなくなりました。處へ折角兄さんが、迹を追うてお出なれど、兎角助は難義より遲過ぎるのが浮世の常。樣子を見てか兄さんは、直に刀を扳放し、大尉と暫く切り結んで、お出の間に其塲をば、迯るともなく驅出

し、振向き見れば大尉は手を負ひ、倒れたところへ卒等が來て、兄さんを押隔て、大尉を助けて逃た樣子。仇は討つて嬉しけれど、汚れた此身を捨て兼ねたは、お前に一目逢ひたい計り。險しい道や谷あひを、此處までくるも夢心地。お前に逢へば望はない。二度人目にかゝれぬ躰、こゝにあるこの繩で、早く私の首をしめてどうぞ殺して下さんせ。

と下に跪く。クレスポオ抱き起し。

クレスポオ　その覺悟は尤だが、まあ立上つて己の云ふ事を、一通り聞たがよい。それは手前の口惜しいより、おれの口惜さはどの位か、胸も裂ける樣だけれど、一躰世間に仕合せといふことがあるのも、不仕合といふ事があるから起つたのだ。手前がこんな目に合ふに、神も助けて下されぬは、全く手前が授つて、持つて生れた不仕合と、覺期するより外はない。一旦女氣に突詰めて、死ぬるといふのは惡い了見。それより此世にながらへて、其身の耻を雪がうと、心掛るが己への孝行。こゝの道理を聞き分けて、よく得心したがよい。

イサベル　それでは死ぬにも死なれぬかいなあ。

と泣伏す。

クレスポオ　それにしても兄の身上、どうして歸つて來たのかしらぬが、ひよつとしたら今頃は、難儀に逢うて居るかもしれぬ。少しも早く村へ歸り、助ける工夫をせねばならぬ。

イサベル　それぢやと云うて兄さんに、わしや逢ふのが面目ない。

クレスポオ　なにおれと一所にゆくに、構ふことがあるものか。(獨言)極惡人の大尉主從、たとひ一旦倅の手を、逃れたとて此親父が、屹と思ひ知らせてくれるは。

と氣をかへ。
娘、さあきやれ。
と兩人立上り、下手へ行く。下手より裁判所の書記百姓二人を從へて出づ。
書記　やあ、クレスポオ殿。此處に御座つたか。御宅にお出がない故に、處々を探して居りましたが。御目にかゝつて有難い。早速申上げまするが、御目出たい話がござります。
クレスポオ　目出たい話とは、全躰どの樣な話で御座るか。
書記　外の事でも御座らぬが、昨日裁判所で村中の協議の末に、此方をば此村の裁判役に皆んなして撰擧しました。それに丁度村の中に、大事が二つ起つて居ります。一つはフイリツパの王樣が、今日か明日は此村をお通になるとの事。もう一つは昨日の朝、お立になつた大尉樣が、手傷を受けて御座るのを、兵卒が此村へ連て歸つて療治中。然し何處で何者が手を負はせたか知れませぬが、なにしろお役目に當り早々、お骨の折れた事で御座り升。
クレスポオ　それでは己を裁判役に撰んだといふ事なのか。折も折とて此の撰擧、思ひの儘に大尉奴を。
書記　えゝ。
と聞きとがむ。
クレスポオ　いや、思の儘に大尉樣に、傷を付けた相手をば、探し出さねばならぬといふのさ。何にしろ其方は御苦勞で御座つた。
書記　まづ村役所へ御出を願ひ、裁判役のしるしの杖を、お渡申したその上で、大尉さまの取調を、

早速願はにやならぬ故、直にお供を致しませう。幸ひ霧も晴れたれば。

クレスポオ　晴れると云ふはよい幸先。これから村へ立歸り、昇る朝日に耻ぢぬ樣、理非を分けたるその上にて、娘の恨も霽らさにやならぬ。

と氣をかへ。

そんなら書記殿、さあ一所に。

といふを木の頭。

行きませう。

と書記へ會釋する摸樣宜しく、拍子幕。〻引付け、音樂にてつなぎ、直ぐに引つ返へす。

本舞臺一面の平舞臺。上の方折廻し煤けたる壁の張物。此處へ開戸を付け、正面破目ある硝子窓に舊き窓掛を垂れ、同じく此壁を下手へ折廻し、前づら開戸の入口、此下の方松の立木、低き垣根。總てザラメヤ村百姓屋の躰。好き處に卓子を据ゑ、周りに椅子を並べ、上手に大尉腕の傷を繃帶にて卷きて首に掛け、下手に下士椅子に掛り居る。この見得にて幕開く。

大尉　此計りの傷なれば、何も村へ歸るにも及ばぬに、何故此處まで連て歸つたのぢや。

下士　そりやあ御無理で御座り升。醫者に見せぬ其中には、重いか輕いか知れはしませぬ。

大尉　さういふ事なら仕方もないが、評判の立たぬ中、早く此村を出立せねば、彼此と面倒が起るまいものでもない。

と云ふ處へ下手よりばた〳〵になり、レボルレドオ驅け來り、跡を振向き乍ら、戸を開けて內に入り。

レポルレドオ　大變で御座ります。今此處へ裁判役が參ると申す事で御座ります。

下士　それぢやあてつきり娘の親父が、昨夕の事を裁判所へ訴へたので御座りませう。

大尉　成程それに違ひない。然し村の役人なら、國の掟は存じ居らうから、左迄懼れることはない。士官はたとひ罪ありとも、軍律の外には處分せられぬものだから、此場で彼此申すとも、如何樣にもいひくるめ、逃るには譯はない。

と云ふ處へ、下手よりクレスポオ、裁判役の杖をもち、後より書記と百姓大勢得物をもちて出づ。

クレスポオ　其方共は裏手へ廻り、此家を取卷いて、内に隱れた兵隊を、一人も逃さぬ樣、嚴重に番をしろ。若じたつて逃げ出すものは、打ち取つても構はぬぞ。

と是れにて百姓下手へ分れ入る。クレスポオ書記と百姓數人とを從へ、戸を押開けて入る。

大尉　案内もなく人の家へ、亂入するは何者だ。

クレスポオ　何者でもない。裁判役ぢや。

大尉　やゝ、さう云ふ貴樣はクレスポオ。

クレスポオ　昨夕新に撰擧せられた、裁判役のクレスポオ。それが案内致さずに、這入つて來たが何とした。

大尉　昨夕からでも裁判役になつたうへは一通り、御上の御法は心得居らう。そち達如き百姓に。身共の樣な軍人が、裁判は受けぬものぢやぞ。

クレスポオ　いや、たとひ軍人なればとて、村には村の掟あれば、この裁判役の心任せ。とさ、か

う云へど、實の處はこなたに遺恨の仕返しを、仕やうと思つて來たのぢやない。少し他人を中に入れず、こなたと此處で緩りと、話したいことがあるのぢや。

大尉（下士に向ひ。）クレスポオが何事か、身共に話があると云ふ故、その方共は少しの中、次へ行つて居たがよい。

とこれにて下士、レボルレドオ上手の開戸をあけて入る。

クレスポオ（書記に向ひ。）お前方も暫時の間、裏へ行つて下され。然し先つきも云ふ通り、兵隊は一人も、逃さぬ樣に用心さつしやい。

書記　畏まつて御座り升る。

と書記は百姓を連れ下手へ出で、裏へ行く。クレスポオは椅子に腰をかけ。

クレスポオ　私も今は裁判役故、隨分こなたを手込にして、處置をするのは造作もないが、少しの間役を止め、やつぱり百姓のクレスポオで、話をしたいことがあるから、どうぞ聞て貰ひたい。

と裁判役の杖を卓子の上に置き。

さて大尉殿、これから親父が胸の牢屋へ押込めておく憂目の數々、とつくりと聞いて下され。私の家は百姓なれど、代々潔白で汚がないと、豊に暮すとの二つで、村の人にも立てられて、私の代になつた處、先立つた女房の、殘して置いた一人娘を、子供の時から世話をやき、出來る丈の教育は、一と通り仕込だ上、婦人の持つべき心掛も持て居るそれ故に、村一番の美人ぢやと、賞めそやされて喜んだが、今更思へば一家の不幸。此一條では此親父も、大抵苦勞を致しましたが、此處が一つの相談ぢやて。どうか貴君の一存で、毒の杯を底までも、皆んな私に飲ませずと、お

ゝかはいさうなことをしたと、思ひ返して下されぬか。と云ふはむつかしいことではなく、私の娘を女房に、どうか持つては下されぬか。それなら娘も顔の立つこと、なあに親父の身上位、皆んな貴君に差上げます。又子が出來ても、クレスポオの孫なら役に立つまいが、貴君の子ならば後々は、立派な人になるは必定。スカチリヤの諺にも、馬を買つたら鞍までもと云ふ事がある程に、この白髪頭を不便と思ひ、聞いてやつて下さりませ。自分の名譽を取返へすに、何の遠慮もなけれども、それを貴君に頂く心で、これ手を合せて頼みます。どうか聞いて下さりませ。

と手を合せて頼む。この中大尉は側を向き、聞入れぬ仕打。

大尉　いや、その長談義聞く耳持たぬ。我名譽ある官位を捨て、土百姓に成下がれなど、以ての外の其方が言分。その上伜が身共に對し、加へた無禮は一方ならねど、美しいイサベルにめんじて許して遣はすから、さつ〳〵と歸るがよい。

クレスポオ　そんなら此程涙を流し、事を解けて頼むのに。

大尉　年寄と子供の泣くのは、いつ見ても五月蠅いものだ。

クレスポオ　すりや、どの樣に願ひましても。

大尉　えゝ、くどいと申すに。

クレスポオ　事を好まぬ計りに、これほどおれが心を碎き、情を籠めた一言を、聞きわけぬとは鳥獸にも劣り果てた人非人。さらば思ひ知らせてくれん。

と立上り、裁判役の杖をとり。

百姓共參れ。

百姓　はあゝ、

と書記百姓裏より出で、内に入る。

クレスポオ　そち達は遠慮に及ばぬ。早く此奴を引つ立て行け。

大尉　無禮を申すな。國王に仕へ居る士官を何んと致す氣ぢや。

クレスポオ　有無を云はせず連行いて、牢屋にしかと押し籠め置け。

これにて百姓二人大尉を引立てにかゝる。

大尉　こりや理不盡に身共をば。

クレスポオ　絕つてかれこれ申すなら、死骸にしても留め置く所存。

大尉　かゝる狂氣の輩を、相手にするは大人氣ない。まづその處置に任せ置き、今にも國王臨幸あらば、そのとき思ひ知らせてくれん。

クレスポオ　たとひ軍人なればとて、民を虐げたる罪は、いつかな逃れる途はない。者共その腰刀を取上げい。

大尉　すりや軍人の帶劍まで。

クレスポオ　いや罪人には刀を持たせる謂がない。

と自身に刀を取上げ、百姓に渡す。

大尉　運命盡きて汝等の手込に合ふも是非がない。然し國王に仕へ居る士官の身なれば、無禮をすると相濟まぬぞ。

クレスポオ　それは言はるゝ迄もない。者共、大尉殿を丁寧に會所に連れ行き、丁寧に手錠をおろ

し、丁寧に鎖に繋き、他人に逢はすることを禁じ、又た他の兵士も別々に縛り置きて、丁寧に糺明し、罪科明白なるその上で、丁寧に絞罪に致したら、大尉殿もさぞ滿足の事であらう、さゝ猶豫せずに引立てい。

百姓　立ちませえ。

大尉　げに百姓の我儘程、世に恐ろしい者はない。

百姓　こま言云はずときり〳〵歩め。

とこれにて百姓大尉を引つ立て、下手に入る。跡より百姓レポルレドオとチスパアの男裝したるとを引つ立てゝ入る。クレスポオ椅子に腰かく。

百姓　裁判役に申上げます。三人の兵卒中、一人は取逃し、二人を召捕つて參りました。

クレスポオ　其方が聞き及んだ喉自慢の奴であらう。然し今は喉がつまり、ぐうの音も出まいがな。

レポルレドオ　此處へ參りましたとて、喉がつまる譯はない筈。何處の國に歌を唄うてならぬといふ掟が御座りませう。

クレスポオ　唄ふのは結搆ぢやが、假令唄はぬと申しても、此裁判所には唄はせる道具がある。それを使へば造作はないが、まあその道具に逢はぬ中、有躰に唄ふがよい。

レポルレドオ　私に唄へと仰しやるは。

クレスポオ　前夜唄うた田舍節を。

レポルレドオ　や。

クレスポオ　さ、あれを歌うた上からは、咋夜の惡事も其方達の、腹から出たに相違ない、さあ尋

常に罪に服せい。

レポルレドオ　むゝ。

クレスポオ（チスパアに向ひ。）其方は有躰に白狀致す心であらうな。

チスパア　私は言はうと言ふまいと、責苦に逢ふ氣遣ない。

クレスポオ　責苦に逢ふ氣遣ないとは。

チスパア　私は孕んで居り升る。

クレスポオ　それでは其方は男ではないか。

チスパア　御察し通り私は、一處に行軍して居れど、炭焼をしたりお酒の世話。その外は生れ付、歌が好き故何事も、歌の事なら問うて下さい。歌で返事を致しませう。

クレスポオ　いづれを見てもふてぐ〵しい、同じ穴の貉と見える。手酷く糺明致さずば、中々骨身に應へまい。此奴も牢へ引いて行け。

と百姓兩人を引つ立て下手へ入る。

クレスポオ　これから一先家へ歸り、倅の行方を。

と立上るを道具替りの知らせ。

探さにやあらぬ。

とこの摸樣宜しく道具廻る。

クレスポオ宅前の場

本舞臺二幕目と同じく、クレスポオ宅前の場、家の內よりホアン出づ。

ホアン　あの山蔭で大尉奴を、早や打果す其處へ、仲間の卒が來合せて、邪魔をした計りに、殘念ながら打洩し、それから妹の行方をば、あちこち探せど巡り合はず、本意なく家へ歸つて見たが、親父樣が見えぬのは、大方妹を探しに出なすつたのか、それとも變つたことはねえか、心掛りあことだなあ。

と此處へ下手よりイチス　イサベルを伴ひて出づ。

イチス　お前の事が氣になる故、其處まで出たので行逢つて、やつと安心したけれど、そんな惡い顏をして、何時までもお出でゝは、生て居る甲斐はない。もう過ぎ去つた事は忘れて仕舞ひ、ちつと私に笑顏でも、見せてくれても好いではないか。

イサベル　笑顏處ぢや御座んせぬ。私しや死んで仕舞たいはいなあ。

ホアン　もう親父が歸りさうなものぢや。

と下手へ行きかけ、二人の娘を見て。

や、手前は妹、一家の汚、其身の耻、どうも生けては置けぬから、かはいさうだが覺悟をしろ。

と刀を拔く。

イサベル　お前は兄さん。尤なそのお言葉、疾うから覺悟はして居るから、早う殺して下さんせ。

と其處へ跪く。ホアンつか／＼と立寄り、刀を振りかざし、流石に殺し兼ぬる仕打。とゞ思ひ切て。

ホアン妹堪忍してくれ。

と切下さうとするとき、下手にて。

クレスポオ　やれ侯て倅、早まるな。

とばた〳〵になり、クレスポオ杖を持ち、百姓付いて急ぎ出づ。

ホアン　や、とつさん、お前無茶りはねえか。くど〳〵は云はねえ。一家の面に塗られた泥が取りてえ許り、不便ながらも妹を手にかけやうと思つた處、おめえもいなやはあるめえな。

クレスポオ　いゝやあらねえ。人の詮議を仕やうより、第一手前は大尉殿に傷をつけた罪人故、裁判役のこのおれが、きつと入牢を申し付けるぞ。

ホアン　大尉に傷を負はせたは、家の恥を灑がう爲、お前も共々喜んで、賞めてこそ呉る筈、小言を云はれる覺はねえ。

クレスポオ　一家の恥は私事、軍人に創付けたは、國の法に負くと云ふもの、言譯致す所でない。おれの云ふ儘尋常に處分を受て居るがよい。

ホアン　外の奴あら誰にでも、指もさゝせはしねえけれど、親に上げる拳はねえから、いかにも手出しは致しますまい。

クレスポオ（百姓に向ひ。）この者を牢に入れ、しかと其方見張り致せ。

とこれにて百姓ホアンを連れ下手へ入る。

イサベル　兄さんが惡いことはない。皆んな私から起つたこと。私を縛つて兄さんを、助けて上げて下さんせ。

クレスポオ　あがに心配するには及ばぬ。万事己の胸にあるから。それより自分の室へ行き、大尉の罪を正す爲めの訴狀を書いて來たがよい。

イサベル　死ぬる命を捨てぬさへ、生中心苦しいに、仇ながら他人の悪事を、擧げる訴狀を書かうとは、ほんに情ない身の上ぢやなあ。

イチス　さうきな〳〵せずと行かうはいなあ。

とイサベルを伴ひ内に入る。

クレスポオ　まづ伜をおれの手で、牢に入らせて置く時は、當座の難儀は遁れる道理。その間には又た手段を巡らし、救ひ出せぬことはあるまい。それに付けてもあの大尉、おれが仕掛けた人の好い相談を、はね付けるとは憎い所存。これからは此親父が、人の悪い相談をしかけるから、否でも唯でも聞かさにやならぬ。

と下手へ行かゝる。上手にて。

ロオペ　その相談悪からう。

クレスポオ　さういふ聲は。

ロオペ　誰でもない。將官ロオペぢや。

と上手よりロオペ令杖を携へて出づ。

クレスポオ　これは隊長樣、又お歸で御座り升るか。

ロオペ　折角昨日この村を、出立をして間もないに、くだらぬことが起つた計りに、又た〳〵痛い足を引ずり、此處まで歸らにやならぬとは、實に癪に障るぢやないか。なにしろ手前が信切に、世話をしてくれた故、又厄介になりに來た。

クレスポオ　そりや何より易い事、いつ御出に成りませうとも、有難く御宿を致します。

ロオペ　どうだ、貴樣の倅は見えぬぢやないか。昨夕も跡から參らぬが、全躰どうした譯なのぢや。

クレスポオ　それはあとで申しませうが、貴君が又々この村へお歸になつた譯から、まあ先へ伺ひませう。

ロオペ　いやその事ぢやて。おれは生れてからこんな腹の立つ目に逢つたことはない。この村を立つてから、遠くも行かぬ其中に、一人の卒が追懸け來て、大尉樣をこの村の裁判役と云ふ奴が、入牢させたと云ふ知らせ。その裁判役と云ふ奴を、手酷い目に合せてやらうと、それでわざ〳〵歸つて來たのぢや。

クレスポオ　そんならあなた、折角のお歸なれど、まあ冗足で御座り升。と申すはその裁判役は、中々貴君位には、閉口は致しませぬ。それに貴君は入牢させた顚末を、よく御存で御座りまするか。

ロオペ　その譯はまだ少しも知らぬが、假令譯が有らうが無らうが、其奴を懲してやることは、何の造作があるものか。

クレスポオ　さうして貴君は裁判役を、どんな奴ぢやと思召すな。

ロオペ　どんな奴とは知れたこと。やつぱり百姓に違ひない。

クレスポオ　百姓には違ひないが、若し其百姓が大尉殿を絞罪にしたら何となさる。

ロオペ　そんな事が出來る者か。まあ、何處へ往つたら其奴に逢へやうかな。

クレスポオ　なにぢき近所に居り升る。

ロオペ　さういはずに敎へてくれ。その裁判役といふ奴は、一躰何處の何奴ぢやな。

クレスポオ　その裁判役は外でもない。このクレスポオで御座ります。

ロオペ　何んだ、いま〳〵しい。大方そんな事ぢやらうと思つたのぢや。

クレスポオ　なんだいま〳〵しい。己でなくつて誰がせうぞ。

ロオペ　貴樣が愈々裁判役なら、己がおかと云ひ聞かするが。その囚人を身共に渡せ。おれが處分を致すから。

クレスポオ　假令渡せと仰しやつても、譯なく我手は離されませぬな。

ロオペ　全躰貴樣はいゝ年をして、兵士の罪は軍律に照らして、將官が處分致すを、未だ存じ居らぬと見えるな。

クレスポオ　全躰貴君は將官であり乍ら、部下の大尉が人の娘を、脅迫したと云ふ事を、まだ御存じないと見えるな。

ロオペ　然し貴樣の權限內にない兵士の裁判を致さうとは、そりや不屆と云ふものぢや。

クレスポオ　それでは大尉の權限內にない人の名譽を傷けたは、不屆とは申しませぬか。

ロオペ　もう彼此と申さずに、おれに任せてしまふがよい。其方の腹の癒える樣、隨分處分は致して遣はす。

クレスポオ　自分の手で出來る事を、人に任す道理が御座らぬ。

ロオペ　えゝ、面倒な。然らばどの樣に申しても、牢屋の戶は明けぬと申すか。

クレスポオ　戶は明けぬ事はないが、彼牢屋へ裁判役の許を得ずに近寄る者は、鉄砲にて打ち取れと申し付けて有升るから。

ロオペ　そつちにさう用意があれば、こつちも手筈を致さにやならぬ。やあ〳〵者共、早や參れ。

兵卒　はあゝ。

と上手より兵卒數人出づ。

ロオペ　その方共は一同に、鉄砲に火縄の用意致す樣、急いで申し傳へて參れ。

兵卒　その御命令迄もなく、大尉殿が捕へられたと、傳へ聞て兵卒は、皆一樣に用意を致し、將官の御許を手ぐすね引いて俟つて居ります。

ロオペ　かうなる上は是非がない。假令刀に掛けてゞも、望みかゝつた囹圄(ひとや)の大尉を。

クレスポオ　かうある上は是非がない。まづ手初めに大尉めを。

ロオペ　何を手前が。

クスレポオ　見事こなたが。

と兩人顏見合せて、氣を替へ

兩人　どれ荒療治を。

とロオペは令杖、クレスポオは裁判役の杖を取り直すを、道具替りの知らせ。

するとしやうか。

と此見得宜しく道具廻る。

ザラメヤ村牢屋前の場

本舞臺前の方、村の通路。少し下げて通し石作の建物。壁の上の方處々に小き鉄格子の窓を明け、正面に大なる鉄の扉閉り居り。その下石段の上り口、左右に立木の誂。都てザラメヤ村牢屋前の場。

此處に村の書記を頭に、百姓大勢各々得物を持ち、番を爲し居る見えにて幕明く。此處へ下手より
ロオペを先に、兵卒夥多鋏砲を持ち出で來り、宜き處に止まり。
ロオペ　やあ〳〵、者共承はれ。この囹圄は我が大尉を押籠め置く處と聞く。首尾よく大尉を渡せ
ば好し、若しあらがふ上からは、火を掛けて燒拂ひ、助け出す用意せよ。若しその爲に延燒し、村
中灰とならうとも、自業自得ぢや、苦しうない。
書記　たとひ村中灰になるとも、裁判役の言附受け、入口を守るからは、この内の囚人を、みす〳〵
そつちへ渡さうか。
兵隊大勢　なにを小癪な百姓ばら、有無を云はせず打つて取れ。
と大勢押し掛け樣とする處へ、上手よりクレスポオ鋏砲を持ちし百姓夥多從へ出づる。
クレスポオ　打つて取れ〳〵と、いくら百姓ぢやとて、さう矢鱈に打ち殺されて堪るものか。
ロオペ　まだあの樣に落着き居る。最う彼此と面倒ぢや。早く牢屋の戶を打壞せ。
とこれにて兵隊牢前へ押し掛かる。百姓これを止め、悶着す。此時上手にて。
籠街の役人　やあ〳〵、者共靜り候へ。只今此處へ國王樣が御臨幸に相成るから。
とこれにて兵隊、百姓、皆々驚き慌てゝ打物を納め、左右に別れて直立す。ロオペ、クレスポオ
も引分れて居り。此處へ上手より步騎の兵多人數出で來り、續いて西班牙國王フエリッパ、馬
上にて供奉あまた從へて出づ。舞臺の人皆々立禮す。國王馬より下り、椅子に腰を掛く。供奉
は左右に列ぶ。
國王　朕が到着なす地には、塵を拂ひ、道を淸めて迎へざるものなきに、このザラメヤ村に限り、

かく騷がしき爭を朕が目前にて致すとは、そも如何なる仔細なる歟。見ればドン、ロオペも居る樣子、これへ參つて申し陳べよ。

ロオペ　（進み寄り。）はゝ、仰までも候はず、奏問なさんと存ぜし處。かゝる騷がしき有樣を、叡覽に入れたるは、全く恐臣の麁忽なれど、本を正せば村の農夫が、軍人をあなどりて、無禮をせしが事の起。

國王　その無禮とは何事なるぞ。

ロオペ　我軍の大尉アルハロを、此村の裁判役が、俘囚にせしを取返さんと、督責すれど承知せず、手向ひせしは不屆至極。

國王　その裁判役とは何者ぢや。

クレスポオ　へえ、私奴で御座りまする。

國王　其方はかゝる騷を引起した申譯がこれあるや。

クレスポオ隱しより訴狀を出し、官人に渡す。官人これを王に呈上す。

クレスポオ　その訴狀を叡覽あらば、死刑に當る大尉の罪、明白で御座りませう。貧家の娘を橫奪し、山路に伴ひ、無法を働き、其上親が手を下げて、媚に賴むを承知せず、惡口を致したる、獸に劣つた彼が所行。なんと大尉を捕へましたも、決して無理では御座りますまいな。

この中國王訴狀を默讀し乍ら。

國王　この娘の親父は何者ぢや。

ロオペ　即ち裁判役で御座りまする。

クレスポオ　如何にも私の娘なれど、假令他人がかゝる目に合ひ、訴へ出でませうとも、別け隔ては仕らず、同じ樣に計らう所存。その證據には大尉殿を、傷けました私の伜も、同じく牢屋に入れ置きました。これにて私の依怙あき事は、御賢察を願ひまする。然し書類をお調あつて、私に罪あらば、たとひ御處刑に逢はうとも、決して怨みは致しませぬ。

とこの中國王は訴狀を讀み終り。

國王　いかにも裁判役の申し立、至極尤に聞ゆるが、刑罰を行ふには、民律と軍律と、それ〳〵掛りのある事なれば、何はともあれその大尉を、一先將官に引渡したが宜しからう。

クレスポオ　仰せでは御座りますれど、村に一人の裁判役、罪を定めるも仕置をするも、皆私の職分なれば、已に處分は私が、先刻致して御座りまする。

國王　なに既に處分せしとは。

クレスポオ　まだお疑が御座りますれば。

と督記に目ぐはせす。これにて督記錠を出し、正面牢屋の戸を左右に引きあく。

クレスポオ　あれに居る囚人の仕置の痕を御覽あれ。

と指す。牢屋の中には大尉繩にて〆殺されし樣子にて、繩を首に卷かれ、椅子の上に倒れ居る。

國王　凡そ死刑を行ふには、別に裁判所のあることを、其方は心得ぬか。

クレスポオ　恐れ入つたる申狀ながら、若し國の法律を、一つの躰と見ました上、これにいくつも手があると致しますれば、あの手で行ふ處刑をば、たとひこの手で行ひましても、それは僅の違ひなれば、大躰に置きましては、左迄差支は御座りますまいかと、憚り乍ら存じまする。

とこの中百姓牢の戸を閉づ。

國王　尤の申狀故、然らばその儀はそれで好けれど、貴人を敬ふ心あらば、討首にでも致す可きに、絞首とはいかなる譯ぢや。

クレスポオ　それも存ぜぬでは御座りませねど、この村に居る貴人は、皆んな溫順う御座りまする故、首を斬ることを心得た、獄丁が居りませぬ。

とこの中國王感心せし思入あつて。

國王　段々の樣子を正せば、理非明白なる其方がいひ分、天晴この村の裁判役に、耻かしからぬ器量ある故、假令處刑の手續に、多少の間違ひあればとて、大躰に於いて不都合なければ、此儘に許し遣はす。倘ほ末長くこの村の裁判役にいたしおけば、此より後も心を盡し、役目大事に相勤めよ。

クレスポオ　冥加に餘るそのお詞、子々孫々に申傳へ、長く御恩を忘れますまい。

國王（ロオペに向ひ。）その方も將官の職務に對し、軍律の表に照して爭ひしは、決して尤る所はない。朕はポルトガルへの路を急げば、即時に出馬致すべし。其方は跡に殘り、事落着のその後に、我儀仗に追ひ付けよ。

ロオペ　委細承知仕りました。

とこれにて國王馬に乘り、皆々禮す。どゞ供奉付き從ひて下手に入る。

ロオペ　斯う事が納まつて、已が心もさつぱりしたが。只心懸りは手前の娘、あれはどう致て居るな。

クレスポオ　あれはこれから尼寺へ遣はし、出家させる私の所存。天に御座る婿樣は、人の母いと

與いとには、分け隔てはないとの事故。

ロオペ　氣の毒な事ながら、生れ付いた不仕合か。どうも餘儀ない譯であるな。それはさうと大尉の外の兵卒は、助けて置いてくれたらうな。

クレスポオ（書記に向ひ。）直ぐに彼等を呼び出せ。

と書記牢の内に入り、レポルレドオとチスパアとを伴ひて出づ。

ロオペ　此度は許し使はす。以後をきつとたしなめよ。

レポルレドオ　もう歌はこれに懲り。

チスパア　一生決して歌ひませぬ。

ロオペ（クレスポオに向ひ。）此罪人を許し乍ら、何故身共が最愛のホアンを此處へ呼び出さぬのぢや。

クレスポオ　彼は二人と事かはり、大尉殿を傷けし罪ある故、遠慮致して置きました。

ロオペ　此將官が遠慮に及ばぬと申す程に、直樣これへ呼出せ。

クレスポオ　やあ〱ホアン、將官殿の御許なれば、遠慮致さず、これへ出ろ。

とホアン牢屋の側より出で來り。

ホアン　有難い御慈悲のお詞、決して御恩は忘れませぬ。

ロオペ　見處ある其方なれば、今日より士官に取り立て、直樣供奉に伴ひ行かん。

クレスポオ　どうぞ宜しう願ひまする。願ふといへばその方も。

ホアン　願が協うて侍に、取立てられし身の面目。

クレスポオ　御詞玉はり末永う、長になつたは嬉しいが、それに引かへあのイサベル。
ロオペ　思へば與へた十字架が、身の餞なりしか敢なくも。
ホアン　盛の花を散らされて。
クレスポオ　身に墨染の尼衣、あゝ思へば果敢ない。
　と三人顔見合するを木の頭。
三人　浮世ぢやなあ。
　と宜しく思入。この模樣引つ張の見得宜しく、これにて　打出し。

折薔薇

役名

エミリヤ、ガロッチイ（處女）
オドアルドオ ｝エミリヤ孃の父母
クラウヂヤ ｝
ヘットオレエ、ゴンツアヽガア（ガスタルラの殿）
マリチルリイ（殿の暱近）
カミルロオ、ロオタア（家老の一人）
コンチイ（畫工）
アピヤニイ伯（エミリヤ孃の結髮）
オルシナ伯爵夫人（殿が初の思ひもの）

アンジエロ（賊）、其他二三の僮僕

第一齣（場面は殿の密室）

其一　殿

（机に倚り掛かり、堆く積みたる書類の一二を遽しく讀み作ら。）なに、御願書、どれを見ても願書計、えゝ、うるさい仕事ぢや。然し世間では、身共を浦山しがつて居る。勿論どの様な願でも、聞き届けてやられるものなら、それは随分羨む筈ぢやが。なに、エミリヤ。（と一枚の願書を取上げ、願人の名を見。）これもエミリヤ、じかし家名はブルチスキイで、ガロッチイとは大きな相違。願の主意は何事か。（と讀み。）随分身勝手な願ぢやが、名前がエミリヤぢや柄、えゝ、許して遣はさう。（と批准して名を記し、鐸を鳴らす。舍人出づ。）まだ家老共の内、誰も出仕致して居らぬか。

舍人　いえ、まだ出仕いたされませぬ。

殿　今朝は身供が、餘り早う起きたからぢやな。天氣は好し、今からマリチルリイと馬車で出やうと思ふから、彼を呼んで參れ。（舍人入る。）あゝ、もう五月蠅うて事務は執れぬ。身はよく沈着いて居た、沈着いて居た積りぢやが、なんで又願人のブルチスキイがエミリヤと名乘らねばならぬのぢや。身は沈着くどころか、何も角もなくして仕舞うた樣ぢや。

舍人（入來り。）マリチルリイ公へは御迎を上げました。これはオルシナ伯爵夫人からのお手紙でムり升。

殿　なに、オルシナから。そこに置けばよい。

舍人　お使が俟つてをります。
殿　俟つてをるなら返事もやらうが、一体夫人は何處に居るのぢや。市中に居るか、別莊に居るか。
舍人　昨日市中へお出になりました。
殿　そいつはしまつたな。いやなに至極結構ぢや。それならば猶のこと、返事はいらぬと使に申せ。(舍人入る。)わが愛する夫人。(と顏を蹙めて言ひ乍ら、手紙を手に取り。)あゝ讀んだも同じ事ぢや。(と手紙を其儘投捨て。)　成程あれをもかはゆく思つた事も、ある樣に思はれるが、人は色々な事を思つて見るものぢやから。いや本當に一時はかはゆく思つたかも知れぬ。然しほんの一時の事。
舍人　(入來り。)畫工のコンチイが參りました。
殿　なにコンチイが來た。苦しうない、これへ通せ。彼に逢ふたら、下らぬ事を忘れてよからう。(と立上る。)

其二　コンチイ、殿

殿　コンチイか。よく參つた。どうぢや變りはないか。近頃美術はどうぢやな。
畫工　若殿樣。兎角美術といふ奴はくひものばかり探したがる奴でムり升。
殿　そりやあいかん。そりやあいかん。せめて身が狹い領內丈では、そんなことではいかんぞ。しかし美術家の方でも、隨分精を出さねばならぬな。
畫工　精を出すのはそれは樂みでムり升るが、しかし餘り精を出しすぎると、美術のひんが下り、名前も落ちまするから。
殿　身共も無暗に澤山仕事を致せとはいはぬ。少しのものを、緻密に身を入れて致せと云ふのぢや。

けふはからでで來はすまいな。

畫工　けふは兼てお誂の肖像を持參致しました。然しその外にお誂でない品をも持參いたしました。御覽になる程の直打は、充分有ると思ひ升るから。

殿　誂とは。どうも覺がない樣ぢやが。

畫工　オルタナ夫人の。

殿　いかさま。然しその誂は大分昔のことぢやぞ。

畫工　どうも御夫人がたは、いつでも型に据わつて下さる譯に參りませぬから。三箇月前からで、やつと一度据わつて下さいました。

殿　その畫は何處にある。

工　お次に置きましたから、今持つて參りませう。

其三　殿

あれの肖像。よいは見やう。あれの肖像だ。なにもあれに逢ふのではなし。事に因つたら、あれの躰には無い好い處が、繪では見出されるかもしれぬ。然しおれは、そのよい處を、少しも見出したくはないて。あの無情な畫工が。わるくしたらあれが鼻藥でも飼つたのではないか。變つた絹に變つた色でかいた、變つた畫が、事に因れば、身が思ひ返す媒になつてもよいかもしれぬ、それで身も滿足に思ふかもしれぬ。あれをかはゆく思つた頃は、身もどんな氣輕な、さばけた、樂し氣な男であつたらう。それに今では丸で倒さまになつてしまうたから。しかしいやぢや。あゝいやぢや〳〵。氣樂でも氣樂でなうても。矢張今の方が好いは。

其四　殿、コンチイ（畫をもち來り、一枚を翻くり返へして、椅子に立てつけ。）

畫工（外の一枚を立てゝ見せ乍ら。）殿樣、どうか美術の境界を、充分お考の上で、御覽を願ひます。いくら美い所でも、餘り眞に逼り過ぎ升ると、美術の本意に違ひ升るから。こゝに立つて御覽下さい。

殿（一寸と見て。）よく出來た。實によく出來た。其方の筆力が見えるな。然しよく仕過ぎた、無暗によく仕過ぎた。

畫工　御當人は、さうは覺し召さない樣に思ひ升た。それに、美術上でよくせねばならぬ程しか、よくは仕ませんから。自然が物を作らうと思ふときに、若しそんなどがあるとしますれば、先づその自然が、想像し升る形の樣に、美術も物を寫さねばなりませぬ。然し物が出來るとき、いくらかその原質が抗抵致し升るが、それが爲めに出來る失策は、先づ除けねばなりません、又た時が立つとできる傷み塲所なども、その通りでござり升。

殿　いや、哲學的に物を考へる畫工は、又一倍の價値があるて。それに委細の當人は。

畫工　どうか只今申したとは、御聞捨を願ひ升。御當人は、私の大切に致さねばならぬ方でムり升るから。あの方の事を、彼此申し上る氣では、ムりませんでした。

殿　なに、その遠慮には及ばぬ。當人は何と云うたのぢや。

畫工　御當人は、この畫より惡くさへなければ、滿足だと仰つしやいました。

殿　なに、これより醜くさへなくばとえ、あの本人で。

畫工　へえ、それにさう仰つしやつた時のお顏付は、此畫には、影ほどもござりません。

殿　その事よ。それぢや柄好く仕過ぎたと申したのぢや。それにあの高ぶつた憎氣な樣子では、どんな神女の面でも損はれて仕舞ふのぢや。美しい口を少し計横の方へ曲げるのは、並より美しいものぢやが、それはほんの少し計りの事ぢや。餘り横へ曲過ぎると、あの伯爵夫人の樣に、いやなめんになつて仕舞ふのぢや。そして目は、どうしても男がわるぎを起すのをとめる位でなければいかぬが、そんな所は、あの夫人には少しもない、この畫にさへ少しもない。

畫工　若殿樣、私はどうも恐れ入りました。

殿　なぜ又。そちは美術の力で出來る丈は、あの大きい、飛出した、見詰めた、動かない、般若（メヅッザ）の樣な夫人の眼を、正直に好くしたが、さう正直にしなかつた方が、却て正直であつたらうに。まあ、コンチイ、自分でも思うて見るが好い。此畫を見て、この人の性質が解るぢやらうか。それは解らねばならぬのぢやらう。手もなく其方は、高ぶるのを威儀に直し、あざわらひをおいきやうに直し、ふさぎを愁に直したのぢや。

畫工（少しむれたる樣子にて。）然し私共は、先かはいゝ人の畫をお誂になつた方に、出來上つた畫を持つて參る日には、まだそのお方のお心は、前と變らない心得でなければならぬ筈です。私共は愛情の目で畫き升るから、愛情の目で御批評をなさらねばなりませぬ。

殿　さうでもあらうが。なぜ又一月程早う參らぬのぢや。まあその畫は側へ寄せてしまへ。そして外の畫は。

畫工（外の畫をとり、裏返へして持ち乍ち。）なに、矢張女の肖像でござります。

殿　それではいつそ見ぬ方が增ぢや、と云ふは此處に、（と指にて額をさし。）いや此處に、（と胸を指

し、)納めてある本尊には、とても及ぶまいから、そちもまた何か外のものをかけばよいに。

畫工　えゝ、これより好い美術はムりませうが、これより好い美術の種はござりませぬ。

殿　それではきつと其方の戀人であらう。(とこれにて畫工繪を翻り返へす。これを見て愕き。)やゝ、これはその方の繪か、但しは身が心の迷か。エミリヤ、ガロッチイであらうが。

畫工　なんと仰つしやりまする、殿樣。それではあなたは、この神女を、御存じと見えまするな。

殿　(圖を見詰めて居乍ら、騷ぐ心を鎭る樣ありて。)知つたでもなし、知らぬでもなし。やつと見覺て居る、と云ふ計なのぢや。丁度二三週間前であつたが、あの娘が、母に連られて夜會に來たのに初めて出逢うた。その後逢うたのは、寺の中であつた故、まさかによくも見られんで仕舞つた。また、あれが親父をも知つて居るが、そいつと身が、中は餘り好い方ではないのだて。身がサビオネッタ(地名)を手に入れやうとしたときに、一番身に抗つたのはそいつであつた。ふるつはもので、氣が高く、お負けに荒つぽくはあるが、しんは正直で、極く善い奴あのぢや。

畫工　御前は、親父のこと計り仰つしやるが、此處にムい升のは、娘の畫でムり升るぜ。

殿　どうもいへぬ。丸で鏡から拔き取つた樣ぢやな。(と矢張圖を見詰めて居る。)コンチイ、云はいでも知れて居るが、極く感伏したときは、褒めるとも忘れて仕舞ふ。實は是が、この上もあい褒辭なのぢや。

畫工　でも、私はこの畫には、自分では、餘り滿足は致しません。が、私はその滿足しない處に、却て滿足する所がムり升。目で畫をかけばともかくも、目から腕から、筆までの長道中には、いくらかなくなるのは當り前でムり升。然し、ね、私は、この畫で何が無くなつたか、どうしてそ

れが、無くなつたか又なぜ無くなる筈であつたかと云ふことを、一々観破つて見升ると、却つて何んにも無くなさなかつたよりも満足に思ひます。なぜと仰つしやいませ。私が何も無くせずに書いて仕舞うたから見れば、書かうと思ひましたとを無くしたのを、存じて居升ので、私の心は、古人にも愧ちないといふとが解かり升。唯だ折々その通りに往きませぬは、私の腕でムり升。それともでぜんは、あの古今無類なラファエルでも、若してんばうに生れたら、考はあつても書かぬから、畵工の親玉ではあいと御考ですか。えゝ如何が思召し升るか。

殿（漸く畵より目を離し。）其方は今何を申した。其方は何を問うたのぢやつたか。

畵工　なに、何んでもムりませぬ。唯だ無暗に、しやべつた計りでムります。それは宜しうムり升るが、只今の御様子では、御前のお心は、丸で御前のお目の中に在つたと思はれまするな。いや、そのお心、そのお目は、實に恐入りましたな、有難うムり升。

殿（わざと冷淡に。）それではそちは、あのエミリヤを、此町の勝れた美人の中の、一人ぢやと思うて居るか。

畵工　それでは、あの美人の中の一人、勝れた美人の中の一人、あのこの町のえ、へゝゝ、御戯談を仰つしやりまするな。それとも貴君はあの長い間、なにも聞かずに、居らつしやつた計ではなく、なにも見ずにお出でゝござりましたか。

殿　いや、コンチイ。（また目を畵に注いで。）身共などの目は當にならぬから問ふのぢや。眞の美人は、矢張、畵工にでなくば知れまいと思うて。

畵工　それでも御前、よもや人の腹からの感じを、畵工にきめさせやうとは、思召すまいに。何が

美だといふことを、私共から習はうといふやうな人は、坊主にでもなつて[illegible]ふが宜うムりませう。然し私は、貴君にはごく身上な處を申しませうが、私が一生の中で、[illegible]の事を數へて見升れば、あのエミリヤが私に肖像をかゝせてくれたのは、乾度その一つでムり升[illegible]の、此頭、この額、この目、この鼻、この口、この頤、この頸、この胸、この姿、こ[illegible]てからは、私の心を籠めて研究した、女身の美と申し升るは、此處にムり升。ほんゑは親御[illegible]たが、この寫しは。

殿（畫の方より急に畫工の方に振向き。）まだ誰にも遣る約束は致すまいな。

畫工　この寫しはお望なら御前に獻上致し升。

殿　お望所か。（笑ひ作ら。）コンチイ、そちが美の研究をした手本なら、身が美の研究をするには、これにます手本はないは、あの方の畫はもう持つて歸つてくれろ。

畫工　えゝ、何んと仰つしやいます。

殿　いや、實はわくが誂へて貰ひたいからぢや。

畫工　それは承知致しました。

殿　欄は指物師の腕一杯、成丈け奇麗に拵へさせて貰ひたい、あれは陳列所に掛けさせるのぢやから。然しこの分は、身の研究の爲に致すのぢやから、面倒な事には及ばぬ。これは高い所へさげるよりは、矢張手近に置く積りぢや。いやコンチイ、實に辱ない。どうでゝ身の領分丈けで美術がくひものゝもとでになつてはならぬて。身が食ひはづさぬ其中は。今日持つて參つた二枚の畫の代は、會計方の處へ參り、受取つて來るがよい。いかほどでも充分に。いくらでも。

畫工　殿様、どうもなんでムり升るが、この潤筆には美術より外の者の代價が這入つて居さうに思はれます。

殿　いやはや、とんだやきもちやきな美術家ぢやな。ほんに潤筆は幾何でも貰ふがよいぞ。（畫工入る。）

其五　殿

いくらでも。（畫に向ひ。）そなたの身のしろなら幾らでも高くはない。まあなんといふ美術の出來ばえぢやらう。これが手に入つたのは、夢ではないかしらん。これより美しい自然の細工物を。誰が持つて居らうぞ。畫工の潤筆は兎も角も。どの樣な身の代を求めるのぢや、そなたの母御は、どの樣な身の代を、あの強慾親父は。充分に望むがよい、充分に。然しそあたをば、矢張そなたの心から買取りたい。このかはいゝ、おとなしい目元、この口元、これが明いて物を言うたら、笑らうたら。この口で。や、誰か參る樣子。この畫はまだめつたに人に見せられぬて。（と畫を翻して壁に立てかけ。）來るのはマリテルリイであらう。あれを呼びにやらねばよかつた。呼ばずに置いたら、今日はどんなにか樂しい朝であつたぢやらうに。

其六　暱近マリテルリイ、殿

暱近　殿樣、御用捨を願ひ升。箇樣に早朝から御召があらうとは、思も寄らぬ事で御座り升る故。

殿　車で出やうと思ふ興が浮んだのぢや、あまり明方の景色が美はしいので。しかし、もう時刻も過ぎ、興も失せた。（暫く默つて居て。）何か新しいことがあるか、マリテルリイ。

暱近　別に私の存じて居る所では、これぞと申すことも御座りません。オルタナ伯爵夫人は、昨日市

中へ御出になりました。

殿　もうこゝに、あれが朝見舞の手紙があるは。（と指ざし乍ら云ふ。）それとも何か外の用事かもしれぬ。然し急いで見る氣もないて。そちは逢うたか。

呢近　迷惑ながら私は、あの方が心から打明けて下さるものでは御座りませぬか。然し万一、私が最う一度眞からあなたを慕ふ、外の貴夫人の腹心になる樣な事でもあれは、殿樣、その時は。

殿　その樣な、詰らしいことはまあ止めて置くがよい。

呢近　はゝ左樣で。ほんたうに、殿樣、まあ、そのやうにお成りのことも御座りませうか。それでは伯爵夫人にもあまり御無理ではなかつたはい。

殿　勿論、無理極まることぢや。身がマッサの姫と結婚するも、最早近寄つたことぢやから、是非共箇樣な係り合ひは、最初に切つて仕舞はねばならぬて。

呢近　若しそれ計で御座りますれば、勿論オルシナ夫人にも、あなたが御自身諦念をお付けになる通りに、あちらでも諦めをお付けにならねばなりませぬ。

殿　向うの諦念よりこちらの諦念が餘程つらい。こちらは下らぬ政治上の便利の爲に、身が思を贄にせねばならぬのぢや。向うは唯自身の思を取戻すといふ丈で、何も思はぬ方へやらねばならぬといふのではない。

呢近　取戻す。なぜ取戻さねばならぬか、と伯爵夫人はお尋ねで御座り升。若し政治の便利計りで、あなたのお心から出たのでない奥方が出來るといふ計りならば。其樣な奥方なら、お出なされても、まだ戀人の塲所は充分に明いて居り升。其樣な奥方の爲に贄にせられやうと思つて懼れては

をられませぬか。

殿　外の戀人を惱れるとか。それならばどうぢや。そちはそれで身をつみ入にして仕舞ふ氣か。

昵近　なに、私が。これはしたり。私をあの相手にならぬ婦人方と一所になされては困り升。たとひ私があの方に代つて何か申し上ぐればとて、お氣の毒さに代つて申し上ぐればとて。きのふはどうも實にあの方が、私の胸にこたへる樣に仰しやりました。あの方は貴君との關係に付いては、何も話すまいと思召した樣でした。あの方は丸ですまし切つて、丸で冷淡に見せやうと思召した樣でした。然し解もない話の眞中で、何か詞の云ひ廻しが出て參つた樣で、それは外の婦人に對することで、それであの方の苦しい胸が知れました。さも面白さうな風をしては、ごくあ[illegible]つたことを仰しやつたり、またとぼけ切つた話を、さも悲しさうな氣色で仰しや[illegible]したり。あの方はその戀路を本を讀む方へお向けになりましたが、その書物があの方の發つた御思案を無くして仕舞ひはすまいかと、私は心配致して居り升。

殿　丁度その書物があれの思案を奇體に仕始めた樣に。然し身をおもにあれから遠ざけたものを、そのもとを、よもやそちは身をあれが方へ引戻す爲に使はうとは思ふまいな。あれは戀路の爲に狂じみてくる程なら、どうせ早いか遲いか戀がなうてもさう成つて仕舞ふ筈ぢやから、いや、あれがことはもう澤山ぢや。何か外のことを。そして市中には眞に何事もないか。

昵近　殆ど何も御座りませぬ。なぜと申し升れば、アビヤニイ伯が今日結婚の儀式を致されるのは、まあ、何もないといつても宜しいのでせう。

殿　あのアビヤニイが。そして誰と。結婚の屆もまだないに。

呢近　大層秘して置いたさうに御座り升。それにあまり大層な騷ぎをすべきでも御座りませんでせう。若殿樣、あなたはさぞお笑ひなさりませう。然しなさけしりぶつた人は、兎角さういふ目に逢ひ升。愛情といふ奴がどうもとんだいたづらを働く奴で御座り升るから。財産もなく、位階もないこめらうが、伯をとう〳〵弥に掛けました。なる程少しめんは好う御座り升るが、大層に品行自慢で、情も深く、才智もあるとやら。それにまだいくらも云ひ立てがありませうが、どうもあてにはなりませぬ。

殿　誰でも罪のないのと、美しいのに感じて、その感じ通りに、外の心配もなく事をきめて仕舞ふ奴は、身が思ふには、却つて沢山しいとで、決して笑ふべきではないて。そしてその仕合せ者の名は何といふのぢや。何に致せ、アピヤニイ伯はそちがあれを嫌ふのと、あれが矢つ張そちを嫌ふのは知つてをるが、何に致せ、立派な若者ぢや。美男でもあり、財産もあり、堅氣な男ぢやから。全躰あれをば味方にしやうと思つてゐたし、又實はまだ思つてをるのぢや。

呢近　それはもうだめで御座りませう。よくも聞きませぬが、あの人は宮中の方へは、丸で望を屬せない方ださうで御座ります。あの人はその連合とピエモントの谷間へ引つ込んで、野猪狩(「ゲムゼ」獵)にでもアルペンへ出掛けるか、それとも狸(「ムルメルチイル」)に藝でも仕込むのでせう。あれにそれより氣のきいたとが、なんで出來ませうか。まづとゝでは、あの樣な不釣合な結婚をしては、もうだめて御座り升、おも立つた家との交際はこれぎり切れて仕舞ひ升るから。

殿　左樣。そち達のおも立つた家といふのは、あの儀式、我慢、退屈、稀には隨分貧乏に支配をせられて居る家であらう。然しそれ程までにあれが身を打込んで居る人の名は、まあ、なんと申す

のぢや。
呢近　えゝ、なんとか申しました。たしかエミリヤ、ガロッチイとか。
殿　なに、たしかなんと申したと。
呢近　エミリヤ、ガロッチイと。
殿　エミリヤ、ガロッチイとか。なんで左樣な事が。
呢近　たしかな話で、殿樣。
殿　さうではないと身は申すは。その樣なことのあり樣がない。そちは名を間違へたのであらう。ガロッチイと申すは大きな家柄ぢや。ガロッチイと申すものゝ娘ではあらう。しかしエミリヤ、ガロッチイではない筈。エミリヤではない筈。
呢近　エミリヤで御座り升。エミリヤ、ガロッチイで御座り升。
殿　それでは姓名とも同じ女子が二人あると見える。その上そちはエミリヤ、ガロッチイとかと申した。その「とか」と申すのは何事ぢや。おろかものでなうては、よもやその樣なことは申されまい。
呢近　殿樣、あなたはまあ、まるで夢中で御座りまするな。そのエミリヤをあなたは御存じで御座り升るか。
殿　身共こそその方に尋ねやうと思ふ所ぢや。その方が身共に尋ねる筈がない。あのサビオテツタのガロッチイ大佐の娘のエミリヤか。
呢近　その通りでござり升。

殿　あのこゝのガスタルラに母親と一所に住まつて居るのか。
昵近　その通りで。
殿　あの芸聖寺のちきそばの、ちきそばの。
昵近　その通りで。
殿　それでは一も二もなく。(と汕嵜の額の側へ飛び行き、それを取りてマリチルリイに渡し。)これを見い。これか。このエミリヤ、ガロッチイか。これを見てもう一度そちが言語同断な「その通で」と申す詞を繰返へして、身共が胸に刄を突つ込んでくりやれ。
昵近　その通でござり升。
殿　人殺し奴。これが、このエミリヤ、ガロッチイがけふ。
昵近　アピヤニイ伯爵夫人になりますする。(この時殿マリチルリイが手にもちなる額を奪ひかへし、側の方へ投けやる。)婚禮はサビオチッタの父親の寮でこつそりと濟ます筈、晝時分には母と娘と伯爵と、二三人の友達とが、馬車で參ると聞きました。
殿　(思ひ迫りし樣子にて、椅子にどつかとかゝる。)それでは身共はもうためぢや。身共は生甲斐はないは。
昵近　殿樣、あなたはまあ、どうなさりました。
殿　(また椅子より飛び上りて昵近に向ひ。)そらつとぼけた奴め。身共がどう致したと、また聞かれた義理か。さあ、申して聞かさう。身はあれを愛して居る。身はあれを拜んで居る。あの狂人じみたオルシナ伯爵夫人に、耻かゝやかしくいつまでも束縛せられてをればよいと思ふ奴等に、

これが知せてやりたい。彼奴等はもうとうからこれを知つてよいのぢや。ただそち計りは、マリチルリイ、身共に無二の交を盟つたそち計りは。あゝ大名でもまことの友は一人もない。まことの友は一人も得られぬものぢや。そちが、そちが、さう不親切に、さう意地惡く、身共に今の今迄それを默つて居てくれるとは、身の愛情を打ち破るかもしれぬ、その樣なあぶない事を。もし身共がいつかこれをそちに許して遣せば、そのときは身共が罪の中の一つ丈も神に許してもらふことが出來ぬ位ぢや。

昵近　なんと申しあげてよろしいか、殿樣。あなたが私をお呼びなされたは、よもやあなたが私をびつくりさせやうといふ思召ではござり升まい。あなたがエミリヤ、ガロッチイにお心があるとは、どの樣な盟をでも致します、若しあなたのそのお心を、少しでも存じて居りましたら、少しでも察して居りましたら、私は神にも、佛にも、(天使にも、聖使にも、)見放されませう。あなたのその樣なお心のないとは、私がオルシナ夫人にまで盟はなかつたばつかりでござります。そのお疑はちとお門違でござります。

殿　それならどうか許してくりやれ、マリチルリイ、(とマリチルリイを抱き、)そして身共をふびんぢやと思うてくりやれ。

昵近　あゝ、そこでござります、殿樣。そこであなたが物をお打ち明けなさらぬしるしが見えます。「大名には友達がない。友達が出來ない。」そしてそれが本當なら、何故でござりませう。大名方が友達をこしらへやうと思召さぬからでござります。あなたも今日私に物を打ち明けて下されても、秘密な願をお話なされても、心の底の底までお見せなされても、あしたはまるで詞をかはし

たとのあい他人の樣におあしらひなさるかもしれませぬ。

殿　しかし自分が自分にさへ打明けることが出來なんだことを、なんでそちにそれを打明けられやうか。

呢近　それではそのあなたの苦を引出した人にも、やつぱりお打明けなさらなかつたのでござりまするか。

殿　あれに。どれ程骨を折つたかしれぬが、二度とふた度物を言ふことはできんでしまうた。

呢近　そしてその始めてのときは。

殿　勿論詞をかはしたが。あゝ身共が心は狂にでもなりさうになつてくるに、そちに長話がまあどうして出來やうぞ。身は今波の眞中に漂うて居るに、そちはそれを見て居ながら、どうして海に陷つたと、丁寧に問はれた義理か。できる事ならこの身共をどうか助けてくりやれ。助けた上で問ふがよい。

呢近　助けろとおつしやりまするが。どこにまあ助けられる處がござりませう。殿樣あなたがガロッチイが娘にいひはぐれておしまひなされたことを、アビヤニイの夫人におつしやれば、それでよいではござりませぬか。ほんもとでかへない品物は、仲買の手から買ふ習。かやうな品物は仲買の手からは却つてやすく買はれるものでござります。

殿　ヤリチルリイ、どうかまじめになつてくりやれ、まじめに。もしさうしやらぬと。

呢近　勿論やすく買はれる代には、品物は惡くなつてをりまする。

殿　こりや、人を嘲弄いたすな。

昵近　それに伯爵はそいつをもつて境をこさうといたします。なる程これでは何か外に思案をいたさねばなりますまい。

殿　まあ、どういたしたら好からう。大事なかはいゝマリヂルリイ、どうか身共の代に考へ出してくりやれ。もしそちが身共の位置にをつたら、まあどうしやうと思やるか。

昵近　まあ、なんにいたせ、第一に小さいことは小さいことゝ見て置きますのさ。それに私が持つて居る丈の威勢をむだにはいたしませぬ。殿様そんなものではござりませぬか。

殿　身共の威勢が、どういたして役に立たうか。身共にはそれが分らぬ。そちは今日と申したが、最早今日。

昵近　やつと今日式を行ふ筈ださうでござります。そして仕方がないと申すのは、行つてしまつた時ばかりでござります。(少し考へて。)殿様、あなたは私になんでもおさせなさりますするか。なんでも私のいたすことをお許なさりますするか。

殿　なんでも、マリヂルリイ、なんでも。この婚禮に邪魔を入れることができれば。

昵近　その思召があれば、今は一寸も時を失つてはなりませぬ。あなたは寸刻も市中にお出なされてはなりませぬ。これからすぐにドサロへ、お下邸へ車でおいでなさりませ。サビオヂッタへ行く途は、丁度あのお下邸の前を通つて居ります。もし私に一寸アピヤニイ伯を遠ざけることができなければ。しかし察するところ彼奴はきつとこのわなに落ちませう。たしかあなたは、殿様、御婚禮の一條でマッサへお使者をお立なさる筈。そのお使者のお役目を、伯爵に仰付けられ、今日中に出發せいと申し付けておやりなさりませ。御得心が參りましたか。

殿　奇妙、奇妙。あれを身が下邸へ呼び寄せる樣にしてくりやれ。ゆけ。いそげ。身はすぐに車にとびのることにするは。（マリテルリイ入る。）

其七

殿

すぐに、すぐに。どこに置いたかしらぬ。（齒額を探し乍ら。）鋪板の上に落ちてをる。これはあまりひどい。（取上げて。）しかし見ることはまづ暫く止にしやう。傷にさゝつてをる矢を、なにもこの上深く押込むことはない。（と側に置き。）戀ひ慕うて溜息計りついてをつたは久しい間であつた。全體それでは成らぬ程長い間。然し手を出しては何もせず、その上もう少しのことでまるでだめにするところであつた。その上もし最早まことにだめであつたらどういたさう。もしマリテルリイの謀が行はれんだつたらどういたさう。なぜ又身はあれひとりに任せて置かねばあらぬのぢや。おゝ、それ〳〵。思ひ出したことがある。丁度此時刻には、（と時計を見て、）この時刻には、あの信心な娘が毎朝寺へ經を聽きにゆく筈、あそこへいつて話しかけて見たらどうであらうか。然し今日、あの娘が婚禮の日には、けふはあれが心に經文よりも大事なことがあるであらうが、なんともいへぬ。つひ一足のことぢや。（と鈴を鳴らし、机の上の書類をいそがはしくかきよする所へ舍人出づ。）車を寄せい。まだ評議役は誰も出ぬか。

舍人　カミルロオ、ロオタア が出仕いたして居りまする。

殿　これへ通せ。（舍人入る。）またやかましいことを申してひまどらせねばよいが。今度は與平ぢや。またいつかあいつのどちらへもつかぬ理屈をきいてやる時もあらう。まだどこかこゝらにエミリヤ、ブルテスキイの願書があつた筈ぢや。（と探出して。）ああ、これぢや。然し仕合せなブルテスキ

イ、よいとりなしてが。

其八　評議役カミルロオ、ロオタア、（手に書類をもちて、）殿

殿　近う、ロオタア、近う。これ丈今朝封を切つて見た。別に氣をひつたてる樣なものもない。一々どうしてよいかは、そちひとりでわかるであらう。この儘持つていつてくりやれ。

評議役　委細承知仕りました。

殿　まだこゝにエミリヤ、ガロツ。いや、ブルチスキイと云ふ筈であつた。エミリヤ、ブルチスキイの願書が一通ある。もう身が許はかきそへたが、然し少し計のことでもなし、下げることは少し控へておいたがよからう。いや、控へておくでもないか。そちの考通りに。

評議役　どういたして私の考通になりませう。

殿　なにか外にあるか。外に署名をする筈の書類があるか。

評議役　御署名を願ふのは、この死刑の宣告で御座り升。

殿　結搆ぢや、早うよこせ。

評議役（呆れて殿を見つめ。）死刑の宣告と申し上げましたが。

殿　よい、きいてをるは。もう全躰とうに濟んでもよい筈ぢや。身共はちといそぐから。

評議役（書物を調べる眞似をして。）いやとんだ事。丁度その書類はもつて參りませなんだ。いそぐ事でもなし、明日でよろしう御座り升。

殿　それでもよい。早くそれを片付けてくりやれ。身共は出掛けてをる。万事はあした。

評議役（書類をまとめて行き作ら。）結搆ぢや、死罪の宣告を結搆ぢや。たとひ此身がむすことを殺し

た人殺しにいたせ、かういふ時に御署名を願ひ度ないて。結搆ぢや結搆ぢや、あの氣味の悪い結搆ぢやが耳についてならぬ。

第二齣（場面はガロッチイ大佐宅の座敷。）

其一　大佐夫人クラウヂヤ、家僕ピルロオ

夫人（出で乍ら外の口より出る家僕に向ひ。）今庭へ馬で騎り込んだのはどなたぢや。

家僕　旦那様で御座り升。

夫人　旦那様がどうして今。

家僕　すぐそれへお入になりまする。

夫人　思ひもよらぬ。（急ぎて出迎へ。）これは旦那様。

其二　大佐ガロッチイ、其外前の通。

大佐　早いの、奥。どうぢやらう。今朝は出し抜けであつたらう。

夫人　よう出し扱いて下さりました。もしなに事もありさへしませねば。

大佐　なにごとがあらう。心配せぬがよい。けふの目出たいのがわしを早う起したのぢや。天氣はよし、道は近し、そなた達はさぞいそがしからう。かういふときは何かものを忘れ易いものぢやと氣がついた。早く云へば、一寸來て見て、それで直ぐに歸らうと思ふのぢや。エミリヤはどこにをる。化粧でも致してをるのぢやらうな。

夫人　心の化粧を。お經をきゝに參りました。あの子が申し升るには、外の日と違ひ、今日は尙更神樣のお助を願はねばならぬと申しまして、なにもかも打捨てゝ「エエル」をとり、その儘いそ

いで。

大佐　唯ひとりか。

夫人　たつた一足で御座り升るから。

大佐　そのひと足でも間違があるまいものでもない。

夫人　御機嫌をお損じなさらずに、こちらへお出遊ばして暫く御休みなされませ。召上るならば一寸なにか差上げましやう。

大佐　そなたの心まかせぢやが、一人でやるではなかつたに。

夫人　ピルロオ、そなたは玄關にをつて、唯のお客はけふ丈皆斷るやうにしな。

其三　家僕、（つゞいて）賊アンヂエロ

家僕　そのお客といふのは、みんな樣子をきゝにくるのぢや。もう一時間程先から何といふことはない、聞きただされて、こんなうるさいことはない。まただれかあそこにきた。

賊（半ば場面に顯はれ、短き外套にて顏を半ば隱し、帽を目深に被りたる姿にて。）ピルロオ、ピルロオ。

家僕　しつた奴かしらん。（この時小賊ずつと這入り、外套の前を開く。）やあ、アンヂエロか、手めえか。

賊　御覽の通りさ。手めえに云ひたいことがあるから、何遍この家のまはりをうろつ いたかしれぬ。唯一言ぢや。

家僕　手めえ、まあ、よくも〳〵まつぴるまに出て來たな。いつかぢうの人殺しからお尋ものにな

つて居て、手めえの首には褒美の金がぶらさがつて居るぜ。
賊　手めえはまさかその金をとらうとは思ふまいが。
家僕　手めえの用といふのは何だ。おれをしくじらせては困るぜ。
賊　これでか。(と金財布を出す。)さあ、取るがいゝ、これは手めえのだ。
家僕　なに、おれのだと。
賊　手めえは忘れたか。あの日耳曼人が、手めえのもとの主人が。
家僕　そのことは云つてくれるな。
賊　それ、手めえがおれ達の張つて居た網へ、ピザへの道でかけてくれた人よ。
家僕　誰かきゝはせぬかしらん。
賊　あの旦那は親切に、極上等な指輪まで殘していつた。手めえはしらねえか。あんまりいゝ指輪だつたから、すぐに金にしたら足がつかうと思つて、しまつておいたが、此頃やつと百「ピストオレ」で賣つたから、その分け前をもつてきたのだ。さあ、とるがいゝ。
家僕　おれはいらねえ。手めえ、みなとつておきねえ。
賊　ほしくなけりや、おやりやあしねえ。全体手めえの首はいくら迄にうる積なのだ。(と財布を入れにかゝる。)
家僕　やつぱり貰つておくとしやう。(と取る。)としておいて、これから何が出るのだ。まさか手めえがわざ／＼この金を呉れやうと思つておれを尋ねてくれもすまい。
賊　手めえにはそんなにおれがあてにならねえのか。畜生め。手めえはおれつちをなんだと思つて

居るのだ。人の割めえをくすねる樣なことをすると思ふのか。そりやあ、成程、世間の奴等にやあ出來やうが、こつちの仲間ぢやあ出來ねえことだ。もうお暇にしやう。（と行かゝつて一寸小戻りし。）まてよ、たつた一つ手めえにきゝたいことがある。今しがた此うちの親父が急がしさうに町へのりこんだのは何の用があつたのだ。

家僕　なんにも用はないのだ。唯のぶらつきのりよ。うちの孃樣が今夜寮でアピヤニイ伯爵と婚禮があるのを俟ち兼て、寮から來たのよ。

賊　さうしてもうすぐに歸るのか。

家僕　さうよ。手めえが長くぐつ〳〵して居ると、ここでめつかるのだ。だが手めえまさかあれにかゝらうとは思ふまい。氣をつけろよ、旦那は中々の。

賊　おれがあいつを知らなくつて。もとあれの隊に居たものを。それにあいつから格別もつてくるものもなし、若夫婦はあとからいつ時分出かけるのか。

家僕　壹時分だらう。

賊　供は澤山あるか。

家僕　唯一臺の車に、お袋樣と孃樣と伯爵とそれにサビオネッタからお寺での立合に友達が二三人もくるだらう。

賊　そして家來は。

家僕　おれが先へ馬でいつて、あとからまだ二人來るだらう。

賊　それでいゝ。も一つある。馬車は誰の馬車だ。この内のか、伯爵のか。

家僕　伯爵のだ。

賊　いけねえ。それぢやあ、まだ先乘が一人に、しつかりした馭者が居るだらう。まてよ。

家僕　きもが潰れるぜ。手めえはまあどうする氣だ。花嫁御の身に付けて居る少しの飾は、それ程骨折甲斐はあるめえに。

賊　骨折甲斐になるのはその花嫁よ。

家僕　そしてこの仕事にもおれが仲間にへえらにやあならねえか。

賊　なあに、手めえは唯先乘だから、こなにがあつてもかまはずに、ずん〳〵先へのつていくのよ。

家僕　己りやあいやだ。

賊　なんだと。手めえは忠義ぶらうと思ふのか。野郎め。手めえはおれを知つて居るだらうが、おれのきいたことを一と口でも人に饒舌つて見ろ。また手めえの話したことが唯だ一でも違つてみろ。

家僕　ひどいはめになつてきた。

賊　しなけりやあならねえことは、仕方がねえからするがいゝ。（と入る。）

家僕　鬼に一本毛を握らせたら、いつ迄も浮ぶ瀬はねえ。因果な目にあふことだ。

其四　大佐夫婦、家僕

大佐　孃の歸が餘り遲いから、もうかへるとしやう。

夫人　少しお俟なさりませ。歸つたらさぞ殘惜しう思ひませう。

大佐　おれはまだ伯爵の處へも一寸寄らねばならぬ。あの立派な若者を聟と呼ぶ日が俟ち遠な位ち

や。なにからなにまであの男のする事は嬉しい樣ぢや。第一先祖からの領分の谷間へ引つ込うといふ決斷が氣味がよい。

夫人　わたしはそれを思ふと胸がさける樣で御座り升。たつたひとりの可愛い娘を丸でなくしてしまふかと思へば。

大佐　なくするとは何の事ぢや。まことの愛の手に任せて置くのではないか。そなたのあれを慰にしてゐる心を、あれが身の仕合と一所にしてはならぬ。さういはれると又たおれの苦い邪推が起つてこやうもしれぬ。そなたが此の眞實に思うてをる連合に離れ、娘をばてゝ親の手を離させて此市中に住つて居たのは、娘に屹とした教育をしやうといふよりは、どうやら交際社會が面白いと御殿が近いとのせいの樣ぢや。

夫人　それはあまり御無理で御座り升。あなたのお堅いお心から、御殿の近いのを大層嫌つてお出なさりまするが、けふは私が只一つ、この市中にをるのと、御殿が近いのとが、爲になつたことを申したう御座り升。あの二人がまことの愛で、お互に識り合つたのも、こゝに居たからでは御座りませぬか。こゝなればこそ伯爵が孃をお見識なさりました。

大佐　それは嘘とはいはぬが、然し出來事がよいとて、その事の原のよかつたといふ證據にはならぬは。この市中の教育がかういふ仕舞になつたのは結搆といふものぢや。おれ共がまぐれあたりの仕合でなつたとを、何も智恵があつてしたやうに云ふでもあるまい。まあかういふ仕舞になつたのは結搆ぢや。丁度いゝ一對になつたから、あれ等が心も身も安まる所へ、いかうといへばやらねばならぬ。伯爵がまたこゝで何が出來やうか。腰を屈めて諂つて、這ふ樣にして、あのマリ

チルリイ抔に賄賂でもつかませやうと骨を折つて、仕合を求めて何にしやう、名譽を釣つてどうなら う。その様な仕合や名譽はあの男には何でもない。ピルロオ。

家僕　こゝにをりまする。

大佐　馬を伯爵の家の前へ牽いて行つておけ。己はあとから行つてあそこから乘るから。（家僕入る。）伯爵は領分へ還れば人を使ふ身の上ぢやのに、玆で人に使はれるのはむだな事。それに考へて見るがよい。伯爵は當家と好を結んだ上は、殿のお覺は丸で損じてしまふのぢや。殿が己を嫌つて居られることは。

夫人　あなたの氣に遊ばす程でもないかと思はれ升。

大佐　なに、氣にする。その様な事をなんでおれが氣にするものか。

夫人　私は貴君には申さなかつたかしりませぬが、殿様が孃を御覽になつて。

大佐　殿が。そしてどこで。

夫人　いつぞやの夜會の時、御家老のグリマルヂイ様の處で、孃に大層御親切に。

大佐　なに、親切に。

夫人　長い間孃とお話を遊ばして。

大佐　あの話をしたと。

夫人　孃がさつぱりしてゐるのと賢いのとが、大層お氣に入つた御様子。

大佐　あの氣に入つたと。

夫人　孃の美しいことを、大層お褒遊ばして。

大佐　あのそれを褒めたと。そしてそれをそなたはその嬉しさうな聲で己に話すとは。クラウヂヤ、クラウヂヤ。それはおろかな親心といふものぢや。

夫人　それはまたなぜで御座り升るか。

大佐　まあ、よいは〳〵。それも其儘で濟んだから。ああ、もしやと思へば。いや、これが丁度おれに死ぬ程つらい目をさせる弱處であつたらう。美しいと褒めてほしがるのは色好の常ぢや。クラウヂヤ、クラウヂヤ。思うた計りで膝が戰へる。そなたは又其樣な事があつたら、直ぐに知らせてくれてもよからうに。が、けふはそなたにいやな事はいひたくない。然し、（と夫人が手をとつて留めんとするを。）長くゐるとつひいふやうになる。それぢやからはなせ。又後に、クラウヂヤ。さはりのないやうにまおれ。

其五　大佐夫人

まあ、なんといふ方であらう。あれ　堅氣といふものか。てもあら〳〵しいおつしやりやう。あまり堅氣も程がすぎると、なにもかも疑はしく、なんでもわるいやうにかんがへられるもの。それともあれが人を見る上手といふものか。それならだれがそのやうに人を識りたがらう。だが、エミリヤはなにをしてゐるのやら。殿樣は旦那樣の敵ゆゑ、娘に心をおかけ遊ばすのは、自分に恥をかゝせる爲だとばかり、旦那は思召すと見える。

其六　大佐令孃エミリヤ、大佐夫人

令孃（慌てゝかけ込みながら。）あゝ、うれしや〳〵。もうこゝまで來ればおちついた。しかしひよつとあとからつけてお出なさりはせぬか。（とかつぎをとつて母親を見。）おつか樣、お出なさり

はいたしませぬか。お出なさりませなんだ。あゝ天道樣、忝うござります。

夫人　おまへはまあどうおしのだ。

令孃　なんでもござりませぬ。

夫人　それにどうしてあたりを見まはして、手も足もふるはせておいでだえ。

令孃　まあ、私がなにを聞かせられねばならなんだと思召します。それに塲所もあらうに。

夫人　おまへはお寺においでだつたと思ふのに。

令孃　おつしやる通てござります。しかし無法な人に　、寺も社も、なんでも御座りませぬ。あゝおつか樣。（と母を抱く。）

夫人　まあ、話してお聞せ。聞くまでは安心がなりませぬ。お有難いお寺の中で、なにも惡い事の出來やう筈はないが。

令孃　けふはいつもより心を籠めてお祈を致す氣で居りましたに、いつもにない目にあひました。

夫人　その樣な事も、人の身の上にはあることだよ。思ふやうにお祈の出來ないこともあるけれど、天道樣にはお祈をしやうとおもうたのは、もうお祈をしたと同じことだよ。

令孃　それではよこしまな途に落ちかゝつたのも、落ちたのでござりませうか。

夫人　そんな心はお前にはないではないか。

令孃　いかにも、神樣のお惠で、それほど迄になりさがりは致しませなんだが、よこしまな人に唯の人でも、引入れられてしまふこともござりませう。

夫人　まあ氣を鎭めて、どの樣な目にあつたのか、早くいつて聞せておくれ。

令孃　私がいつもより少し後れてお參にゆき、後の方でお祈をいたしませうと存じますると、どなたか、私のぢき後へぴつたりと寄添うて坐つた方が御座りました。しかし私はよそのお方のお祈が、自分のお祈の邪魔になりませぬやうに、どちらへか、かた寄らうと存じましたが、前の方へも、横の方へも、身動さへできませなんだ。私は唯初はお祈のできぬのを一番心配して居りましたが、暫くしまするると、私の耳の側で溜息の聲が致し、其人の呼ぶ名前は、神や佛の名ではなく、滅相な、私の名で御座りました。あゝどうかつよい雷でも鳴りわたつて、これからあとをわたくしにきかせてくれなんだらと思ひましたに。私が美しいの、かはいゝの、けふは私を仕合にする日で、それがまた變ればよいの、また私が仕合になれば、自分は不仕合になるのと、樣々なことをいつて、私に拜むやうに賴みました。それを私は皆聞かねばなりませなんだ。しかし振向ひては見ませなんだ。私は唯聞かぬ振をして居やうとばかり思ひました。どうも外に仕樣は御座りませぬから。私は唯私の守り神にお祈申し、耳を遠くしていたゞかうと存じました。たとひその爲に一生耳が遠くなつてもかまひませぬから。さう私は祈りました。私の祈は唯それ計でござりました。その中お儀式も仕舞になり、私も立上らねばならぬことになりました。しかし私はこのやうな惡事をはゞからぬ方を見ることが恐ろしく、躰が慄うて居りました。そして私が振りむきましたとき、私がその方を見ましたとき。

夫人　誰だえ、孃。

令孃　當てゝ御覽遊ばせ、おつか樣、當てゝ御覽遊ばせ。私は穴へでも這入りたう御座りました。あの方で御座ります。

夫人　誰だえ、あの方とは。

令孃　殿樣で。

夫人　なに、殿樣。あゝ、おとう樣のせつかちなのはそれでは仕合であつた。さき程まで此處に御座つてお前を俟たずにお歸りなされたが。

令孃　おとう樣がこゝに。そして私を俟ずにお歸とは。

夫人　若しお前がその慌てた樣子をお見せ申したら、まあどんなであつたらう。

令孃　それではおつか樣、私の何處が惡いとおとう樣が思召すのでござりませうか。

夫人　なんにもありはしませぬ。お前にもわたしにも。だがお前はまだおとう樣のお氣質を知らないのだ。あの方の御立腹遊ばした時には、惡者に惡い事を仕掛けられた、罪のないものでも、よく惡人と間違へてお仕舞遊ばすよ。あの方の御立腹の時には、私が前から存じて居るでもなく、私がお留申すこともできない事でも、私がわざとお勸申した樣に思召すよ。然しお前は殿樣と氣が附いてから、一躰どうおしであつたえ、成うとならお前がそこで緊りして、唯一目で向うを下げすんだ樣子を見せて還れば善かつたのに。

令孃　いゝえ、おつか樣、それは私には出來ませんでした。私は一目見た跡で、又た二目と見る程の氣强い心になりませなんだ。私は逃げ出して參りました。

夫人　そして殿樣は追懸けてお出だつたのか。

令孃　それは知りませぬが、寺の廣間まで出ると、私の手を握られました。握つたはやつぱりあの方で御座りました。私は唯耻を思つたので、じつと堪へて居りました。若し振離さうとでもした

ら、却つてまはりの人の目に附くだらうと存じましたから。唯だそれ丈しか、私には思案が出來ませんでした。その外は私は覺えて居りませぬ。殿様も何かおつしやり、私も何か御返事を致しました。然し何とおつしやつたやら、何と御返事申したやら、覺えてさへ居れば申し升るが、皆忘れて仕舞ひました。其時は唯夢中で、どうして其場を別れましたか、どうして廣間を出ましたか、少しも覺が御坐りませぬ。私の人心地の付いたのは、町へ出てからで、殿様は始終私のあとへ附いてきて、この家へも這入り、この梯をもお上なさつたと計、今まで思つて居りました。

夫人　それはおまへの臆病でさうお思のだつたらう。お前が這入つてお出の時の慌たゞしい顔付、一生とても忘れはしませぬ。いゝえ、殿様だつてそれ程大膽でお出でゝはない。然しまあおとう様がそれを御存じなくつてよかつたね。なぜといつて御覽、此間殿様がやさしい目でお前を御覽の事をお聞になつてさへ、どんなに御立腹遊したらう。それだといつてお前なにも心配する事はないよ。けふの事は唯夢だと思つておいで。夢より餘計に迹へ殘りはしないよ。けふの事さへ濟んで仕舞へば、殿様だつて迹をおつけあさることはありますまい。

令孃　だがね、おつか様、アピヤニイ様には此事を申上げねばなりますまい。

夫人　そんな事を云つてどうなるものかね。なぜ云はうとお思のだ。云つて何の爲になるとお思のだ。お前は解もなくあの方に心配させやうとお思ひか。假令伯爵は直ぐにはそれをいやに思召さないでも、すぐ利かない毒も恐ろしく利く時があるよ。戀人の上では氣にしないことでも、御亭主になつては氣にするかもしれないから。戀人といふものは色の敵が威勢のある方だけ、自分がそれに勝つのを嬉しい樣に思ふけれど、勝つて仕舞ふと、お前はまだ知りませぬが、戀人からは

まるで變つた方が出來ることがありまするよ。そんなためしは天道樣がお前には見せまいがね。

令孃　おつか樣、私は何事もあなたの思召通だと思つて居ります。さうではおりまするが、若しけふ殿樣が私に物をおつしやつた事を、外の人がアピヤニイ樣に申したら、どう致しませう。私は今默つて居たので、却つていつか餘計に心配をかけはしますまいか。私の淺い者では、胸に思つたことは皆打明けて話して置きたう御座りまするが。

夫人　それは弱身だよ。すいてお出の弱身だよ。どうでも云つてはいけませぬ。なんにもいつてはいけませぬ。けどられてもいけませぬよ。

令孃　それでは仰に從ひ升。お詞には背きませぬ。ああ、(と溜息をして、)これでやう〳〵落付きました。まあ、私とした事が、とんだ馬鹿ね、臆病な事。おつか樣、なにもあれ程驚かなくつてもよかつたかもしれませぬ。

夫人　さうだとも。わたしもお前が自分でさう解るまでいふまいと思つたのだよ。お前の氣さへ鎭まれば、さう解るのだから。殿樣はお世辭者だのに、お前は世辭の詞にお慣でないから、唯丁寧のお扱が、心あつての樣にも見え、艶のあるお詞が、解ありげにも思はれ、一寸した思付が心からの望の樣に見え、唯の望が巧んだ事の樣に思はれるのだよ。世辭のある方の辭では、何でもない事が、大した事に思はれ、また大事な事が、何でもないやうに思はれるのだよ。

令孃　あゝ、おつか樣、私があんなにこはがつたのは、ほんとに馬鹿らしう御座りました。もう私はアピヤニイ樣になにも云はうとは思ひませぬ。若し私が話したら、おとなしいとは思はれず、思上りだと思はれるかもしれませぬから。おや、さう言へばアピヤニイ樣がお出だと見える。お

れはあの方の足音で御座ります。

其七　アピヤニイ伯、前の人々

伯　（沈みたる氣色にて、下を見て來り、此場の二人を見ぬ中に、エミリヤ早足にて出迎ふ。それに心附きて。）これはエミリヤ樣、あなたがかう端近くお出とは思ひも掛けませんでした。

令孃　假令私が居るとは思召さないところでゝも、御氣色が好くつて居らつしやるやうに祈つて居りまする。まあ、あなたのおまじめお事、おかたくるしい事。けふの日は嬉しくて浮々なさるほどの直打はないので御座りまするか。

伯　どう致して。私の一生よりも餘計に直打が御座り升。然し餘り嬉しさが滿ち〳〵て、その嬉しさのせいかもしれませぬ。私がかうまじめなのは、またあなたが堅苦しいとおつしやるのは。（と夫人の方を見て。）あなたもこゝに。いまに最少しお近しくならねばたらぬあなたもこゝに。

夫人　さうなるのをわたしはまあどんなにか手柄に思ひませう。なう、エミリヤ。お前も嬉しからう。おとう樣はなぜまあ一所に此宮に遇はうともせず、お先へお歸になつたのであらう。

伯　お父上には今そこで私がお別申しました。いえ、お父上が私に。エミリヤ樣、まああなたのお父上はどういふ氣丈お方でせう。男の手本で御座ります。あの方とお話申す度に、どんなにか私の心が勵みませう。私が身を謹み、節義を守らうと思ふ心が、あの方を見て居る時ほど盛な事は御座りませぬ。又あの方の事を思ひ出した時程。そして唯此心が一番入用で御座ります、あの方の子と申して耻かしくない樣に致しまするには、又あなたの夫になりまするには。

令孃　そのおとう樣が、なぜ、私を俟つて居て下さらなんだやら。

伯　私が思ひ升るには、お父上は一寸尋ねてお出にはなりましたれど、けふあなたを御覽成されて、あまりの嬉しさにお動じなされてはならぬ故、それでお歸りに成つたのでせう。

夫人　おとう様はお前がけふの儀式の身仕舞をしてお出だらうと思召したのに。

伯　私が先刻大佐樣より伺つたのに、あなたはお寺へお參に成りましたとか。至極結搆な事で御座ります。あなたは私の信心深い連合にお成りでせう。しかし信心おとてたかぶりはせぬ連合にお成りでせう。

夫人　しかし一つの事に係つて外の事をせぬでもない。もはや時刻も過る故、早うしたらよからう、エミリヤ。

伯　それは、奧方、何事を。

夫人　それでも伯爵此儘で儀式の場へ、よもや娘をお連にはなりますまい。

伯　成程、私は今やう／＼心附きました。どうもエミリヤ殿のお顏を見て居りましては、お仕舞までは心附きませぬ。それに是儘でも宜しいでは御座りませぬか。

令孃　いえ、アビヤニイ樣、是儘では、まるで是儘では。さほど美しく致さうと申すのでは御座りませぬが、一寸、一寸。直ぐに出來上ります。あなたに戴いた、お立派な寶石の飾物、それに釣合ふものなどを身に附けやうとは思ひませぬ。全體あのお飾は、若しあなたに戴かなければ、私は否で御座り升。なぜと申し升るに、最うあのお飾の事を三度夢に見ましたから。

夫人　おや、その事をなぜ私にお話でなかつた。

令孃　其夢を申し升るは、私があのお飾を身に付け升ると、鏤めてある寶石が殘らず玉になつた夢

で御座り升。そしておつか樣、玉とは涙の事と申升るから。

夫人　此子はまあ夢よりも夢らしい事を云つてお出だ。お前はもとから寳石よりも玉がお好故、それでさう見えたのであらう。

令孃　さうで御座りませうか。

伯　（物思はしげに、）玉とは涙、玉とは涙。

令孃　どうしてそれをお心にお掛遊ばし升る、あなたまで。

伯　さうお問なされては耻かしうござります。然しなにとなく私の思ひ遣りが悲しげな事にばかり傾くのが心掛。

令孃　なぜ私の申上げた事を悲い方へ計お取なさり升るか。私は身仕舞に付いて少し工夫が御座り升るが、まあどういふ工夫だとお思召しまするか。私があなたに初めてお目に掛つた時の身なりを覺えてお出遊ばし升るか。

伯　それを忘れて成りませうか。私があなたの事を思へば、いつもあの時のおなりでお出の樣に思ひ升。そして又たあなたが外のなりをしてお出でも、やはりあの時のおなりでお出の樣に存じ升。

令孃　あの時の樣に着物の色も仕立も致しまして、ふうわりとした樣に。

伯　それが至極宜しう御座り升。

令孃　そして髮は。

伯　自然の儘のかちいろのつやで、そして自然の儘の褐色の波を打たせて。

令孃　薔薇の花を挿すことも忘れは致しませぬ。よう御座り升。少しの間お侯なされて下さりませ。

直ぐに参り升るから。

其八　伯爵、夫人

伯　（沈んだ顔付にてエミリヤの迹を見送り。）玉とは涙。少しの間浮世に時刻といふものがなくば、世の中の一分間が、もし勝手に一年にも延されたら。

夫人　アビヤニイ様、エミリヤが申し上げたのも嘘では御座りませぬ。あなたはけふはいつもになくおふさぎ遊ばす御様子。今暫しで兼ての御望が協ふ所で、もしやあなたは、それをお望なされたことを御後悔なさるのでは御座りませぬか。

伯　あゝ、母上、さう私をお疑ひ遊ばし升るか。然しまことに私は、けふ何となく塞いでをり升。だか思うて御覧なさりませ。願の協ふに一足なのも、まだ一足も歩み出さぬも、根が同じ事では御座り升まいか。一昨日からも、昨日からも、見るにつけ、聞くにつけ、さう思はれる事計り。唯さういふ考が私の思はうと思ふ事にも、思はねばならぬ事にも、皆付いて参り升。まあ、どうした事で御座りませう。私にも解りませぬ。

夫人　それはまあどうした事で御座りませう。私にも心配で御座り升。

伯　あれからこれへと、考といふものは参るもので、私は何となく氣に障はつてなりませぬ。私の友達の事について、私の身の上の事について。

夫人　それはどうしたことで御座り升。

伯　私の友達共は此度の結婚をする迄には、殿に一言申上げえとすゝめ升。あなたは兼てよりそれには及ばぬとおつしやり升るが、何だかまるで默つて居りまするも、禮を欠いでをる様に思はれ

ます。それでつひ一口いはうと友達に約束し、今し方車を寄せやうと思ひました。

夫八　（薮さし躰にて、）それではあの殿様に。

其九　僕ピルロオ、つゞいて呢近、前の人々

僕　奥様、マリヂルリイ公がお立寄成されて、伯爵様をお尋でござり升。

伯　なに、私をとか。

僕　もうこれへお出になり升。（戸をあけて引下る。）

呢近　奥方、お免し下さりませ。伯爵殿、お邸へ伺ひましたが、こちらにお出との事ゆゑ、大切な用事を申上げん爲に、これへ尋ねて參じました。いやなに奥方、長く手間取る事でも御座らねば、どうか悪しからず思召して。

夫八　それではお邪魔を致し升まい。（と一禮して入る。）

其十　呢近、伯爵

伯　さあ、どうかおつしやつて。

呢近　殿様の御用で參りました。

伯　してその御用とおつしやるは。

呢近　いかにも結構なるおほせ言ゆゑ、使者に立つてお傳申す此身にとつても、面目に存じまする。伯爵殿にも私が貴君のお身の爲を存じ罷居ることは、よもうそとは思召しますまい。

伯　いや、失禮乍ら前置なしに願ひたう御座り升。

呢近　それならそれで宜しう御座る。殿様にはマッサの侯爵家の姫君と御婚禮の事につき、至急に

使者をお立にならねは相成ず。誰が其任に適するかと、種々御熟考遊ばされしが、つひに、伯爵殿、あなたに落ちました。

伯　なに、それが私に。

昵近　いかにも。若し朋友の間で、斯様に申すを烏滸がましく思召さずば、私も實は詞を添へました。

伯　お禮申してよい事やら。實は久しい前より殿樣が私をお用あらうなどとは思ひもかけぬことでござる。

昵近　どういたして、殿樣があなたをお用なされぬやうなお心が御座りませう。唯しかるべき機會がなかつた事と思はれ升。此度のお役目がもしあなたには充分にない樣に思召さば、友誼を存じての厚意も、ちと早まつたのでござりませう。

伯　朋友だの、厚意だのと承るが、公爵マリチルリイと友達付合を致さうとは、素より夢にも思ひ掛けませなんだ。

昵近　これは失禮、これは思ひもよらぬ失禮。貴君の許も受けずして、あなたの友達などと申しましたは。然しそれは兎も角、殿樣のお情、貴君の御名譽は、決して動かぬ事なれば、貴君には喜んでお受をなさることで御座らう。

伯　（暫く考へて。）それは申す迄も御座らぬ。

昵近　然らばこれよりお供を致しませう。

伯　これよりいづこへ。

昵近　ドサロなる殿様のお館へ。總べての事も整ひ居れば、今日中に御出發なさらずは成りますまい。

伯　なんと仰せらるゝ、今日、只今とか。

昵近　いや、一時も後れてはならぬ大至急の御用で御座る。

伯　誠に左様ならば、お氣の毒乍ら、此お役目は殿様へ御辭退致さねばなりませぬ。

昵近　なんと仰つしやります。

伯　今日は何事ありても出發は致されませぬ。明日も、明後日も。

昵近　それは伯爵お戯でござりませう。

伯　なに、お手前に向つて。

昵近　それはいかな事。若し私に向つてのお戯でなく、殿様へ向つてのお戯ならば、猶更面白からうと存じ升。あなたは旅立つことはできぬと仰せられまするな。

伯　何事があつても出來ませぬ。察する所殿様なりとも、私の御辭退はお許あるに相違ござらぬ。

昵近　その御辭退の主意は承はりものでござる。

伯　なに、鎖細な事。お聞下され。私はけふの中に實は妻を迎へまする。

昵近　それで。

伯　なに、それでとは。それは何といふ解の分らぬお尋でござる。

昵近　でも、婚禮と云ふものは、延ばされぬものでもござり升まい。勿論延ばすといふことは、妻にも夫にも、あまり嬉しい事ではござるまいが、主命は又格別。

伯　主命。主人。げに殿樣はお手前の爲にはどこ迄も服從せねばならぬ方で御座らうが、私は自分からあの方を主にした覺はござらぬ。もとこの國へ參つた時も、身の自由を捨てたわけでも御座らねば、奴隷の如く扱はるゝ筈も御座らぬ。私にはまだ大きい主人が御座る。

呢近　大きからうが、小さからうが、主人は主人でござらう。

伯　それに付てお手前と爭を致さうとは思ひ申さぬ。只お手前はこゝで聞かれたことを、歸つて殿に告げられたら、それでお役目は濟むで御座らう。我一生の幸の根を、けふ堅めやうとする所故、折角の命に從ひ難く、お氣の毒に存じ升と、申上げて下さらば、それで仔細はござるまい。

呢近　そのお嫁御はどちらの方か。殿樣へ次手にお知らせにはなりませぬか。

伯　妻に致すはエミリヤ、ガロツチイで御座る。

呢近　こゝの娘の。

伯　いかにもこゝの。

呢近　ふうん。

伯　なんと仰しやる。

呢近　それならばお歸り迄、儀式を延す迄の事は、左迄難くも御座るまい。

伯　儀式をとおつしやるか、唯儀式を。

呢近　なに人のよい親御の事、さうやかましうも致されまい。

伯　人のよい親とは。

呢近　エミリヤはたとひお延しになればとて、慥にあなたの物になるでござらうが。

伯　慥に私の。あゝ慥に。さういふお手前は、慥に猿に違ない。
呢近　拙者に向つてそのお詞。
伯　それがいかゞ致したな。
呢近　そりや聞捨には相成りませぬぞ。
伯　はゝ、猿は横着なものでござれど。
呢近　重ね〴〵、伯爵。拙者は決鬪を申込みます。
伯　それはいと易い事。
呢近　しかし御婚禮のお邪魔になれば、今日の所は見合せて進ぜ申す。
伯　これは又た意外な御親切。しかしそれには及び申さぬ。(と呢近の手を取り。)マッサへはけふ參られぬが、お手前と散歩いたす位はたやすい事。いざ御同道仕らう。
呢近　(振り離して入り乍ら。)少しの我慢ぢや、伯爵、少しの我慢ぢや。

其十一　伯爵、夫八

伯爵　徃け。人非人。あゝこれで少しは心地よう成つた。躰の血が湧いてきて。
夫八　(急ぎて出で來りて心配らしく。)なにか烈しいお詞戰があつた様子、お顔も赤うなつてをるは、なに事でござりました。
伯　なに事でも御座りませぬ。マッチルリイが親切で、自身で殿の所へ參らずと濟むやうになりました。
夫八　それはほんたうで御座り升るか。

伯　それ故早く出掛られる事になりました。家來共をもせきたてねばなりませぬ故、一寸歸つて直ぐにまた參りませう。その内にはエミリヤ孃の仕度も多分出來ませうから。

夫人　それではアピヤニイ樣、なにも心使なことはないのでござり升るね。

伯　いえ、けして御心配になる事は御座りませぬ。（と伯は徃き、夫人は入る。）

第三齣（場面は殿の別莊、客待の間。）

其一　殿、昵近

昵近　むだで御座りました。かれめは仰せつけられました冥加に餘るお役目を、慢り切つてお斷り申しました。

殿　それでは矢つ張舊の儘か。そのまゝに致さするのか。けふの内にエミリヤはあれのものになるのか。

昵近　まあさうなりさうに見えまする。

殿　そちのもくろみは多分成就しやうと思うて居つたに。そちはさぞ馬鹿な顏を致したであらう。馬鹿がたまく〳〵よい智惠を出した時は、利口なやつに仕事をさせねばならぬものであつたのに。

昵近　それが御褒美でござりまするか。

殿　なに褒美とは。それはまた何の手柄で。

昵近　私はあのお使のおかげで、命を棒にふるかもしれませぬ。伯爵に名聞になることを勸め、愛情の方を押へさせましやうと、手を替へ品を替へました上、つひにはおこらせやうとかゝりました。そのために伯爵の我慢のできぬやうなことを私が申し、彼も無禮なことを申せし故とう〳〵

決闘を申込みました。しかも即座に勝負をつけまするやうに。その時私は思ひました。かれめが死ぬるか、私が死ぬるか。向うが死ぬれば充分の勝でござりまするし、若し又私が死にますれば、向うが此地を立ち退かねばなりませぬ故、いつすん延びればひろとやら、やはりあなたのお得と存じました。

殿　そちはそこまで突つ込んでくれたか、マリチルリイ。

昵近　いえ、貴い方のために馬鹿に骨を折つたあげくは、大抵知れて居りまするのに。その御褒美も知れて居りまするのに。

殿　そして伯爵は何と申した。彼は誰にも無禮なことをにごんといはせぬ男ぢやと聞いたが。

昵近　勿論でござります。それを口に出した上は、早速決闘の話がまとまりましたのは、勿論でござります。然し伯はけふに限つて、命のとりやりをするよりも、最少し大事なことがあると申してことわり、婚禮が濟んでから一週間たゝぬ中、乾度向うから沙汰をする筈で御座ります。

殿　エミリヤと婚禮が濟んでからと申すのか。それを聞くと頭がむしやくしや致してくるは。それをそちはさうかと申して歸つたのか。それで歸つて命を棒にふるのなんのと廣言を申し、身共がために盡したと申すのか。

昵近　それでは殿樣、どう致したらばよいと仰しやりまするのでござりまするか。かやうにいたしましたその上に、まだどのやうにいたせばよかつたのぢやと仰しやるのでござりまするか。

殿　その上とはなんのことぢや。なにかすこし致してゞも居るやうに。

昵近　それでは伺ひまするが、殿樣、あなたは御自分でなにかなさりましたか。あなたは運よく寺

でエミリヤにお逢になつたさうで御座りまするが、なにかお約束でもなさりましたか。

殿　(茶にしたる呼吸にて。)根問も大概に致したがよい。それに一々返事をせねばならぬのか。萬事首尾よく約束がとゝのうたのぢや。そちはまことに親切な男ぢや。しかしもう外に頼む用はない。エミリヤは身共の方からかれこれ申すよりは、向うからうるさく持ち掛けて參つた位ぢや。全躰すぐに連れてでも參られたのぢや。(急にすげなくなりて、いひつくるやうに。)此上に聞きたいこともあるまいから、もういつたがよからう。

昵近　もういつたがよからう。はい／＼、それが大切でござりませう。この上出來やうのない事まで私が致しました所が、つまり大詰はその通りでござりませう。出來やうのないこと。出來やうのないことでも御座りませぬ。唯ちと大膽など申すばかり。しろものさへこちらへ捲上げれば、婚禮の出來やう筈はござりませぬ。

殿　ふうん。それは其筈であらう。身共が護衞の兵隊に申附ければ、そちはそれを召連れ、街道筋へ待ぶせして馬車を遮り、中の娘を引出して、手柄顏にこゝまでつれて參る氣か。

昵近　隨分昔から人の娘を無理に奪ひとりましても、無理らしくなく見せたためしもござりまする。

殿　そのやうな事のできるそちなら、さきへさう長々と仕方話を致しはすまい。

昵近　然し私が引受けるわけには參りませぬ。隨分人の命にかゝる、かゝるかもしれませぬから。

殿　引受けさせてならぬことを、人に引受けさせるのが身共の常であらうよ。

昵近　さやうならば殿樣。(遠方にて銕砲の音聞ゆ。)今のは確に。あなたもお聞なさりましたか。又一發。

殿　何事ぢや、何事ぢや。
昵近　なにごとぢやと思召します。私が思の外働いて居るかもしれませぬ。
殿　働いて居る。それはどうして。
昵近　先刻から申上げたことを、いま致させて居る最中でござります。
殿　よく其樣なことが。
昵近　しかし殿樣、先刻のお詞をお忘なさりまするな。
殿　さだめてみかけは。
昵近　仰しやるまでもござりませぬ。いひつけてある物共は皆あてになるものでござります。道は丁度動物園の板園の下にあたります。一組は引剝と見せて車にかゝり、外の一組で私の家來の雑つて居りますのは、動物園から救ひに出て、打合ふと見せて、そのひまに私の家來がエミリヤを助ける積りて引つ浚ひ、動物園を拔けて、お別莊へ連れてまゐるつもりでござります。なんと殿樣、この仕組はどうでござりまする。
殿　それは思の外の事ぢや。なんとやら氣懸りぢや。(この中マリテルリイ窓に歩み寄る。)なにを見て居るのか。
昵近　丁度あの邊にあたる筈ぢやが。しめた。覆面の奴がひとり板園を廻つて駈付ける樣子。仕果せたものと見える。殿樣、あなたは暫く奧へおはいりなされませ。
殿　マリテルリイ、そちは。
昵近　先刻は仕足りませんで、これでは仕過ぎましたのでござりまするか。

殿　さうではないが、一躰かやうにいたしておいてつまり。

呢近　つまりはともかくも。一度に萬事かたづけた方が。あなたは早く奥の方へ。覆面の奴がお姿を見てはなりませぬ。(殿様入る。)

第三齣

其二　呢近、(つゞいて)賊

呢近　(また窓の方へゆき)馬車はかしこを、市の方へ歸る樣子。あの緩々と行く工合は。それに御者臺にはどの車にも、家來が一人づゝ乘つて居るが。こりやあまり面白い徵ではないはえ。事によつたら大事な仕ごとが、半分しか出來なんだかも知れぬ。死人を載せた車でなく、手負を載せた車ゆゑ、あゝゆつくりと遣るのではないか。覆面の奴が降りて來た。アンジエロと見える。あの大膽者が。やう〳〵の事で。こゝの案内は善く知つて居る筈。おれに手眞似をして見せるが。仕損じたのではない樣子。あゝ、伯爵どの、マッサへ往くまいと强情を張られたはよいが、その代りこん度は、十萬億土へゆかねばならなかつたであらう。猿の手並を御存じか。(戸の方へゆきながら。)猿はわる賢いものでござるて。アンジエロ、どうであつた。

賊　(覆面を取りて。)氣を付けてお出なさりませ。今こゝへ連れて參ります。

呢近　そして始終の樣子は、どうであつた。

賊　私の考では、隨分旨くいつたと存じます。

呢近　伯はどういたした。

賊　伯の事でござりまするか。きやつはがんづいて居たものと見えます。丸つ切用意せずには出な

かつたやうでござりました。

呢近　言ふことがあるなら、早く言つて聞かせてくれい。伯は死んだか。

賊　へい、あの善い方を實におかはいさうでござりました。

呢近　さうか。これは手前の、そのやさしい追悼(くやみ)の代だ。(と金の入りたる袋をやる。)

賊　まだかはいさうなのは、仲間のえらもの丶ニコロでござりました。あいつはつひ〳〵馬鹿な附合をいたしました。

呢近　さうか。それでは双方に死人があつたの。

賊　實にあいつはかはいさうで、泣いて丶もやりたくなります。勿論これは、(金の入りたる袋を掌の上に載せて目方を引きながら、)あいつのお蔭で四分がた餘計に、私の身につきまするが、それは至當な譯でござります。私はあいつの相續人で、敵を取つてやつた代には、相續人でござりまするから。かういふことが私共の仲間の掟でござります。友達の間や、義理の上で、これより善い掟が、いつ、どこに、ござりましたらう。それにあのニコロは。

呢近　ニコロ、ニコロとばつかり。それより伯は、伯は。

賊　えゝ。伯はあいつをしつかりやりました。その代に私は伯をしつかりやりました。伯はぶつ倒れました。馬車に載せられましたまでは息もありましたらうが、馬車からかつぎ出されるまで息のありやうはござりません。

呢近　それが確でさへあれば善いが。

賊　それが確でなかつたら、私はあなたといふお得意ざきをなくして仕舞ひませう。何かまだ御用

がござりまするか。私のいく道が一番遠うござりまするから。これから私共は國越をしなければなりません。

呢近　そんならもう行くがよい。

賊　何か又御用向がござりましたら、私のありかは、いつものところでお聞なされば知れまする。外の人間のするやうな事なら、私は何とも思ひません。それに第一、ごく安直にやりまする。（と行く。）

呢近　好かつた。然し充分ではなかつた。アンジエロも亦押し手の利かぬ奴ぢや。もう一發の彈をやるぐらゐの値打は伯にはあつたものを。それに生きて居てひく〳〵する伯の苦痛も氣の毒だ。アンジエロめ、こん度は無慈悲な事をしをつた、それに下手な仕事を。しかしこの事は先づ殿にはだんまりだ。伯が死んで善かつたといふことは、向うで解つて來るまで待つが一番だ。伯が全く死ねばよいが。確な知らせがほしいものだ。

其三　殿、呢近

殿　今あの並木をこちらへ登つて來るのは、エミリヤ孃ぢやな。家來どもより先に、急いで參るは、恐さに足を早めるためと見える。まだ少しも疑ふこゝろはないであらう。孃が心は唯々追剝の手を遁れやうとおもふばかりであらう。然しその心がいつまでつゞくか知らんて。

呢近　それは兎も角も、先づこれで手に入つたといふものでござります。

殿　それに母があとから捜しに來はすまいか。伯があとから追つ掛けて來はすまいか。そしたらまたどう致さう。どうして孃を渡さずにおかれうか。

呢近　それを一々私も今御返事は出來ませぬ。然し樣子次第で又たなんとかなりませう。殿樣、志ばらく御猶豫下さりませ。どうせ此一と仕事はしなければならなかつたのでござります。

殿　なんの爲めに又。若し返してやらねばならぬものなら。

呢近　いや、事によつたら返さなくても濟むかも知れませぬ。これから先の手段には、土臺になるものが澤山ござります。そしてあなたはその中で、一番貴いものを忘れてお出なさりますぜ。

殿　身が今迄おもひもつかなんだことを、なんで又忘れられるものか。一番貴いものとは。それは全軆何の事ぢや。

呢近　靡かせる手段でござります。くどき落す手段でござります。その手段は戀をする殿樣には、決して不自由はないものでござります。

殿　なに、不自由はないものとか。その手段は丁度入用のときは出ぬものぢや。その手段はけふ一遍やつて見たが、丸でむだであつた。どんな世事も申して見、どんな誓も立てゝ見たれど、孃が口からは一言の返事もなかつた。孃が物をもいはず、力の拔けたやうな樣子で、震ひながら立つて居たところは、死刑の宣告を受けて居る罪人の通りであつた。そのおち氣が身にも遷つて身も一しよに震ひ出し、しまひにはたゞ死して呉れといつたばかりであつた。もう身があれに向いて物を言ふことは殆ど出來まいかとおもつて居る。殊に孃がこゝにはいつて來たときは、身はとても一言も出まい。マリヲルツイ、どうぞ、此場を引き受けてくれい。おれは蔭でどうなるか聞いて居て、少し氣が落付いてから出て來やう。

其四　呢近、(つゞいて)其僕バチスタアとエミリヤ

呢近　伯の倒れるのを見なければ善かつたが。然し急いで逃げたとだから、多分見はしなかつたであらう。來たと見える。おれも直に娘の目にかゝりたくはないて。（座敷の片隅に躲る。）

呢近の僕　お孃樣、こゝからおはいりなさりませ。

令孃　（息せはしく、）おゝ、そちにはいかい世話に成ました。かたじけなうござる。まかしてこゝはまあ何處であらう。それにわたし唯ひとりで。かあ樣はどう遊ばしたか。伯爵樣はどこにお出遊ばすやら。定めてあとからお出なさる事であらうあう。

僕　多分さやうでござりませう。

令孃　多分さうであらうといやるか。それでは汝（そち）も知らぬと見える。あの塲の樣子は見やらぬか。あとの方では鐵砲の音がしたとおもうたが。

僕　鐵砲の音が。もしさやうなら。

令孃　いゝえ、その音は確に聞きました。あの鐵砲の玉は母樣か、伯爵樣に中つたのであらうかと、どうもそれが案ぜられてなりませぬ。

僕　私は直に御連の御樣子を見てまゐりませう。

令孃　わたしを置いて往くといやるか。わたしも是非一處にゆきませう。どりや、すぐに往かうはいなあ。

呢近　（今來掛りしやうに出て來て。）いや、これは孃樣。どんな凶事がござりまして、いや、どんあ仕合な事で、どんあ仕合な凶事がござりまして、こゝでお目にかゝられますするか。

令孃　（おどろきたる樣子にて。）これは思ひ掛けぬ事。こゝはあなたのお邸でござりまするか。御

側役さま、どうぞ御免なされて下さりませ。私どもは、途中にて、追剝にであひ、迷惑いたしてをりまするところへ、親切な方々が助けにお出下さりまして、この方がわたくしを車の中より助け出し、こゝまで連れて來て下さりました。さりながら私ばかり助かりたうはござりませぬ。母はあとに居りましたれば、心がゝりでござります。それにあとでは鐵砲の音がいたしましたゆゑ、若しや母が撃たれはせぬかと存じます。母が撃たれまするに、私ばかりかういたしては居られませぬゆゑ、失禮ではござりますれど、これからすぐに參らねばなりませぬ。今更おもへばあの儘に、あそこに居ればようござりました。

昵近　孃樣、まづお氣をお鎭めなさりませ。何事も御心配には及びますまい。お心にお掛けなさる御親族の方々もおつ付けお出になりませう。然しペチスタア、手前は一と走往つて見て參れ。御連の方が孃樣がこゝにお出の事を御存じないかもしれず、それゆゑ孃樣を尋ねて公園内の休息所などをお廻りなさるかも知れねば、直にこゝへお供をいたして參るがよい。（ペチスタア入る。）

令孃　何事もあるまいとは、それは本當でござりませうか。皆無難でござりませうか。けふはまあ私の身の上には、何といふ日でござりませう。然し私はこゝにかうしては。

昵近　孃樣、それが何になりませう。あなたは今でさへ息を切つてお出なさります。それよりは一間におはいり遊ばして、樂にお出なされたら、又お力がつきませう。お大事な母君のところへは、最早殿がお出なされて、程なくこちらへ御同行になりませう。

令孃　どなたが私の母のところへ。

昵近　殿樣でござります。

令嬢　（いたく驚きたるさまにて。）あの殿様が。

昵近　知らせがこゝへ屆くや否や、殿はお連をお救申さうと、その場へお駈け付けなさりました。かやうな狼藉をこの御近處、いはゞ御前をも憚らずにいたしたを、御立腹遊ばしまして、盜賊ばらを追つ掛けよとお下知がござりました。若し生捕になりましたら、嚴刑に行はれることでござりませう。

令嬢　殿様がとおつしやるからは、こゝはまあどこでござりまする。

昵近　こゝはドサロでござります。殿様のお下屋敷で。

令嬢　それはまあひよんな事で。そして殿様がご自身でこれへお出にありませうか。然し多分母をお連になりませうな。

昵近　最早それへお見えになりました。

其五　殿、令嬢、昵近

殿　エミリヤどのはどこに來てお出ぢや。何處に。あゝ、エミリヤどの、先程からこなたをお捜し申して居りました。定めて、御無事でござりませうな。なる程、それで一同大安心いたしました。伯爵は、お母上は。

令嬢　これは、御前様。私のつれのものはまあどこに居りますることやら。私の母は。

殿　いづれも遠くはないところに、ぢき近所に。

令嬢　天道様、お二人のうちどなたかの變つたお姿にお目にかゝるやうなことがなければよいが。そしてきつとお目にかゝられうか。御前様、あなたは何か私にお隱し遊ばしますと見えます。私

にはそれが知れて居りまする。

殿　これは思ひもかけぬ事。エミリヤどの。御心配なく身が肘におすがりなされて、跟いてお出なさりませい。

令孃　（思ひ定めかねて。）さやうには仰しやりますれど、もしつれの人々に何の障もないことなら、若し私の案じまする事が餘計な苦勞でござりますなら、なぜに又連のものが直にこゝへは參られませぬ。御ぜん樣、なぜ連のものは御供をいたしてすぐにこゝへは參りませぬ。

殿　それは皆こなたの心の迷からおそろしい畫圖を書いて見なさるのゆゑ、つひ身に跟いてお出なされば、その畫圖はすぐに消えてしまひませう。

令孃　まあどういたしたら善い事やら。（と兩手の指を組み合せて思ひ煩ふ。）

殿　これは又、エミリヤどの。こなたは身をお疑なされてか。

令孃　（殿の前に跪きて。）御ぜん樣、おそれ入りましてござりまする。

殿　（抱き起して。）身は實に耻ぢ入ります。ほんに、エミリヤどの、そなたに無言で身の罪とがを責められても、今更いひわけの致し方がござりませぬ。身が今朝の仕末は實にいひとき樣もない次第ぢや。たゞお詫をするより外はあない。どうか身がこらへぜうの無いところとおもつて勘辨して下されい。身には何の爲にもなりやうのない事を口に出して、それでこなたに心配を掛けるとは、これほど譯の分らぬことはござらぬ。おかしあの時こなたが唯だ言葉もなく呆れて、おそろしがつて、身が言葉を聞いて居られた、いや聞かずに居られたので、最早身は充分に罰せられたと申すものではござりませぬか。そして若しかう思ひがけぬ事で、もう一度お目にかゝり、もう

一度こなたに物いふことが出來たのを、身が幸の知らせかとおもうても善いことなら、若しこれをいよ〱願は協はぬとこなたにいひ渡される前に、もう一度歎いて見られる因緣かとおもうても善いことなら、その時は身は、エミリヤどの、さうお覆ひなさりまするな、その時は身はたゞこなたの目の下知を聞いて居りませう。その時一言でもため息一つでもこなたの氣に忤ふやうなことは致しませぬ。かうおもうて居ることゆゑ、どうか疑うてだけは下さるな、疑うて身が心を痛めてだけは下さるな。そなたは身が上には限のない威光を持つてお出ゆゑ、そこをどうぞ疑はずに心得て居て下されい。どうぞ身に對して、別に用心がいるやうに丈は思うて下さるな。エミリヤどの、かう申すからは、どうか疑念を霽して跟いてお出なされい。身が懸などよりは、そなたの心の許す喜のあるところへ。(とまだ躑躅するエミリヤをつれて入りながら。)マリネルリイ、そちも跡からまゐれ。

呢近　そちも跡からまゐれ。これはそちは跡からまゐるなといふことであらう。その上跡からいつて何の用があらう。さし向ひでどこ迄話が運ぶか、それは殿の腕次第といふものだ。こつちの役目はあのさし向ひの話の邪魔を拂ふばかりだ。まさか伯爵は來もすまい。しかしお袋めが。あのお袋が娘をおいて、さう平氣で引きはらひもすまい。ペチスタアではないか。何事か。

其六　呢近の僕、呢近

呢近の僕　(いそがし氣に。)母親がまゐりました、旦那樣。

呢近　案のぢやうだ。そしてどこに居る。

僕　早く出てお逢なさりませぬと、すぐにこゝへはいつて參りませう。旦那が私に娘のお袋を搜し

て來いと仰しやつたは、ほんの人前のことだと存じましたから、勿論捜す考もござりませなんだ。おかしお袋が泣聲になつて娘をたづねるのは遠くから聞えました。あれは娘がこゝへ來て居るといふことは、最うかんづいて居ります。そしてこつちの巧を皆お知つては居るまいかとおもはれる位でござります。この往來の稀なところでも、そこらぢうの人といふ人は、皆お袋のまはりへ集つて、われ先にと娘のゆくへを敎へやうといたして居りました。殿樣のこゝにお出の事、旦那のこゝにいらつしやることを饒舌つた奴があるか、どうだか、そこまでは知れませぬ。旦那はまあどう遊ばす發召でござりまする。

昵近　まあ待つてくれい。（と少し考へ。）娘がこゝに居ることを知つて居るに、入れぬといつて邪魔が出來やうか、さうもなるまい。勿論かはいゝ羊が狼のところに居るのを見たら、おほきな目をすることであらう。おほきな目を。それはまだ善いが、こつちの耳はどんなことを聞かねばならぬか知れぬ。えゝまゝよ。どんなに强い肺の臟でもしまひには弱つて仕舞ふだらう。いかあ女の肺の臟でも。女といふやつも叫ばれるだけ叫んだら叫び止んで仕舞ふものだ。それにあの子のお袋だから、どうせこつちの側へつけておかねばならぬのだ。おれが目で世間のお袋どもの樣子を見るに。ふうん、大抵のお袋は殿樣の姑になるのを嫌ひはせぬ。こゝへ通せ、パチスタア、こゝへ通せ。

僕　お聞きなさい、お聞きなさい。

夫人　（蔭にて。）エミリヤ。エミリヤ。こちのエミリヤはどこに居るかいなう。

昵近　パチスタア、手前は早くいつて、彌次馬どもを跟いて來させぬやうに致せ。

其七　ガロッチイ夫人、昵近の僕、昵近

夫人　（ペチスタアの出でむとする戸より入りて。）やゝ、エミリヤを車から抱いて出たはこの男。嬢をつれて逃げたのはこの男。そちの顔はおぼえて居るぞえ。嬢はどこに居ることか。早くいうて聞かせてくりやれ。こゝお出すぎものめが。

僕　それが御褒美でござりまするか。

夫人　おゝ、若しそちに禮をいふ筈があることなら、（聲をやさしくして、）そんならどうぞ許してくりやれ。嬢をどこへつれて往きやつたか。早う逢はせて貰ひたい。嬢はどこに居るかいの。

僕　それに御心配はござりませぬ、奥様、極樂より善いところに偕にお出でござります。あの私の旦那がすぐに嬢様のところへ、あなたをおつれ申しませう。（跟いて入らむとする人々に向ひて。）下れ、さがれ。

其八　夫人、昵近

夫人　そちが主人とは。（とマリチルリイ公を見て、二三歩すざり。）やゝ、あれがそなたの主人ぢやといやるか。これはマリチルリイ様、あなたがこゝに。そしてこゝに私の娘が。そしてあなたが私を娘のところへおつれ下されうとは。

昵近　いかにも仰のとほり、私がお供をいたしませう。

夫人　まあ、少しお待下さりませ。今思ひ出しましたが、たしかあなたでござりました、それにちがひはござりますまい、けさ私の宅へお出なされて、伯爵をお尋なされたは、私が奥へはいつてからさし向ひでお話をなされたは、その場で口論をなされたは。

呢近　なに、口論。それはおもひも寄らぬ事、たゞ役目の上でいさゝか異議を申したばかり。
夫人　そしてあなたはマリチルリイ樣と仰せられまするか。
呢近　いかにも、マリチルリイ公とはわたくしの事でござります。
夫人　それでは全くでござりまするな。お聞き下され、公爵殿。マリチルリイは、マリチルリイといふ名は。御憎みのお言葉と共に。いゝえ、あの氣高いお方を私は疑ひてはなりませぬ。御憎みのお言葉は聞えませなんだ。それは私が推量でござりました。マリチルリイといふ名は息を引き取りかゝつた伯爵のしまひのお言葉でござりましたぞえ。
呢近　息を引き取りかゝつた伯爵のと仰せられまするか。それはあのアビヤニイ伯の事でござりまするか。いやなに、奥方、仰しやるは何の事かわかりかねますれど、息を引き取りかゝつた伯爵といふお言葉が一番この耳に留りました。その外のお話はどうもお聞取申されませぬ。
夫人　（恨を帶びて徐に。）マリチルリイと云ふ名は息を引き取りかゝつた伯爵のしまひのお言葉でござりました。これでおわかりになりましたか。私にも最初はわかりませなんだが、その時の伯のお聲はまあどんなお聲でござりましたらう。今でもまだ耳について居ります。あのお聲がすぐに私にわからなんだとおもひますると、私の魂はどこにありましたかと、今更不思議なやうでござりまする。
呢近　さて、あなたは何とおぼし召しまする。私は伯の親友、とりわけての親友でござりました。さすれば伯が臨終に我名をお呼なされしは。
夫人　まかしあのお聲で。私には眞似は出來ません、どんお聲であつたといふとも出來ません。と

はいへ、あのお聲には何事をも、何事をも含んで居りました。何とお思なさりまするか。私共に打つて掛かりましたを。盗賊とおつしやりまするか。いゝえ、あれは人殺しでござりました。頼まれた人殺しで。それに伯が臨終のお言葉はマリチルリイ、マリチルリイといふ名でござりました。そのお聲は。

昵近　その聲は。たとひいかなる聲にもいたせ、あわてたをりに聞いた一聲を證據にして、正しい人を罪におとさうとのおぼし召は、至當とは申されますまい。

夫人　いえいえ、私はあの伯のお聲を裁判所に持ち出されゝばよいとおもひます。去かし、私としたことが、その事を思ひ煩ひまして、娘が上を忘れました。娘はどこに居りまする。どこに。あれも死んでしまひましたか。たとひアビヤニイ伯がそなたの敵でも、それを娘が知つた事ではあるまいに。

昵近　子を思ふ悩から心の亂れた母親のお言葉を、私は咎めはいたしませぬ。いやなに、奥方、令孃にはちきこの奥の間にお出なされて、今はお心も定めて落着いてお出なさりませう。殿の御自身にてのやさしき御介抱には、令孃も先刻の騒をお忘れなされたであらう。どれ、直にあちらへおつれ申しませう。

夫人　たれが娘の介抱を致したとおつしやりまする。誰が自身で。

昵近　殿でござりまする。

夫人　殿とおつしやるは。あの、本當に殿様が、こゝの殿様が。

昵近　外に何の殿様がござりませう。

夫人　はゝあ、さやうでござりまするか、まあ、私は何といふ不仕合せな母親でござりませう。そしてまあ、あれが父がそれを聞いたら何と申しませう。私があの子を生んだ日を、そも／＼いかなる悪日かと、悔みもしませう、歎きもしませう。またあの子を生んだ私をも、定めて悪い因果ものと、どのやうにか憎みませう。

昵近　それは何事を仰せられての事でござりまするか。何を又思ひ出しなされての事でござりまするか。

夫人　樣子は知れて居ります。これでは最早疑はござりませぬ。けふお寺の内でごく清浄な神さまのおん目の前で、永劫不滅の神さまのいつもより近くおいでのところで、この悪だくみは始まりました。あれが序びらきでござりました。（マッテルリイに向ひて。）あゝ、お手前が人殺しぢや。臆病な、卑怯な人殺しぢや。自分で手を卸して殺すほどの勇氣はないに、人の慾を遂げさせやうとおもふばかりで、人殺しをする、いゝえ、人殺しをさせるほどの卑劣のあつたのがお手前ぢや。お手前は人殺しといふ人殺しの屑ぢや。義心のある人殺しはお手前を仲間に入れてはおくまい。そのお手前の面に私の煮えかへつた血、（膽汁）私の沸き立つた口の沫を、唯一言で吹きかけることが出來ない筈はないものを。あの人殺しばかりではない。取持人のお手前に。

昵近　奥方には夢中におなりなされたと見えます。お氣の毒な。せめてはその高ごゑだけお止なされい。こゝを何處ぢやとおぼしめしまする。

夫人　こゝを何處ぢやと。こゝを何處ぢやとおもふかとは。子を奪はれた女獅子が吼えるに、どこの森かと問うて居られうかい。

令嬢　（内にて。）あれは母樣。あれは母樣のお聲。

夫八　さういふは孃が聲か。あれは孃ぢや。私の聲を聞いてくれたと見える。それにどうして聲を立てずに居られうぞ。孃や、まあどこにお出だ。今そこへいきませう。（と奥に駈入る。マリ子ルリイもつゞいて入る。）

第四齣

（場面前の如し。）

其一　殿、眤近

殿　（奥なるエミリヤが處より來つゝ。）マリ子ルリイ、こちらへまゐれ。身も少し休まねばならぬ。それにそちから聞いて疑念を霽らしたいこともある。
眤近　あの母親のおこりやうは。あはゝゝ。
殿・そちは笑うて居やるか。
眤近　あの母親のこゝで、この座敷であばれた樣子を御覧にあつたら、殿樣、あなたもお笑なさりませう。その時叫んだ聲はあなたにも聞えましたでござりませう。それにあなたを一目見ると、あのおとなしうなりやうは。あはゝゝ。思はぬ事ではござりませぬ。娘を戀慕したといつて、殿樣の目をひつ掻く母親は世の中にござりませぬ。
殿　それはそちが目があいて居らぬのぢや。娘が氣を失うて母に倒れかゝつたゆゑ、母はそれで腹の立つのを忘れたのぢや。身がせいではない。母のいたはるのは娘ぢや。身に遠慮するのではない。母親は言はうとおもふ事があるのを。娘に苦勞させまいと、聲高にはいはぬと見える、はつきりとはいはぬと見える。あの母親の言葉のはし／＼、身が聞きたいことでもなく、また分らせ

たいことでもあいが。

呢近　それは何事でござりまするか、殿様。

殿　そちはしらばくれて居るな。つひ一口に言うてしまつたら害からう。まことに左様か。たゞしは嘘か。

呢近　まことなら何と遊しまする。

殿　まことなら何とすると。それでは誠か。あれは殺されたか、あの、殺されたか。(色をかへて。)マリチルリイ、そちは、そちは。

呢近　何と仰せられまする。

殿　あゝ、神は、何事をも知つて居られる天の神は、その血は身が流したのではないことを御存じであらう。伯の命にまでかゝるといふことを、そちが先に一言いうてくれたら。いや／＼、身は焦がれて死んで仕舞へばとて。

呢近　私が先に申上げたら。それでは私の謀の中に伯を殺さうといふ箇條でもあつたやうに聞えます。私はアンジエロにだれにも怪我のないやうにと屹度申付けましたれば、伯が自ら手を下して荒い仕事をなされずば、何事もなく濟みましたらうと存ぜられます。伯はだしぬけに一人の身方を撃ち殺されたと申すことでござります。

殿　いかにも／＼、伯は濟まして見て居る筈であつたらうに。

呢近　仲間のかたきをアンジエロが怒にまかせて打ちましたは。

殿　もつとも／＼、それは其筈の事ぢや。

昵近　アンヂエロをば私がきつと呵りおきました。

殿　呵りおいた。さても〳〵便いこと。身が領內にふたゝびは足ぶみせぬやう、きつと申し付けておいたが好からう。身が呵りやうはさう優くはない筈ゆゑ。

昵近　御尤でござります。私もアンヂエロもわざと致したことも、ふと出來たとも、殿樣のおためには一つでござりませう。勿論前以てお誂はござりましたれど。勿論前以てその塲にてどの樣な事があらうとも、それは私の罪にはならぬやうお約束はござりましたれど。

殿　どのやうな事があらうとも。それはあるかないか知れぬ事をいふのぢや。物の仕やうで出來ねばならぬ事とは違ふは。

昵近　段々善くあつてまゐります。さりながら、殿樣。あなたが私を何とおぼしめさうとも、それをはつきりと仰せられまする前に、どうか一言お聞なされて下さりませ。伯爵の落命は、私には餘所ごとに思はれぬ仔細がござります。私は伯に决鬪を申し込みました。その役目を濟まさずに、伯はこの世を去られました。私の名譽をば回復のいたしやうがござりませぬ。外の塲合ではどの樣なお疑が掛つても致し方がないものといたしましても、この塲合ではよもや御疑はござりますまい。（熱心に見せむとする振ありて。）私をさやうなものとおもふものがござりますれば。

殿　（少し讓る氣味にて。）よいは〳〵。

昵近　伯がまだ生きて居てくれたら。まだ生きてゐてくれたら。その代には私は何をも惜みますまいに。（せつなげに。）殿のおん覺えをも惜む心はござりませぬ。この何物にも代へられぬ、生涯おもひ棄てられぬおん覺えをも。

殿　最う分つた。よいは〳〵。伯が死んだは偶然であらう、つひたゝの偶然であらう。そちがその證人に立つからは、身は、身はさうおもうて居やうは。しかし誰が、身より外にさうおもはう、あの母親がさうおもはうか。あのエミリヤが。世の中が。

呢近　（冷に。）なか〳〵さうは思ひますまい。

殿　そして又さう思はずば、何とおもふことであらう。その身振は何といふ事ぢや。（そちは肩を聳すか。）アンヂエロが下手人で、身か頼み手ぢやとおもふであらう。

呢近　（いよ〳〵冷に。）多分さやうでござりませう。

殿　身が頼み手ぢやと、身が。それをおそれゝば、これからすぐにエミリヤを思ひ切つて仕まはねばなるまい。

呢近　（極めて冷に。）それは伯が存命でも同じ事でござりませう。

殿　（劇しくなりかゝりて又自ら抑へ。）そちは〳〵。どうかおれを夢中におちせてくれやるな。そんならさうと思つて仕舞はう。さうと思つて仕舞うた上で、そちは何と身に謂はうとおもうて居るか。伯が死は身がためには幸ぢや、この上もない幸ぢや、身が望を協へるにはこれに增したことはない幸ぢや。それをおもへば、たとひどう云ふ徃き掛りて伯が死んだにもせよ、この世界に伯爵の男が一人餘計居らうが、居るまいが、それはなんでもない事ぢや。とかう思へとそちは云ふのであらう。よいは。身も細瑾は顧みぬは。𛀁かしそちも思うて見るがよい。それは目立たぬ瑾の事ぢや、そして益に立つ咎の事ぢや。それにこの度の仕業はあまり目立ぬ方でもなく、またあまり益に立つ方でもない。道の邪魔を拂うたは善いが、それと一しよにその道を塞いで仕舞う

ては何にもならぬ。このたびの事では、だれでも覿面に身をとがめる事であらう。そのだれにでも咎められる事を貰はしてもなんにも居らぬのぢや。かう詰まらぬ事になつたのは、全くそちがえらい、不思議な謀のせいばかりではないか。

昵近　若しさう仰られますれば。

殿　そちが謀の外に何があらう。あるといふなら言うて聞かせい。

昵近　あなたは私のせいでないことまで、私のせいにしてお仕舞なさります。

殿　いひわけがあるなら聞かうといふではないか。

昵近　さやうなら申します。私の謀の中にも何にもなかつたのは、此度の事で殿に嫌疑のかゝるおもな箇條でござります。その嫌疑の本元は御親切にも私の働の上にお添へなされた、御自身のお手柄でござります。

殿　身がどうしてさやうな事を。

昵近　私は御免を蒙つて殿様に申したうござります。けさ寺でのお仕打は、たとひどのやうに上手になされたにせよ、たとひどのやうななさらねばならぬ譯があつたにせよ、あれは私の仕組の中ではござりませぬ。

殿　それはさうでもあらうけれど、また何の損にもならぬ事ではないか。

昵近　勿論あれで私の仕組をみんなお毀しなされたとは申しませぬ。志かし調子のわるいなされ方には違ござりませぬ。

殿　ふうん。そちの言ふ意味は、身がおもふとほりか知らぬ。

昵近　さればでござります。短く下手に申しますれば、私があのもくろみを致したときは、さうではござりませぬか、あのときはエミリヤ孃はあなたに思はれて居るといふことを少しも知らなんだではござりませぬか。勿論母親はエミリヤほども知りませなんだ。こゝのところを土臺にして、私はもくろみましたに、御前はこの土臺の下をお掘り崩しなされたではござりませぬか。

殿　（拳にて額を打ちつゝ。）身が運のつきぢや。

昵近　あなたが御自身で密事の片端を人にお知らせなされたと致しますれば。

殿　運につきた思ひつきであつた。

昵近　あなたが御自身で秘密をお破なされなかつたら、請合でござります、母も娘も私の謀のどこで御前を疑ふやうになりませう。

殿　そちが言葉の道理なのは。

昵近　と仰せ下されては、却つて私が道理をはづれてまゐります。殿樣、どうぞお許なされて下さりませ。

其二　昵近の僕、殿、昵近

昵近の僕　（忙しく。）唯今これへ伯爵夫人がお出になります。

殿　伯爵夫人とは。どの伯爵夫人が。

僕　オルシナ樣でござります。

殿　なに、オルシナが。マリテルリイ聞きやつたか。あのオルシナが。聞きやつたか。

昵近　私も御前同樣存じかけぬ事でござります。

殿　これ、パチスタア、早くまゐれ。伯爵夫人が車からおりぬやうに致せ。身はこゝには居らぬのぢや。あれにはこゝに居ると思はれてはならぬのぢや。あれには直に歸つて貰はねばならぬ。早く往け。(パチスタア入る。)あはうらしい女めが何しにまゐつた事か。出過ぎた事を致し居る。どうしてあれが身共たちのこゝに居るのを知つたか知らぬ。探りにまゐつたのではあるまいか。少しは何か聞きかじつて參つたかな。これ、マリヲルリイ。何とか返事を致さぬかい。身が友達ぢやと申しながら、腹を立てたのか、あればかりの言ひあひで腹を立てたのか。身共にあやまらせうと申すのか。

呢近　いえ、御前さへ元のお心におなりなされば、私は矢張前通り志んそこ御相談あひ手に成まする。オルヴナ夫人のまゐられた仔細は、あなたばかりではなく、私にも解りかねます。志かしかへさうとて其儘にはお歸になりますまい。どう遊ばすお積でござりまする。

殿　どうでも逢つて話はしたくないのぢや。身は躱て居る積なのぢや。

呢近　よろしうござります。そんなら早くなさりませ。私がお出迎いたします。

殿　出迎をするは好いが、どうか早く歸すやうに致してくれ。たとひ何を申さうとも、あまり取りあつてくれてはあらぬぞ。身共たちは別に用事があるから。

呢近　その用事はお心にお掛なさるまでもござりませぬ。用事は最早濟んで居ります。ちとしつかりと遊ばしませ。まだ出來て居らぬことは、ひとりでに出來てまゐります。さういふ内に聲が聞えてまゐります。殿樣、お急なさりませ。あれに(と一間を指す、殿はそこに入る)しばらく。若し聞かうとおぼしめさば、聞えも致しませう。ちと氣になるは。あまり善い御機嫌では來られま

いて。

其三　伯爵夫人、眤近

伯爵夫人（初にはマリチルリイ公の方を見ずして。）これはどうしたことやら。私をはいらせまいとした無禮もの丶外、たれ一人出迎へぬとは。これでもこ丶はドサロの城か。あのいつ來て見ても、私の用をいはぬ中に聽く家來どもが、いくたりとなく出迎へた、あのドサロの城か知らぬ。あの愛情とたのしみとが待つて居たドサロのお屋敷か。ところは確にこ丶なのに、それにどうして。そこにお出なのはマリチルリイどの。御前がこなたをお連なされたは、丁度好い都合であつた。いや、さうでもない。私が殿への用は、私と殿とでも埒の明く事ぢや。殿はどちらに。

眤近　殿と仰せられまするか。

伯夫人　だれを尋ねませうぞ。

眤近　あなたは殿がこ丶にお出なさると御推量なさりまするか、お出なさると御承知でござりまするか。殿はたとひお出になりましても、あなたがお出であらうとおぼし召してゞはござりませぬ。

伯夫人　私が來やうとおぼし召さぬと。それではけさの手紙をばお受取にはならなんだか。

眤近　あなたのお手紙を。仰でおもひ出しました。

伯夫人　それはその筈。私はあの手紙で、けふ此お下屋敷でお目にか丶るやうにお願申しておきました。勿論御返事はなかつたれど、それから一とき立たぬ間に、ドサロへお出のお車を見受けたものがあつたゆゑ、御返事あつたもおなじ事と存じて、私はこ丶へまゐりました。

呢近　妙なまぐれあたりもあるもので。

伯夫人　なに、偶中(まぐれあたり)とは。こなたは私が願つたのぢやと申すのをお聞なされぬか。私の方からは手紙を上げ、御前の方からはその通に遊ばした上は、お約束申したもおなじ事。いや、公爵どの。そこに立つてござつて、妙な目をなされるは、かはいさうに、こなたの腹には落ちぬ事がござるのか。そして又何事が。

呢近　あなたのきのふのお言葉では、再び殿にお逢なさるおぼし召はなかつたやうに伺ひましたが。

伯夫人　善い智慧は一夜のうちにも出るもの。そして殿はどちらにお出なさる。大抵あの不思議な聲のした一間のうちにお出であらう。そこへ私がはいらうとしたら、あの無禮者がとめ居つた。

呢近　いやなに、私が大切に存ずる奥様。

伯夫人　あの不思議お聲は女の聲と聞きましたがマリヂルリイどの、一躰こゝには何事があるのでござりまするかどうか聞かせて下さりませ。私を大切におもふと仰しやるからは。えゝ、いま〱しい御殿向のせゞ言葉。言葉の數だけ嘘がある。恙かしこなたが知らせて下されても、下さらいでも、自分でゆけばつひ知れるでござりませう。(と行かむとす。)

呢近　(引き留めて。)これはどちらへお出なさりまする。

伯夫人　最うとつくに往つて居ても善いところへまゐるのでござります。殿はあそこでお待なさることであらうに、次の間でこなたとくだらぬ事をいひあつて、むだに時を潰すのは、禮儀作法を

知らぬといふものではござりますまいか。
呢近　それは、奥様、御推量が中りませぬ。殿はあなたをお待なされてお出ではござりませぬ。殿はこゝであなたにお逢なさる譯にはまゐりませぬ。またこゝであなたに逢はうともおぼし召しませぬ。
伯夫人　それにどうして御前にはこゝにお出であらう。私の手紙を上げてからこゝにお出であらう。
呢近　いゝえ、あなたのお手紙を御覧なされて、それでこゝへお出なされたのではござりませぬ。
伯夫人　それでも私の手紙はごぜんのお手元へ届いたと、こなたはたつた今言はれたではござりませぬか。
呢近　お手元へは届きましたれど、御覧にはなりませなんだ。
伯夫人（劇しく。）なに、御覧にはならぬとは。（少し抑へて。）御覧にはならぬとは。（砕けて、目に浮ぶ涙を拭ひ。）御覧なされても下さらぬか。
呢近　いゝえ、あなたのお文を御覧なさらぬのは、全く殿のお心が外へ散つて居たせいでござります。それは私が存じてをります。決してあなたをおさげすみなされた譯ではござりませぬ。
伯夫人（きつと。）なんと仰しやります。私をさげすむのさげすまぬのと、誰がそのやうなことを思ひまする。こなたは誰にそのやうなことを申されまする。いや、マリチルリイどの、こなたはぶしつけな宥め手ではある。さげすむ。さげすむ。私を、私をさげすむといはれるとは。（調子をゆるめて、つひには悲しげに。）御前は私に最早お心が殘らぬのは、知れたことでござります。御前

のお心のうちに愛情といふものがなくなつたからは、その代に何か別のものがはいつたのも知れた事でござります。志かし何もさげすみがそこへはいらなくても善ささうなもの。たゞ冷淡といふだけでも。マリチルリイどの、さうはお思なさりませぬか。

呢近　さればさ。至極御尤に存じます。

伯夫人（冷笑する調子にて。）さればさ。至極尤ぢや。まあ、こなたとした事が、なんといふえらい事であらう。人が言はせうとおもふことは何でもお言なさると見える。冷淡といふものが、冷淡といふものが愛情のかはりに心の中にはいられやうか。それは何かあつたところへ、その代に何にもないものがはいらうといふと同じ事。なぜといつて御覽あされ。人のいふことを、何でもかまはずに、ついて言ふばかりが宮內の官員の役でもござりますまいから、私から、はかない女の私からならうてお置きなさるが好い。冷淡といふ言葉はまるで實のない言葉でござります。たゞ響ばかりの言葉でござります。この言葉に斥して言はれるものはありませぬ、なんにもありませぬ、人の心が何事かに冷淡なと申すのは、その事を少しも氣にせぬといふも同じ事、その事はその心には事でもなんでも無いのでござります。さうして見れば、その事に冷淡なといふのは、その事に冷淡でもなんでもないといふと何のかはりがありませう。なんと、この道理はこなたには少しわかりかねると見えまするな。

呢近（ひとりごと。）えゝ、これはたまらぬ。思はぬ事ではなかつたが。

伯夫人　何をつぶ〳〵仰しやりまする。

呢近　たゞ感服いたす計りでござります。奧樣、あなたが哲學者でいらつしやると申すことを、誰知

らぬものがございませう。

伯夫人　その筈でございます。私は哲學者にちがひございませぬ。しかし私は今私が哲學者なところを見せましたらうか。それはとんだことをいたしました。若し今もそれを見せ、それより前にも度々それを見せましたら、御前が私をさげすむやうにおなり遊ばしたも不思議とは思はれません。どうして男に生れたものが、自分に忤らつて物事を考へるやうなものをかはいがりませう。考へごとをする女は、丁度身じまひをする男とおなじやうにいやがられるにきまつて居ります。造物主のお蔭で男に生れたお方を、いつも御機嫌の好いやうにいたすには、女の方では笑つて居らねばなりませぬ。決して笑ふより外の事をいたして居つてはなりませぬ。いや、マリチルリイどの、今こゝで笑ふには、何の事を笑うたら善うございませうか。おゝ、丁度善い事がある。私は殿様にドサロへお出なされと手紙でいうて上げたのに、殿様はそれを御覧なさらず、やつぱりドサロへお出になつたとは、めづらしいまぐれ中りもあればあるもの。おほゝゝ。これほど不思議な事はあい。まあをかしい、雜談らしい事ではございませぬか。それに、マリチルリイどの、こなたは一しよに笑うて下さらぬか。造物主のお蔭で男と生れたお方でも、一しよに笑ふだけは笑うてくれても善い筈ではございませぬか。私共のやうな女に生れたものは、一しよに考へてはならぬけれど。(眞面目に命ずる如く。)是非つきあひにお笑なされと申しまするに。

昵近　唯今すぐに笑ひます、奥様、すぐに。

伯夫人　まあ。さういふ中に時は立つて仕舞ひます。いえゝゝ、こなたはお笑なさるには及びませぬ。なぜといふに、マリチルリイどの、(と物を案ずる風情ありて、つひにはかなしげに、)浮世の

事はなんでもさうしたものなれど、このしんから可笑しい事にも、片がはから見れば又まじめな、ごく眞面目なところがござります。これがまぐれあたりでござりませうか。御前が私にこゝで逢はうとはおぼし召さなかつたに、私にこゝでお逢なさらねばならぬやうになつたのは、これがまぐれ中りでござりませうか。マリチルリイどの、私の申すことをお疑なさりまするな。まぐれ中りといふ言葉は神をないがしろにした言葉でござります。照る日の下で出來る事には一つとしてまぐれ中りはござりませぬ。ましてやこの度の事のやうに、目當が立派に見え透いて居るのが、なんでまぐれ中りでござりませう。何事もお力に及ばぬことはない神さま、何物をも慈悲の眼でごらんなさる神さま。どうかお許なされて下さりませ。そこに居るおろかな因果ものと一しよになつて、あなたのお仕わざ、事によつたらあなたの直になされたお仕わざを、まぐれ中りと申しましたは、重々おそれ入りました。(急にマリチルリイ公に向ひて。)最う一度私を誘うて、あのやうな罪を犯させてごらんなさりませ。

昵近（ひとり言。）これは又きつい論だ。(夫人に。)しかし、しかし、奥様。

伯夫人　しかしなどはお止めなさりませ。しかしといふ言葉は人に物を思案させる言葉でござります。それに私の頭は、私の頭は。(と手にて額を支へ。)マリチルリイどの、どうかこなたのとりなしで殿に直にお話の出來るやうにして下さりませ。直にでないと私にはお話が出來なくなるかも知れませぬ。どうでもお逢申したくおもふことは、こなたにも分りませう、どうでもお逢申さねばならぬとは。

其四　殿、伯爵夫人、昵近、

殿（一間より出でつゝひとり言。）かうなつて來ては、身がすくひに出ねばなるまい。

伯夫人（殿を見て、進み近くべきかとたゆたふさまにて。）やゝ、殿にはあれに。

殿（舞臺を横ぎりて、伯爵夫人の前を過ぎ、歩を停めずして外の間に往く。）これは、伯爵夫人どの、めづらしくお出なされたが、生憎な事でござります。用事もあり、來客もあり。お氣の毒ではござりまするが、又折もありませう。けふはこれでお歸下され。マリ子ルリイ、そちには用事があれば、すぐにあとより參つてくりやれ。

其五　伯爵夫人、昵近

昵近　奥樣、どうでござりまする。私が申しては御信用なさらなんだが、殿からすぐにお聞なされておわかりになりましたか。

伯夫人（うつとりとして。）あれはまことで。

昵近　お聞になつた通りでござります。

伯夫人（悲しげに。）用事もあり、來客もあり。それが私にいはれたことわりか。それはだれをでもことわつて歸すときに使ふ言葉ではござりませぬか。どのうるさい人をでも、どの乞食をでも。私をことわつてかへすに、最う嘘一つもなくあつたのでござりませうか。ごく小さな嘘一つも。用事があるとはそれは何の用事でござりませう。來客があるとはそれは誰でござりませう。マリ子ルリイどの、一寸そこで、助けると思つて手製の嘘を一つついては下さるまいか。嘘一つは惜いこともござりますまい。殿は何の用事をしてお出なさりまする。殿のところには誰が來て居りまする。たゞこなたの口へ出はうだいの事をいうて下さりませ。それで私は歸りまする。

昵近　（ひとり言。）からいふ約束でなら、本當の事の片端ぐらゐはいうても善からう。

伯夫人　さあ、マッチルリイどの、早くして下さりませ。それで私はゆきまする。殿も叉折もあらうといはれました。さういはれたではござりませぬか。殿があのお約束をお守なさるやうに、殿があのお約束をお破なさる口實がないやうにいたしたうござります。早くどんなのでも噓一ついうて下さりませ。それで私はゆきまする。

昵近　奥樣、殿は本當にお一人ではござりませぬ。殿のところには手を離されぬ客がござります。その人達はたつた今おそろしい危い目に逢うて、こゝへ逃げて來られたのでござります。伯爵アピヤニイ。

伯夫人　なに、伯爵アピヤニイが殿のところに居られるといふのでござりまするか。お氣の毒ながらその噓は受けられませぬ。どうか早く外のを一ついうて下さりませ。こなたはまだ御存じないか知りませぬが、アピヤニイ伯はさき程追剝に打ち殺されて仕舞ひました。市の入口の前で伯の死骸を載せてゆく車に私が出逢ひました。あれはアピヤニイ伯ではなかつたのでござりませうか。私が見たと思うたのは、夢でゞもござりましたらうか。

昵近　氣の毒にも、あなたの夢に御覽なされたばかりではござりませなんだ。しかし伯の同道いたされた人々は、さいはひにこのお下屋敷へ逃げこんで來られました。その人々は伯が婚禮にサビオチッタへつれてゆかうとせられた結髮の女房とその母親とでござります。

伯夫人　それではその人々が。その人々が殿のところに居るのでござりまするか。伯のいひなづけの娘とその母親と。その娘といふのは美しうござりまするか。

呢近　殿には娘の不仕合せをたいさう御不便がりなされてゞございます。

伯夫人　私はその娘が醜ければ好いとおもひます。なぜといつて御覧あさりませ。あまりかはいさうな目に逢うたものではござりませぬか。まあふびんな子ではござりませぬか。いま末長く連れ添ふやうにならうといふ人をつひなくして仕舞はれたとは。そしてその娘は何といふ人でござりまする。私の知た人ではござりませぬか。私はあまり久しく市を離れて居つたので、何事も知りませぬが。

呢近　伯がいひなづけの娘は、エミリヤ、ガロッチイと申します。

伯夫人　誰だとおいひなさりまする。あの、エミリヤ、ガロッチイと仰しやりまするか。エミリヤ、ガロッチイと。いや、マリチルリイどの。こなたのその嘘に限つて、本當に取つても好うござりまするか。

呢近　それは又、なぜでござりまする。

伯夫人　あの、エミリヤ、ガロッチイと仰しやつたを。

呢近　いかにも左樣申しましたが、よもや其娘を御存じではござりますまい。

伯夫人　ところが存じて居ります。けふはじめてゞはござりますれど。マリチルリイどの、こなたはまじめでエミリヤ、ガロッチイと仰しやりましたか。その不仕合せに逢つて、今御前に介抱せられて居る娘を。

呢近（ひとり言。）ちと話して聞かせ過ぎたか知らん。

伯夫人　そしてアピヤニイ伯がその娘のいひなづけの夫でござりましたか。さき程撃ち殺されたア

ビヤニイ伯が。

呢近　それに違はございませぬ。

伯夫人　天晴々々、おゝそれは天晴なことでございます。(と手を拍つ。)

呢近　それは又、何をお譽なさるのでございまする。

伯夫人　あの方を賺してそのやうな事をさせた惡魔なら、その惡魔に「キス」がしてやりたうございます。

呢近　あの方をとは、誰をでございまする。そして賺してとは。又そのやうな事とは。

伯夫人　いゝえ、「キス」が、「キス」がしてやりたうございます。たとひその惡魔がこなたでも、

マリヲルリイどの。

呢近　これは又、奥樣には。

伯夫人　まあこつちへお寄りなさりませ。そして私の方をしつかりと御覽なさりませ。私と星をあはせて御覽なさりませ。

呢近　かう致して。

伯夫人　かうして私の思つて居ることが、こなたには分りませぬか。

呢近　どうしてそのやうな射物が出來ませう。

伯夫人　こなたは手をお貸なされたのではございませぬか。

呢近　手を貸すとは何事に。

伯夫人　神にお誓なさりませ。いや、お誓なさりまするな。お誓なさると罪の上に、又一つ罪をお

重ねなさりませう。いや〳〵、矢張お話なさりませ。罪の一つや二つは多からうと少からうと、所詮天罰は遁れぬ人にはおなじ事でござりませう。こなたは手をおかしなされたのではござりませぬか。

呢近　奥樣、あまり意外なお言葉に、おどろき入るばかりでござります。

伯夫人　それは本當でござりまするか。さて、マリチルリイどの、こなたの正直なお心では、何もこゝに疑はしいことはござりませぬか。

呢近　して何事を又。何事につきまして。

伯夫人　好うござります。そんなら私がこなたに少し聞かせてあげることがござります。こなたの身の毛のよだつやうな事を少し聞かせてあげませう。しかしそこはあまり戶のところに近いゆゑ、誰か聞くとわるうござります。最う少しこちらへお出なさりませ。さうして。(と指を口に當て。)お聞なさりませ、ごく內々で。ごく內々で。(と口を耳に寄せてさゝやくやうに見せて、大いなる聲を出し。)殿は人殺しでござります。

呢近　これは又、奥樣。お心でも狂ひはいたしませぬか。

伯夫人　なに、私の氣が違ひはせぬかと仰しやるのでござりまするか。はゝゝゝ。(と高笑し。)私は只今ほど自分の智慧をたしかにおもうたことは少うござります。いえ、只今ほど自分の智慧をたしかにおもうたことは一度もござりますまい。マリチルリイどの、お疑なさりまするな。しかしこれはごくない〳〵の話でござります。(聲低く。)殿は人殺しでござります。殿はアビヤニイ伯をお殺しなさりました。伯を殺したのは決して追剝やなぞではござりませぬ。あれは殿樣のお手先が殺

したのでござります。あれは殿樣がお殺しなされたのでござります。

呢近　どうしてまあ奧樣には、其樣お忌ましいことをお口にお出しなさりまするか、其樣な事がお心に浮びまするか。

伯夫人　なんと仰しやりまする。分り切つたことではござりませぬか。エミリヤ、ガロッチイは今御前に居ると仰しやりましたではござりませぬか。そのエミリヤの婿はなぜ又さう泡を喰つて、この世を逃げねばならぬのでござりませうか。そのエミリヤにけさ殿樣が「ドミニカア子ル」の寺で長々しいお話をなされたことは、私は知つて居ります。私のつけておいた探偵がその樣子を詳しく見て、殿のお話になつた事柄まで聞いてまゐつていうて聞かせました。これでも私が氣違でござりまするか。私はつゝける筈の事をどうかかうか間違はぬやうにつゝけたかとおもひます。それともこれもまぐれあたりでござりまするか。こなたはこれをもまぐれ中りと申しまするか。若しさう仰しやれば、こなたの人の性(たち)の惡いところを御存じのなさ加減は、丁度用心といふことを御存じないとおなじやうでござりませう。

呢近　奧樣、あなたこそそのやうな事を仰しやつてお首の御用心をお忘なさりまするな。

伯夫人　私がこれを多人數にいうたらと仰しやるのでござりまするか。それはいよ／＼妙でござります。いよ／＼妙で。あしたは市場へ出て大ごゑで申しませう。その時それを噓だと申す人は、それを噓だと申す人は、それは乾度人殺の仲間であつたに違ござりません。さやうなら、マリ子ルリイどの。(と行かむとして、戸口を駈け入る大佐ガロッチイに逢ふ。)

其六　大佐、伯爵夫人、呢近

大佐　どなた樣かは存じませぬが、お許なされて下さりませ。

伯夫人　いえ〳〵、こゝでは私は何をも許すの許さぬのといふことはござりませぬ。なぜと申しまするに、何をも惡く思ふ筈はござりませぬゆゑ。あそこの方に御用向を仰しやりませ。（とマリ子ルリイ公の方を指す。）

呢近（大佐を見てひとり言。）つひ〳〵親父まで來をつた。

大佐　我子のゆくへを尋ねる身ゆゑ、前後をおもふ暇もなく、案内をも願はずに、これまで推參いたしました。どうぞお許なされて下され。

伯夫人　なに、子のゆくへを尋ねる身とは。（とおとへ戻る。）エミリヤどのゝ父と見える。こりや善いところへ。

大佐　先程拙者の家來が早馬にてまゐり、このあたりにて一家のものが不思議の難義に逢うたとのしらせ、早速駈け付けて聞きますれば、アピヤニイ伯は痍を負うてまちの方へ引返され、拙者が妻と娘とはこのお屋敷に逃げ込んだとのこと。只今はどれに居りまするか。どうかお敎下されい。

呢近　いや、大佐殿、お心安くおぼし召せ。令夫人と御息女には何事もござりませぬ。たゞ一時お驚なされたばかりの事。御兩人ともお怪我は少しもござりませぬ。御兩人のところには殿がお出なさりまするゆゑ、一寸お出の由をさやう申してまゐりませう。

大佐　先づお通じなされるのは何故でござりまするか。それには及びますまいかと存ぜられまする。

呢近　いえ、それには少々仔細もござります。殿のお出のためでござります。御存じの通、大佐殿、あなたと殿とのお仲はあまりおよろしい方ではござりませぬ。殿は令夫人、御息女をば丁寧にお

んもてなしなさりましたが、これは御婦人の事、あなたが唐突にお目どほりにお出なさりましたら、殿の御不興をお受なさらぬとも申されますまい。

大佐　いかにもそれは仰の通でござります、仰のとほりで。

呢近　しかし奥様。先づあなたをお車までお供いたしてまゐりませうか。

伯夫人　いえ、それには及びませぬ。

呢近（あまり優しくなく伯爵夫人の手を取りて。）私の職分を竭しまするのゆゑ、御免なされて下さりませ。

伯夫人　いや、そのお職分は私がお免し申します。こなた達は兎角つまらぬ禮儀を職分にして、本當の職分を袖にしてお仕舞なさるのは何事でござりまする。こなたの本當の職分は、この方のお出の事を、ちつとも早く殿にお通じなさる事でござりませう。

呢近　あなたは殿が御自身で仰せられたことをお忘なさりましたか。

伯夫人　殿が自身でお出になつて、最う一度おいひつけなさるが好うござります。私はお待申して居ります。

呢近（大佐を少し側へつれ往きて。）唯今あなたと御一しよにおきまするあの婦人は、少し氣が。おわかりになりましたか。これを申しておきまするは、あの婦人の話を御信用なされてはと存ずるからでござります。あの婦人の話はをり〳〵不思議な事だらけでござります。成るべくはあの婦人とお言葉をおかはしなさりまするな。

大佐　承知いたしてござります。どうぞお急ぎ下されい。

其七　伯爵夫人、大佐

伯夫人（暫く大佐を氣の毒さうに、少し物ずきらしく見て居りし後。）あの男はあなたに何事を申しましたか。あなたはまあお不仕合せなお方でござります。

大佐（伯爵夫人の方に向きてひとり言のやうに。）不仕合せなとは。

伯夫人　きつとあの男は本當の事をば申しませなんだ。殊にはあなたのおきゝなさらねばならぬ本當の事をば。

大佐　私の聞かねばならぬ本當の事とは。最う大抵充分に聞いて居る筈ではござりまするが、何か御存じの事がありまするなら、どうぞお聞かせなされて下され。

伯夫人　あなたはまだなんにも御存じはござりませぬ。

大佐　まだなんにも存ぜぬとは。

伯夫人　あなたはお娘御のためには好いてゝごでござりませう。どうぞ私もあなたを父おやに持ちたいとおもひます。失禮かは存じませぬが、不仕合に逢つたものは、同病相憐むとか申して、互に近づきになりたうおもふのがあたり前でござります。私はこの苦痛とこの腹だちとをあなたと御一しよになつて受けたうござります。

大佐　苦痛と腹だちとは。しかし自分は忘れて仕舞うた。どうかいうてお聞かせ下され。

伯夫人　若しあれがあなたのお一人娘でござりまするなら、若し又おひとり子で。しかしひとり子でもひとり子でなうても、不仕合せに逢うた子は、ひとり子もおなじことでござります。

大佐　不仕合せな子とは。然し自分は忘れて仕舞ふ。とはいへ、氣の違つたものならかうは物をい

はぬ筈ぢやが。

伯夫人　氣の違つたものと仰しやりまするか。あの男があなたに申しておいたのは、それでござりませう。好うござります。それはあの男の嘘のうちであまりひどい分ではござりませぬ。私は自分でもなんだか氣が違ひさうでござります。しかしあなたもお考なされてごらうじませ。ある場合に氣の違はぬやうなものは、初から氣といふものを持つて居らぬにちがひござりませぬ。

大佐　あなたのそのお言葉は、なんと承つたら好いやら、どうも私にはわかりませぬ。

伯夫人　あなたは決して私をおさげすみなされてはなりませぬ。なぜというてごらうじませ。あなたも氣といふものは儲に持つてお出なさりまするが、私が今一言申しますれば、あなたも氣がおちがひなされうかと存じます。

大佐　いや、御婦人。その一言はまだ仰しやりませぬが、若し早く仰しやらぬと、私はそれをお聞申さずに、氣が違つて仕舞ひます。どうか早く言うて聞かせて下され。若し早く言うて聞かせて下さらぬと、私はあなたを本當の氣ちがひ、人のお氣の毒におもうたり、又尊みもする氣ちがひとおもはずに、あなたをたゞのおろかなお方ぢやとおもひませう。若し早く言うて聞かせて下さらぬと、あなたは氣といふものを前から持つてお出なさらぬとおもひます。

伯夫人　そんならしつかりとお聞なさりませ。あなたはもう充分に知つて居ると仰しやりましたが、まあ何を知つてお出なさりまする。あなたはアピヤニイ伯が痍を負うたと仰しやりまするが、痍を負うたばつかりとおぼし召しまするか。アピヤニイ伯は殺されてお仕舞なさりました。

大佐　なに。殺されたと仰しやりまするか。それでは約束どほりでござりませぬ。あなたは私を氣

ちがひにしやうと言つて、私を氣ぬけにしてお仕舞なさります。

伯夫人　まだござります。おとをお聞なさりませ。婿どのは殺されてお仕舞なさりましたが、花よめ御は、御息女の花よめ御は、殺されて仕舞うたよりまだひどい目にお逢なさりませう。

大佐　殺されたよりひどいとは。しかしそれは殺された上の事でござりませう。殺されたよりひどいことは、私はたつた一つしか知りませぬ。

伯夫人　いゝえ、殺された上の事ではござりませぬ。いゝえ〳〵。お娘御は生きてお出なさります。お娘御はこれから生きて居るといふことを、いよ〳〵お覺えなさりませう。お娘御のこれから先のお暮しは樂しいことだらけでござりませう。一番美しい、一番面白い極樂世界のやうなお暮しでござりませう。たゞそれが持つ間は。

大佐　その言葉を、御婦人、私を氣ちがひにしやうといふその言葉をどうか早くお聞かせあされて下され。どうかあなたの一滴の毒を一釣瓶の水に落して飲ませて下さるな。その言葉をどうか早くお聞かせ下され。

伯夫人　よろしうござります。私の申すことを思ひ合せて御覽なさりませ。けさ殿は御息女に寺にてお物語がござりました。ひる過には御息女が殿のお下屋敷に、お遊びどころにお出になります。

大佐　あに、寺で物語をせられたとは。あの殿が私の娘に。

伯夫人　しかもいはうやうなく打ち明けた御樣子で、いはうやうなく熱心な御樣子でお物語がござりました。若しお約束があつたのなら、瑣細な事ではござりませぬ筈。勿論若しお約束があつた

のなら、それに增すことはござりませぬ。勿論御息女がわざとこのお下屋敷へお逃げ込みなされたのなら、それに增すことはござりませぬ。なぜと申しまするに、さうならこれが勾引と申すものではなく、たゞ本の一寸した、一寸とした喑嘩と申すものでござりませう。

大佐　それは言ひ掛け(誣)でござります。ひどい言ひ掛けでござります。娘が氣質は拙者が存じて居ります。若し伯の殺されたのが喑嘩なら、娘がこゝへまゐつたのも勾引でござります。(目を瞋らしてあたりを見廻し、足ぶみして、口より沫を飛ばしつゝ)これでもか、クラウチヤ。これでもか、與。お互にこんな嬉しい目に逢ふとは。いかにも御親切な殿樣だ。いかにも格外な名譽だ。

伯夫人　毒が利きまするか、御老人、利きまするか。

大佐　今私は盜賊の山寨の前に立つて居るやうなものでござります。(と上衣を左右に開きて劍を帶びて來ざりしに心付き。)餘りに急ぎましたので。この手をも忘れて來なかつたのが不思議なくらゐでござります。(と諸處のかくしを探し求めつゝ。)なんにもない。なに一つ。どこにも。

伯夫人　はゝあ、わかりました。それなら私が御用立てることが出來ます。私は一本持つてまゐりました。(と短劍を取り出して。)これをお取なさりませ。人の見ぬうちに早く取つておかくしなさりませ。私はまだ少し持つて居ります。これは毒でござります。しかし毒は私どものやうな女の使ふもので、男の用には立ちませぬ。早くお取りなさりませ。(と短劍をさし付く。)早く。

大佐　これは〳〵、ありがたうござります。いや、御婦人、あなたの事を今一度氣ちがひだと申すものがござりましたら、拙者が承知いたしませぬ。

伯夫人　それを脇へさしてお置なさりませ。早く脇へ。私にはそれを使ふ折がありませなんだ。あ

なたにはその折があるまいものでもござりませぬ。若し又ありましたら、あなたはきつとそれを仇にお過しなさりはすまい。あなたは男でござりますから。私は、私はほんのをなご一人でござります。併し私もその積でまゐりました。決心は致して參りました。なんと、御老人、私どもも二人は何事も打ち明けて話をいたしてよろしうござりませう。なぜと申しまするに、私どもは二人ともおなじ色どのみの男のためにだまされたものでござります。ほんにどのやうに滿ち溢るゝまで、どれほど言ふに言はれぬやう、どれほど思ふに思はれぬ樣に、私が今までに辱められましたか、又今でも辱められて居りまするか。それをあなたが御存じなら、あなたの御自身のお受なされた辱を忘れてお仕舞なさりませう。あなたは私を御存じでござりまするか。私はオルシナでござります。だまされた、棄てられたオルシナでござります。勿論棄てられたのは御息女のせいでござります。しかし御息女に何の恨がござりませう。あの方も遠からず棄てられてお仕舞なさりませう。さうしたら又外のがまゐりませう。その次には又外のが。ほんに。(さも嬉しさうに。)なんといふおもしろい想像でござりませう。若しいつか私どもが一同に、棄てられた一群が。昔の希臘の祭のときの狂女のやうになりましたら、あまたの鬼女になりましたら、そしてあの薄情をとこを摑へて、そのからだを引き裂いたり、その肉を搔き破つたり、その臟腑を探して、誰にも還ると言うておいて、つひに誰にもやらなんだ心の臟をえぐり出しましたら、そのおもしろさは、まあ、どんなでござりませう。そのおもしろさは。

其八　大佐夫人、前の人々

夫人(入り來りてあたりを見廻し、夫を見て急ぎ近づく。)おもうた事でござりました。私どもを誰

つて下さるお方、私どもを助けて下さるお方。オドアルドオさま、善うお出下さりました、善うお出下さりました。あの方々のおさゝやぎなされた聲で、あの方々のお顔色で私はお察し申ました。若しあなたはまだ何も御存じないならば、まあ、何からお話申したらよろしいやら。若し又何事も御存じなら、何とお話申したらよろしいやら。しかし私どもには咎はござりませぬ。私には咎はござりませぬ、娘にも咎はござりませぬ。何事についても咎はござりませぬ。

大佐（妻を見て氣を取り直さむとして。）よいは〳〵。何もあわてることはない。あわてずにおれの問ふことを言うて聞かせてもらひたい。（オルシナに向ひて。）決してあなたのお言葉をお疑ひ申して妻に問ふのではござりませぬが。伯はお死なされたか。

夫人　おなくありなさりました。

大佐　けさ殿が寺の中で娘に物を言はれたといふが、それはまことか。

夫人　まことでござります。しかし孃はどんなに驚いたことか、どんなにあわてゝ逃げて歸つたか、それを御承知なされたら。

伯夫人　お聞なさりましたか。私は噓は申しますまい。

大佐（苦笑して。）拙者もあなたが噓を仰しやらうとは初からおもひませなんだ。

伯夫人　私を狂とおぼしめしまするか。

大佐（あらゝかにあちこち歩みつゝ。）いや、拙者もまだ狂にはなりませぬ。

夫人　私には慌てるなと仰しやりましたゆゑ、かう靜にして居ります。出過ぎたことゝおぼし召すかは存じませぬが、どうぞあなたもお心をお鎮なされて下さりませ。

大佐　なに、おれは慌てゝは居らぬ。これより静になつて居るものがあらうか。(と自ら抑へて。)婿殿の死なれたことを娘は知つて居るか。

夫人　知りやうはござりませぬが、伯がお見えなされぬゆゑ、もしやさうかと疑うて居りまするかも知れませぬ。

大佐　そして娘は歎いて居るか。

夫人　いゝえ、最早歎いては居りませぬ。御存じの性質でござりまするゆゑ、最う静にいたして居ります。あの子ほど臆病で、そして又大膽な女子は世の中にあるまいかと存じます。何か物事に出逢ひまするど、初にはきつと負かされて仕舞ひまするが、少し考へて見て、すぐに何事をも承知いたして、どうなつても慌てゝ騒ぐ様なことはござりませぬ。殿には善い程に御挨拶申して、あまりお近づきあそばさぬやうにいたして居る様子でござります。どうぞ早く私共の歸られるやうに、御前に申上げて下さりませ。

大佐　おれは馬で來たが。どうしたら好からうか。あゝ、御婦人、あなたはお車で市へおかへりなさりませう。

伯夫人　いかにも左様でござります。

大佐　若し妻をお連下さるわけにはまゐりますまいか。

伯夫人　お易い事でござります。

大佐　クラウヂヤ、(伯爵夫人に引きあはせて。)こなたは伯爵夫人オルヂナさま。おこゝろのごくしつかりした御婦人で、おれがためには友達とも、恩人ともおもつて居るお方ぢや。このお方と御

一しよに市へ歸つて早く迎への車をおこしてくりやれ。孃はまたガスタルラへ往つてはならぬ。おれと一しよに往かせる積。

夫人　それは、仰ではござりまするが、私もあの子に別れて居まするのは。

大佐　父がついて居るではないか。最う御前へ通して呉れさうなものだが。おれは決心いたして居るから、最う何もいうてくれるな。御婦人、さあ、お出下さりませ。(聲低く伯爵夫人に。)私の事は程なくお聞なさりませう。クラウヂヤ、さあ、早く〳〵と。(連れて出づ。)

第五齣(場面前に同じ。)

其一　昵近、殿

昵近　こゝから、殿樣、この窓から御覽になれば、おやぢの姿がよく見えます。あの丸天井のお廊下のところを往つたり來たりいたして居ります。あの角を今曲りました。こちらへ參ります。いや、またあちらへ戻りました。まだ何だか思案がきまらぬものと見えます。然し先刻から見ますると、餘程靜まりました。さうでなければ靜まつた風をいたして居るのでござります。それはどちらでも、こつちのためには同じ事でござります。勿論、あの女子どもが二人してどんな事をかおやぢに申しましたらうが、それを御前で申し出るやうな無遠慮なことも出來ますまい。パチスタアが聞きましたが、女房にすぐ車をよこせといひつけたさうでござります。來るには馬で參りましたから。見てお出遊ばせ。御前へ出ましたら、難義に逢うた身うちのものに、ご親切をお盡し遊ばしたお禮を申しあげ、猶自分の上をも娘が上をも宜しいやうに願ひ置き、娘は市へ連れて歸つて、あの不便な可愛い子に御前のお惠が掛からうかと、それをおとなしく待つやうになりま

せう。

殿　然しさうおとなしうなかつたら、どういたしたものであらう。それにどうも、どう思つて見ても、さうおとなしからうとは思はれぬ。あのおやぢの氣性は身も前々から善う知つて居るて。唯だあいつがせめて疑があつてもそれを隱して、腹の立つことがあつてもそれを我慢してくれゝばよいが。然しさうしてエミリアを市へはつれて往かずに、一しよにつれて引込んで仕舞ひ、自分のそばを離さぬやうにならねばよいが。さうでなくば又身が領分の外の尼寺などへつれて往つておし込んで仕舞はねばよいが。若しさういふことがあつたら、まあ、なんといたさう。

昵近　戀にご心配なさるお方のお目は、なるほど遠いところまで屆くものでござります。然しあのおやぢもまさか。

殿　まさかといふが、もしさうしたら、その時には何といたさう。その時には切角あの伯爵に命まで捨てさせて、それが何の役にも立たなくなつて仕舞はうが。

昵近　何のためにそのやうな惡い方を御覽なさりまする。軍に勝つものは、たとひ自身のそばで味方が仆れやうとも、敵が仆れやうとも、それには目を掛けずに、たゞ進め〳〵と申します。そしてたとひあの強情おやぢが、殿樣、あなたのお考あそばすやうな事をいたさうと存じましても。(と少し思案して。)えゝ、かやうでござります。私には工夫がござります。あのおやぢはたゞそれをいたさうと存ずるばかりで、その考のとほりにいたすことは出來ぬやうにして遣ります。此度でござります。然しあいつはどこへまゐりましたか。(と再び窓に向ひて見。)最う少しで不意にはいつて來られるところでござりました。然し一應は避けねばなりませぬ。場合によつていたさね

ばならぬ事は、殿樣、そのをり申し上げませう。

殿（威すやうに。）せねばならぬ事とは、マリチルリイ、何事ぢや。

呢近　なに、世間に又とないほど罪のない仕事でござります。

其二　大佐

まだ誰もこゝへ出て來居らぬ。よし〳〵、これでおれもいよ〳〵落付いて來るであらう。それも身の仕合ぢや。白髮あたまで若いもののやうに燃えあがる程、外聞のわるいとはない。この事は幾度自分で意見をしたか知れぬ。それにまたしては逆上せて仕舞ふ。そしておれが乘るおだては誰のおだてか。燒餅やきのおだてではないか。嫉妬で氣のちがつた女の煽動ではないか。德義を守つて居て、それを破られたからこつちはおこるのぢやに、それと惡業の上から出た仕返しと一志よにしてたまるものか。おれの方で取り返さねばならぬのは傷けられた德義ばかりぢや。そしてそなたの敵を取るのは。婿殿。おれは泣いたことは今までないが。それに今になつて泣くことを覺えやうとも思はぬが。そなたの敵を取るのはおれの役ではあるまい。おれの役はあの人殺しが罪を作つておいて、其上汁を吸ふことのできぬやうにしてやるので澤山ぢや。あの人殺しには、人を殺したよりは、それが無駄になつたのが始終口惜いであらう。一人を飽くまでなぐさんでは、また一人をかどはかし、快樂から快樂へ遷りながら、そのうちの一つがまだ罪を作つたばかりでは、どの快樂もうまい味がないやうになるであらう。いつの夢にも血みどれになつた婿が自身のいひあづけの女房を、あの人殺しの寢牀の前へ連れて往く折に、あの人殺しが色どのみの本性を見せて、手を伸ばしたら、俄に地獄のたかわらひが聞えて、それで目が醒めるとでがなあらう。

其三　呢近、大佐

呢近　どちらにお出なさりましたか、あなたは。どちらにお出なさりましたか。

大佐　たゞ今これに居りましたは私の娘でござりまするか。

呢近　いえ、令嬢はお出なさりませなんだが、殿がこゝまでお立出なされてゞござりました。

大佐　それでは殿に御無禮をいたしました。伯爵夫人をおん送り申したゝめ。

呢近　そして。

大佐　あの貴婦人が善いお方ぢやといふことは、拙者には確に分りました。

呢近　して又令夫人は。

大佐　伯爵夫人のお供をいたしてまゐり、歸り次第拙者共親子にむかへの車をおこす筈でござります。その車のまゐるまで、親子がこゝにて御厄介にあづかりまするは、全く殿のおん惠でござります。

呢近　それは又きついお手廻しでござりました。令夫人と御息女とを市へお運申す役をば、殿には喜んで遊ばしたとでござりませうに。

大佐　妻は兎も角も、娘はそのおん惠には所詮あづかられませぬやうに致しましてござります。

呢近　それは又どうなされて。

大佐　娘をば最早ガスタルラへは遣らぬ積でござります。

呢近　市へおやりなさらぬとは、それは又何故でござりまする。

大佐　伯爵が落命いたした上なれば。

昵近　婿殿が御死去なされたら、いよ〳〵市にお出の方が御都合かと存ぜられまするが。

大佐　いえ、娘をば拙者が連れてゆく積でござります。

昵近　あなたがおつれあされて。

大佐　いかにも拙者が。伯爵は今も申し上げた通、落命いたされました。あなたは御存じないか知りませねど、かくなる上はガスタルラに何で娘を居く譯がござりませう。あれをば拙者がつれてまゐります。

昵近　いかにものち〳〵は令嬢のおすまひを、貴殿お一人のお考次第になさることが出來ませうが先づさし當りましては。

大佐　さし當つてはと仰せられまするは。

昵近　さし當りましては、大佐殿、令孃はガスタルラへお送られなさることでござりませう。

大佐　拙者の娘がガスタルラへ送られるとは。それは又なに故でござりまする。

昵近　何ゆゑとおふせられまするか。先づお考なされて御覧なさりませい。

大佐　(激したる樣子にて。)考へて見い。考へて見いとおつしやりまするか。拙者はこの場合にはなにも考へて見ることはないと考へます。あれは、娘は是非とも拙者が連れてまゐります。

昵近　いや、大佐殿、なにも私共がこゝでかれこれ爭ひまするには及びますまい。事によりましたら私の考も間違つて居るかも知れませぬ。私のかうなくてはならぬと存じまする事も、さうでなくても善いかも知れませぬ。そのおさばきは殿が遊ばすことでござりませう。拙者はこれより御前へまゐり、こゝへお供を致してまゐるやうに仕りませう。

其四　大佐

これは全躰なんといふ事ぢや。どうしてその様なことがいたさせられう。あれが往かねばならぬところを、おれに強ひて言ひ付けやうとは。あれをおれと一しよに居くまいとは。そのやうな事をだれが指圖をいたすことか。だれが指圖をいたしてよろしいことか。さうしやうといたすのは、なんでも自分の指圖せうとおもふことを、指圖してもよい人であらう。よいは、よいは。おれも亦してもよいとのあるのを、最うしてもよかつた事のあるのを見せてやる。短慮な奴め。おれを相手にして見るが好い。法を何とも思はないものゝ力は、法のないものゝ力にまけはせぬ。向うはそれを知らぬと見える。遣つて見い、遣つて見い。これはしたり。又しても、又してもおれは怒に任せて分別を失はうとした。畢竟おれは何をしやうとおもふのぢや。向うの手が分らぬ内は、いくらおれが騒いでもなんにもなりはせぬ。側役などをするものは、何をいふやら分りはせぬ。ほんにつひ言はせて聞けば好かつた。娘をなぜガスタルラへやらねばならぬといふか、その口實を聞いておけばよかつた。それを聞いておいたなら、今返答の仕様を考へておかれたものを。しかしたとひどんな口實にも致せ、返答の出來ないこともあるまい。それとも返答の出來ないやうな口實があらうか。あゝ、だれか來るやうすぢや。氣をおちつけて居らずばなるまい。

其五　殿、昵近、大佐

殿　いや、珍らしいガロツチイどの。身が敬つて居る、正直なガロツチイどの。なにか事がなくつては、こなたにこゝでお目にかゝることは出來ませぬ。こなたは容易なことでは身が屋敷へは來られぬから。しかし身はこなたに不足を申すつもりではござりませぬ。

大佐　これは、殿様、おそれ入つたお言葉でござります。私には、たとひどのやうな場合にもいたせ、强ひて御主人にお近づき申さうとするのは、無禮であらうと存ぜられます。人の君たるおん方は、その臣下の人物を御存じなされてお出なさるゆゑ、そのものに御用のあるときは、いつでもおよび出しなさる筈でござります。さやう心得て居りまするゆゑ、今日の如き場合にも、强ひてお目どほりへ出ましたのをば、幾重にもおわびいたさねば。

殿　そのしつかりとして居つて、そして人におゆづりなさる德義は、實におほくの外のものゝ手本にあります。しかし用事を忘れてはならぬ。こなたは嘸令嬢にお逢なさりたうござりませう。やさしいお母上は俄にお歸なされたゆゑ、令嬢には又御心配なさると見えました。なぜお母上をば急いでおかへしなさりました。身は令嬢のお落付なされた上で、御母子をおつれ申し、凱歌をうたうて市へかへる積でござりました。身が得意でいたさうと存じたことを、こなたは半分こはしてお仕まひなされたが、よもやあとの半分までこはさうとはなさりますまい。

大佐　それはあまりお惠が過ぎまする。私は、殿様、ガスタルラのものが平生仇にして居りまするものも、友だちにして居りまするものも、あの娘を不便がつたり、あの娘の不仕合を喜んだりいたして、あれにつらい目を見せまするのを、妨げやうと存じまするゆゑ、どうぞそれをお許なさるやうにひたすらお願申しまする。

殿　平生の友だちが令嬢のお不仕合をお氣の毒に存じてお慰申すのを、妨げやうとなされるのは、かへつて令嬢には無慈悲に中りはいたしますまいか。又平生仇にいたして居るものに無禮を加へさせぬことは、身がきつと請合ひます。

大佐　おふせではござりまするが、殿樣、子のためにする心配をば、親の身として他人に分けてやりたくはないものでござります。今のところで娘が處置をどういたして宜いかは、憚ながら私が存じて居りまするやうに考へます。それは出來まするだけ早く浮世を棄てさせることでござります。尼寺へやることでござります。

殿　なに、尼寺へと申されるか。

大佐　尼寺へまゐりまするまでは、父がひざ下で泣かせておくより外はござりませぬ。

殿　かやうにお美しい娘御を尼寺へやらねばなりませぬか。たゞ一つの望がはづれたとて、それで浮世を棄てさせねばなりませぬか。とは申すものゝそれが父の意見とあれば、外より何とも申す譯にはまゐるまい。いや、ガロッチイどの、令嬢をばどこへなりともおつれなさるが宜うござります。

大佐（呢近に向ひて。）あのお言葉をなんとお聞なさります。

呢近　さやうならば、大佐どの、あなたの方から拙者が意見を聞きたいと仰せられるのでござりまするな。

殿　こなた等ふたりは何事をお爭なさることやら。

大佐　いえ、何ごとでもござりませぬ。たゞ私共兩人のうち、いづれが殿の御心中を酌み違へたかと申して居るのでござります。

殿　身が心中とは。マリチルリイ、何事か話して聞かせい。

呢近　殿の切角の恩命をお妨申すのは甚だ不本意には存じまするが、私は友達のよしみに對して、

殿のおさばきを仰がねばなりませぬゆゑ。

殿　なに友達のよしみとは。

呢近　拙者が伯爵アビヤニイをいかばかり親愛いたして居りましたか、それは殿にはごぞんじでござりませう。拙者と伯とのふたりの心がどのやうに相投じて居りましたか、それは殿もごぞんじでござりませう。

大佐　それを殿にはごぞんじでござりまするか。若し左樣なら其事をごぞんじなのは、たゞ殿樣ばかりでござりませう。

呢近　拙者は伯爵よりその敵を取ることを頼まれましてござりますれば。

大佐　はあ、さうでござりまするか。

呢近　それはあなたも奥方にお聞なされば知れませう。マリテルリイ、マリテルリイといふ名前が息を引き取りかゝつた伯爵の最後の言葉であつたさうでござります。そしてその伯の聲はまことにいひやうのない聲であつたさうでござります。私は伯のために、伯を殺した曲者を捕へて、其罪をただしまする迄は、その時の伯爵の聲をいつも耳に聞いて居るやうに存じませう。

殿　その詮議には身も充分に力を借すやうにいたすであらう。

大佐　その御詮義は某も望むところでござります。よろしうござります。しかしそれで何といたさうといふおぼし召でござりまするか。

殿　それは身も聞きたいのぢや。

呢近　世間の噂には、伯爵を殺しましたは、追剣ではないと申します。

大佐　(嘲る調子にて。)追剣ではないとおつしやりまするか。それは本當でございまするか。

昵近　伯の殺されたのは、鞘當すぢのものがあつて邪魔を拂つたのだと申します。

大佐　(苦々しげに。)はあ、鞘當すぢのものぢやと仰せられまするか。

昵近　いかにも左樣でござります。

大佐　若し左樣ならその卑怯な曲者は定めて天罰を蒙ることでござりませう。

昵近　鞘當筋のもので、しかも首尾のよろしい方だと申すことでござります。

大佐　何と仰せられまする。首尾のよい。それは何の事でござりまするか。

昵近　いえ、たゞ世間の噂にさやう申すばかりでござりまする。

大佐　首尾のよいとは、拙者の娘がその男になじんでゝも居ると申されるのでござりまするか。

昵近　いや〳〵、どう致して。決してさやうに申した譯ではござりませぬ。そのやうな事のありやうはござりませぬ。それをば私もまに受けは致しませなんだ。しかしながら殿樣、裁判の上から見ますれば、いかなる根ざしがござりましても、しよてからきまつて居る判斷は何の役にも立ちませぬ。この事件のおさばきを依估のないやうに遊ばすには、兎も角もあの不仕合なエミリヤ孃を證據人にお呼出しなさらずばなりますまい。

殿　勿論、それはさうせずばなるまい。

昵近　それを遊ばすには外のところでは不都合でござりませう。どう致してもガスタルラへエミリヤ孃をやつておくより外はござりますまい。

殿　なるほど、マリネルリイ、これはそちが申すとほりぢや。さうして見れば、ガロツチイどの、

少し工合を更へねばなりますまい。この道理はこなたにも。

大佐　いかにも〳〵。わかりましてござります。そのお道理は私にもたしかに見えて居りまする。あなたがたのおぼし召はおろかな私にもたしかに知れて居りまする。あゝ、なんとしたものであらう。

殿　これは又ガロッチイどの、なんと致されました。

大佐　私は只今目の前に見えてまゐつた事を、最初から見ることの出來なかつたのを口惜う思う計りでござります。勿論左樣でござります。娘はガスタルラへ再びまゐらねばなりますまい。宜うござります。私がおれを母親のところへつれてまゐり、嚴重なお調で罪のないとが知れて、御放免になりまするまで、側について居りませう。なぜと申しまするに、事によりましたらと、（苦笑し。）事によりましたら嚴重な法律の上から私をも御糺明に相成るかも知れませぬゆゑ。

昵近　いかにもその位なことはあるかも知れませぬ。かやうな時には法律は仕足らぬより仕過ぎた方が好いものでござりさす。それゆゑ私は大佐殿が糺明をお受なさるばかりでなく。

殿　大佐どのを糺す外に何事があると申すのぢや。

昵近　暫くの間は母親と娘と話の出來ぬやうにいたしておかねばなりますまい。

大佐　なに、話をさせぬと仰しやりまするか。

昵近　母親と娘とを逢はせずにおかねばなりますまい。

大佐　なに、逢はせぬとおつしやりまするか。

昵近　母親と娘と、それに又父親とを。それだけの注意は糺明のしかたの上から見ると、實に止む

ことを得ぬ方策でござりませう。私はこの義を存じまするゆゑ　殿樣　せめては[illegible]

居きなされて然るべきかと存じまする。

大佐　別に居くとおつしやりまするか。殿樣々々。しかし、はゝお分りました。勿論でござります、勿論でござります。いかにも別にお居きなさらずばなりますまい。なんと、殿樣、さやうではござりませぬか。まことに〳〵法律ほど嚴重な、そして結搆なものはござりませぬ。結搆でござります。（と急に手を劍を入れたる衣のかくしにやる。）

殿（やさしく大佐の側によりて。）ガロッチイどの、お氣をお落付なされい。

大佐（手をかくしより出してひとり言。）今の一言はあれの守り神がいはせたのぢや。

殿　こなたは穿き違へをなされてゝござります。マリチルリイ公が申したはさやうな譯ではござりませぬ。別に居くと申したを、こなたは牢屋にでも入れるやうに、思はれたのでござりませう。

大佐　どうぞさう思はせてお置下され。私は落付いて居りまするゆゑ。

殿　いや〳〵、牢屋などゝはおもひも寄らぬことぢや。マリチルリイ、さやうなことを一言でも申さぬがよい。嚴重な法律をも、こゝでは潸淨な處女に對して盡さねばならぬ禮儀と、工合好くまぜる事が出來ませう。エミリヤ孃を別に居かねばならぬことなら、身は丁度好いところを存じて居る。ごく禮儀の正しいところを。それには家老にうちに越すものはあるまい。いや、かれこれ申すな、マリチルリイ。エミリヤ孃をば身があのうちへ連れて往つて、立派な貴婦人にあづけておきます。すべてエミリヤ孃の身の上については、家老の奥に請合はせておきます。これより嚴しくせいと言へば、マリチルリイ、それは餘計な注意を致すといふものぢや。ガロッチイどの、身が家

ご老のグリマルヂイと夫人とは、こなたも知つてお出でゝあらう。

大佐　どうしてそれを知らずに居りませう。私はあのお立派な御夫婦の間に出來た、お身持の好いお娘御達まで存じて居ります。どうして世の中にあれ等を知らぬものがござりませう。(昵近に向ひて。)どうか殿の仰のとほりになさらぬ樣に願ひます。若しエミリヤを別にいたして居かねばならぬことなら、一番きびしい牢屋に入れておいて貰ひたうござります。どうか殿にさうおすゝめ下されい。それを拙者は願ひまする。えゝ、馬鹿げた。この年をしてまだかうもばかげた願が出來やうか。あゝ、あの伯爵夫人の言うたとほりであつた。或場合に氣のちがはぬやうなものは、しよてから氣といふものを持つて居らぬのぢや。

殿　どうも、ガロッチイどの、こなたのいはれることは身にはわかりませぬ。これより上にどうしてあげたら好いといはれるのでござりまする。どうかこの處置で滿足しては下らぬか。身が頼ぢやから。お娘御はどうでも身が家老のところへやります、身が自分でつれて往きます。若し家老のうちでごく禮儀を正して娘御を待遇しなかつたら、そのときは身が言葉には何の力もないといふものぢや。しかし心配をいたされるな。さうして置けばよいて、それで好いて。ガロッチイどの、こなたは思ふやうにいたされて宜しい、どこに居られても宜しい。身どもたちと一しよにガスタルラへついて來られてもよいが、サビオチッタへ歸られてもよい。こなたにどこに居られいと指圖がましいことを申すのは、をかしいわけぢや。さやうなら、ガロッチイどの、またお目にかゝりませう。マリチルリイ、こちらへまゐれ、あまり遲くなるから。

大佐　(深き物あんじある如く立ちたるが。)これはどうしたことでござりまする。それでは私は少し

の間もあれに逢ふことは出來ぬのでござりまするか。私の娘にこゝであふことも出來ぬのでござりまするか。私はどの御處置にも滿足いたします、どれをも至極結搆なおなされかたと存じます。どうか殿樣、娘をご家老のおうちは申す迄もなく道德のよく修まつて居るところでござります。どうか殿樣、娘をあの家へおつれなされて下され。是非あの家へ。しかしその前に一寸逢ふことは出來ますまいか。あれはまだ伯の死なれた事を存じませぬ。なぜふた親に分れねばならぬか、あれにはそれがわかりますまい。あれが得心いたすやうに、このわかれの事を心配いたさぬやうに、つひ一言申したうござります、つひ一言。

殿　そんならついてお出なされい。

大佐　娘を父親のところへ來させて下されてもよろしからうと存じます。こゝでさし向ひで話しますれば、すぐに埒が明きます。殿樣、どうかこゝへ來させるやうにお計らひを願ひます。

殿　さう思はれるなら、それでもよろしうござります。ほんに、ガロッチイどの、こなたが身が友だちに、身が師匠に、身が父になつて下されたら。(とマリヂリイと共に入る。)

其六　大佐

(跡を見送り、しばしありて。)いかにも、さう出來ぬ筈はござりませぬ。至極結搆でござります。あは々々々。(あたりを見廻はして。)今笑うたのはだれぢや。これはしたり。わしが自分で笑うたと見える。よい〳〵。おもしろいは〳〵。狂言も最う大詰にならう。あゝでなければかうぢや。しかし、(と暫くありて、)若しおれがあの色好にだまされて、いふが儘になる氣になつたなら。若しこれがありふれたおどけ芝居のやうになつたなら。若しおれが娘のためにしやうとおもふことを、

して貰ふ程の直打が娘になかつたなら。（と少し考へて。）娘のためにしやうとは、おれは一たい何をしやうと思ふのか。それをはつきりと考へる程の膽がおれにあらうか。あゝ、おれの今考へることは、たゞ考へられるだけの事ぢや。あゝ、いやな事ぢや、いまはしいことぢや。いつそ歸つてしまはうか。娘の出て來るのを待たずに。いやぢや／＼。（と天を仰いで。）あの罪のないものをこのやうな深みへはめた天道樣は、再たびあれをこの深みから引き出して下さることであらう。天道樣がどうしておれの手をお借なされう。歸らう／＼。（と往きかゝるところへエミリヤ出づ。）あゝ、遲かつた。天道樣はやつぱりわしが手をお使なさると見える。きつとそのおぼし召しぢや。

其七　令孃、大佐

令孃　これはまあ、あなたが、おとうさま、あなたがこゝに。そしてあなたばつかり。そして母樣は。母樣はこゝにお出なさりませぬか。そして伯爵樣はこゝに、こゝにお出なさりせぬか。そしてあなたはお氣を痛めてお出なさりまするやうす。

大佐　それにそなたは能うさう氣をおち付けて居られることぢや。

令孃　いえ、私はおち付いて居てもよい譯がござります。何事も皆あだになりましたか。さうでなければ何事も少しもあだにはなりませなんだでござりませう。おち付いて居られるのも、おちついて居らねばならぬのも、畢竟はおなじ事ではござりませぬか。

大佐　しかしそなたはまあ、どつちぢやと思うて居やるか。

令孃　私は何事も皆あだになりましたと存じて居ります。私どもは、おとうさま、おち付いて居ら

ねばならぬのでございませう。
大佐　そんならそなたは落付いて居らねばならぬから、それで落付て居るといやるのか。そなたは何ぢや。女子ではないか。そしてわしが娘ではないか。それが落付いて居るに、そなたの父が、一人前の男が落付いて居られぬというては、そなたに對して耻づかしいことぢや。しかしそなたが皆あだになつたといふのは、それは何の事ぢや。伯爵がなくなられたといふ事か。
令孃　なぜに又。なぜ伯爵が。あゝ、それではおとう樣、本當でございまするな。それでは私が、あの母さまの潤うた、そしてわけのありさうな、お目で讀みました事は、あのおそろしい事はみんな本當でございまするか。母樣はどこにお出なさりまするか。どちらへお出なさりましたか。
大佐　あれは先へまゐつたのぢや。わしとそなたとが跡に殘つたのぢや。
令孃　そんならちつとも早くお跡からまゐりたうございます。なぜと申しまするに、伯爵がおなくなりなさりましたからは。伯爵がそのためにおなくなりなさりましたからは。そのために。私どもはどうしてこゝに居られませう。おとう樣、どうぞつれておにげなされて下さりませ。
大佐　なに、つれて逃げいといふのか。さうはさせぬといふことぢや。そなたは今ぬす人の手に落ちて居るが、そのぬす人がそなたを手離さぬというて居るのぢや。
令孃　そのぬす人が私を手離さぬと仰しやりまするか。
大佐　その上そなた唯一人を止めておいて、母にも父にも逢はせぬといふことぢや。
令孃　あの私ひとりを止めておくのでございまするか。いえ〳〵、さうはさせませぬ。さうおさせなさるやうではあなたも私のお父上ではございませぬ。あの私ひとりを止めておくのでございま

するか。ようござります。止めておかせてござらうじません。止めておかせてござらうじません。私はそれが見てやりたうござります。だれが強ひて私を止めますするか。だれが私に強迫をいたしますするか。一人の人を手ごめにいたすことの出來る人が見てやりたうござります。

大佐　わしは又そなたは落付いて居るとおもうたに。

令孃　はい、おち付いては居りまする。しかし、おとう様、あなたはどういふことを落付いて居るとおつしやるのでござりまするか。たゞ懐手をいたして居ること（膝に手をおくと）をさうおつしやるのでござりまするか。堪忍のならぬことを堪忍せいとおつしやりまするか。どんな目にでも逢うてあきらめて居れとおつしやりまするか。

大佐　おゝ、善くいうた。そなたがさういふ了簡で居やるなら、やつぱりおれの娘ぢや。（抱かせてくれい。）おれはいつも思うて居た。天道様が女といふものをお作なされたときは、きつと世界で一番えらいものを作らうとおぼしめしたに違ない。たゞほんたうに作る段になつて土臺にする埋をまちがへて、あんまりこまかなのを使はれたと見える。そこさへ除けて見れば、男より女の方が善いにちがひない。若しそなたの落付がそのやうな落付なら、わしもその落付のお蔭で自分の落付をとり戻される。それでこそおれの娘ぢや。（抱かせてくれい。）まあ、考へて見てくりやれ。裁判のためぢやというて、そなたを親の手から引き離して、グリマルヂイのうちへつれてゆくといふことぢや。おそろしい巧ではないか。

令孃　あの私を引き離すの、私をつれて徃くのと申すことでござりまするか。あちらでは私を引き離さうと思つたり、つれて徃かうと思つたりいたします。さう向うで思うたとて、おとう様、こち

らにも思ふといふことがないのでもございますまいものを。

大佐　おれもやつぱり腹が立つてならぬゆゑ、この劍を握つて、（と劍を出し、）二人のうちどちらかを、いやふたりともに、胸をさし透してやらうかと思うたのぢや。

令孃　いえ〳〵、おとう樣、そのやうな事を遊ばしてはなりませぬ。罪の深い人たちの大事にかけて居るものは、たゞこの命といふものばつかりでございます。その劍をば、どうぞ私にお借なされて下さりませ。

大佐　いや〳〵、娘、これは齒にさす針とはちがふぞよ。

令孃　そんなら私は齒にさす鍼を劍にいたすばつかりでございます。おなじ事で。

大佐　ふゝん、さうまで思ひつめたのか。いや〳〵、そのやうお事をいたしてはならぬ。善う思ひ返して見るが好い。そなたも矢張たつた一つの命しか持たぬぢやないか。

令孃　はい、たつた一つの命とたつた一つの操しか持つて居りませぬ。

大佐　その操といふものは人の手ごめにあうて破られるものではないぞよ。

令孃　なるほど人の手ごめにあうて破られるとはございますまいが、人に賺されて、仕舞にはその、手に乘せられることがないとも申されませぬ。手ごめ手ごめとおそろしさうには申しまするが、手ごめに逢ふまいと、それにあらがふのは、そのやうにむづかしいことでもございませぬ。世の中で手ごめと申しまするは、實はなんでもございませぬ。だまし賺して墮すのが本當の手ごめでございます。私の體にはやつぱり血が廻つて居ります。外の娘子とおなじ事で、若い、暖い血がめぐつて居ります。また私の受けて居る五蘊とか申すもの（諸官能）はやつぱり五蘊でございま

す。私は、おとう様、自分の身ではござりますれど、どうもお受合申すことは出來ませぬ。私はほんに役に立たずでござります。グリマルヂイ家のやうすは私がよく存じてをります。あのいへはお茶屋のやうないへでござります。いつか母様と一時間ほどあの家に居りましたとき、私の心のうちにさま〴〵の事が浮びまして、それから幾週間か御信心をいたして、やう〳〵落付きましたぐらゐでござります。その御信心をいたして居りますお宗旨の話に、かやうなときに操を守り、波をかついで死んだ人は何千人あるか知れませぬ。それが後の世の人の拜む、ありがたい方々でござります。どうぞ、おとう様、其劍をお借下さりませ。

大佐　しかしこの劍は、これはそなたの知らぬものぢや。

令孃　知らぬものでもようござります。識らない友だちもやつぱり友だちでござります。どうぞおとう様、それをお借下さりませ。

大佐　さあ、借すがこれでどうする。

令孃　かういたします。(と自殺せむとするを、大佐劍をもぎとる。)

大佐　これはしたり。いや〳〵、これはそなたの手に渡されるものではない。

令孃　ほんに左樣でござりませう。さやうならば髷にさしてある此鍼で。(と髪に手をやりて、鍼を求め、はからず薔薇の花を摑みて。)あゝ、まだこれがさしてあつたのか。早くのけて仕舞ひませう。おとう様のおぼしめし通になる日には、私の髪にはこの淸淨な花は似合ひませぬ。

大佐　これ、娘。

令孃　おとう様。若しあなたのお心が私が御推察申して居るとほりなら、しかし、いゝえ、あなた

はさう遊ばしては下らぬおぼし召と見えまする。それでなくば、おとう様、あなたは最早御猶豫は遊ばさぬ筈。（薔薇の花をむしりつゝ、怨むが如き聲にて。）むかしは我子に耻しい、かなしい目を見せまいと、かはいゝ胸にありあふ鋼鐵をさしとほした父親もありましたとやら。それはほんたうにうみの恩を二度受けたと申すものでございます。しかしそのやうな事はみんな昔の話でございます。今の世にはそのやうな父親はござりませぬ。

大佐　さう見限つてくれるな、娘。（と劍にてエミリヤが胸を刺し。）えゝ、かはいゝ事を。（と娘の倒れむとするを抱く。）

令孃　何の、おとう様。風のちらさぬそのうちに、花をお折なされたばかり。そのありがたいお手に「キス」をおさせ下さりませ。

其八　殿、呢近、前の人々

殿（入り來りて。）これは何事ぢや。エミリヤどのは御病氣か。

大佐　いえ、健で、ごくすこやかで。

殿（近く進みて。）やゝ、まあ、むごたらしい。

呢近　これはしたり。

殿　あゝ、情ない父親のなされ方。かはいさうな。

大佐　なんの。風の散らさぬそのうちに、花を折つたと申すばかり。あう、娘、さうであつたらうが。

令孃　いえ〳〵、おとう様。あなたではござりませぬ。私が自身で。自身で。

大佐　いや、娘、そなたではない、そなたではない。あの世にゆくに、僞を持つてまゐることはな

い。そなたではない。そなたの父ぢや。不仕あはせなそなたの父ぢや。

令嬢　おゝ、おとう様。（と息絶ゆるを、しづかに床の上におろす。）

大佐　往け、娘。さあ、殿様。このざまになりましても、まだお氣に入りまするか。まだおあぐさみになりまするか。恨の色のこの血しほを御覧なされても、まだ戀はさめませぬか。（しばらくして。）しかしあなたは此末をどうなるかとお疑なされてゞござりませう。あなたは定めて、私殺す[?]ぐ此刄で自害を遂げ、世にありふれた狂言の切のやうにいたすかとおぼし召なさりませうが、それはあなたの御推察がはゞかりあがら遊ひます。これ、こゝに、（と劍を殿の足もとに抛出し、）こゝに私の犯罪の證據品がござります。私はこれより自訴いたして、入牢を願つて見まするつもり。私はあなたの御裁判を仰ぐつもりでござります。そしてあそこでは、（と天を指し、）あそこでは神さまにあなたと私との間のおさばきを受けませう。

殿（しばらく言葉なくエミリヤが屍をながめて、）呢近に向ひ。）あれを。あの刄物を取り上げい。ふゝん。そちは猶豫致し居るな。耻知らずめが。（と呢近が拾ひ上げたる劍を奪ひ。）いや〱、そちが血はこゝに流れて居るこの血と一しよになつてはならぬはい。往け。二度と身が目を瞋らし[?]（出口[?]やうにいたせ。往けと申すに。あゝ、天道様、人の主人になるものがやつぱり人である前に[?]、だれ[?]式難義をするものがあるか知れませぬ。それに何んで又悪魔のやうな奴が來て、その友だちに迄なりますることやら。

附録

於母影

陸奥のまのゝかや原とはけども
おもかげにして見ゆとふものを

萬葉集

岷峨天一方雲月在我側

東坡詩

いねよかし

その一

けさたちいでし故里は
青海原にかくれけり
夜嵐ふきて艪きしれば
おどろきてたつ村千どり
波にかくるゝ夕日影
逐ひつゝはしる舟のあし
のこる日影もわかれゆけ
わが故郷もいねよかし

その二

しばし涙路のかりのやど
あすも變らぬ日は出でなん
されど見ゆるは空とうみと
わがふるさとは遠からん
はや傾きぬ家のはしら
かまどにすだく秋のむし
垣根にしげる八重葎
かど邊に犬のこゑかなし

その三

こなたへ來よや我わらは
何とて涙おとせるか
穉ごゝろに恐るゝは
沖のはやてか荒なみか
はらゝ涙も世のうさも
この大舟はいと强し

心だにかく優しくば
わが目もいかで乾くべき

その六

こなたへ來よや我しもべ
色蒼ざめしは何故か
フランス人は來ずこゝへ
あるは寒さをいとひてか
君よ、わが身は弱りても
敵を恐るとな思ひそ
氣色あしきはつれなくも
わかれし妻を思ひてぞ

その七

君が族のすみたまふ
濱邊にちかきわがとまや
ちゝは何處と子等は問ふ
妻の答はいかにぞや
といへど泣かぬ我しもべ
これもふさはし猛き身に
翼にほこるはやぶさも
かばかり早くはよも飛ばじ

その四

あらきは海のならひとぞ
高き波にはおどろかず
君よわれをな怪みそ
わが悲はさにあらず
父にはわかれなつかしき
母には離れ友もなみ
世には頼まん人ぞなき
たのむは神と君とのみ

その五

父はいたくも泣かざりき
さすがに思ひあきらめて
されどまた世に力なき
母はなくらん歸るまで
をさないとほしの我僮
涙のごゆぞうつくしき

なんたちに似ずとつ國へ
われはたちけり戯に

その八

こゝろ卑しき女郎花
あだし人をや招くらむ
きのふ涙にまだぬれし
たもとも今日は乾くらん
泣かぬ我身ぞあはれなる
かくまでさびしき人や誰
われを泣かせんばかりなる
人のなきこそかなしけれ

その九

汐路にまよふ舟一葉
身の行末もさだまらず
わが為に人なげかねば
人のためにもそれなかす
あだし主人の飼ふ日まで
聲かしましく吠ゆれども
むかしの主の音をせで
歸らば嚙まんわが犬も

その十

舟よ、いましを賴みては
わが恐るべき波ぞなき
故里ならぬ國ならば
いづこもよしと極みなき
海に泛びぬ里遠み
陸に上らば木がくれし
むろにや入らん山深み
わが故里よいぬよかし

月光

Dein gedenkend irr' ich einsam
思汝無已孤出蓬戸

Diesen Strom entlang;
沿岸行且吟

於母影

Könnten lauschen wir gemeinsam　Seinen Wellenklang!......

安得俱汝江上相聚　聞此流水音
安得俱汝江上聯袂　瞻仰天色開
時自前岸平野之際　明月徐上來
光彩飛散其色銀白　依約凝架虹
虹也千丈中斷潮脉　逸達幽樹叢
逢此光彩輝映娛目　波亦心自怡
歘見波起波伏相逐　其逝長若斯
看到汀樹浸影之處　茫忽疑有無
微聽其響無見其去　如對千頃潮
吾所希眼波一搖耳　何日能得償
思汝無已嗟汝何似　吾夜之月光
期汝時聽跫倒吾屣　深夜空决眸
昏黑生路如大江水　嗚咽停不流
逢汝時又看李花面　明月將失姸
生路流水如箭如電　嗟奈其黯然

ミニヨンの歌

其一

「レモン」の木は花さきくらき林の中に
こがね色したる柑子は枝もたわゝにみのり

青く晴れし空よりしづやかに風吹き
「ミルテ」の木はしづかに「ラウレル」の木は高く
くもにそびえて立てる國をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

其二

高きはしらの上にやすくすわれる屋根は
そらたかくそばだちひろき間もせまき間も
皆ひかりかゝやぎて人がたしたる石は
ゑみつゝおのれを見てあないとほしき子よ
となぐさむるなつかしき家をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

其三

立ちわたる霧のうちに驢馬は道をたづねて
いなゝきつゝさまよひひろきほらの中には
もゝ年經たる龍の所えがほにすまひ
岩より岩をつたひしら波のゆきかへる
かのなつかしき山の道をしるやかなたへ
君と共にゆかまし

於母影

思鄕

離鄕遠寓椰樹國　獨有潮聲似窮北
思鄕念或熾　即走海之濱
聽此熟耳響　鬱懷得少伸

笛の音

少年の巻

その一

君をはじめて見しとき
そのうれしさやいかありし
むすぶおもひもとけそめて
笛の聲とはなりにけり
おもふおもひのあればこそ
夜すがらかくはふきすさべ
あはれと君もきゝねかし
こゝろこめたる笛のこゑ

その二

君をはじめて見しときは
やよひ二日のことなりき

君があたりゆ風ふきて
こゝろのかすみをはらひけり
おぼろ月夜のかげはれて
さやけき光のそのうちに
みゆるかつらのその花は
うれしや君が名なりけり

その三

うらはづかしとよそをみて
奥へなふかくいり玉ひそ
欄干ちかくかへりきて
しばしはきゝねわがうたを
にげつゝ君はかくるとも
わがふく笛はやまざらむ
かげをば君はかくすとも
君ゆくかたにひゞきてむ
そのふく笛の音に添へて
おのがおもひのつたへなむ
そのふくこゑをたのみきて
さきのうたをばうたひなむ
うらはづかしとよそをみて
奥へなふかくいり玉ひそ
欄干ちかくかへりきて
しばしはきゝねわがうたを

その四

岸邊にたちてわれふけば
風もこゝろやありぬらむ
その音を遠く君がすむ
城のうちへぞつたへたる
ながれさやけきライン川
きよき波間に月うかぶ
そこにねぶれる龍さへも
きゝて夢をばさますらむ
ながれさやけきライン川
きしの松風音ひゞく
そこにすむてふ神さへも
うきて波間にきゝつらむ

千たび百たびくりかへし
ふく笛の音はかはれども
こひしき人のこひしさに
ふくとこそきけその聲を

その五

月にうき雲はなにかぜ
おもふにまかせぬ世なりけり
ちぎりしことは夢に似て
はやくもわかれとなりにけり
嬉しきかげのうつれるを
みてけり妹が目のうちに
わがよたのしくなりなむを
おもへばはかなき世なりけり
あれしふるさと出でしより
やつれはてたる旅ごろも
よのうきことはしりてけり
ねたきこゝろもかなしさも
嬉しきゆめをみてましを

君がま玉手まくからに
わがよたのしくなりなむを
おもへばはかなき世なりけり
高ねすぎゆく雲のみか
木々にもさわぐ風のこゑ
今朝のわかれのこゝろをば
そらにもしらむ村しぐれ
いづこにこの身はわかるゝも
いかでわすれむ君ひとり
わがよたのしくなりなむを
おもへばはかなき世なりけり

姫の卷

その一

かれのいでたつそのさまは
をゝしくたけくみえにけり
をゝしくたけくありながら
やさしきさまもみえにけり
七の城のぬしなりとも

いかでかれにはまさらむや
さはさりながら戀人の
身は兵卒にあらざらば
士官の身にてあらむには
劍にこがねのふさあらば
くるしかりけりわが戀は
かなしかりけりわが戀は

その二

妾がかれとかたらひて
はや二日とはなりにけり
おもひはちゞにうちみだれ
こゝろはなりつそらにのみ
花うるはしくかざりおきて
朝夕きよめしねやのうち
人見ばいかにわれながら
いぶせきまでにみだれたり
さうびの花もなでしこも
うちしほれつゝわれをみつ

その三

水とおもひて酒をしも
わすれてわれはそゝぎけむ
軒ばはなれぬ白鳩は
うゑになくなりこのゆふべ
籠のうぐひすの聲せぬは
あたへむ餌をやわすれけむ
しろ妙ならむあみ物に
などまじへけむ赤きいと
五いろなりとおもひしに
これはたおほし白きいと
わがよむふみの見えざるは
かざしの匣にやいれつらむ
いづこゆきけむそのふみよ
小櫛とともにやつゝみけむ
つげのをぐしに花かざし
ともに文箱（ふばこ）のうへにあり
まよひにけりなわがこゝろ
あまりに人のこひしさに
うれしとしばしはおもひしを

遠くうき世にいでさりぬ
われにはわかれをつげやらず
うたひうたひてゆく君よ
こゝろとたのむわが君よ
いつかかへりてきますらむ
かたりあひたるほどもなく
さめしはまことの夢なるか
などかの人にあひにけむ
などかの人をこひにけむ
はかなきわかれとならんには
かれはいづこへゆきにけむ
うき世はいつはりおほかるを
イタリへこそはゆきにけめ
かしこの女はあだときけ
神にいのらむわが世子を

別後の巻

その一

於母影

はやかなしみのめぐりきぬ
わが身のさちとたのみしを
はやうきことのめぐりきぬ
すみれかたばみかれはてゝ
むかしの色も今はあし
戀しき人をふりすてゝ
わかゆく道ぞ雪ふかき
深山にかりするさつをらも
よきさちのみはなしとかや
身のゆくすゑはしらねども
しげくやあらむうさつらさ

その二

しほかぜあらきあら磯に
ふかれてたてるそあれまつ
よせくる波にうちをられ
岸をばとほくはなれゆく
みどりの波のそのうちに

うきつしづみつみえにけり
かもめの鳥の數あまた
とびてあたりをめぐるなり
夜ふかき波に月さえて
おきべをとほく舟ぞゆく
をり〳〵うたのきこゆるは
ものおもふ人やこぐならむ
あはれライン の岸にわれあらば
妹にかたらむわがこゝろ
あはれ故郷、故郷なつかしや
妹しるらむかわがこゝろ

その三

舟しはつれば夕日かげ
波のあなたにかたぶきて
さらぬもさびしきひとり旅
かねの聲さへひゞくなり
　あはれこひしや吾妹子
岸のいはほにまくらして

ものおもふ身こそかなしけれ
わしのもとには波よせぬ
こゝろのうちには夢うかぶ
　あはれこひしや吾妹子

その四

イタリの女はわが目には
おそろしくのみみえにけり
かれのすがたはやさしくも
いかでかわれはまどふべき
アルペン山のそのふもと
ラインの川のそのほとり
一もと立てり花さうび
おのがおもひは今そこに
イタリの女はわが目には
おそろしくのみみえにけり
かれのすがたはやさしくも
いかでかわれはまどふべき

その五

み雪のふかくつもりきて
世はしろたへになりにけり
火桶にたきゞをりそへて
ひとりむかしをしのぶなり
薪もつきて火もきえて
今は灰とぞなりにける
もゆるおもひはつきねども
これやわが身のをはりなる
今よりものはおもはじと
ひとりこゝろに誓へども
笛みるたびにふくごとに
猶なつかしや吾妹子の

その六

年もくれけり妹はいかに
いよ／＼まさるわがおもひ
年もくれけり妹はいかに
いよ／＼まさるわがおもひ
をゝしくたけきますらをも

於母影

今はかなしや籠のとり
戀しきかたに翔らむと
おもへどかひもなかりけり
日ごとに笛は手にとれど
昔のうたは今いづこ
朝夕笛はふくなれど
むかしの聲は今いづこ
むかしはライン川ぎしに
おもしろき音もふきたるに
今は「シスチン」寺の內に
悲しき歌のみうたふなり

あまをとめ

浦つたひゆくおまをとめ
舟こぎよせてわがたてる
ほとりにきたれわれと汝(なれ)
手に手とりあひむつびてむ
こゝろゆるしてわが胸に
なが頭(かしら)をばおしあてよ

浪風あらきわたつみに
まかせたりてふ身ならずや
そのわたつみにわがこゝろ
さもにたりけり風はあれど
塩のみちひはありといへど
こゝらの玉もしづみつゝ

花　薔　薇

わがうへにしもあらなくに
などかくおつるなみだぞも
ふみくだかれしはなさうび
よはなれのみのうきよかは

わかれかね

わかれかね心はうちにのこるとも
　しらでやひとの戸をばさすらん

鬼　界　島

鬼界之島在何處　雲濤浩渺不可渡
五穀不生田土瘦　山谷深沮多大樹
維昔治承戊戌秋　平氏威權加八洲
王家未免式微嘆　天子下堂見諸侯
慷慨有人聚壯士　夜深鹿谷誓生死
何物狡兒泄秘謀　一朝縲囚百事止
三人同謫孤島中　蠻烟瘴雨又蠻風
雄心寂寞消磨盡　身如斷梗髮似蓬
誰識禍福與時轉　又見流人蒙赦免
遺恨千年天無情　倘有僧都留不返
北望黯然魂欲消　浮雲積水路迢々
濤聲入枕眠不得　憂心耿々度永宵
京師蟻王果何者　僧都恩遇尙所荷
偶聞流人蒙赦皈　竊喜僧都亦免禍
簑笠出迎島羽村　烟雨空濛晝尙昏
但見二轎向京至　不見僧都空斷魂
聞道罪深歸不得　餘生尙托蛟龍域
向人數々問歸期　歸期何日絕消息
僧都有女年十三　山櫻經雨紅半含
零落孤身托何處　南都城裡古茅庵
茅庵雨歇風日美　滿地落花無聲膩

門前乍聽響跫然　即是蠻王尋女至
相見未語涙先垂　但道斃兒不可期
欲向海南問消息　請君試寫相思辭
少女聞之喜且泣　千行紅涙筆々濕
欲封又開開又封　慇懃相托更嗚唈
江南四月草萋々　千山花落杜鵑啼
春色已歸人未返　暮雲遠樹魂轉迷
孤身直欲報恩遇　寂水牽歡寧追願
行李蕭然出鄕關　獨上蒼茫雲海路
雲海蒼茫一葉舟　雲渺々兮水悠々
唯有一封藏髻裡　海上自防萑苻憂
任他形容太枯槁　行盡西海萬里道
又從薩州托買船　布帆無恙達孤島
島中風景異京華　不見田園種桑麻
芳草滿郊青漠々　一路荒村落日斜
逢人輙問僧都跡　言語不通手加額
誰知京洛寺門僧　今作天涯淪落客
中有一人能解心　言是前日澤畔吟
不知今日在何處　須向峰巒深處覓
山高谷深行路窄　嵐氣襲人天欲夕
一徑窮處荊棘深　晚風凄々亂雲白
轉步更向海邊行　路上沙消鳥迹明
四望蒼然人不見　烟波深處海鷗鳴
乍認老翁來海上　倚杖大息氣慘愴
瘦臂倒提數尾魚　破衣亂髮無人狀
相逢先問僧都蹤　寧料僧都是老翁
兩人相對掩顏泣　談今話昔感無窮
謝汝能淩淼漫海　万里來尋忘身殆
回首往事都如夢　欲死未死身猶在
唯賴歸人慰慰余　荏苒久待京師音
飛雁不來天地長　幽憂之裡送居諸
島中固不事稼穡　幾爲衣食勞身力
瘴烟深處採硫黃　賣與商人換衣食
爾來身力日愈衰　不踏窮山僻水危
時從漁人請魚去　又拾蚌蠣充調飢
天涯雖復憐落魄　蕭然獨結環堵宅

從此與汝携手去　通宵交膝話今昔
乃沿海上又曳筇　巖邊遙認一株松
松影參差蔽孤宅　草扉竹椽碧苔封
且道秋宵明月色　皎々何意入戶側
夜半時聽風雨聲　濕入敗裀身自識
桑門昔日着袈裟　玉殿金樓作我家
滿室香烟長不絕　木魚聲裡寄生涯
自古人生似夢幻　江湖何事足憂患
一朝誤作遷謫客　往事茫茫不可諫
言終唯有淚滂滂　此時蟻王亦慘傷
說盡往年多少事　每談一事一悲傷
尙記當年謀泄日　捕卒幾十來入室
奪略家財無所遺　殺人如麻何知恤
此時夫人携兩兒　鞍馬山下去栖遲
有時往來問安否　談到主君便增悲
幼君不解當年事　只喜孤臣左右侍
常道家嚴在遠方　與汝相携到其地
噫吁死生皆是天　幼君何意去茫然

夫人日夕思慕切　又辭人世客黃泉
唯喜令娘今尙健　獨赴南都依親近
來時就求一紙書　開發出書通信問
僧都展書讀幾回　書中只道早歸來
痿者終身寧忘起　赦恩猶未及蒿萊
蒿萊之中無曆日　只有氣候分寒熱
花發知春葉落秋　夏聽蟬聲冬見雪
三年孤島日遲々　憶起當年被執時
被執寧知爲永訣　天涯地角長相思
苦辛不願在人世　一死唯分葬荒裔
絕食兩旬遂易床　海雲慘澹水空逝
時聽蟻王哭泣聲　俄隔幽明若爲情
孤身豈惜試螻蟻　只當香火祈後生
遺骸空付一炬火　收拾白骨囊裡裹
又整旅裝辭孤島　薩摩海上再泛舸
關山秋色滿歸途　落日空林啼晩烏
青鞋踏盡幾險艱　寒風冷雨入南都
旅裝直訪僧都女　孤島苦辛相對語

天地有情亦應泣　海內無人解愁緒
可憐當日小雲鬟　一朝削髮入禪關
蟻王亦携白骨去　飄然泣上高野山
高野山高入雲漢　南望蒼海空長嘆
鬼界之島在何處　萬古愁雲凝未散

わが星

おもひをかけしわが星は
光をかくしいづこにて
たれのためにかかゝやける
心もそらに浮くもの
かゝるおもひをふきはらふ
この夕暮にかぜもがな
すゞしく茂る夏木立
なにをやさしくそよぐらむ
緑色こき大ぞらは
なにをやさしく見下せる
あるかひもなき世の中の
卯月しりてや天の戸を

於母影

鳴きてすぎゆくほとゝぎす
しでの山路のしるべせよ

あしの曲

日はかたぶきけりあなたの岸に
ひねもすつかれしひるもねむりぬ
この池の面にみどりの色の
ふかくもうつれる青柳のいと
はるけき空なる人をしのびて
袖はうるほひぬ涙の露に
こゝにはあはれに柳そよぎて
夕暮のかぜにふるふあしの葉
深くもつゝめる我かなしみを
さやかに照らせるなつかしの君
あしと青柳の葉をもれきて
照わたるほしの影のごとくに

あるとき

おくつきの前にふたり立ちぬ
にはとこの花は香ににほひて

夕暮の風に草葉そよぐ
乙女はさゝやぐ聲もほそく
我身はこの世をさりたる後
よみにし歌のみ猶ながらへ
君はひろき世にとり殘され
共にかたらはん友もなくて
思ひ寐の夢にわれを見なば
にはとこの花とさうびの花
かこみしおくつき音信來て
みどりの草葉をしとねにかへ
にほひよき花の一束をば
おのれに手向て給はりなば
なれし足音に目をさまして
靜にしのびてなれ〳〵しく
心をへたてずさゝやがまし
ともに世にありし時のごとく
過ぎ行く人々おもふならむ
にはとこの花をいとしづかに

ゆるやかにそよぐ夕かぜぞと
世にあるごとくに何事をも
きかせ給はらはおのれもまた
夢みし事をば物語らむ
その時たがひに心おちゐ
目をさますほしに心づきて
さらばといはましいとしづかに
君は力づき夕まぐれに
かへり給ふらむおのが家に
おのれはふたゝび花のそこに

オフエリヤの歌

いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある
貝の冠とつく杖と
はける靴とぞしるしある

かれは死にけり我ひめよ
渠はよみぢへ立ちにけり

かしらの方の苔を見よ
あしの方には石たてり

柩をおほふきぬの色は
高ねの雪と見まがひぬ
涙やどせる花の環は
ぬれたるまゝに葬りぬ

●

マンフレット一節

ともし火に油をばいまひとたびそへてむ
されど我いぬるまでたもたむとも思はず
我ねむるとはいへどまことのねむりならず
深き思のためには絶えずくるしめられて
むねは時計の如くひまなくうちさわぎつ
わがふさぎし眼はうちにむかひてあけり
されどなほ世の常のすがたかたちをそなふ
なみだはすぐれ人の師とたのむ物ぞかし
世の中のかなしみは人々をさかしくす
多く才ある人は世に生ふる智恵の木の
命の木にあらぬはかなさをなげくなり
はや我は世中に學ばぬ道はあらず
天地の力もしり哲學をもきはめぬ
そを皆我身のため用ゐむとおもへども
なほ我身には足らず、人のためよき事し
人よりもまたわれによき事をむくいられぬ
なほ我身にはたらず、我身にはあだのありき
それにもそこなはれず多くはおのれかちぬ
なほ我身にはたらず、よきもあしきも命も
また勢も思も皆人の世にあれど
おのれには砂の上にかゝる雨の心地す
かのあやしき時より物とては恐れねど
其物を恐れぬ心は我身を責む
のぞみもねがひもみなしたはしとはおもはず
我はさる物にては心をばうごかさず
いざ我業はじめむくしくあやしき力
かぎりもなきこの世のさま〴〵の鬼神よ
此世をとりまきて風にすめる神〴〵よ

けはしき山の上に行きかひする神らよ
地のそこ海のそこにつねにすめる神らよ
まもりの力をもていま汝等をいましめむ
汝等をよぶにのぼれよとくこゝにあらはれよ
まだきたらぬ、己れはあやしき物のかしらの
恐しきしるしもて汝等をばふるはしめむ
かならずしなぬ物のちからもてよびいでむ
のぼれよとくのぼれよとくこゝにあらはれよ
まだきたらぬ、汝等はおのれをばあざけるよ
土地の神風の神我は猶おそろしき
力もて大そらに地獄の如くさまよふ
くだかれし星くずのまもりもてよび出でむ
我むねをぐるしむるおそろしき力もて
我ほとりにながらへおのが身にやどる
おろしき思もてよびいでむあらはれよ

戯曲「曼弗列度」一節

魔語

When the moon is on the wave,

波上織月光糾紛

And the glow-worm in the grass,……

螢火明滅穿碧蘚
宵暗燐碧生古墳
陽炬高下跳澤中
星墜如雨光疾於電
梟唱梟和孤客戀顛
殘月斜射千壑陰
風死林木渾絶音
正是威力加汝時
靈咒無假誰脱羈

形體眠矣心不眠
中夜離枕顋色然
胸裡昏暈難得淪滅
心上迷念何可縈結
冥報常在渾不知
恇怯思友難暫離

嗟汝之骨纏弔衣
嗟汝之體陰霧圍
靈咒無假誰克爭
栖息斯境應畢生

尋汝何必趨汝廬
憐汝心眼時對予
堪比空氣無定容
相逐相迫常景從
行止憀慄如有憂
疑念顯起回汝頭
回汝頭又驚汝心
予本非影無處尋
須記威力長不窮
藏在乎汝胸臆中

予唱斯一篇咒詞
敎汝居世歎數奇

何況空際曾下神
前路張設蹄與罠
何況風裡聞鬼音
朝暮傾奪歡喜心
休謂眠是天與安
衾枕冰冷成夢難
休謂初旭披汝襟
應願殘日沈遠林

假啼淚多溢卮滿觥
汲烹幾回錬成藥精
詐交陷入聰生闇泉
血流自泉黑如密烟
笑容艶妖以持兩端
化爲虺蛇向途上蟠
一雙絳脣吸之得漿
殺生毒民甚於信霜
少如點塵刺心劊腸

蠱乎毒乎豈能比方

汝胸如鐵笑容可憐
汝胸叵知似無底淵
汝眸子正傲君子顏
汝天性姦內含傲頑
汝多詭謀巧無等倫
汝何自崇敢云處仁
汝驕很心爲人禱頻
汝如坷因（坷因人名亞當之子）刺痕宛然
汝之罪盈滿非可宽
即身只應作冥獄觀

漿在觥裡傾汝頭上
涓滴攸觸成汝深障
無歴無死歡事休
天裂星落何破愁
愁極招喚催命奴

奴不能到空嘆吁
看汝傍有魑魅狂攘
禁汝身不開鎖鎝縶
枯汝頭腦萎汝心髓
唯是三語云滅亡矣

野梅

めづる人なき山里は
うばらからたち生ひある〻
籬のもとに捨てられて
雨にうつろひ風にちり
世をわびげなる梅の花
あひみるにこそ悲しけれ

別離

薔薇花何艶　有刺盈其枝
未遂中心願　一朝苦別離
嬌眸曾流眄　福祉吾所期
往事歸一夢　茫々不可追

一自去鄕國　飄蓬幾遷移　雲飛風撼樹　急雨又相隨
平生何所閱　妬忌與哀悲　四彊何黯黮　相別欲安之
玉腕如可枕　吾心安且夷　禍福任來去　與君永相思
往事歸一夢　茫々不可追　往事歸一夢　茫々不可追

青　邱　子

靑邱が身は、いやゝせに　瘦せにたれども、其昔
五雲閣下にすまひけむ、淸き姿ぞしのばるゝ。
いつか此世におりぬらむ。我名つげぬも哀なり。」
草枕たびねせず、鋤とりてたがへさず。
さびにさびたり劍太刀、亂れまさりぬ文の卷。
五斗米ほしと腰を折らめや、城降さむと舌掉はめや。」
朝夕歌ふから歌に　歌ひふけりて、小山田の
水田の畔に杖曳くを、魯の迂儒、楚の狂生と、
口々にいひあへりけり。」
心をおかぬ靑邱は、うたふ絕間ぞなかりける。
きのふは飢を打わすれ、けふはうさをや晴すらむ。」
歌ひほれ醉にたる　時しきたれば、蓬なす
髮のみだれも解かばこそ。我子啼けども慰めず、

まらうど呼べどいらへせず。」
顏回のまづしきも、猗頓氏の富みたるも、
うれへねばこそ戀ひもせね。」
恥づかしとせず、やれ衣を。妬ましとせず、かゝふりを。
烏兎奔れども、われ追はず。龍虎搏てども、顧ず。」
岸邊にひとりたゝずみつ、木の間を獨さまよひつ、
其源をきはむれば、造化萬物、のこりなく
われに與心あかすなり。冥茫たるやすみまで、
際なく心通はせて、目に見えぬ物の聲きゝつ。」
懸蝨のかすかなる、つらぬかでやは、吾征箭。
長鯨のいとたけき、とりひしぎてむ、我力。」
きよき哉、沆瀣の氣。けはしさよ、崢嶸の道。
村雲拂ふあさひ影、露霜しのぐ野邊の草。」
雲のかけはし登りては、月窟に入り、
犀のともしび照らしては、牛渚を見る。」
おに神に心かよはせ、山水と姿あらそふ。
光そふるは、天つみ空の星のはやしか。
いろ助くるは、をざゝが原におく白露か。

水薹のおとにはやかに、落せば玉の聲すなり。」
流に近き、あしのやの　こやの簷端に雨晴れて、
松吹く風も絶えにけり。」
風戸の下に、うたゝねの　蜚褑しはてゝ、歌よみぬ。
いざ壺をたゝきて歌ひてむ。
浮世の耳をおどろかす　聲におはせて、君山の
翁が笛を、おもしろく、月澄むよはに吹かせばや。」
しかはあれども、忽に　波起り、山崩れ、
鳥叫び、獸啼き、これに驚く天つかみ、
われを此世におらせじと、白鶴の背にかきのせて、
月のみやこへ還さばいかに。

盜　俠　行

平砂接天日如燬。馬蹄蹀躞塵烟起。極目蕩々不見人。唯有鈴聲遙入耳。
颷風一陣拂地吹。刀槍螢煌拭目視。駱駝背是隊商舟。涉砂匹似涉海水。
忽見一騎邁旅群。鳳眼龍髯跨駿馵。軀幹魁梧姿絶倫。威風知是雄偉士。
守兵胆落心惶々。欲戰亦唯衆是恃。騎士笑道勿驚疑。單身刼群非可企。
請問商旅主爲誰。一謁欲敢告終始。頃刻太陽在中天。一簇帳幕張綠綺。
守兵導客入帳帷。大賈瑣翁服飾美。斯人丁年失左臂。顏容憔悴似抱悝。

客也一揖語來由。吾亦沙漠行旅子。曾爲巨盜所生擒。今日脫圍免万死。
請君編我商旅中。恩蔭世々無窮已。瑣翁欣然諾同行。連鑣多日主客喜。」
一日午天翠帳張。主客醺然謀酒戲。瑣道万事多違乖。請聽吾家衰又昌。
吾居今在孔子但。吾幼學醫長而商。年々万里涉砂漠。今將從麥加歸鄉。
吾曾開店富稜市。賣布絹又寶藥湯。有人投東夜招我。知是密延病者房。
此夜天寒肌膚慄。帶劍獨踏威橋霜。月映亞水金龍跳。華鯨遙吼夜將央。
忽見巨人背後立。緋袍金飾映月光。半面掩覆眼烱々。手攬千金放在傍。
告道吾妹死逆旅。故國老親心懸傷。吾家有禮斷妹首。輸與故山令弔喪。
君能勞手了其事。欲贈千金爲之償。吾既聽取巨人語。好貨心動不問詳。
退隨直入藏屍室。綵燈彭湃掩繡床。曾學瘍科術已熟。截人手足亦尋常。
提刀躊躇試一顧。綠髮繚繞顏芬々。電光一閃刀入骨。豈圖鮮血流自創。
一聲如絲訴痛苦。回頭巨人已逃亡。知是美人死我手。夢耶非夢狂非狂。
倉皇歸家無遁計。身繫犴于上刑場。幸有須頸一交友。金帛賄吏枉法網。
截吾左臂追稜市。悄向故里出市疆。盤散纔入孔子但。有人爲我營雕堂。
慰問一書留相贈。瘢痕勞猺豈其忘。威橋斯我行殺者。爲我購屋謀樂康。
未知巨人々耶鬼。難揣其心惡耶良。雖然巨人不須怨。果然奇殃轉爲慶。
客聞此語垂涕淚。惻隱之心欲斷腸。」忽有飛禍堪大息。守兵來報無顏色。
前程遙見一隊兵。莫乃沙漠抄掠賊。世間近傳魁首名。王波爾有拔山力。

能服貔貅御羆熊。中心却是存威德。語未畢兮旅群驚。分明賊兵麗不億。
隊伍森然刀槍明。臨我帳幕似來逼。客出緣旛揷帳頭。笑云君輩勿惶惑。
商旅豈輙信客言。手提銃槍憤滿臆。何圖群盜轉摺過。綠旛奇功兒熖熄。」
紅日沒西涼風吹。整列隊伍卷帳帷。從斯又踏數十里。行盡沙漠望山陂。
綠樹流水如故友。路近改羅始展眉。我客有恩深如海。微客將及幕燕危。
祖筵新開高樓閣。瑣翁舉杯歲多時。履聲橐々躡梯上。突然隻手蹇紗帷。
緋袍金飾半而覆。彼何爲者來在玆。脫袍露面是我客。瑣翁心緖亂如絲。
客道瑣翁認我否。威橋之畔亞水湄。吾先佛蘭爲名族。父母毀世產業虧。
遷家歷山送日月。有兄足慰雙親思。吾獨負笈遊故國。恰遭亂賊蜂起時。
欲歸歷山省父母。膝下加餐吾所期。寧知家中又有事。一門夷滅殆無遺。
阿兄將娶鄰家女。合歡期近約束差。鄰女妙齡容色艶。羅綺爲衣玉爲肌。
狂蝶逐花惜何薄。蚤與治郎臉膽私。治郎有財陶朱比。况又少年好丰姿。
鄰人元是稜市客。舉家歸鄉郎亦隨。阿兄聞之乍憤恚。直將此狀訴官司。
鄰女之父富且貴。汙吏舞文又飾辭。死而負累父與兄。一時厄運眞堪悲。
老母尋亦發狂死。孤身伶仃嗟別離。水骨仇讎在鄰女。竊航稜市欲報之。
擲金私結守門客。臥內扃鐍得啓披。遂誘瑣翁忽消懺。秘策到今人不知。
爲君購屋酬君德。從是韜晦異鄉移。爲愛異鄉淳樸俗。嘯集同志創洪基。
從者具輿待我久。請與瑣翁從此辭。」瑣翁聞語淚如線。嗟歎禍福糾纆變。

因君富貴二十年。夙怨氷釋不足疑。君國何處君名何。今日別君意戀々。

客把項臂一笑云。我是巨盜王波霰。

明治二十五年七月一日印刷
同　年七月二日出版

著作者　東京市本鄕區千駄木町廿一番地
森林太郎

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
和田篤太郎

印刷者　東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目二十三番地
根岸高光

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
春陽堂